千葉県教育振興財団調査報告第559集

船橋印西線埋蔵文化財調査報告書5

－八千代市島田込ノ内遺跡（2）・間見穴遺跡（3）・道地遺跡（2）－

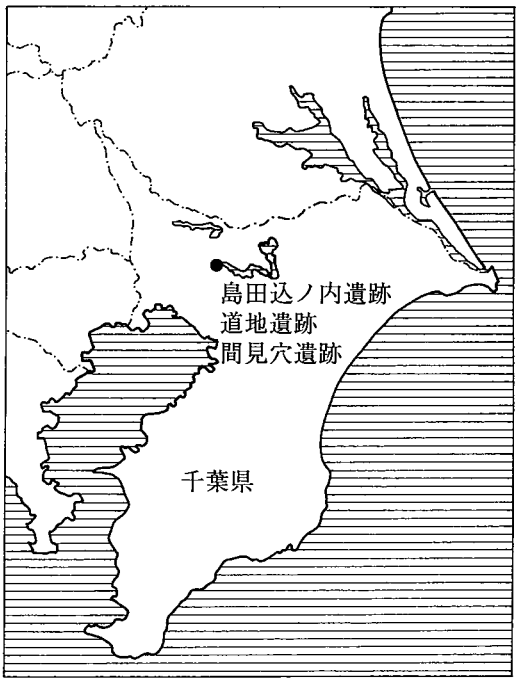
平成18年10月

独立行政法人　都市再生機構

財団法人　千葉県教育振興財団

船橋印西線埋蔵文化財調査報告書5

－八千代市島田込ノ内遺跡（2）・間見穴遺跡（3）・道地遺跡（2）－



序　文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第559集として、千葉県県土整備部の県道船橋印西線道路事業に伴って実施した八千代市島田込ノ内遺跡・間見穴遺跡・道地遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、弥生時代から古墳時代前期にかけての大集落の一部と、奈良・平安時代の集落が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また、本地域の歴史を知るための資料として広く活用されることを願っております。終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成18年10月

財団法人千葉県教育振興財団

理　事　長　　岡　野　孝　之

凡　例

1　本書は、千葉県県土整備部による県道船橋印西線道路受託事業（八千代工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本書は下記の遺跡を収録したものである。

島田込ノ内遺跡（H15年度調査）　千葉県八千代市島田台字込ノ内997　（遺跡コード221－020）

間見穴遺跡（H15年度調査）　八千代市島田台字間見穴927ほか（遺跡コード221－021）

道地遺跡（H14・15年度調査）　八千代市平戸字沼上39ほか　（遺跡コード221－022）

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部及び独立行政法人都市再生機構の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び期間は第１章第１節に記載した。

5　本書の執筆は、第２章・第４章を所長　古内茂、その他を上席研究員　岸本雅人が行った。

6　石材の鑑定に当たっては、（株）考古石材研究所柴田徹氏の御協力を得たほか、墨書の判読に当たっては、国立歴史民俗博物館の平川南氏のご教示を賜った。

7　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県県土整備部、八千代市教育委員会、独立行政法人都市再生機構の御指導、御協力を得た。記して謝意を表する。

8　本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第２図　八千代市発行　　１／2.500八千代都市計画図№5（編集して使用）

第３図　国土地理院発行　１／25,000地形図「白井」「小林」

9　周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による平成15年撮影のものを使用した。（写真縮尺1/10,000）

10　本書で使用した図面の方位及び測量値は、すべて調査時の旧公共座標（国家標準直角座標第Ⅸ系）による。

11　本書で呼称した遺構番号は、編集の都合上、調査時の番号と異なる。

12　今回の調査では現場でのグリッド番号が、東西で大グリッド（20m）１個分西側にだぶって設定されていた事が整理途中で判明した。前回の調査図面と接合するときに不具合が生じるため、整理時に正しい番号に置き換えて本書を作成した。よって現場図面等のグリッド番号は、頭のアルファベットを西側に大グリッド１個分戻したものが正しいグリッド番号となる。（例　H１５－００→G１５－００）

13　挿図に使用したスクリーントーン及び記号の用例は、次のとおりである。

炉・カマド燃焼面

焼土

カマド袖・粘土

●　土器

☆　鉄製品

■　土製品

▲　石製品

遺物実測図

赤　赤彩土器

黒　黒色化部分（黒色処理を含む）

本文目次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査の概要……1
　　１　調査の経緯と経過……1
　　２　調査・整理の方法……2
　第２節　遺跡の位置と環境……4
　　１　遺跡の位置と周辺の地形……4
　　２　周辺の遺跡……7
第２章　島田込ノ内遺跡……13
　第１節　調査の概要……13
　第２節　検出された遺構と遺物……13
　　１　旧石器時代……13
　　２　奈良・平安時代……13
　第３節　まとめ……15
付表……16
第３章　間見穴遺跡……17
　第１節　調査の概要……17
　第２節　検出された遺構と遺物……17
　　１　旧石器時代……19
　　２　縄文時代……19
　　３　弥生時代後期から古墳時代前期……23
　　（１）古墳……23
　　（２）竪穴住居跡……24
　　（３）グリッド出土遺物……49
　　４　古墳時代中期から後期……50
　　（１）竪穴住居跡……50
　　（２）溝状遺構……54
　　５　奈良・平安時代……56
　　（１）竪穴住居跡……56
　　（２）掘立柱建物跡……114
　　（３）土坑……119
　　（４）道路状遺構……127
　　（５）グリッド出土遺物……128
　　６　中・近世……129
　　（１）ピット状遺構……130

（２）溝状遺構 ……139
第３節　まとめ ……142
１　検出遺構について ……142
２　出土遺物について ……146
付表 ……151
第４章　道地遺跡 ……169
第１節　調査の概要 ……169
第２節　検出された遺構と遺物 ……169
１　弥生時代後期から古墳時代前期 ……169
（１）竪穴住居跡 ……169
２　古墳時代後期 ……180
（１）竪穴住居跡 ……180
３　奈良・平安時代 ……182
４　中・近世 ……183
（１）溝状遺構 ……183
第３節　まとめ ……183
付表 ……187
第５章　総括 ……189
第１節　島田込ノ内遺跡 ……189
第２節　間見穴遺跡 ……191
第３節　道地遺跡 ……196
報告書抄録……巻末

挿図目次

第１章　はじめに
第１図　グリッド命名法……2
第２図　年度別調査区域と周辺の地形 ……5
第３図　周辺の遺跡……8
島田込ノ内遺跡（平成15年度）
第２章　島田込ノ内遺跡
第４図　出土石器……13
第５図　上層遺構・下層確認グリッド配置図
及び土層柱状図……14
第６図　１００住……15
間見穴遺跡（平成15年度）
第３章　間見穴遺跡
第７図　下層確認グリッド配置図
及び土層柱状図……18
第８図　出土石器……19
第９図　上層遺構全測図……20
第10図　グリッド出土遺物（縄文時代）……22
第11図　１０６Ａ周……24
第12図　１０３Ａ・Ｂ住……25
第13図　１１０Ａ住……27
第14図　１１１住……28
第15図　１１７住……29
第16図　１３２住（１）……31
第17図　１３２住（２）……32

第18図　１３６住（１）……34
第19図　１３６住（２）……35
第20図　１４０住（１）……37
第21図　１４０住（２）……38
第22図　ＳＢ０２６住（１）……42
第23図　ＳＢ０２６住（２）……43
第24図　ＳＢ０２８住（１）……45
第25図　ＳＢ０２８住（２）……46
第26図　ＳＢ０２８住（３）……47
第27図　グリッド出土遺物（弥生～古墳前期）…49
第28図　１２０Ｂ住……50
第29図　１３１住……52
第30図　１３３住……54
第31図　１３０溝……55
第32図　１０１住……57
第33図　１０２Ａ・Ｂ住（１）……58
第34図　１０２Ａ・Ｂ住（２）……59
第35図　１０９住（１）……63
第36図　１０９住（２）……64
第37図　１１０Ｂ住　……65
第38図　１１６Ａ住（１）……68
第39図　１１６Ａ住（２）……69
第40図　１１８住　……71
第41図　１１９住　……73
第42図　１２０Ａ住（１）……75
第43図　１２０Ａ住（２）……76
第44図　１２０Ａ住（３）……77
第45図　１２１住（１）……80
第46図　１２１住（２）……81
第47図　１２１住（３）……82
第48図　１２２住（１）……86
第49図　１２２住（２）……87
第50図　１２２住（３）……88
第51図　１２３住・１２４住（１）……91
第52図　１２４住（２）……92
第53図　１２５住（１）……97
第54図　１２５住（２）……98
第55図　１２５住（３）……99
第56図　１３４住（１）…… 101
第57図　１３４住（２）…… 102
第58図　１３５住（１）…… 104
第59図　１３５住（２）…… 105
第60図　１３７住（１）…… 107
第61図　１３７住（２）……108
第62図　１３９住……110
第63図　１４１住……111
第64図　１４２住……113
第65図　１０４掘　…… 114
第66図　１２８掘　…… 115
第67図　１４４掘　…… 116
第68図　１４５掘　…… 117
第69図　１４６掘　…… 117
第70図　１４７掘　…… 118
第71図　１４８掘　…… 119
第72図　１０６Ｂ、１０７、１０８、１１３、
　１１４坑……121
第73図　１１０Ｃ・Ｄ、１１５、１１６Ｂ、
　１２９坑　……123
第74図　１２６、１２７坑　……125
第75図　１４３、１４９～１５４坑……126
第76図　１０５道　……127
第77図　グリッド出土遺物（奈良・平安時代）…129
第78図　ピット群Ⅰ　……130
第79図　ピット群Ⅱ　……133
第80図　ピット群Ⅲ　……134
第81図　ピット群Ⅳ　……138
第82図　１１２溝　……139
第83図　１３８溝　……140
第84図　間見穴遺跡全体及び
　Ｈ15年度調査の遺構配置図　……143
第85図　竪穴住居跡及び
　掘立柱建物跡時期別変遷図　……144
第86図　出土土器の器種別及び
　産地（型）別割合　……147

第87図　間見穴遺跡（H15年度調査）出土
　　打ち欠き土器……148
道地遺跡（平成14・15年度）
第88図　道地遺跡（H14年度）上層遺構全測図…170
第89図　道地遺跡（H14年度）下層確認
　　グリッド配置図及び土層柱状図……170
第90図　道地遺跡（H15年度）下層確認
　　グリッド配置図及び土層柱状図……171
第91図　道地遺跡（H15年度）上層遺構全測図…172
第92図　１０３住（１）……173
第93図　１０３住（２）……174
第94図　１０４住……175
第95図　１０５住……176
第96図　１０８住……178
第97図　０５１住……179
第98図　０８２住……180
第99図　１０６住（１）……181
第100図　１０６住（２）……182
第101図　グリッド出土遺物……182
第102図　１０７溝……183
第103図　出土土器変遷図……185
第104図　島田込ノ内遺跡全体図
　　及び主要遺構変遷図……190
第105図　間見穴遺跡全体図
　　及び主要遺構変遷図（１）……192
第106図　間見穴遺跡全体図
　　及び主要遺構変遷図（２）……193
第107図　道地遺跡全体図
　　及び主要遺構変遷図（１）……198
第108図　道地遺跡全体図
　　及び主要遺構変遷図（２）……199

表目次

第１表　年度別業務概要……3
島田込ノ内遺跡（平成15年度）
第２表　島田込ノ内遺跡（H15）
　　竪穴住居跡観察表……16
第３表　島田込ノ内遺跡(H15)土器観察表……16
間見穴遺跡（平成15年度）
第４表　間見穴遺跡(H15)遺構一覧……21
第５表　間見穴遺跡(H15)打ち欠き土器一覧……149
第６表　間見穴遺跡(H15)竪穴住居跡観察表……151
第７表　間見穴遺跡(H15)掘立柱建物跡観察表…152
第８表　間見穴遺跡(H15)土坑観察表……152
第９表　間見穴遺跡(H15)ピット観察表……152
第10表　間見穴遺跡(H15)遺構内出土土器観察表…153
第11表　間見穴遺跡（H15）グリッド出土
　　土器（縄文土器）観察表……166
第12表　間見穴遺跡（H15）グリッド出土
　　土器（弥生土器）観察表……166
第13表　間見穴遺跡（H15）グリッド出土
　　土器（土師器・須恵器）観察表……166
第14表　間見穴遺跡（H15）刀子観察表……167
第15表　間見穴遺跡（H15）鏃観察表……167
第16表　間見穴遺跡（H15）銭貨観察表……167
第17表　間見穴遺跡（H15）
　　その他の金属製品観察表……167
第18表　間見穴遺跡（H15）土製品観察表……167
第19表　間見穴遺跡（H15）石製品観察表……168
道地遺跡（平成14・15年度）
第20表　道地遺跡（H14・15）遺構一覧……169
第21表　道地遺跡（H14・15）
　　竪穴住居跡観察表……187
第22表　道地遺跡（H14・15）土器観察表……187
第23表　道地遺跡（H14）金属製品観察表……188
第24表　道地遺跡（H14）石製品観察表……188

図版目次

図版１　遺跡付近航空写真（縮尺約1/10,000）

島田込ノ内遺跡（平成15年度）

図版２　100住、出土遺物

間見穴遺跡（平成15年度）

図版３　101住、102A・B住、103A・B住

図版４　104掘、105道、106A周

図版５　109住、110A・B住、110C・D坑

図版６　111住、112溝、116A住

図版７　117住、118住、119住

図版８　120A住、120B住、121住

図版９　122住、123住・124住

図版10　125住、130溝、131住

図版11　132住、133住、134住

図版12　135住、136住、137住

図版13　139住、140住、142住・SB026住

図版14　SB028住、ピット群、
下層遺物出土（I15-00）

図版15　106B坑、107坑、108坑、113坑、
114坑、115坑、126坑

図版16　127坑、129坑、150坑
154坑, P1、P4、P5、P9

図版17　P11、P13、P14、P15、P16・17・18,
P19・20、P21、P22

図版18　P23・24、P25・26、P27、P28、P29
P30、P31・32、P33

図版19　P37、148掘・P3・P37・P38、P39、P40

図版20　遺構出土土器（101住、102A住）

図版21　遺構出土土器（102A住、102B住）

図版22　遺構出土土器（102B住、103A住、106A
108坑、109住）

図版23　遺構出土土器（109住、110A住、110B住）

図版24　遺構出土土器（110B住、111住、116A住）

図版25　遺構出土土器（116A住、117住）

図版26　遺構出土土器（117住、118住、119住）

図版27　遺構出土土器（119住、120A住）

図版28　遺構出土土器（120A住）

図版29　遺構出土土器（120A住, 120B住、121住）

図版30　遺構出土土器（121住）

図版31　遺構出土土器（121住）

図版32　遺構出土土器（121住, 122住）

図版33　遺構出土土器（122住）

図版34　遺構出土土器（122住、123住、124住）

図版35　遺構出土土器　（124住）

図版36　遺構出土土器（124住, 125住）

図版37　遺構出土土器（125住）

図版38　遺構出土土器（125住、131住）

図版39　遺構出土土器（132住）

図版40　遺構出土土器（132住, 133住、134住）

図版41　遺構出土土器（134住）

図版42　遺構出土土器（134住、135住）

図版43　遺構出土土器（135住, 136住）

図版44　遺構出土土器（137住）

図版45　遺構出土土器（137住、139住、140住）

図版46　遺構出土土器（140住）

図版47　遺構出土土器（140住、141住、142住）

図版48　遺構出土土器（SB026住）
旧石器時代石器出土状況、出土石器

図版49　遺構出土土器（SB026住、SB028住）

図版50　遺構出土土器（SB028住、144掘、145掘、
146掘、148掘、126坑）

図版51　遺構出土土器（127坑、150坑、152坑、P23）
グリッド出土土器（縄文土器）

図版52　グリッド出土土器（弥生土器、
須恵器・土師器）

図版53　鉄製品（１）

図版54　鉄製品（２）、銅製品

図版55　土製品

図版56　石製品（１）

図版57　石製品（２）
図版58　石製品（３）
図版59　墨書土器（１）
図版60　墨書土器（２）
道地遺跡（平成14・15年度）
図版61　103住、104住、105住
図版62　106住、107溝、調査区全景
図版63　051住、082住、108住
図版64　109溝セクション、
　　グリッド（V20-36）土層セクション
図版65　遺構出土土器（103住、104住、105住）
図版66　遺構出土土器（106住、051住・108住）
図版67　遺構出土土器（108住、グリッド出土土器、
　　鉄・金属製品、石製品）

第1章　はじめに

第1節　調査の概要

1　調査の経緯と経過（第1表）

千葉県では、千葉ニュータウンと国道16号を結ぶ幹線道路として県道船橋印西線を建設する計画を具体化した。それに伴い、千葉県土木部（平成16年度より県土整備部）は、路線内の埋蔵文化財の所在の有無について照会した。これに対し、千葉県教育委員会は、島田込ノ内遺跡、間見穴遺跡、道地遺跡の3遺跡が所在するとの回答を行った。これを受けて、千葉県教育委員会と千葉県土木部は遺跡の取り扱いについて協議した結果、事前の発掘調査を行い記録保存する運びとなった。なお、当事業は平成15年度から都市基盤整備公団（平成16年7月より独立行政法人都市再生機構）に引き継がれた。

発掘調査及び整理作業は、財団法人千葉県教育振興財団が受託して実施することとなり、平成5年度・15年度に島田込ノ内遺跡、平成5年度・6年度・10年度・15年度に間見穴遺跡、平成6年度・8・9年度・14年度・15年度に道地遺跡の発掘調査を実施した。

本書に収録した遺跡は、平成14年度に行われた道地遺跡、平成15年度に行われた島田込ノ内遺跡・間見穴遺跡・道地遺跡の発掘調査分で、下記のとおりである。役職名は当時のものである。なお、本書収録遺跡以外の平成5・6・9・10年度調査分はすでに報告書刊行済みである。

（発掘調査）

平成14年度

道地遺跡

期　間：平成14年12月2日から平成14年12月25日

組　織：調査部長　斎木　勝　　北部調査事務所長　古内　茂

担当　主席研究員　池田大助

内　容：（規模）887㎡　（確認調査）上層－/887㎡　下層32/887㎡　（本調査）上層887㎡　下層0㎡

平成15年度

間見穴遺跡

期　間：平成15年7月1日から平成16年1月29日

組　織：調査部長　斎木　勝　　北部調査事務所長　古内　茂

担当　副所長　岡田誠造

内　容：（規模）2,770㎡　（確認調査）上層－/2,770㎡　下層120/2,770㎡　（本調査）上層2,770㎡　下層0㎡

島田込ノ内遺跡

期　間：平成15年10月29日から平成15年11月28日

組　織：調査部長　斎木　勝　　北部調査事務所長　古内　茂

担当　副所長　岡田誠造

内　容：（規模）200㎡　（確認調査）上層－/200㎡　下層10/200㎡　（本調査）上層887㎡　下層0㎡

道地遺跡

期　間：平成15年12月１日から平成15年12月25日

組　織：調査部長　斎木　勝　　北部調査事務所長　古内　茂

担当　副所長　岡田誠造

内　容：（規模）1,072㎡　（確認調査）上層－/1,072㎡　下層40/1,072㎡　（本調査）上層1,072㎡

下層０㎡

（整理作業）

平成17年度

島田込ノ内遺跡　道地遺跡　間見穴遺跡

組　織：調査部長　矢戸三男　　北部調査事務所長　古内　茂

担当　上席研究員　岸本雅人

内　容：水洗・注記から原稿執筆の一部まで

平成18年度

島田込ノ内遺跡　道地遺跡

間見穴遺跡

組　織：調査研究部長

矢戸三男

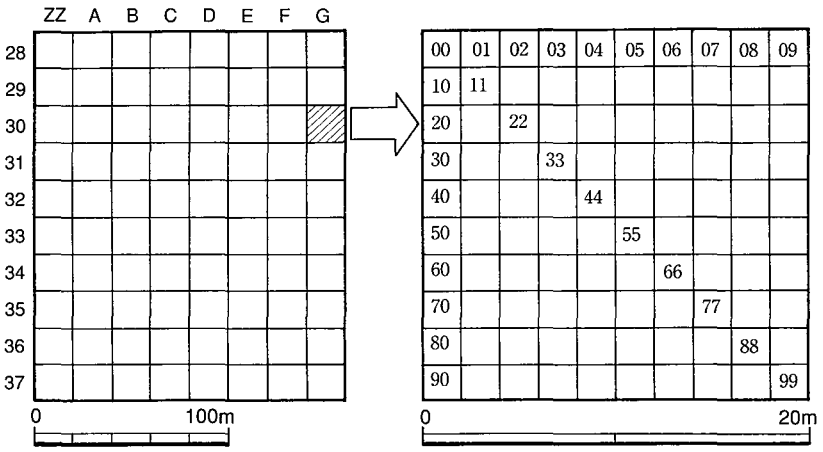
北部調査事務所長

古内　茂

担当　上席研究員

岸本雅人

内　容：原稿執筆の一部から報告書刊行



第１図　グリッド命名法

２　調査・整理の方法（第１図）

工区内に所在する３遺跡の発掘調査は調査可能な環境が整った範囲を優先したため、平成５年度から平成15年度まで断続的に行われた。調査にあたっては、当時の旧公共座標（国家標準直角座標第Ⅸ系）に基づいて20ｍ×20ｍの大グリッドを設定し、その中を２ｍ×２ｍの100個の小グリッドに区分した。各大グリッドの名称は、３遺跡ごとに調査区の西から東へＡ・Ｂ・Ｃ…、北から南へ１・２・３…と名付け、両者を組み合わせてＡ１・Ａ２・Ｂ１…とした。小グリッドの名称は、大グリッドの中を西から東へ00・01・02…、北から南へ00・10・20…と名付け、両者を組み合わせて00・11・22…とした。したがって個々の小グリッドはＡ１-35・Ｂ２-56のようになる。このように３遺跡とも同様に西から大グリッドＡから始まるが、平成15年度の島田込ノ内遺跡での調査区域はＡより西であったため、アルファベット最後のＺＺとした。各遺構の位置や遺構に伴わない遺物については小グリッドで示した。

遺構番号については、調査時に遺構の種類によらず調査順に３桁の数字を付して調査が行われた。また、発掘調査の時点では、土坑、掘立柱建物跡の柱穴、ピット群の区別が明確に捉えられていなかったためか、これらの遺構には１基ごとに遺構番号が付されていた。よって、整理時には遺構の種類別に帰属できるも

第1表　年度別業務概要

★は本書掲載分の調査・整理作業

年度（平成）	遺跡名	作業概要 発掘面積／整理	上層／業務内容	下層	期間	所長	担当者
5年度	島田込ノ内(1)	確認調査 本調査	400㎡/4,000㎡ 3,200㎡	160㎡/4,000㎡ 0㎡	10/1～1/20	田坂　浩	鈴木文雄・豊田秀治
	間見穴(1)	確認調査 本調査	940㎡/9,400㎡ 2,500㎡　古墳3基	- -	11/1～3/28	田坂　浩	鈴木文雄・豊田秀治
6年度	道地(1)	確認調査 本調査	900㎡/9,000㎡ 6,900㎡	180㎡/9,000㎡ -	8/1～1/20 2/8～2/14	谷　旬	蔀　淳一・猪俣昭喜・田形孝一
	間見穴(1)	確認調査 本調査	- 6,900㎡/9,400㎡	469㎡/9,400㎡ 156㎡	6/1～2/28		
	道地(1)	整理作業	水洗・注記		4/1～3/31		田形孝一
7年度	島田込ノ内(1)	整理作業	水洗・注記・図面・写真・復元・実測の一部		4/1～3/31	谷　旬	香取正彦
8年度	道地(1)	確認調査 本調査	1,070㎡/10,852㎡ 10,852㎡	434㎡/10,852㎡ 320㎡	7/1～3/27	谷　旬	蔀　淳一・榊原弘二
	島田込ノ内(1)	整理作業	実測の途中からトレースまで		4/1～3/31		蔀　淳一
	間見穴(1)	整理作業	記録整理の一部から復元まで		4/1～3/31		蔀　淳一
	道地(1)	整理作業	水洗・注記の途中から復元まで		4/1～3/31		蔀　淳一
9年度	道地(1)	確認調査 本調査	525㎡/525㎡ 83㎡	20㎡/525㎡ -	9/1～10/13	折原　繁	蔀　淳一・猪俣昭喜
	島田込ノ内(1)	整理作業	レイアウト・原稿執筆・報告書刊行※①		4/1～3/31		蔀　淳一
	間見穴(1)	整理作業	実測の一部まで		4/1～3/31		蔀　淳一
	道地(1)	整理作業	水洗・注記の一部から記録整理まで		4/1～3/31		蔀　淳一
10年度	間見穴(2)	確認調査 本調査	433㎡/4,331㎡ 4,331㎡	247㎡/4,331㎡	4/1～1/29	折原　繁	岸本雅人・花島理典・渡貫　貴
11年度	間見穴(1)	整理作業	実測の一部から原稿執筆の一部まで		4/1～3/31	折原　繁	岸本雅人
12年度	間見穴(2)	整理作業	実測の一部まで		4/1～3/31	石田廣美	萩原恭一・立石圭一・城田義友
13年度	間見穴(2)	整理作業	実測の一部から挿図作成の一部まで		4/1～3/31	石田廣美	萩原恭一・立石圭一
14年度	★道地(2)	確認調査 本調査	- 887㎡	32㎡ -	12/2～12/25	古内　茂	池田大助
	道地(1)	整理作業	分類から原稿執筆の一部まで		4/1～3/31		大椰一実・西野雅人・田中　裕
	間見穴(2)	整理作業	挿図作成		4/1～3/31		西野雅人・田中　裕
15年度	★間見穴(3)	確認調査 本調査	- 2,770㎡	120㎡/2,770㎡ -	7/1～1/29	古内　茂	岡田誠造
	★島田込ノ内(2)	確認調査 本調査	- 200㎡	10㎡/200㎡ -	10/29～11/28		岡田誠造
	★道地(2)	確認調査 本調査	- 1,072㎡	40㎡/1,072㎡ -	12/1～12/25		岡田誠造
	道地(1)	整理作業	原稿執筆の一部から報告書刊行※②		4/1～3/31		大内千年・田中　裕
	間見穴(1)	整理作業	原稿執筆の一部から報告書刊行※③		4/1～3/31		星　勇人・大内千年・田中　裕
	間見穴(2)	整理作業	写真図版作成から原稿執筆の一部まで		4/1～3/31		星　勇人・大内千年・田中　裕
16年度	間見穴(2)	整理作業	原稿執筆の一部から報告書刊行※④		4/1～3/31	古内　茂	田中　裕
17年度	★道地(2)	整理作業	水洗・注記から原稿執筆の一部まで		4/1～3/31	古内　茂	岸本雅人
	★間見穴(3)	整理作業			4/1～3/31		
	★島田込ノ内(2)	整理作業			4/1～3/31		
18年度	★道地(2)	整理作業	原稿執筆の一部から報告書刊行※⑤		4/1～3/31	古内　茂	岸本雅人
	★間見穴(3)	整理作業			4/1～3/31		
	★島田込ノ内(2)	整理作業			4/1～3/31		

※報告書
① 蔀　淳一　1998　『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書1－八千代市島田込ノ内遺跡－』㈶千葉県文化財センター
② 田中　裕　他　2004　『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書2－八千代市道地遺跡－』㈶千葉県文化財センター
③ 田中　裕　他　2004　『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書3－八千代市間見穴遺跡－』㈶千葉県文化財センター
④ 田中　裕　他　2005　『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書4－八千代市間見穴遺跡(2)－』㈶千葉県文化財センター
⑤ 本報告書

のは帰属させ、遺構の種類を明確にすることとした。3桁の遺構番号の後ろに、竪穴住居跡＝住、掘立柱建物跡＝掘、土坑＝坑、溝状遺構＝溝、道路状遺構＝道、古墳周溝＝周とそれぞれに1文字を付し、遺構番号は101住、104掘のようになる。また、ピット群は4か所の集中が認められたため、Ⅰ～Ⅳ群に分け、Ｐ1から新たに通し番号を付した。整理時に変更した遺構番号及び名称については、遺構一覧表の備考蘭に旧番号を掲載することで対応した。重複する遺構を分離する必要が生じた場合には、3桁の数字の次ぎに異なるアルファベットを付け足し、102A住・102B住のようになる。鉄器の実測はX線写真撮影を経て行った。

国土座標については、平成14年4月1日に世界測地系に沿った新座標に改正された。発掘調査時における成果品は、継続調査であり、変更すると混乱を生じる恐れがあるため、旧座標をもとに設定されている。3遺跡の基準点網図の一起点は、島田込ノ内遺跡のZZ2-00でX＝－26320.000、Y＝24520.000、道地遺跡のQ26-00でX＝－25600.000、Y＝25580.000、間見穴遺跡のG16-00でX＝－26180.000、Y＝24920.000である。

第2節　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と周辺の地形（第2図）

本書に収録した島田込ノ内遺跡、間見穴遺跡、道地遺跡の所在する八千代市は、千葉県北部の印旛沼西岸に位置する。市中央部を、近年の掘削工事により印旛沼疎水路として拡幅整備された新川（旧平戸川）が、ほぼ北から南に流れ東京湾に流入する。遺跡は新川と神崎川の河口部に挟まれ、低地に向かって突き出る半島状の台地上に位置し、行政区画で言えば市の北部にあたる。この台地のほぼ中央部を県道が走り、西側で国道16号線と交差する。島田込ノ内遺跡の平成15年度の調査区は、この交差点から国道16号線を400mほど千葉方面に寄った国道沿いに位置する。新川が形成する低地に舌状に突き出た小台地上に所在する。大字の「島田」は、この台地のほぼ全体に当たり、小字の「込ノ内」は国道を挟んで、台地の北端部に当たる。この台地上での遺跡の調査は、島田遺跡として、昭和53年に今回の調査区の北約30mの送電線鉄塔部分が行われている。また、本事業初年の平成5年度には、島田込ノ内遺跡として、今回の調査区のすぐ南で道路本体部分の調査が行われている。間見穴遺跡は、島田台地北東側の谷津を挟んだ台地上に所在し、小字「間見穴」「平戸台」にまたがっている。調査は道路本体部分の東側を平成5年度から平成6年度にかけて、また、西側を平成10年度に行っている。本書収録の平成15年度の調査区は、平成10年度調査区に挟まれる状況で設定されている。今回の調査では、古い埋没小谷が確認された。古代には南東から小谷が入り込み、遺跡を二分していたとみられる。このため、同一遺跡ながら調査区毎に内容の相違が認められた。道地遺跡は、間見穴遺跡の北東側の小谷津を挟んだ台地上に所在し、小字「西ノ上」「道地」「沼上」にまたがっている。調査は、昭和58年度に遺跡の南東部分を平戸道地遺跡として、八千代市教育委員会によって行われている。本事業である道路本体部分の調査は西側を平成6年度に、東側を平成8年度に、現道部分を平成9年度にかけて行っている。本書収録の平成14年度と平成15年度の調査は継続事業であるが、未調査区として最後まで残った部分である。

3遺跡の所在する台地の標高はいずれも20m前後で、新川が流れる低地面の標高は9m前後である。

間見穴遺跡の平成10年度の調査では、縄文時代早期の貝塚が認められ、鹹水産の貝が出土している。このことから、付近の低地は縄文海進時には、古鬼怒湾の最奥部であったと思われる。その後、海退に伴っ

第２図　年度別調査区域と周辺の地形

て淡水化が進み、周辺が海から湖沼もしくは湿地に変化したとみられる。弥生時代から中世にかけては、現在の利根川から印旛沼にかけての広大な内海「香取海」が形成されたとみられており、本地域はその西岸部に該当する。江戸時代には、しばしば水害におそわれ、治水・干拓工事が繰り返されたことが知られている。これにより、周辺地形は大きく変化し、新川の原型となる地形へと改変していくことになったようである。

2　周辺の遺跡（第3図、図版1）

第3図は、2万5千分の1地形図「白井」「小林」を使用し、周辺のおもな遺跡の位置を示したものである。網掛けは遺跡の範囲、ドットは古墳である。

図示した印旛沼西岸域は、弥生時代から古墳時代前期の集落が高密度に分布する地域である。なかでも、神崎川谷・平戸川谷に半島状に突出する台地上は、そのほとんどが遺跡である。本書収録の3遺跡は、この台地上南側に位置し、台地の付け根部分に島田込ノ内遺跡、谷津を隔てた北東に隣接して間見穴遺跡、さらに小谷を隔てた北東に隣接し道地遺跡が所在する。島田込ノ内遺跡[1)]は、弥生時代後期～古墳時代前期および平安時代の集落遺跡であり、平成5年度に調査が行われ、既に報告書が刊行されている。今回の調査（平成15年度調査）でも平安時代の竪穴住居跡が検出された。間見穴遺跡[2)]は、平成5・6年度と平成10年度の2回に分けて調査が行われ、既に年度別調査区毎に二冊の報告書が刊行されている。平成5・6年度調査区では、弥生時代と古墳時代の集落跡と古墳群が主体に確認されている。平成10年度調査区は、今回の調査区を跨ぐ形で設定され、その西側では縄文時代早期の貝塚・竪穴住居跡・炉穴を主体に、弥生時代・古墳時代・平安時代の竪穴住居跡等も確認されている。また、その東側では平安時代の集落跡が主体に確認されている。今回の調査（平成15年度調査）では、古墳時代・平安時代の集落跡とともに古い小谷が確認され、古代にはこの小谷により遺跡が二分されていたことが分かった。このことから、小谷より北東側の台地縁辺部（平成10年度調査）は、平安時代を主体とした集落跡の一部であることが確認された。道地遺跡[3)]は、平成6・8・9年度に行われ、既に報告書が刊行されている。いずれの調査区でも、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居跡が検出されており、また、環濠を伴うことから、この時期を主体とする拠点的集落跡であることが確認されている。今回の調査（平成14・15年度調査）でも、弥生時代後期～古墳時代前期を主体とする竪穴住居跡が検出された。本書収録の3遺跡周辺では、八千代市教育委員会によって近年多くの調査が行われている。これらの概要は八千代市教育委員会[4)]が、「八千代市埋蔵文化財年報」等で紹介している。以下、時代毎に周辺遺跡を見ていくこととする。

図版1の航空写真は、平成15年1月6日に京葉測量株式会社によって撮影されたものである（写真番号C15A－22、1：10,000に拡大）。ちょうど調査中の道地遺跡の調査区と、県道船橋印西線建設途中の状況が撮影されている。

（1）旧石器時代

本書収録の3遺跡では、今回の調査も含めると、島田込ノ内遺跡で剥片が2点（Ⅲ層、Ⅵ～Ⅶ層）出土した。また、間見穴遺跡では石器集中地点3か所（Ⅲ～Ⅵ層、Ⅸ層、Ⅴ～Ⅵ層）、道地遺跡では2か所（Ⅲ～Ⅴ層、Ⅴ～Ⅵ層）検出されているが、いずれも小規模と言える。周辺には小規模な旧石器時代遺跡の存在は想定されるが、現時点では印旛沼南岸で大規模な遺跡は確認されていない。ただし、図から外れるが、本遺跡の南方にあたる新川沿岸の萱田遺跡群（坊山遺跡、井戸向遺跡[5)]、白幡前遺跡[6)]、ヲサル山遺跡[7)]）

第３図　周辺の遺跡（１：25,000）

では多数検出されており、本遺跡との間にも同様の遺跡の存在が想定されてよい。一方、印旛沼北岸の船尾白幡遺跡[8]では、Ⅲ層～Ⅶ層の石器集中地点17か所が検出され、Ⅲ層に細石刃ブロックが認められた。谷田木曽路遺跡[9]では石器集中地点２か所が検出され、局部磨製石斧・ナイフ形石器・有舌尖頭器が出土している。向新田遺跡[10]では石器集中地点１か所が検出され、ナイフ形石器が出土している。北岸東方に位置する松崎Ⅱ遺跡[11]では、Ⅲ層～Ⅸ層下部に文化層４、石器集中地点16か所が検出され、ナイフ形石器・局部磨製石斧等が出土している。印旛沼と手賀沼に挟まれた台地上の千葉ニュータウン遺跡群では、一本桜南遺跡[12]でⅢ層～Ⅸ層の文化層10、石器集中地点31か所が検出され、ナイフ形石器・槍先形尖頭器等が出土している。木苅峠遺跡[13]では石器集中地点25か所、細石器を含む6,200点もの石器が出土している。新山北遺跡では石器の環状ブロック（径約60m）、石器約1,500点が出土している。これらに対比すると、印旛沼の直接沿岸付近の旧石器時代遺跡は、小規模なものにとどまる。

（２）縄文時代

印旛沼西岸地域では早期の炉穴群と貝層をもつ船尾貝塚をはじめとして、早期後葉の遺跡が多い。間見穴遺跡の平成10年度調査でも遺跡南西端部で早期後葉の貝層が確認され、同時期の貝集積20か所・竪穴住居跡４軒・炉穴27基・土坑７基が検出されている。早期の炉穴群は、間見穴遺跡と同一台地（佐山・平戸台地）上北側に位置する瓜ヶ作遺跡の93基を筆頭に、向山遺跡、子の神台遺跡で検出されている。また、この台地から平戸川谷を挟んだ対岸の台地上に位置する役山遺跡、役山東遺跡[14]、境堀遺跡[15]、向境遺跡[16]、栗谷遺跡[17]でも早期の炉穴群が検出されている。これらの炉穴群は、いずれも低地を望む台地縁辺部に連綿と形成されている。前期の遺跡は、地図範囲外南方の八千代市仲ノ台遺跡[18]、ヲイノ作南遺跡[19]

等で竪穴住居跡が検出されているが、中心は手賀沼低地周辺にあり、本遺跡周辺では少ない。その中で、黒浜期の瓜ヶ作遺跡があり、間見穴遺跡では前期末ごろの竪穴住居跡と石鏃製作跡１か所が検出されている。同様に、一本桜南遺跡でも前期及び前期末～中期初頭の土器が出土し、石鏃製作跡11か所が検出されている。石鏃製作跡は向新田遺跡でも見られ、谷田木曽地遺跡では71点もの石鏃と未製品が出土している。中期では、道地遺跡[20]で阿玉台期の竪穴住居跡１軒が検出されているほか、地図範囲外南方のヲサル山遺跡はこの時期の集落である。中葉の資料はきわめて少なく、後葉は比較的多く、松原遺跡、向山遺跡、田原窪遺跡で加曽利Ｅ式期後半の竪穴住居跡が検出されている。後・晩期では、ヤマトシジミ主体の貝層をもつ大規模集落である佐山貝塚と神野貝塚が存在する。北岸には、北側に深く刻む戸神谷の谷底に低湿地遺跡の西根遺跡[21]があり、加曽利Ｂ式期の土器が大量に出土している。

（３）弥生時代から古墳時代前期

印旛沼西岸地域では弥生時代中期の遺跡はごく少なく、間見穴遺跡と道地遺跡に隣接する田原窪遺跡[22]が、宮ノ台期の小規模な環壕集落として確認されているだけである。この周辺では、集落が数多く形成されるのは弥生時代後期後葉から古墳時代前期にかけてである。この時期の集落はきわめて多く、高密度に展開する。印旛沼低地西端部から入り込む小谷や、神崎川と新川の低湿地に直接面した台地縁辺部に集中している。周辺遺跡群では、松原遺跡から東山久保遺跡、瓜ヶ作遺跡、向山遺跡、佐山台遺跡、田原窪遺跡、子の神台遺跡、道地遺跡、間見穴遺跡と続く台地上は、ほぼ全面でこの時期の竪穴住居跡が検出されいてる。特に佐山台遺跡では竪穴住居跡229軒、道地遺跡では今回の調査も含めると竪穴住居跡80軒と環壕の一部が検出されており、一帯は中心的な場所であったと考えられる。印旛沼低地北岸では鳴神山遺跡[23]、船尾白幡遺跡[24]、船尾町田遺跡[25]、谷田木曽地遺跡、向新田遺跡、松崎Ⅱ遺跡等、さらに北奥には一本桜南遺跡が分布する。印旛沼低地南岸では、島田込ノ内遺跡[26]、栗谷遺跡[27]、上谷遺跡[28]、おおびた遺跡[29]、さらに南方では萱田遺跡群の権現後遺跡[30]、ヲサル山遺跡、白幡前遺跡、川崎山遺跡[31]が分布し、印旛沼から続く低地の最南端には、弥生時代末の製鉄遺跡である沖塚遺跡[32]がある。集落の数から見ると方形周溝墓ないし初期古墳は非常に少ない。佐山・平戸台地では間見穴遺跡のほか、東山久保遺跡、松原遺跡、田原窪遺跡、南東岸の栗谷遺跡、上谷遺跡、向境遺跡、境堀遺跡、北岸の神々廻宮前遺跡、松崎Ⅰ遺跡[33]、南方のヲサル山遺跡、井戸向遺跡に若干数分布する。栗谷遺跡では集落と別れて墓域を形成するが、ほとんどは集落内の一角に位置する小規模な方墳である。

（４）古墳時代中期・後期

佐山・平戸台地では、前期から継続する多くの遺跡でこの時期の竪穴住居跡は検出されているが、数的には少なく、集落の密度は希薄といえる。道地遺跡で９軒、北岸の船尾町田遺跡で１軒、鳴神山遺跡で２軒、谷田木曽地遺跡・谷田神楽場遺跡で４軒の検出に留まっている。南東岸では、上谷遺跡で前期末～中期初頭の竪穴住居跡が10軒検出されているが、この地域での古墳時代中期・後期の大規模集落は知られていない。間見穴遺跡内には間見穴古墳群が台地縁辺部に所在し、前期古墳４基と後期古墳５基からなる。前期の002号墳は前方後方墳の可能性があり、壺形埴輪が出土している。後期の005号墳・006号墳では筑波石の石棺から豊富な副葬品と人骨が出土している。道地遺跡内には平戸台古墳群10基が所在するが、墳丘を残すのは１基だけである。１号墳・２号墳はともに後期の方墳で、筑波石の箱形石棺から多数の人骨が出土している[34]。佐山台遺跡内の真木野古墳[35]は40m級の円墳で、箱形石棺から２体～３体分の人骨と鉄剣が出土している。新川を挿んで東岸の神野芝山古墳群では、２号墳・４号墳が調査されている。

2号墳（30m級の円墳）では箱形石棺から10数体の人骨が、また、4号墳（未調査で削平された）では埴輪、石枕、刀、鏡がそれぞれ出土したとされている。上谷遺跡では終末期古墳（方墳）が知られている。北岸の船尾町田遺跡では、3基の古墳が報告されている。1号墳（20m級の円墳）、2号墳（30m級の前方後円形小墳）では、裾部の箱形石棺から刀、鏃、水晶切子玉が出土している。

（5）奈良・平安時代

佐山・平戸台地では、間見穴遺跡と島田込ノ内遺跡で、比較的まとまって竪穴住居跡・掘立柱建物跡が検出されているが、台地全体での密度は希薄といえる。これに対して、低地の北岸や南東岸ではこの時期の集落が多い。北岸では船尾白幡遺跡、鳴神山遺跡という大集落が知られている。船尾白幡遺跡は船穂郷の拠点と考えられ、多数の竪穴住居跡・掘立柱建物跡が検出され、遺物も多数出土している。西根遺跡では、古墳時代から平安時代の水路跡を検出し、木製品の人形、馬形の形代、丸木杭、梯子、柱材を伴う堰跡等が出土している。南東岸では栗谷遺跡、境堀遺跡、役山遺跡、役山東遺跡、郷遺跡、上谷遺跡、南台遺跡でこの時期の竪穴住居跡を検出している。上谷遺跡では190軒以上の竪穴住居跡、栗谷遺跡では130軒以上の竪穴住居跡と終末期方墳22基、境堀遺跡では規則的な配置をもつ掘立柱建物跡をそれぞれ検出している。さらに、上谷遺跡では「承和二年」をはじめとする紀年銘墨書土器が複数出土している。

註1　蔀淳一　1998　『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書1－八千代市島田込ノ内遺跡－』㈶千葉県文化財センター

2　田中裕他　2004　『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書3－八千代市間見穴遺跡－』㈶千葉県文化財センター
田中裕他　2004　『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書4－八千代市間見穴遺跡（2）－』㈶千葉県文化財センター

3　田中裕・西野雅人他　2004　『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書2－八千代市道地遺跡－』㈶千葉県文化財センター

4　八千代市史料編纂委員会　1991　『八千代市の歴史　資料編　原始・古代・中世』

5　藤岡孝司　1986　『八千代市井戸向遺跡』㈶千葉県文化財センター

6　藤岡孝司　1987　『八千代市白幡前遺跡』㈶千葉県文化財センター
大野康男　1991　『八千代市白幡前遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅴ－』㈶千葉県文化財センター

7　阪田正一他　1986　『八千代市ヲサル山遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－』㈶千葉県文化財センター

8　糸川道行　2004　『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅥ－印西市船尾白幡遺跡－』㈶千葉県文化財センター

9　及川淳一他　1984　『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅷ－船尾町田遺跡・谷田木曽地遺跡・谷田神楽場遺跡－』㈶千葉県文化財センター

10　金丸誠・落合章雄　2002　『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告ⅩⅤ－印西市向新田遺跡－』㈶千葉県文化財センター

11　西野雅人・鈴木弘幸他　2003　『松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書1－松崎Ⅱ遺跡－』㈶千葉県文化財センター

12　雨宮龍太郎・落合章雄　1998　『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅡ－白井町一本桜南遺跡－』㈶

千葉県文化財センター
13　鈴木道之助　1975　「木刈峠遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅲ』千葉県都市公社
14　宮澤久史他　2004　「栗谷遺跡　役山東遺跡　雷南遺跡　雷遺跡」『(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－第3分冊－』八千代市遺跡調査会
15　宮澤久史他　2005　「境堀遺跡」『(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』八千代市遺跡調査会
16　宮澤久史他　2004　「向境遺跡」『(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』八千代市遺跡調査会
17　蕨茂美　2001　『栗谷遺跡』八千代市遺跡調査会
18　落合章雄他　1989　『八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡－東葉高速鉄道引込み線および車庫用地内埋蔵文化財調査報告書－』㈶千葉県文化財センター
19　森竜哉・玉井庸弘　2000　『ヲイノ作南遺跡発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会
20　林勝則　1986　『平戸道地遺跡』八千代市教育委員会
21　小林信一他　2005　『印西市西根遺跡－県道船橋印西線埋蔵文化財調査報告書－』㈶千葉県文化財センター
22　八千代市教育委員会　1995　『平成6年度　八千代市埋蔵文化財調査年報』
23　鳴田浩司・田形孝一　1999　『千葉北部地区新市街地造成事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－印西市鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡－』㈶千葉県文化財センター
24　野村幸希・古内茂　1976　「船尾白幡遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅴ』㈶千葉県文化財センター
25　古内茂　1984　「船尾町田遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅶ』㈶千葉県文化財センター
26　秋山利光他　2005　「島田込ノ内遺跡」『市内遺跡発掘調査報告書』八千代市教育委員会
27　宮澤久史他　2001、2003、2004　「栗谷遺跡」『(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－第1分冊－、－第1分冊　本文編－、－第2分冊－』八千代市遺跡調査会
28　武藤健一他　2001、2003、2004、2005　「上谷遺跡」『(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－第1分冊－、－第1分冊　本文編－、－第2分冊－、－第3分冊－、－第4分冊－、－第5分冊－』八千代市遺跡調査会
29　増田誠蔵他　1975　『おおびた遺跡－八千代市少年自然の家建設内遺跡－』八千代市教育委員会
30　加藤修司他　1984　『八千代市権現後遺跡』㈶千葉県文化財センター
31　八千代市遺跡調査会　1980　『萱田町川崎山遺跡発掘調査報告』
32　大鷹依子　1994　『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡他－東葉高速鉄道埋蔵文化財調査報告書－』㈶千葉県文化財センター
33　内田龍哉他　2004　『松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書2－印西市松崎Ⅰ遺跡－』㈶千葉県文化財センター
34　常松成人　2001　『平戸台2号墳発掘調査報告書』八千代市教育委員会
35　常松成人　2000　「真木野向山遺跡a地点」『市内遺跡発掘調査報告書』八千代市教育委員会

第２章　島田込ノ内遺跡

第１節　調査の概要

本遺跡は、平成５年度に調査され、その結果は「船橋印西線埋蔵文化財調査報告書１」として既に、その成果は知られているが、隣接地においても小規模な開発行為に伴い八千代市教育委員会によって調査されている。これら既調査分の報告から考えると、本遺跡周辺は古墳時代初頭の集落、次いで奈良・平安時代の集落が展開されていたことが理解できる。とりわけ奈良・平安時代においては、竪穴住居跡とともに掘立柱建物跡も検出され、出土した土器には墨書も多く、「万寺」・「佐人」といった文字もみられるところから村落を構成していたものと推察できる。

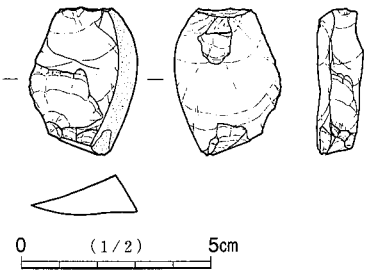
今回の調査は、交差点部分での拡幅部にあたるため限られた面積となった。そのため幅２ｍのトレンチを設定し、前回の調査成果に鑑み検出が想定される竪穴住居跡等の精査に努めた。その結果、本調査区においては、以下に述べるように旧石器時代の石器１点と奈良・平安期に属する住居跡１軒を検出し調査を終了した。

第２節　検出された遺構と遺物

調査は面積も少なく、遺構・遺物の検出も僅かなものであった。旧石器時代に属する石器１点は、図示したように北側グリッドにおいて出土した。また、隣接するようなかたちで奈良・平安期の住居跡が検出されている。

１　旧石器時代（第４・５図、図版２）

調査区の２か所について、確認のための試掘調査を実施した。このうち、北側に設定したYY1-88グリッドの第Ⅵ層～Ⅶ層中から剥片１点が検出された。そのため周辺部をできる限り拡張し、調査を続けたが出土遺物については本資料１点のみにとどまった。また、土層については第５図に示したように、周辺地域で一般的に認められるような層順を示していた。

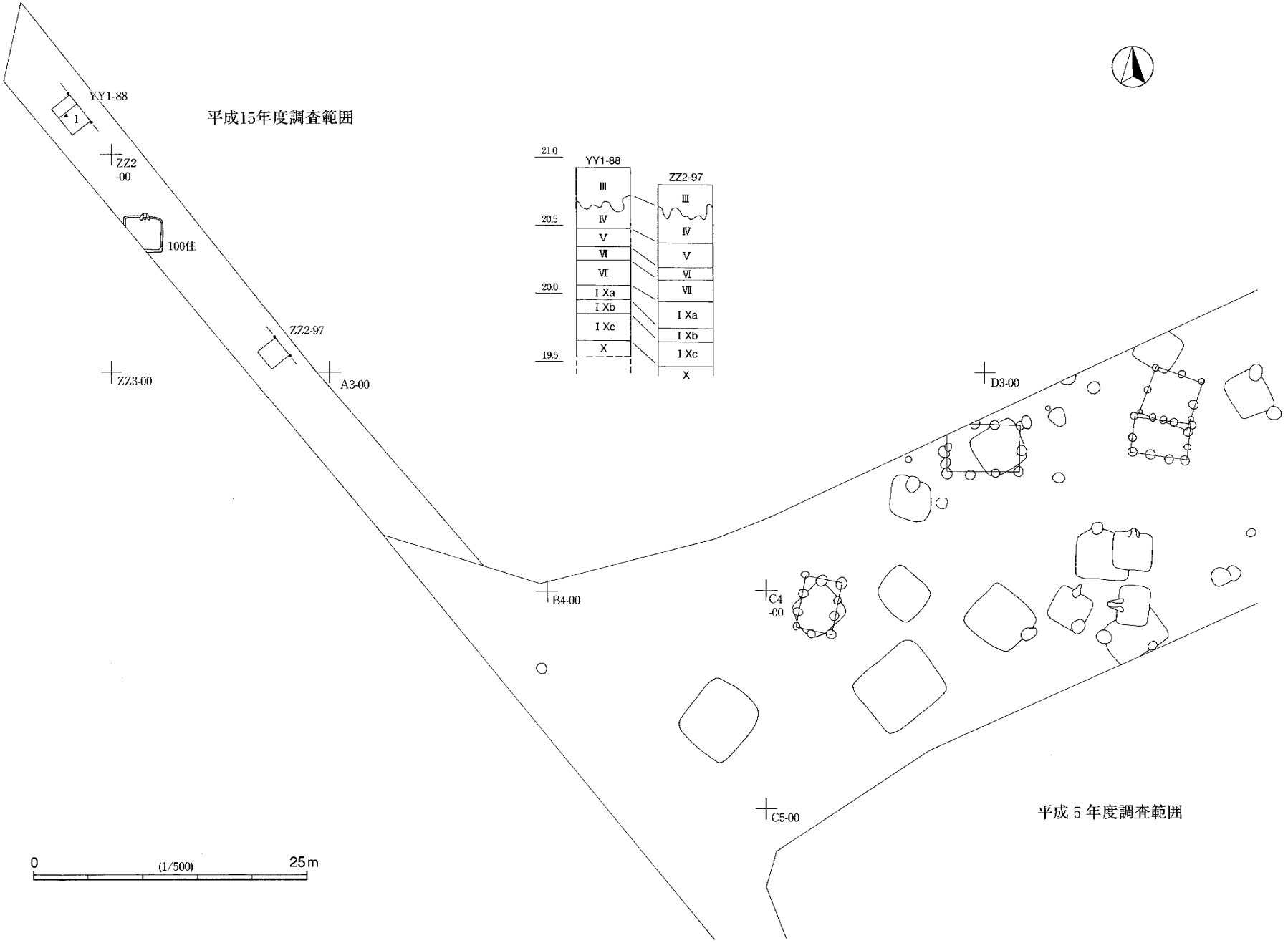


第４図　出土石器

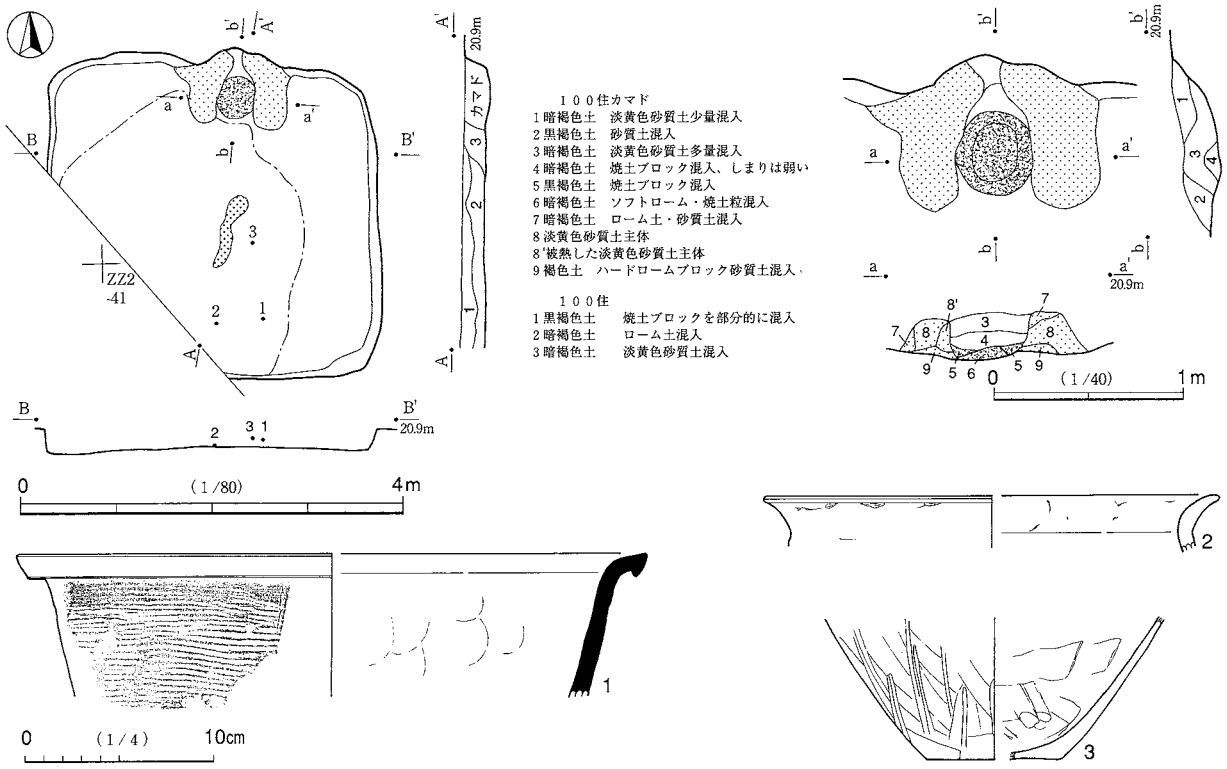
出土石器は、青灰色を呈した頁岩製の剥片で、打面には調整剥離の痕跡が認められる。長さ24㎜、幅20㎜、厚６㎜、重さ2.63ｇを計る。表面には自然面が残り、下端部の表裏面では調整痕がみられるため掻器か楔のような用途が考えられる。

２　奈良・平安時代（第５・６図、第２・３表、図版２）

本住居跡は、ZZ2区と命名した調査区から検出され、南西コーナーの一部が事業地外となり完掘はできなかった。遺構番号は継続調査ということで100号からとしたが、他には遺構が検出されずに終了した。形状は南北に3.3m、東西に3.5mを測り、ほぼ方形を呈していた。床面は中央部分を中心に良く踏み固められていたが、明確な柱穴は確認できなかった。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁面下での壁溝は検出されなかった。カマドは北壁の中央部に設置され、遺存度は良好で火床には焼土粒や焼土ブロックが堆積し



第５図　上層遺構・下層確認グリッド配置図及び土層柱状図



第6図　100住

ており、長期にわたっての使用が想定された。

出土遺物には須恵器の甑1点と土師器の甕2点があり、図示したように床面近くから出土している。1は須恵器の甑で、口縁部が約1／6程度の遺存であり、推定口径は33cmとなる。口縁内外面はナデにより、胴部はタタキにより成形されている。このため内面では緩やかな凹凸が認められる。器内外面の色調は黄灰色を呈し、胎土には微細な雲母・砂粒の混入が認められ、焼成は良好である。2は土師器の甕で、口縁部が約1／5ほどの遺存である。口縁部器面はナデ成形をほどこすものの若干凹凸が残る。器面の色調は灰褐色ないし褐色となる。胎土はよく精選されており、僅かに長石・スコリア等が認められる。3は甕の底部であり、約1／3が遺存する。器面は底部も含めてヘラケズリにより整形されており、その後、軽くヘラによる調整の跡が認められる。色調や胎土は2と同様であり、同一個体の可能性がある。

第3節　まとめ

本遺跡は八千代市の北部に位置し、南には印旛沼から東京湾に注ぐ新川が流れる平坦な台地上に営まれた遺跡であり、過去2回にわたり発掘調査がおこなわれている。今回で3度目の調査となり、遺跡の性格等については前2回の調査によりほぼ把握されている[1)]。今回の調査は、面積も少なく以前の調査を補完するような調査といえよう。過去の調査成果をみると、旧石器時代から歴史時代に至るまで各時代の遺物が検出されているが、主体となる時期は住居跡などの遺構を伴う古墳時代初頭と墨書土器を伴う住居跡や掘立柱建物跡が重複していることもあり、長期間にわたってこの地が利用されてきたことが認識できる。

前述したように墨書の「万寺」などは、地方寺院の存在を想定させる資料であり一定規模の集落を構成していたものと推定される。

また、古墳時代初頭の遺構・遺物を観察すると隣接する間見穴遺跡でも同時期の遺構・遺物が大量に検出されており、この地域をも含めた形で集落が展開されていたことが解明された。いわばこの弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけては新しい文化の波が波及してきた時期でもある。だが、こうした状況の中にあっても本遺跡の一部では器面に縄文を施文した甕形土器が若干使用されており[2)]、間見穴遺跡[3)]でもこの傾向は否定できない。こうした状況を考慮すると、当時の人びとの生活の中には弥生時代の伝統が少なからず残っていたものと推察される。

註1　蔀淳一　1998　『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書1－八千代市島田込ノ内遺跡－』㈶千葉県文化財センター

秋山利光他　2005　「島田込ノ内遺跡」『市内遺跡発掘調査報告書』八千代市教育委員会

2　蔀淳一　1998　『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書1』㈶千葉県文化財センター　で報告の古墳時代5号住居跡出土の甕形土器

3　田中裕他　2004　『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書3－八千代市間見穴遺跡－』㈶千葉県文化財センター

田中裕他　2005　『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書4－八千代市間見穴遺跡（2）－』㈶千葉県文化財センター

第2表　島田込ノ内遺跡（H15）竪穴住居跡観察表

遺構No.	挿図番号	図版番号	時期	平面形	規模［m］［長］×［幅］×［深］	主軸方位［°］	床面積［㎡］	壁［形状］	主柱穴深［cm］	燃焼施設［種別/位置/形］	貯蔵穴［cm］［形状/位置］［長×幅×深］	グリッド	重複［旧］［新］	出土遺物［須恵器］［土師器］	備考
100住	6	2	平安	方	3.3×3.5×0.3	N-3-E	10.17	直	－	ｶﾏﾄﾞ/N/－	－	ZZ2-31	単独	甑1,甕2	一部区域外

第3表　島田込ノ内遺跡（H15）土器観察表

（　）は推定値

第図	挿図番号	遺構	器質	器種	遺存［%］	口径［cm］	底径［cm］	器高［cm］	最大径［cm］	色調［内/外］	胎土	調整［内/外］	備考［出土状況］
6	1	100住	須恵	甑	5	(33.0)	－	－	(33.4)	黄灰色/黄灰色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾀﾀｷ,ﾅﾃﾞ	破断面摩耗　［下層］
6	2	100住	土師	甕	5	(23.5)	－	－	－	褐灰色/灰褐色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	3と同一個体　［床面］
6	3	100住	土師	甕	20	－	(7.1)	－	－	灰褐色/灰褐色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾐｶﾞｷ	2と同一個体　［中層］

第３章　間見穴遺跡

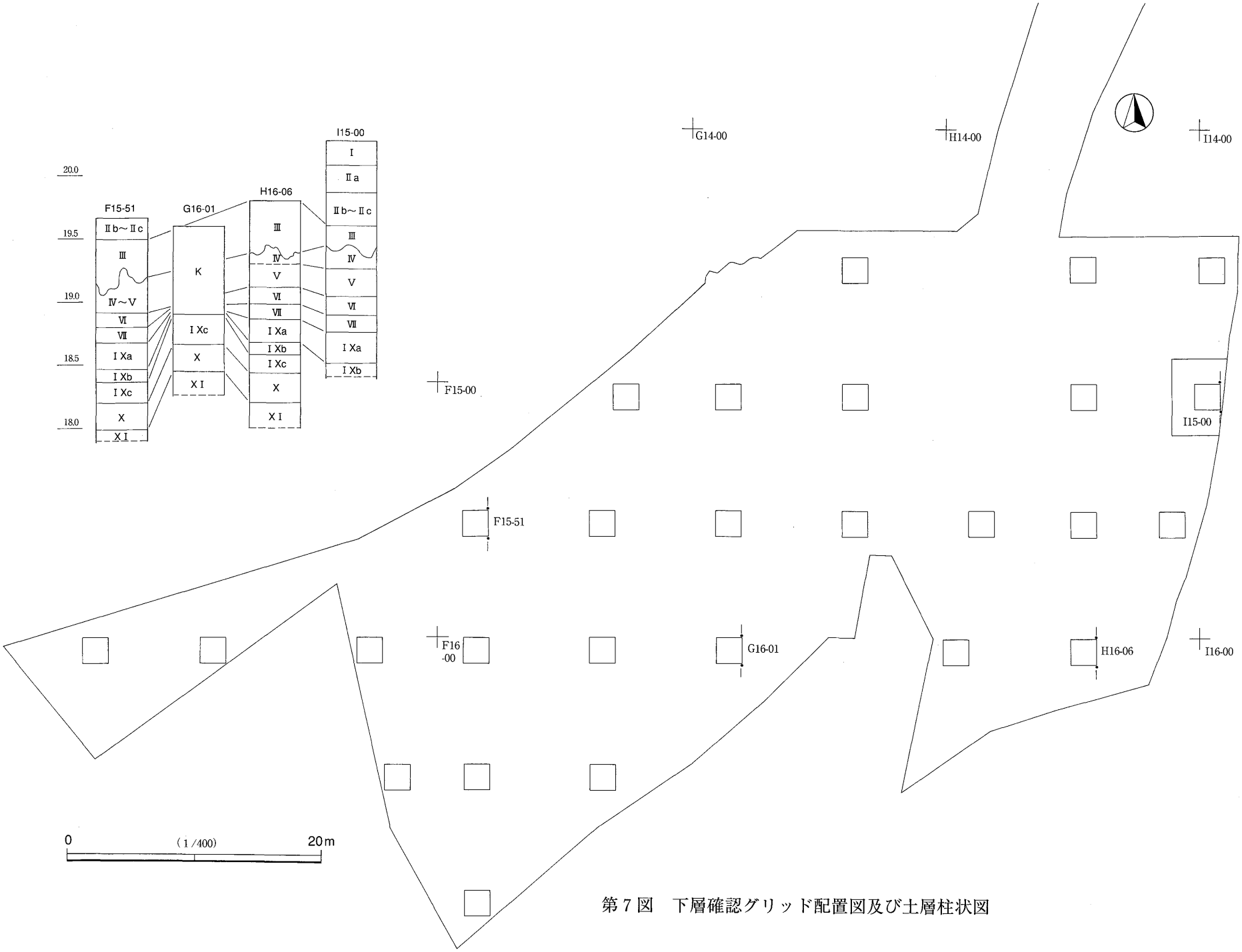
第１節　調査の概要

前述のとおり、間見穴遺跡の調査は平成５年度・６年度・10年度・15年度の年度別４回にわたって行われた。同一遺跡ではあるが、調査地点毎に内容の相違が認められたため、３調査区に区分して報告することとした。そのうち、平成５・６年度調査分は平成16年３月に、平成10年度調査分は平成17年３月に、既に報告書刊行済みである。本書は、平成15年度調査分を収録し、本事業最終調査分の報告となる。間見穴遺跡は印旛沼低地に半島状に突出した台地上に位置し、南西には島田込ノ内遺跡、北東には道地遺跡を控え、両遺跡の中間にあたる。本線が台地縁辺部を通るため、間見穴遺跡全体で言えば低地を直下に望む地点の調査となった。過去の調査成果を竪穴住居跡でみてみると、縄文時代早期４軒、縄文時代前期１軒、弥生時代後期～古墳時代前期39軒、古墳時代後期３軒、奈良・平安時代25軒が検出されており、弥生時代後期～古墳時代前期が主体の集落跡であることが分かっている。隣接する島田込ノ内遺跡でも同時期の竪穴住居跡が12軒、道地遺跡では八千代市教育委員会の調査も含めると87軒検出されている。このことから、この台地上全面に弥生時代後期～古墳時代前期にかけての大集落が営まれていたことが分かる。また、奈良・平安時代にも掘立柱建物跡を伴う集落が大規模に営まれていたことが分かっている。今回の調査地点は、平成10年度に行われた調査区に挟まれる部分にあたり、低地と台地を結ぶ現道下の調査も含まれた。上層の遺構としては、既報告分で触れているように一部検出された遺構を含め、竪穴住居跡33軒・掘立柱建物跡７棟・方墳周溝１基・土坑19基・溝３条・道跡１条・ピット群４か所が検出された。前回調査・報告されたものと比較すると、今回は縄文時代の遺構は検出されなかったが、その他の遺構の状況及び所属時期はほぼ一致する。（第４表遺構一覧参照）

なお、確認調査で旧石器時代の遺物が１点出土したため、周辺を拡張し遺物の広がりをみたが、ほかに出土はなかったため確認調査で終了した。以下、検出された遺構と遺物について時代順に述べていくこととする。

第２節　検出された遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は前述したが、ここでは所属時期について触れておく。竪穴住居跡の所属時期は、弥生時代後期から古墳時代前期10軒、古墳時代中・後期３軒、奈良・平安時代20軒である。方墳周溝は古墳時代前期、掘立柱建物跡の所属時期はいずれも平安時代後半と考えられる。土坑19基のうち所属時期がほぼ確定できたものは16基で、いずれも奈良・平安時代と考えられる。残りの３基については遺物が皆無で、時期の確定には至らなかった。溝状遺構の所属時期は古墳時代１条、中・近世２条、また、道路状遺構は平安時代と考えられ。ピット群は重複関係から古墳時代以前に属するもの２か所、出土遺物から平安時代に属するもの２か所である。所属時期を確定できなかったものが３か所、残りは他遺構との重複関係や覆土の状況から、中世を下らない時期と考えられる。一方、今回の調査区中央部には古い時期に埋没したと思われる小谷が確認された。現在では間見穴遺跡として一括りにされているが、古代にはこの谷により遺跡が二分されていたとみられる。前回確認された縄文時代早期の貝塚・集落跡と平安時代集落が小谷の南西側に集中し、小谷の北東側に弥生時代～古墳時代の集落が集中していることからもうかが



第７図　下層確認グリッド配置図及び土層柱状図

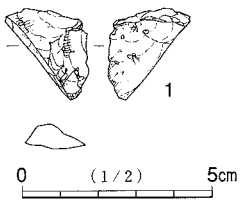
える。また、今回の調査では小谷の周辺に平安時代の集落が集中していることが確認された。このことは、時期によって台地利用の変遷が明確にうかがえる好資料といえる。

今回調査分の遺構番号は前回２度にわたる報告で統一性がないので、新たに101から始めることとした。また、前回調査報告分の遺構番号は新しい番号は使用せず、前回の番号のまま記述することとした。

1　旧石器時代（第７・８図、第19表、図版14・56）

本遺跡における旧石器時代の調査は、上層で多くの遺構が検出されたため上層遺構を調査した後に実施した。２ｍ×２ｍのグリッドを設定し、調査対象地の約４％の割合で試掘した。その結果I15-00グリッドにおいて、Ⅵ～Ⅷ層から黒曜石製の剥片が１点出土した。その後、周辺部を拡張して分布範囲の把握に努めたが、石器の出土には至らず１点のみの単独出土で確認調査を終了した。出土した剥片は長さ24㎜、幅20㎜、厚６㎜、重量2.63ｇである。また、G16-01グリッドからは瑪瑙製の剥片が攪乱層から１点出土した。攪乱は設定グリッドのほぼ全域にまでおよび、Ⅸ層上面まで達していた。よって出土層位が明確ではないので旧石器時代の遺物としては取り扱わず、グリッド出土石器として一括掲載した。

次に本遺跡の基本的層序について触れておく。本調査区を満遍なくカバーできるように４グリッドの土層柱状図を第７図に示した。堆積土では視認による判別が困難な部分についてはあえて分層は行わなかった。調査区全体では新期テフラは明確に識別できなかったが、ＡＴ層や暗色帯は明確に識別できた。また、調査区東側ではⅣ・Ⅴ層は識別できたが西側では不明瞭であった。

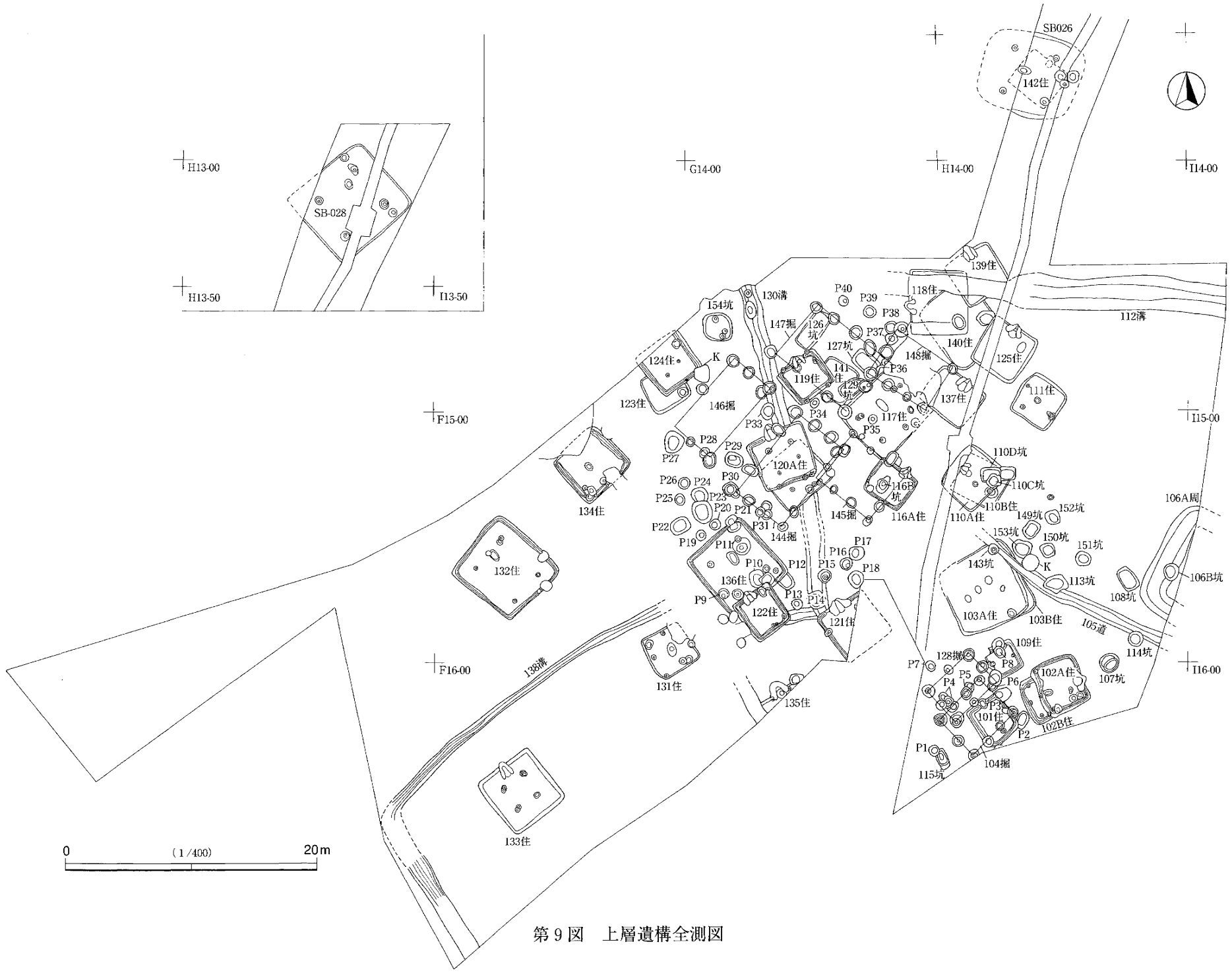


第８図　出土石器

第　Ⅰ　層	黒色土	（表土層）
第　Ⅱａ　層	黒褐色土	Ⅰ層より緻密な堆積を示す
第Ⅱｂ～Ⅱｃ層	暗褐色土	若干の新期テフラを含むが明確な識別はできない
第　Ⅲ　層	黄褐色土	ややくすんだ色調（ソフトローム層）
第　Ⅳ　層	暗黄褐色土	やや黒味を帯びた色調（ハードローム層）
第　Ⅴ　層	黄褐色土	（ハードローム層）
第　Ⅵ　層	明褐色土	ＡＴを含む層で明確に識別できる（ハードローム層）
第　Ⅶ　層	黄褐色土	Ⅸ層暗色帯への漸位層で下部ではやや黒味を増す（ハードローム層）
第　Ⅸａ　層	褐色土	第２暗色帯の上部層でやや黒味を帯びた色調（ハードローム層）
第　Ⅸｂ　層	褐色土	褐色に近い間層で比較的明確に識別できる（ハードローム層）
第　Ⅸｃ　層	暗褐色土	第２暗色帯の下部層でⅨａ層より暗い色調（ハードローム層）
第　Ⅹ　層	暗褐色土	立川ローム層の最下部でやや赤味がある（ハードローム層）
第　ＸⅠ　層	灰黄褐色土	

2　縄文時代（第10図、第11表、図版51・56）

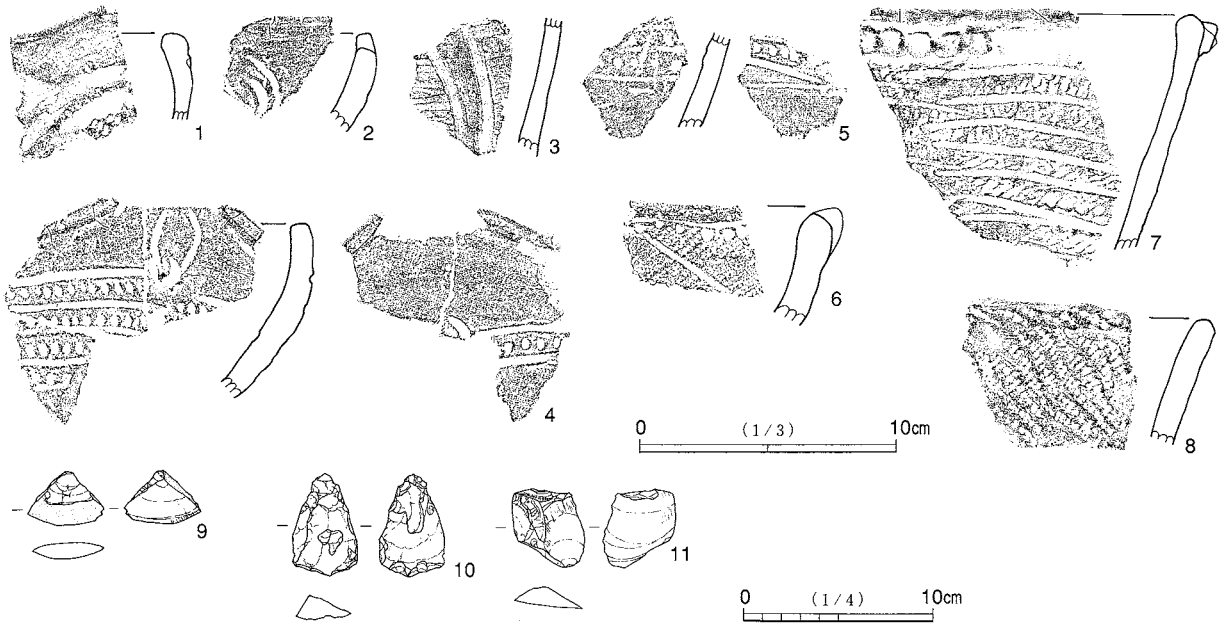
本遺跡では平成５・６年度の調査区で、前期に属する竪穴住居跡１軒、土坑１期、石鏃製作跡１か所が検出されている。また、平成10年度の調査区では早期に属する竪穴住居跡４軒、竪穴状遺構２基、炉穴27基、土坑７基、貝層20か所が検出されている。今回の平成15年度調査区では縄文時代に属する遺構は検出されず遺物も極少であったが、前述のとおり本遺跡が立地する台地上には縄文時代人の生活跡は確認され


SB026
142住
H13-00
G14-00
H14-00
I14-00
SB-028
H13-50
I13-50
139住
118住
112溝
130溝
154坑
147掘
126坑
P40
P39
P38
P37
127坑
140住
148掘
125住
124住
K
119住
141住
129坑
P36
111住
123住
146掘
137住
F15-00
P34
117住
I15-00
P33
P35
P28
P29
P27
120A住
110D坑
P26
P24
P30
116B坑
110C坑
P25
P23
P20
P21
145掘
116A住
110B住
110A住
149坑
152坑
106A周
134住
P22
P31
144掘
153坑
150坑
151坑
P19
P11
P17
P16
143坑
K
132住
P10
P12
P15
P18
113坑
106B坑
136住
P13
P14
108坑
P9
122住
121住
103A住
103B住
105道
109住
114坑
138溝
131住
P7
128掘
P8
P5
P6
102A住
107坑
I16-00
F16-00
P4
P3
101住
135住
P2
102B住
P1
104掘
115坑
133住
0
(1/400)
20m

第９図　上層遺構全測図

第4表　間見穴遺跡（H15）遺構一覧

遺構番号	遺構種類	時期	グリッド	備考（旧番号）	挿図	図版	頁	遺構番号	遺構種類	時期	グリッド	備考（旧番号）	挿図	図版	頁
101住	竪穴住居跡	平安　前	H16-21		32	3	56	143坑	土坑	平安 後	H15-52		75	－	124
102A住	竪穴住居跡	奈良・平安	H16-04		33,34	3	57	144掘	掘立柱建物跡	平安 後	G15-24		67	－	115
102B住	竪穴住居跡	奈良　後	H16-13		33,34	3	61	145掘	掘立柱建物跡	平安 後	G15-26		68	－	116
103A住	竪穴住居跡	古墳　前	H15-71	同地点建替	12	3	24	146掘	掘立柱建物跡	平安 後	G14-91		69	－	117
103B住	竪穴住居跡	古墳　前	H15-71	同地点建替	12	3	26	147掘	掘立柱建物跡	平安 後	G14-75		70	－	118
104掘	掘立柱建物跡	平安　後	H16-21		65	4	114	148掘	掘立柱建物跡	平安 後	G14-88		71	－	118
105道	道路状遺構	平安　前	H15-75		76	4	127	149坑	土坑	平安	H15-43	(15I-101)	75	－	124
106A周	古墳周溝	古墳　前	H15/I15	方墳	11	4	23	150坑	土坑	平安	H15-54	(15I-102)	75	16	124
106B坑	土坑	平安	H15-69		72	15	119	151坑	土坑	平安	H15-55	(15I-103)	75	－	125
107坑	土坑	奈良・平安	H16-07	(16I-006)	72	15	119	152坑	土坑	平安 前	H15-44	(15I-104)	75	－	126
108坑	土坑	平安　前	H15-67		72	15	120	153坑	土坑	平安	H15-53	(15I-106)	75	－	127
109住	竪穴住居跡	平安　前	H15-92		35,36	5	62	154坑	土坑	平安	G14-61	(14H-024)	75	16	127
110A住	竪穴住居跡	古墳　前初	H15-20		13	5	26	P1	ピット群Ⅰ	中・近世	G16-39	(16I-002)	78	16	130
110B住	竪穴住居跡	平安　前	H15-21		37	5	64	P2	ピット群Ⅰ	中・近世	H16-33		78	－	130
110C坑	土坑	平安　後	H15-22		73	5	120	P3	ピット群Ⅰ	中・近世	H16-12		78	－	131
110D坑	土坑	平安　末	H15-22		73	5	120	P4	ピット群Ⅰ	中・近世	H16-10	(16I-004)	78	16	131
111住	竪穴住居跡	弥生　後	H14-94		14	6	27	P5	ピット群Ⅰ	中・近世	H16-11	(16I-005)	78	16	131
112溝	溝状遺構	中・近世	H14/I14		82	6	139	P6	ピット群Ⅰ	中・近世	H16-02	(16I-007)	78	－	131
113坑	土坑	平安　後	H15-64		72	15	120	P7	ピット群Ⅰ	中・近世	G16-09	(16I-014)	78	－	131
114坑	土坑	平安　後	H15-97		72	15	122	P8	ピット群Ⅰ	中・近世	H15-92		78	－	131
115坑	土坑	平安	H16-30		73	15	122	P9	ピット群Ⅱ	中・近世	G15-71	(15H-031)	79	16	132
116A住	竪穴住居跡	平安　前	G15-27		38,39	6	66	P10	ピット群Ⅱ	中・近世	G15-62	(15H-030)	79	－	132
116B坑	土坑	平安　後	G15-27		73	－	122	P11	ピット群Ⅱ	中・近世	G15-52	(15H-028)	79	17	132
117住	竪穴住居跡	古墳　前初	G15-07		15	7	28	P12	ピット群Ⅱ	中・近世	G15-63	(15H-014)	79	－	132
118住	竪穴住居跡	平安　前	G14-59		40	7	70	P13	ピット群Ⅱ	中・近世	G15-74	(15H-015)	79	17	132
119住	竪穴住居跡	平安　前	G14-84	同地点建替	41	7	72	P14	ピット群Ⅱ	古墳後以前	G15-75	(15H-032)	79	17	132
120A住	竪穴住居跡	平安　前	G15-22		42～44	8	74	P15	ピット群Ⅱ	古墳後以前	G15-65	(15H-008)	79	17	132
120B住	竪穴住居跡	古墳　中	G15-22		28	8	50	P16	ピット群Ⅱ	中・近世	G15-66	(15H-006)	79	17	133
121住	竪穴住居跡	平安　前	G15-85	土器溜まり	45～47	8	79	P17	ピット群Ⅱ	中・近世	G15-56	(15H-007)	79	17	133
122住	竪穴住居跡	平安	G15-72	土器溜まり	48～50	9	85	P18	ピット群Ⅱ	中・近世	G15-66	(15H-012)	79	17	134
123住	竪穴住居跡	奈良　後	F14-98		51	9	90	P19	ピット群Ⅲ	中・近世	G15-40	(15H-021)	80	17	135
124住	竪穴住居跡	平安　前	F14-88	土器溜まり	51	9	89	P20	ピット群Ⅲ	中・近世	G15-41	(15H-016)	80	17	135
125住	竪穴住居跡	平安　前	H14-72		53～55	10	95	P21	ピット群Ⅲ	中・近世	G15-41	(15H-023)	80	17	135
126坑	土坑	平安　前	G14-65		74	15	122	P22	ピット群Ⅲ	中・近世	F15-49	(15H-022)	80	17	135
127坑	土坑	平安　前	G14-87		74	16	122	P23	ピット群Ⅲ	平安 後	G15-40	(15H-020B)	80	18	135
128掘	掘立柱建物跡	平安　後	H16-11		66	－	115	P24	ピット群Ⅲ	中・近世	G15-30	(15H-020A)	80	18	135
129坑	土坑	奈良	G14-96		73	16	124	P25	ピット群Ⅲ	不明	F15-39	(15H-023)	80	18	136
130溝	溝状遺構	古墳　後	G14/G15		31	8	55	P26	ピット群Ⅲ	不明	F15-29	(15H-019)	80	18	136
131住	竪穴住居跡	古墳　中	F15-98		2 9	10	51	P27	ピット群Ⅲ	中・近世	F15-19	(15H-027)	80	18	136
132住	竪穴住居跡	古墳　前	F15-61		16,17	11	30	P28	ピット群Ⅲ	平安 前	G15-10	(15H-017)	80	18	136
133住	竪穴住居跡	古墳　後	F16-52	同地点建替	30	11	53	P29	ピット群Ⅲ	中・近世	G15-11	(15H-025)	80	18	136
134住	竪穴住居跡	平安　前	F15-25		56,57	11	100	P30	ピット群Ⅲ	中・近世	G15-31	(15H-011③)	80	18	136
135住	竪穴住居跡	平安　前	G16-23		58,59	12	103	P31	ピット群Ⅲ	中・近世	G15-42	(15H-011①)	80	18	136
136住	竪穴住居跡	古墳　前	G15-51		18,19	12	33	P32	ピット群Ⅲ	中・近世	G15-33	(15H-011②)	80	18	137
137住	竪穴住居跡	平安　前	H14-90		60,61	12	106	P33	ピット群Ⅲ	不明	G15-03	(15H-021)	80	18	137
138溝	溝状遺構	中・近世	F15/F16/E16		83	－	141	P34	ピット群Ⅳ	中・近世	G14-95	(14H-013)	81	－	137
139住	竪穴住居跡	奈良　後	H14-51		62	13	109	P35	ピット群Ⅳ	中・近世	G15-07		81	－	137
140住	竪穴住居跡	古墳　前初	H14-60		20,21	13	36	P36	ピット群Ⅳ	中・近世	G14-87		81	－	137
141住	竪穴住居跡	奈良・平安	G14-85		63	－	111	P37	ピット群Ⅳ	中・近世	G14-78	(14H-002)	81	19	137
142住	竪穴住居跡	平安　前	H13-63		64	13	112	P38	ピット群Ⅳ	中・近世	G14-68	(14H-009)	81	19	138
SB026住	竪穴住居跡	弥生　後	H13-61	10年度半分調査	22,23	13	40	P39	ピット群Ⅳ	中・近世	G14-67	(14H-005)	81	19	138
SB028住	竪穴住居跡	古墳　前初	H13-16	10年度一部調査	24,25,26	14	43	P40	ピット群Ⅳ	中・近世	G14-56	(14H-006)	81	19	139



第10図　グリッド出土遺物（縄文時代）

ており、皆無であったわけではない。ここでは極めて少ないが、グリッド一括で取り上げた遺物をみていくこととする。出土土器については帰属しない時期の竪穴住居跡の覆土中から一括で取り上げたものもあったので、グリッド番号に置き換えて出土地点を表した。その場合は表の備考欄に住居番号を記すこととした。本遺跡出土の縄文土器は極少で、図示できたものは計８点である。いずれも中期から後期にかけてのものである。１～３は中期の土器である。１はF15-33出土の深鉢の口縁部片である。肥厚した口縁部が内折し、緩やかな波状を呈す。幅広の沈線下には単節縄文が施される。内面はヘラケズリが縦位に施され、色調はにぶい赤褐色を呈す。胎土には石英がやや多めに含まれる。２はF15-33出土の浅鉢の口縁部片である。波状を呈す口縁部下にやや幅広の平行沈線により文様を描くものである。内面はヘラミガキが丁寧に施され、色調は灰褐色を呈し内外面には煤が付着する。胎土には雲母がやや多めに含まれる。これらの土器は加曽利Ｅ式前半の土器であろう。３はG14-64出土の深鉢の胴部片である。やや幅広の縄文間の磨り消し帯を持つ土器である。内面はやや雑なナデが施され、色調は灰褐色を呈し外面には煤が付着する。胎土は砂粒と大きめのスコリアがやや多めに含まれる。加曽利Ｅ式後半の土器であろう。４～８は後期の土器である。４は132住覆土上層一括取り上げ２点とF15-33出土の１点が接合した、浅鉢の口縁部片である。口縁部は波状を呈し、外面頸部に横位の沈線が５条平行にめぐり、その区画された内部に棒状工具による連続刺突文が施される。内面も平行沈線内に同様の文様が描かれている。内面は横位のヘラケズリが丁寧に施され、色調はにぶい赤褐色を呈す。胎土は砂粒がやや多めに含まれる。加曽利Ｂ２式の精製土器であろう。５はF15-33出土で外面の剥離が激しいが、文様の構成と胎土から４と同一個体と考えられる。６はF15-33出土の浅鉢の口縁部片である。外面には単節縄文が施された後竹管による斜位の沈線が描かれている。やや厚味をもった口縁直下には竹管による横位の沈線がめぐり、その沈線下に連続刺突文が施される。内面は横位のヘラケズリが丁寧に施され、色調は黒褐色を呈す。胎土は長石と砂粒がやや多めに含まれる。加曽利Ｂ２式の精製土器であろう。７はH15-13出土のいわゆる加曽利Ｂ式期の紐線文系粗製深鉢である。縄文施文後竹管による斜線文が施される。内面は密なヘラケズリが施され、色調はにぶい赤褐色を呈す。

胎土は長石と砂粒がやや多めに含まれる。8はH16-14出土の加曽利B式期の縄文施文粗製深鉢である。内面は密なヘラケズリが施され、色調はにぶい赤褐色を呈す。胎土は長石と砂粒がやや多めに含まれる。石製品は3点で、いずれも剥片である。石材は9が黒曜石、10が瑪瑙、11が碧玉である。

3　弥生時代後期から古墳時代前期

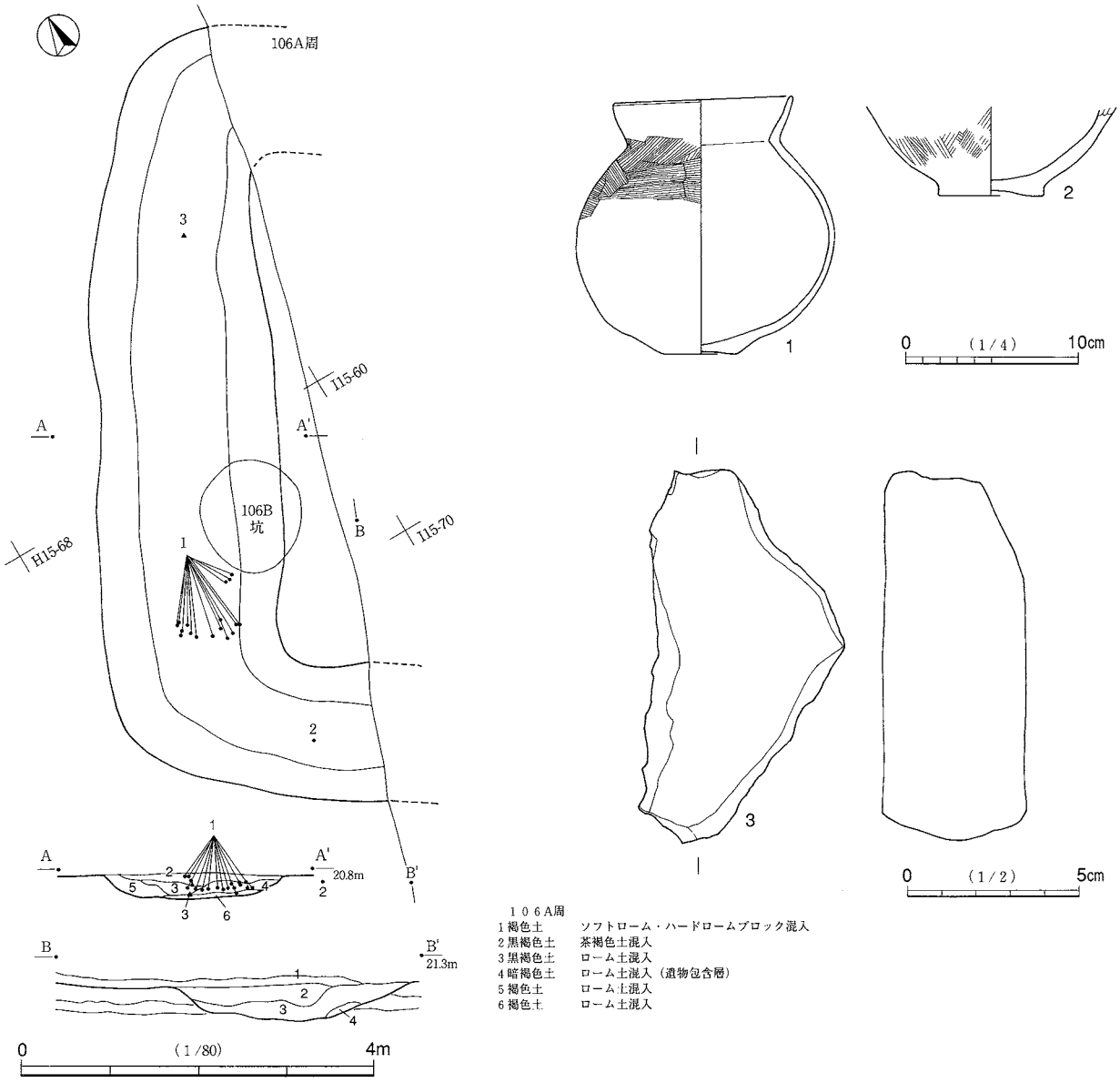
今回の調査では、当該期に属すると考えられる遺構は、106A周の古墳時代前期の方墳周溝1基、竪穴住居跡103A住・103B住・110A住・111住・117住・132住・136住・140住・SB026住・SB028住の10軒である。このうちSB026住・SB028住については平成10年度に一部調査されたものである。

（1）古墳

106A周（第11図、第10・19表、図版4・22・57）

古墳時代前期の方墳周溝の一部である。調査区東端部のH15区からI15区にかけて検出されたが、そのほとんどは調査区外である。既に墳丘は削平されており、調査以前からほぼ平らな状況であった。おそらくこの地が畑地として利用されはじめた頃に削平されたものであろう。周溝の上端幅は約2m、確認面からの深さは30cmで南側はほぼ直角に曲がって調査区外へと続く。遺構の東側は約6mほどで急な崖となり、台地縁辺部に構築されている。周溝底面内側の長さは約7m、周溝外縁を含めた全長は約9mと推定される。周溝底面は若干の凹凸はみられるが、全体的にはほぼ平らであるといえる。周溝断面は浅い逆台形をなし、壁面は緩やかに立ち上がる。周溝の覆土は自然堆積を思わせるが、周溝南西コーナー付近の上層にはハードロームブロックが散在しており複雑な様相である。この部分には、周溝底面から約40cmの深さの平安時代に帰属する土坑が検出されており、土坑構築時の排土とも考えられる。土坑は周溝がほぼ埋まった段階の浅く窪んだ状態から掘られており、土坑の覆土中及び周辺の周溝覆土上面には故意に砕いた様な平安時代土師器小片が140点以上出土した。本方墳の時期よりも新しい時期のものがほとんどで、図示できるものはなかった。土坑と本方墳との関連は不明な点が多いが、本周溝において平安時代になんらかの行為があったのは確かである。埋葬施設は検出されなかったが、調査区外に存在する可能性は高い。

本周溝に伴う遺物で図示できたのは3点のみである。1・2は五領式の小型平底甕であると思われるが、いずれも底部中央部が上げ底気味になっている。1は周溝南西コーナー近くの覆土中層から底面にかけての十数点の破片が接合した。胴部の一部を欠損するが、全体では90%程度遺存し完形に近い。胴部は球形に近く、頸部で窄まり「く」の字状に緩やかに外反し口縁部にいたる。口径10.2cm・底径4.2cm・器高14.9cmで、最大径は胴部中位にあり14.9cmである。色調は内外面ともに黄褐色を呈し、胎土にやや大きめの赤色スコリアを多めに含む。内面は比較的滑らかなナデが施され、外面は肩部に斜位及び横位のハケ、口縁部及び胴部下腹部にナデが施されている。外面肩部と胴部下腹部の一部の2か所に黒斑が認められる。2は1から南へ約2m離れた覆土中層から出土した甕で、底部から胴部下腹部にかけて10%程度遺存する。復元底径は6.0cmで、器厚はやや厚めで重量感があり、底部は高台を意識しているようである。色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈し、胎土にやや大きめの赤色スコリアを多めに含む。内面はナデが施され、外面は胴部に斜位のハケが施されるが胴下端部まではおよんでいない。底部外面は丁寧なヘラナデが施され、黒斑が認められる。3は石皿の破片で、遺物密集地から離れた周溝北側中央の覆土下層から出土した。石材は閃緑岩で、擦面は細かな凹凸が認められる。残存する最大長10.7cm・幅5.4cm・厚4.2cmで、重量は342gである。



第11図　１０６Ａ周

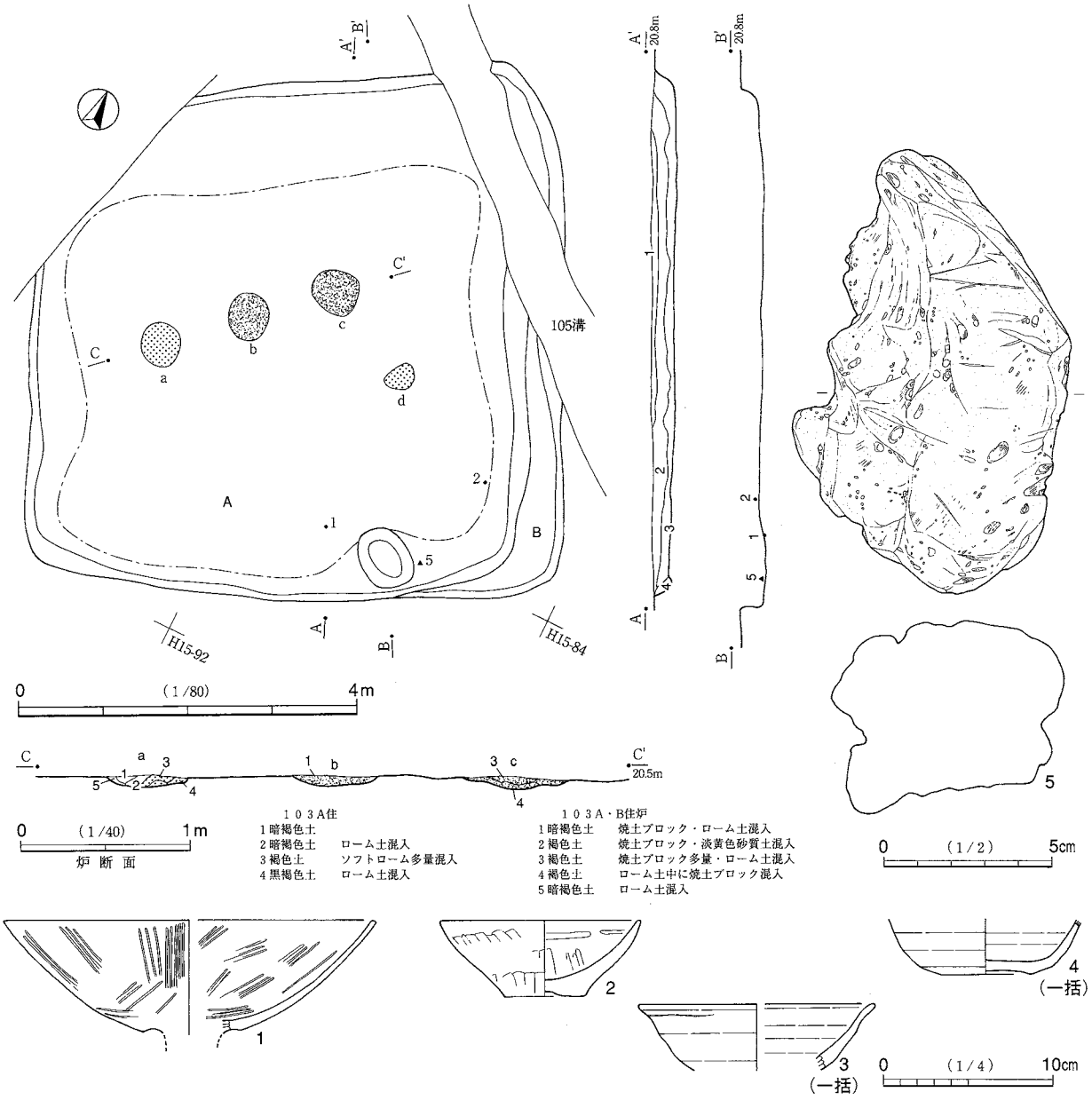
（２）竪穴住居跡

１０３Ａ住（第12図、第６・10・19表、図版３・22・58）

本住居跡は調査区の南東よりH15-71から検出された、同地点建替住居跡である。当初は１軒の住居跡として調査を開始したが、調査途中から重複住居とわかり遺構番号末尾にアルファベットを付し、区別することとした。新旧関係はＢより新しく、出土遺物及び住居形態から古墳時代前期と考えられる。本跡東コーナー部分は現道下で破壊され、また、北コーナー部分は平安時代に属する105道に攪乱を受けている。このため完掘には至らなかったが、平面形はほぼ隅丸方形を呈すと思われる。規模は長軸方向に6.4m、幅5.9m、深さ0.3mを計測し、推定床面積は31.52㎡で、主軸方向はN-26°-Wを示す。床面はそれほど固くはないが、中央部広範囲にやや締まった床面硬化部分が認められた。壁溝及び柱穴は検出されなかった。炉跡はａ～ｄの４か所検出されたが、本跡に伴う炉跡はａ・ｂの２か所で、ｃ・ｄの２か所は103B住に伴うものである。炉ａの方が炉ｂより古く、炉ａには淡黄色砂質土が混入されていた。炉ａ廃棄後に淡黄色

砂質土で床面として調え、炉ｂに移設し使用するに至ったようである。炉ｂは床面中央に設置され、平面形は楕円形を呈している。火床面はそれほど被熱した形跡はなく、炭化物もほとんどみられず、使用頻度は少ないと思われる。南西壁直下には平面楕円形で長さ75cm、幅58cm、深さ６cmを計測する、貯蔵穴と思われる落ち込みが検出されている。遺構内での堆積土は大きく３層に分離でき、中央部に流れ込むような自然堆積の状態を示していた。出土遺物は土器片が700点以上出土したが、復元可能なものはほとんどなかった。図示できたものは土器４点と軽石１点のみであった。

１は高杯の杯部片で、杯部はほぼ100%遺存し、脚部は全欠する。本跡南西壁よりの床面から押し潰された状態で出土した。口径22.0cm・杯部高13.1cmである。色調は内外面にぶい橙色を呈し、胎土には大粒の赤色スコリアを多く含む。形状は東海系開脚高杯に近似し、内外面ともに丁寧なミガキが施されている。２はやや厚手の小型鉢で、約80%を遺存し、本跡南東壁下の床面直上から出土した。口径11.6cm・底径4.9cm・器高4.5cmである。色調は内外面にぶい赤褐色を呈し内外面ともに帯状の煤が付着しており、胎土に



第12図　１０３Ａ・Ｂ住

は長石をやや多く含む。器面はナデとヘラケズリが施され、底外は中央が凹み、外周はやや高台気味で手持ちヘラケズリが雑に施されている。五領式の成立前後に盛行する器種と考えられる。3・4はいずれも覆土上層一括取り上げの杯片で、本跡に伴うものではない。3は口縁部から体部下位までの約30%を遺存する。復元口径13.8cmで、色調はにぶい橙色を呈し内外面ともに薄く煤が付着している。胎土には砂粒を多く含み、器面はロクロナデが施されている。4は約50%遺存するが、口縁部は全欠である。底径5.2cmで、色調はにぶい橙色を呈し内外面ともにやや劣化している。胎土には小粒の赤色スコリアをやや多く含む。器面はロクロナデが施され、底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施されている。5は貯蔵穴脇の本跡床面直上から出土した白色系の軽石である。片面に緩やかに凹む10本の擦痕が認められ、研磨具として使用されたものと思われる。

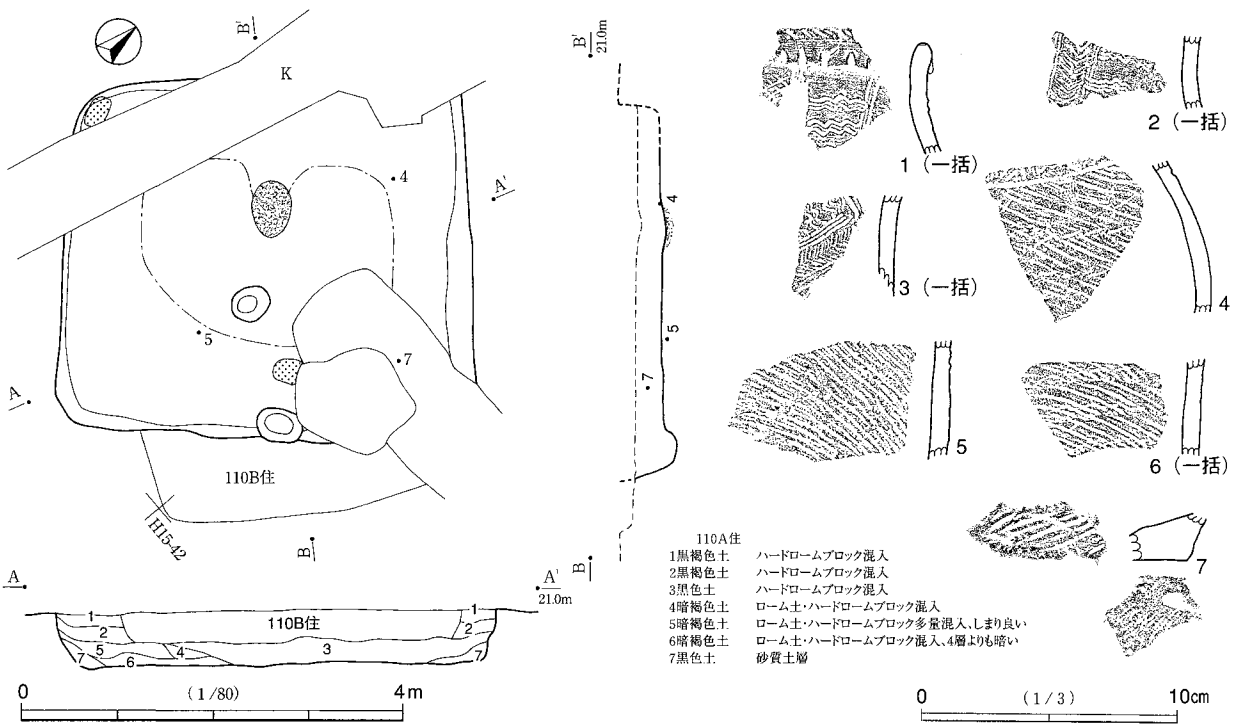
103B住（第12図、第6表、図版3）

本住居跡は103A住構築以前の住居跡である。東壁のみ遺存し出土遺物は確認できなかった。本跡に伴うものとしては炉cと炉dがあげられるが、いずれも103A住の床面下から検出された。炉の新旧関係は炉dが古く炉cが新しい。炉の移設に関しては103A住の炉の移設と同様の状況で行われた様である。平面形はほぼ隅丸方形を呈すと思われる。規模は長軸方向に6.4m、幅6.2m、深さ0.3mを計測し、推定床面積は32.69㎡で、主軸方向はN-26°-Wを示す。床面は103A住より若干高く微少な段差があり、西側に約60cmずらして建替えられた様である。

110A住（第13図、第6・10表、図版5・23）

本住居跡は調査区の中央やや東よりのH15-20から、現道下に半分以上かかる状態で検出された。現道下の調査は仮設道路建設後に行ったが、現道下中央部に雨水管が埋設されており、本跡北西壁はほぼ完全に破壊されていた。また、本跡はほぼ全面にわたり、平安時代に属する110B住・110C坑・110D坑に攪乱を受けている。このため遺存状態は極めて悪いが、遺存する床面及び壁等から推察すると平面形はほぼ隅丸方形を呈すと思われる。規模は長軸方向に4.3m、幅3.8m、深さ0.3mを計測し、推定床面積は13.94㎡で、主軸方向はN-46°-Wを示す。本跡床面はそれほど攪乱を受けずに遺存しており、中央部に固く締まった床面硬化部分が認められた。壁溝は検出されず、床面の2か所に焼土ブロックの塊が認められた。柱穴は床面中央やや南東壁よりに1か所検出され、床面からの深さ約22cmである。南東壁ほぼ中央には床面からの深さ約14cmのピットが検出されたが、用途は不明である。炉跡は床面中央やや北西壁よりに1か所検出され、平面形は楕円形を呈している。火床面はレンズ状を呈し被熱も激しく、使用頻度は多いと思われる。遺構内での堆積土はほとんどを110B住に攪乱されているために不明な点もあるが、大きく4層に分離でき、中央部に流れ込むような自然堆積の状態を示していると思われる。出土遺物は床面から弥生土器片が出土しているが、住居形態から本跡の帰属時期は古墳時代前期初頭が妥当と思われる。

1～7は印手式の甕片である。1は覆土上層一括で取り上げた口縁部から頸部にかけての破片である。折返し口縁肥厚帯端部に附加条縄文、下端部に押圧波状文が施され、頸部には半截竹管による沈線で縦位に区切られた内部に3条の櫛描波状文が横位に施される。胎土には雲母を多く含み、色調は内面がにぶい褐色、外面がにぶい黄褐色を呈す。2・3は覆土上層一括で取り上げた頸部片である。胎土・色調・文様構成ともに1と近似しており、同一個体の可能性もある。4は床面から出土した胴部片である。胴部と頸部を一条の沈線で区画し、胴部に附加条縄文、頸部に沈線文が施されている。胎土には雲母をやや多く含み、色調は内面がにぶい黄褐色、外面がにぶい褐色を呈す。5は床面から出土した胴下端部片である。外



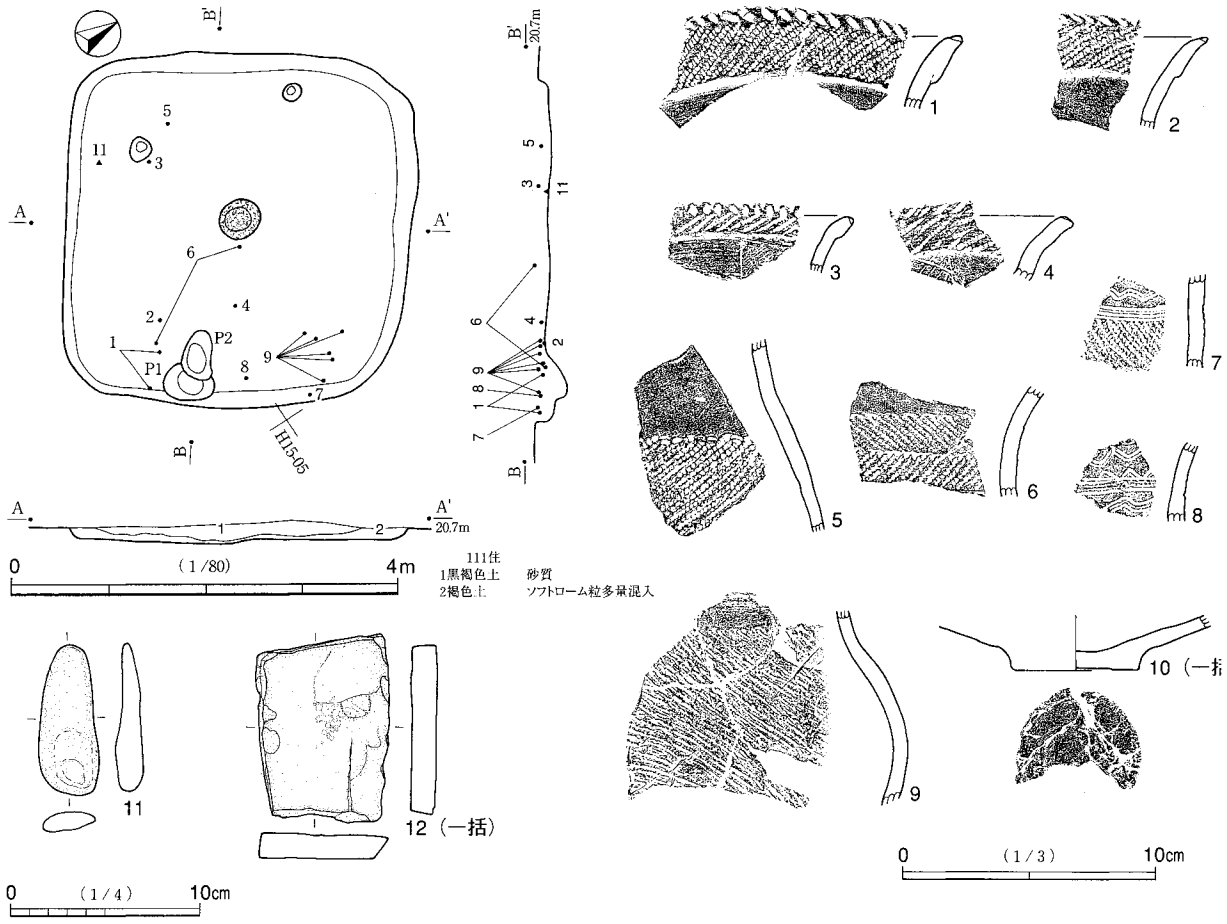
第13図　１１０Ａ住

面は附加条縄文が施され、煤がやや厚く付着する。胎土には砂粒を多く含み大粒の赤色スコリアも認められる。色調は内面がにぶい褐色、外面が黄灰色を呈す。6は覆土中層一括で取り上げた胴下端部片である。外面は附加条縄文が施され、胎土には雲母をやや多く含む。色調は内面がにぶい黄橙色、外面がにぶい褐色を呈し、色調・文様構成ともに4と近似しており、同一個体の可能性もある。7は覆土中層から出土した底部片である。内外面摩耗が顕著で施文等ははっきりしないが、外面は底部側面まで単節縄文が施され、底外は網目状の圧痕が認められるようである。

１１１住（第14図、第6・10・19表、図版6・24・57・58）

本住居跡は調査区の北東よりのH14-94から単独で検出された、弥生時代後期に属する住居跡である。本住居跡より東側には住居跡は検出されておらず、この時期に属する集落の最東端部に位置する住居跡といえる。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸方向に3.8m、幅3.7m、深さ0.2mを計測し、床面積は10.56㎡で、主軸方向はN-55°-Wを示す。本跡は確認面から床面まで20cm程度で極めて浅く、壁は緩やかに立ち上がり壁溝はない。床面中央に炉跡が検出されたが、焼土粒・焼土ブロックがパラパラと散在する程度で、火床面はそれほど被熱した形跡は認められない。西壁よりにピットが2か所検出されたが、主柱穴とするには小規模すぎる。東壁中央からやや南よりには掘り窪められた施設がある。壁直下のP1は深さ約12cmの貯蔵穴、壁から若干離れたP2は深さ約20cmの出入り口ピットと思われる。遺構内での堆積土は2層に分離でき、中央部に流れ込むような自然堆積の状態を示している。出土遺物は弥生土器片と石製品が出土した。

1～9は印手式の甕片である。1・2は床面からの出土で、折返し口縁肥厚帯端部から下端部にかけて附加条縄文が施され、肥厚帯端部は緩やかな波状を呈す。いずれも胎土には石英をやや多く含み、色調は灰褐色で一応に煤が付着している。3は覆土上層、4は覆土下層からの出土で、折返し口縁肥厚帯端部か

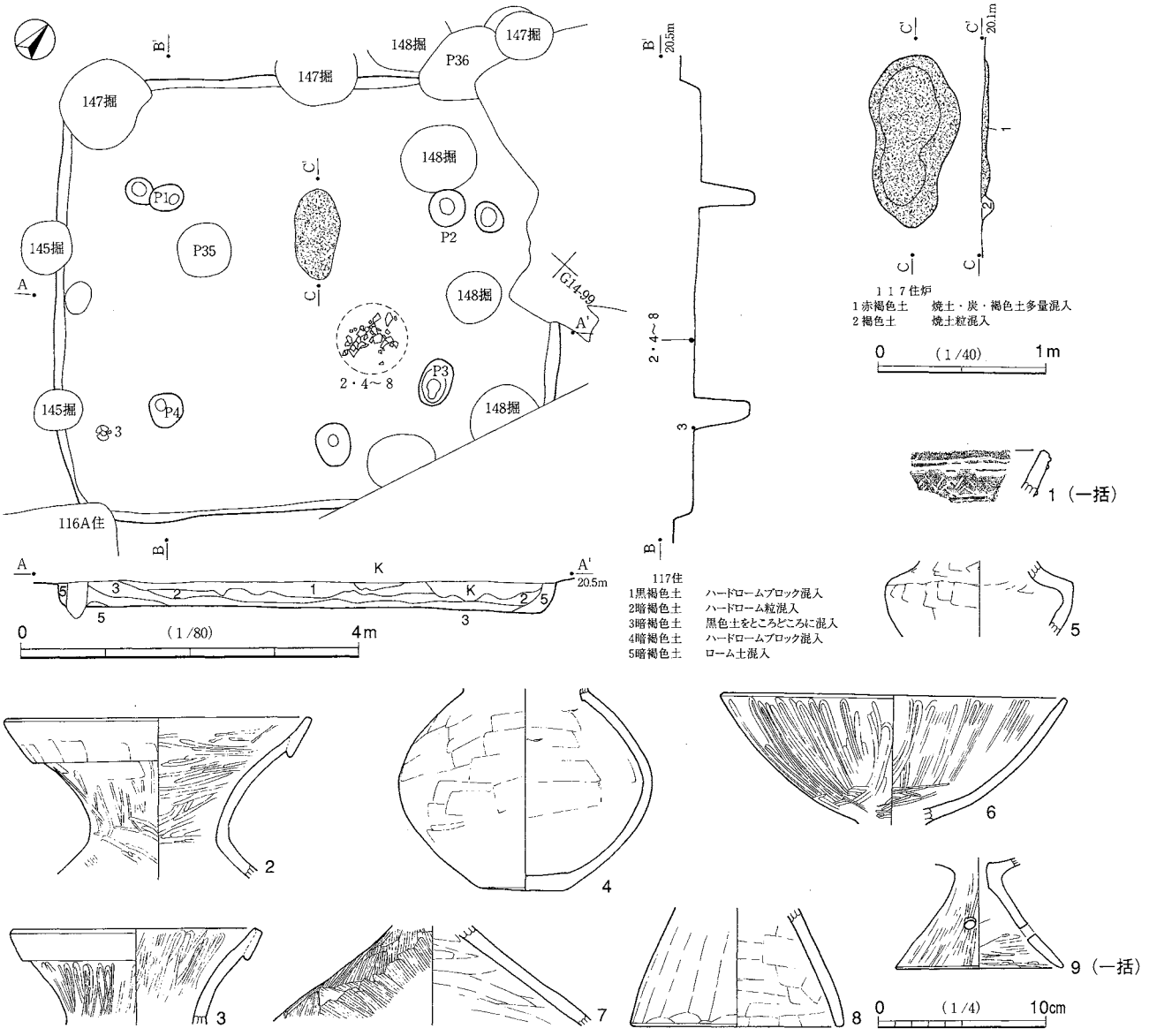


第14図　１１１住

ら下端部にかけて単節縄文が施され、肥厚帯端部は緩やかな波状を呈す。胎土・色調は１・２とほぼ同様である。５～８は頸部片で、いずれも厚く煤が付着している。５は覆土中層から出土し、頸部は無紋で肩部から附加条縄文が施されている。６は覆土中・下層から出土した破片が接合したもので、無文帯の頸部下に羽状縄文が施されている。７・８は床面から出土した。頸部と胴部を４本単位の櫛描直線文で区画し、頸部に２条の櫛描波状文、胴部に附加条縄文が施されている。いずれも胎土に雲母をやや多く含み、同一個体と思われる。９は覆土中・下層から出土した破片が接合した小型甕である。胴部に附加条縄文が施され、内外面ともに煤が付着している。胎土に長石・砂粒を多く含む。10は覆土下層一括取り上げの胴部が大きく膨らむ壺形土器の底部片で、南関東系の特徴をもっている。外面は煤が多量に付着し黒褐色を呈している。小さめの底部は高台気味に作られ、底外には僅かに木葉痕が認められる。11・12は石製品でいずれも石材は砂岩である。11は敲石で覆土下層から出土した。長さ7.9cm、幅2.8cm、厚1.4cm、重量46.86ｇである。12は覆土下層一括取り上げで、当該期の住居によく伴う用材と思われる。

１１７住（第15図、第６・10表、図版７・25・26）

本住居跡は調査区のほぼ中央のG15-07から検出された、古墳時代前期初頭に属する住居跡である。本跡周辺は住居跡及び掘立柱建物跡が集中しており、遺構の重複が激しい。本跡はほぼその中央に位置し、116A住・137住・145掘・147掘・148掘・P1によって切られている。また、北東壁は現代の攪乱を受けているため全体的に遺存状態は悪いが、平面形は方形であると思われる。壁の形状は急で壁溝はない。規模は長軸方向に6.0m、幅5.2m、深さ0.3mを計測し、推定床面積は28.65㎡で、主軸方向はN-41°-Wを示す。床面は平らで硬化面は特にみられず、やや北西壁よりに炉跡が検出された。炉の平面形は長楕円形で焼土・



第15図　１１７住

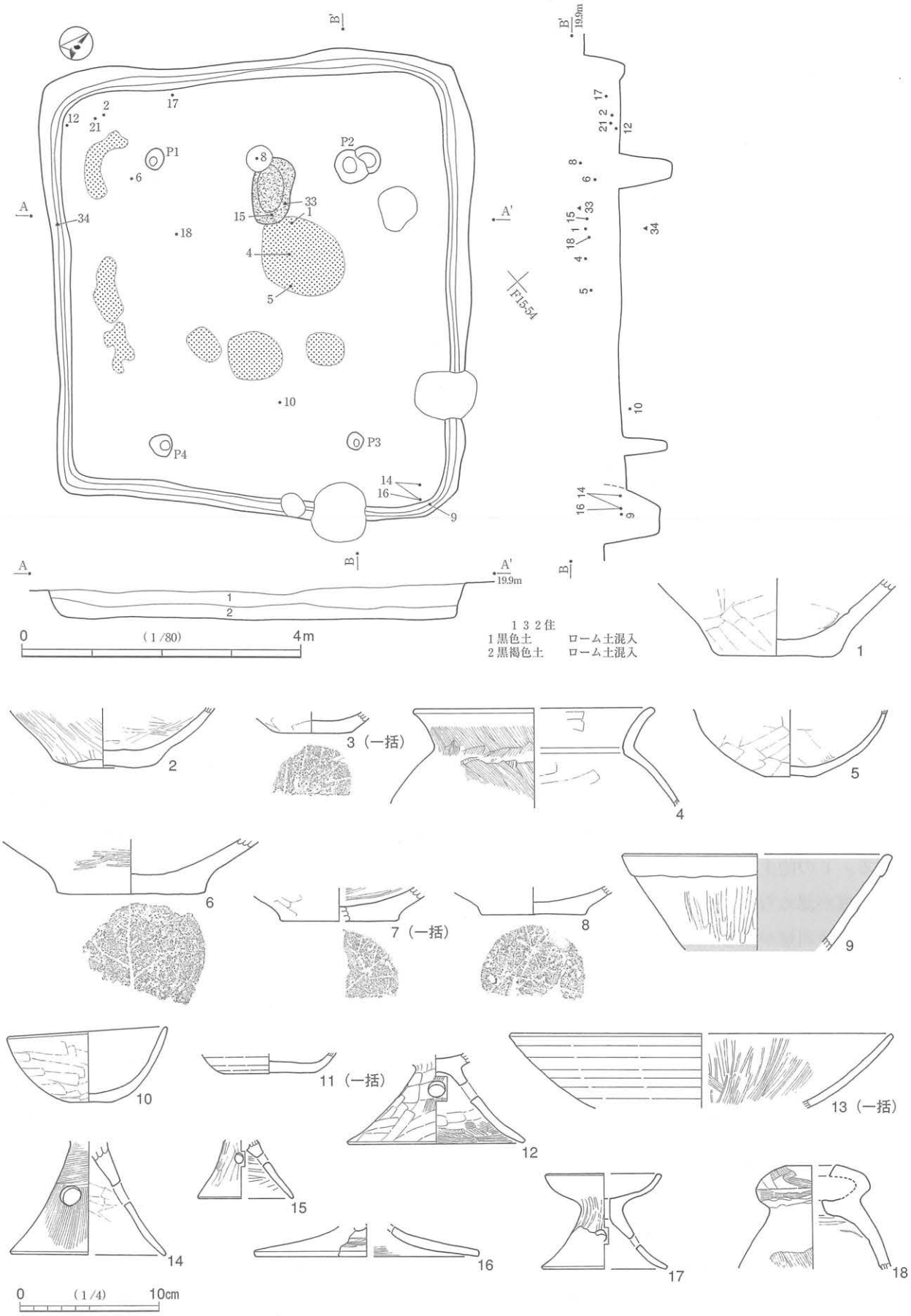
炭化物が厚く堆積し、火床面は激しく被熱しており固いブロック状を呈していた。主柱穴は４か所で、P1＝69cm、P2＝67cm、P3＝68cm、P4＝69cmと深くしっかりと掘り込まれている。南東壁よりには出入り口ピットが認められ、深さ52cmである。遺構内での堆積土は４層に分離でき、中央部に流れ込むような自然堆積の状態を示している。床面中央やや南東よりでは、いろいろな器種の土器片がまとまって出土した。図示できた遺物のほとんどはここから出土したものである。１は覆土中層一括で取り上げた印手式の甕口縁部片である。折返し口縁肥厚帯部に櫛描鋸歯状文が施されている。２～９は土師器である。２・３は古墳時代前期初頭の壺形土器で、折返しの口縁部から頸部にかけて遺存する。いずれも南関東系弥生土器の特徴を残している。２は床面からまとまって出土した土器片数十点が接合したものである。肩部以下は欠損しているが破断面は丸味を帯び、安定感を増すように加工されている。おそらく器台として再利用されたものであろう。口径は18.0cmで、色調は赤彩が施されているかのようで内外面ともににぶい赤褐色を呈している。胎土には若干の砂粒を含み、調整は内外面ともにヘラミガキが施されている。３は本跡南側コ

ーナーの床面から出土した。2と同様の遺物であるが、口径14.3cmとやや小さめである。4～8は床面からまとまって出土した土器片がそれぞれ接合したものである。4は小型壺で底部から胴部上端にかけて、60%程度遺存する。底径5.0cm、最大径は胴部中位にあり15.0cmである。色調は内外面とともに暗赤褐色を呈し、胎土には赤色スコリアがやや多めに含まれる。調整は内外面ともにヘラナデが施されている。5は坩形土器の胴部片で、約20%の遺存である。色調は内外面とともに暗赤褐色を呈し、胎土には長石・赤色スコリアがやや多めに含まれる。調整は内外面ともにヘラナデが施されている。6は高杯の杯部片で、杯部は70%程度遺存し脚部は全欠である。口径は20.2cmで杯部自体はやや深めに作られている。色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈し、胎土には細かな砂粒が多めに含まれる。調整は内外面ともにヘラミガキが丹念に施されている。形状は東海系開脚高杯に近似しているが、在来系のものであると思われる。7は高杯の脚部片で、脚部は60%程度遺存し杯部は全欠である。脚部高は低く、裾部は大きく広がり器厚は厚めで重量感がある。色調は内外面とともに赤褐色を呈し、胎土には細かな砂粒が多めに含まれる。調整は内面にヘラナデ、外面にハケが斜位に施され、下端部には部分的に煤が付着している。8は台付甕の脚部片である。色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈し、胎土には長石・石英がやや多めに含まれる。調整はヘラナデが内面には横位、外面には縦位に施されている。9は柱穴P1覆土内一括で取り上げた小型器台である。受部はほぼ全欠で、脚部は完存し透し孔が4つ認められる。裾径は約10.0cmである。色調は赤彩が施されているかのようで内外面ともににぶい赤褐色を呈している。器面は内外面ともに斑状の剥離が点々と認められ、胎土には細かい赤色スコリアが多く含まれている。

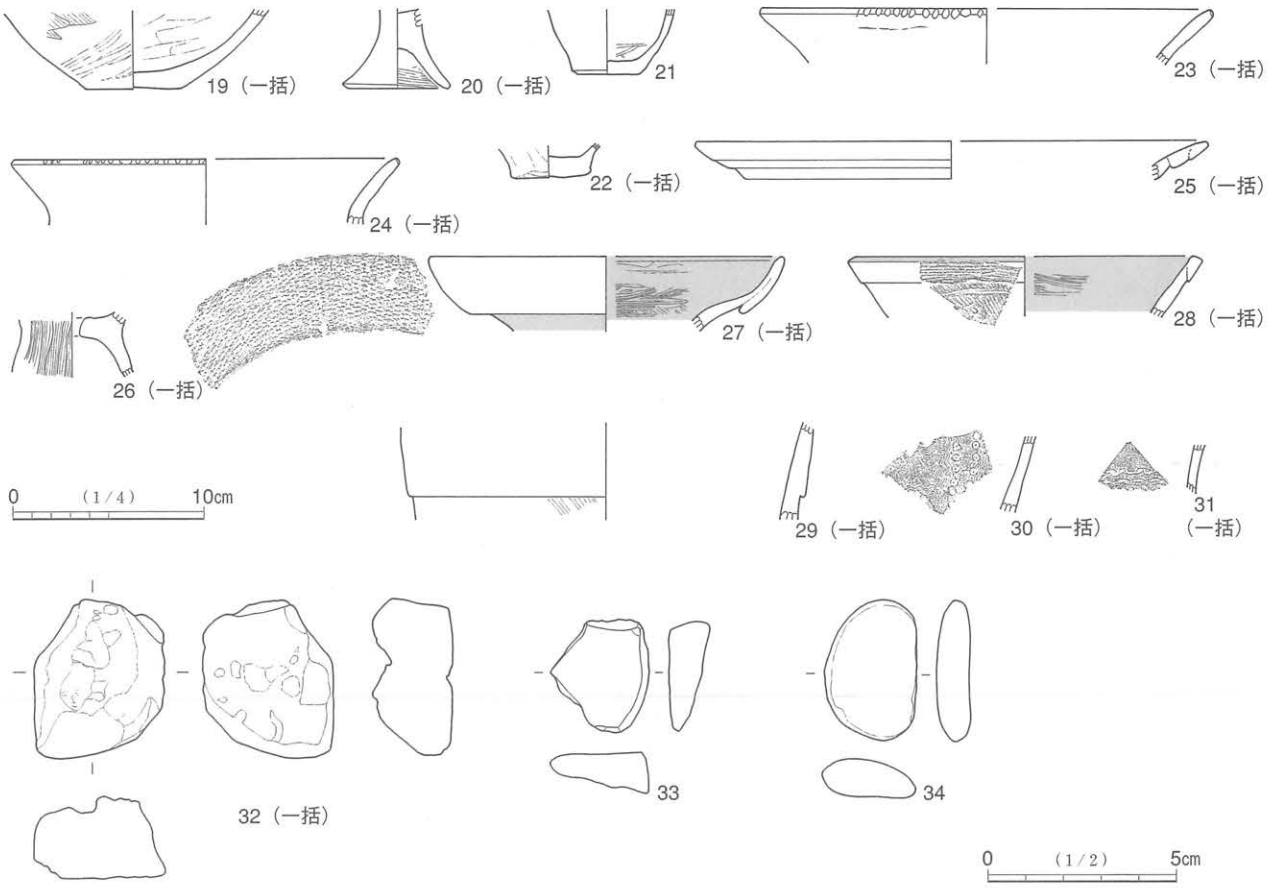
１３２住（第16・17図、第6・10・19表、図版11・39・40・56・58）

本跡は古墳時代前期に属する竪穴住居跡である。調査区西側の緩やかな斜面上のF15-61から単独で検出された。密集する竪穴住居跡群からすると、群の西側に若干離れて位置する。本跡は後世のピット状遺構により攪乱を受けているだけで、遺存状態は極めて良い。平面形は東壁が若干ふくらみ気味の方形である。壁の形状は直で壁溝は全周する。規模は長軸方向に6.8m、幅6.4m、深さ0.5mを計測し、床面積は32.62㎡で、主軸方向はN-49°-Wを示す。床面は南側に若干傾斜し硬化面は特にみられなかったが、主柱穴に囲われた範囲内には床面が焼土ブロック化した箇所が5か所検出された。これらは被熱の状況から察して炉跡と思われ、本跡中央部を中心に炉の位置が点々と移動したものと考えられる。なかでも北西壁に近接する炉跡は焼土がやや厚く残っており、本住居跡廃棄直前まで使用された最も新しいものと思われる。この炉の平面形は長楕円形で火床面は激しく被熱しており、焼土ブロック化が最も顕著に認められた。南西壁側に近接して焼土の集中が見られたが、床面より20cm前後浮いた状態であり、本跡埋没過程の凹みを利用して火が使用された痕跡と思われる。主柱穴は4か所で、P1＝60cm、P2＝81cm、P3＝63cm、P4＝67cmを計測し、深くしっかりと掘り込まれている。遺構内での堆積土は2層に分離できるが、色調は黒色と黒褐色程度の差異しかなくいずれもローム土を同様に含むため、明確な分離は難しい。これらのことは本跡が比較的短期間に埋没したためだと考えられる。出土遺物は多いがいずれもほとんどが破片で、図示できたものは土器片と石製品合わせて34点である。

1～22は土師器、23～31は弥生土器、32～34は石製品である。1～9のうち4は甕の口縁部片、9は壺の口縁部から頸部にかけての破片で、残りは甕もしくは壺の底部片と思われる。1は覆土上層からの出土で、内外面は若干摩耗し破断面も劣化している。2の底部周縁はやや丸味を帯び、安定感に欠ける。内面は薄く炭化物が付着し、外面は二次被熱を受け赤褐色を呈し劣化している。3の外面は厚く煤が付着し黒


B'
B'
19.9m
A
A'
P1
P2
P3
P4
F15-54
B
B
A
A'
19.9m
1
2
0
(1/80)
4m
1 3 2 住
1 黒色土　　ローム土混入
2 黒褐色土　　ローム土混入
1
2
3（一括）
4
5
6
7（一括）
8
9
10
11（一括）
12
13（一括）
14
15
16
17
18
0
(1/4)
10cm

第16図　１３２住（１）



第17図　１３２住（２）

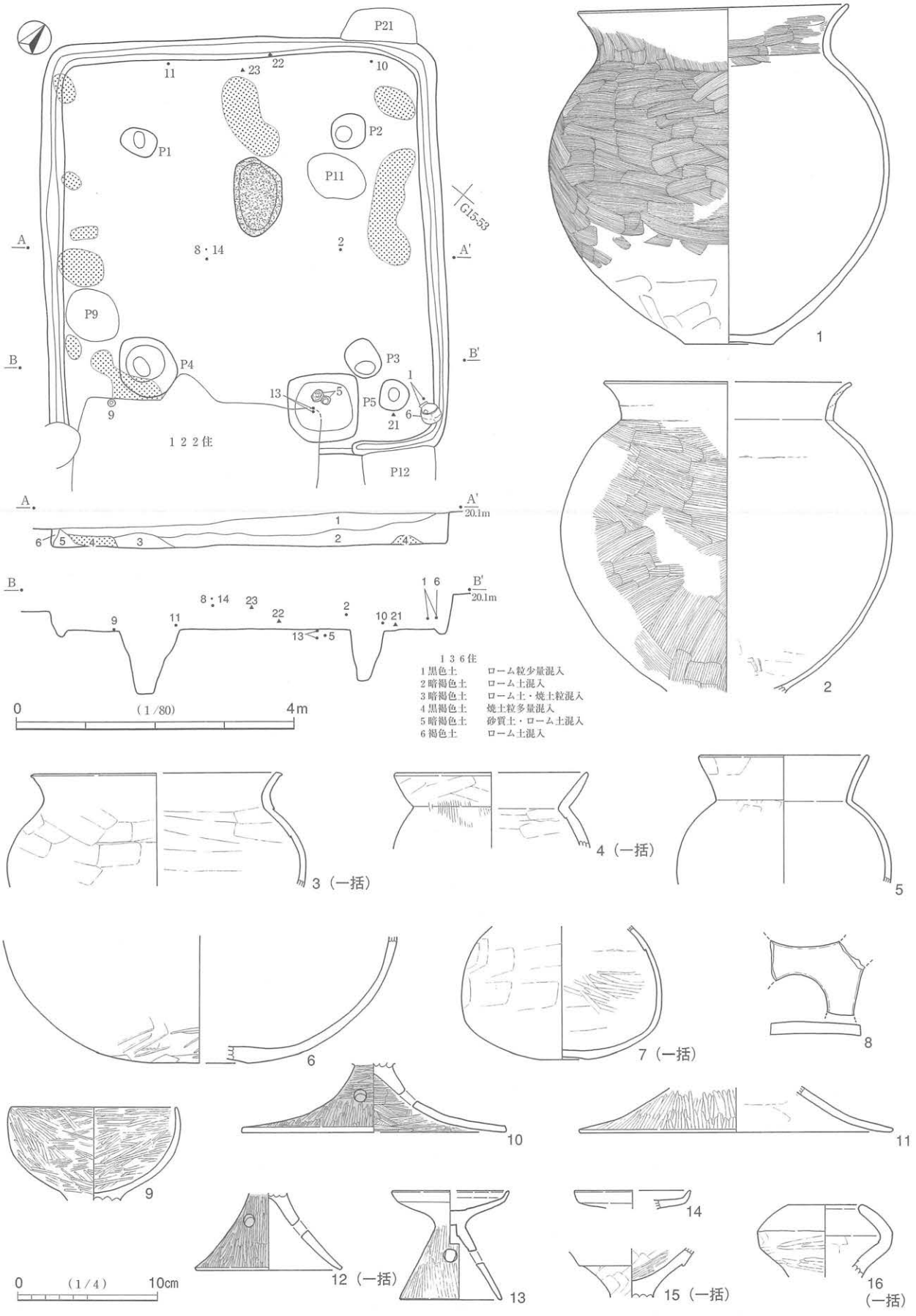
色を呈し、木葉痕が認められる。４は外面ハケ調整の口縁部片で、煤が内外面に付着している。胎土は密で焼成は良好である。５は底径3.6cmで小型の壺と思われる。内面は一部ハケ調整がみられ、外面は若干の摩耗がみられるが手持ちヘラケズリが施されている。色調は全体的に橙色を呈し、胎土は密で小粒の赤色スコリアがやや多めに含まれている。６～８は内外面ともに煤が付着し摩耗が顕著で、破断面も劣化している。６の胎土は粗で大粒の赤色スコリアが多量に含まれ、７・８の胎土は密である。いずれの底外にも木葉痕が認められる。９は折返し口縁を持つ壺形土器の口縁部から頸部にかけての破片である。内外面ともに斑状剥離が激しいが、内面には丁寧なヘラナデ、外面には丹念なミガキが施されている。遺存する内面全域と外面頸部下端には赤彩が施されている。10は床面出土の杯で、ほぼ完形である。口縁端部はやや鋭く立ち上がり口径11.3cm、底径3.1cm、器形に若干の歪みがみられ器高4.8cm～5.4cmを測る。内面は赤褐色を呈しヘラナデ調整、外面はにぶい褐色を呈し手持ちヘラケズリが全面に施されている。胎土は密で石英がやや多めに含まれている。11は平安時代の流れ込みの杯底部片で、全体的に摩耗が顕著である。12～16は古墳時代の古相の特徴を有す高杯であるが、いずれも覆土中からの出土で、混入品の可能性が高い。11は四方透し孔をもつ脚部の完形品で、裾径12.6cmを測る。内面は上位に丁寧なヘラミガキ、裾部に斜位のハケ調整が施され、外面は手持ちヘラケズリを主体とし部分的にハケ調整が施されている。13は杯部片で約１／２周遺存する。復元口径27.4cmを測り、内外面ともに丁寧なミガキとナデが施されている。14は三方透し孔をもつ脚部で、約１／２周遺存する。復元裾径11.0cmを測り、外面上位には横位、透し孔から裾部には縦位の丁寧なミガキが施されている。色調は全体的に赤褐色を呈し、特に外面は赤彩を施したような明赤褐色を呈している。15は四方透し孔をもつ小型の脚部片で、復元裾径6.6cmを測る。ナデと

ミガキを施されているが、器面は一部煤が厚く付着し若干摩耗している。胎土には中粒の赤色スコリアが多量に含まれている。16は透し孔が一部みられ大きく開脚する脚部片で、復元裾径16.0cmを測る。内外面ともに赤褐色を呈しているが、裾部は煤が厚く付着し黒色を呈している。17・18は器台であるが、古い時期の混入品の可能性が高い。17は四方透し孔をもつ小型で、全体の約半分を遺存する。ナデとミガキを主体とした調整が施されているが、部分的に煤が付着し器面は若干摩耗している。色調はにぶい褐色を呈し、胎土には砂粒が多めに含まれている。18は裾部を欠損するいわゆる異形器台である。受部孔径は3.7cmを測り、ヘラにより平らにカットされている。内面は雑なナデを基調とし、外面は丹念なハケ調整が施されている。色調は赤褐色及び褐色を呈し、胎土は密で微量の海綿骨針を含んでいる。19は鉢の底部片である。遺存度が低いため時期の詳細は不明であるが、胎土・焼成からすると新しい時期の混入品の可能性が高い。20～22はミニチュア土器である。20は高杯、21・22は甕と思われる。23～31は弥生時代末から古墳時代前期初頭にかけての土器群で、すべて覆土一括で取り上げた混入品である。23・24は甕の口縁部片で、端部は棒状工具による押圧が施され波状を呈している。25・26は台付甕の破片である。25は口縁部で輪積み痕が残り、26は台部で外面に縦位のハケ調整が施されている。27～28は南関東系の特徴を有する壺形土器の折返し口縁部片である。27は1／3周程度遺存し、外面肥厚帯部と端部に網目状文、そして無文部の内外面に赤彩とミガキが施されている。28は遺存する内面に赤彩と横位のミガキが施されている。29は折返し口縁の肥厚帯部片であるが、遺存度が極めて低いため器形の詳細は不明である。30・31は印手式の甕形土器の頸部片である。30は横位と縦位の櫛描波状文を組み合わせ、縦位の押圧竹管文を平行に連続させている。31は二条のS字状結節文が施されている。32は覆土一括で取り上げた白色系の軽石である。33は砥石片で材質は安山岩である。34は本跡床面出土の凝灰岩質の礫である。

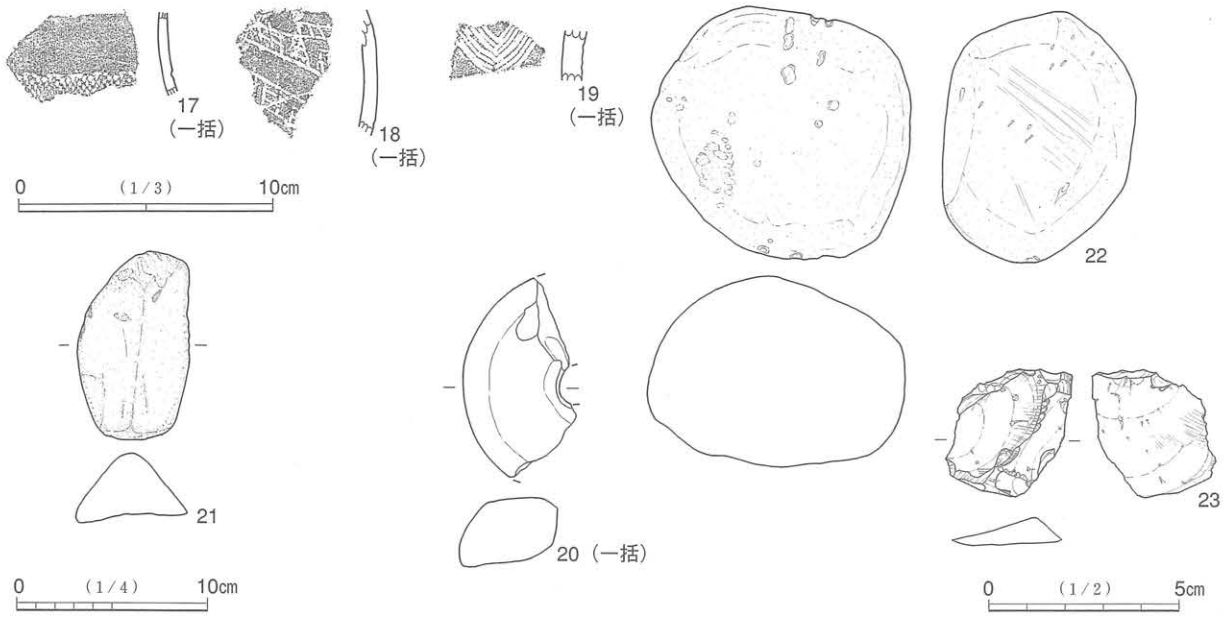
136住（第18・19図、第6・10・18・19表、図版12・43・55～58）

本跡は調査区中央部の緩やかな斜面上のG15-51から検出された、古墳時代前期の竪穴住居跡である。本跡は後世のピット状遺構（P9・P10・P11・P12・P21）と竪穴住居跡（122住）と重複し、なかでもP9・P11・122住は床面にまでも達している。このため不明瞭な点もあるが、全体的には遺存状態は良い方である。平面形は方形で、壁の形状は直で壁溝は122住に切られているため全周するかどうか不明である。規模は長軸方向に6.0m、幅5.8m、深さ0.5mを計測し、推定床面積は29.26㎡で、主軸方向はN-42°-Wを示す。遺存する床面は凹凸がなく平らで硬化面は特にみられなかった。主柱穴は4か所で深さはP1＝86cm、P2＝70cm、P3＝71cm、P4＝90cmを計測し、深くしっかりと掘り込まれている。他にも本跡に伴うピット（P5）が東側コーナー部で1か所検出されており、深さ24cmを測る。北東壁直下には平面形1m×1mの隅丸方形で深さ24cmの貯蔵穴が検出された。この貯蔵穴内からは遺物が出土した。炉は床面中央やや北西よりに検出され、長径55cm、短径35cmの楕円形で被熱による赤色化が広範囲にみられる。溜まった焼土及び炭化物と、被熱した地山ロームを合わせて約25cmにも及ぶ厚い焼土から、使用頻度の高さが窺える。遺構内での堆積土は大まかに2層に分離でき、比較的短期間に堆積したと思われる。覆土下層の壁周辺には焼土が検出されている。本跡廃棄後、そう期間のたたない埋没過程の凹みで火が使用されたと考えられる。出土遺物で図示できたものは土器・土製品・石製品を含めて23点である。

1～6は五領式の甕で、1・2は古相、3～6は新相の特徴を有している。1は東コーナーの下層から押し潰された状態で出土した。口縁部の一部を欠損するだけで遺存度は高い。口径19.3cm、底径6.5cm、器高24.5cm、最大径は胴部中位にあり24.7cmを計測する。底部は小さめで雑なヘラケズリによる凹凸がみ


P21
P1
P2
P11
P9
P4
P3
P5
P12
G15-53
1 2 2住
A
A'
B
B'
20.1m
0
(1/80)
4m
1 3 6住
1 黒色土　ローム粒少量混入
2 暗褐色土　ローム土混入
3 暗褐色土　ローム土・焼土粒混入
4 黒褐色土　焼土粒多量混入
5 暗褐色土　砂質土・ローム土混入
6 褐色土　ローム土混入
3（一括）
4（一括）
5
6
7（一括）
8
9
10
11
12（一括）
13
14
15（一括）
16（一括）
0
(1/4)
10cm

第18図　１３６住（１）



第19図　１３６住（２）

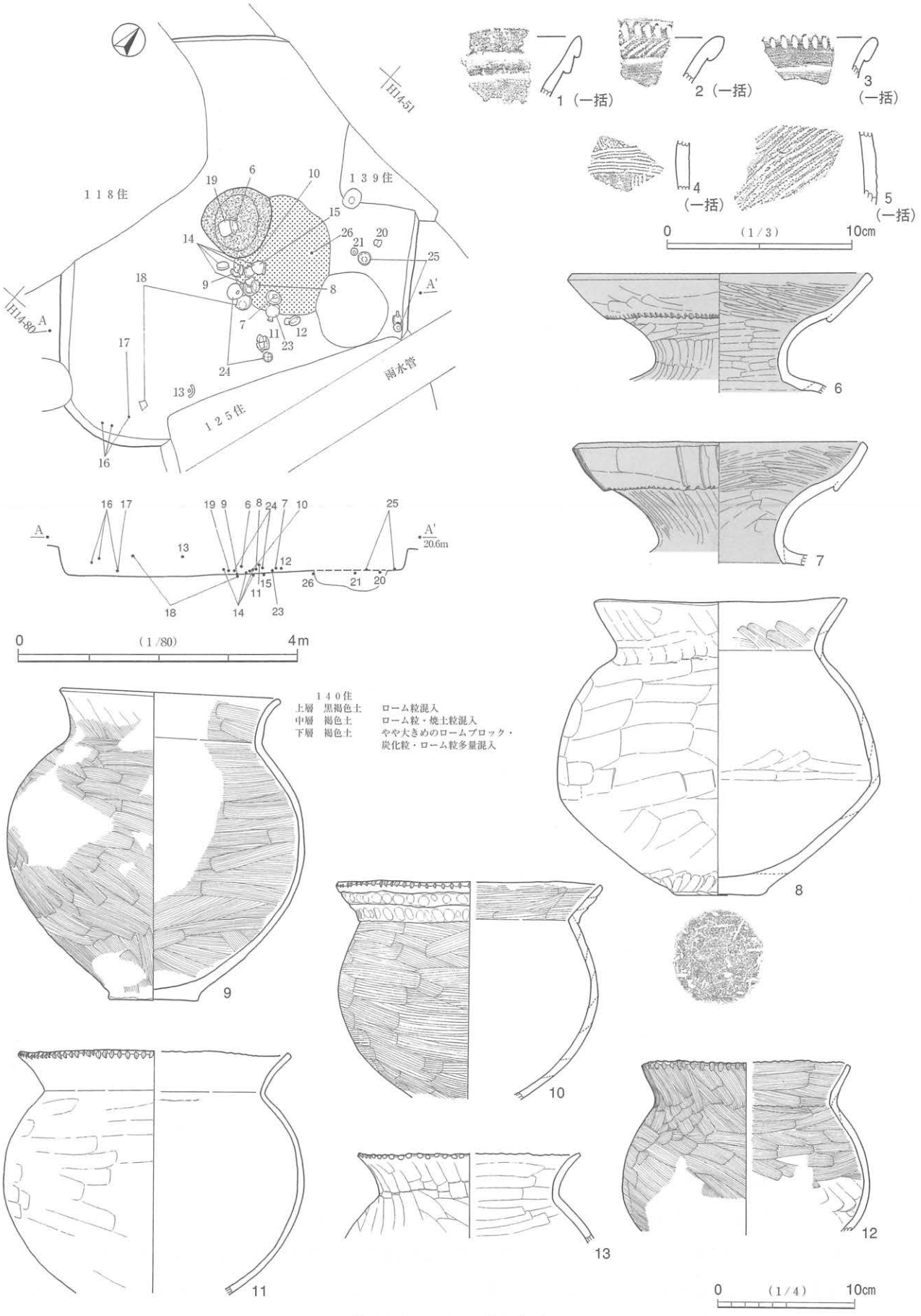
られ、正立させると若干安定感を欠く。内面は口縁部に横位のハケ胴部にナデ、外面は口縁部に縦位胴部は下半部まで横位又は斜位のハケそれ以下にナデが施されている。外面の大部分に煤が付着しているが、全体的な色調は赤褐色を呈している。胎土は密で細かな砂粒がやや多めに含まれている。２は遺存度20%前後で底部を欠損する。復元口径17.7cmを測り、胴部は１に比較すると球形に近く器厚はやや薄い。内面は丁寧なナデ、外面はやや雑なハケが施されている。３は覆土中層一括で取り上げた破片が接合したもので、復元口径17.0cmを測るが器高はさほど高くならないと思われる。内外面にはヘラケズリとヘラナデが雑に施され、粘土かすや輪積み痕が残る。内外面は全体的に灰褐色を呈し、部分的に厚く煤が付着している。４は覆土上層一括で取り上げた破片が接合した口縁部片で、復元口径13.7cmの小型である。調整はヘラケズリとヘラナデを主体とするが、外面の一部にハケ調整がみられる。内外面には厚く煤が付着している。５は貯蔵穴内から出土した小型の甕で、胴下半部から下は全欠するが遺存する部分はほぼ完形である。破断面は直線的で平らに削られ、正立させると安定感がありぐらつかず、器台として再利用された可能性がある。口径12.0cmを測り、長めの口縁部はあまり外反しない。内外面ともに丁寧なナデが施され、色調は赤彩が施されたかのような赤褐色を呈している。胎土は密で極めてきめ細かく、器厚は薄い。外面には部分的に煤が付着している。６は覆土下層から出土した底部片で、遺存度は極めて低い。胴部が大きく張り出す割には底部は小さくやや上げ底気味で、復元底径7.0cmを測る。７は覆土上・中層一括で取り上げた破片が接合したもので、器形的には小型壺か坩になると思われる。器厚は全体的に薄く、底部の径は3.0cm前後で非常に小さく上げ底気味である。胴部最大径は下半部にあり14.5cmを測る。外面の底部から胴部にかけての約半分は、煤が厚く付着しており黒色を呈している。調整はヘラナデとヘラケズリ主体で、胎土には中粒の赤色スコリアが多く含まれている。８は本跡中央の覆土上面から出土した甑の底部片である。内外面ともに煤が厚く付着し、色調は黒色を呈している。９～16は総じて五領式成立期の土器群である。９～12は高杯である。９は床直上から出土した高杯の半球状を呈した杯部片で、脚部は全欠するものの遺存度は高い。内底から口縁端部までの内高は6.2cm、口径11.8cmを測る。内外面ともに丁寧なミガキが施され緻密な調整が行われている。内外面は煤が厚く付着し、特に内面は全面に黒色処理を施したよう

な灰褐色を呈している。胎土には長石とスコリアが多めに含まれているが、極めて密といえる。10～12は覆土下層から出土した脚部片である。10・11は裾が大きく広がる椀形高杯と思われる。10は外面に丁寧な縦位のヘラミガキ後赤彩、内面に横位のハケが施され、三方に大きめの透し孔が配されている。11も同様のタイプと思われるが遺存状態があまりよくなく、外面赤彩については明確に確認できない。12はやや小型で、外面に縦位のヘラミガキ、内面に横位のヘラナデが施され、三方に透し孔が配される。13・14は小型器台である。13は貯蔵穴内から出土し、外面に丁寧な縦位のヘラケズリ、内面に雑な横位のナデが施されている。色調は赤彩したかのようなにぶい赤褐色を呈し、二方に楕円形の透し孔が配されている。14は覆土上層から出土した受部片である。胎土・焼成・色調ともに13に近似している。15はミニチュアの高杯片で、色調は全体的に黒っぽい。16は覆土上層一括で取り上げた脚部を全欠する異形器台片で、二次被熱のため内外面ともに器面の荒れが著しい。17～19は印手式弥生土器の甕の頸部及び胴部片で、いずれも覆土上層一括で取り上げたものである。17は頸部無文帯下に附加条縄文、18は沈線文、19は櫛描三角文がそれぞれ施されている。20は覆土上層一括で取り上げた土製紡錘車で、約２／３を欠損する。21～23は石製品である。21は覆土下層から出土した砂岩質の敲石の破片で、約１／２を欠損する。22は覆土下層から出土した白色系の軽石で、長さ6.7cm、幅68cm、厚50cm、重量40.46ｇである。23は覆土上層から出土した黒曜石の剥片で、重さ6.92ｇを量る。

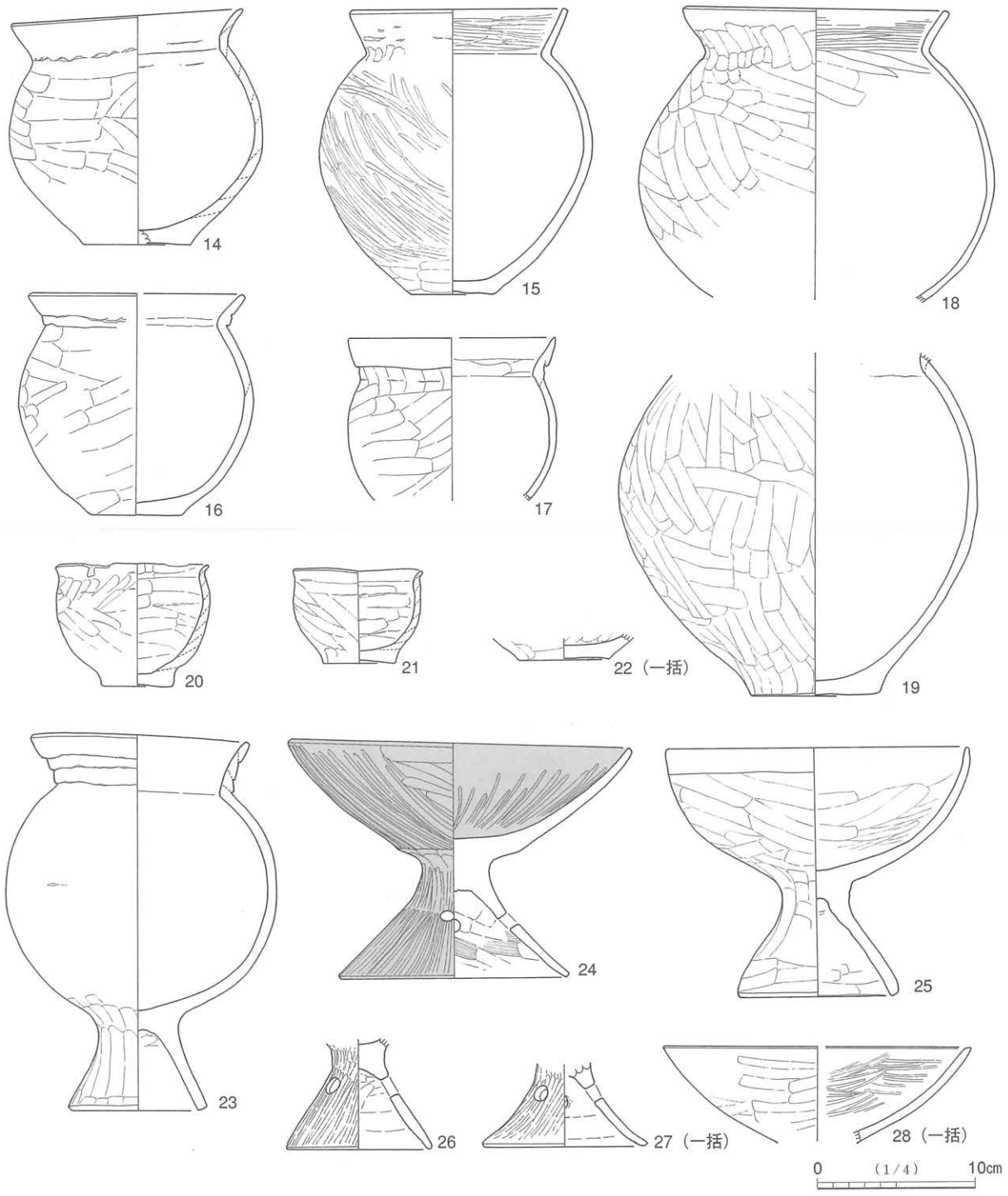
１４０住（第20・21図、第６・10表、図版13・45～47）

本住居跡は覆土上層から平安時代の土師器を多く出土したため、当初は平安時代に帰属する竪穴住居跡118住として調査を開始した。その後重複住居とわかり新たに140住の遺構番号を付し、遺物も区別して取り上げた。結果、住居跡３軒と中世の溝１条との重複が確認され、それらの遺構に床面・壁の大部分が切られていることが分かった。また、辛うじて残存する床面上から比較的遺存状態の良好な遺物が集中して出土し、古墳時代前期初頭に属する住居跡であることが分かった。本跡はグリッド番号では調査区北よりのH14-60から検出され遺構の遺存状態は極めて悪いが、平面形は方形であると思われる。壁の形状は急で壁溝はない。規模は長軸方向に6.0m、幅5.1m、深さ0.4mを計測し、推定床面積は26.79㎡で、主軸方向はN-38°-Wを示す。残存する床面は平らで硬化面は特にみられず、床面のほぼ中央部に炉跡が検出された。炉の平面形は楕円形で焼土・炭化物が厚く堆積し、火床面は激しく被熱しており固いブロック状を呈していた。本跡の主柱穴は未検出で、炉の東側床面には焼土・炭化材が厚く堆積していた。また、覆土中層から下層にかけて焼土粒・炭化粒が多く含まれており、焼失住居の可能性もある。出土遺物で図示できたものは28点である。

１～５はいずれも覆土上層一括で取り上げた弥生土器である。１は久ヶ原系の甕の口縁部片で口縁下には二段の輪積痕が残る。色調は灰褐色を呈し、胎土にやや大きめの赤色スコリアを多く含む。器面は内外面ともに劣化し、煤が付着している。２～５は印手式の甕である。２・３は口縁部片で、いずれも肥厚帯端部は附加条縄文原体を押圧し波状を呈している。２は肥厚帯端部に附加条縄文を施すが、３は無文である。４は甕の頸部片で、４条単位の櫛状工具による直線文及び鋸歯状文が施されている。５は胴部片で附加条縄文が施されている。６・７は五領式直前もしくは初頭に位置づけられる土器である。６は炉中央から若干浮いた状態で出土した壺形土器の口縁部である。口縁部から肩部までをほぼ100%完存し、肩部破断面は凹凸がないように調整されており、おそらく器台として再利用したと思われる。折返し口縁下端部に縄文原体による押圧波状文が施され、内面は頸部まで、外面は遺存する全面に赤彩が施されている。口


H14-51
H14-80
118住
139住
125住
雨水管
A
A'
20.6m
1（一括）
2（一括）
3（一括）
4（一括）
5（一括）
0 (1/3) 10cm
6
7
8
9
10
11
12
13
0 (1/80) 4m
0 (1/4) 10cm
140住
上層 黒褐色土 ローム粒混入
中層 褐色土 ローム粒・焼土粒混入
下層 褐色土 やや大きめのロームブロック・炭化粒・ローム粒多量混入

第20図　１４０住（１）



第21図　１４０住（２）

径は21.8cmで、胴部は球形に大きく膨らむ器形を呈すと思われる。７は覆土下層から出土した壺形土器の口縁部である。折返しの口縁部から頸部にかけて遺存し、６と同様に器台として再利用されたものと思われる。折返し口縁下端部にヘラ状工具による押圧波状文が施され、肥厚帯部には棒状浮文を簡素化したとみられる３条１組とする沈線が５か所に認められる。内面は頸部まで、外面は遺存する全面に赤彩が施されているが、器面は１より摩耗している。口径は21.8cmで、胴部は球形に大きく膨らむ器形を呈すと思わ

れる。8～28は土師器で、いずれも古墳時代古相の特徴を有している。8は遺物が密集する地点のほぼ中央で、床面から若干浮いた状態で出土した甕である。完形に近く口径18.1cm、底径6.4cm、器高21.6cmを計測し、最大径は胴下半にあり23.5cmで下膨らみ気味である。器面は二次被熱のため劣化が目立ち、胴上半部には煤が厚く付着している。色調は灰褐色及び褐灰色を呈し、胎土には細かな砂粒とスコリアが多めに含まれる。調整は内面にはナデを基調にしているが、口縁部にハケ、胴部中位に一部ヘラケズリ、外面には手持ちヘラケズリが胴部全面に施されている。底部外面には繊維状の圧痕が認められる。9は炉脇の床面出土で、内外面ハケ調整の甕である。遺存度は高いが、二次被熱のためやや劣化している。煮炊きの痕跡が明瞭に残っており、胴部外面には肩部から底部にかけて煤が厚く付着し、内面下半部には炭化物が付着している。口径15.8cm、底径6.4cm、器高22.8cmを計測し、最大径は胴中位にあり21.4cmである。胎土には大粒の赤色スコリアが多く含まれる。10～13は五領式成立前後の土器群で、初期的な「く」の字口縁甕である。10は床面から出土した破片が接合したもので、約30%を遺存する。器形的には台付甕の可能性がある。口縁部はヘラ状工具による押圧が施され波状を呈し、頸部は輪積み痕が残り指頭による連続押圧が2段にわたり巡らされる。頸部内面及び外面胴部にはハケ調整が施されている。色調は全体的に褐色を呈し、胎土にはやや粒の大きい砂粒が多く含まれる。外面には部分的に煤が付着している。11～13は覆土の中・下層から出土した破片がそれぞれ接合したもので、遺存するのは半分以下で遺存度はそれほど高くはない。口縁部は棒状工具により押圧され波状を呈している。いずれも底部は全欠し、口縁部は11・12が100%、13が50%の遺存である。11は本跡を切る平安時代の住居跡覆土内出土の破片と遺構間接合をした。口径は19.4cmと広めで胴部は球形に近い器形である。全体的に灰色を呈し、胎土には粒の大きめの黒色スコリアが多く含まれる。器面はほぼ全面にヘラによるケズリとナデ調整が施されている。二次被熱のため外面は若干の剥離がみられ、器面の半分以上には厚く煤が付着している。12の作りは若干小振りで、口縁部はやや緩やかな「く」の字を呈している。色調は灰褐色を呈し、胎土には砂粒と赤色スコリアがやや多めに含まれる。遺存する外面の全面と内面の口縁部から胴部中位まで、ハケ調整が密に施されている。外面は二次被熱のため口縁部を主体に煤が付着している。13は口縁部が若干反り気味の「く」の字を呈し、肩部まで遺存する。色調は全体的に明るい褐色を呈し、胎土には細かな赤色及び黒色のスコリアが多めに含まれる。内外面ともにヘラの当たり痕が目立ちやや雑な調整が施されている。14～19はいずれも甕で遺存度は高く、完形に近いものもある。22も甕であるが底部片のみである。14は口径14.5cm、底径6.3cm、器高15.0cmと小振りである。内外面ともに摩耗が顕著で、特に内面は器面の斑状剥離が激しく、若干の歪みも認められる。色調はにぶい褐色を呈し、胎土には大きめの黒色及び赤色スコリアが多量に含まれる。外面は手持ちヘラケズリが施されている。15は口径13.4cm、底径5.4cm、器高18.2cmと小振りで、口縁部を一部欠損する以外はほぼ完形である。二次被熱のため外面は全面に厚く煤が付着し、内面は器面の斑状剥離が激しい。色調は内外面ともに黒っぽく、胎土には微量の海綿骨針が含まれている。調整は内面口縁部と外面胴部にヘラミガキが施されている。16は口径13.3cm、底径5.8cm、器高14.1cmと小振りで、口縁部には2条の輪積み痕が残る。二次被熱のため外面は劣化が著しく、部分的に煤が付着している。色調は内外面ともに褐色ないし赤褐色を呈し、胎土には砂粒と赤色スコリアが多めに含まれている。調整はヘラケズリを基調に施されている。17は底部を欠損する口径13.3cmの小型甕で、口縁部には2条の輪積み痕が残る。外面は器面の剥離が顕著で遺存状態は悪い。色調は赤彩を施したような赤褐色を呈し、胎土には細かな砂粒が多めに含まれる。調整は内面にヘラナデ、外面にヘラケズリが施されている。18は床面出土と

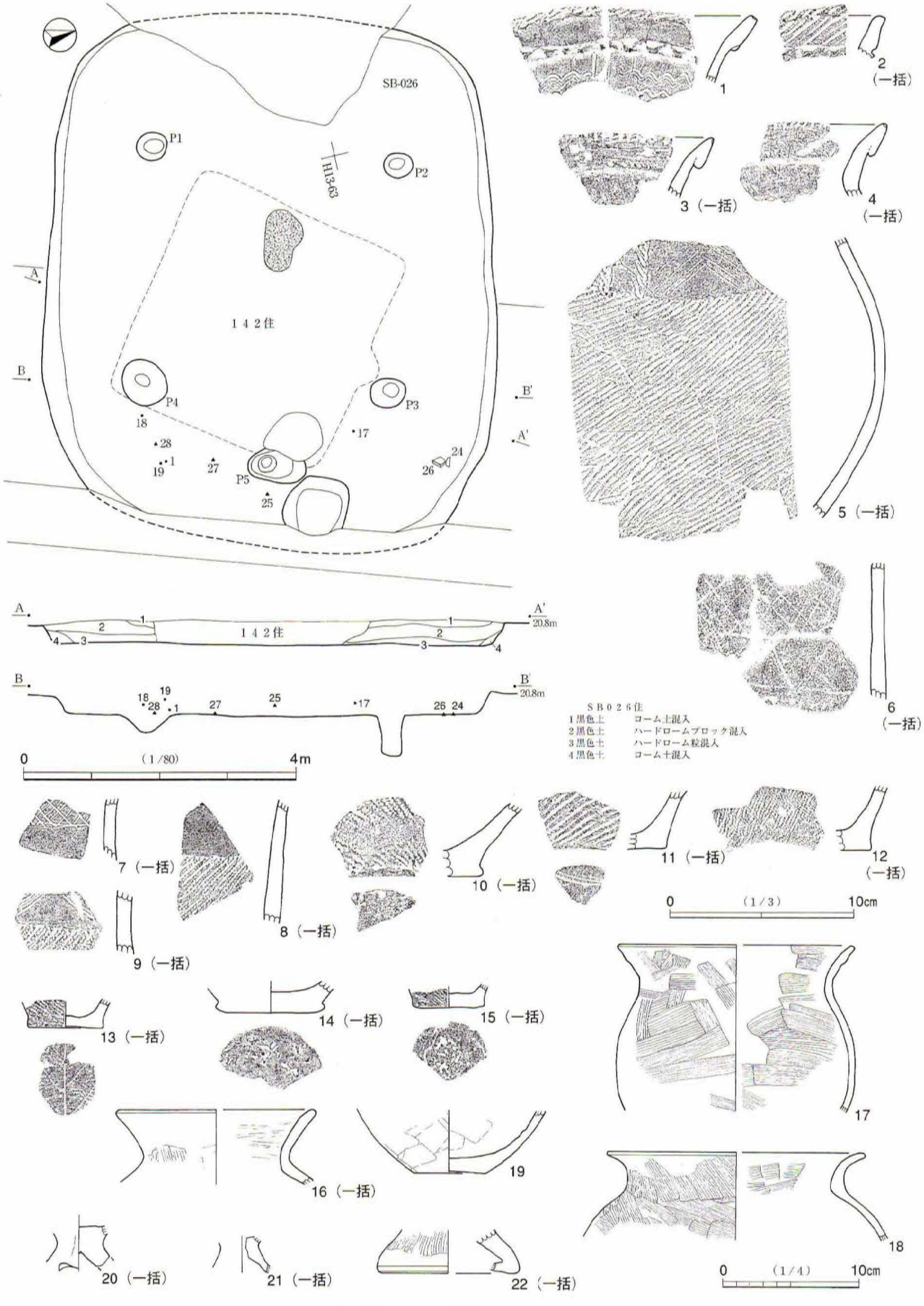
約２ｍ離れた覆土中層出土の破片が接合したもので、底部は全欠である。口径16.4cm、最大径は胴部にあり26.0cmである。調整はヘラケズリを基調としているが雑で、外面にはヘラの当たり痕が目立ち粘土の削り塊がそのまま残る。内面は斑状の剥離が顕著である。色調は内外面ともに褐色ないし赤褐色を呈し、胎土には細かな砂粒と赤色スコリアが多めに含まれている。19は炉中央から若干浮いた状態で出土し、口縁部を全欠する以外は完全に遺存する。底径は6.4cm、残存する器高は21.7cm、胴部最大径はやや上位にあり22.7cmで、器厚は厚めで重量感がある。煮炊きの痕跡が明瞭に残っており、二次被熱のため胴部外面には肩部から底部にかけて煤が厚く付着し、内面下半部には炭化物が付着している。また、内面上半部は斑状剥離が激しく、煮炊きに使用した頻度は高いと思われる。欠損する破断面は丸味をもち直線的に研磨されており、煤等は全く付着していない。このことは意識的に口縁部を削り取り、その後は煮炊きには使用せず貯蔵用の土器として再利用したものと考えられる。胎土には大粒の赤色スコリアが多く含まれる。20・21はともに近接する床面から出土した、五領式成立前後によくみられるヘラナデを基調とする小型鉢である。口縁部が短く外反し、端部が尖り気味になるのが特徴的である。いずれも内外面に煤が付着し色調は暗褐色で、胎土には同様の鉱物を含んでいる。23は遺物密集か所やや東よりの床面から出土した五領式の台付甕である。口縁部の一部を欠損する以外はほぼ完形で、口径13.5cm、裾径8.8cm、器高24.0cmを計測する。口縁部は緩やかに外反し端部は尖り気味で、頸部には３段の指頭により軽く押圧された輪積み痕が残る。二次被熱のため胴部外面には中位から口縁部内面にかけて煤が厚く付着し、胴部下半部から脚部にかけては赤褐色に変色している。また、内面下半部は薄く炭化物が付着し、上半部は斑状剥離が激しい。煮炊きに使用した頻度は高いと思われる。24～28は五領式成立前後の高杯である。24は杯部と脚部が約１ｍほど離れた床面から出土した東海系開脚高杯で裾部を一部欠損する以外はほぼ完形で、口径21.4cm、裾径14.8cm、器高15.2cmを計測する。器面は入念な縦ミガキが施され、脚内面を除く全面に赤彩が施されている。杯部内面は斑状剥離が顕著で中央にかけて厚く煤が付着する。脚部やや上位には透かし孔が４つ認められる。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土には赤色スコリアが多めに含まれる。25は東壁に近接する床面から杯部と脚部が約1.2ｍほど離れて出土した椀形高杯である。脚部を一部欠損するがほぼ完形で、口径18.9cm、裾径9.4cm、器高15.8cmを計測する。器面はヘラケズリ・ヘラナデ調整が施され、杯内底は斑状剥離が顕著で、外面は脚部全体及び杯部中位まで煤が付着する。裾部は開脚せず裾径は小さくまとまる。色調は全体的ににぶい褐色を呈し、胎土には細かな砂粒と赤色スコリアが多めに含まれる。26は床面から出土した高杯の脚部である。杯部は全欠するが脚部は完存し透かし孔が３か所にある。裾径は9.0cmとやや小型で、あまり開脚していない。器面の調整は内面にヘラナデ、外面に丁寧なヘラミガキが施されている。色調は赤彩が施されているかのような赤褐色を呈し、胎土には海綿骨針が微量含まれる。27は覆土上層一括で取り上げた高杯の脚部である。透かし孔は３か所にあり、裾部は開脚気味で裾径は9.9cmとやや小型である。外面は摩耗が顕著で辛うじてヘラケズリが残り、色調はにぶい褐色、胎土には黒色スコリアがやや多めに含まれる。28は覆土下層一括で取り上げた在来系の高杯の杯部片である。内外面ともに煤が厚く付着し、色調は灰褐色を呈し胎土には細かな砂粒と赤色スコリアが多く含まれている。

ＳＢ０２６住（第22・23図、第６・10・18・19表、図版13・48・49・55～58）

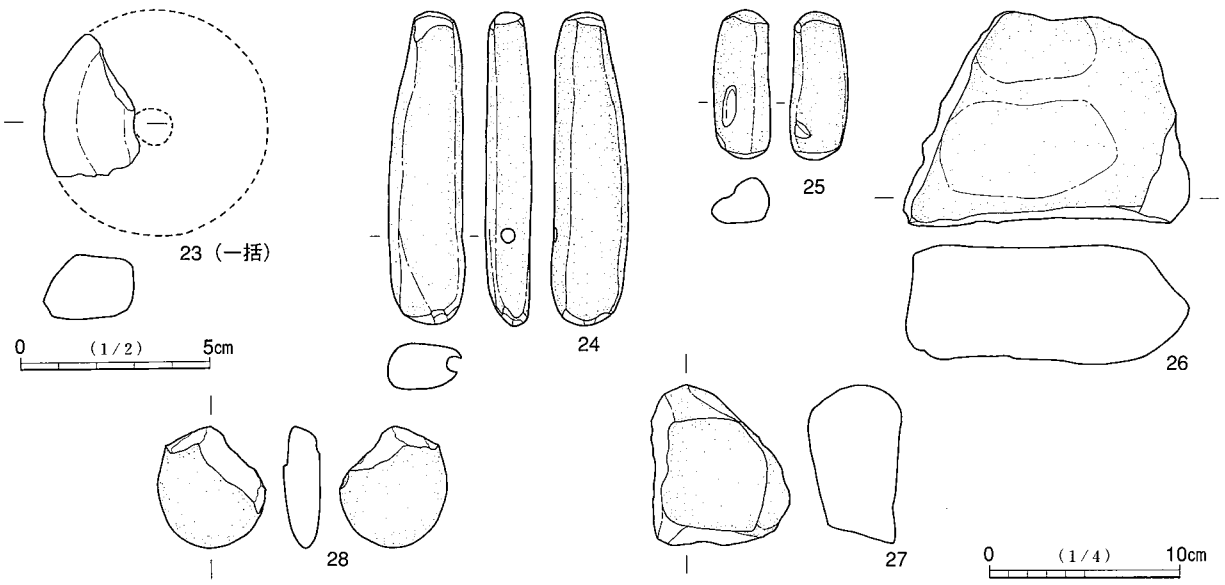
本住居跡は平成10年度の調査で西側約半分を検出し、既に調査報告されている。東側部分については現道下のため平成15年度の調査を待つこととなり、今回の調査報告となった。遺構実測図は前回調査分も付け加え、図面上で全体の復元を図った。よって遺構番号は前回報告の番号を踏襲することとした。本跡は

グリッド番号では調査区北のH13-61から検出された、弥生時代後期に属する住居跡である。床面同一レベルで平安時代の住居跡がすっぽりと重複するが、遺構の遺存状態は比較的良い方である。平面形は隅丸長方形を呈し、壁の形状は緩やかで壁溝はない。規模は長軸方向に7.8m、幅6.5m、深さ0.3mを計測し、推定床面積は41.57㎡で、主軸方向はN-77°-Wを示す。床面は平らで硬化面は特にみられず、床面の中央やや北西よりに炉跡が検出された。長径92cm、短径58cmの不整楕円形で被熱による赤色化がみられる。溜まった焼土と、被熱した地山ロームを合わせて20cmにも及ぶ厚い焼土から、使用頻度の高さが窺われる。主柱穴は4か所で、P1＝50cm、P2＝58cm、P3＝57cm、P4＝44cmとしっかり掘り込まれている。南東壁中央よりにはP5の出入り口ピットが認められ、深さ19cmである。南東壁下には平面形隅丸方形で深さ28cmの貯蔵穴が検出され、床面はほとんど凹凸がなく平らであった。遺構内での堆積土は142住に切られているため正確ではないがほぼ3層に分離でき、中央部に流れ込むような自然堆積の状態を示している。今回の調査での出土遺物で図示できたものは土器・土製品・石製品を含めて27点で、前回の報告と内容的にはほぼ同様である。

1～15は印手式の甕片で、1以外は覆土一括で取り上げたものである。1～4は折返し口縁部片である。1は床面出土の破片と覆土下層一括で取り上げた破片が接合した。肥厚帯端部に附加条縄文が施され、無文の肥厚帯部を挟み、肥厚帯下部に波状隆帯が貼付けられる。頸部には3本単位の櫛描波状文がみられる。色調はにぶい褐色を呈し、胎土は密で石英がやや多めに含まれる。2は肥厚帯端部から下端部に単節縄文が施され、肥厚帯下部に波状隆帯が貼付けられる。外面は煤が付着し赤灰色を呈し、胎土は密で石英がやや多めに含まれる。3・4は口縁端部に爪によるとみられる細かい押圧による刻みが施される。3は器面には部分的に横位の櫛描文がみられる。色調は内面に煤が付着し褐灰色を呈し、胎土はやや粗で砂粒が多めに含まれる。4は内外面に煤が付着し灰褐色を呈し、胎土はやや粗で赤色スコリアと石英がやや多めに含まれる。5～9は頸部から胴部にかけて遺存する。5は遺存度約30%で、頸部にはハケ調整後縄文原体を縦位に押圧してできた区画内に、ほぼ直角に近い4本単位の沈線文が描かれている。胴部は全面に附加条縄文が施されていると思われる。器面は二次被熱を受け若干劣化し、外面胴上半部には帯状に煤が厚く付着し、この部分だけ黒光りを呈している。色調は全体的には灰褐色を呈し、胎土には金雲母が多く含まれる。6・7は頸部片で上半部は網目状の沈線文が施され、下半部は無文である。6内外面は摩耗が顕著で、破断面にまで及び凹凸はなく丸味を帯びている。7の網目状沈線文は細かく、色調はにぶい褐色を呈し、胎土は密で細かな雲母がやや多めに含まれる。8は無文の頸部から附加条縄文が施される胴部にかけての破片で、頸部には赤彩が薄く残る。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土は密で細かな雲母がやや多めに含まれる。9は頸部に櫛描鋸歯状文を、その直下には附加条縄文が施されている。外面は煤が付着しにぶい灰褐色を呈し,胎土は砂粒が多めに含まれる。10～15は底部片である。14以外は底部まで縄文が施文される。10は単節縄文が施され、底外にはそれぞれ木葉痕らしき圧痕がみられる。色調は全体的に赤褐色を呈し、胎土は密で若干砂粒が多めに含まれる。11～13は附加条縄文が施され、11・13は底外に木葉痕がみられる。色調は全体的に明るい褐色を呈し、胎土には砂粒が多めに含まれる。14は胴部がやや膨らみ気味の形状と思われる。底外には4粒の籾の圧痕がみられる。底内にはヘラの当たり痕が放射状に残る。色調は全体的ににぶい褐色を呈し、胎土はやや粗で赤色スコリアが多く含まれる。15は胴部があまり膨らまない形状と思われる。底外は籾の圧痕がみられ、煤が付着している。色調は灰褐色を呈し、胎土は密で長石が若干多めに含まれる。16～22は土師器である。16は壺の口縁部片で、口縁部を1／2遺存する。復元口



第22図　ＳＢ０２６住（１）



第23図　ＳＢ０２６住（２）

径は14.2cmである。器面はナデを主体にし、外面に一部ハケ調整が認められる。色調は暗赤褐色を呈し、胎土は密でやや大きめの砂粒が多く含まれる。17は覆土中層出土の甕で胴下半部から底部を欠損する。器面は摩耗が顕著なため、内外面ともにハケ調整が辛うじてみられる程度である。復元口径は17.0cmで、色調はにぶい橙色を呈し、胎土は粗で大きめの赤色スコリアと黒色スコリアが多く含まれる。18は覆土中層出土の甕の口縁部片で、二次被熱を受け内外面ともに部分的に煤が厚く付着し、外面には一部赤色化した部分が認められる。内外面にはハケ調整が施され、復元口径は18.7cmを測る。色調はにぶい褐色を呈し、胎土は密でやや大きめの赤色スコリアが多く含まれる。19は覆土上層出土の甕の底部片で、底部周辺までほぼ100%遺存する。二次被熱を受け外面は黒光りをする程厚く煤が付着している。内外面にはヘラケズリ及びヘラナデが主体に施され、底径は小さく5.2cmを測る。胎土は密でやや大きめの赤色スコリアが微量含まれる。20は高杯のくびれ部片で、破断面は著しく劣化している。21は器台で全体的に摩耗が激しく、脚部内面には煤が付着している。22は異形器台の脚部片で外面ハケ調整が施されている。

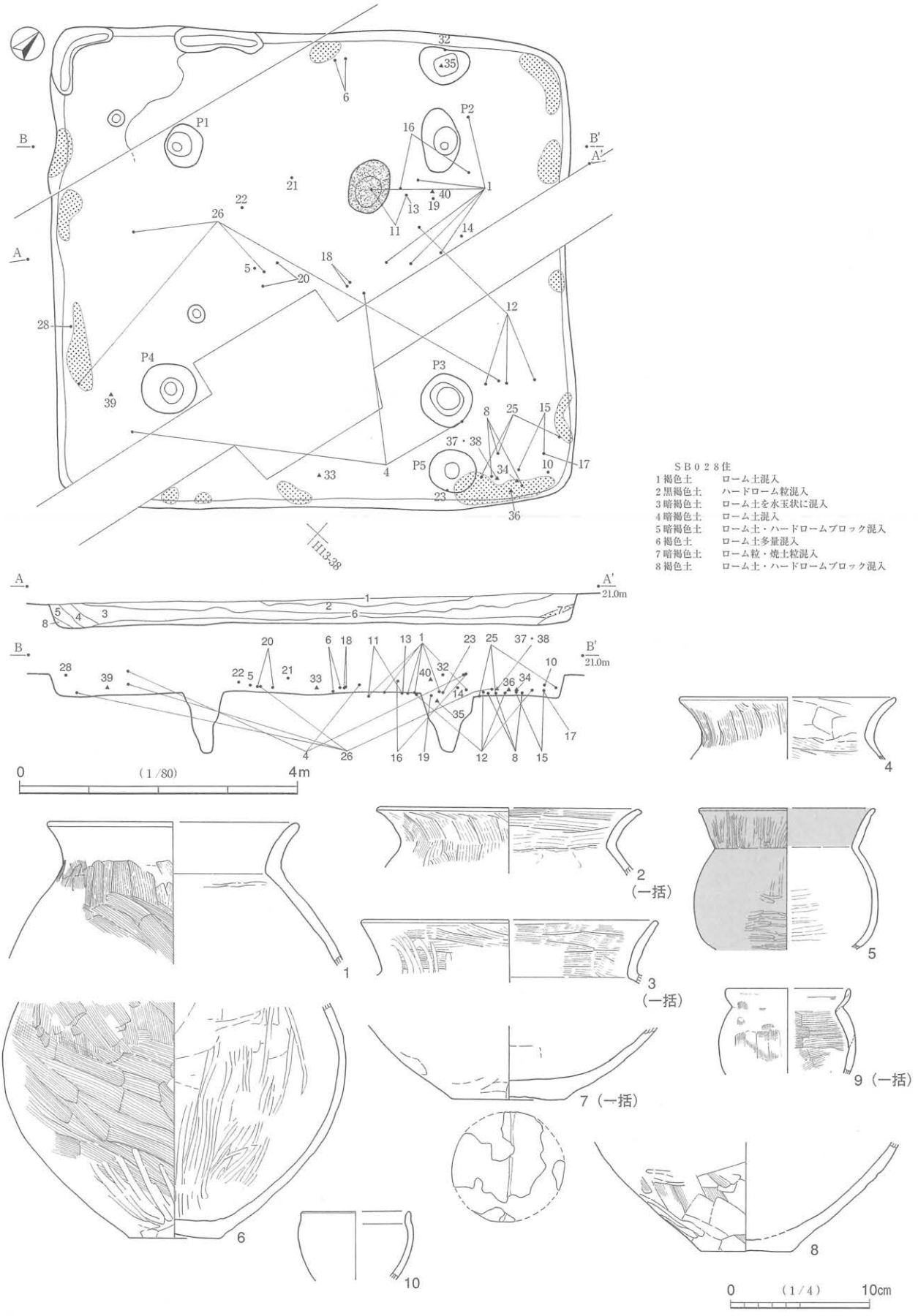
その他の遺物としては、土製品１点、石製品５点が出土している。23は覆土上層一括で取り上げた土製紡錘車の破片で、約１／４を遺存する。断面形は斜辺がやや丸味を帯びる台形を呈している。24～28は石製品である。24・25はいずれも砂岩の磨石で完存している。24は穿孔があり床面から、25は覆土中層から出土し、いずれも上・下端部に明瞭な磨痕が残っている。26・27は砂岩の石皿片で、いずれも床面から出土した。28は床面から石英の礫片で、使用痕等は認められない。

ＳＢ０２８住（第24～26図、第６・10・18・19表、図版14・49・50・55～58）

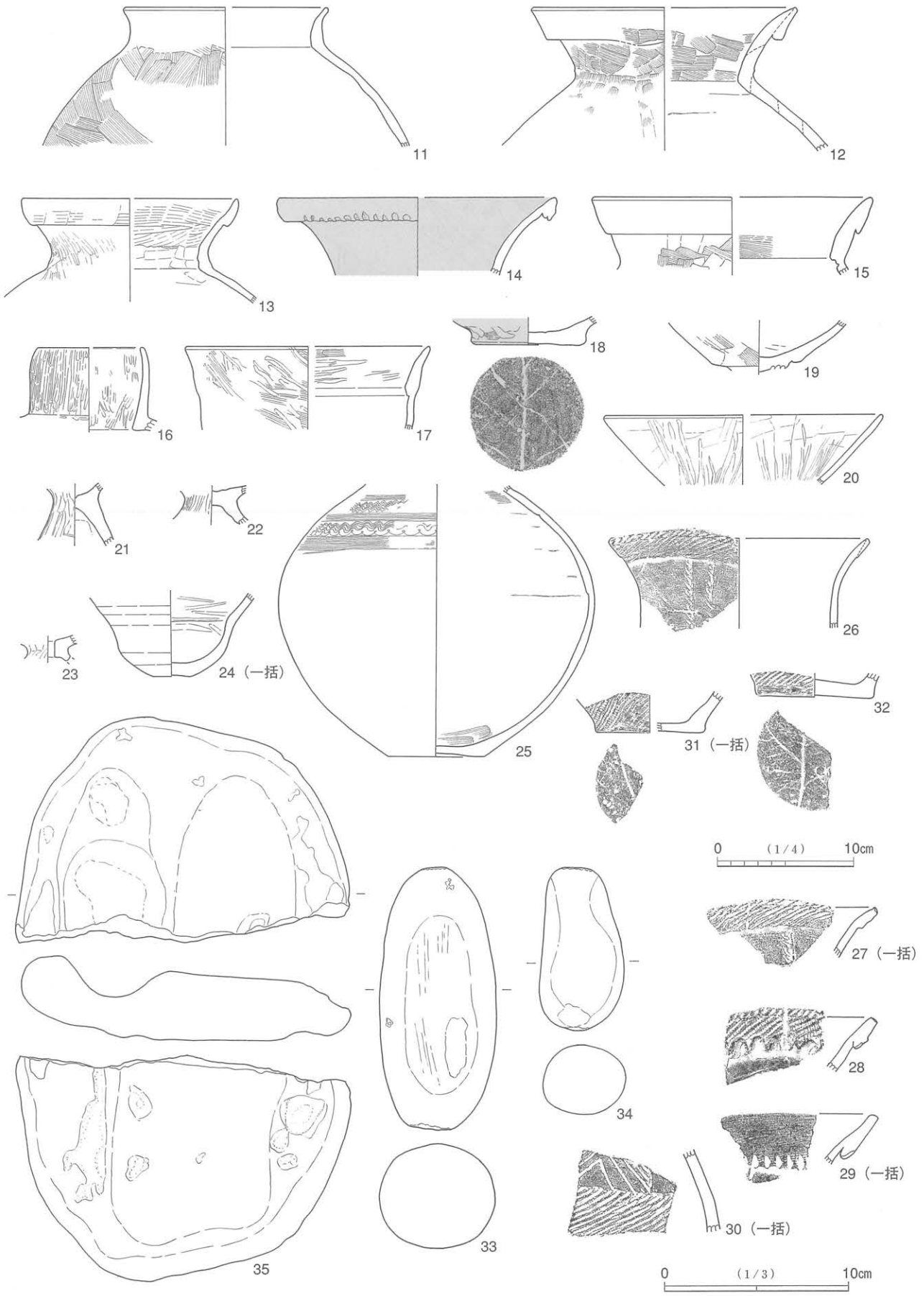
本住居跡は平成10年度の調査で西側の一部を検出し、既に調査報告されている。既報告では一部の調査にとどまったため、帰属時期が平安時代の可能性もあると含みを残したが、今回の調査でほぼ完掘した結果古墳時代前期初頭に帰属することが判明した。本跡は今回の調査区最北端部に位置し、グリッドではH13-16にあたる。ほとんど現道下にある雨水管により南北に破壊された状態で検出された。遺構の遺存状態は破壊されていない部分では比較的良い方である。平面形は方形を呈し、壁の形状は急で壁溝は前回の調

査で、西側コーナー部分と北西壁下に長さ約1.3m、深さ6cm～10cmで2か所検出されている。規模は長軸方向が7.4m、幅6.9m、深さ0.4mを計測し、推定床面積は47.29㎡で、主軸方向はN-39°-Wを示す。今回調査区内検出の竪穴住居跡では最大規模の床面積を誇る。床面の硬化面は前回の調査ではP1付近に若干認められていたが、今回の調査では特にみられなかった。床面の中央から北側コーナーよりに炉跡が検出され、長径80cm、短径58cmの楕円形で被熱による赤色化がみられる。溜まった焼土と、被熱した地山ロームを合わせて約20cmにも及ぶ厚い焼土から、使用頻度の高さが窺われる。主柱穴は4か所で、P1＝87cm、P2＝77cm、P3＝97cm、P4＝46cmとP4はやや浅めであるが、他は深くしっかり掘り込まれている。南東壁下の東コーナーよりにはP5の貯蔵穴が検出された。長径70cm、短径60cmの円形に近い楕円形を呈し、深さ75cmを測る。床面はほとんど凹凸がなく平らであるが、北側コーナーに近接する北西壁下には平面形が楕円形の長径70cm、短径50cm、深さ10cm前後の凹みがみられる。この底面から石皿が出土しているので、石皿設置のための凹みと思われる。遺構内での堆積土はほぼ4層に分離でき、中央部に流れ込むような自然堆積の状態を示している。前回同様に本跡覆土中層の壁付近には焼土が検出されており、埋没過程の凹みで火が使用されたと考えられる。今回の調査での出土遺物で図示できたものは土器・土製品・石製品を含めて41点である。今回の調査では出土土器は既報告よりも多く、古墳時代前期と弥生時代が主体であった。

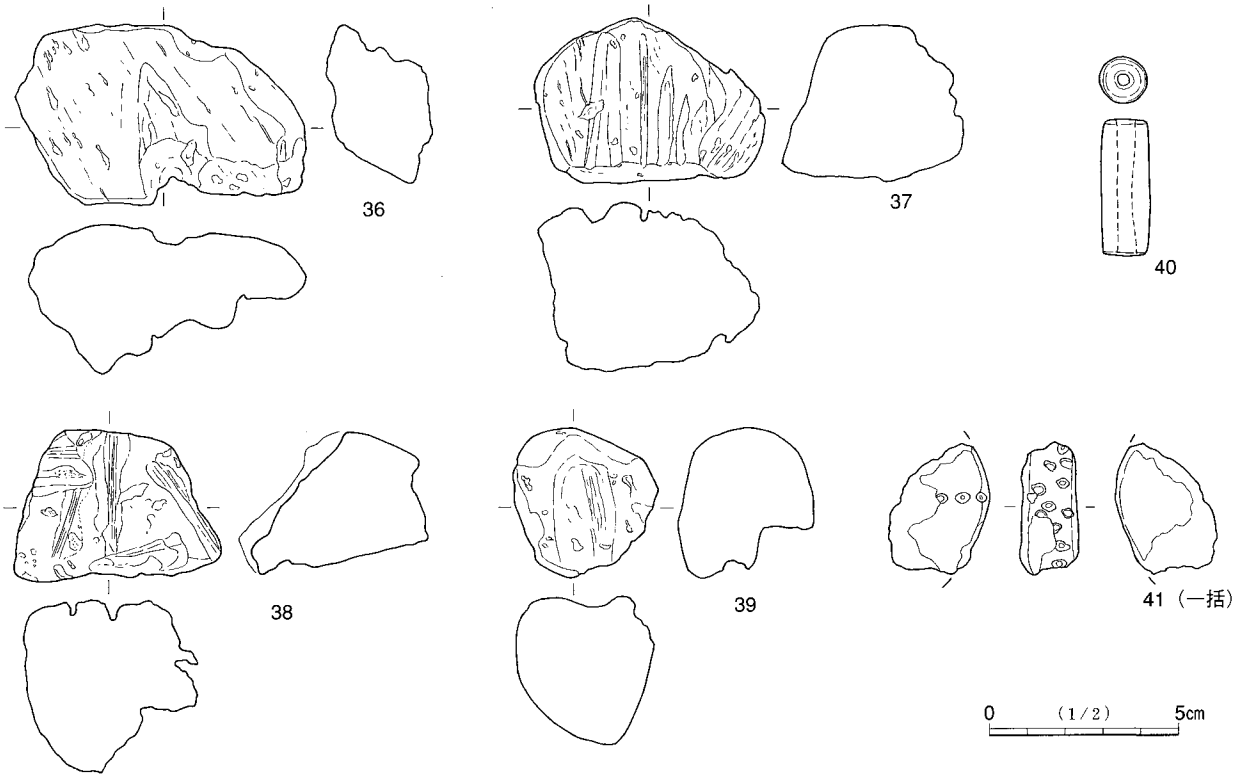
1～24は土師器で、いずれも古墳時代古相の特徴を有している。1～10は甕片で、9・10は小型である。1は炉東側の床面から出土した破片数点が接合したもので、口縁部から胴部上位にかけて遺存する。緩やかな「く」の字に屈曲する頸部は指頭による押圧成形後、内面にナデ、外面には頸部を除いてハケ調整が施される。復元口径は17.8cmを測り、色調はにぶい褐色を呈す。胎土は密で中粒の赤色スコリアがやや多めに含まれる。2は覆土上・中層一括で取り上げた破片が接合した口縁部片で、約1／3周遺存する典型的な「く」の字口縁甕である。復元口径は18.7cmを測り、内面は横位、外面は縦位のハケ調整が施される。色調は全体的に煤が付着しており黒っぽく、胎土は密で長石がやや多く含まれる。3は覆土上層一括で取り上げた口縁部片で、約1／3周遺存する「く」の字口縁甕と思われる。辛うじて遺存する頸部から察すると、胴部が球状に大きく膨らむ可能性もある。復元口径は20.1cmを測り、内外面ともに横位のハケ調整が施される。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土は密である。4は覆土上・中層から出土した破片が接合した口縁部片で、約2／3周遺存する。「く」の字に屈曲する頸部は指頭による押圧成形後、内面にナデ及びハケ、外面には頸部まで縦位のハケ調整が施される。口径は15.4cmを測り、色調は内面赤褐色、外面黒褐色を呈し、胎土は密で赤色スコリアが少量含まれる。5は覆土下層から出土したやや小型の甕で、赤彩が外面全域及び口縁内部に施されている。復元口径は12.3cm、復元最大径は胴部中位にあり13.2cmを測る。内面は斑状剥離が顕著で外面は摩耗し若干残りが悪いが、内外面ともに緻密なヘラミガキが施されている。色調は暗赤褐色を呈し、胎土は密で長石がやや多く含まれる。6は北西壁下の床面及び下層から出土した破片が接合し、底部から胴部中位までの約1／2周を遺存する。復元底径は6.6cm、胴部最大径は中位にあり24.9cmを測る。器面は二次被熱を受け黒褐色を呈し、底内は特に剥離が顕著である。内面はヘラナデ・ヘラミガキがほぼ縦位に、外面は胴部下端に縦位のヘラミガキ、残りの胴部にはハケ調整が施されている。胎土は密で微量の海綿骨針が含まれる。7は覆土中・下層一括で取り上げた破片が接合した底部片で、底外には約2㎜幅の線状の凹みが認められる。底径は8.1cmを測り、内外面ともにヘラナデが施される。色調は内面は明赤褐色、外面は部分的に煤が付着し明褐色を呈し、胎土は密で微量の海綿骨針が含まれる。8は西側コーナー周辺の床面及び下層から出土した破片が接合し、底部から胴部下位までを遺存する。



第24図　ＳＢ０２８住（１）



第25図　ＳＢ０２８住（２）



第26図　ＳＢ０２８住（３）

底径は6.6cmを測る。器面は二次被熱を受け煤が付着し全体的に黒褐色を呈し、破断面の劣化は顕著である。内面はヘラナデがほぼ縦位に、外面は部分的にナデ・ミガキ・ハケ調整が施されている。胎土は密で微量の海綿骨針が含まれる。９・10は小型甕である。９は中・下層一括取り上げの破片が接合し、全体の遺存度は約20%である。内面に横位のハケ、外面には縦位のハケが施され、「く」の字屈曲の頸部には輪積み痕が残る。復元口径は8.6cmで、器面は二次被熱を受け煤が付着し全体的に黒褐色を呈し、破断面の劣化はやや顕著である。胎土はやや密で石英が含まれる。10は東側コーナー壁下の覆土中層から出土した。器面は摩耗が顕著で破断面も劣化しており、調整手法ははっきりしないが、ナデが主体であると思われる。色調は橙色で、胎土にはやや粒の大きい黒色スコリアが多めに含まれる。11～15は南関東系の特徴を有している壺群で、五領式直前もしくは初頭に位置付けられる。11は炉内及び炉周辺の床面から出土した破片が接合し、全体の10%程度を遺存する。口縁部は大きく膨らむ胴部から垂直気味に立ち上がる。器面は内外面ともに摩耗が顕著で、内面はナデを主体に外面はハケ調整が薄く認められる。色調は内面がにぶい褐色、外面が煤付着のため全体的に暗褐色を呈し、胎土は密で石英がやや多めに含まれる。12～15は折返し口縁をもつ壺形土器の口縁部片である。12は北東側壁よりの床面及び下層から出土した破片が接合した。外面は若干摩耗しており、折返し口縁肥厚帯部下位から頸部にかけては横位、胴部上位には縦位のハケ調整が薄くみられる。復元口径は19.4cmを測り、内面「く」の字屈曲の頸部は明確な屈曲ラインが描けるほど鋭く突き出る。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土は密である。13は炉東脇の床面から出土した。内外面ともに摩耗が激しく、折返し口縁肥厚帯下端部の段差もはっきりせず、内外面ともにハケ調整が辛うじて確認できる程度である。復元口径は15.8cmを測り、頸部内面は一度垂直に立ち上がり、平らな面を残しながら口縁部へと外反する。色調はにぶい褐色を呈し、胎土は粗で多量に含まれる砂粒と赤色スコリアが粒状に浮き上がってザラザラしている。14は炉東の床直上から出土した。内外面ともに摩耗が激しく、器面

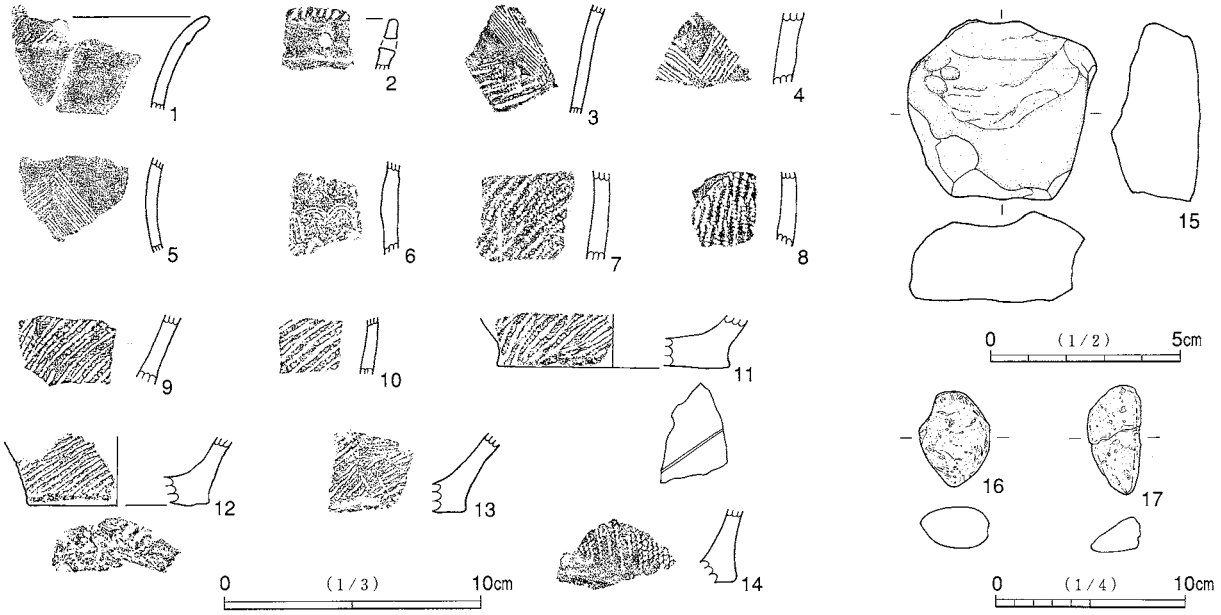
の剥離が著しい。器面が残存する部分から察すると内面にはヘラミガキ、外面にはナデが施されていたようである。内外面には微かに赤彩が残っており、赤彩が施されていたと思われる。折返し口縁肥厚帯下端部には縄文原体による押圧波状文が施されている。復元口径は20.0cmを測る。色調はにぶい褐色を呈し、胎土は密である。15は東側コーナー部分の覆土下層から出土した。二次被熱を受け内外面ともに煤が付着し、内面は斑状剥離が顕著である。内面にはヘラナデ及びハケ調整、外面にはナデ及びハケ調整が施されていたようである。復元口径は20.4cmで、色調は全体的に黒褐色を呈し、胎土は密で長石がやや多めである。16は東海系のひさご壺とみられる口縁部片で、炉周辺の覆土上・中層から出土した破片が接合した。遺存状態は良く、内外面にヘラミガキが明瞭にみられる。復元口径は7.8cmを測る。色調は赤彩を施したかのように鮮やかな赤褐色を呈し、胎土は非常に密で微量の海綿骨針が含まれる。17は東側コーナー部分の覆土下層から出土した。口縁肥厚帯部が内側に折返す。内面は摩耗が顕著で斑状剥離がみられる。内面にはヘラナデ及びミガキ、外面にはミガキ及びハケ調整が施されている。復元口径は17.6cmで、色調は全体的に橙色を呈し、胎土は密で微量の海綿骨針が含まれる。18は本跡ほぼ中央の覆土下層から出土した底部片である。外面は底部全面も含めて赤彩が施されている。また、底外は木葉痕が明瞭にみられ、底外を除き内外面には一部剥離しているがハケ調整が施されていたようである。底径は8.3cmで、色調は全体的に赤褐色を呈し、胎土は密で砂粒がやや多めで、微量の海綿骨針が含まれる。19～22は高杯でいずれも部分片である。19は炉東側の床面から出土した杯部片である。脚部との接合部分は一段凹む在来品である。色調は明赤褐色を呈し、胎土は粗で砂粒及び赤色スコリアがやや多く含まれる。20は本跡中央の床面から数cm浮いた状態で出土した破片が接合した杯部片である。復元口径20.4cmで口縁端部は尖り気味である。器面はミガキが主体で内面の一部にハケ調整が施されている。色調は赤彩を施したような赤褐色を呈し、胎土は密である。21・22はくびれ部片で、ともに覆土中層から出土した。22の杯部内面は二次被熱を強く受けたようで、真っ黒で斑状剥離がみられる。23は器台のくびれ部片で、貯蔵穴上面から出土した。24は口縁部を欠損する小型鉢で、覆土上層一括で取り上げた破片が接合したものである。底径2.7cmの小さな底部から丸味をもって立ち上がり、体部中位から開き気味に口縁に至る。内面中位には一段の張り出しが認められる。25は南関東系の特徴を有す壺形土器である。本跡東側コーナー部分の床面及び下層から出土した破片が接合したもので、口縁部は全欠であるが全体の遺存度は約40%である。底径7.0cm、胴部最大径は中位にあり23.3cmである。外面肩部に3本の櫛描平行沈線文で区画された間に、櫛描波状文が巡っている。内面はナデを主体にしているが、肩部と底部にはハケ調整が施されている。色調はにぶい褐色を呈し、胎土は密である。26～32は印手式の甕形土器片である。26は覆土下層の広範囲から出土した破片が接合したもので、口縁部から頸部にかけての約2／3周遺存する。復元口径は18.8cmで、肥厚帯部から肥厚帯端部の全面に附加条縄文が施文される。頸部はハケ調整後、縄文原体を縦位に2本単位で押圧装飾している。内外面ともに煤が付着し全体的に黒っぽく、胎土は密で雲母が多く含まれキラキラしている。27はP3覆土内一括で取り上げた破片で、26と同様の文様構成で若干口径が小さくなるようである。28は南西壁に近接する覆土上層から出土した折返し口縁部片である。肥厚帯部から肥厚帯端部の全面に附加条縄文が施文され、下端部は指頭を押圧し波状を呈す。29は上層一括で取り上げた口縁部片で、肥厚帯部は無文帯で下端部は縄文原体を押圧し波状を呈す。色調は内外面ともに橙色で、胎土は密である。30は下層一括で取り上げた頸部から胴部にかけての破片で、頸部に鋸歯状沈線文、胴部に附加条縄文が施されている。胴部は煤が付着し全体的に暗褐色を呈している。胎土は密で雲母が多く含まれキラキラしている。31・32

は底部片でいずれも底外に木葉痕がみられ、底部まで附加条縄文が施されている。胎土は密でいずれも微量の海綿骨針が含まれる。

33～40は石製品で、敲石・石皿・軽石・管玉の計８点を図示することができた。33・34はいずれも覆土下層から出土した完存の敲石で、両端には使用痕が明瞭に残っている。33は安山岩質で2.34kg、34は砂岩質で0.55kgである。35は約半分を遺存する安山岩質の石皿片で、北西壁直下の凹み部底面から出土した。重量は3.51kgである。磨面は中央に向かい緩やかに凹み、片端には大きな凹みと小さな凹みが２か所みられ、固い食物を敲くための凹みと思われる。この２か所の凹みは、33・34の敲石が手放しで正立するほどピッタリ合致しており、セットで使用されていたものと考えられる。36～39は白色系の軽石で、いずれも覆土下層から出土した。いずれも鋭く凹む擦痕が認められ、研磨具として使用されたと思われる。40は覆土上層から出土した緑色凝灰岩質の管玉の完存品である。長さ36㎜、径13㎜、孔径５㎜を測り、重量10.83ｇである。土製品で図示できたのは41の１点のみである。41は覆土上層一括で取り上げた土製紡錘車である。側面には細かいストロー状工具による刺突列点が、上下面に対して斜位に施される。上面にも刺突列点が中央穿孔部に向けて連続しており、おそらく上面を十文字に描いているものと思われる。

（３）グリッド出土遺物（第27図、第12・19表、図版52・57・58）

ここまで弥生時代後期から古墳時代前期の遺構・遺物について示した。ここではグリッド出土の遺物で、この時期に帰属する遺物について紹介する。ただし、遺構覆土内出土でも、明らかに遺構の帰属する時期ではないと考えられる遺物については、グリッド番号に置き換えて示すこととした。１～14までの弥生土器は印手式の甕片である。１・２は口縁部片で、１は肥厚帯端部から肥厚帯部全面に附加条縄文、２は肥厚帯端部に櫛状工具による連続沈線文が施され波状を呈し、肥厚帯部には穿孔がある。３～６は頸部片で、３は櫛描鋸歯状文下に附加条縄文、４は櫛描鋸歯状文、５は櫛描鋸歯状文、６は櫛描波状文がそれぞれ施される。７～10は胴部片で附加条縄文が施される。それぞれ外面には煤が薄く付着している。11～14は底部片で底部まで附加条縄文が施される。11は底外に一条の線刻が認められる。12の底外には網目状の圧痕が微かに認められる。15～17は石製品で、15はG14-93出土の安山岩製の石皿片である。16・17は軽石である。16はG14-97、17はG15-30からの出土である。



第27図　グリッド出土遺物（弥生～古墳前期）

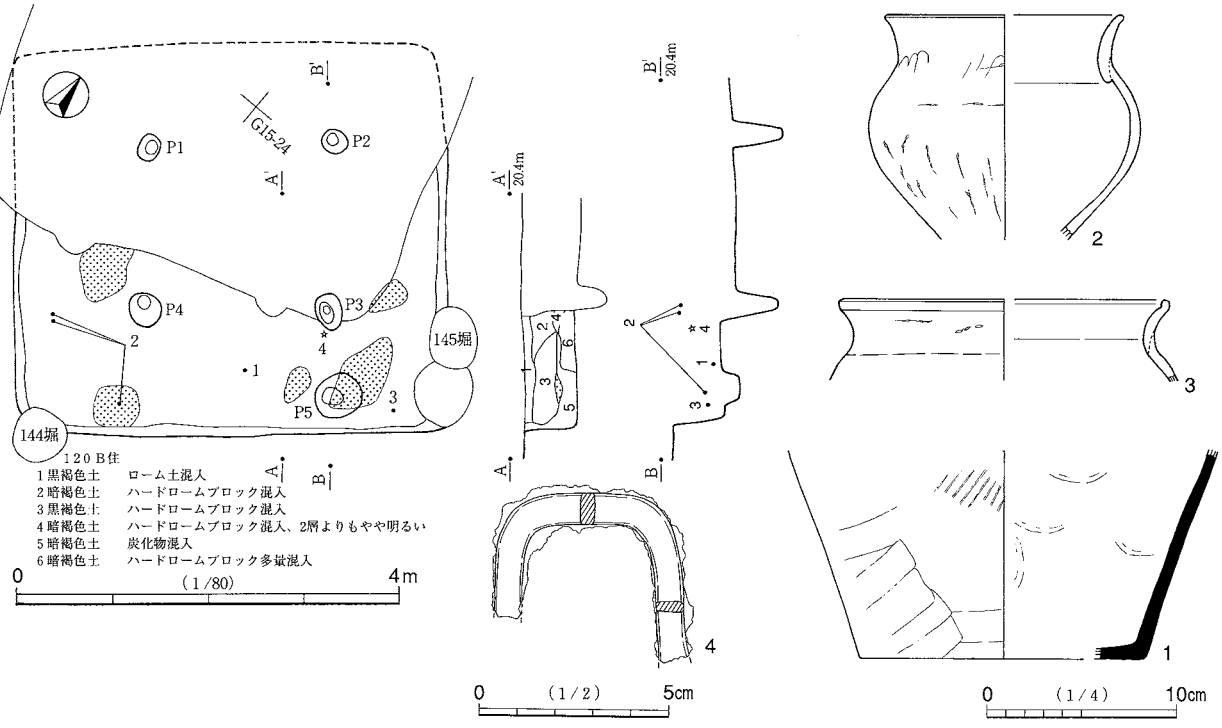
4　古墳時代中期から後期

前回までの調査成果からすると、当該期に属する遺構・遺物は数的には少なく、集落の密度は希薄といえる。今回の調査でもその傾向はうかがえるが、当該期に属すると思われる竪穴住居跡3軒、ピット状遺構2か所、溝状遺構1条が検出されており、小規模ながらも集落は存在していたようである。120B住・130溝・131住・133住・P14・P15が当該期に属する遺構と考えられる。ピット状遺構については中・近世に帰属すると思われるものがほとんどであるため、P14・P15については中・近世の項目の中でまとめて報告することとする。

（1）竪穴住居跡

１２０Ｂ住（第28図、第6・10・17表、図版8・29・54）

本住居跡は調査区のほぼ中央のG15-22から検出された。重複が著しく120A住・130溝・144掘・145掘に切られている。特に120A住には半分以上が床面まで攪乱されている。平面形は方形を呈すと思われ、遺存する壁の形状は直で壁溝はない。規模は長軸方向に4.6m、幅4.1m、深さ0.5mと思われ、推定床面積は16.79㎡で、主軸方向はN-40°-Wを示す。遺存する床面は平らで硬化面は特にみられず、炉跡は検出できなかった。主柱穴は4か所で、P1＝57cm、P2＝56cm、P3＝59cm、P4＝53cm、均一にしっかりと掘り込まれている。南東壁よりには平面円形の貯蔵穴が検出され、深さ37cmを測る。遺構内での堆積土の状況は攪乱のため詳細は不明であるが、遺存する覆土中層から焼土ブロックの集中が5か所で認められた。このことにより、本跡は埋没過程の凹みで火が使用されたと考えられる。前述のとおり半分以上を床面まで攪乱されているためか、出土遺物も極めて少なく図示できたのは4点のみである。いずれの遺物も覆土中からの出土であり本跡の帰属時期の確定はできないが、奈良・平安時代の120A住に切られていることと、図示できた遺物を参考にすると、古墳時代中期とするのが妥当ではないかと考えられる。



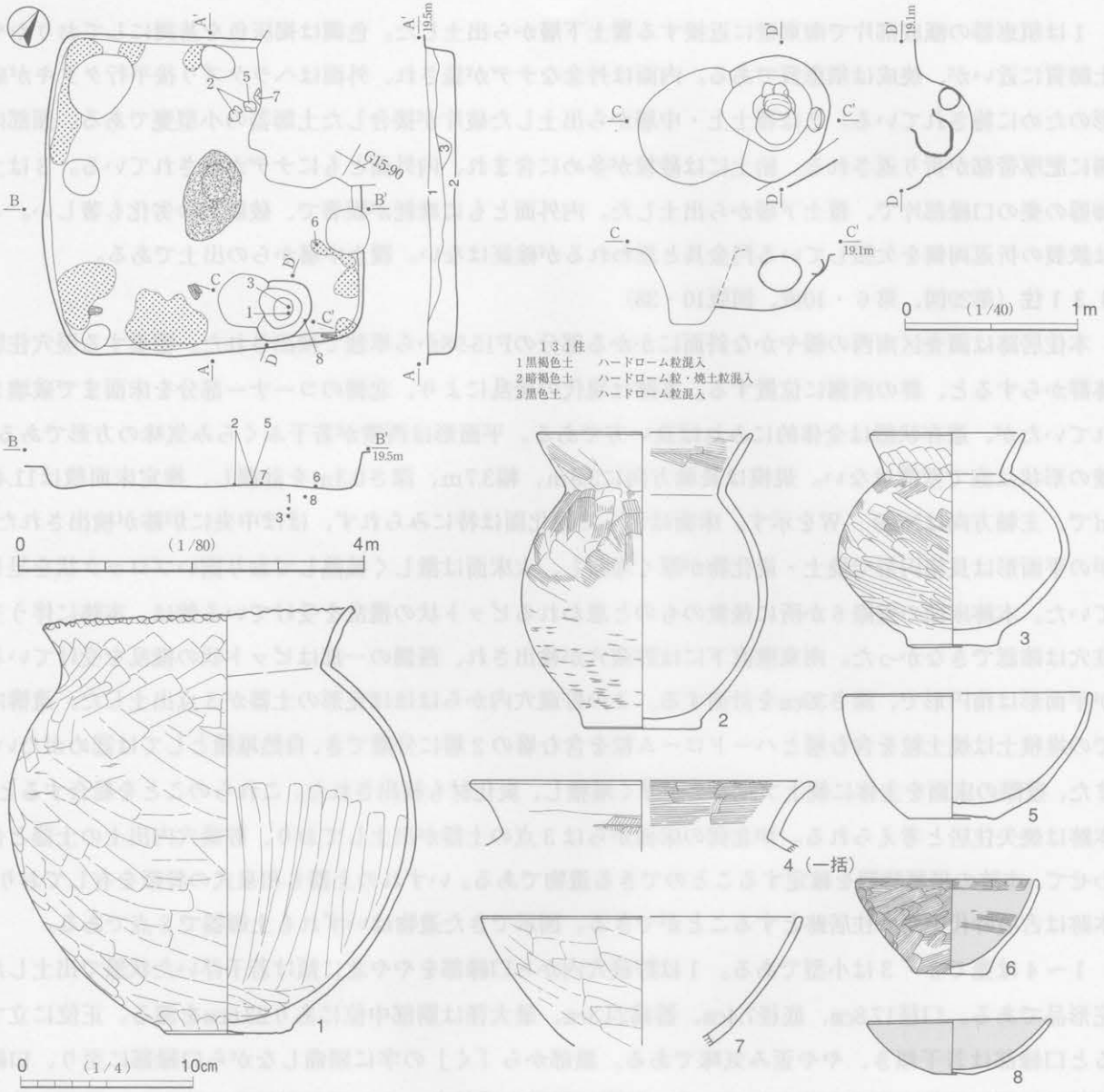
第28図　１２０Ｂ住

1は須恵器の甑底部片で南東壁に近接する覆土下層から出土した。色調は褐灰色を基調にしておりやや土師質に近いが、焼成は須恵質である。内面は丹念なナデが施され、外面はヘラケズリ後平行タタキが成形のために施されている。2は覆土上・中層から出土した破片が接合した土師器の小型甕である。頸部内側に肥厚帯部が折り返される。胎土には砂粒が多めに含まれ、内外面ともにナデが施されている。3は土師器の甕の口縁部片で、覆土下層から出土した。内外面ともに摩耗が顕著で、破断面の劣化も著しい。4は鉄製の折返両側を欠損している閂金具と思われるが確証はない。覆土中層からの出土である。

１３１住（第29図、第６・10表、図版10・38）

本住居跡は調査区南西の緩やかな斜面にかかる部分のF15-98から単独で検出された。密集する竪穴住居跡群からすると、群の西側に位置する。本跡は現代の攪乱により、北側のコーナー部分を床面まで破壊されていたが、遺存状態は全体的にみれば良い方である。平面形は西壁が若干ふくらみ気味の方形である。壁の形状は直で壁溝はない。規模は長軸方向に3.8m、幅3.7m、深さ0.3mを計測し、推定床面積は11.42㎡で、主軸方向はN-29°-Wを示す。床面は平らで硬化面は特にみられず、ほぼ中央に炉跡が検出された。炉の平面形は長楕円形で焼土・炭化物が厚く堆積し、火床面は激しく被熱しており固いブロック状を呈していた。本跡床面の壁際６か所に後世のものと思われるピット状の攪乱を受けている他は、本跡に伴う主柱穴は確認できなかった。南東壁直下には貯蔵穴が検出され、西側の一部はピット状の攪乱を受けているが平面形は楕円形で、深さ39cmを計測する。この貯蔵穴内からはほぼ完形の土器が３点出土した。遺構内での堆積土は焼土粒を含む層とハードローム粒を含む層の２層に分離でき、自然堆積としては認めがたい。また、壁際の床面を主体に焼土ブロックが厚く堆積し、炭化材も検出された。これらのことを総合すると、本跡は焼失住居と考えられる。炉北側の床面からは３点の土器が出土しており、貯蔵穴内出土の土器と合わせて、本跡の帰属時期を確定することのできる遺物である。いずれの土器も和泉式の特徴を有しており、本跡は古墳時代中期の住居跡とすることができる。図示できた遺物はいずれも土師器で８点である。

１～４は甕で２・３は小型である。１は貯蔵穴内から口縁部をやや北に傾け若干浮いた状態で出土した完形品である。口径17.8cm、底径7.4cm、器高24.8cm、最大径は胴部中位にあり23.6cmを測る。正位に立てると口縁部は若干傾き、やや歪み気味である。頸部から「く」の字に屈曲しながら口縁部に至り、口縁端部には押圧波状の刻みが施されている。外面は斜位の手持ちヘラケズリが丹念に施され、胴部中位から底部にかけて煤が付着している。内面は縦位の手持ちヘラケズリが施されるが、胴部中位から底部には薄く炭化物が付着し黒光りし、胴部中位から頸部にかけては斑状剥離が顕著に認められ、頻繁に煮炊きに使用された痕跡と思われる。色調はにぶい褐色を基調とし、胎土には細かな砂粒を多めに含んでいる。２は炉の北側床面から出土した破片が接合し、口縁部の一部を欠損する以外はほぼ完形に近い。口径12.1cm、底径6.8cm、器高17.4cm、最大径は胴部中位にあり14.2cmを測り、胴部はあまり膨らまない。内外面ともにハケによる調整が主体で、剥離が認められ特に外面は顕著である。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土には金雲母が多めに含まれている。３は坩としてもおかしくないくらいに、胴部がソロバン玉のように膨らんでいる。貯蔵穴内の壁面に接する状態で出土した完形品である。口径8.7cm、底径5.3cm、器高12.5cm、最大径は胴部中位にあり13.5cmを測る。底部は高台状にやや厚めに作り出され、頸部から口縁部にかけてはあまり外反しない。内面はナデが主体であるが剥離が顕著で不明な点が多く、外面はやや雑な斜位の手持ちヘラケズリが施されている。色調はにぶい褐色を呈し、胎土はやや赤色スコリアが多く含まれている。４は覆土一括で取り上げた破片が接合したもので、口縁部のみ１／３周ほど遺存する。内外面ともにハケ



第29図　１３１住

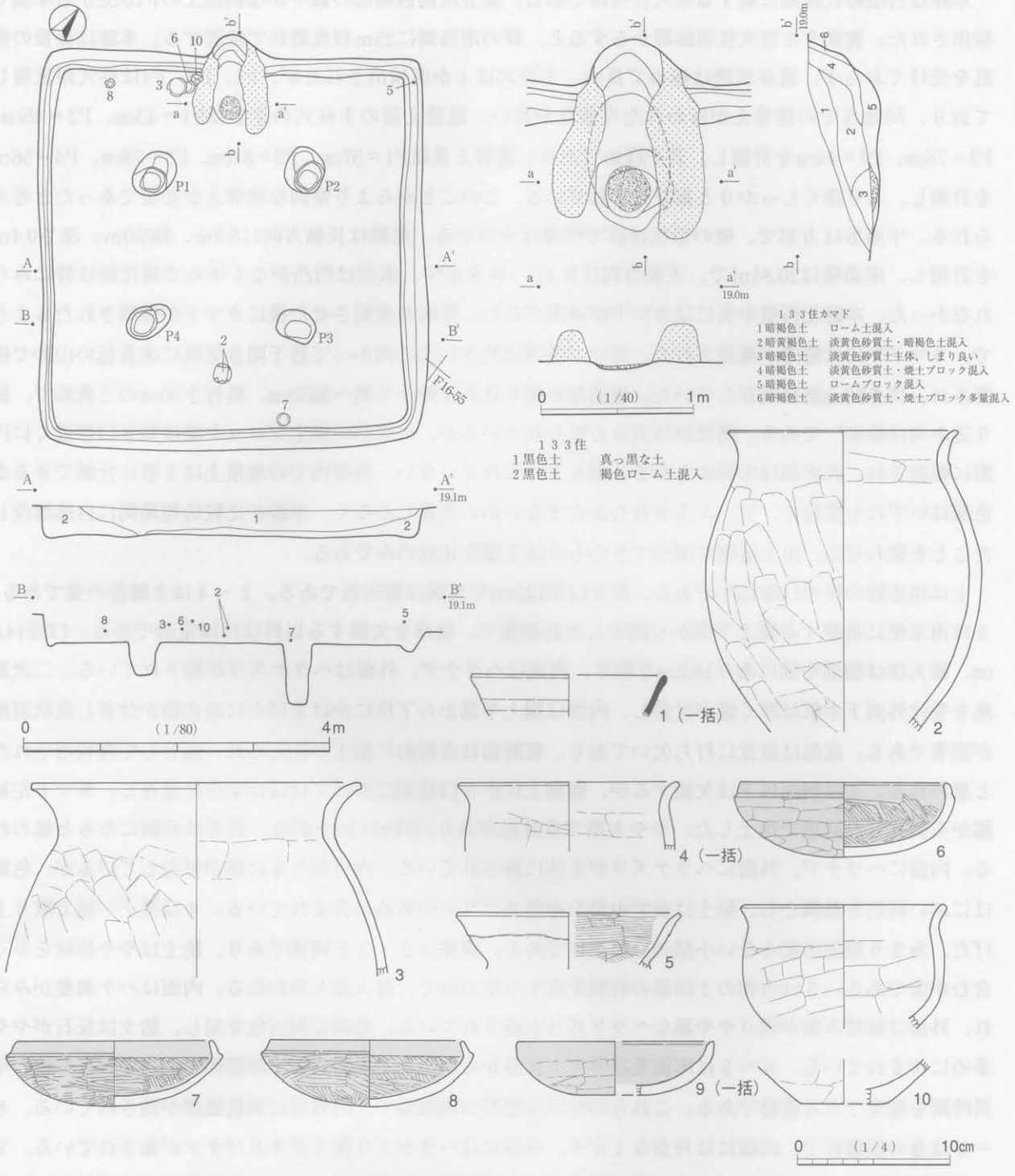
による調整が認められる。５～７は鉢で、いずれも床面出土である。５は底部から口縁部までの約60%程度遺存する。全体的に若干歪みがあり、口縁端部はヘラ状工具により平らに削られている。内外面ともにナデを基調とし、色調は赤褐色ないし黒褐色を呈し、煤がやや厚く付着している。６はほぼ完形の小鉢で内面には黒色処理が施され黒光りを呈している。器形は上面から見ると全体的に卵形を呈し、最大口径10.5cm、最小口径9.1cm、最大底径4.4cm最、小底径3.7cmを測り、口縁端部はヘラ状工具により平らに削られている。内外面ともにハケによる調整が施され、外面の約半分は煤が付着している。胎土には大きな砂粒が多量に含まれ粗である。７は体部があまり湾曲せず、底部は欠損するが広めの底部であると思われる。内面はナデを基調とし、外面は手持ちヘラケズリが施され、口縁端部はヘラ状工具により平らに削られている。色調は内外面ともに褐色を呈し、胎土は密である。８は小型の杯で、口径10.5cm、底径2.9～3.4cmを測りやや歪んでいる。器高は皿のように平たく2.3cmしかない。内外面ともにミガキとナデを基調とし、黒色処理が施されている。色調は全体的に黒褐色を呈し、胎土は密で微量の海綿骨針を含んでいる。

１３３住（第30図、第６・10表、図版11・40）

本跡は古墳時代後期に属する竪穴住居跡である。調査区南西端部の緩やかな斜面上のF16-52から単独で検出された。密集する竪穴住居跡群からすると、群の南西側に25m程度離れて位置する。本跡は後世の攪乱を受けておらず、遺存状態は極めて良い。主柱穴は４か所検出されたが、P1、P2、P4は柱穴が重複しており、同地点での建替えが行われた可能性が高い。建替え前の主柱穴の深さはP1＝43cm、P2＝45cm、P3＝78cm、P4＝44cmを計測し、若干浅めである。建替え後はP1＝57cm、P2＝81cm、P3＝78cm、P4＝56cmを計測し、より深くしっかりと掘り込まれている。このことからより堅固な建替えが必要であったと考えられる。平面形は方形で、壁の形状は直で壁溝は全周する。規模は長軸方向に5.2m、幅5.0m、深さ0.4mを計測し、床面積は20.84㎡で、主軸方向はN-37°-Wを示す。床面は凹凸がなく平らで硬化面は特にみられなかった。本跡北西壁中央にはカマドが検出された。壁溝を全周させた後にカマドが構築されたもようで、カマド下には壁溝が確認された。カマド袖部は焚き口部に向かって若干開き気味に淡黄色の山砂で構築され、高さ20cm前後残存していた。煙道部の掘り込みは壁から奥へ幅50cm、奥行き30cmの三角形で、掘り込み角は約30°である。燃焼部は大きく保たれているが、火床部の焼土ブロック塊は焚き口部近くに円形に確認され、火床部は床面からあまり掘り下げられていない。遺構内での堆積土は２層に分離できるが色調はいずれも黒色で、ローム土を含むか含まないかの差異しかなく、本跡が比較的短期間に自然埋没したことを窺わせる。出土遺物で図示できたものは土器片10点のみである。

１は須恵器の杯の口縁部片である。復元口径12.6cmで色調は褐灰色である。２～４は土師器の甕である。２は南東壁に近接する覆土下層から出土した長胴甕で、底部を欠損する以外はほぼ完形である。口径14.6cm、最大径は胴部中位にあり18.2cmを測り、内面はヘラナデ、外面はヘラケズリが施されている。二次被熱を受け外面下半部は厚く煤が付着し、内面は胴上半部から下位にかけまばらに炭化物が付着し斑状剥離が顕著である。底部は故意に打ち欠いており、破断面は直線的に加工が加えられ、甑として再利用されたと思われる。３は胴部以下は欠損するが、胴部上位から口縁部にかけてはほぼ完全に遺存し、カマド左袖脇から倒立した状態で出土した。やや大型で重量感があり口径21.6cmを測る。器形は長胴になると思われる。内面にヘラナデ、外面にヘラケズリが主体に施されている。内外面ともに煤が付着しているが、色調はにぶい褐色を基調とし、胎土は密で中粒の赤色スコリアが多めに含まれている。４は覆土一括で取り上げた、あまり胴部の張らない小型の口縁部片である。調整は２・３と同様であり、胎土はやや砂粒を多く含むが密である。５は古相の土師器の特徴を有す小型の壺で、混入品と思われる。内面はハケ調整がみられ、外面は輪積み痕が残りやや雑なヘラケズリが施されている。色調は褐灰色を呈し、胎土は長石がやや多めに含まれている。６～９は床面及びカマド袖脇から出土した鬼高式の土師器杯で、いずれも本跡の帰属時期を確定できる遺物である。これらの杯は須恵器の模倣品で、内外面に黒色処理が施されている。６～８は身の模倣杯で、内面には丹念なミガキ、外面にはヘラケズリ後ミガキ及びナデが施されている。９は蓋の模倣杯で、内外面にはヘラケズリ後丹念なナデが施されている。６の黒色処理は若干摩耗しており黒色が落ちているが、７～９は内外面が黒光りするほどの黒色を呈している。10はカマド左袖脇の床面から十数cm浮いた状態で出土した小型の鉢片である。接合点がなく底部と口縁部周辺の２個体分となっているが、胎土・焼成・色調からして同一個体である可能性が高い。口径12.8cm、復元底径5.8cmを計測する。内面はヘラナデ、外面はヘラケズリが施されている。内外面ともに煤がやや厚めに付着し、器面は摩耗し破断面も若干劣化している。色調は全体的に褐灰色を呈し、胎土は密で中粒の赤色スコリアをやや多めに

含んでいる。

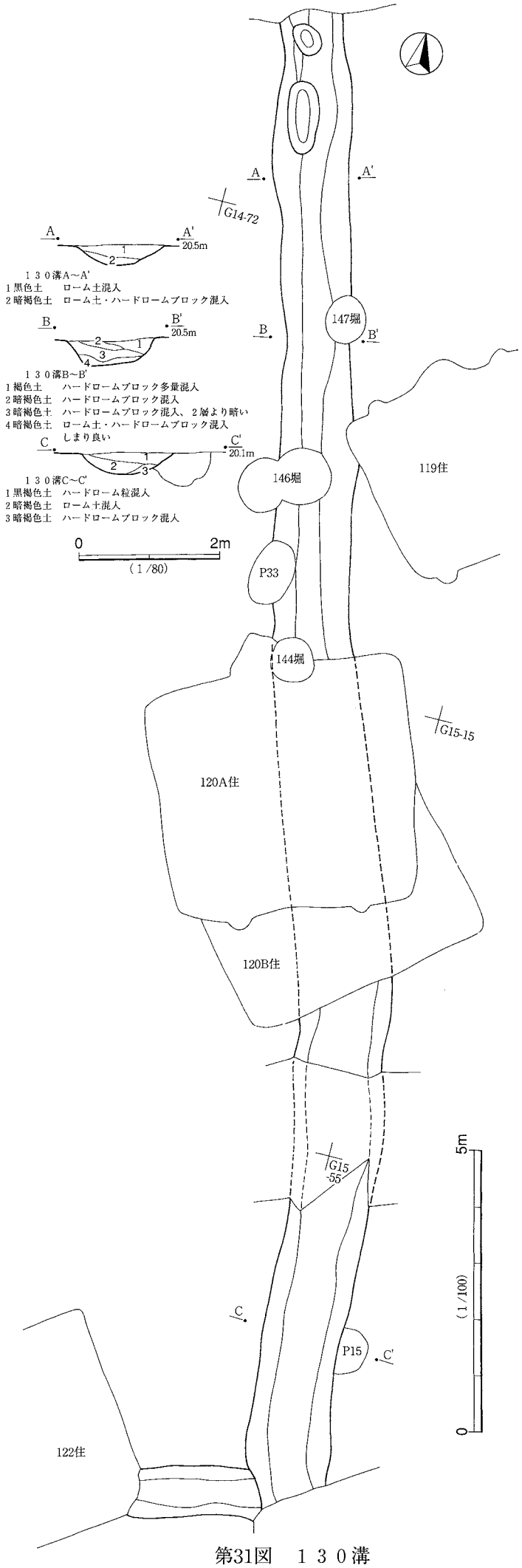


第30図　１３３住

（2）溝状遺構

１３０溝（第31図、図版10）

本跡は調査区のほぼ中央のG14・G15ら検出された南北に貫通する溝状遺構である。奈良・平安時代の120A住に切られ、古墳時代中期の120B住を切っていることで古墳時代後期頃に帰属すると思われる。


A
A'
G14-72
147堀
B
B'
119住
146堀
P33
144堀
G15-15
120A住
120B住
G15
-55
C
C'
P15
122住
5m
(1/100)
0
A
A'
20.5m
1
2
１３０溝A～A'
1黒色土　ローム土混入
2暗褐色土　ローム土・ハードロームブロック混入
B
B'
20.5m
2
1
3
4
１３０溝B～B'
1褐色土　ハードロームブロック多量混入
2暗褐色土　ハードロームブロック混入
3暗褐色土　ハードロームブロック混入、2層より暗い
4暗褐色土　ローム土・ハードロームブロック混入
しまり良い
C
C'
20.1m
1
2
3
１３０溝C～C'
1黒褐色土　ハードローム粒混入
2暗褐色土　ローム土混入
3暗褐色土　ハードロームブロック混入
0
2m
(1/80)

第31図　１３０溝

5　奈良・平安時代

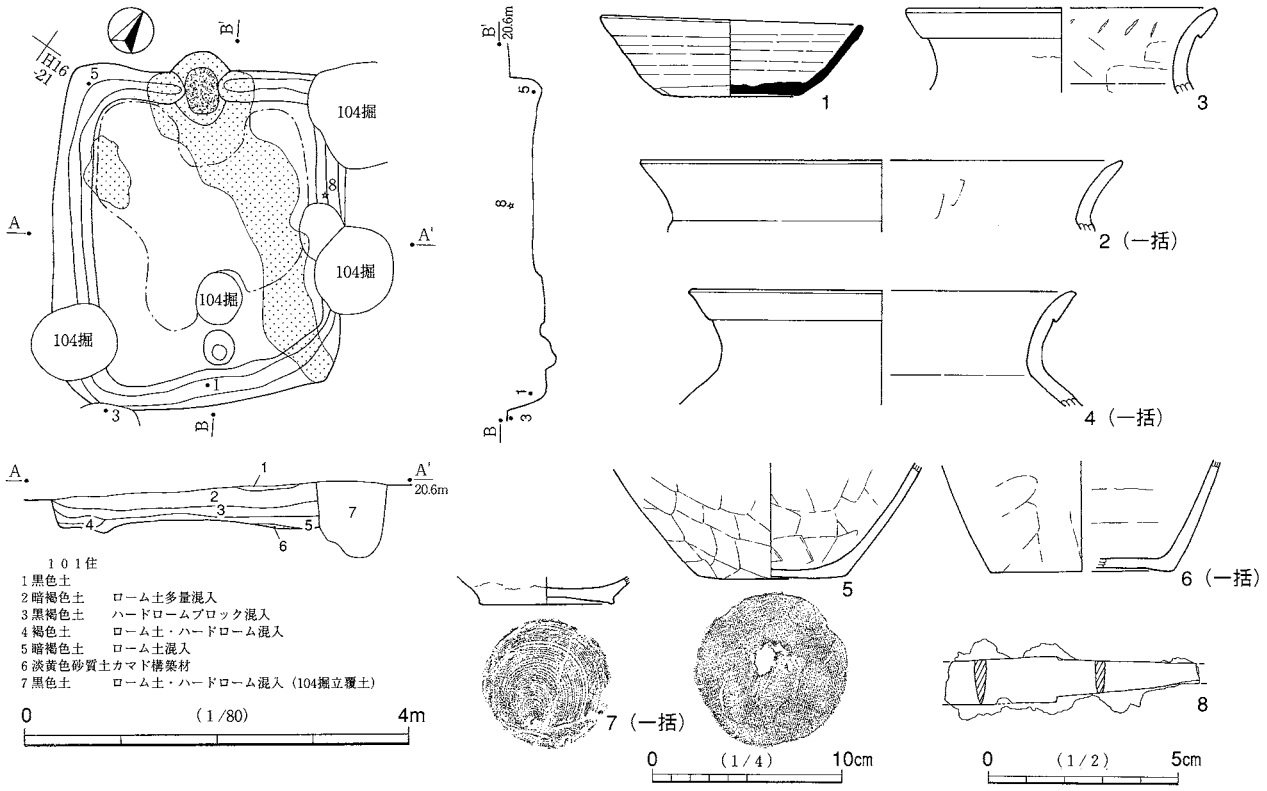
間見穴遺跡では前回までの調査成果からすると、この時期に帰属する検出遺構は、竪穴住居跡25軒、掘立柱建物跡９棟、井戸状遺構１基、土坑12基等があげられている。今回の調査でもほぼ同様の遺構が検出されたが、調査範囲全体からみると当該期に属する遺構は北側は希薄で、南側に極端に集中する傾向がうかがえる。今回の調査成果では当該期に属すると思われる遺構は、竪穴住居跡20軒、掘立柱建物跡７棟、土坑19基、ピット状遺構２か所、道路状遺構１条である。具体的には、101住・102A住・102B住・104掘・105道・106B坑・107坑・108坑・109住・110B住・110C坑・110D坑・113坑・114坑・115坑・116A住・116B坑・118住・119住・120A住・121住・122住・123住・124住・125住・126坑・127坑・128掘・129坑・134住・135住・137住・139住・141住・142住・144掘・145掘・146掘・147掘・148掘・150坑・152坑・P23・P28である。P23・P28については、中・近世の項目の中でピット状遺構としてまとめて報告することとする。

（１）竪穴住居跡

１０１住（第32図、第６・10・14表、図版３・20・53）

平安時代前半の竪穴住居跡である。調査区の南側境界近くのH16-21から検出され、144掘の柱穴に壁及び床面を切られている。平面形は長方形ないし台形状を呈し、遺存する壁の形状は急である。壁溝は全周し、幅30cm～40cm、深さ７cm～10cmを測る。規模は長軸方向に3.6m、幅3.1m、深さ0.3mを測り、推定床面積は6.43㎡で、主軸方向はN-38°-Wを示す。遺存する床面は中央部分でやや高く、壁溝に向かって徐々に低くなり、硬化面はカマド側一帯に認められる。カマドは完全に破壊されており、北西壁中央部に火床部の浅い掘り込みが多少残るのみであった。カマド構築材である淡黄色砂質土は東コーナー部分に向かって帯状に床面に散乱し、東コーナー壁面まで達しており被熱して赤色化した部分も壁にへばり付いていた。また、構築材の一部は南西壁周辺の床面にも散乱していた。主柱穴は検出されず、南東壁中央直下に深さ約17cmの出入り口ピットが検出されたのみであった。遺構内での堆積土は大まかに４層に分離でき、緩やかなレンズ状を呈しており、自然堆積したものと思われる。出土遺物は少なく図示できたのは８点である。

１は覆土下層出土と下層一括取り上げの破片が接合し、完形となった須恵器の杯である。口径は13.5cm前後であるが、焼成時に発生したと思われる歪みがあり、口縁部平面形態は整った円形ではない。色調は内外面ともに灰色を呈し、体部及び底内にはロクロナデによる凹凸が渦状に残っている。底外は手持ちヘラケズリが施され、切り離し技法は不明である。やや軟質の焼成で胎土には白雲母が多量に含まれ、茨城産といえる。２～６は土師器の甕で、いずれも在地型と思われる。２～４は口縁部片であるがいずれも覆土上層からの出土で、本跡に伴う遺物とは言い難い。５・６は底部片で、５は東コーナー壁溝上面から出土し、底径7.8cmの底部中央部に径１cm前後の穿孔が焼成後に施されている。甑として再利用するには穿孔が小さめで二次被熱の痕跡もみられないため、祭祀的用途の可能性も考えられる。内面にはヘラナデ、外面にはヘラケズリが施され、色調は全体的に橙色を呈し、胎土は密で大きめの赤色スコリアをやや多く含む。６は覆土上・下層一括取り上げの破片が接合し、復元底径9.6cmを測る。内外面ともに摩耗が顕著で、内外面ともにヘラナデが僅かに認められる。胎土は粗で中粒の長石が多量に含まれている。７は覆土上層一括で取り上げた土師器の杯の底部片で、底部のみ100%遺存する。底径6.9cmを測り、底外は回転糸切り痕が明瞭にみられる。８は覆土上層から出土した鉄製刀子で、刀身の半分以上及び茎の端部は欠損している。現存長66.9㎜、このうち現存刀身長29.5、身幅11.6、背幅2.8㎜、現存茎長37.4㎜、茎幅8.0㎜、茎厚



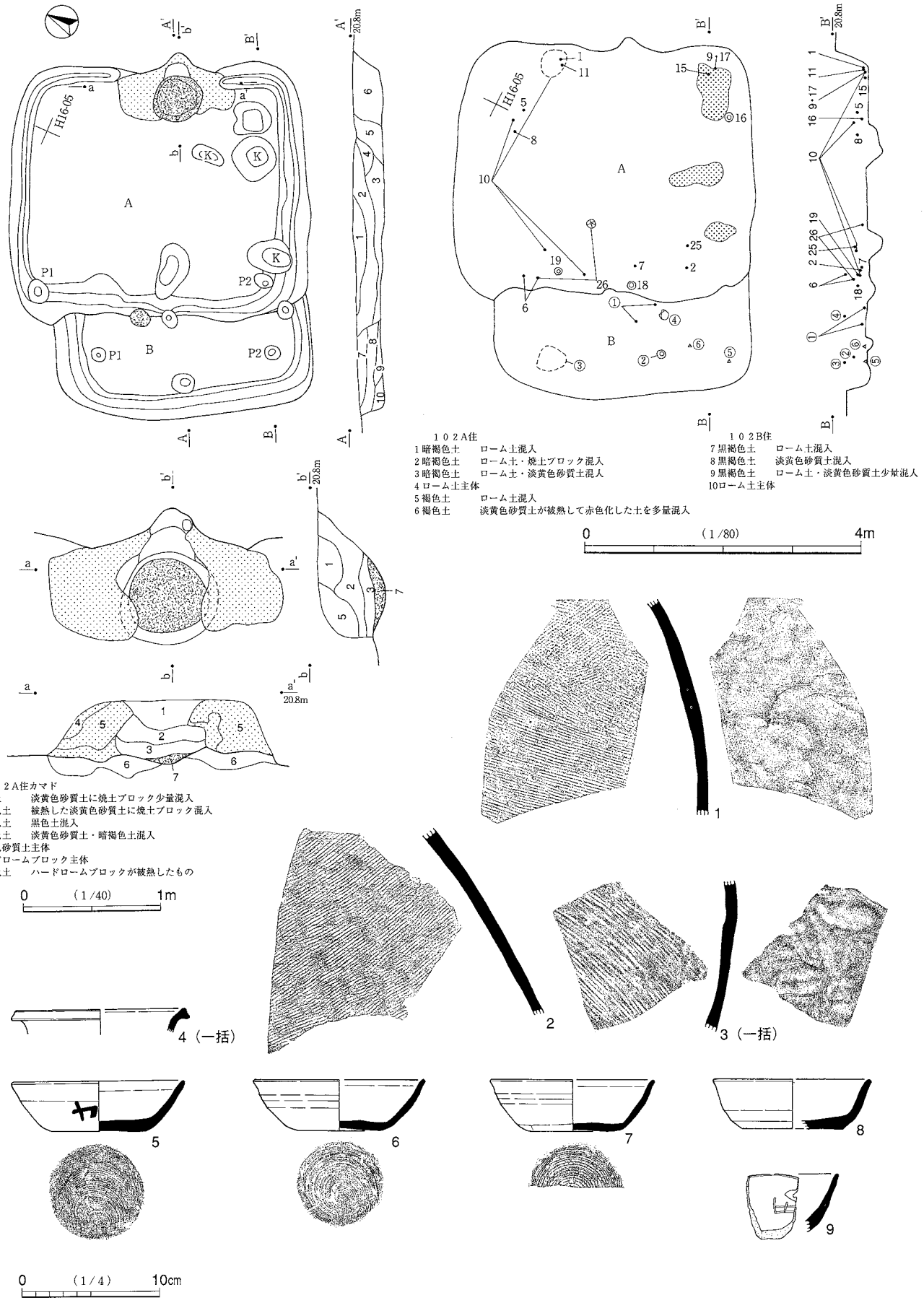
第32図　１０１住

2.5㎜を測る。刃部は一部欠損しており、使用していた時期の刃こぼれと考えられる。

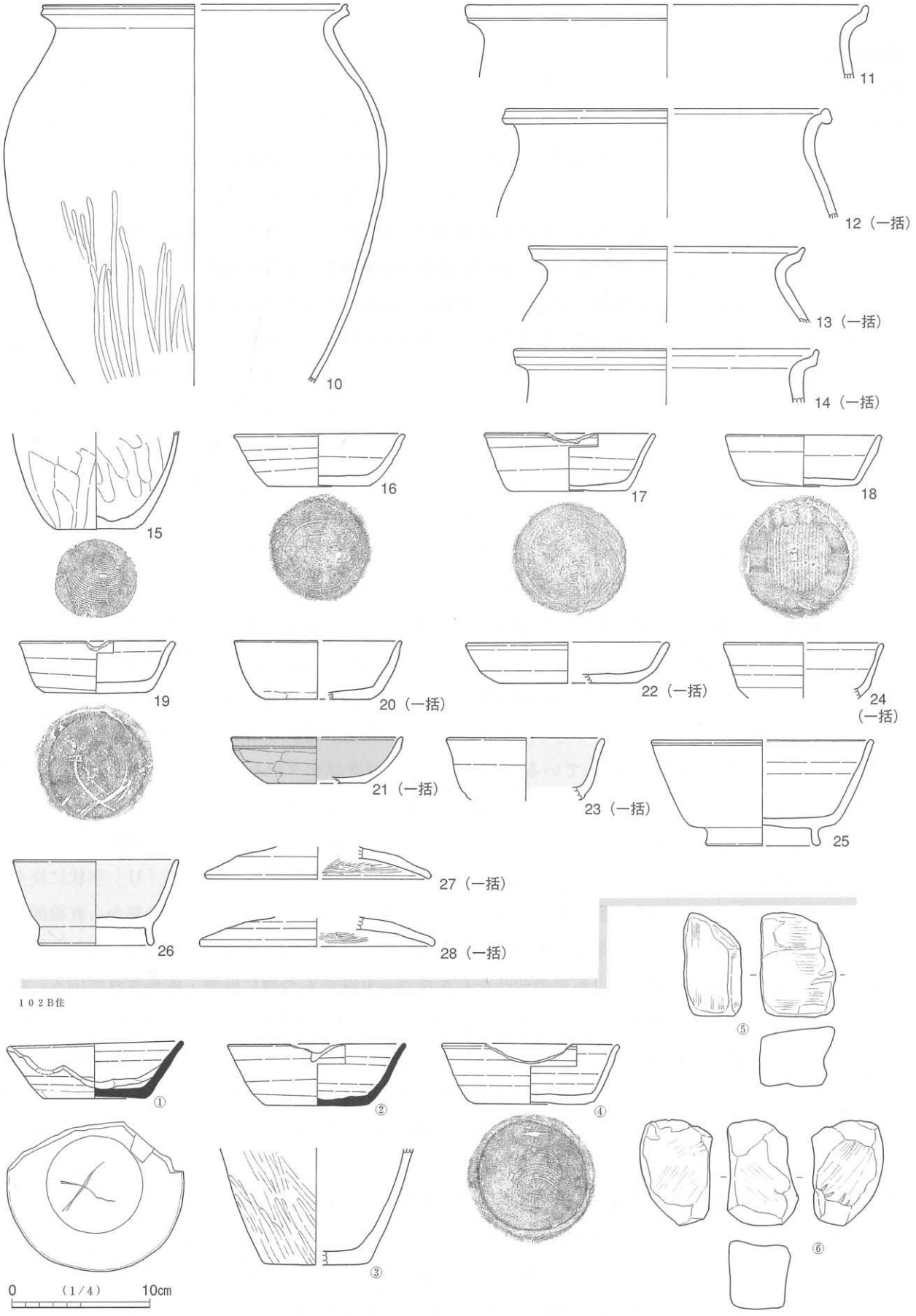
１０２Ａ住（第33・34図、第６・10表、図版３・20・21）

本住居跡は調査区の南側境界近くのH16-04から検出され、101住の北東側に約４ｍの位置にある。帰属時期は出土遺物からすると、奈良時代末から平安時代初頭とするのが妥当である。本跡は同一床面レベルで102B住を切っているが、両者の出土遺物にはあまり時期差がみられない。このことは102B住廃棄後あまり期間がたたないうちに本跡が構築されたことを示唆している。平面形は住居幅の方が長い隅丸長方形を呈し、遺存する壁の形状は緩やかである。壁溝は全周し、幅20cm～40cm、深さ５cm～９cmを測る。規模は主軸方向に3.6m、幅4.4m、深さ0.5mを測り、推定床面積は9.53㎡で、主軸方向はN-68°-Eを示す。床面は若干の凹凸がみられ、顕著な硬化面は認められない。カマド天井部は崩落していたが、袖部の遺存は良く高さ40cm前後残存していた。袖部は焚き口部に向かって若干開き気味で淡黄色の山砂で構築され、煙道部の掘り込みは壁から奥へ幅約40cm、奥行き約15cmの三角形で、掘り込み角は約45°である。燃焼部は大きく保たれており、火床部の焼土ブロック塊は燃焼部の大部分で円形に確認され、火床部は床面からやや深めに掘り下げられている。カマド右袖脇には平面形が方形で深さ約18cmの貯蔵穴が検出されたが、内部からの遺物の出土はなかった。また、貯蔵穴上面には焼土が散乱していた。しっかりとした主柱穴は検出されず、カマド対壁の両コーナー部に小ピットが２か所検出された。深さはP1・P2ともに約21cmと浅く、本跡の屋根を支える柱としては考えにくい。同壁中央直下には平面形長楕円形で深さ約33cmの出入り口ピットが検出された。遺構内での堆積土は大まかに３層に分離でき、緩やかなレンズ状を呈しており、自然堆積したものと思われる。出土遺物は多く図示できたのは28点である。

１～３は須恵器の甕の胴部片である。１はカマド左袖部の床面から数cm浮いた状態で出土した。色調は灰色で、外面にはタタキが施され、内面には当具痕が認められる。２は覆土下層から出土し、１と同様の



第33図　１０２Ａ・Ｂ住（１）



第34図　１０２Ａ・Ｂ住（２）

調整が施されている。3はカマド内一括で取り上げたもので、色調は内外面ともに褐灰色で灰釉が認められ、外面にはタタキ、内面には当具痕が認められる。4は中層一括で取り上げた須恵器小型壺の口縁部片である。内外面ともに丁寧なナデが施され、色調は褐灰色で灰釉が認められる。5～9は須恵器の杯である。5は覆土下層出土で約2／3を遺存し、外面には『カ』と思われる墨書が認められる。色調は全体的に灰黄褐色を呈し、ロクロ目をナデ消している。底部は回転糸切り後外周に手持ちヘラケズリが施されている。硬質の焼成で東海産とみられる。6・7は覆土中・下層出土でそれぞれ約半分を遺存し、ともにロクロ目を比較的明瞭に残している。底部は6が回転糸切り後無調整、7は回転糸切り後外周に手持ちヘラケズリが施されている。8は下層出土で約1／3を遺存するが、内外面ともに摩耗が顕著で、ロクロ目は不明瞭である。色調はにぶい黄橙色で、胎土には金雲母がやや目立つ。底部は全面回転ヘラケズリが施され、切り離し技法は不明である。6～8は比較的軟質の焼成で、色調も赤味があり千葉産とみられる。9は貯蔵穴に近接した床面直上から出土した破片で、内面に判読不明の線刻が認められる。胎土・色調・焼成ともに5に近似しており、東海産とみられる。10～14は土師器の甕で、いずれも常総型と思われる。10以外は極めて遺存度が低い。10はカマド左袖部に集中していた破片と、カマド内一括及び出土地点の離れた西壁よりの破片が接合した。底部を欠損する長胴で、色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈し、胎土には砂粒が多めに含まれ、金雲母も目立つ。二次被熱を受けており、内面は劣化が顕著で、外面は全体に煤がやや厚めに付着している。11～14は受け口状の口縁をもつ甕の口縁部片である。いずれも色調はにぶい褐色系を基調とし、胎土には砂粒及び金雲母を多量に含んでいる。15は在地型の小型甕で、胴下半部から底部にかけては100%遺存する。底径5.8cmを測り、色調は内外面ともににぶい橙色で、外面には満遍なく煤が付着している。底部は内面に渦状の輪積み痕が残り、外面は回転糸切り後外周に手持ちヘラケズリが施されている。16～22は土師器の杯である。16はほぼ完形で覆土下層から出土し、口径12.0cm、底径7.4cm、器高3.8cmを測る。器面はやや摩耗しているが、内外面にはロクロナデがみられる。色調は全体的ににぶい橙色を呈し、胎土は密である。底部外面は回転糸切り後大部分に回転ヘラケズリが施されている。17はカマド右袖脇の床面から数cm浮いた状態で出土し、口径12.2cm、底径8.2cm、器高4.2cmを測る。口縁部を幅3.0cm、深さ0.9cm程度「U」字状に欠損する以外は完形品である。欠損部は小さいが、「U」字状に抉られるように破断していることから、意図的に打ち欠かれた可能性がある。器形は平らな底部から直線的に口縁部に至る箱形で、ロクロ目を丁寧なナデで消している。底部外面は回転糸切り後大部分に回転ヘラケズリが施されている。18の口縁端部は多少の凹凸をもちながら丸味をもつ様に研磨・成形されている。明らかに焼成後に加工が行われたことを示している。調整は雑で胎土には多量の砂粒を含んでいることから、当初から杯として製作されたものではないと思われる。おそらく小型甕の胴下半部から底部を杯として再利用したものと考えられる。底外は静止糸切り後外周に手持ちヘラケズリを施している。19は若干小さめの箱形で、覆土中層から出土した。17同様に口縁部を幅1.5cm、深さ0.5cm程度、意図的に「U」字状に打ち欠いた痕跡がある以外は完形品である。底部外面は全面雑な回転ヘラケズリが施され、切り離し技法は不明である。20～24はいずれも覆土一括で取り上げた破片で、遺存度は10～20%前後である。20は内外面ともに摩耗が顕著で、底内は器面の剥離が激しい。21は底部から口縁部へやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともに赤彩が部分的に残っており、全面に赤彩が施されていたと思われる。底部外面は手持ちヘラケズリが施されている。22は器高が2.9cm前後と低く、底部外面は全面回転ヘラケズリが施されている。23～26は土師器の高台付杯である。23は底部を欠損し内面に黒色処理が施され、外面は若干摩耗している。

24は内外面ともに丁寧なナデが施され、色調はにぶい橙色を呈し、胎土は密である。外面口縁部下には煤が帯状に巡るように付着している。25は覆土中層出土の破片と上・中層一括で取り上げた破片が接合し、約40%遺存する。復元口径15.8cm、器高7.6cm、貼付高台部の径8.0cm、高さ1.3cmを測る。内面は丹念なミガキが施されている。色調は内外面ともに赤彩を施したかのようなにぶい赤褐色を呈すが、外面の一部には厚く煤が付着し黒褐色を呈す部分もみられる。26は覆土上層と下層出土の破片が接合し、約80%遺存する。口径11.8cm、器高6.2cm、貼付高台部の径8.0cm、高さ1.4cmを測る。内面は丹念にミガキが施されている。内外面ともに黒色処理を施し、特に内面は黒光りしている。底部外面は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施され、その後高台が貼付けられている。27・28は土師器の蓋でいずれも色調は橙色及び赤褐色を基調とし、胎土は密で金雲母が多く含まれている。27はカマド内一括、28は覆土上層一括で取り上げられた破片であるが、調整も近似しており同一個体の可能性もある。

１０２Ｂ住（第33・34図、第６・10・19表、図版３・21・22・56）

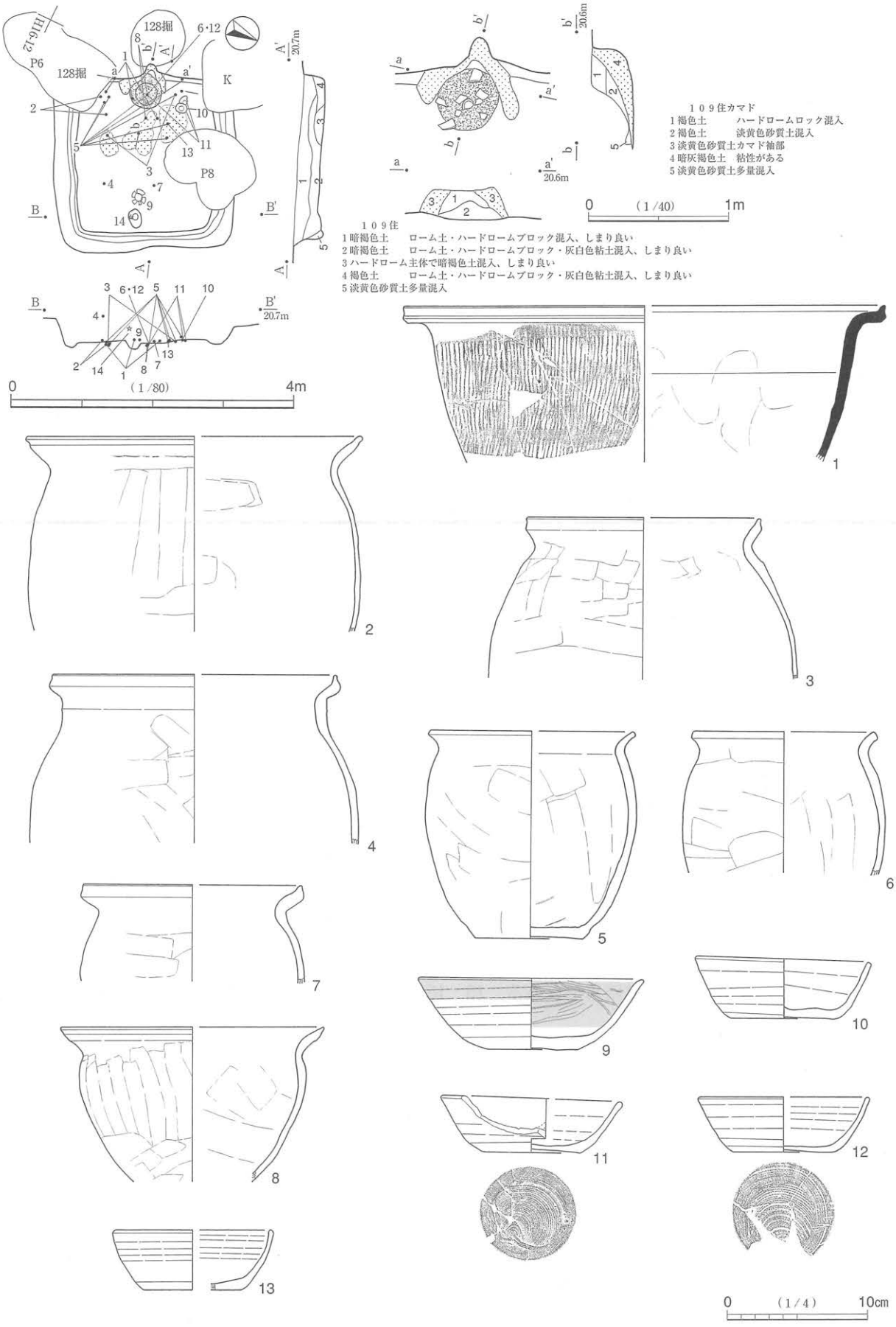
本住居跡は同一床面レベルで102A住に半分以上を切られた状態で、調査区の南側境界近くのH16-13から検出された。本跡は切り合い関係から102A住構築以前の所産であるが、両者の出土遺物にはあまり時期差がみられない。また、遺構内の堆積土は大まかに３層に分離できるが、３層とも黒褐色の同一色で極めて近似しており、本跡が比較的短期間に埋没したことを示している。これらを総合してみると、本跡は構築から廃棄・埋没まで短期間であったことがうかがえ、帰属時期は102A住よりやや先行する奈良時代後半が妥当と思われる。平面形は方形を呈し、遺存する壁の形状は直である。壁溝は検出されたが全周するかどうかは不明である。西壁中央直下には出入り口ピットがあり、深さ20cmを測る。確認できる規模は幅3.7m、深さ0.5m、主軸方向N-62°-Eである。しっかりとした主柱穴は検出されず、西壁の両コーナー部に小ピットが２か所検出された。深さはP1・P2ともに12cm前後である。出土遺物で図示できたものは石製品も含め６点である。

１・２は須恵器の杯である。１は床面から数cm浮いた状態で出土した破片が接合したもので、約２／３を遺存する。復元口径12.4cm、底径7.4cm、器高4.1cmを測る。底内にはロクロナデによる凹凸が渦巻き状に残り、『メ』状の浅い線刻が認められる。色調は灰色で、胎土には白雲母を多量に含み、軟質の焼成で茨城産とみられる。内面はヘラナデ、外面はヘラケズリ、底外は回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリが施されている。２は覆土中層から出土し、口縁部を幅3.5cm、深さ0.9cm程度、意図的に「U」字状に打ち欠いた痕跡がある以外はほぼ完形である。口径12.6cm、底径7.4cm、器高4.4cmを測り、内面にはロクロナデによる凹凸が渦巻き状に残る。色調は若干赤味がかった褐灰色で外面には部分的に煤が付着し、胎土は密でやや長石が多めに含まれる。底外は全面手持ちヘラケズリで、切り離し技法は不明である。千葉産とみられる。３は覆土上層出土の破片が接合した、土師器小型甕の底部片である。二次被熱を受けており、内面は剥離が顕著で外面は煤が厚く付着し、遺存状態は悪い。内面の色調はにぶい赤褐色で剥離していない部分にヘラナデがみられ、外面は褐灰色でやや雑な斜位のミガキが施されている。胎土は中粒の長石が多めに含まれている。４は覆土上層出土と下層一括が接合した土師器の箱形の杯で、約80%遺存する。口縁部には幅6.0cm、深さ1.6cm程度、意図的に「U」字状に打ち欠いた痕跡があり、口径12.6cm、底径8.0cm、器高4.3cmを測る。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は密で小さめのスコリアがやや多く含まれている。内外面ともに緻密なナデ、底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施されている。５・６は砥石片で床面及び床直上から出土した。石材は５が安山岩で、６が砂岩である。

１０９住（第35・36図、第６・10・17・19表、図版５・22・23・54・56）

平安時代前半の竪穴住居跡である。調査区の南東側のH15-92から検出され、101住から北へ約２ｍ隔たった位置にあたる。128掘の柱穴とピット状遺構P8に切られ、現代の攪乱も一部に及んでいる。平面形は方形を呈し、遺存する壁の形状は急である。壁溝は検出されたがカマド壁側には巡らないようである。主柱穴は確認できず、カマド対壁中央直下に出入り口ピットが検出されたにとどまり、深さ15cmを測る。規模は主軸方向に2.5m、幅2.6m、深さ0.4m、主軸方向N-116°-Wである。床面積約3.92㎡で、今回検出された竪穴住居跡の中では最も小さい。床面は若干の凹凸がみられ、全体的に南側に緩やかに傾斜している。顕著な硬化面は認められない。カマドは南西壁中央部に検出されたが、遺存状態はあまり良くない。天井部は残っておらず、袖部も焚き口部周辺で破壊されており、構築材の淡黄色砂質土がカマド周辺の床面に散乱していた。煙道部の掘り込みは壁から奥へ幅約30cm、奥行き約20cmの三角形で、掘り込み角は約20°である。火床部の焼土ブロック塊は円形に確認され、床面からほとんど掘り下げられていない。遺物はカマド内及び周辺から多く出土したが、図示できたのは石製品・鉄製品を含めて16点である。

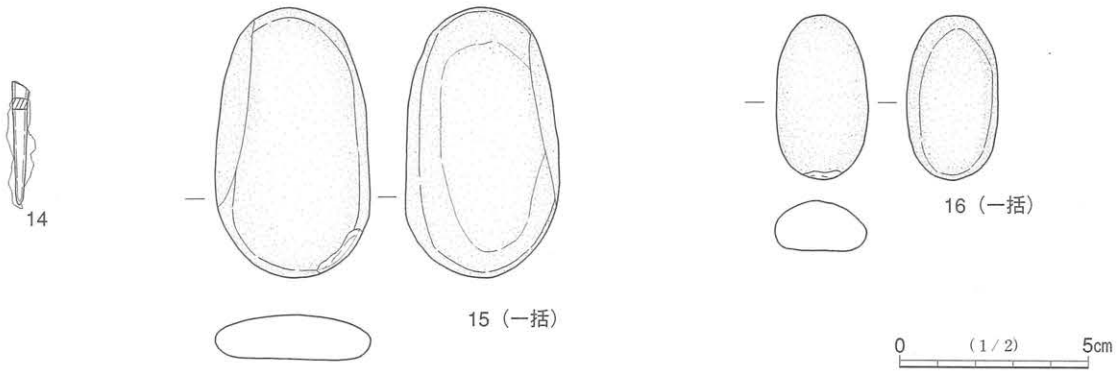
１はカマド内及び周辺の床面から出土した、須恵器の甕もしくは甑の口縁部片である。色調・調整は内面が灰色でナデ、外面は二次被熱を受けており煤が厚く付着し暗灰色でタタキが施されている。胎土には金雲母が多く含まれ、海綿骨針も微量含まれている。２～８は土師器の甕で、３・４は常総型、残りは在地型と思われる。４以外は床面及びカマド内出土である。２は内外面ともに部分的に煤が付着し、にぶい赤褐色を呈している。内面はヘラナデ、外面はヘラケズリが施されている。胎土は密で細かな砂粒がやや多めに含まれている。３は器形のわりには口径があまり広がらないタイプのもので、外面は部分的にすすが付着している。色調はにぶい褐色を呈し、胎土には金雲母及び細かな砂粒が多めに含まれている。４は口縁端部が直に立ち上がる受け口状を呈し、頸部はやや厚く内傾気味に立ち上がる。内外面ともにヘラナデが施され、色調はにぶい褐色を呈している。胎土には金雲母及び中粒の砂粒が多めに含まれている。５～８は小型甕である。５は口縁部から底部までの約１／２を遺存する。二次被熱を受けており器面の剥落が著しい。内外面ともにヘラナデが施され、底外は静止糸切り後無調整である。色調はにぶい褐色を呈しており、胎土には細かな砂粒がやや多めに含まれている。６は二次被熱を受け外面は赤褐色を呈し器面は劣化している。胎土には細かな金雲母がやや多め含まれている。７は口縁端部が直に立ち上がる受け口状を呈し、頸部は４のようには立ち上がらず「く」の字状を呈している。色調は内外面ともににぶい橙色を呈し、外面は一部に煤が付着している。胎土は密で細かな金雲母がやや多めに含まれている。８は最大径を口縁にもち、底部が小さくまとまっている。二次被熱を受けており器面及び破断面は劣化が顕著で、色調は赤褐色を呈し部分的に煤が付着している。胎土には細かな砂粒が多量に含まれている。９～13は土師器の杯で、全て床面及びカマド内出土である。９は出入り口ピットに近接した床面から、内側を上にし上から押し潰された状態で出土した。ほぼ完形で、口径15.8cm、底径6.4cm、器高5.1cmを測る。器面は全体的に摩耗が目立ち、内面には口縁部から体部中位までと底部全面にドーナツ状に黒色処理が施され、外面口縁部まで及んでいる。色調は黒色処理された部分が真っ黒で、それ以外の部分では内面がにぶい黄橙色を、外面がにぶい橙色を呈している。内面は摩耗はしているがミガキ痕跡が微かに認められ、外面はロクロナデが施されている。底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリを施し、その後部分的に手持ちヘラケズリが施されている。胎土は密で細かな赤色スコリアが多く含まれている。10はカマド右袖脇の床面から出土し、９と同様の出土状態であった。口縁部と底部のごく僅かな部分を欠損する以外はほぼ完形で、口径



１０９住カマド
1 褐色土　　ハードロームロック混入
2 褐色土　　淡黄色砂質土混入
3 淡黄色砂質土カマド袖部
4 暗灰褐色土　粘性がある
5 淡黄色砂質土多量混入

１０９住
1 暗褐色土　　ローム土・ハードロームブロック混入、しまり良い
2 暗褐色土　　ローム土・ハードロームブロック・灰白色粘土混入、しまり良い
3 ハードローム主体で暗褐色土混入、しまり良い
4 褐色土　　ローム土・ハードロームブロック・灰白色粘土混入、しまり良い
5 淡黄色砂質土多量混入

第35図　１０９住（１）

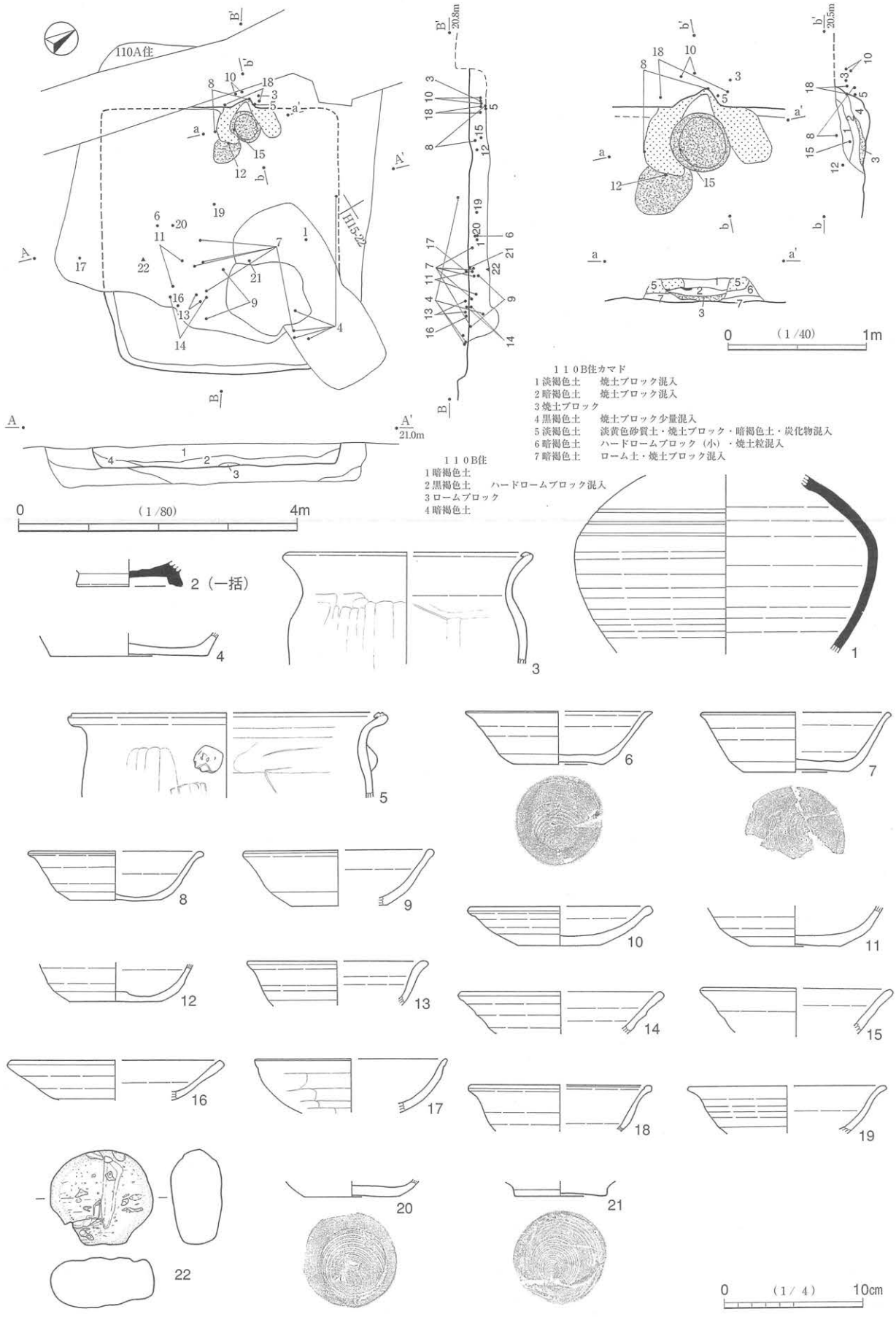


第36図　１０９住（２）

12.2cm、底径7.9cm、器高4.4cmを測る薄手の箱形である。内面は全体的に摩耗・剥離が激しく、剥離していない部分は油煙状付着物に覆われており、かろうじてロクロナデがみられる。外面はほとんど摩耗しておらずロクロナデがはっきり残っている。色調は全体的に赤褐色を呈しているが、内面の油煙状付着物の部分は黒褐色である。底外は回転糸切り後外周を回転ヘラケズリが施されている。11はカマド右袖脇の床面から10と重なり合うような状態で出土し、カマド内出土の口縁部片１点が接合した。この口縁部片は「U」字状を呈しており、打ち欠き土器との関連で興味深い資料といえる。約３／４を遺存し、口径12.7cm、底径6.8cm、器高4.0cmを測る。内面はほぼ全体に油煙状付着物が疎らに覆っており、その一部が外面口縁部まで及んでいる。内面はにぶい褐色を呈しているが、油煙状付着物のため黒っぽくみえる。外面はにぶい橙色を呈している。胎土は密で細かな黒色スコリアがやや多めに含まれている。内外面ともにロクロナデが施されているが、あまり明瞭には残っていない。底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施され、体部下端にまで及んでいる。12はカマド内出土の破片が接合した薄手の箱形である。約１／２を遺存し、復元口径11.9cm、底径7.2cm、器高3.9cmを測る。内外面は若干摩耗し、ロクロナデは不明瞭で、破断面は丸味を帯びている。色調は全体的ににぶい褐色を呈し、内外面ともに部分的に煤が付着している。胎土は密で中粒の赤色スコリアがやや多めに含まれている。底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施されている。13は薄手で小振りの箱形で、約１／２を遺存する。内面には底部から体部中位にかけて油煙状付着物に覆われ真っ黒である。器形は若干の歪みがみられ、復元口径11.0cm、復元底径7.0cm、器高4.3cmを測る。内外面ともにロクロナデが施され、色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土は密である。14は覆土中層から出土した鉄釘の先端部片で、断面は四角形である。15・16は覆土上層一括で取り上げた磨石である。石材は15が砂岩で、16が流紋岩である。

１１０Ｂ住（第37図、第６・10・19表、図版５・23・24・58）

平安時代前半の竪穴住居跡である。調査区の中央やや東よりのH15-21から、古墳時代前期初頭の110A住とほぼ全面的に重複する状態で検出された。土層断面図で示してあるとおり、本跡の大部分は110A住の覆土中に構築されている。また、西側コーナー部分は平安時代後半に帰属する土坑、110C坑・110D坑により床面下まで切られている。道路建設による削平と他遺構との重複のため、遺存状態はあまり良くない。平面形は長方形を呈し、遺存する壁の形状は急である。壁溝は巡らないようで、主柱穴及び出入り口ピット等も確認できなかった。推定規模は主軸方向に3.8m、幅3.4m、深さ0.3m、床面積約11.17㎡、主軸方向N-60°-Wである。カマドは北西壁中央やや右よりに検出されたが、左袖部周辺には旧カマドの火床部と思われる楕円形の焼土ブロック塊が認められた。旧火床部の位置から類推すると、遺存する新カマド



１１０B住カマド
1 淡褐色土　焼土ブロック混入
2 暗褐色土　焼土ブロック混入
3 焼土ブロック
4 黒褐色土　焼土ブロック少量混入
5 淡褐色土　淡黄色砂質土・焼土ブロック・暗褐色土・炭化物混入
6 暗褐色土　ハードロームブロック（小）・焼土粒混入
7 暗褐色土　ローム土・焼土ブロック混入

１１０B住
1 暗褐色土
2 黒褐色土　ハードロームブロック混入
3 ロームブロック
4 暗褐色土

第37図　１１０B住

は旧カマド解体後、壁やや右よりに規模を若干小さくした状態で構築されたと思われる。天井部は崩落しており、一部が火床部上面で確認された。両袖は基底部のみ検出され、上面はほとんど削平されていた。煙道部の掘り込みは壁から奥へ幅約40cm、奥行き約15cmの三角形で、掘り込み角は約35°である。火床部の焼土ブロック塊は円形に確認され、床面からほとんど掘り下げられていない。遺物は多く出土したが、図示できたのは石製品を含めて22点である。

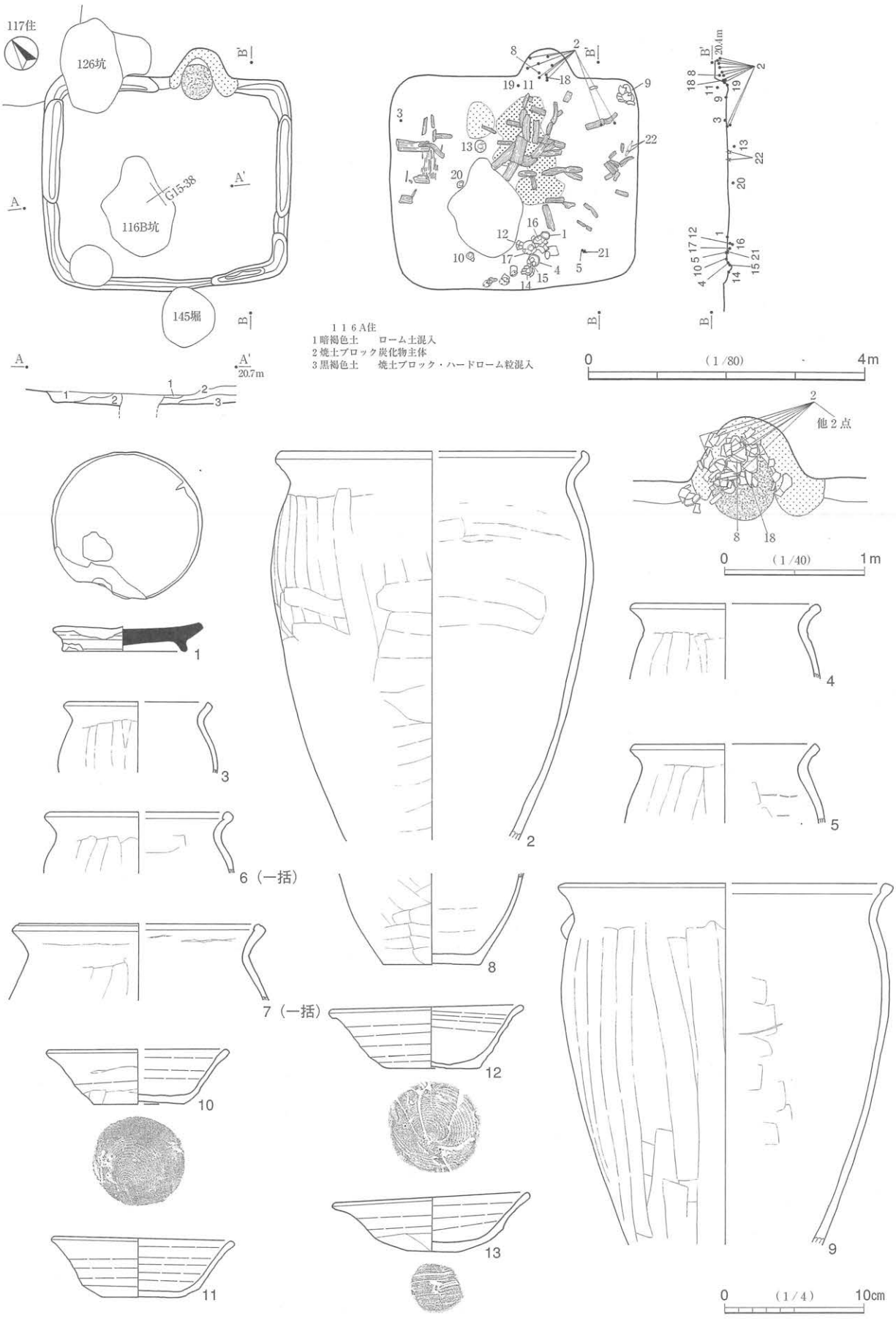
1・2は須恵器の壺の破片で東海産と思われる。1は床面出土の長頸壺の胴部片と思われ、約1／4を遺存する。内外面ともにロクロナデが施され、外面には緑色の自然釉が付着している。灰白色の胎土で硬質の焼成である。2は下層一括で取り上げた高台部の破片である。外面は部分的に灰釉がみられる。灰褐色の胎土で硬質の焼成である。3・4は土師器の甕で、在地型と思われる。5は甑の破片である。3は口縁端部が内傾し、胴部はあまり膨らまないタイプである。口縁部は内外面にロクロナデ、口縁部以下にはヘラケズリが施され、外面には煤が付着している。色調は全体的に褐色を呈し、胎土には細かな砂粒が多めに含まれている。4は薄手の底部片で、底外は回転ヘラ切り後全面に手持ちヘラケズリが施されている。底内は摩耗が激しく、剥離も部分的にみられる。色調はにぶい褐色を呈し、外面は部分的に煤が付着している。5は口縁部が鋭く外反し、端部は内傾する。把手は不整の円形で、この部分に煤が厚く付着している。色調は全体的に褐色を呈し、胎土は密で金雲母がやや多めである。6～21は土師器のロクロ杯で遺存度が良いものでも1／2程度で、全体的に遺存度は極めて悪い。6～8は同じタイプのもので、底内にはロクロナデによる凹凸が渦巻き状にみられる。色調は全体的に赤褐色を呈し、胎土は密で均一である。6・7の底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施され、8は回転ヘラ切りである。9は内外面のロクロ目はナデ消され、体部下端は大きくヘラケズリが施されている。色調はにぶい褐色を呈し、胎土に細かな砂粒と金雲母を多量に含み、器面はざらついている。10は復元器高2.9cm前後の浅めである。底内には焼成後に描かれたと思われる、極めて薄い直線的な線刻が葉脈状に認められる。底外は全面に回転ヘラケズリが施され、切り離し技法は不明である。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土は密で長石・石英・雲母が均一に含まれている。11～16は胎土に微量の海綿骨針と多量の砂粒が含まれ、器面はざらついている。14は外面に厚く、内面には薄く煤が付着している。17は体部に丸味を帯び、小さめの底部となるタイプと思われる。内外面のロクロ目はナデ消され、口縁端部は内面に回転ヘラケズリが施され若干外傾して尖っている。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土は密で微量の海綿骨針が含まれている。18・19は口縁端部が外側に反り、体部にやや丸味をもつタイプである。20は底部のみ100%遺存し、破断面は摩耗し丸味を帯びている部分が認められる。底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施されている。色調は内面がにぶい褐色、外面が灰黄褐色を呈し、胎土は密で細かな金雲母がやや多めに含まれている。21は作り出し高台部のみ100%遺存し、外面は回転糸切り後無調整である。色調は内面がにぶい橙色、外面がにぶい赤褐色を呈し、胎土は密で細かな金雲母が多めに含まれ、微量の海綿骨針も認められる。22は白色系の軽石で、長さ6.8cm、幅7.4cm、厚3.6cm、重量31.67ｇを計測する。中央に浅めの擦痕が1条あり、砥石として利用されたと思われる。

１１６Ａ住（第38・39図、第6・10・19表、図版6・24・25・53・56）

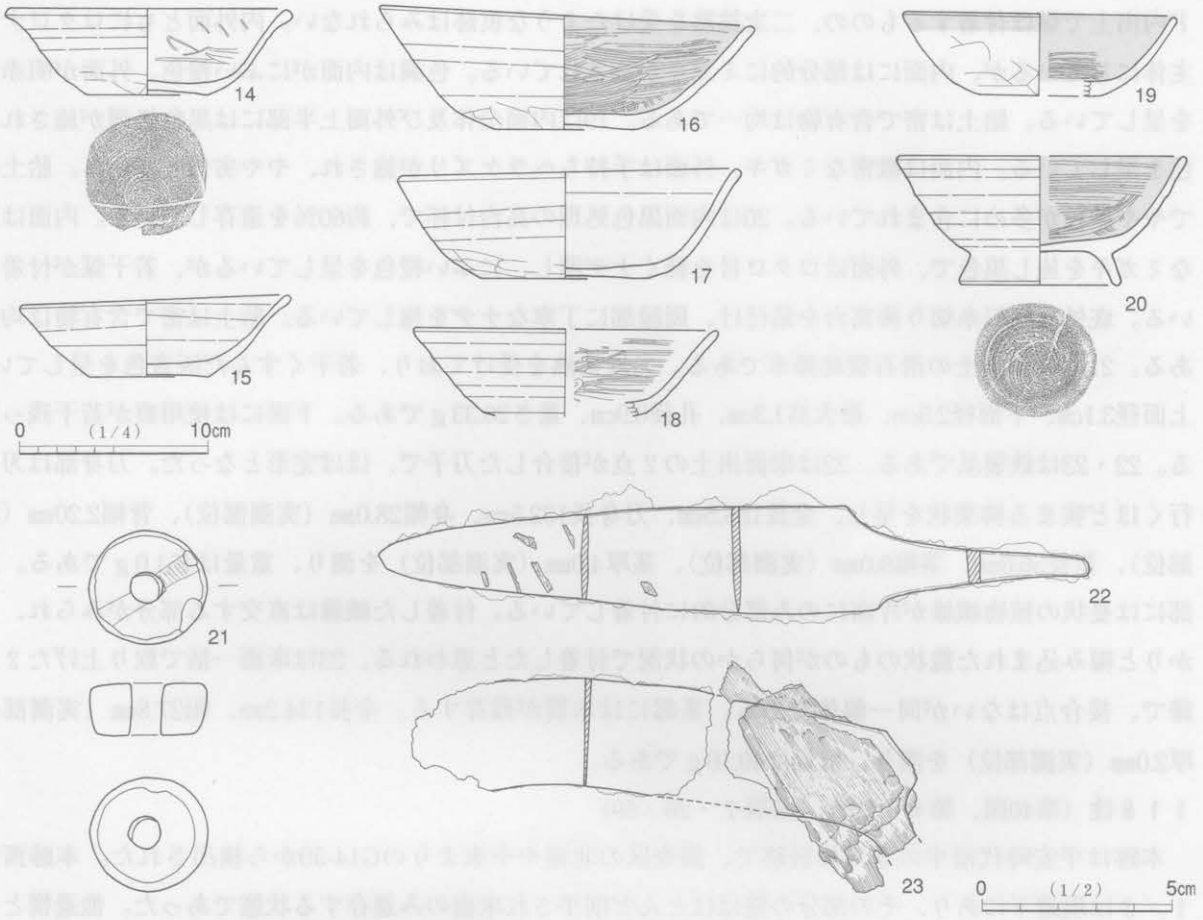
本跡は平安時代前半の竪穴住居跡で、焼失住居である。調査区の中央やや東よりで、110B住の西側へ約3ｍ隔たったG15-27から検出された。本跡西側約1／3は現道下にあり、その部分の壁はほとんど削平され床面のみ遺存する状態であった。他遺構との重複関係では、117住を切り、土坑116B坑と145掘の柱穴P6

・P9にそれぞれ切られ、全体的に遺存状態はあまり良くない。平面形は隅丸長方形を呈し、遺存する壁の形状は急である。壁溝は全周するが、部分的に深さが異なる。主柱穴及び出入り口ピット等は確認できなかった。規模は主軸方向に3.1m、幅3.6m、深さ0.2m、床面積約8.10㎡、主軸方向N-36°-Eである。カマドは北東壁中央やや右よりに検出されたが、上部は削平され袖の基底部及び火床部が遺存するにとどまった。火床部は楕円形の焼土ブロック塊が、厚いところで7㎝程度とやや厚めに認められた。火床部の位置から察すると、カマド自体は住居外に張り出すように構築されており、焚き口部は壁に極めて近い位置であったように思われる。掘り込みは壁から奥へ幅約90㎝、奥行き約50㎝以上で、掘り込み角は約70°である。カマド左袖に近接する床面からは、カマド構築材の淡黄色砂質土が固まって検出された。おそらくカマド補強用として置いていたものが、火災を受け硬化したものであろう。カマド前面から本跡中央部にかけての床面には焼土が集中しており、炭化材も折り重なるように検出された。炭化材は床面の広範囲に検出され、特に北西壁側の炭化材は太い篠竹を平行に並べたような状態であった。これらの炭化材は本跡の屋根材等に用いられたものであろうが、柱穴が未検出の状況でどのようにこれだけの屋根を支えたのか疑問が残る。出土遺物のほとんどは床面及び床面直上からの出土で、図示できたものは石製品・鉄製品を含めて23点である。

1は須恵器の高台付の杯か椀かのどちらかと思われる高台部片である。色調は黄灰色を呈し固い焼成で、東海産と思われる。破断面は角がなくなるように研磨され、丸味を帯びている。底内はロクロナデによる渦状の凹凸がみえなくなるくらい均一に研磨され、中央部に向かい若干凹んでいる。硯として再利用するために加工されたと思われるが、墨の痕跡がみられないため使用したかどうかは不明である。2～8は土師器の甕で、2は常総型、残りは小型の在地型と思われる。2は大部分がカマド内から細かな破片として出土し、カマドに近い床面出土の破片2点と接合した。底部は削り取られたように全欠し、全体の約1／2を遺存する。焼失住居にもかかわらず器面の摩耗及び劣化もみられず、二次被熱を受けた様子が無いため、焼失後のカマド内に細かく砕いた破片を投入したと思われる。復元口径は21.6㎝で、内面はにぶい褐色を呈しヘラナデ、外面は明赤褐色を呈し手持ちヘラケズリが施されている。胎土は密で含有物は均一である。3～8は土師器の甕で遺存度10%以下の小型甕の小片で、全体的に二次被熱を受け摩耗・劣化・器面剥離等が顕著みられる。これらは本跡火災時によるものと思われる。色調は異なるものの、いずれも調整は内面にヘラナデ及びナデ、外面に手持ちヘラケズリが施されている。胎土についても特に目立った相違はみられず、含有物もほぼ均一である。9は土師器の甑で、西側コーナー床面から押し潰された状態で出土した。約1／2を遺存するが底部は欠損し、内外面は二次被熱を受け若干劣化し煤が部分的に厚く付着している。把手は不整の円形で、全体のバランスからみればやや小さめである。内面は横位のヘラナデ、外面は縦位の手持ちヘラケズリが施されている。色調は内外面ともににぶい黄褐色を呈し、胎土はやや砂粒が多めに含まれている。10～19は土師器の杯で、18・19以外は遺存度は高い。カマド内出土の18を除けばほとんど二次被熱の影響を受けているようである。10は全体的につくりは雑で、内外面の上半部に厚く煤が付着し全体的に黒褐色を呈している。内面は底部にロクロナデによる渦状の凹凸が明瞭に残り、体部はナデ消されている。外面は体部に雑な手持ちヘラケズリ、底部は回転糸切り後外周に雑な手持ちヘラケズリが施されている。胎土には細かな砂粒がやや多めに含まれている。11は内外面ともにロクロナデが施され、器面全体には渦状の凹凸が明瞭に残る。底外は回転糸切り後ほぼ全体に手持ちヘラケズリが施されている。色調は橙色を呈し、胎土には細かな砂粒と赤色スコリアが多めに含まれている。12・13はほぼ完


117住
126坑
116B坑
G15-38
145堀
A
A'
B
B'
20.7m
1 暗褐色土　ローム土混入
2 焼土ブロック炭化物主体
3 黒褐色土　焼土ブロック・ハードローム粒混入
他2点
0 (1/80) 4m
0 (1/40) 1m
0 (1/4) 10cm
6（一括）
7（一括）

第38図　１１６A住（1）



第39図　１１６Ａ住（２）

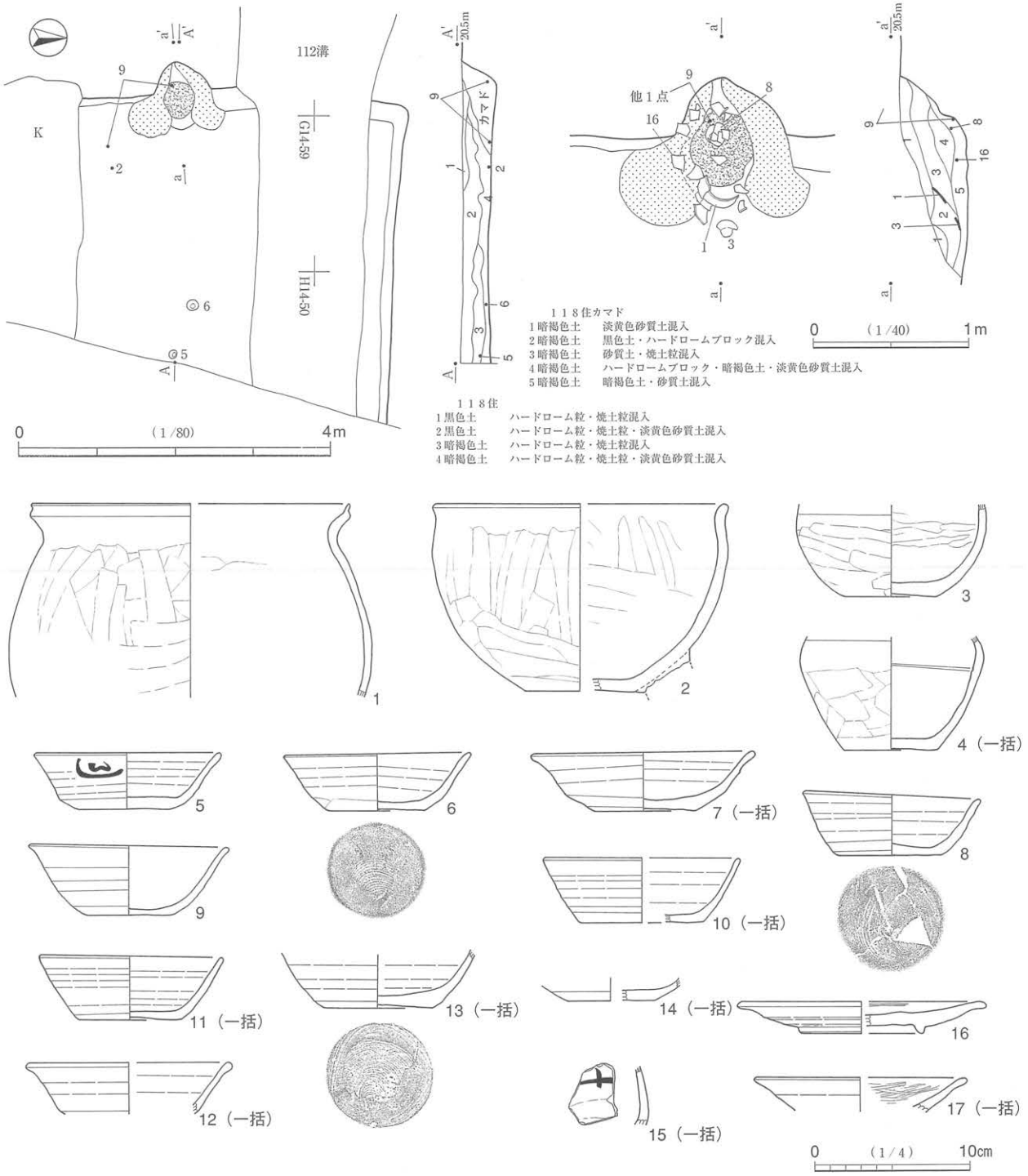
形で、歪みが大きく雑なつくりである。内外面ともに黒色処理を施したかのように煤が厚く付着し黒褐色を呈し、ロクロナデによる渦状の凹凸が明瞭に残る部分もあるが体部の一部はナデ消されている。底外は12が回転糸切り後無調整のままである。13は小さな底部であまり安定感が無く、歪みがあり正位の状態では口縁部が斜めに傾き、平面的には楕円形を呈している。全面手持ちヘラケズリである。14は内外面ともにロクロナデが主体であるが、内面はロクロ目をナデ消した後、部分的にミガキが施されている。底外は回転糸切り後軽いナデが施されている。内外面ともに煤が薄く全面に付着し黒褐色を呈し、胎土は砂粒が多量に含まれざらついている。15はほぼ完形で、器面全体に煤が薄く付着し、にぶい赤褐色を呈している。口径13.9cm、底径6.2cm、器高4.4cmを測る。内外面ともにロクロナデが施され、底外は全面手持ちヘラケズリのため切り離し技法は不明である。胎土はやや砂粒が多めに含まれている。16・17はやや大型の土師器の杯で、いずれも完形に近い。16は歪みがあり正位の状態では口縁部が斜めに傾き、平面的には楕円形を呈しているため、口径19.4cm～20.5cm、底径7.0cm～7.4cm、器高3.4cm～4.4cmと計測値に幅がある。内面は黒色処理が施され黒色を呈し、緻密なミガキが施されている。外面はにぶい橙色を呈しているが、全体に煤が付着し黒褐色を呈す部分もあり、ロクロ目が残っている。底外は回転糸切り後ほぼ全面に手持ちヘラケズリが施されている。胎土は密で含有物は均一である。17は器形は整っているが、器面が若干摩耗し部分的に煤が付着している。内面はにぶい褐色を呈し、ロクロ目をナデ消している。外面はにぶい橙色を呈し、ロクロ目が残っている。底外は全面ヘラナデが施され、切り離し技法は不明である。胎土は細かな砂粒が多量に含まれざらついている。18・19は底部を欠損する破片で、遺存度は20%前後である。18はカマ

ド内出土で煤は付着するものの、二次被熱を受けたような痕跡はみられない。内外面ともにロクロナデを主体にしているが、内面には部分的にミガキが施されている。色調は内面がにぶい橙色、外面が明赤褐色を呈している。胎土は密で含有物は均一である。19は内面全体及び外面上半部には黒色処理が施され、黒色を呈している。内面は緻密なミガキ、外面は手持ちヘラケズリが施され、やや劣化している。胎土は密でやや砂粒が多めに含まれている。20は内面黒色処理の高台付杯で、約60%を遺存している。内面は緻密なミガキを施し黒色で、外面はロクロ目を軽くナデ消し、にぶい橙色を呈しているが、若干煤が付着している。底外は回転糸切り後高台を貼付け、周縁部に丁寧なナデを施している。胎土は密で含有物は均一である。21は床面出土の滑石製紡錘車である。二次被熱を受けており、若干くすんだ灰青色を呈している。上面径3.1cm、下面径2.5cm、最大高1.3cm、孔径0.9cm、重さ20.33ｇである。下面には使用痕が若干残っている。22・23は鉄製品である。22は床面出土の２点が接合した刀子で、ほぼ完形となった。刀身部は刃先に行くほど狭まる柳葉状を呈し、全長188.5㎜、刀身長132.5㎜、身幅28.0㎜（実測部位）、背幅2.20㎜（実測部位）、茎長56.0㎜、茎幅9.0㎜（実測部位）、茎厚4.0㎜（実測部位）を測り、重量は451.0ｇである。刀身部には蔓状の植物繊維が片面にのみ部分的に付着している。付着した繊維は直交する部分がみられ、しっかりと編み込まれた籠状のものが何らかの状況で付着したと思われる。23は床面一括で取り上げた２点の鎌で、接合点はないが同一個体である。茎部には木質が残存する。全長134.2㎜、幅27.8㎜（実測部位）、厚2.0㎜（実測部位）を測り、重量は40.16ｇである。

１１８住（第40図、第６・10表、図版７・26・59）

本跡は平安時代前半の竪穴住居跡で、調査区の北側やや東よりのG14-59から検出された。本跡西側約１／３は現道下にあり、その部分の壁はほとんど削平され床面のみ遺存する状態であった。他遺構との重複関係では、139住・140住を切り、112溝に床面下まで切られ、南壁側は現代の攪乱によりほとんど削平されていた。全体的に遺存状態は極めて悪いといえる。平面形は方形を呈すものと思われ、遺存する壁の形状は急である。壁溝は確認できる範囲では巡っておらず、主柱穴及び出入り口ピット等は確認できなかった。規模は不明な点が多く、遺存する部分の深さは0.4ｍ、主軸方向はN-90°-Wである。カマドは西壁中央部と思われる位置に検出され、天井部は落盤していたがカマド自体の遺存状態は良好であった。火床部は楕円形の焼土ブロック塊が薄く確認され、掘り込みはほとんど認められなかった。火床部の位置から察すると、カマド自体は住居外に張り出すように構築されている。掘り込みは壁から奥へ幅約70cm、奥行き約40cmで、掘り込み角は約40°である。カマド両袖は補強のために淡黄色砂質土が付け足され、基底部においては肥大化している。カマド内からの出土遺物は多く、図示できた遺物の内約１／３を数える。

１はカマド焚き口部からまとまって出土した破片が接合した土師器の甕で、常総型と思われる。全体の遺存度は10%前後で、若干の摩耗がみられ内外面には部分的に煤が付着している。内面はヘラナデ、外面は手持ちヘラケズリが施されている。色調は内面が明褐色、外面がにぶい赤褐色を呈し、胎土は金雲母と砂粒が多めに含まれている。２は器形から察すると土師質の火舎と思われ、全体の約１／３を遺存する。小さく平らな底部の外縁には、径3.5cm前後の円形のやや盛り上がった破断面が認められ、脚が折損した部分と思われる。この破断面の間隔から察すると脚は３本あったと思われる。復元口径18.4cm、底部から口縁部までの器高7.0cm、器厚は厚く0.6cmを計測する。二次被熱を受け内外面ともに器面の荒れが顕著で、煤がまだらに付着している。外面は器面が赤褐色に変色している部分があり、濃淡はあるものの真っ黒な黒斑が襷状に認められる。この黒斑は脚の破断面にもみられるため、脚折損後に付着したものと考えられ



第40図　１１８住

る。色調は内面がにぶい褐色、外面がにぶい赤褐色を呈し、胎土には細かな砂粒を多量に含み、器面全体にざらつきを感じる。調整は内面に雑なヘラナデ、外面に手持ちヘラケズリが施されている。３・４は土師器の小型壺で、胴部下半部から底部までを遺存している。３はカマド焚き口部から出土した破片とカマド周辺の覆土下層一括で取り上げた破片が接合したもので、胴上半部を除いた胴下半部から底部までの遺存度は約70%である。二次被熱を受け内外面ともに摩耗が激しく、破断面も鋭さが全くなく丸味を帯びている。遺存する上端部の破断面はほとんど凹凸がなく直線的で、意図的に上半部を欠いたものと考えられる。カマドとの関連から支脚代用品の可能性が高い。内面は明褐色を呈し、ヘラナデが僅かに残る。外面

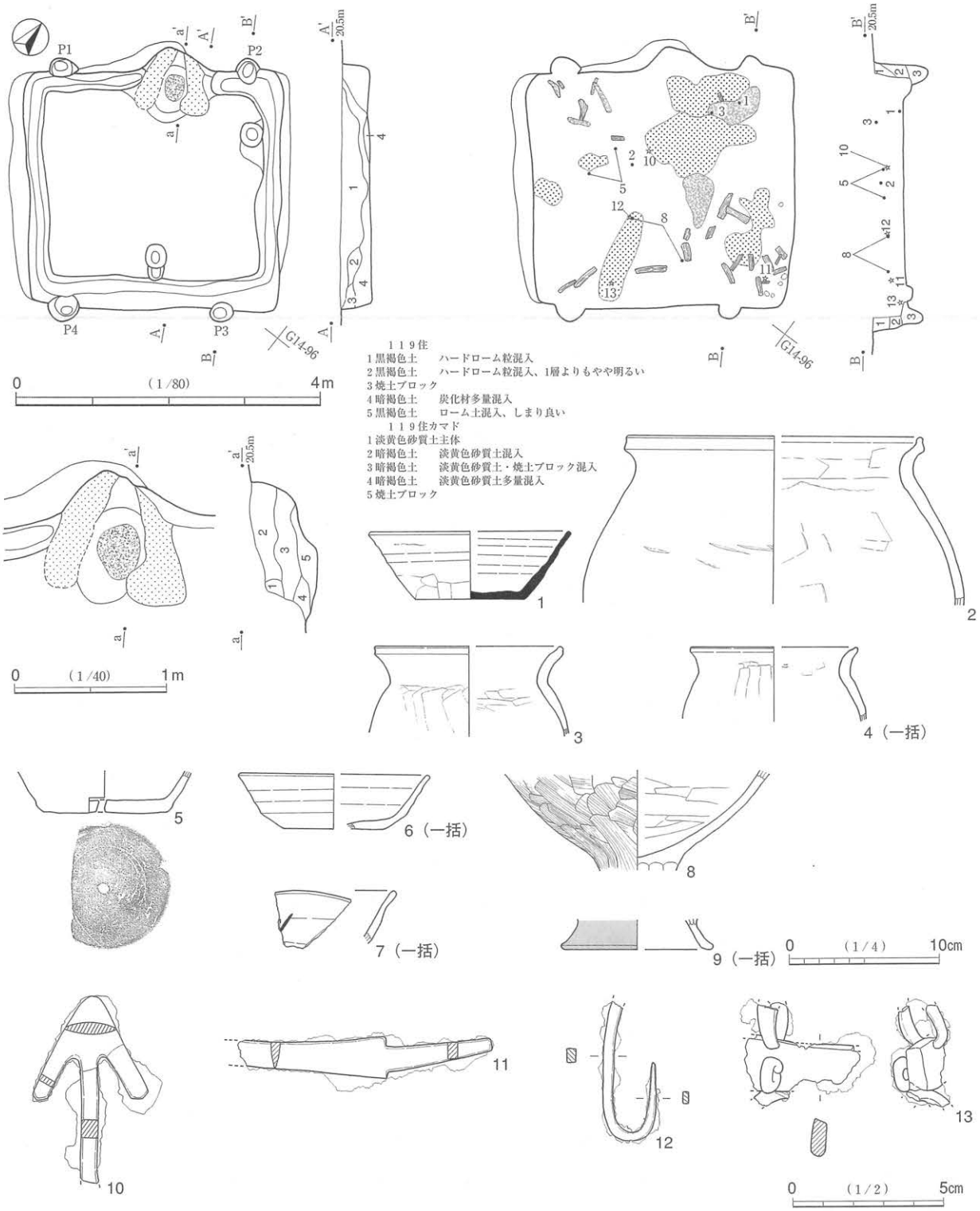
は橙色を基調とするが大部分に煤が付着しており全体的に黒褐色を呈し、やや雑な手持ちヘラケズリが施されている。底外は回転糸切り後部分的に手持ちヘラケズリが施されている。胎土は密で含有物は均一である。4はカマド内一括で取り上げたもので、胴上位から底部にかけて100%遺存する。3とほとんど同様の痕跡がみられ摩耗も顕著で、支脚代用品の可能性が高い。5～12は土師器の杯で、5～8はほぼ完形である。5は墨書土器である。墨書は体部外面上半部に描かれ、見た目では極めて薄い。くずし字とすれば「シンニョウ」を使った文字の可能性もあるが、判読不明である。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は密で含有物は均一である。ロクロナデを主体とし、底外は回転ヘラ切り後軽いナデが施されている。6はにぶい褐色を呈し、調整・胎土とも5に類似する。底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施されている。7～12は色調は橙色、胎土は密で、調整はロクロナデを主体とし底部及び外縁部に回転ヘラケズリが施されている。底部切り離し技法は、7・9・11が回転ヘラ切りでその後軽いナデ、8・10が回転糸切りでその後外周に回転ヘラケズリが施されている。13～15、17は土師器片で、現場では重複している140住の遺物として覆土下層一括で取り上げられた。しかし、140住との時期が大きく異なり不都合が生じるため、整理時にこの遺物4点が帰属する遺構を、重複する118住に変更した。出土地点は両遺構が完全に重複する部分であるため全く問題はない。13～15は杯片で、17は皿片である。いずれも色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土は密でやや赤色スコリアを多く含んでいる。調整はロクロナデを主体としておりほとんど共通している。13の底外は回転糸切り後外周に手持ちヘラケズリが施されている。14は全面回転ヘラケズリが施され、切り離し技法は不明である。15は体部外面中位に墨書が描かれているが、小片のため判読不能である。16・17は皿片である。16は高台付で、カマド内からの出土である。器高は約2.0cmで極めて浅く、内面中央部には径5cm前後の円形の凹みがみられる。内面には丁寧なナデとミガキ、外面にはロクロナデ施され、特に貼付高台周辺は精緻である。色調は明赤褐色を呈し、胎土は密で含有物は均一である。17は底部を欠損しており高台については不明であるが、16よりも深めである。内外面ともにロクロナデを主体とし、色調はにぶい赤褐色を呈している。胎土には赤色スコリアをやや多めに含んでいる。

１１９住（第41図、第6・10・14・15・17表、図版7・26・27・53・54・59）

本跡は平安時代前半の竪穴住居跡で、調査区の中央部やや北よりのG14-84から検出された。本跡と他遺構との重複関係では、141住、130溝を切り、147掘の柱穴P12にカマド左袖の一部を切られていたが、全体的に遺存状態は良いといえる。床面からは炭化材・炭化物・焼土が多量に検出され、本跡は焼失住居と思われる。平面形は方形を呈し、遺存する壁の形状は直である。南西側の壁が若干の段差をもって2段になっており慎重に調査を続行した結果、1段目の壁は旧住居の壁であることが分かった。このことで、本跡はほとんど同規模のまま北東側に30cm前後移動した、建替住居であることが分かった。規模は主軸方向に3.2m、幅3.5m、深さ0.4m、床面積6.55㎡、主軸方向N-35°-Wである。壁溝は全周し幅22cm～34cm、深さ6cm～9cmを計測する。壁柱穴が北西壁と南東壁に計4か所検出され、確認面からの深さはP1＝61cm、P2＝73cm、P3＝84cm、P4＝67cmを測る。出入り口ピットはカマド対壁の中央直下に検出され、床面からの深さ24cmである。床面は平らで特に硬化した部分は検出されなかった。北東壁直下には深さ約26cmの柱穴が検出されているが用途は不明である。カマドは北西壁中央部やや東よりに検出され、天井部は落盤し、左袖部は基底部を残し147掘の柱穴P12に削平されていた。火床部は楕円形の焼土ブロック塊が薄く確認され、掘り込みはほとんど認められなかった。火床部の位置から察すると、カマド煙道部は住居外に張り出すように構築されている。掘り込みは壁から奥へ幅約70cm、奥行き約30cmで、掘り込み角は約20°である。

遺構内の堆積土は大まかに３層に分離でき、自然埋没と思われる。出土遺物は少なく、図示できた遺物は鉄器も含めると13点である。

１はカマド右袖周辺の床面から出土した須恵器の杯で、約１／２を遺存する。復元口径13.0cm、底径7.3cm、器高4.5cmを測る。白色雲母を多量に含み焼成は軟質で茨城産と思われる。色調は灰色を呈し、内外面ともロクロナデを主体とし、内面には渦状のロクロ目が明瞭に残る。外面底部縁辺部及び底外は手持ち

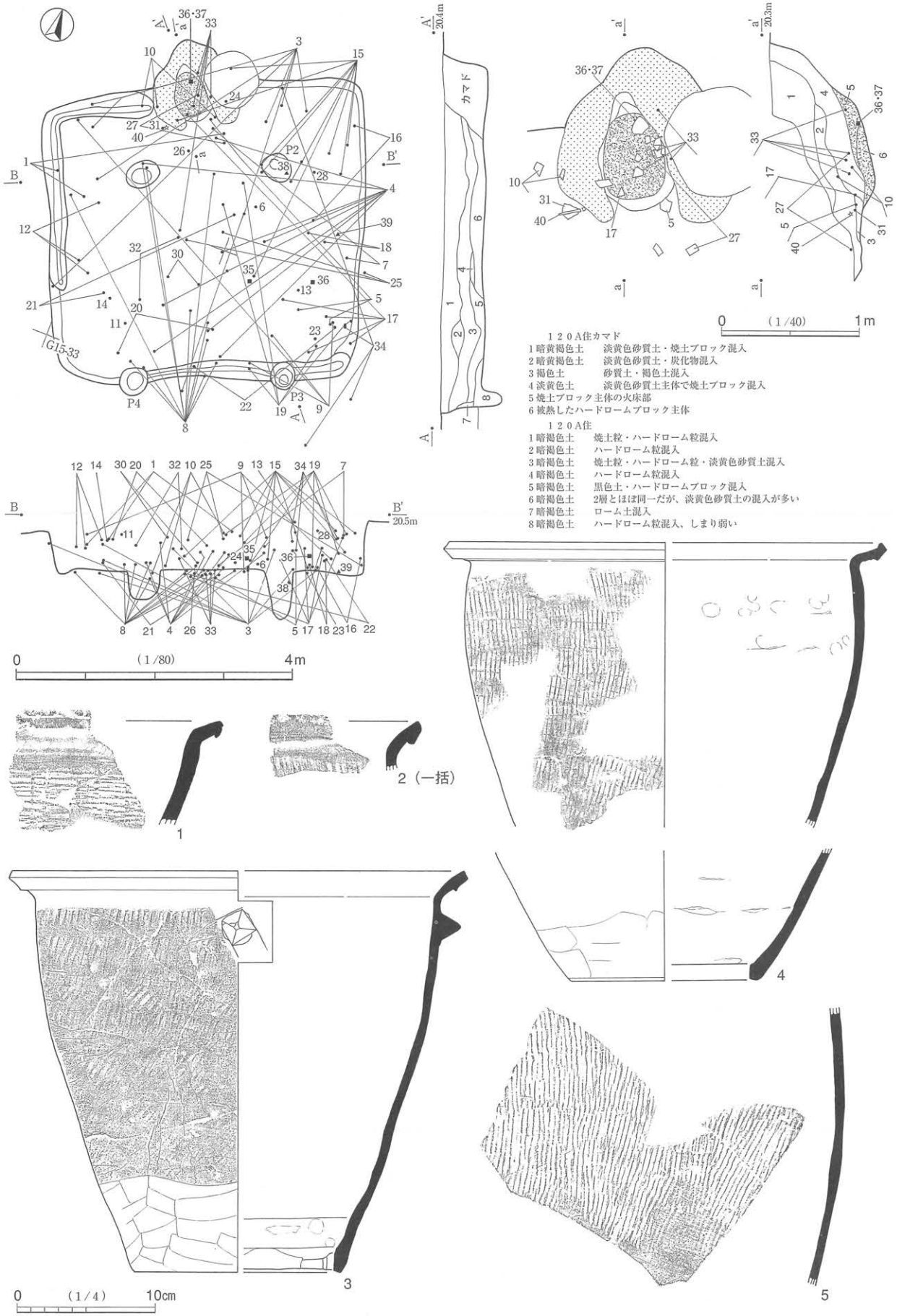


第41図　１１９住

ヘラケズリが施されている。2～5は土師器の甕片で、2が常総型、3～5が小型の在地型と思われる。いずれも覆土上・中層から出土しており遺存度は極めて低く、調整はヘラナデが主体に施され、色調は赤褐色及び黄褐色を呈している。胎土は若干異なり、2は胎土には中粒の砂粒及び金雲母を多量に含み、器面はざらついている。3は細かな砂粒をやや多めで、海綿骨針が微量含まれている。4・5は密で含有物は均一である。5は底外回転糸切り後回転ヘラケズリを施している。底部中央には、焼成後に底外から底内に向かって開けられた円形の小さな穿孔がある。径は外側で6.5㎜、内側で4.9㎜を測る。削り面は凹凸が全くなく綺麗に研磨されており、おそらく金属のような固く先の尖った工具が使用されたと思われる。底外にはもう一か所、同一工具によるものと思われる、穿孔途中の径2㎜弱の非常に小さな円錐状の凹みが認められる。祭祀的用途かどうかは不明である。6・7は覆土一括で取り上げた土師器の杯片で、胎土は密でロクロナデが主体である。6は内外面に煤が厚く付着し、色調は暗褐色を呈している。7は墨書土器であるが、小片のため判読不能である。8は古墳時代前期の台付甕の一部で、覆土中層出土として取り上げられたが、本跡には明らかに伴わない土器である。ここでは一資料として取り扱う。外面はハケ、内面はやや雑なヘラナデが施され、胎土には砂粒と赤色スコリアが多めに含まれている。色調は赤褐色を呈すが、内外面ともに二次被熱を受け煤が厚く付着し、やや黒味がかっている。9は覆土中層一括で取り上げた、土師器の高台付杯の高台部片だと思われる。外面には部分的に赤彩がみられ、高台部内面を除く器面には赤彩が施されていた可能性が高い。10～13は鉄製品である。10は箆被下端部から茎部を欠損し、深い逆刺の三角形の鏃身をもつ鉄鏃である。残存長61.7㎜、鏃身長32.5㎜、鏃身幅37.7㎜、残存逆刺長14.0㎜、逆刺幅5.7㎜を計測する。11は刀子で刀身部中程から先端部を欠損している。全長83.8㎜、刀身長48.5㎜、身幅8.9㎜（実測部位）、背幅4.0㎜（実測部位）、茎長35.3㎜、茎幅6.0㎜（実測部位）、茎厚4.5㎜（実測部位）を測り、重量は10.34ｇである。12は覆土中層から出土した、先端部がU字状に折れ曲がった閂金具の一部と思われる。幅5.0㎜、厚3.8㎜を測り、重量は4.68ｇである。13は床面出土の飾り金具の破片と思われる。三方向に鉄の輪がみられる。この他に図示はしていないが、覆土中層一括で鉄滓が取り上げられている。重量は470ｇで、写真図版54で示した。

１２０Ａ住（第42～44図、第6・10・14・18・19表、図版8・27～29・53・55・56）

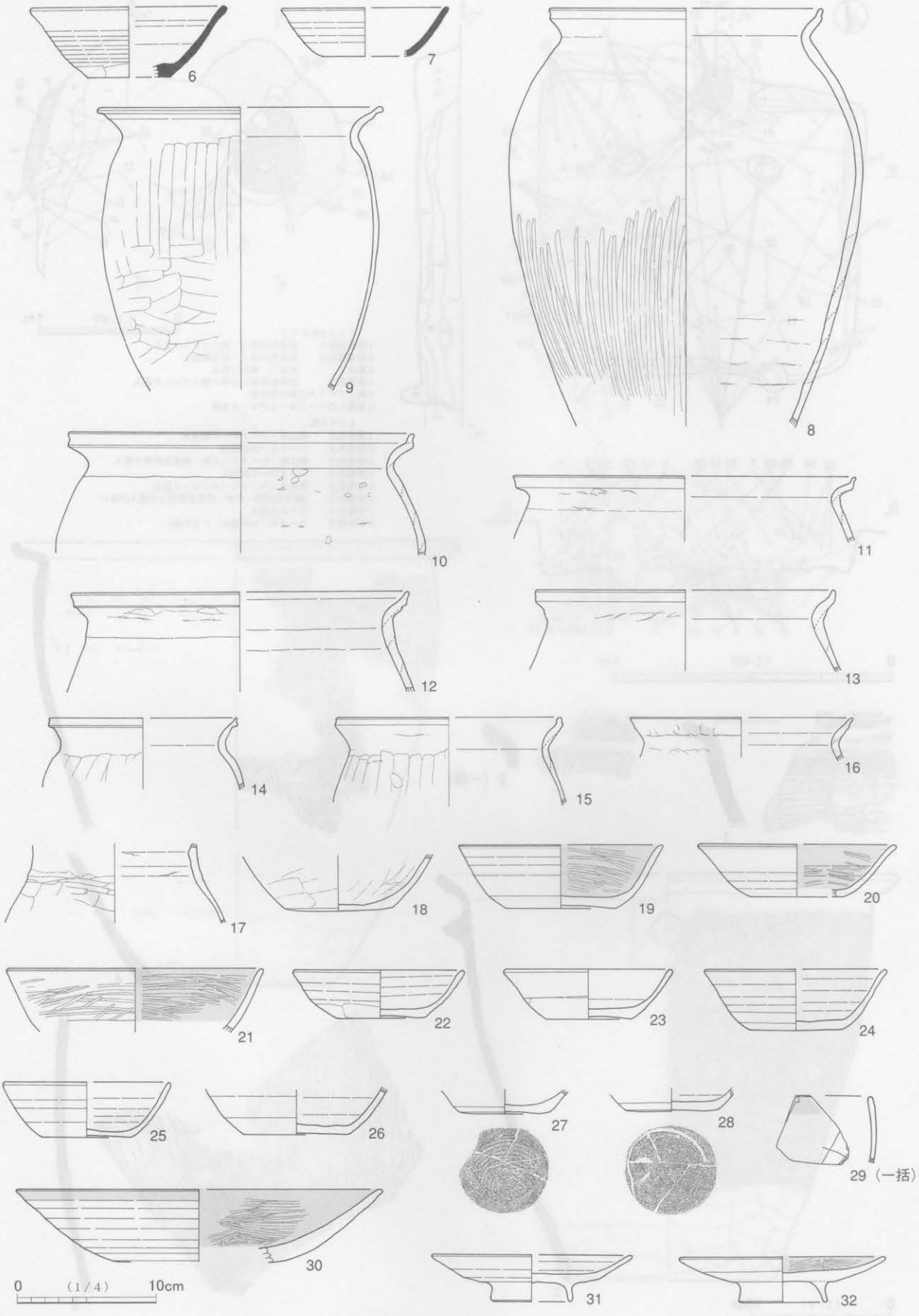
本跡は平安時代前半の竪穴住居跡で、調査区のほぼ中央のG15-22から検出された。同一時期である竪穴住居跡119住から南に2ｍ隔たっている。本跡と他遺構との重複関係では、120B住、130溝を切り、144掘の柱穴P14にカマド右袖を切られていたが、全体的に遺存状態は良く、出土遺物も多い。平面形は方形を呈し、遺存する壁の形状は直である。南側の約半分を120B住と重複するが、床面レベルでは本跡の方が約10cm程度深い。規模は主軸方向に4.4ｍ、幅4.7ｍ、深さ0.6ｍ、床面積16.06㎡、主軸方向N-23°-Wである。壁溝はカマド左袖から西壁の一部と南壁の一部に検出され全周しない。主柱穴は4基で、うち南側の柱穴2基は壁柱穴である。深さはP1＝45cm、P2＝70cm、P3＝42cm、P4＝34cmを測る。床面は平らで特に硬化した部分は検出されなかった。カマドは北壁中央部に検出され、天井部は落盤し、右袖部は基底部まで144掘の柱穴P14に削平されていた。火床部は楕円形の焼土ブロック塊が厚く確認され、掘り込みは20cm前後認められた。火床部の位置から察すると、カマド煙道部は住居外に張り出すように構築されている。掘り込みは壁から奥へ幅約90cm、奥行き約60cmで、掘り込み角は30°～50°である。遺構内の堆積土は大まかに3層に分離でき、自然埋没と思われる。遺物は覆土上層から床面まで満遍なく出土し、図示できた遺物は計40点である。土器の器種も多彩で、土製品・石製品・金属製品とバラエティーに富んでいる。



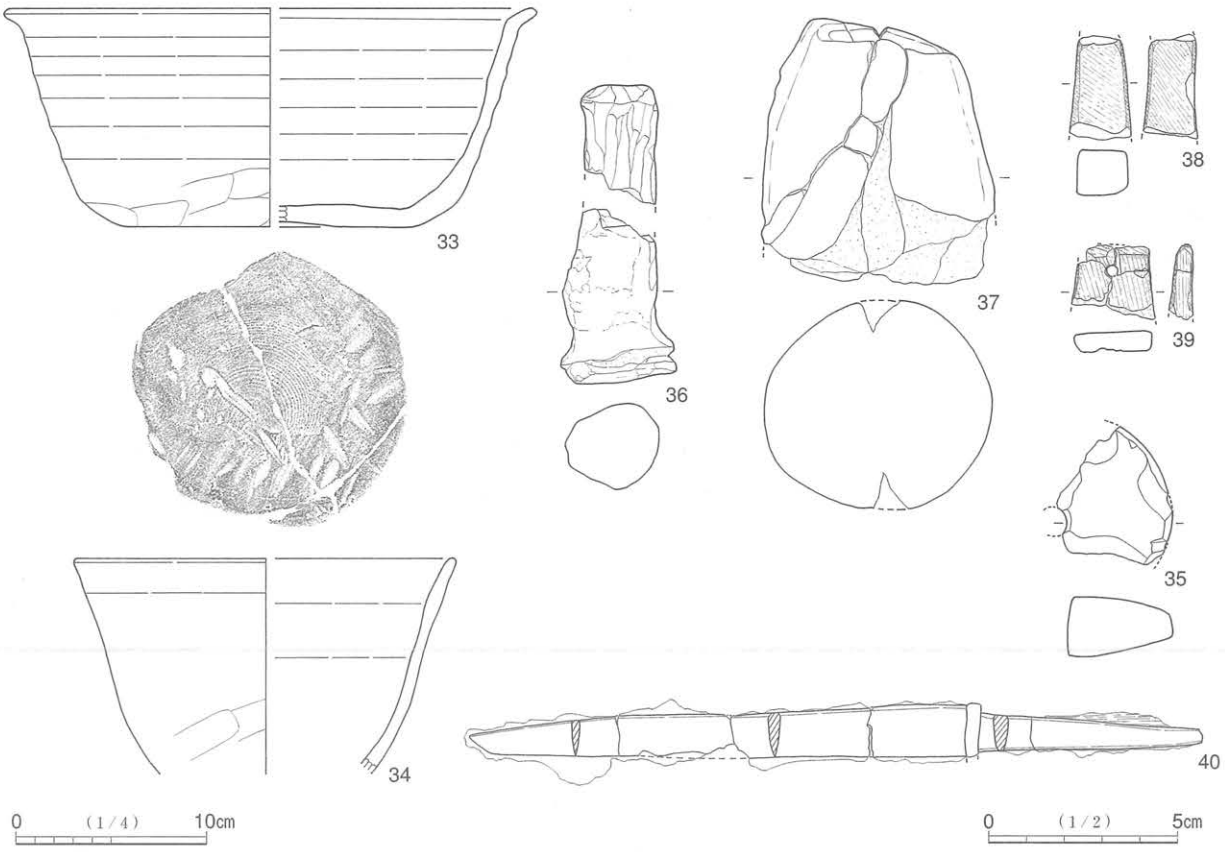
１２０A住カマド
1 暗黄褐色土　淡黄色砂質土・焼土ブロック混入
2 暗黄褐色土　淡黄色砂質土・炭化物混入
3 褐色土　砂質土・褐色土混入
4 淡黄色土　淡黄色砂質土主体で焼土ブロック混入
5 焼土ブロック主体の火床部
6 被熱したハードロームブロック主体

１２０A住
1 暗褐色土　焼土粒・ハードローム粒混入
2 暗褐色土　ハードローム粒混入
3 暗褐色土　焼土粒・ハードローム粒・淡黄色砂質土混入
4 暗褐色土　ハードローム粒混入
5 暗褐色土　黒色土・ハードロームブロック混入
6 暗褐色土　2層とほぼ同一だが、淡黄色砂質土の混入が多い
7 暗褐色土　ローム土混入
8 暗褐色土　ハードローム粒混入、しまり弱い

第42図　１２０A住（１）


6
7
9
8
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29（一括）
30
31
32
0 (1/4) 10cm

第43図　１２０Ａ住（２）



第44図　１２０Ａ住（３）

１～５は須恵器の甕・甑類である。１は覆土上・中層から出土した茨城産須恵器で、甕又は甑の口縁部片である。内面にヘラナデ、外面に横に揃った平行タタキが施されている。胎土には白色雲母を多量に含み、色調は黄灰色を呈し、やや軟質の焼成である。２は覆土下層一括で取り上げた千葉産須恵器甕の口縁部片である。いわゆる「クスベ」焼成で不明瞭な縦に揃った平行タタキが施され、色調は褐灰色を呈し、胎土には微量の海綿骨針が含まれている。３～５は茨城産須恵器甑で、出土層位は一定せず、しかも、かなり離れた位置から出土した破片が接合した。３は全体の約１／２を遺存し、復元口径32.7cm、底径14.9cm、器高29.2cmを測る。白色雲母は比較的少なく焼成は軟質である。色調は黄灰色を呈し、外面は縦位及び斜位の不明瞭な平行タタキが胴部下位途中までおよび、以下底部までは横位の手持ちヘラケズリが施されている。把手は正四角錐に面取られている。４は底部片と口縁部片の接合点のない同一個体である。全体の約１／３を遺存し、復元口径3.13cm、底径13.4cm、器高27.4cmを測る。色調・焼成・調整ともに３とほぼ同様であるが、白色雲母は３より粒も大きく多めで、平行タタキは明瞭である。５は細かな金雲母をやや多めに含み、焼成は軟質である。色調は黄灰色を呈し、外面は縦位及び斜位の明瞭な平行タタキが施され、一部に横位のヘラケズリがみられる。６・７は茨城産須恵器杯片である。ともにやや粒の細かい白色雲母が多量に含まれ、内外面ともにロクロ目を軽くナデ消している。色調は灰色であるが、６は二次被熱を受け一部褐色に変色している。７は海綿骨針をやや多めに含んでいる。８～18は土師器甕である。８は常総甕である。受け口の長胴で、胎土は粗く大粒の白色雲母を多量に含んでいる。二次被熱が著しく、器面は内外面ともに劣化している。外面胴下部は縦位の粗いミガキ、内面はヘラナデが施され、色調はにぶい赤褐色を呈している。９は底部は欠損するが長胴で左右に広がる口縁部を持ち、内面はヘラナデ、外面はヘ

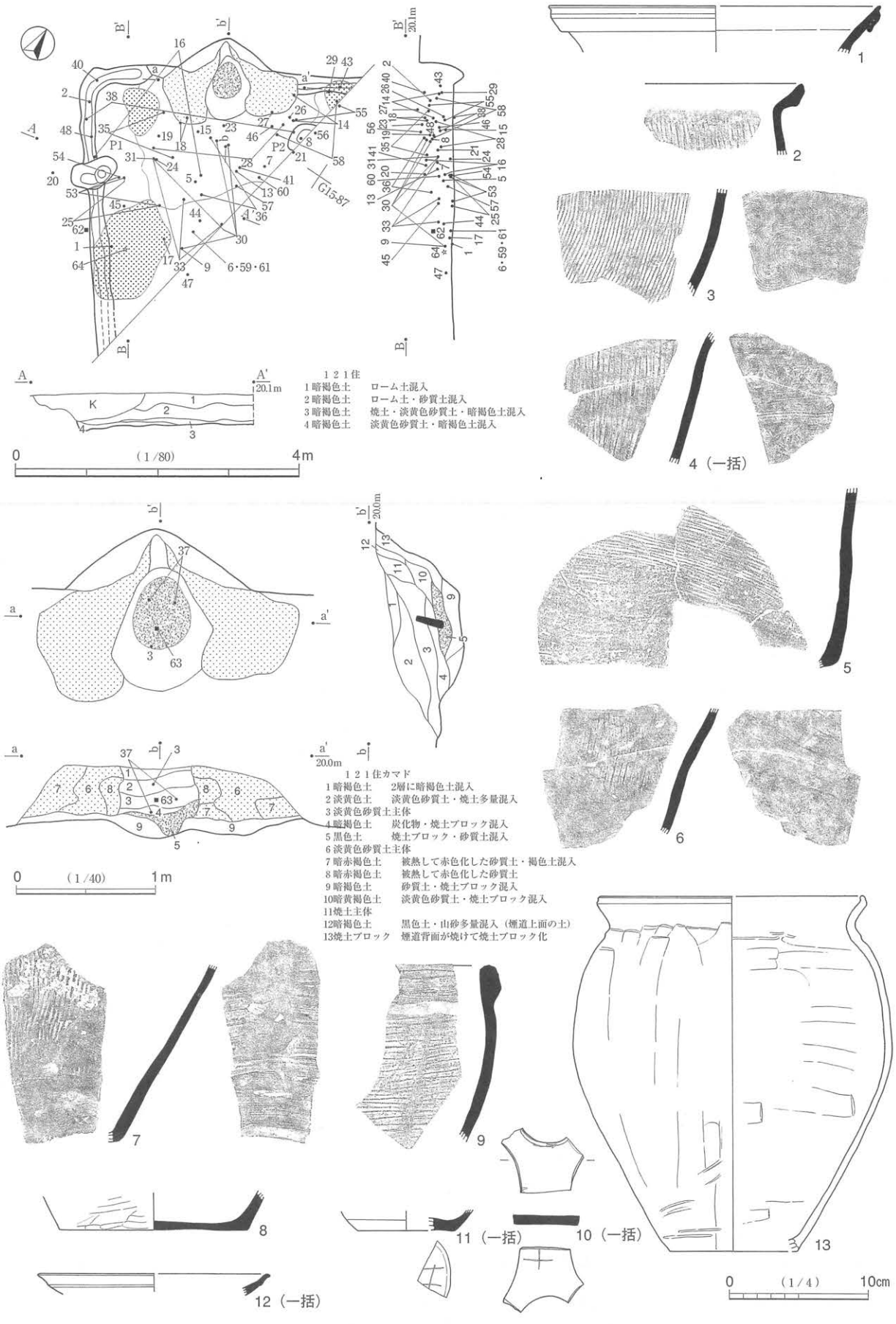
ラケズリによって非常に薄い器壁に仕上げられている。総じて武蔵甕の特徴を有している。二次被熱のため器面はやや劣化しており、外面には部分的に煤が付着している。10～13は胎土に白色雲母と砂粒を多く含み、器面は全体的にざらついている。色調は淡い褐色系で、調整はナデを主体とし共通している。常総型と思われる。14～18は小型の在地型と思われる。いずれも器厚は薄めで器面の摩耗が認められ、胎土には細かな砂粒を多く含んでいる。15・17・18は赤色スコリアもやや多めに含まれている。色調は赤褐色系で、内外面に煤の付着が顕著である。調整はナデを主体とし、手持ちヘラケズリが部分的に施されている。19～29は土師器の杯で、調整はいずれもロクロナデを主体としている。19～21は内面全面に黒色処理が施され、一部外面の口縁下端部にまで及んでいる。いずれも色調は内面が黒灰色、外面がにぶい橙色を呈し、胎土もほぼ同一で赤色スコリアと細かな砂粒がやや目立ち、微量の海綿骨針が含まれている。内面調整は精緻なヘラミガキが共通して施されている。19は全体の約２／３を遺存し、底部は完存しているが、器面の摩耗が顕著で、破断面は丸味を帯びている。底外は全面回転ヘラケズリが施され、切り離し技法は不明である。22はほぼ完形で、口径12.0cm、底径6.3cm、器高3.5cmを測る。内面はロクロ目がナデ消され不明瞭であるが、外面はロクロ目が明瞭に残り、底部外縁に手持ちヘラケズリが施されている。また、底外は回転糸切り後全面手持ちヘラケズリが施されている。色調は全体的ににぶい橙色を呈し、胎土は密で細かな金雲母がやや多めに含まれている。23は底外に全面回転ヘラケズリを施している以外は22とほとんど同一である。24は底部は完存するが口縁部は一部しか遺存していない。色調・胎土・調整等も22とほぼ同一であるが、底外は回転糸切り後外周に手持ちヘラケズリが施されている。25～28は全体的に赤褐色系で、胎土には細かな黒色スコリアを多めに含み、微量の海綿骨針も含まれている点で共通する。25は内外面ともにロクロ目を軽くナデ消し、底外は回転糸切り後外周に手持ちヘラケズリを施している。26は内外面摩耗が顕著なため、ロクロ目が不明瞭で、底外は全面回転ヘラケズリが施され、切り離し技法は不明である。27・28は底外に回転糸切り後外周に手持ちヘラケズリを施し、それぞれ線刻が認められる。27は中央部に一条の線刻、28は外周に半円状の線刻が認められる。29は内面ヘラミガキの黒色処理の破片で、外面口縁下端部にまで及んでいる。外面には線刻が認められるが、小片のため判読不能である。30～32は土師器の皿である。30は大型で底部は欠損し高台が付くかどうかは不明である。内面は精緻なヘラミガキが施され、全面黒色処理で黒灰色を呈し、外面口縁下端部にまで及んでいる。外面はにぶい橙色を呈し、ロクロ目は軽くナデ消され不明瞭で、底部外縁に回転ヘラケズリが施されている。胎土は密で含有物は均一である。31・32はやや小型の貼付高台付で、色調はにぶい赤褐色を呈している。31は内外面ともに摩耗が顕著で、ロクロ目は不明瞭である。胎土には細かな金雲母と赤色スコリアがやや多めに含まれている。32は内面にヘラミガキが施され、薄い黒色処理痕が認められる。外面はロクロ目がナデ消され不明瞭である。胎土は密で微量の海綿骨針が含まれている。33はカマド内及び覆土下層出土の破片が接合した大型の鉢で、約１／２を遺存する。復元口径27.6cm、底径15.0cm、器高11.5cmを測り、器厚も厚く重量感がある。内外面ともに摩耗が顕著で、破断面は劣化し丸味を帯びている。色調は全体的ににぶい橙色を呈し、胎土は密で含有物は均一である。調整は内面にナデ、外面にヘラケズリを主体に一部ナデが施されている。底外は回転糸切り後外周に手持ちヘラケズリが施され、ヘラの当たり痕が多数認められる。34は大型で深めの椀の破片である。色調・調整は33に近似するが、胎土には細かな金雲母がやや多めに含まれている。35～37は土製品である。35は紡錘車で約１／４遺存する。36・37は支脚でいずれもカマド内出土である。36は同一個体２点を実測図上で推定復元した。二次被熱は受けているものの固く締まっている。37は二次被熱が激し

く非常に脆い。38・39は安山岩製の砥石片である。38は主柱穴P2の覆土中層から出土し、39は本跡床面からの出土で有孔である。40は鉄製品の刀子で、カマド左袖脇の床面から出土した。刃先を一部欠損する以外はほぼ完形品である。全長192.5㎜、刀身長133.5㎜、身幅11.7㎜、背幅3.1㎜、茎長58.8㎜、茎幅9.1㎜、茎厚3.8㎜を測り、重量は34.66ｇである。茎の一部には木質が付着している。

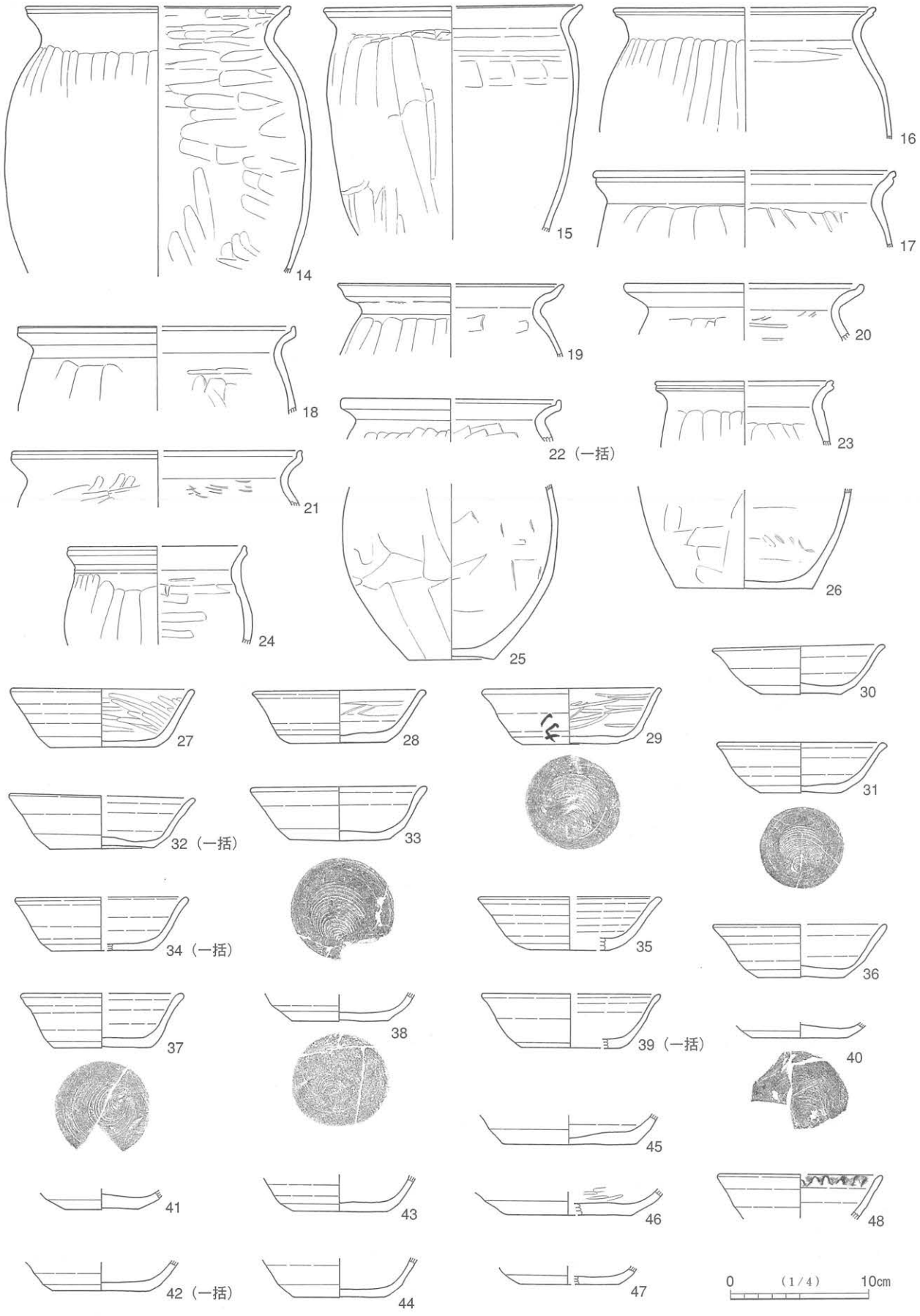
１２１住（第45～47図、第６・10・15・18表、図版８・29～32・53・55・59）

本跡は平安時代前半の竪穴住居跡で、調査区の中央部南側のG15-85から検出された。本跡の約３／５は現道下で調査区域外にあたるため、約２／５の調査で終了し完掘はできなかった。未掘区が多く規模等不明な点が多いが、調査できた部分の状況では深さ0.5ｍ前後、主軸方向N-35°-Wで、壁の形状は直で壁溝は一応巡っている。柱穴らしきピットは２か所は検出され、壁柱穴と思われるP1の深さは44㎝、右袖付近に半分程度検出されたP2の深さは49㎝を測る。カマドは北西壁中央部に検出され、この北西壁からカマドを中心とした２ｍ四方の床面直上には、カマド構築材の淡黄色砂質土が敷き詰められるような状態で分布していた。また、火床部下は約30㎝掘り下げられ、そこにも構築材が敷き詰められていた。火床部はその構築材の上にあり楕円形の焼土ブロックが厚く確認された。これらは燃焼効率を高めるために行われたのか、カマド補強のために行われたのか、いずれにしても特異な例といえる。カマド自体は天井部が崩落し遺存状態は良好とはいえず、両袖はカマド補強のため基底部で肥大化していた。火床部の位置から察すると、カマド煙道部は住居外に張り出すように構築されている。掘り込みは壁から奥へ幅約130㎝、奥行き約50㎝で、掘り込み角は30°～40°である。遺構内の堆積土は大まかに３層に分離でき、自然埋没と思われるが、焼土が広く分布しており、本跡廃棄後の埋没過程の凹みを利用して火を使用したものと思われる。遺物は覆土上層から床面まで満遍なく出土し、図示できた遺物は計63点である。半分以下の調査しかできなかったわりには、図示できなかった遺物も含めて出土遺物は極めて多い。しかもそのほとんどは覆土上・中層からの出土であった。このことから、火の使用と時をあまり前後しないうちに、遺物が廃棄・投入され、土器溜まりを形成したものと思われる。これらの遺物群と本跡に伴うと思われる遺物はあまり時期差がみられないため、本跡廃棄後あまり時を経ない時期の土器溜まりと考えられる。本跡に伴う遺物がカマド内及び床面出土遺物とするならば、１・３・６・12・17・24・25・37・52・53・54・59・61・63の計14点が挙げられる。その他の遺物は土器溜まりの遺物とすることもできるが、時期差があまりないことから、ここでは図示できたものは全て器種ごとにまとめることとした。

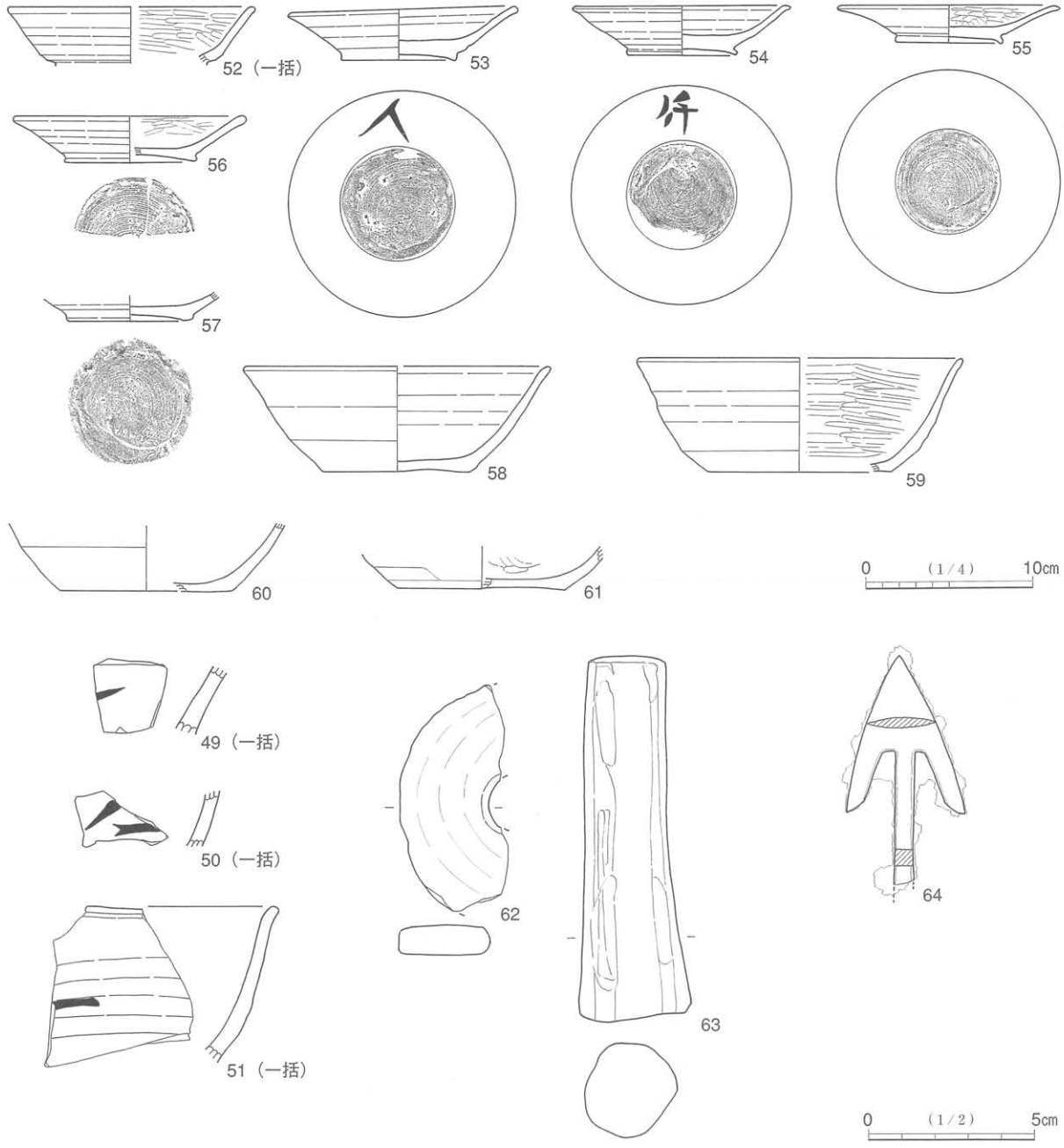
１～12は須恵器である。１は壺の口縁部片で、ロクロナデを主体とし、色調は内面が灰黄褐色、外面が灰褐色を呈し、胎土は密で黒色スコリアがやや多めに含まれている。焼成は硬質で、東海産と思われる。２～10は甕・甑類でいずれも遺存度は10％以下で極めて低い。２は甕又は甑の口縁部片で、いわゆる「クスベ」焼成である。不明瞭な縦に揃った平行タタキが施され、色調は褐灰色を呈し、胎土には微量の海綿骨針が含まれている。千葉産と思われる。３はカマド内出土の甕の胴部片で、内面には同心円状の当て具痕、外面には自然釉が付着し、縦に揃った平行タタキが施されている。東海産と思われる。４は甕片で、全体的に灰褐色を呈し、胎土には微量の海綿骨針が含まれている。外面は不明瞭な縦に揃った幅広の平行タタキが施され、千葉産と思われる。５は甕又は甑の胴下半部片で、外面は横に揃った幅の狭い平行タタキが施されている。二次被熱を受け器面は部分的に灰褐色に変色し、胎土には白色雲母がやや目立つ。焼成は軟質で茨城産と思われる。６は床面出土の甕の胴部片で、４と同様の胎土・色調・調整を示し、千葉産と思われる。７は甕の胴下半部片で、外面は明瞭な縦に揃った幅広の平行タタキが施されている。二次


1
2
3
4（一括）
5
6
7
8
9
10（一括）
11（一括）
12（一括）
13
1 2 1住
1暗褐色土　ローム土混入
2暗褐色土　ローム土・砂質土混入
3暗褐色土　焼土・淡黄色砂質土・暗褐色土混入
4暗褐色土　淡黄色砂質土・暗褐色土混入
0　(1/80)　4m
1 2 1住カマド
1暗褐色土　2層に暗褐色土混入
2淡黄色土　淡黄色砂質土・焼土多量混入
3淡黄色砂質土主体
4暗褐色土　炭化物・焼土ブロック混入
5黒色土　焼土ブロック・砂質土混入
6淡黄色砂質土主体
7暗赤褐色土　被熱して赤色化した砂質土・褐色土混入
8暗赤褐色土　被熱して赤色化した砂質土
9暗褐色土　砂質土・焼土ブロック混入
10暗黄褐色土　淡黄色砂質土・焼土ブロック混入
11焼土主体
12暗褐色土　黒色土・山砂多量混入（煙道上面の土）
13焼土ブロック　煙道背面が焼けて焼土ブロック化
0　(1/40)　1m
0　(1/4)　10cm

第45図　１２１住（１）


14
15
16
17
18
19
20
21
22（一括）
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32（一括）
33
34（一括）
35
36
37
38
39（一括）
40
41
42（一括）
43
44
45
46
47
48
0 (1/4) 10cm

第46図　１２１住（２）



第47図　１２１住（３）

被熱を受け器面の剥離が目立ち、焼成はやや軟質で千葉産と思われる。８～10は本来の色調は灰色であるが、二次被熱を激しく受け内外面ともに褐色系に変色している。いずれも胎土は密で固い焼成である。８は甕の底部片、９は甕又は甑の口縁部片、10は甑底部片で、いずれも東海産と思われる。10の外面には『メ』の線刻が認められる。11は杯の底部片で、内面に線刻がみとめられる。12は皿の口縁部片で、内面には灰釉が認められる。いずれも東海産と思われる。13～26は土師器の甕片で、遺存度約50%の25を除けば、極めて遺存度は低い。13・14・16～22は常総型、15・23～26は在地型と思われる。13は同一個体３点を復元実測したもので、内外面ともにヘラケズリを主体とし、色調は灰褐色を呈し、胎土には細かな砂粒と金雲母がやや多め含まれている。二次被熱を受け内外面に煤が付着している。14は調整・色調・胎土とも13とほぼ同様であるが、口縁部の受け口があまり立ち上がらず、胴下半部がやや丸味を帯びている。

二次被熱は激しく、外面には煤が厚く付着し劣化も著しい。15は胴部があまり膨らまず、器厚は薄手である。外面は灰褐色で縦位のヘラケズリ、内面はにぶい赤褐色で横位のヘラケズリが施され、輪積み痕が若干残る。胎土は密で細かな砂粒と金雲母がやや多めに含まれている。16～22は常総型と思われる。16は全体的ににぶい赤褐色を呈し、胎土は密で含有物は均一である。内面は横位のヘラナデ、外面は縦位のヘラケズリが施され、薄く煤が付着している。17は床面出土の破片とカマド内一括で取り上げた破片が接合した。16とほぼ同様であるが、胎土には微量の海綿骨針が含まれている。18・19は灰褐色を呈し、胎土には細かな砂粒と金雲母がやや多めに含まれている。口縁端部は18が直に立ち上がるが、19は外反気味である。20は口縁部が大きく外反し、胴部はあまり膨らまないタイプと思われる。21は全体的に褐色系で、胎土には微量の海綿骨針が含まれている。22は二次被熱を受け、内外面ともに煤が斑状に付着している。23～26は小型の在地型と思われる。23はにぶい赤褐色を呈し、胎土は密で金雲母が多めに含まれている。24は床面出土の破片とカマド内一括で取り上げた破片が接合した。二次被熱を激しく受け、内面は劣化し煤が厚く付着している。胎土には細かな砂粒がやや多めに含まれている。25は床面出土で、胴部中位から底部を100%遺存し、底径6.2cmを測る。内外面ともに雑なヘラケズリが施され、内面にはヘラの当たり痕が数か所にみられる。色調は灰褐色を呈し、胎土は密で微量の海綿骨針が含まれている。外面は煤が厚く付着し、底外は全面手持ちヘラケズリが施されている。26は胴部下位から底部を100%遺存し、底径10.0cmを測る。内外面ともに二次被熱を受け劣化が顕著で、ヘラケズリが辛うじてみられる。色調はにぶい橙色を呈し、細かな砂粒と赤色スコリアがやや多めに含まれている。27～51は土師器の杯である。27は約4／5を遺存し、遺存する部分は完形品で、口径12.9cm、底径7.6cm、器高4.2cmを測る。色調は全体的ににぶい橙色を呈し、胎土は密で細かな金雲母と赤色スコリアがやや多めで、微量に海綿骨針も含まれている。内面はヘラミガキ、外面はロクロ目を軽くナデ消し、底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施され、外縁にまで及んでいる。28は約2／3を遺存し、口径12.0cm、底径7.0cm、器高3.7cmを測る。色調・胎土・調整は27とほぼ同様であが、ロクロ目のナデ消しは内外面ともに行われている。29は約4／5を遺存し、口径12.5cm、底径6.5cm、器高4.2cmを測る。外面の体部下位に極めて薄い『か』と思われる墨書が斜位に描かれている。色調は本跡出土の杯の中では極端に赤味を帯び、胎土は27とほぼ同様である。内面はロクロ目をナデ消し後やや雑なヘラミガキが施され、外面はロクロ目を軽くナデ消し、底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施され、外縁にまで及んでいる。30は口縁部が若干外反するタイプで、約4／5を遺存し、口縁部を上からみると楕円形に歪んでいる。内面には焼成時に付着したと思われる、疣状の小さな粘土塊が二か所に認められる。二次被熱を受け、器面は内外面ともにロクロ目が辛うじて分かる程度に劣化している。また、体部外面は1／4程度、赤彩を施したかのように極端に変色している。底外は回転糸切り後全面に回転ヘラケズリが施され、この回転ヘラケズリは外縁にまで及び、底部を小さくみせるほど外縁部を削っている。31は二次被熱を受けていないだけで、30とほとんど同様である。32は約1／2を遺存し、二次被熱を激しく受け、破断面及び器面は劣化し、内外面ともに赤彩を施したかのように変色している。胎土は密で細かな黒色スコリアが多め含まれている。内面は底部中央にロクロナデの盛り上がりが残っているが、ナデ消されたロクロ目は器面の劣化と相まって僅かに認められる。底外は回転糸切り後全面に回転ヘラケズリが施され、外縁にまで及んでいる。33は約4／5を遺存し、器厚はやや厚めである。口縁端部は若干外反気味で、内外面ともにロクロ目はナデ消され、底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施され、外縁にまで及んでいる。色調は全体的ににぶい橙色を呈し、胎土は密で黒色及び赤色スコリアが

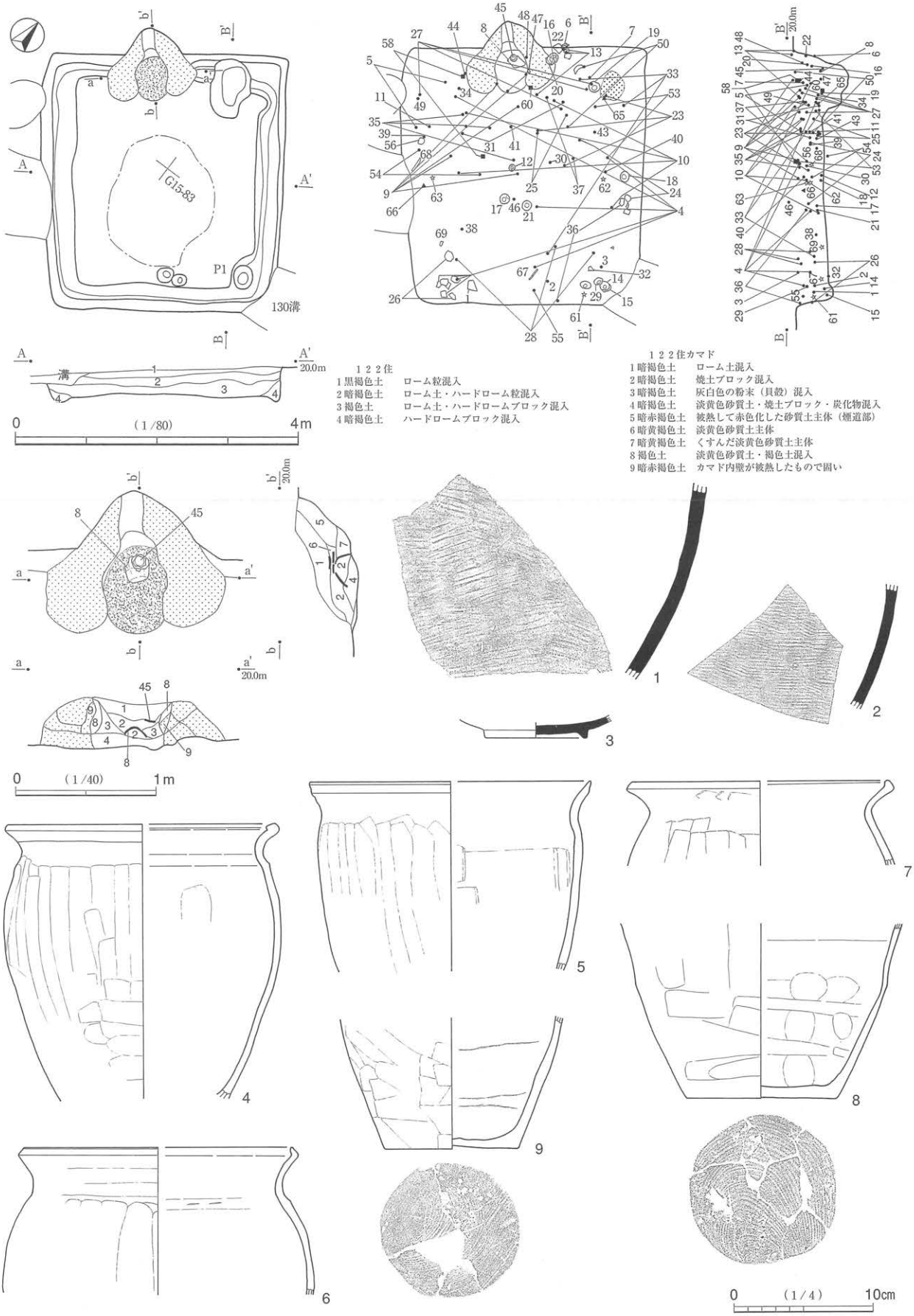
やや多めで、微量に海綿骨針も含まれている。34は約２／３を遺存し、破断面及び器面は若干摩耗している。色調は全体的ににぶい赤褐色を呈し、胎土には細かな金雲母が多めに含まれている。調整は33と同様である。35は底部をほとんど欠損し、全体では約２／５を遺存している。器面は若干摩耗しているが、ロクロ目は内外面ともに明瞭である。色調は全体的ににぶい橙色を呈し、胎土は密で砂粒がやや多めで、微量に海綿骨針も含まれている。36は約１／２を遺存し、破断面及び器面の摩耗は顕著で、ロクロ目が辛うじて分かる程度である。底外は回転糸切り後ほぼ全面に回転ヘラケズリが施され、外縁にまで及んでいる。色調は全体的ににぶい橙色を呈し、胎土には細かな黒色スコリアが多めで、微量に海綿骨針も含まれている。37はカマド内火床部上面からの出土で、約１／２を遺存し、口縁部は外反気味で、器厚は全体的に厚めである。二次被熱を受け破断面及び器面は劣化し、全体的に赤褐色に変色している。ナデ消されたロクロ目は器面の劣化と相まって僅かに認められる程度である。底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施され、外縁にまで及んでいる。胎土には細かな金雲母が多量に含まれている。38は床面から出土し、破断面及び器面の摩耗は顕著で、底外の調整も辛うじて分かる程度である。底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施されている。39は底部のほとんどを欠損し、全体の約１／３を遺存している。器面は若干摩耗し、ナデ消されたロクロ目が辛うじて分かる程度である。色調は全体的ににぶい赤褐色を呈し、胎土は密で細かな金雲母と黒色スコリアがやや多めに含まれている。40～47は底部片である。いずれも若干の誤差はあるが器面の劣化が認められ、特に47は内面の剥離が激しい。色調はにぶい赤褐色及びにぶい橙色を基調にしているが、43・46は二次被熱を受け内外面に煤が厚く付着し、灰褐色を呈している。胎土は密で細かな金雲母がやや多めで、微量の海綿骨針が含まれ、いずれも共通しているが、47には大粒の赤色スコリアが目立つ。調整はロクロナデを主体にし、底外は40・43・44・47が回転糸切り後外周に回転ヘラケズリ、45が回転糸切り後ほぼ全面に回転ヘラケズリ、41・42・46が全面回転ヘラケズリが施されている。48は口縁部片で、色調・胎土・調整等他の杯と同様であるが、内面端部には黒煙が波状に厚く付着している。おそらく灯明用に使用されたもので、芯が置かれた部分が薄く剥離して波状を呈していると思われる。49～51は杯の体部外面に墨書が描かれた破片である。いずれも部分片で判読不能である。52はカマド内一括で取り上げた破片が接合した、底部を欠損する土師器の高台付杯と思われる。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土は密で含有物は均一である。内面は精緻なミガキ、外面はロクロナデが明瞭に施されている。53～57は土師器の高台付皿である。53は床面及び床直出土の破片が接合し、ほぼ完形となった。口径13.3cm、底径6.9cm、器高3.3cmを測る。内外面ともに煤が斑状に付着し、全体的ににぶい褐色を呈している。外面には正位に『人』の墨書が描かれている。内外面はロクロ目をナデ消し、高台部は回転糸切り後外周に強く回転ヘラケズリを施すことで作り出されている。胎土は密で含有物は均一である。54は床面出土の破片と中層一括で取り上げた破片が接合し、約４／５を遺存している。復元口径12.5cm、底径6.5cm、器高3.0cmを測る。内外面ともに摩耗が顕著で、破断面は丸味を帯びている。外面には正位に『仟』の墨書が描かれているが、摩耗しているため不明瞭である。色調はにぶい橙色を呈し、胎土・調整等は53と同様である。55は約４／５を遺存し、復元口径13.1cm、底径6.3cm、器高2.4cmを測る。色調は内面がにぶい赤褐色、外面がにぶい橙色を呈し、胎土は密で小粒の赤色スコリアがやや多めに含まれ、微量に海綿骨針も含まれている。調整は内面に精緻なヘラミガキが施され、外面及び高台部は53・54と同様である。遺存している部分には墨書は認められない。56・57も同様の破片であるが、遺存度が低い。56は全体的ににぶい橙色を呈し、胎土・調整等は55と同様である。57は器面及び破断面の摩耗が顕著である。58～61は土師器の椀で、いず

れも遺存度は低い。58は器面及び破断面の摩耗は顕著で、内外面のロクロ目は辛うじて残る程度で、底外は回転ヘラ切り後全面に回転ヘラケズリが施されている。胎土は密で含有物は均一である。59は床面から出土した底部全欠の椀で、二次被熱を受け内外面ともに煤が厚く付着している。内面はロクロ目をナデ消し後やや雑なミガキ、外面は体部でロクロナデ、底部外縁で回転ヘラケズリが施されている。胎土は密で微量の海綿骨針が含まれている。60・61は底部片で、いずれも煤が付着している。60は胎土にやや多めの海綿骨針を含み、調整は内面にミガキ、外面に回転ヘラ切り後全面に回転ヘラケズリが施されている。61は含有物は均一で、調整は内面にミガキ、外面に回転ヘラ切り後全面に手持ちヘラケズリが施されている。62・63は土製品である。62は約１／２を遺存する紡錘車片で、杯の底部を再利用したものである。63はカマド内火床部中央から、煙道部に若干傾いた状態で出土した支脚である。全長21.5cm、幅（実測部位）6.5cm、厚（実測部位）5.6cmを測り、重量860ｇである。ほぼ完形品で非常に固く締まっているが、激しい二次被熱を受け、器面は灰白色及び赤褐色に変色し、部分的に剥落している。64は覆土下層出土の鉄鏃である。全長68.5㎜、鏃身長47.5㎜、鏃身幅37.5㎜、逆刺長18.5㎜、篦被長41.5㎜、篦被幅5.5㎜を測り、重量は11.54ｇである。

１２２住（第48～50図、第６・10・14・17～19表、図版９・32～34・53～55・58）

本跡は平安時代前半の竪穴住居跡で、調査区の中央部やや南よりのG15-72から検出された。同一時期の竪穴住居跡121住から北西へ約３ｍ隔たった位置にある。136住を切り、本跡南東側は近・現代の溝に切られ一部破壊されているが、床面までは達していない。平面形は長方形で、規模は主軸方向に3.7ｍ、幅3.5ｍ、深さ0.5ｍ、床面積6.87㎡、主軸方向N-36°-Wで、壁の形状は直で壁溝は全周している。柱穴らしきピットは東コーナーの壁溝内に１か所検出され、床面からの深さは22cmを測る。貯蔵穴はカマド右袖脇に壁溝を切る状態で検出され、平面形は不整の楕円形で深さ34cmを測る。出入り口ピットはカマド対壁中央直下に検出され、深さ14cmを測る。床面は中央部で若干高く壁溝に向かって緩やかに傾斜し、床面中央やや南よりには楕円形の硬化面が認められた。カマドは北西壁やや左よりに検出され、天井部は崩落していたものの遺存状態は良好といえる。両袖は天井部に近い部分まで遺存し、内壁は被熱のため赤く変色し極めて固い状態であった。両袖外壁はカマド補強のため基底部は肥大化していた。火床部は平面楕円形で、約５cm程度レンズ状に掘り込まれ、固く焼土ブロック化していた。火床部の位置から察すると、カマド煙道部は住居外に張り出すように構築されている。掘り込みは壁から奥へ幅約100cm、奥行き約50cmで、掘り込み角は30°～40°である。火床部には甕１点と杯３点が逆さまに折り重なるように配置され、支脚の代用として使用されていた。そのうち杯２点は取り上げ時に粉々になり、実測不能となった。図示できた遺物番号は８と45である。遺構内の堆積土は大まかに３層に分離でき、自然埋没と思われる。遺物は覆土上層から床面まで満遍なく出土し、図示できた遺物は計66点である。また、図示できなかった遺物も含めて出土遺物は極めて多い。しかもそのほとんどは覆土上・中層からの出土であった。121住と同様に本跡とあまり時期差のない土器溜まりが形成されたものと思われる。本跡に伴うと思われる遺物は８・12・14・15・16・18・20・32・45の計９点が挙げられる。その他の遺物は土器溜まりの遺物とすることもできるが、時期差があまりないことから、121住と同様に図示できたものは全て器種ごとにまとめることとした。

１～３は須恵器で、いずれも覆土上・中層からの出土である。１は大甕の胴部片で内面は青灰色でナデが施され、指頭痕が多数みられる。外面は黒っぽい灰色で幅広の平行タタキがやや雑に施されている。胎土には粒の大きな白色雲母が多めで、微量に海綿骨針も含まれている。焼成はやや軟質で、茨城産と思わ



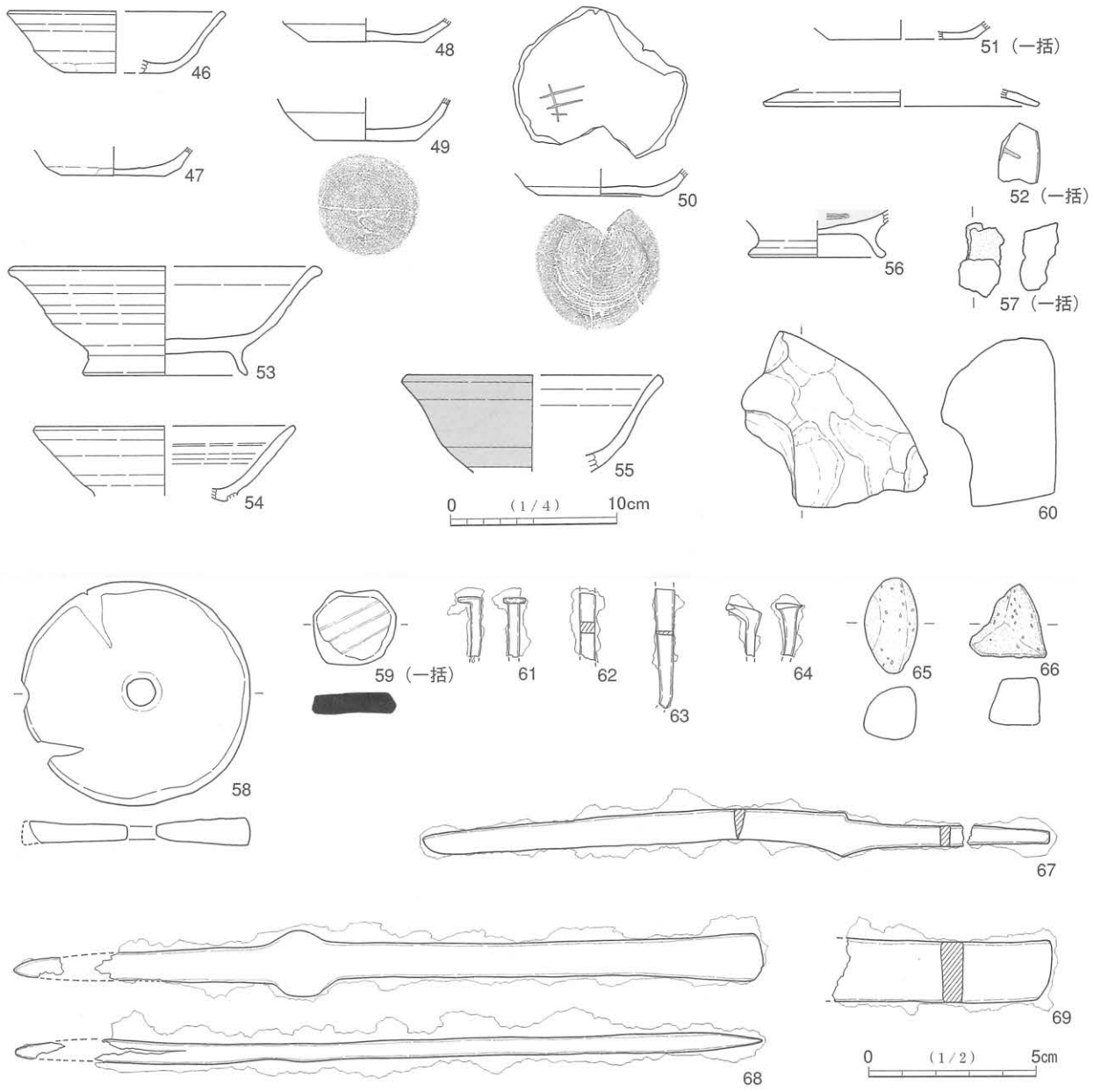
１２２住
1黒褐色土　ローム粒混入
2暗褐色土　ローム土・ハードローム粒混入
3褐色土　ローム土・ハードロームブロック混入
4暗褐色土　ハードロームブロック混入

１２２住カマド
1暗褐色土　ローム土混入
2暗褐色土　焼土ブロック混入
3暗褐色土　灰白色の粉末（貝殻）混入
4暗褐色土　淡黄色砂質土・焼土ブロック・炭化物混入
5暗赤褐色土　被熱して赤色化した砂質土主体（煙道部）
6暗黄褐色土　淡黄色砂質土主体
7暗黄褐色土　くすんだ淡黄色砂質土主体
8褐色土　淡黄色砂質土・褐色土混入
9暗赤褐色土　カマド内壁が被熱したもので固い

第48図　１２２住（１）

10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
22
21
23
24
25
26
27
26
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42（一括）
43
44
45
0 (1/4) 10cm

第49図　１２２住（２）



第50図　１２２住（３）

れる。２は甕の胴部片で、全体的に赤灰色で内面にナデ、外面に幅の狭い平行タタキが施されている。胎土は密で長石と黒色スコリアがやや多めに含まれている。焼成は硬質で、東海産と思われる。３は高台付皿又は椀の底部片で、内面には自然釉が付着している。底部は回転ヘラ切り後高台を貼付け、周縁に回転ナデを施している。胎土は密で含有物は均一である。焼成は硬質で、東海産と思われる。４～13は土師器の甕で、４・６・７は常総型で、残りは在地型と思われる。４は土師器の甕の中では一番遺存度が高く、全体の約４／５を遺存している。口縁部は100％復元でき、口径18.9cmを測る。二次被熱を受けているが、劣化はほとんどみられず、内外面ともに煤が付着するのみで全体的に黒っぽい褐色である。器面はヘラナデを基調とし、口縁部内面にロクロナデ、外面に回転ヘラケズリが施されている。胎土は密で含有物は均一である。５は口縁部があまり外反しないタイプで、内面には横位のヘラケズリとヘラの当たり痕が残り、外面は縦位の手持ちヘラケズリが施されている。内面はにぶい赤褐色、外面はにぶい褐色を呈し、胎土に

は砂粒と雲母が多めで、微量に海綿骨針も含まれている。6・7は二次被熱を受け劣化がやや顕著で、内外面ともに煤が厚く付着している。いずれも全体的に灰褐色を呈し、胎土は密で含有物は均一である。8～13は底部片で、10・12は小型である。8はカマド内火床部上面から逆さの状態で出土した。支脚の代用品として二次被熱を受けているが、顕著な劣化はみられない。全体的ににぶい赤褐色を呈し、胎土には砂粒・金雲母・海綿骨針がやや多めに含まれている。器面はヘラケズリを基調とし、底外は静止糸切り後無調整である。9は二次被熱を受け、内外面ともに部分的に剥離し、煤が付着している。全体的に灰褐色を呈し、胎土には細かな砂粒と金雲母がやや多めに含まれている。調整は内面にヘラナデ、外面にヘラケズリ、底外は回転糸切り後外周に手持ちヘラケズリが施されている。10は内外面ともににぶい赤褐色を呈し、胎土・器面の調整は9とほぼ同様であるが、底外は全面手持ちヘラケズリが施され、切り離し技法は不明である。11は内面はヘラナデが施されにぶい橙色で、外面は煤が厚く付着し黒っぽい。胎土には砂粒・海綿骨針がやや多めに含まれている。12は本跡中央部の床面からの出土で、内外面ともににぶい褐色を呈し、胎土には砂粒が多めに含まれている。底外は回転糸切り後無調整である。13は全体的ににぶい褐色を呈し、胎土には細かな金雲母がやや多めに含まれている。内面はヘラナデ・ナデ、外面はヘラケズリ・ナデが施され、底外は回転糸切り後部分的に手持ちヘラケズリが施されている。14～51は土師器の杯である。14～18は完形で、いずれも歪みが大きく摩耗している。色調は煤が付着して灰褐色を呈す18を除けば、全体的ににぶい橙色又はにぶい赤褐色で、胎土もほぼ共通で海綿骨針を微量に含んでいる。いずれも器面内外面のロクロ目は軽くナデ消してはいるが微かに残り、底内には明瞭な凹凸が渦状に残っている。底外は14・16・17が回転糸切り後全面回転ヘラケズリ、15・18が回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施されている。19・20は口縁部を一部欠損する以外は完形に近く、歪みが顕著で内外面ともに摩耗している。19は口径14.5cm～15.4cm、底径7.6cm、器高4.1cm～4.7cmを測る。色調は内面がにぶい褐色、外面がにぶい橙色を呈し、胎土は密で細かな砂粒と黒色・赤色スコリアが多めに含まれている。調整は14～18と同様で、底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施され、外縁部にまで及んでいる。20は口径13.0cm～13.9cm、底径6.0cm、器高4.0cm～4.4cmを測る。色調・胎土・調整等ほぼ19と同様である。21～27は遺存度がやや低くなり、全体の3／5～4／5程度を遺存する。劣化及び歪みは多少みられるが、顕著とはいえない。色調は21・25が内外面ともに煤が厚く付着し灰褐色、残りがにぶい赤褐色及びにぶい橙色を呈している。胎土・調整等はいずれも14～20までのものと同様である。28～51は遺存度が低く、全体の1／2以下を遺存する。28～37は色調・胎土・器面の調整等ほぼ同様である。底外に回転糸切りが認められるのは28・32・33・35・36で、回転ヘラ切りが29～31・34である。38～44は黒色処理が施され内面は全面黒光りし、ヘラミガキを施している。外面はいずれもロクロ目を軽くナデ消している。45は8の甕の上に逆さまに置かれた状態でカマド内から出土した支脚の代用品である。二次被熱を受け、口縁部から体部にかけては取り上げ時に粉々になり、底部のみの実測となった。底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施されている。46～51は遺存度が極めて低く、全体の1／5前後を遺存する。いずれも内外面は摩耗し、47・48においては破断面は丸味を帯びている。この2点は摩耗が激しいためロクロ目は不明瞭であるが、底内中央にはロクロナデによる円形の突出が残っている。いずれも底外は回転糸切り後全面手持ちヘラケズリが施されている。49・50は内外面ともにロクロ目をナデ消し、50の底内には焼成後に描かれた線刻がみられる。底外は49が全面回転ヘラケズリ、50が回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施されている。52は土師器の蓋と思われる小片で、外面には焼成後に描かれた線刻がみられる。53～56は土師器の高台付杯である。53は全体の約

1／2を遺存し、底部及び高台部はほぼ完形である。内面はロクロ目をナデ消し、外面はロクロ目が明瞭に残る。底外は回転糸切り後高台を貼付け、外縁部に回転ナデを施している。54・55は底部及び高台部を欠損し、内外面ともに摩耗が顕著で、いずれもロクロ目は不明瞭である。54は二次被熱を受け内面の一部に煤が厚く付着し黒色を呈している。55は外面に赤彩が部分的に残っており、外面全面に赤彩が施されていたと思われる。56は内面にヘラミガキが施され黒色処理されている。底外は回転ヘラ切り後高台を貼付け、外縁部に回転ナデを施している。57～60は土製品である。57は覆土上層一括で取り上げた羽口の先端部の小片で、溶鉄が付着している。58は有孔円盤で、径6.7cm、孔径0.8cm、厚0.9cmを測り、重さ39.78ｇである。器面にはロクロナデによる凹凸が渦巻状に残り、反対面には回転糸切り後に全面手持ちヘラケズリを施した痕跡がある。土師器の杯底部を加工して再利用したものと思われる。59は円盤で、長さ2.5cm、幅2.1cm、厚0.6cmを測り、重さ4.04ｇである。周囲は丸味をもつように研磨され、器面には平行タタキ痕が僅かに残る。須恵質の土器片を加工したものと思われる。60はカマド右袖端部の床面から出土した粘土塊で、カマド補強材と思われる。61～64は断面方形の鉄製の釘であるが、63については断面の形状から別の遺物の可能性もある。61・64は頭部片である。67～69は鉄製品でいずれも覆土下層から出土した。67は刀子で茎部を一部欠損し、全長183.4㎜、刀身長126.2㎜、身幅8.8㎜、背幅3.5㎜、茎長57.2㎜、茎幅6.8㎜、茎厚3.6㎜を測り、重量は20.91ｇである。68は鑿で全長225.6㎜、幅12.0㎜、厚5.0㎜を測り、重量は97.64ｇである。69も鑿の破片と思われる。65・66は白色系の軽石である。

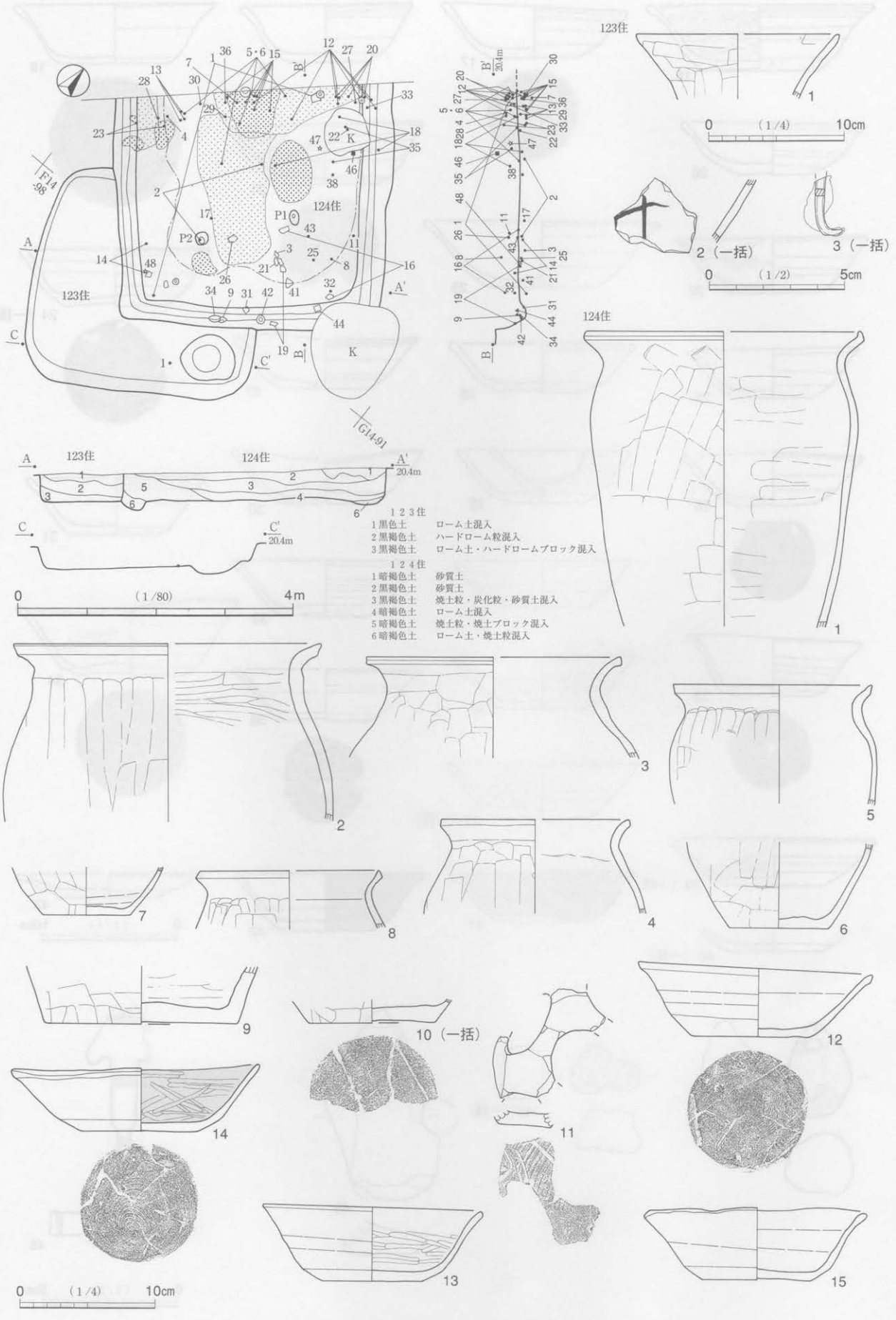
１２３住（第51図、第６・10・17表、図版９・34・54）

本跡は調査区中央部北側の境界線近くのF14-98から検出され、平安時代前半の竪穴住居跡である124住に、約１／３を床面下まで切られいてる。平面形は隅丸方形で、規模は推定で主軸方向に3.2m、幅3.4m、深さ0.3m、床面積6.88㎡、主軸方向N-29°-Wで、壁の形状は急で壁溝は巡らない。燃焼施設の痕跡及び柱穴は検出されなかったが、東コーナー部分に貯蔵穴と思われる平面楕円形で深さ13cmを測るピットが検出された。堆積土はほぼ３層に分離でき、堆積状況から自然堆積の可能性が高いが、ハードローム及びハードロームブロックを混入する２・３層が厚いため人為的堆積も捨てがたい。いずれにしても124住より古い時期に帰属するのは確かだが、さほどの時期差はないものと思われる。このような見地からみれば本跡の帰属時期は、奈良時代後半とするのが妥当と思われる。出土遺物は僅少で、図示できたものは鉄製品を含め３点である。

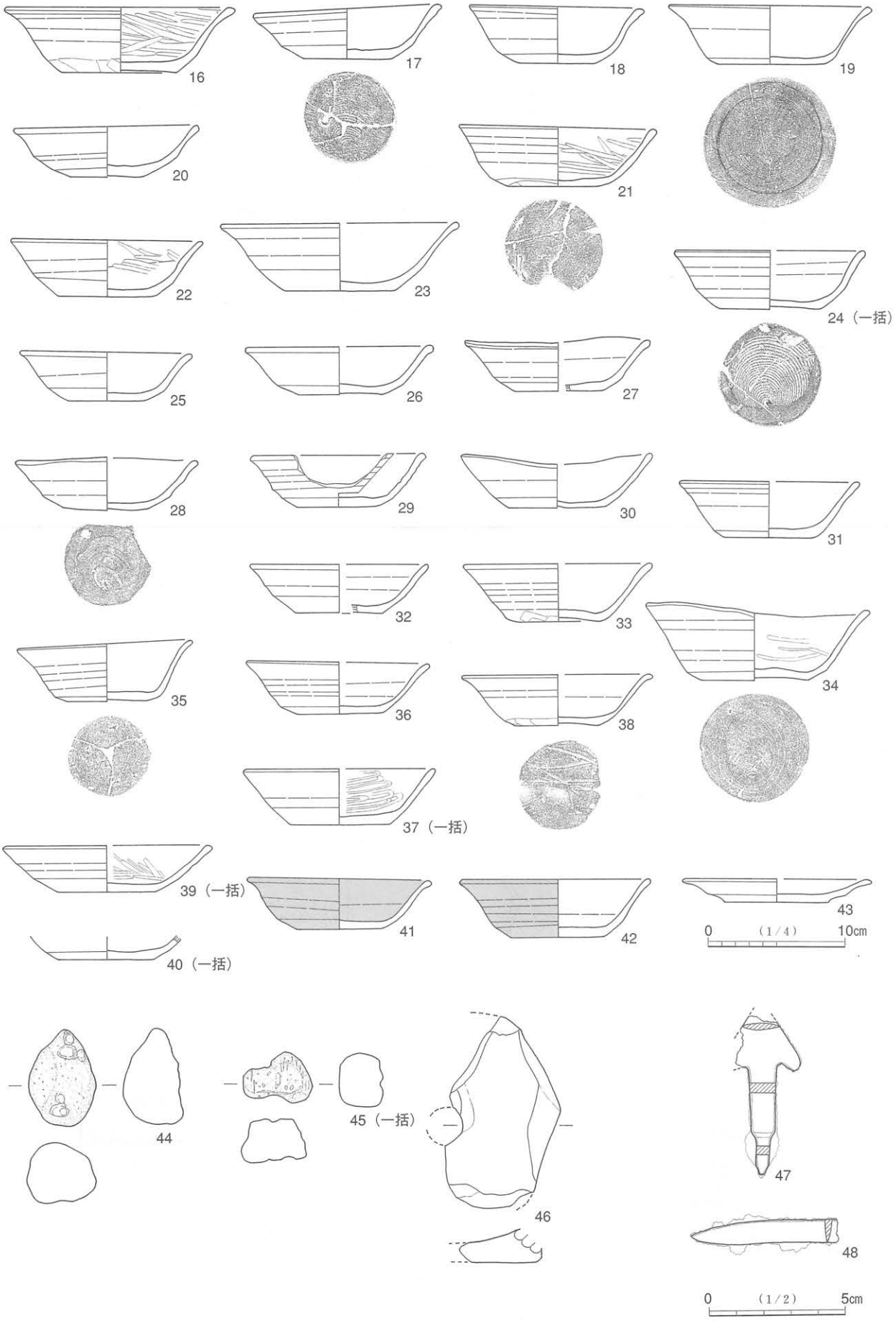
１は貯蔵穴脇の床面から出土した土師器の壺の口縁部片と思われる。本跡の帰属時期を確定できる唯一の遺物であるが、遺存度は低く小片のため不明な点が多い。内面はやや雑なヘラナデが施され、灰黄褐色を呈し、外面は横位の手持ちヘラケズリが施され、にぶい褐色を呈している。胎土は密で中粒の赤色スコリアが多めに含まれている。２は覆土上層一括で取り上げた土師器の杯の体部片である。墨書土器であるが小片のため判読不能である。３は覆土下層一括で取り上げた鉄製の釣り針である。断面は長方形で、長さ21.4㎜、幅3.9㎜、厚2.3㎜を計測する。

１２４住（第51・52図、第６・10・14・15・18・19表、図版９・34～36・53・55・58）

本跡は平安時代前半の竪穴住居跡で、調査区の中央部北側境界線のF14-88から検出された。北西壁側は調査区域外のため未調査となった。123住を切り、東側コーナー部分の一部と北東壁直下の床面は現代の攪乱により破壊されていた。平面形は長方形で、規模は主軸方向に3.5m（未調査部分を除く）、幅4.2m、深さ0.4m、主軸方向N-37°-Wで、壁の形状は直で壁溝は全周すると思われる。柱穴らしきピットは２か所



第51図　１２３住・１２４住（１）


16
17
18
19
20
21
22
23
24（一括）
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
38
37（一括）
39（一括）
40（一括）
41
42
43
0 (1/4) 10cm
44
45（一括）
46
47
48
0 (1/2) 5cm

第52図　１２４住（２）

検出され、床面からの深さはP1＝23cm、P2＝22cmを測る。床面の一部は一端深めに掘り込まれた後埋め戻されており、その埋土中にはカマド構築材の淡黄色砂質土、焼土粒、褐色土が混入し硬化していた。この埋土部分も含み、床面の硬化面は広範囲に認められた。カマドは調査区域外にあると思われるが、周辺には焼土及びカマド構築材の淡黄色砂質土が散乱しているため、破壊されている可能性が高い。遺構内の堆積土は大まかに3層に分離でき、自然埋没と思われるが、中層には焼土粒、炭化粒が広く分布しており、本跡廃棄後の埋没過程の凹みを利用して火を使用したものと思われる。遺物は覆土上層から床面まで満遍なく出土し、図示できた遺物は計46点である。図示できなかった遺物も含めると出土遺物は極めて多く、総重量16.6kgを量る。しかもそのほとんどは覆土上・中層出土の小片であった。121住、122住と同様に本跡とあまり時期差のない土器溜まりが形成されたものと思われる。本跡に伴うと思われる遺物と時期差があまりないことから、121住、122住と同様に図示できたものは全て器種ごとにまとめることとした。

1～10は土師器の甕片で、1は常総型、その他は在地型と思われる。いずれも遺存度は低く1／3以下がほとんどである。1は床面出土であるが、123住の覆土中層一括で取り上げた破片1点と接合した。内外面ともに二次被熱を受け劣化が顕著で、ヘラナデが微かに残るのみである。色調は全体的に灰褐色を呈し、胎土には細かな砂粒が多めに含まれている。2は床面からの出土で、内外面ともにヘラケズリを主体としやや摩耗している。色調は全体的ににぶい赤褐色を呈し、内外面ともに部分的に煤が付着している。胎土には細かな砂粒が多量に含まれ、器面はざらついている。3は床面からの出土で、内面は褐灰色を呈しヘラナデ、外面は灰褐色を呈しヘラケズリが施され、内外面ともに部分的に煤が付着している。胎土は密で微量に海綿骨針を含み、含有物は均一に含まれている。4は中層出土と中・下層一括で取り上げた破片が接合した、やや小振りの口縁部片である。内面は灰赤色を呈しヘラナデ、外面は灰褐色を呈しヘラケズリが施され、内外面ともに部分的に煤が付着している。胎土にはやや小粒の赤色スコリアが多めで、微量の海綿骨針が含まれている。5・6は床面及び下層出土であるが、123住の覆土中層一括で取り上げた破片1点と接合した。やや小型で、同一個体と思われる。色調はにぶい赤褐色で、胎土は密で含有物は均一である。内面にはヘラナデ、外面にはヘラケズリが施されている。7は床面出土の小型の底部片で、底部は完存しており、径6.4cmを測る。内面はにぶい赤褐色を呈しヘラナデ、外面は煤が厚く付着し灰赤色を呈しヘラケズリ、底外は全面手持ちヘラケズリが施されている。胎土には小粒の赤色スコリアがやや多く含まれている。8は覆土中層の小型の口縁部片で、全体的ににぶい赤褐色を呈し、内面はヘラナデ、外面はヘラケズリが施されている。胎土は密で微量の海綿骨針が含まれている。9は床面出土の大型の底部片で、底部は完存しており、径14.3cmを測る。底内は灰褐色を呈しナデ、底外は煤が厚く付着し褐灰色を呈し手持ちヘラケズリが施されている。胎土には細かな砂粒が多く含まれている。10は全体的ににぶい赤褐色を呈し、底内はやや摩耗しヘラナデが若干残り、底外は部分的に煤が付着し全面に手持ちヘラケズリが施されている。11は土師器の甑5孔の底部片で、胎土には微量の海綿骨針を含んでいる。12～42は土師器のロクロ杯である。ほとんどが下層から床面にかけてからの出土で、器面の劣化及び摩耗がほとんど全てにみられる。調整もほとんどが同様で、内面はロクロ目をナデ消し、外面はロクロ目が若干残る程度の軽いナデが施され、底外は回転ヘラケズリが主体で底部外縁にまで及ぶ。12は広範囲から出土した破片が接合し、約4／5を遺存する。若干の歪みがあり、口径17.3cm、底径8.9cm、器高4.4cm～5.3cmを測る。色調は赤褐色から褐色を呈し、胎土には赤色スコリアが多く微量の海綿骨針も含まれている。底外は回転糸切り後全面手持ちヘラケズリが施され、ヘラによる線刻がみられる。13は二次被熱を受け器面は劣化し、

外面及び内面の口縁部に煤が付着している。内面はミガキが施され、色調は全体的ににぶい赤褐色を呈し、胎土には細かな砂粒がやや多めに含まれている。14はほぼ完形で若干の歪みがあり、口径17.4cm～18.3cm、底径8.4cm、器高4.7cmを測る。内面は薄く黒色処理が施され灰褐色を呈しやや雑なミガキ、外面は部分的に煤が付着しにぶい赤褐色を呈し、底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施されている。胎土は細かな金雲母がやや多めに含まれている。15は器面が若干摩耗し、口縁部の歪みが顕著である。内外面ともにロクロ目をナデ消し、底外は回転糸切り後全面回転ヘラケズリが施されている。胎土には細かな砂粒と金雲母がやや多めに含まれている。16は歪みはほとんどみられず口縁部は大きく外反する。内面には緻密なミガキが施され、全体的ににぶい橙色を呈し、胎土は密で含有物は均一である。17はほぼ完形であるが、器面の摩耗及び歪みが顕著で、口径12.7cm～13.8cm、底径6.6cm、器高3.5cm～4.1cmを測る。内面には調整時にできたと思われる粘土の細かな塊が線状に付着している。18は約４／５を遺存し、若干の歪みがみられ、口径11.9cm～12.8cm、底径5.6cm、器高4.2cmを測る。二次被熱を受け器面はやや劣化し、内外面ともに煤が厚く付着し全体的に黒っぽくみえる。19は歪みはほとんどみられず口縁部は大きく外反し、底内は斑状の剥離が多数みられる。内外面ともに丁寧なナデが施され、ロクロ目はほとんど消されている。底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施され、色調は全体的ににぶい褐色を呈し、胎土は密で微量の海綿骨針が含まれている。20は内外面ともに摩耗が顕著で、色調はにぶい赤褐色を呈している。底内はロクロナデによる凹凸が渦巻き状に残るが、全体的にロクロ目はナデ消されている。底外は全面手持ちヘラケズリが施され、切り離し技法は不明である。胎土には細かな砂粒と黒色スコリアが多めで、微量の海綿骨針も含まれている。21は二次被熱を受け器面は劣化し、内面は赤褐色を呈し雑なミガキ、外面は煤が厚く付着した部分が黒色でその他はにぶい褐色を呈しロクロ目を雑にナデ消している。胎土は細かな砂粒が多めで、中粒の赤色スコリアが目立ち、微量の海綿骨針も含まれている。22は器面の摩耗はみられるが歪みはほとんどなく、胎土は密で含有物は均一である。23は二次被熱を受け器面は劣化し、内面の一部は剥離している。胎土は細かな黒色スコリアが多量で、海綿骨針はやや多めに含まれている。24は器面及び破断面の摩耗が若干みられ、底内はロクロナデによる凹凸が渦巻き状に残るが、全体的にロクロ目はナデ消されている。底外は回転糸切り後外周に雑な回転ヘラケズリが施されている。胎土は密で含有物は均一である。25は二次被熱を受け、内外面ともに器面の赤色化がみられる。内面は一部に斑状の剥離が、外面は底部から体部下位にかけて大きな剥離がみられる。胎土は細かな砂粒及び黒色スコリアが多量に含まれ、海綿骨針もやや多めに含まれている。26は内面がやや摩耗しているが、内外面ともにロクロ目を丁寧にナデ消している。底外は回転糸切り後全面雑な回転ヘラケズリが施されている。胎土は細かな砂粒と海綿骨針がやや多めに含まれている。27は約１／２しか遺存していないが、口縁部の歪みが大きく、波状を呈している。内面は全体に薄く、外面は部分的に濃く黒斑がみられ、全体的に黒っぽくみえる。胎土は密であるがやや海綿骨針が多めに含まれている。28は器面及び破断面の摩耗がやや顕著で、器面はざらついている。内外面ともにロクロ目をナデ消しており、底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリを施している。胎土には砂粒が多く含まれ、海綿骨針は含まれていない。29は本跡出土杯のなかでは極端に色調が異なり、白っぽくみえる。器面及び破断面の摩耗は激しく、内面はロクロ目が全くみられない。外面は等間隔にロクロ目が残り、底外は回転糸切り後ほぼ全面回転ヘラケズリが施されている。口縁部から体部下端までは綺麗な「U」字状に破断しており、意図的に欠いたものと思われる。30は二次被熱を受け器面は激しく劣化し、内面は一部剥離している。器厚は非常に薄く歪みも顕著で、口縁部は大きく波状を呈している。色調は全

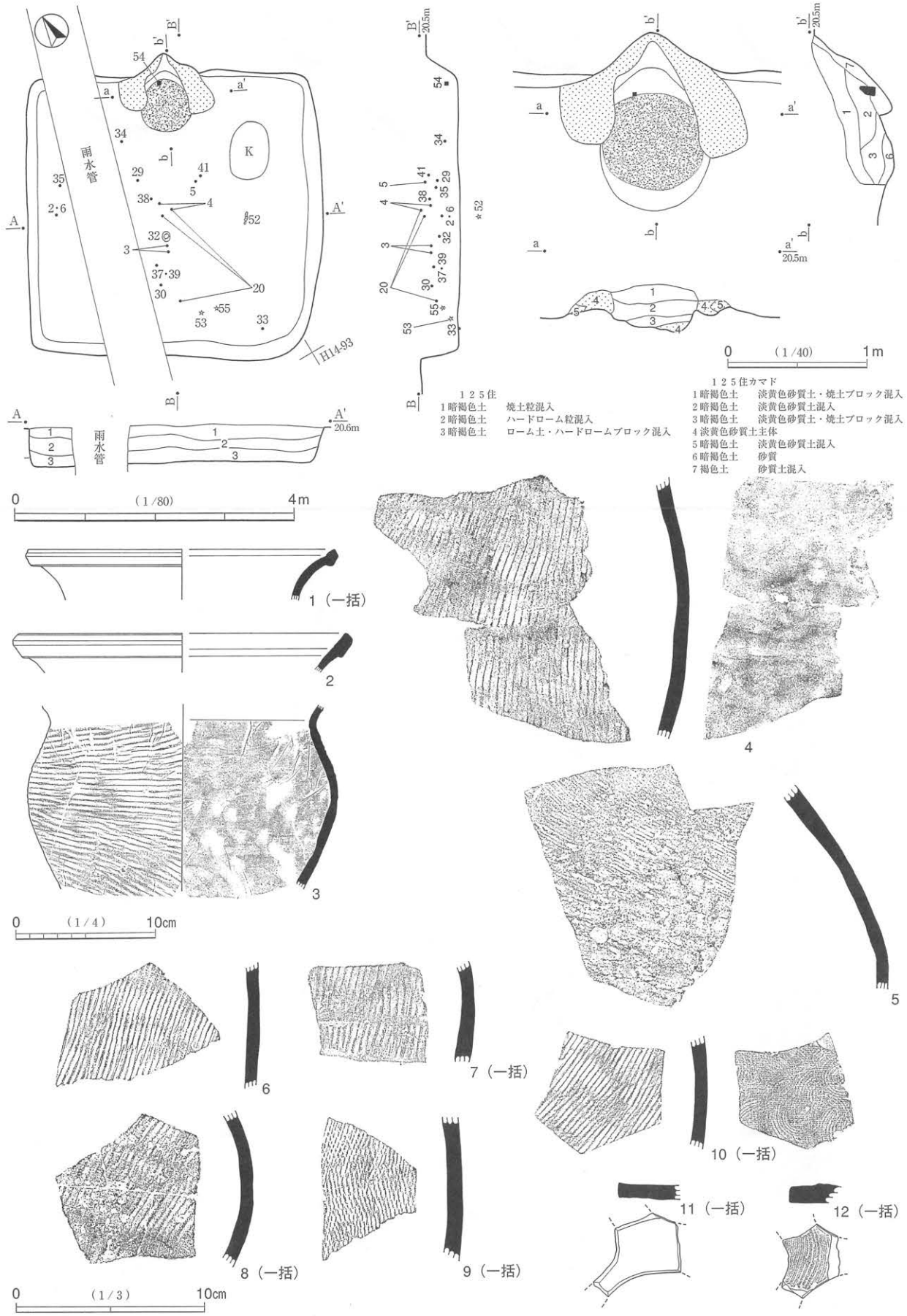
体的ににぶい赤褐色を呈し、胎土には細かな砂粒が多量に含まれ、ザラザラしている。31～33は遺存度は極めて低く、いずれも器面は摩耗している。色調はにぶい赤褐色及びにぶい橙色を呈し、胎土には海綿骨針をやや多めに含んでいる。34は南東壁ほぼ中央直下の壁溝上面から出土した、やや大型の完形品である。二次被熱を受け器面は激しく劣化及び赤色化しており、内外面は大部分が斑状に剥離している。歪みも激しく口縁部は大きく波状を呈し、口径16.4cm～17.6cm、底径8.0cm、器高4.9cm～6.2cmを測る。内面はロクロナデによる凹凸が渦巻き状に残り、ミガキは辛うじてみられる。外面はロクロ目が軽くナデ消され、底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施され、外縁まで大きく削っている。胎土には細かな砂粒及び黒色スコリアが多量に含まれ、海綿骨針も微量に含まれている。35はやや摩耗しているが、外面のロクロ目は等間隔にかなり明瞭にみられる。内面は底部にロクロナデによる凹凸が渦巻き状に若干みられるが、全体的にはロクロ目を丁寧にナデ消している。底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施されている。胎土には細かな黒色スコリアがやや多めに含まれている。36は二次被熱を受け器面及び破断面は激しく劣化し、器面は赤色化し一部剥離している。胎土には細かな砂粒が多量に含まれ、ザラザラしている。37は覆土中・下層一括で取り上げた破片が接合したもので、器面の劣化及び摩耗は全くみられない。内外面はロクロ目を丁寧にナデ消し、内面は精緻なミガキが施されている。胎土は密で含有物は均一である。38～40は摩耗が顕著で、遺存度も低い。38は底外にヘラによる線刻がみられる。39は内面にミガキが施されている。40は底外全面回転ヘラケズリである。41は床面出土の破片と上・中層一括で取り上げた破片が接合したもので、器面はやや摩耗しているが歪みはなくほぼ完形である。口径13.5cm、底径6.2cm、器高3.7cmを測る。内外面には赤彩が薄く残っており、底部外面以外は赤彩が施されていたようである。色調は全体的ににぶい赤褐色を呈し、胎土にはやや砂粒が多く、海綿骨針も微量に含まれている。内面はロクロ目を丁寧にナデ消し、外面は軽くナデ消している。底外は全面回転ヘラケズリが施され、切り離し技法は不明である。42は南東壁中央直下の壁溝上面から出土した完形品である。器面は摩耗し、外面は剥離が激しく、剥離していない部分には赤彩が残っており、内面には認められない。内面はロクロ目をナデ消しているが、底部にはロクロナデによる凹凸が渦巻き状に残っている。外面はロクロ目を軽くナデ消し、底外は回転糸切り後全面回転ヘラケズリが施されている。胎土は密で微量の海綿骨針が含まれている。43は高台付皿片で、器面は摩耗している。内外面ともに丁寧なナデが施され、高台部は作り出しで、底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施されている。44・45は軽石で、44は黒色系、45は白色系である。46は紡錘車と思われるが、遺存度及び遺存状態が悪いため疑問も残る。土師器の皿若しくは杯の底部中央部を穿孔し再利用したものと思われる。47・48は鉄製品である。47は覆土中層から出土した鏃で、先端部を一部欠損し全体的に平らである。全長（遺存値）61.2㎜、逆刺長4.8㎜、篦被長24.0㎜、篦被幅9.5㎜、茎長14.5㎜を測り、重量は8.72ｇである。48は床面から出土した刀子の刀身先端部である。全長（刀身遺存値）53.8㎜、身幅8.0㎜、背幅3.2㎜を測り、重量は4.63ｇである。

１２５住（第53～55図、第６・10・14・17・18表、図版10・36～38・53～55）

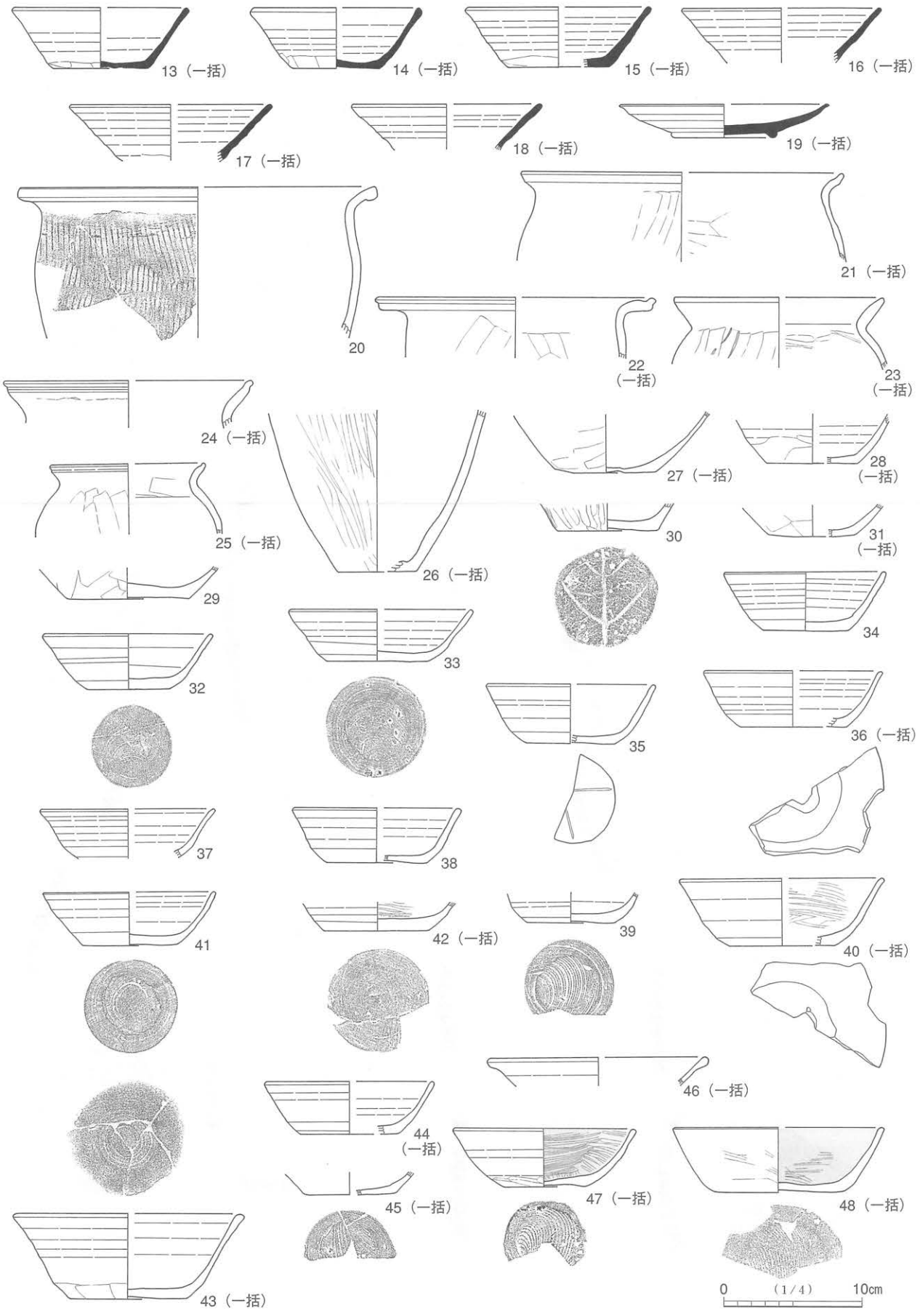
本跡は平安時代前半の竪穴住居跡で、140住を切り、調査区の東側北よりのH14-72から検出された。約２／３が現道下にあり、本跡西側は幅約90cm前後を雨水管敷設により床面まで削平されていた。平面形は方形で、規模は主軸方向に4.2m（未調査部分を除く）、幅4.2m、深さ0.6m、床面積は13.76㎡で、主軸方向N-31°-Eで、壁の形状は直で壁溝は巡っていない。東コーナー付近の床面には近世のピット状の攪乱があるのみで、柱穴らしきピットは未検出である。床面は平らで、硬化面は特に認められなかった。カマド

は北東壁中央に構築されており、天井部は崩落し、袖部の遺存状態もあまり良くない。両袖部はほとんど基底部のみの遺存で焚き口部前面は全く形を残しておらず、円形に掘り込まれた火床部が約半分程度露出していた。周辺には構築材の淡黄色砂質土が粉々に散乱しており、カマド前面は何らかの理由で破壊された可能性が高いと思われる。カマド煙道部は住居外に張り出すように構築され、掘り込みは壁から奥へ幅約90cm、奥行き約30cmで、掘り込み角は30°～40°である。火床部と煙道部の境付近には土製支脚が、ほぼ正直した状態で出土した。遺構内の堆積土は大まかに3層に分離でき、自然埋没と思われる。遺物は覆土上・中層からの出土がほとんどで、床面出土遺物は33の土師器の杯と、52の鉄製の刀子の2点のみである。図示できた遺物は土製品と鉄製品も含めて計54点である。

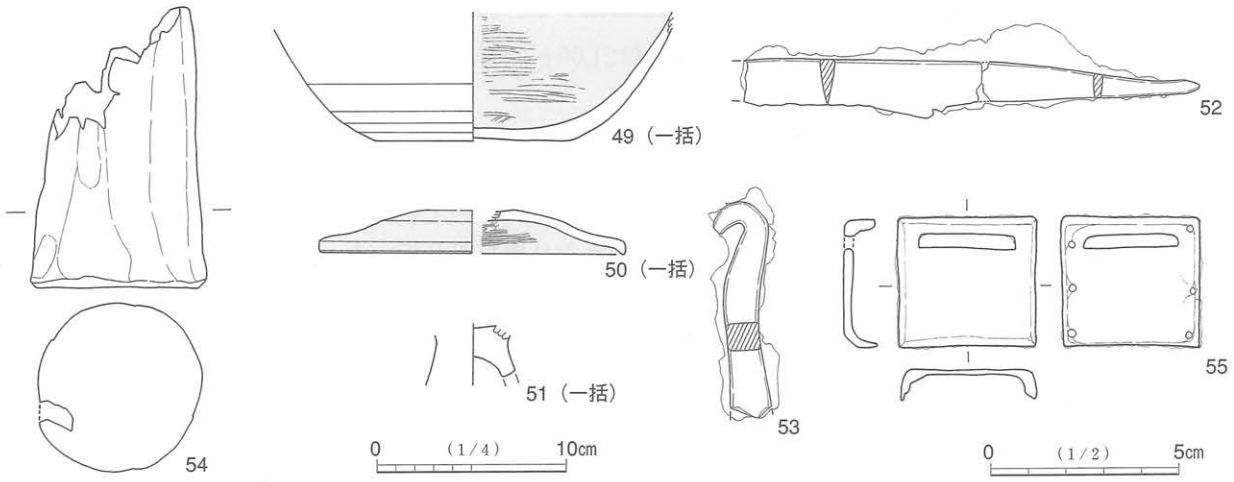
1～10は須恵器の甕片で、1～5は千葉産、6・9・10は東海産、7・8は茨城産と思われる。1・2は甕の口縁部片で、色調はいずれも褐色系で海綿骨針をやや多めに含んでいる。3・4は胴部片で、いわゆる「クスベ」焼成で色調は褐色及び赤褐色を呈し、3は横位、4は縦位に揃った明瞭な幅広の平行タタキが施されている。胎土には石英が多めで、微量の海綿骨針も含まれている。5は内外面ともに二次被熱を受け、器面の劣化及び剥離が顕著であるが、内面にはヘラナデ、外面には不明瞭な幅狭の平行タタキが施されている。色調は全体的に灰黄色を呈し、胎土には細かな金雲母と石英が多めに含まれている。6～10は胴部片で、いずれも外面に平行タタキを施しているが、6・9・10は幅狭で明瞭、7・8は幅広で不明瞭である。また、10の内面には同心円状の当て具痕が明瞭にみられる。6・9・10は硬質の焼成で灰色ぽく、7・8はやや軟質の焼成で白っぽく白色雲母がやや多めに含まれている。11・12は千葉産の須恵器の甑の底部片で、ともにカマド内一括で取り上げたものである。11は外面にヘラナデ、12は回転糸切り後軽いヘラナデが施されいてる。13～19は須恵器の杯・皿類で、いずれも遺存度は低く全体の約1／3以下で、上層・中層一括で取り上げたものである。13～18は茨城産の杯で、色調は全体的に暗い灰色で胎土には白色雲母が含まれ、内面はロクロ目をナデ消し、外面はロクロ目が明瞭に残っている。19は高台付の皿で、内面全体に自然釉がかかり、胎土は密で焼成は硬質である。作り出しの高台部内側はロクロナデ、外側は丹念な回転ヘラケズリが施されている。東海産と思われる。20～31は土師器の甕類で、遺存度は極めて低い。20は甕若しくは甑の口縁部片で、外面には縦位に幅広の平行タタキが施されている。21～24は口縁部片で、色調は全体的に赤褐色系である。21・23・24はカマド内一括取り上げで、二次被熱を受け器面の劣化が顕著である。21・22は胎土に白色雲母を多量に含み、23・24は微量の海綿骨針を含んでいる。25・27～29・31は在地型と思われる小型の口縁部片で、二次被熱を受け内外面ともに煤が付着し黒っぽく器面は劣化している。胎土には細かな砂粒を多く含み、微量の海綿骨針も含まれている。26～31は底部片である。26は内面の摩耗が激しく、胎土には小石及び白色雲母を多めに含んでいる。外面は雑な縦位のヘラミガキが施されている。30は底外に木葉痕がみられ、外面は雑なミガキが施されている。26・30は本跡には伴わない古い時期の遺物である。32～49は土師器のロクロ杯である。基本的に内面はロクロ目をナデ消し、外面はロクロ目は明瞭に残っている。1はほぼ完形に近く、口径12.0cm、底径6.0cm、器高4.0cmを測る。内面はロクロナデを丹念にナデ消し、外面はロクロ目が明瞭に残っている。底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリを施し、外縁部まで及んでいる。色調は橙色を呈し、胎土は密で細かな金雲母を多めに含んでいる。33は床面出土で体部中央の器厚がやや薄くなり、僅かに凹んでいる。内面はロクロ目を丹念にナデ消しているが、内底にはロクロナデの凹凸が若干渦状に残っている。外面はロクロ目は明瞭に残り、底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施され、外縁にまで及んでいる。34・35は二次被熱を受け特


雨水管
K
H14-93
1 2 5 住
1 暗褐色土　焼土粒混入
2 暗褐色土　ハードローム粒混入
3 暗褐色土　ローム土・ハードロームブロック混入
1 2 5 住カマド
1 暗褐色土　淡黄色砂質土・焼土ブロック混入
2 暗褐色土　淡黄色砂質土混入
3 暗褐色土　淡黄色砂質土・焼土ブロック混入
4 淡黄色砂質土主体
5 暗褐色土　淡黄色砂質土混入
6 暗褐色土　砂質
7 褐色土　砂質土混入
0 (1/80) 4m
0 (1/40) 1m
0 (1/4) 10cm
0 (1/3) 10cm
1 (一括)
2
3
4
5
6
7 (一括)
8 (一括)
9 (一括)
10 (一括)
11 (一括)
12 (一括)

第53図　１２５住（１）


13（一括）
14（一括）
15（一括）
16（一括）
17（一括）
18（一括）
19（一括）
20
21（一括）
22
（一括）
23
（一括）
24（一括）
25（一括）
26（一括）
27（一括）
28
（一括）
29
30
31
（一括）
32
33
34
35
36（一括）
37
38
39
40（一括）
41
42（一括）
43（一括）
44
（一括）
45（一括）
46（一括）
47（一括）
48（一括）
0
（1/4）
10cm

第54図　１２５住（２）



第55図　１２５住（３）

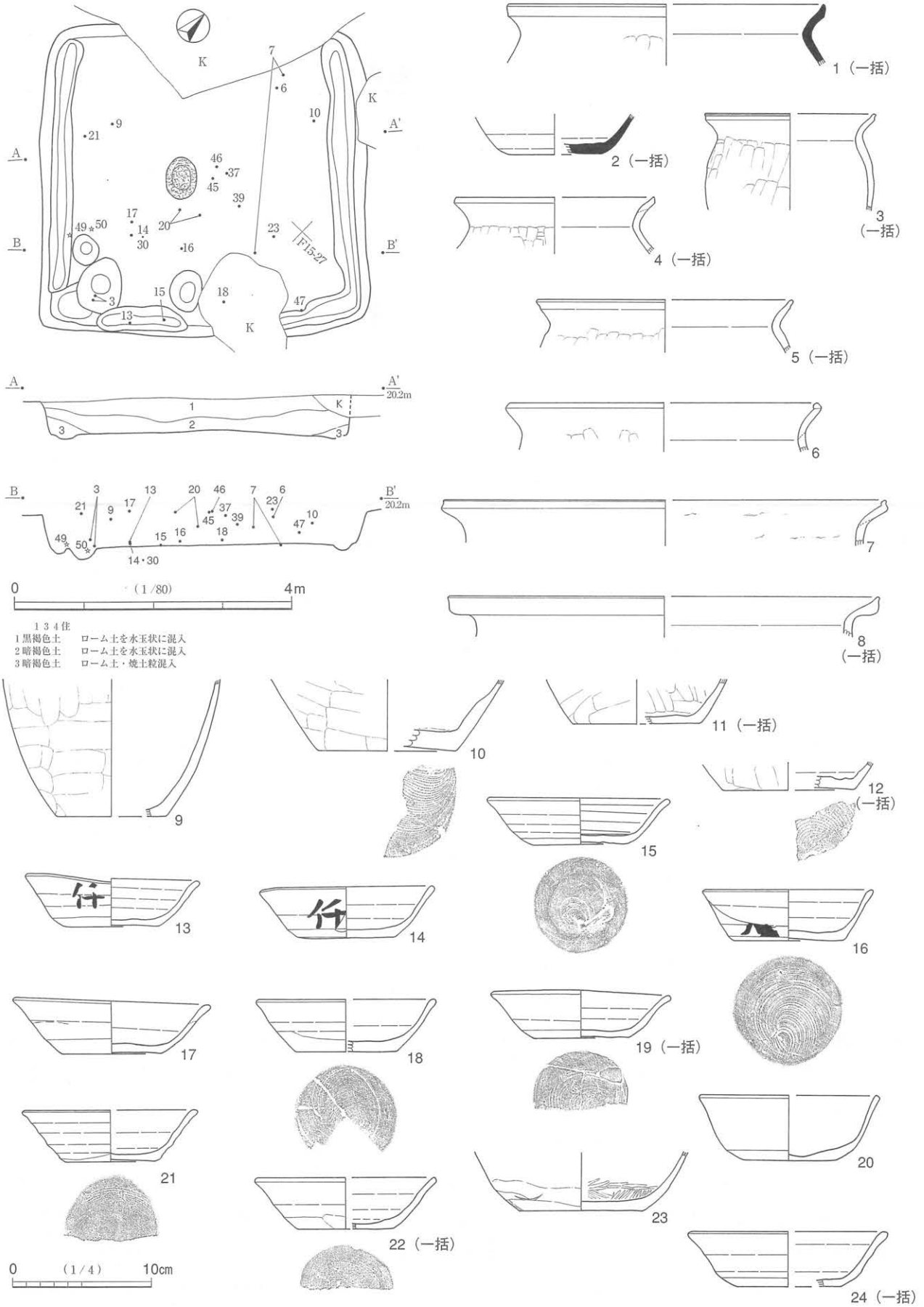
に内面の劣化が顕著である。いずれも底外は回転糸切り後ほぼ全面に回転ヘラケズリが施されている。胎土は密で、細かな黒色スコリアがやや多めで、微量に海綿骨針も含まれている。34は内外面ともに赤褐色に変色している部分がみられ、35は外面の底部を中心に煤が付着し線刻が認められる。36～41は橙色及び赤褐色を呈し、胎土は密で含有物は均一で共通している。36・38・39・40・41の底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施され、40の底部には穿孔が認められる。42は胎土に海綿骨針を多く含み、底外は回転ヘラ切り後楕円形にヘラミガキが施されている。43は大型で胎土に細かな砂粒と海綿骨針をやや多めに含み、底内にはロクロ目をナデ消した際の渦状の浅い沈線がみられる。底外は回転糸切り後ほぼ全面に雑な回転ヘラケズリが施されている。44～46は小片で器面の摩耗が顕著である。46は器厚は薄く口縁部は外反気味に立ち上がっている。47～50は内面黒色処理の杯・蓋類である。47は本跡確認以前の表土除去中に出土しグリッド一括で取り上げた破片と、本跡の覆土上層一括で取り上げた破片が接合した。約１／２を遺存し、摩耗・劣化もほとんどなく遺存状態は極めて良好である。内面は丹念なミガキが施され、黒光りを呈している。外面体部はロクロ目を丁寧にナデ消し、底外は回転糸切り後無調整で、外縁部には手持ちヘラケズリが施されている。胎土は密で含有物は均一である。48は覆土上層一括で取り上げた破片が接合し、約１／５を遺存する。器面と破断面も若干摩耗しているが、内面には丹念なミガキがみられ、黒色処理はやや薄らぐ部分もあるが全体的には黒光りを呈している。外面には部分的に黒斑が付着し、やや暗い褐色を呈している。底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施されている。49は覆土下層一括で取り上げた破片が接合し、器厚は厚く重量感のある大型で約１／３を遺存する。内面は丹念なミガキが施されているが、黒色処理は若干光沢がみられない。外面はロクロ目を丁寧にナデ消し、底外は回転ヘラケズリ後全面にナデが施されている。50はカマド内一括と覆土上層一括で取り上げた破片が接合した、摘部を欠損する蓋で約１／３を遺存する。内面には丹念なミガキ、外面には回転ヘラケズリ後やや雑なナデが全面に施されている。内面黒色処理は黒光りを呈し、外面は薄く黒色処理されている。51は上層一括で取り上げた土師器高杯脚部片であるが、本跡には伴わない遺物である。52・53は鉄製品で床面及び下層からの出土である。52は刀身先端部を欠損する以外は完存している。残存長120.5㎜、残存刀身長63.8㎜、身幅12.6㎜、背幅3.8㎜、茎長57.3㎜、茎幅6.1㎜、茎厚2.5㎜を計測する。53は火打金で、残存長59.0㎜、幅9.0㎜、厚7.2㎜を計測する。54はカマド内から正立状態で出土した土製支脚で、先端部の約半分を欠損する。

残存長14.7cm、断面位置幅9.2cm、断面位置厚8.9cmを計測する。55は覆土中層から出土した青銅製の巡方である。長さ36.5mm、幅35.0mm、厚9.0mmを測り、重量は21.60ｇである。全体に緑青がみられ、内側には小さな円柱状の突起が６か所にみられる。

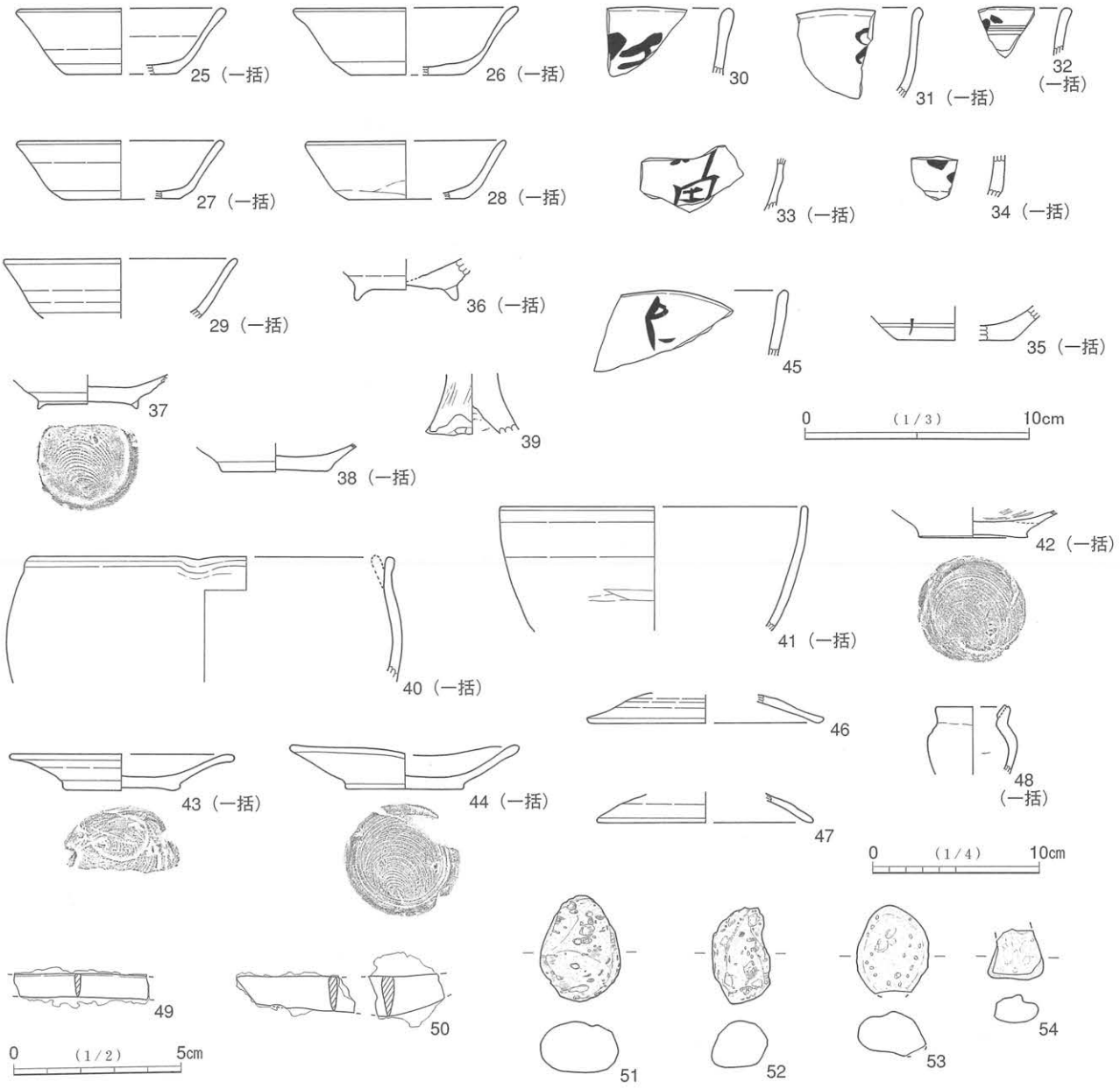
１３４住（第56・57図、第６・10・14・19表、図版11・40～42・53・58・59）

本跡は平安時代前半の竪穴住居跡で、調査区の東側のF15-25から単独で検出されたが、北西壁ほぼ全面と南東壁の一部を床面まで、また、北東壁の一部をそれぞれ攪乱されていた。平面形は方形で、規模は主軸方向に4.7m、幅4.5m、深さ0.5m、床面積は推定14.49㎡で、主軸方向N-43°-Wで、壁の形状は直で壁溝は北西壁直下には巡っていない。南コーナー付近の床面には柱穴らしきピットが１か所検出され、深さ22cmである。そのすぐ脇には平面楕円形で、深さ45cmの貯蔵穴が検出された。南東壁中央直下には出入り口ピットが検出され、平面楕円形で深さ13cmを測る。床面は平らで、硬化面はほぼ全面に認められた。床面のほぼ中央には、平面楕円形で中心部の深さは５cm程度のレンズ状を呈した、床面が焼土化したブロック状の焼土の塊が検出された。炉跡と思われる。北西壁周辺にはカマド構築材の淡黄色砂質土が散在しており、現代の攪乱で破壊された北西壁にカマドが構築されていたようである。本跡はカマドと炉を併用していた竪穴住居跡と考えられる。遺構内の堆積土は大まかに２層に分離でき、自然埋没と思われる。図示できた遺物は土製品と鉄製品も含めて計54点である。

１は須恵器の甕の小片で、胎土に小粒の白色雲母を多量に含み茨城産と思われる。２は須恵器の杯片で、色調は褐灰色を呈し、胎土は密で硬質の焼成で東海産と思われる。内外面ともに精緻なロクロナデ、底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施されている。３～12は土師器の甕片で、遺存度は極めて低い小片である。５～８以外は小型である。いずれの胎土にも微量の海綿骨針を含み、胎土自体は近似しているが、７だけは細かな金雲母が多量に含まれているのが特徴的である。底外は９・11が手持ちヘラケズリ、10・12が回転糸切り後無調整である。13～35は土師器のロクロ杯である。13は南東壁直下の床面レベルから出土した完形品である。口縁端部は側面からみると緩やかな波状を呈し、上面からみると楕円形を呈し、歪みが顕著である。口径12.2cm～13.0cm、底径7.0cm、器高3.3cm～3.9cmを測る。外面体部には正位に『仟』の墨書が薄く描かれている。色調は全体的ににぶい橙色を呈し、胎土には砂粒と金雲母が多めで器面はざらついており、微量に海綿骨針も含まれている。内面のロクロ目はナデ消され不明瞭、外面のロクロ目は明瞭に残る。底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施され、外縁にまで及んでいる。14は床面出土の破片13点が接合し、完形に近い状態まで復元できた墨書土器である。器面は摩耗が顕著で、体部外面正位に描かれた『仟』の墨書は、肉眼で辛うじて判読できる程度である。器形は楕円形に若干歪み、口径12.3cm～12.9cm、底径7.0cm、器高3.7cmを測る。色調は全体的ににぶい橙色を呈し、胎土には小粒の赤色スコリアが多めで、微量に海綿骨針も含まれている。調整は13と同様である。15は南東壁直下の床面レベルから出土した完形品である。歪みはほとんどなく正円で、口径12.8cm、底径6.8cm、器高3.5cmを測る。内面にはロクロナデによる沈線が、幅９mm前後の間隔で底部から口縁部まで渦巻状に巡っている。底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施され、外縁にまで及ぶ。色調は全体的ににぶい赤褐色を呈すが、内外面には部分的に煤が付着し黒色化している部分もみられる。胎土は密で含有物は均一で、微量に海綿骨針も含まれている。16は床直出土と覆土一括で取り上げた破片が接合し、全体の約２／３を遺存する。外面体部に墨書が描かれているが、欠損しているためほんの一部分だけしかみえず判読不能である。色調・胎土・調整等は13と同様である。17・18は全体的な色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土は密で含有物は均一で、


K
A
A'
B
B'
F15-27
A'
20.2m
B'
20.2m
0 (1/80) 4m
1 3 4住
1黒褐色土 ローム土を水玉状に混入
2暗褐色土 ローム土を水玉状に混入
3暗褐色土 ローム土・焼土粒混入
0 (1/4) 10cm
1（一括）
2（一括）
3（一括）
4（一括）
5（一括）
6
7
8（一括）
9
10
11（一括）
12（一括）
13
14
15
16
17
18
19（一括）
20
21
22（一括）
23
24（一括）

第56図　１３４住（１）



第57図　１３４住（２）

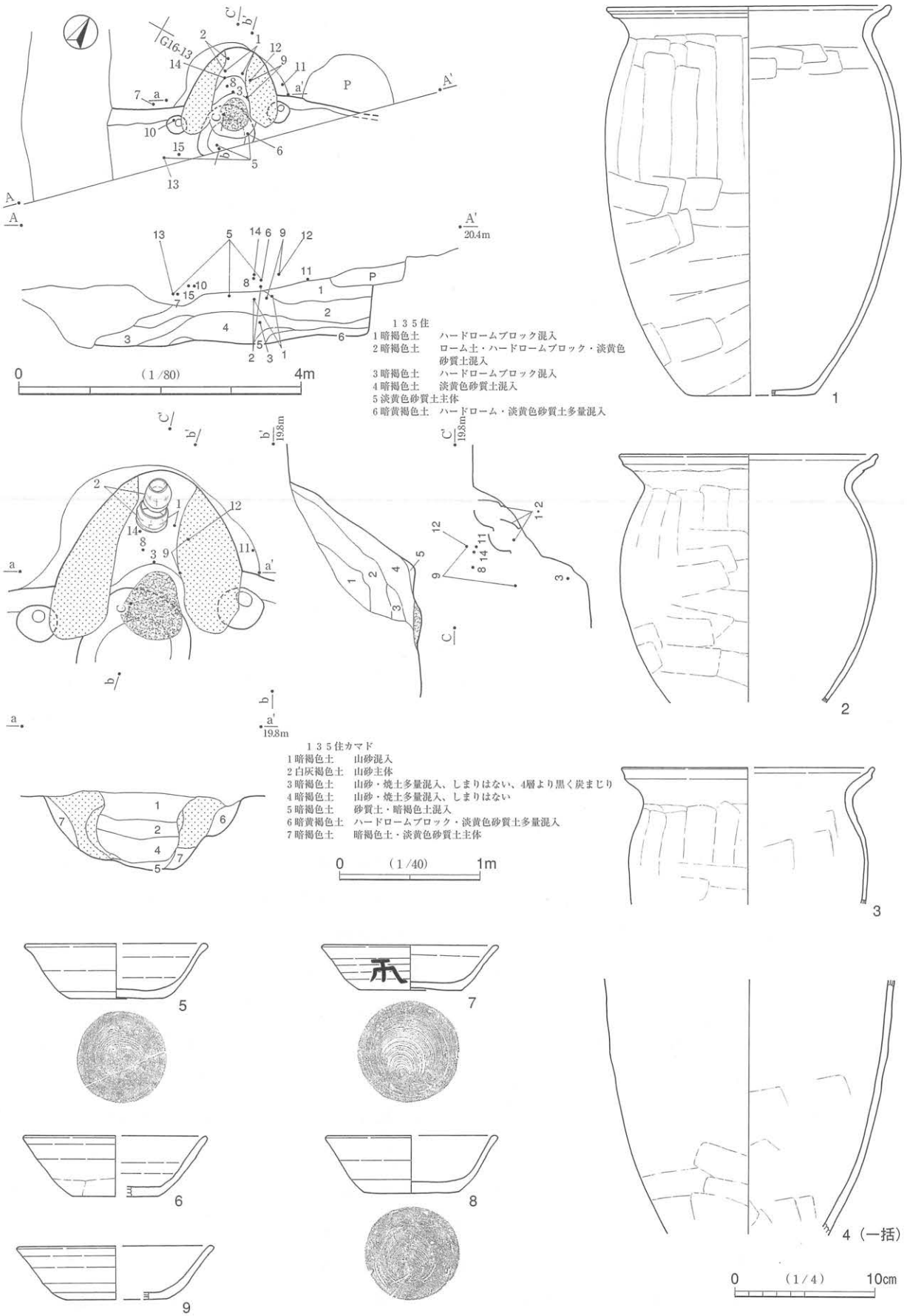
微量に海綿骨針も含まれている。調整は13と同様である。19は口縁部がやや外反気味に立ち上がり、上面からみると若干の歪みが認められる。内外面ともにロクロ目をナデ消し、器面の凹凸はほとんどみられない。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は密で細かな金雲母を多めに含んでいる。20は二次被熱を受け器面は劣化し、煤が厚く付着している。調整は雑で、底内はロクロナデによる凹凸が渦状に残り、底外は全面に回転ヘラケズリが施されるが、ケズリは一定せず凹凸が目立つ。胎土には細かな砂粒が多く含まれている。21～29は遺存度が低く小片も含まれ、23・29を除けばいずれも器面の摩耗が顕著である。色調は全体的ににぶい橙色及び赤褐色を呈し、いずれも胎土には細かな砂粒がやや多めに含まれ、21・24・25・29には微量の海綿骨針も含まれている。調整は内面にロクロナデ・ナデ、外面にロクロナデ・ヘラケズリを基調としているが、23の内面には丹念なミガキが施されている。30～35は体部外面に墨書が描かれている、土師

器の杯の小片であるが、いずれも薄い。30は正位に『仟』,33は正位に『凿』が描かれているが、31・32・34・35はほんの一部分のため判読不能である。36～38は土師器の高台付杯片で、遺存度はいずれも極めて低い。36は器面及び破断面ともに劣化が顕著で、底内は一部剥離している。高台内縁部はナデ、外縁部は回転ヘラケズリで貼付けてある。37は二次被熱を受け器面はやや劣化し、内外面ともに煤が厚く付着している。破断面にも煤が付着していることから、被熱は破断後に受けたものと思われる。高台は回転糸切り後貼付けてあり、36同様の調整が行われている。胎土は密で微量の海綿骨針が含まれている。38は器面及び破断面も摩耗が顕著である。底外は回転糸切り後、外縁を回転ヘラケズリすることで高台を作出している。胎土には細かな黒色スコリアと金雲母が多めに含まれている。39は土師器の高杯の脚部片で、二次被熱を受け器面は赤色化し、破断面は劣化が激しい。40は土師器の片口鉢と思われる小片で、内外面ともに丹念なナデ及びミガキが施されている。胎土は密で含有物は均一である。41は土師器の鉢の口縁部片で器厚は薄く、色調は明るい橙色を呈し、胎土は密で小粒の黒色スコリアがやや多めに含まれている。内面はロクロ目を綺麗にナデ消し、外面は下半部に手持ちヘラケズリ、上半部に軽いナデが施されている。42～47は土師器の皿・蓋類である。42～44は高台付皿で、底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリを施し、外縁を回転ヘラケズリ及びナデることで高台を作出している。胎土はいずれも密であるが、42・44には微量の海綿骨針が含まれている。45～47は蓋の破片で、摘部は遺存していない。いずれも器面はロクロ目をナデ消しているが、外面にはやや残っている。45は肉眼で辛うじてみえる程度の墨書が描かれているが、全体の一部であるため判読不能である。48はミニチュア土器で口縁部内面に径９㎜前後の円形浮文が貼付けてある。49・50は鉄製の刀子片である。49は刀身部で残存長40.4㎜、身幅（実測部位）6.8㎜、背幅（実測部位）1.8㎜を測る。50は同一個体で刀身部の破片２点である。刀身部残存長35.3㎜、22.5㎜、身幅（実測部位）10.0㎜、11.8㎜、背幅（実測部位）2.4㎜、3.4㎜を測る。51～54は軽石で、51・54は黒色系、52・53は白色系である。

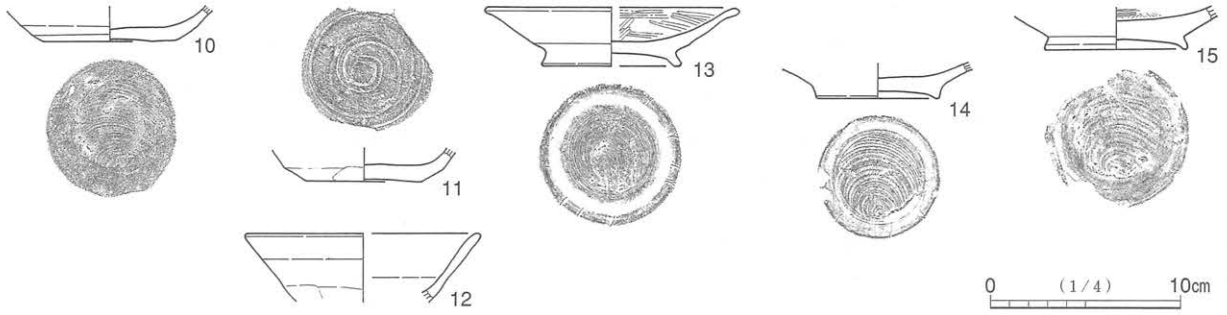
１３５住（第58・59図、第６・10表、図版12・42・43・59）

本跡は平安時代前半の竪穴住居跡で、調査区中央南側の緩斜面上のG16-23から検出された。ほとんどが調査区域外にあり、辛うじて区域内に検出されたカマド部分のみの調査で終了した。また、本跡西側は溝によって破壊されているため正確な規模は不明であるが、分かる範囲では深さ0.7m、主軸方向N-28°-W、壁の形状は直である。カマドは天井部が崩落するものの、遺存状態は比較的良好である。カマド自体は大きく住居壁外に突出し、焚き口部がほぼ壁に面す位置に構築されている。掘り込みは壁から奥へ幅約140㎝、奥行き約90㎝で、掘り込み角は約35°である。カマド両袖部にはピットが検出され、床面からの深さは左袖部で37㎝、右袖部で29㎝を計測する。カマドに関連した何らかの構造物の存在が考えられる。火床部は径約80㎝、深さ20㎝前後のピット状に一端掘り窪められた穴を、再びカマド構築材の淡黄色砂質土で埋めた上に作られている。煙道部には底部を欠損している土師器の甕が２点、口縁部を下にして上下に重なり合うような状態で出土した。煙突として使用された可能性も考えられるが、上に置かれた甕は二次被熱を受け劣化が激しいのに対し、下に置かれた甕の劣化はあまり顕著ではないため、疑問も残る。別の用途も視野に入れた方が良いと思われる。図示できた遺物は計15点である。

１～４は土師器の甕で、いずれもカマド内出土である。１～３は頸部「く」の字屈曲の特徴をもつ地元型である。１・２は煙道部で重なり合った状態で出土し、１が下で２が上になっていた。１は底部を若干欠損するが、全体の約４／５以上を遺存する。口径20.0㎝、底径10.4㎝、器高27.2㎝を測る。筒胴タイプ


G16-13
P
A
A'
20.4m
0 (1/80) 4m
1 3 5住
1暗褐色土 ハードロームブロック混入
2暗褐色土 ローム土・ハードロームブロック・淡黄色砂質土混入
3暗褐色土 ハードロームブロック混入
4暗褐色土 淡黄色砂質土混入
5淡黄色砂質土主体
6暗黄褐色土 ハードローム・淡黄色砂質土多量混入
19.8m
1 3 5住カマド
1暗褐色土 山砂混入
2白灰褐色土 山砂主体
3暗褐色土 山砂・焼土多量混入、しまりはない、4層より黒く炭まじり
4暗褐色土 山砂・焼土多量混入、しまりはない
5暗褐色土 砂質土・暗褐色土混入
6暗黄褐色土 ハードロームブロック・淡黄色砂質土多量混入
7暗褐色土 暗褐色土・淡黄色砂質土主体
0 (1/40) 1m
1
2
3
4 (一括)
5
6
7
8
9
0 (1/4) 10cm

第58図　１３５住（１）



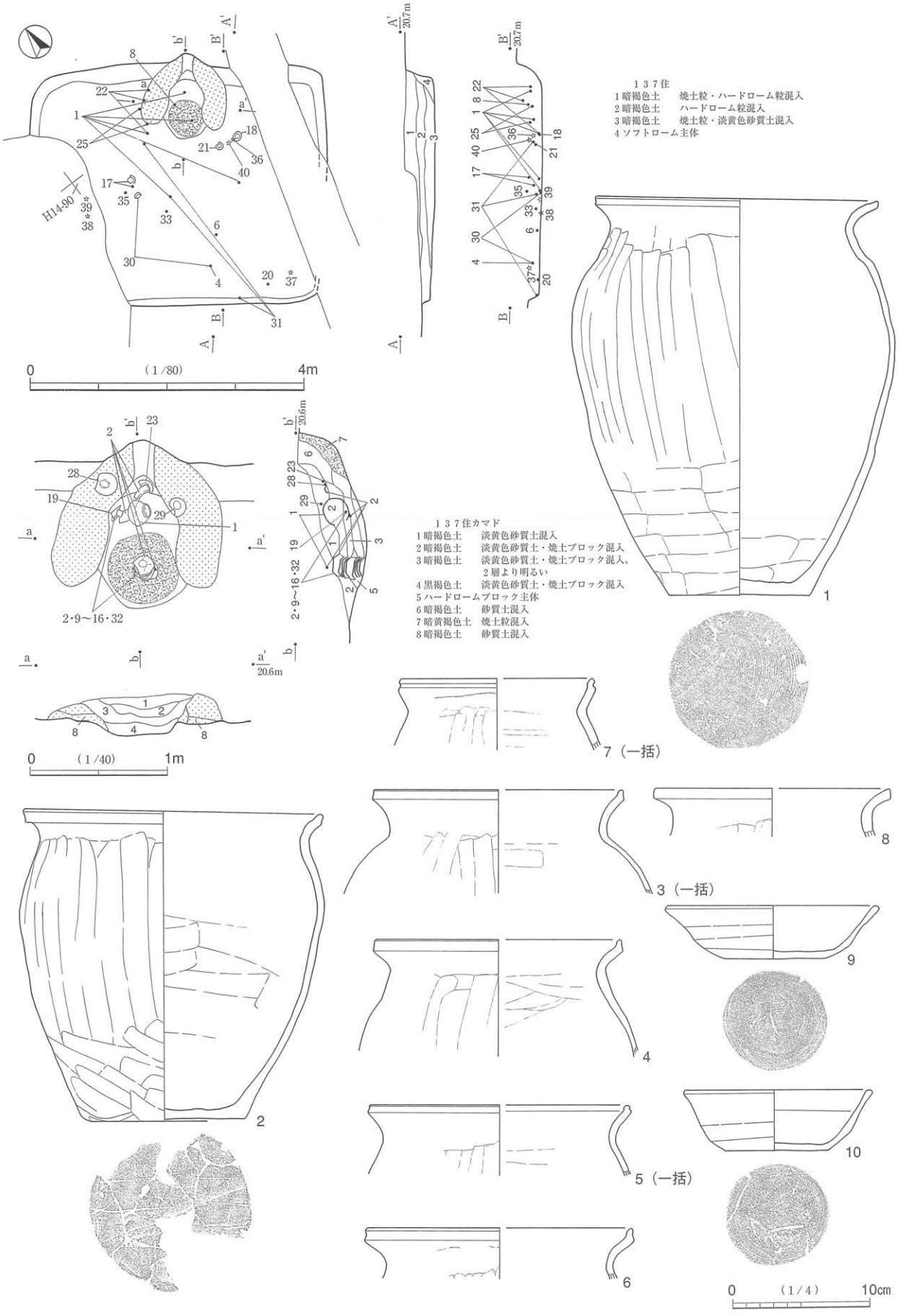
第59図　１３５住（２）

で、口縁部が若干摘み上げられ、外面に面を有する。内面は滑らかにヘラナデ、外面は上半部に縦位のヘラケズリ、下半部に横位のヘラケズリが施され、やや薄手である。底外は全面に手持ちヘラケズリが施されている。二次被熱は受けているが外面の劣化はさほど顕著ではなく、内面は中位に部分的に斑状の剥離がみられるが、小規模である。色調は全体的ににぶい赤褐色を呈し、胎土には細かなスコリアがやや多めで、微量の海綿骨針も含まれている。２は底部をそっくり欠損するが、全体の約４／５は遺存しており、口径16.2㎝を測る。球胴タイプで、調整は１と同様で、器厚も薄手である。二次被熱を受け内外面ともに劣化は激しく、剥離も顕著で、煤も厚く付着している。色調は煤が付着していない部分はにぶい赤褐色を呈し、胎土には細かな砂粒が多量で、海綿骨針もやや多めに含まれている。３は遺存度が極めて低く、全体の１／10程度である。筒胴タイプと思われ、調整は１・２と同様で、器厚も薄手である。二次被熱は受けているが内外面の劣化はさほど顕著ではなく、器面の剥離も煤の付着もみられない。色調は全体的ににぶい赤褐色を呈し、胎土には細かな砂粒が多量で、海綿骨針もやや多めに含まれている。４は胴部片で遺存度は低く、器面の摩耗が顕著である。胎土には白色雲母と砂粒が多量で、微量の海綿骨針も含まれている。５～12は土師器のロクロ杯で、遺存度は５～７が約３／５以下、８～12は約２／５以下で、いずれも覆土上層からの出土である。色調は全体的ににぶい赤褐色及びにぶい橙色を呈し、胎土は密で含有物は均一である。調整は内面はロクロ目をナデ消し不明瞭に残り、外面はロクロ目を軽くナデ消してはいるが比較的明瞭に残っている。５・７・８・10の底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリ、６・11は全面手持ちヘラケズリ９は全面回転ヘラケズリがそれぞれ施されている。いずれもこのヘラケズリは底部外縁にまで及んでいる。７は体部外面の正位に『爪』の墨書が描かれており、肉眼でやっとみえる程度である。13～15は土師器の高台付皿で、いずれも覆土上層からの出土である。13は全体の約１／２を遺存し、底部は完存している。全体的に丁寧な作りで、歪みや器面の凹凸はほとんどみられない。内面は精緻なミガキが施され、外面はロクロ目を丁寧にナデ消している。底外は回転糸切り後高台が貼付けてられ、高台の内外縁はナデ調整が行われている。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土は密で含有物は均一である。14は底部のみ完存し、器面はやや摩耗しざらついている。内外面ともにナデを基調とし、底外は回転糸切り後高台が貼付けられ、高台の内外縁はやや雑なナデが施されている。器面は部分的に煤が薄く付着し、黒っぽくみえる。胎土には細かな砂粒と金雲母が多めで、微量の海綿骨針も含まれている。15は底部片で、二次被熱を受け外面の劣化が顕著である。内面はミガキ、底外は回転糸切り後高台を貼付け、高台の内外縁はやや雑なナデが施されている。色調は全体的ににぶい橙色を呈し、胎土には細かな砂粒がやや多めで、微量の海綿骨針も含まれている。

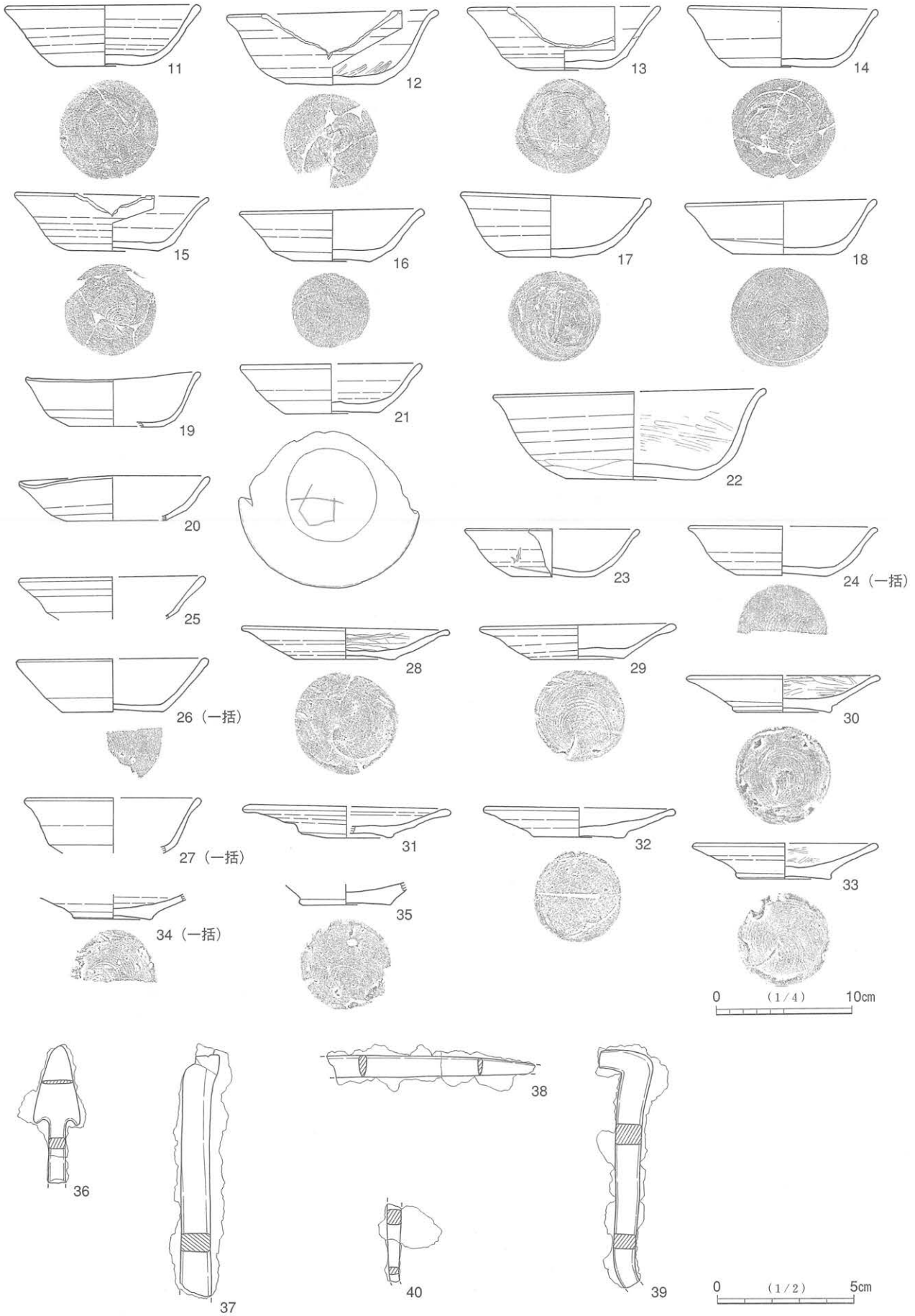
１３７住（第60・61図、第６・10・14・15・17表、図版12・44・45・53・54）

本跡は平安時代前半の竪穴住居跡で、調査区東側の竪穴住居跡が密集しているH14-90から検出された。本跡はほとんどが現道下にあり、ガチガチに固められた状態で検出された。東側は雨水管敷設による掘削で、西側は現代の攪乱により大きく床面まで削平されていた。重複関係は現代の攪乱部分で117住を切り、北側コーナー部分で148掘の柱穴P6に切られている。平面形は主軸方向より幅の方が大きな長方形で、規模は一部推定も含めて、主軸方向に3.6m、幅4.3m、深さ0.5mで、主軸方向N-37°-E、壁の形状は急で壁溝は確認できる部分では巡っていない。床面は平らで硬化部分は特にみられず、カマド以外には柱穴・貯蔵穴等の検出はなかった。カマドは北東壁の中央に構築され、天井部は崩落するものの遺存状態は比較的良好である。カマド自体は煙道部のみが住居壁外に出ており、大部分は住居壁内に構築されている。燃焼部床面にはカマド構築材の淡黄色砂質土が全体に敷き詰められていた。火床部は焚き口部分にみられ一部はカマド外にまで及び、その中央からは９枚の杯が口縁部を下にして積み重ねられた状態で出土した。支脚の代用である。壁外への掘り込みは壁から奥へ幅約60cm、奥行き約15cmで、掘り込み角は約15°である。遺構内の堆積土は大まかに３層に分離でき、自然埋没と思われる。図示できた遺物は鉄製品も含めて計40点である。

１～８は土師器の甕で、３～８の遺存度は極めて低い。１は本跡の比較的広範囲から出土した破片が接合したもので、全体の約４／５を遺存する。口径20.4cm、底径10.3cm、器高29.1cmを測る。頸部「く」の字屈曲の特徴をもつ地元型である。口縁部が若干摘み上げられ、外面に面を有する。内面は滑らかにヘラナデ、外面は上半部に縦位のヘラケズリ、下半部に横位のヘラケズリが施されている。底外は回転糸切り後無調整である。二次被熱を受け器面の劣化は顕著で、外面は煤が付着し赤褐色に変色している部分がみられ、内面は下位に斑状の炭化物が薄くみられる。胎土には細かな砂粒がやや多めで、微量の海綿骨針も含まれている。２はカマド内出土の破片が接合したもので、全体の約２／３を遺存する。口径21.4cm、底径11.8cm、器高22.7cmを測る。１と同様の特徴をもつ地元型である。二次被熱を受けているが、器面の劣化はあまり顕著ではない。煤は部分的に付着し、色調は煤が付着していない部分は明赤褐色を呈している。底外は全面手持ちヘラケズリが施され、ケズリの方向に数条の擦線がみられる。３～８は口縁部の小片で、調整等は１・２と共通しており地元型である。いずれも二次被熱を受け、器面は劣化し煤が部分的に付着している。３は薄手で、胎土には大粒の赤色スコリアが多めで、微量の海綿骨針を含んでいる。４はやや厚手で、胎土には細かな砂粒と海綿骨針が多めに含まれている。５・６は煤が厚く付着し、黒っぽい。５は胎土に細かな砂粒と海綿骨針を多めに含んでいる。６の胎土は密で、微量の海綿骨針を含んでいる。７・８は外面が赤褐色に変色し、胎土には細かな砂粒と海綿骨針が多めに含まれている。９～27は土師器のロクロ杯で、図示できたものだけでも19点ある。カマド内出土で32の高台付皿を含めた９点は口縁部を下にして積み重ねられ、１点１点の間にはハードロームや砂質土が混入され支脚代わりに使用されていた。上から順に12・16・11・９・32・15・14・10・13で、いずれも二次被熱を受け器面の劣化は顕著である。32を除く８点の杯はいずれも大きさにおいては若干の差はあるが、遺存度は高く、色調・胎土・調整等ほとんど共通している。色調は明るい褐色及び赤褐色を呈し、胎土に細かな砂粒が多く含まれざらつき感があり、海綿骨針も微量に含まれている。内面はロクロ目をナデ消し、外面は内面ほどナデ消しは強くなく、ロクロ目は明瞭に残っている。底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施され、外縁部にまで及んでいる。17は若干の歪みがありにぶい橙色を呈し、胎土は密で金雲母をやや多めに含んでいる。底外は回転


１３７住
1暗褐色土　焼土粒・ハードローム粒混入
2暗褐色土　ハードローム粒混入
3暗褐色土　焼土粒・淡黄色砂質土混入
4ソフトローム主体
H14.90
0　(1/80)　4m
１３７住カマド
1暗褐色土　淡黄色砂質土混入
2暗褐色土　淡黄色砂質土・焼土ブロック混入
3暗褐色土　淡黄色砂質土・焼土ブロック混入、2層より明るい
4黒褐色土　淡黄色砂質土・焼土ブロック混入
5ハードロームブロック主体
6暗褐色土　砂質土混入
7暗黄褐色土　焼土粒混入
8暗褐色土　砂質土混入
2・9～16・32
0　(1/40)　1m
0　(1/4)　10cm

第60図　１３７住（１）


11
12
13
14
15
16
17
18
19
21
22
20
23
24（一括）
25
28
29
26（一括）
30
27（一括）
31
32
33
34（一括）
35
0 (1/4) 10cm
36
37
38
40
39
0 (1/2) 5cm

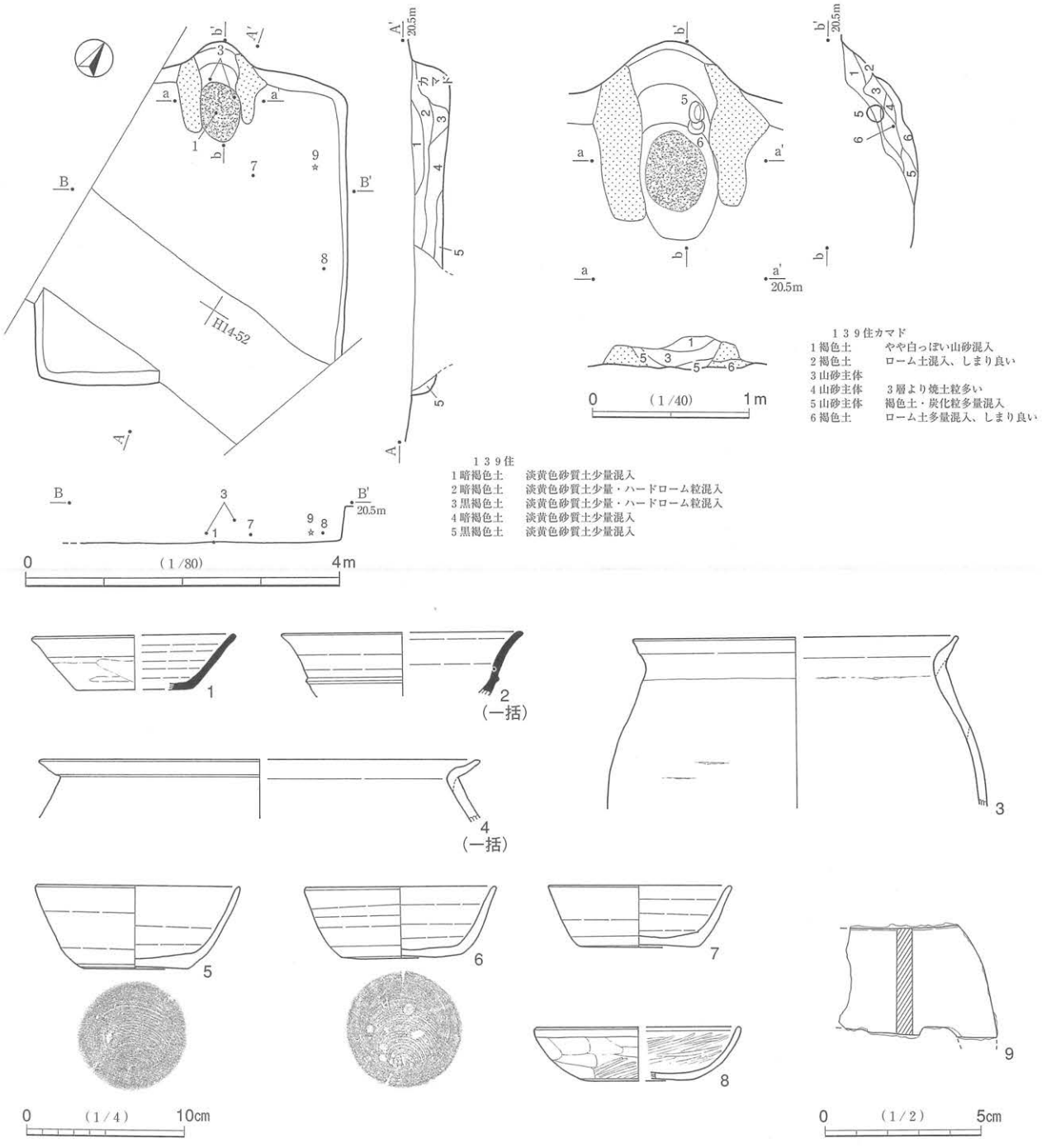
第61図　１３７住（２）

ヘラ切りが施され多少の起伏がある。18は歪みはなく均整のとれた器形で、完形に近い。底外は回転糸切り後ほぼ全面に回転ヘラケズリが施され、外縁部にまで大きく及んでいる。19・20は歪みが大きく、口縁部を上からみると極端な楕円形を呈している。21は器厚が厚く、小さめのわりには重量感がある。底外は全面回転ヘラケズリが施され、焼成後に線刻が描かれている。22は大型の杯で約1／2を遺存し、口径19.6cm、底径9.7cm、器高6.8cmを測る。内面はミガキ、外面はロクロ目を軽くナデ消している。底外は全面手持ちヘラケズリが施され、外縁部にまで大きく及んでいる。23～27は遺存度が低く、いずれも小片である。23～25は二次被熱を受け器面の劣化は顕著である。23は内外面の一部が赤褐色に変色し、それ以外の部分には煤が付着している。胎土には細かな砂粒と黒色スコリアがやや多めで、微量の海綿骨針も含まれている。底外は回転ヘラ切り後外周に回転ヘラケズリが施され、体部外面には焼成前の線刻がみられる。24は胎土に海綿骨針がやや多めに含まれている。25は薄手で胎土には細かな砂粒が多めに含まれ、内外面ともに煤が厚く付着している。26・27は器面及び破断面も摩耗が顕著の小片である。28～35は土師器の皿で、いずれも高台を意識した作りである。28・29は4／5以上を遺存し、完形に近い。いずれも二次被熱を受け器面は劣化し、内外面には煤が厚く付着している。胎土には細かな砂粒がやや多めに含まれている。内面にはミガキが施されているが、28は明瞭にみられ、29は劣化が激しいため不明瞭である。底外は回転糸切り後外縁を軽く手持ちヘラケズリすることで、高台部を作り出している。30・33～35は橙色を呈し、胎土は密で含有物は均一である。器面及び破断面は摩耗し、内面のミガキは辛うじてみられる。底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施され、外縁にまで強く及びやや高めの高台を作り出している。31は二次被熱を受け内面の劣化が顕著で、部分的に剥離している。胎土には細かな砂粒と黒色スコリアがやや多めに含まれている。底外は回転糸切り後外縁をナデることで高台を作り出している。32はカマド内で支脚代用として使われたもので、二次被熱を激しく受け器面は赤褐色に変色している。内外面は劣化も顕著で、内面のミガキはほとんどみられない。底外は回転糸切り後外縁を手持ちヘラケズリすることで高台を作り出している。36～40は鉄製品である。36は茎部を欠損する鏃で、残存長40.0㎜、鏃身長29.0㎜、鏃身幅17.3㎜、逆刺長2.5㎜を測る。37は用途不明で残存長87.8㎜、幅11.0㎜、厚7.2㎜を測る。38は刀子の茎片と思われる。残存茎長75.4㎜、茎幅6.1㎜、茎厚1.8㎜を測る。39は用途不明で残存長87.6㎜、幅9.8㎜、厚7.9㎜を測る。40は釘で残存長28.5㎜、幅5.5㎜、厚5.2㎜を測る。

１３９住（第62図、第６・10・17表、図版13・45・53）

本跡は奈良時代後半の竪穴住居跡で、調査区北側現道下のH14-51から検出された。本跡は中・近世の溝と現代の雨水管により床面まで破壊されており、古墳時代前期の140住を切り、平安時代前半の118住に切られている。平面形は方形で、規模は一部推定も含めて、主軸方向に4.0m、幅3.9m、深さ0.5m、推定床面積13.51㎡、主軸方向N-33°-W、壁の形状は急で壁溝は確認できる部分では巡っていない。床面は平らで硬化部分は全面に及ぶ、カマド以外は柱穴・貯蔵穴等は検出されなかった。カマドは北西壁の中央やや東よりに構築され、天井部は崩落するものの遺存状態は比較的良好である。カマド自体は煙道部のみが住居壁外に出ており、大部分は住居壁内に構築されている。袖基底部はほぼ平行に構築され、壁外への掘り込みは壁から奥へ幅約100cm、奥行き約35cmで、掘り込み角は約30°～40°である。カマド内からは土師器の杯２点が出土した。遺構内の堆積土は大まかに３層に分離でき、自然埋没と思われる。図示できた遺物は鉄製品も含めて計９点である。

１・２は須恵器である。１は杯でカマド内火床部上面出土の破片と、カマド内一括で取り上げた破片が



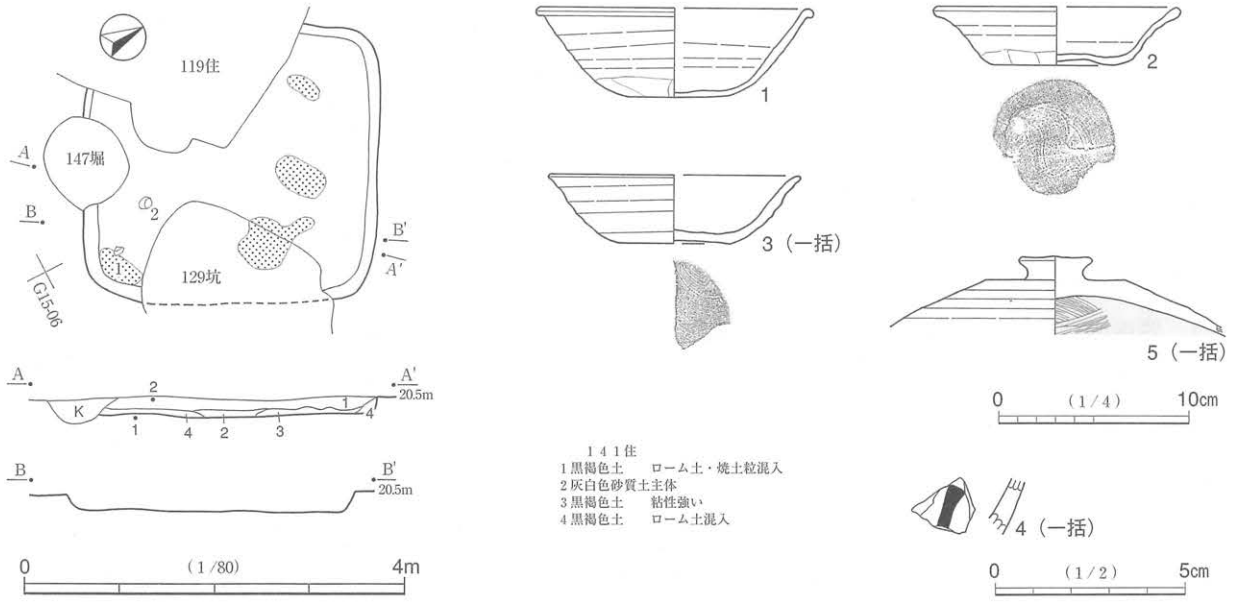
第62図　１３９住

接合したもので、全体の約１／４を遺存する。復元口径12.6cm、復元底径7.4cm、器高3.5cmを測る。内面はロクロナデによる凹凸が残り、外面は上半部にロクロナデ、底外は全面手持ちヘラケズリが施され下半部にまで及んでいる。硬質の焼成で、色調は灰色を基調にしているが、二次被熱を受け器面は褐色に変色している部分がみられる。胎土は密で含有物は均一である。２は高杯の口縁部片で遺存度は極めて低い。体部中位には一段の稜をもつ古相の高杯片と思われる。内外面にはロクロナデが施され、色調は褐灰色を呈し、硬質の焼成である。３・４は土師器の甕の口縁部片で遺存度は極めて低く、器面はやや摩耗している。胎土には白色雲母及び砂粒が多量に含まれ、ざらざらしている。５～８は土師器の杯で、５～７は箱形のロクロ杯、８は非ロクロ杯とされる。５・６は遺存度は高く完形品に近い。カマド内からの出土で、

二次被熱を受け器面の劣化は顕著で、赤色若しくは赤褐色に変色し、煤が厚く付着している。5は口径12.8cm、底径6.7cm、器高5.3cmを測る。内外面はロクロナデを基調とし、底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施され、外縁に軽く及んでいる。底外には『ﾍﾍ』状の線刻がみられる。胎土は密であるが、細かな金雲母がやや多めである。6は5より若干遺存度は落ちるが、口径11.9cm、底径7.6cm、器高4.7cmを測り、ほとんど同様の調整が施されている。胎土は密であるが、細かな砂粒がやや多めである。7は覆土下層から出土したほぼ完形品で、口径11.4cm、底径8.0cm、器高3.9cmを測る。二次被熱を受け外面は厚く煤が付着し、ほとんど黒色を呈している。5・6とほぼ同様の調整が施されているが、底外は全面手持ちヘラケズリが施され、切り離し技法は不明である。胎土は密であるが、中粒の赤色スコリアがやや多めである。8は覆土下層出土の破片で、二次被熱を受け器面は部分的に劣化し、煤が内外面ともに付着して灰赤色を呈している。ヘラミガキとナデを基調とし、底外は手持ちヘラケズリが施され、部分的に体部まで及んでいる。胎土は密で細かな砂粒がやや多めで、微量の海綿骨針も含まれている。9は覆土下層から出土した鉄鎌の柄の部分であるが、錆もほとんど付着しておらず比較的新しいものと思われる。

１４１住（第63図、第6・10表、図版47）

本跡は調査区中央部やや北側の、遺構が集中している地域のG14-85から検出された。重複も多く、土坑の129坑を底面まで切り、平安時代前半の119住と掘立柱建物跡である147掘の柱穴10には床面まで切られていた。平面形は方形で、規模は一部推定も含めて、主軸方向に推定3.0m、幅3.1m、深さ0.2m、推定床面積7.84㎡、主軸方向N-61°-W、壁の形状は急で壁溝は確認できる部分では巡っていない。床面は平らで硬化部分はなく、カマド・柱穴・貯蔵穴等は検出されなかった。床面には4か所に焼土ブロックが検出された。遺構内の堆積土は大まかに2層に分離でき、自然埋没と思われる。出土遺物は僅少で、図示できた遺物は計5点である。本跡の帰属時期は出土遺物自体が僅少で、床面出土の遺物が1点のため断定は難しいが、遺構の切り合い関係も含めて考えると、奈良時代末から平安時代初頭とするのが妥当と思われる。



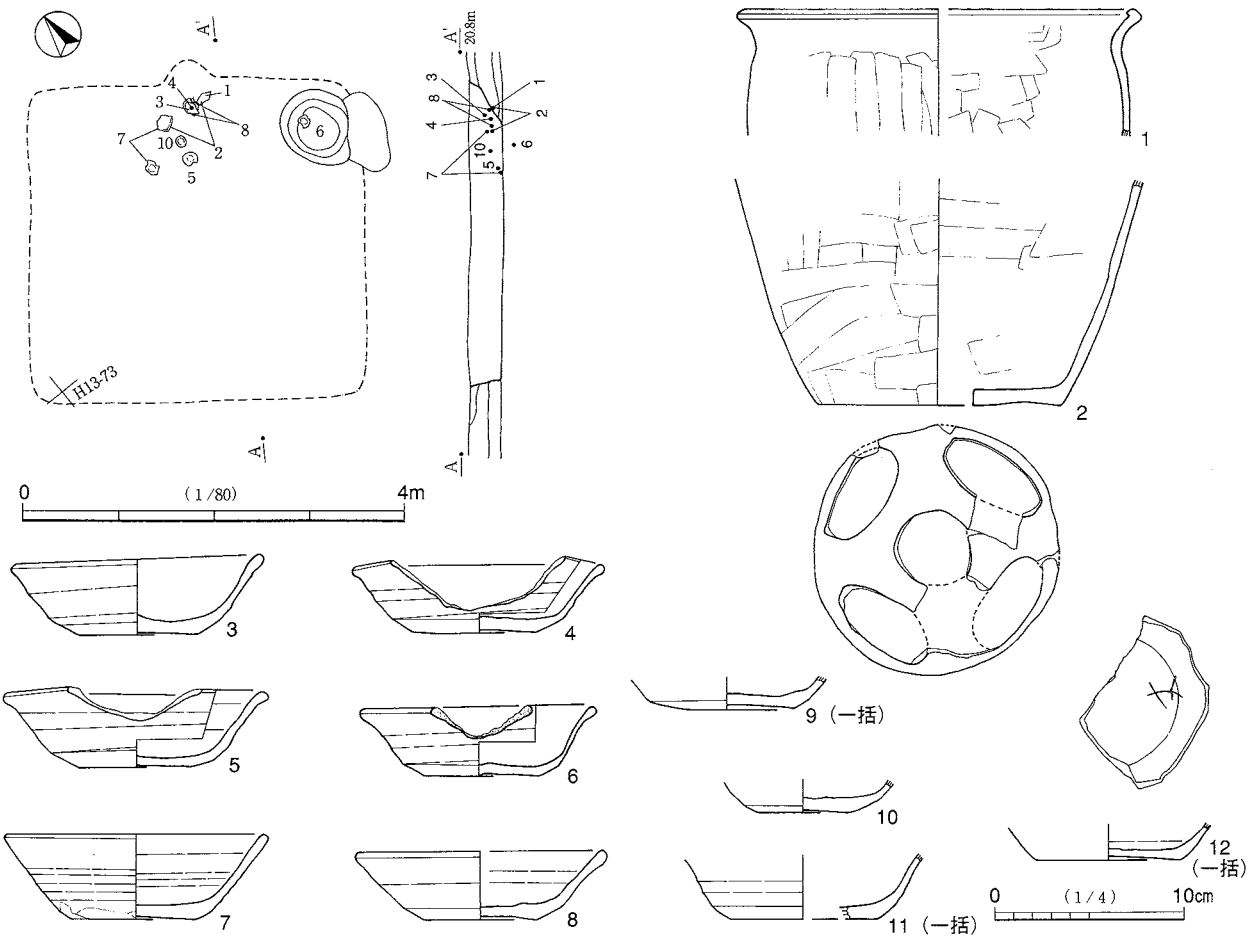
第63図　１４１住

1～4は土師器のロクロ杯である。1は南側コーナーの床面から出土し、器面の摩耗は顕著である。全体の約2／3を遺存し、復元口径14.1cm、底径5.6cm、器高4.7cmを測る。内面はロクロ目が微かに残り、底内はロクロナデによる凹凸が渦状に残る。外面はロクロ目がやや明瞭に残り、底外は回転糸切り後外周に手持ちヘラケズリが施され、外縁にまで及んでいる。色調は灰褐色を呈し、胎土には黒色スコリアが多量に含まれている。2は覆土上層出土で、約半分を遺存している。やや雑な調整で若干の歪みがみられ、底外は回転糸切り後外周に手持ちヘラケズリが施され、ヘラの当たり痕が大きく残っている。色調は全体的ににぶい橙色で、外面の一部には煤が厚く付着し黒色を呈し、胎土には細かな砂粒と海綿骨針がやや多めに含まれている。3は外面の調整は雑で、ロクロナデによる凹凸が明瞭に残り、底外は回転糸切り後無調整である。色調は内外面ともに煤が斑状に付着し暗い橙色を呈し、胎土には金雲母と小粒の赤色スコリアがやや多めに含まれている。4は外面に墨書が描かれているが、小片であるため判読不能である。5は土師器の蓋である。内面は精緻なミガキが施され、黒色処理による黒光りを呈している。外面は摘周辺部に回転ヘラケズリ、残りの部分にはナデが施されている。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は密で微量の海綿骨針が含まれている。

１４２住（第64図、第6・10表、図版13・47）

本跡は、弥生時代後期の竪穴住居跡SB026住の調査中にH13-63から検出された。今回のSB026住の調査は、平成10年度調査時に現道下のため未調査だった部分で、当初1軒単独として調査を行っていた。しかし、床面近くから8世紀代の土師器がまとまって出土したため急遽土層断面を確認したところ、本跡がSB026住の床面同一レベルですっぽりと重複していることが分かった。第64図で示した遺構平面図は、この土層断面と、直立して出土した支脚の位置から起こしたものである。支脚は床面に固定された柱状の被熱した固い砂質土の上に、杯3枚を口縁部を下にして重ね合わせて作られており、周辺には焼土粒が疎らにみられた。カマドの位置はこの固定された支脚の位置から推定して北東壁側であると思われるが、周辺にはカマド構築材の淡黄色砂質土はみられなかった。この状態から類推すると、作りつけのカマドではなく、置きカマド的な存在が考えられる。このカマドの右脇には、平面楕円形で深さ約20cmの貯蔵穴が検出され、底面からは同時期の土師器の杯が出土した。本跡の規模は不明な点が多いが、分かる範囲では深さ0.3m、主軸方向はN-37°-Eで壁は直である。図示できた遺物は計12点で、全て土師器である。これらの遺物は8世紀代の遺物で、本跡の帰属時期は平安時代前半とすることができる。

1は甕の口縁部片である。二次被熱を受け外面は劣化が顕著で、一部器面が剥落している。色調は全体的ににぶい赤褐色を呈し、胎土にはやや多めに海綿骨針が含まれている。調整は内面にヘラナデ、外面にヘラケズリが施されている。2は底部5孔の甑で、全体の約1／3を遺存する。二次被熱を受け劣化が顕著で、器面の剥落が部分的にみられる。色調は赤褐色を呈し、胎土には細かな砂粒がやや多めで、微量に海綿骨針も含まれている。調整は内面にヘラナデ、外面にヘラケズリが施されている。底外は回転糸切り後部分的に手持ちヘラケズリが施され、底内は無調整である。3～12はロクロ杯である。支脚の代用として使われたものは上から順に3・8・4で、いずれも口縁部を下にして積み重ねられ、激しく被熱し器面の剥落及び劣化は激しい。3は特に内面の被熱が激しく、器面の大部分は剥落し赤く変色している。全体の約2／3を遺存し、口径12.6cm、底径6.2cm、器高4.2cmを測る。調整は全体的に雑で、底内にはロクロナデによる凹凸が渦状に残り、底外は回転ヘラ切り後無調整で、外縁部には回転ヘラケズリが施され、その際にできたヘラの当たり痕が深く残っている。胎土には海綿骨針がやや多めに含まれている。8は内外面



第64図　１４２住

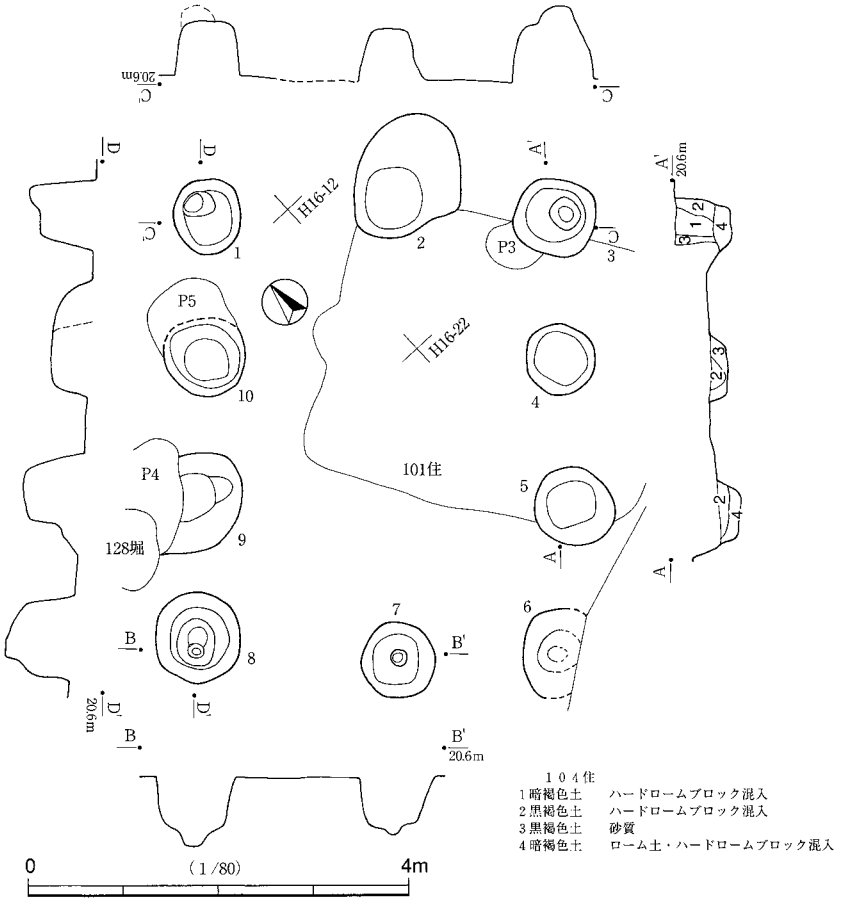
の体部に激しい被熱を受け、器面の剥落及び劣化が顕著にみられる。口縁部のほとんどを欠損し、全体の約１／２を遺存する。復元口径12.8cm、底径5.9cm、器高3.6cmを測る。色調は明るい赤褐色に変色し、胎土は密で、細かな金雲母がやや多めに含まれている。調整は３とほぼ同様である。４は３・８ほどには激しく被熱は受けていないが、口縁部から体部の一部には器面の剥落がみられる。全体の約４／５を遺存し、口径12.7cm、底径6.0cm、器高3.9cmを測る。口縁部から体部下端にかけては大きく「U」字状に綺麗に破断しており、意図的に欠いたものと思われる。色調・胎土・調整は８とほぼ同様である。５は床直上から正位の状態で出土し、口縁部から体部中位までの打ち欠かれた部分を除けば完形品である。口径13.3cm、底径6.0cm、器高4.0cmを測り、二次被熱を受け内外面には煤が付着し全体的に黒っぽい。胎土は密で海綿骨針がやや多めに含まれている。底外は回転ヘラ切りが施され、外縁にまで及んでいる。６は貯蔵穴底面から出土した、４・５同様の打ち欠き土器で、大きく歪んでいる。全体の約４／５を遺存し、口径12.0cm、底径6.1cm、器高3.7cmを測る。色調は明るい赤褐色を呈し、胎土には赤色スコリアを多めに含み、微量の海綿骨針も含まれている。調整は雑で底外は回転ヘラ切り時の粘土屑が付着している。７は床面出土の破片と覆土中層の破片が接合したもので、全体の約４／５を遺存する。二次被熱を受け、器面は赤彩を施したかのように赤褐色に変色し、剥落している部分も顕著にみられる。内外面ともにロクロ目は明瞭に残り、底外は回転糸切り後やや雑な手持ちヘラケズリが施され、外縁にまで及んでいる。胎土は密で海綿骨針がやや多めに含まれている。９～12は底部片で、10は覆土中層、それ以外は一括で取り上げたもので遺存度は極めて低い。いずれも色調は赤褐色から橙色を呈し、胎土は密で海綿骨針がやや多めに含まれている。12の底内には線刻がみられる。

（２）掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は７棟分の柱穴の配列が確認された。掘立柱建物跡に伴う遺物は少なく時期を細分できるものは少ないが、竪穴住居跡やその他の遺構との重複関係から、いずれも平安時代後半の時期に帰属すると思われる。１棟分として柱穴が全て揃って検出された掘立柱建物跡は３棟で、残りの４棟に関しては他遺構との重複等で未検出の柱穴がある。各掘立柱建物跡の柱穴番号は、基本的に桁行の北側を上とし、左上から時計回りに１、２、…と順番に番号を付した。重複等で未検出の柱穴があっても、そこにあったものとしてカウントしているため、遺構図面や観察表等の柱穴番号が急にとんでいる箇所がある。柱穴深は確認面から最大深を計測し、面積は桁行長×梁行長で表している。詳細な計測値については観察表に記載したので、併せて参考とされたい。

１０４掘（第65図、第７表、図版４）

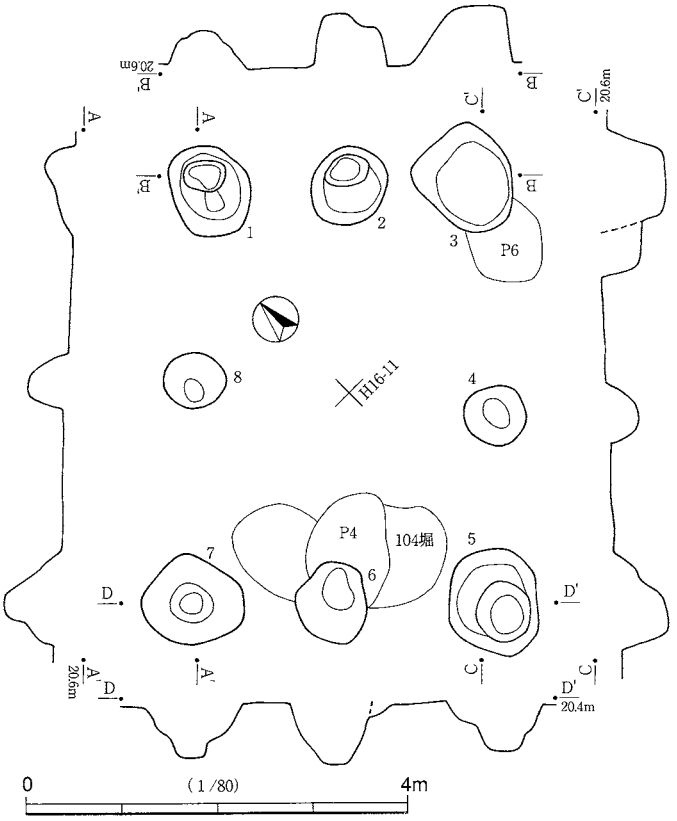
調査区の南側境界近くのH16-21に位置し、南西側に緩やかに傾斜する緩斜面上に構築されている。柱穴の配置はほぼ正確に対応する桁行３間×梁行２間の掘立柱建物跡である。平安時代前半の竪穴住居跡101住及び掘立柱建物跡128掘と重複している。本跡に伴う柱穴は全て検出されたが、柱穴６の一部は調査区域外にかかっており、全掘できなかった。本跡柱穴２～５が101住を、１・９・10が128掘をそれぞれ切っている。規模は、桁行長4.5m、梁行長3.9m、面積17.55㎡、柱穴深の平均は61cmを計測し、桁行方位N-43°-Wである。柱穴覆土はハードロームブロック混入土を主体としている。本跡に伴う遺物は僅少で、しかも小片のため図示できたものはない。



第65図　１０４掘

１２８掘（第66図、第７表）

調査区の南側境界付近のH16-11に位置し、平安時代前半の竪穴住居跡109住及び104掘と重複し、南西側に緩やかに傾斜する緩斜面上に構築されている。柱穴の配置はほぼ正確に対応する桁行２間×梁行２間の掘立柱建物跡である。本跡に伴う柱穴は全て検出されたが、２・３が僅かに109住を切り、４・５が104掘と重複している。本跡と104掘の新旧関係は、本跡柱穴６と104掘柱穴９の覆土の状況から、本跡の方が古いと思われる。柱穴径は四隅の１・３・５・７がやや大きく、中間の２・４・６・８が小さめである。規模は、桁行長4.5m、梁行長3.0m、面積13.50㎡、柱穴深の平均は52cmを計測し、桁行方位N-45°-Eである。本跡に伴う遺物は僅少で、しかも小片のため図示できたものはない。

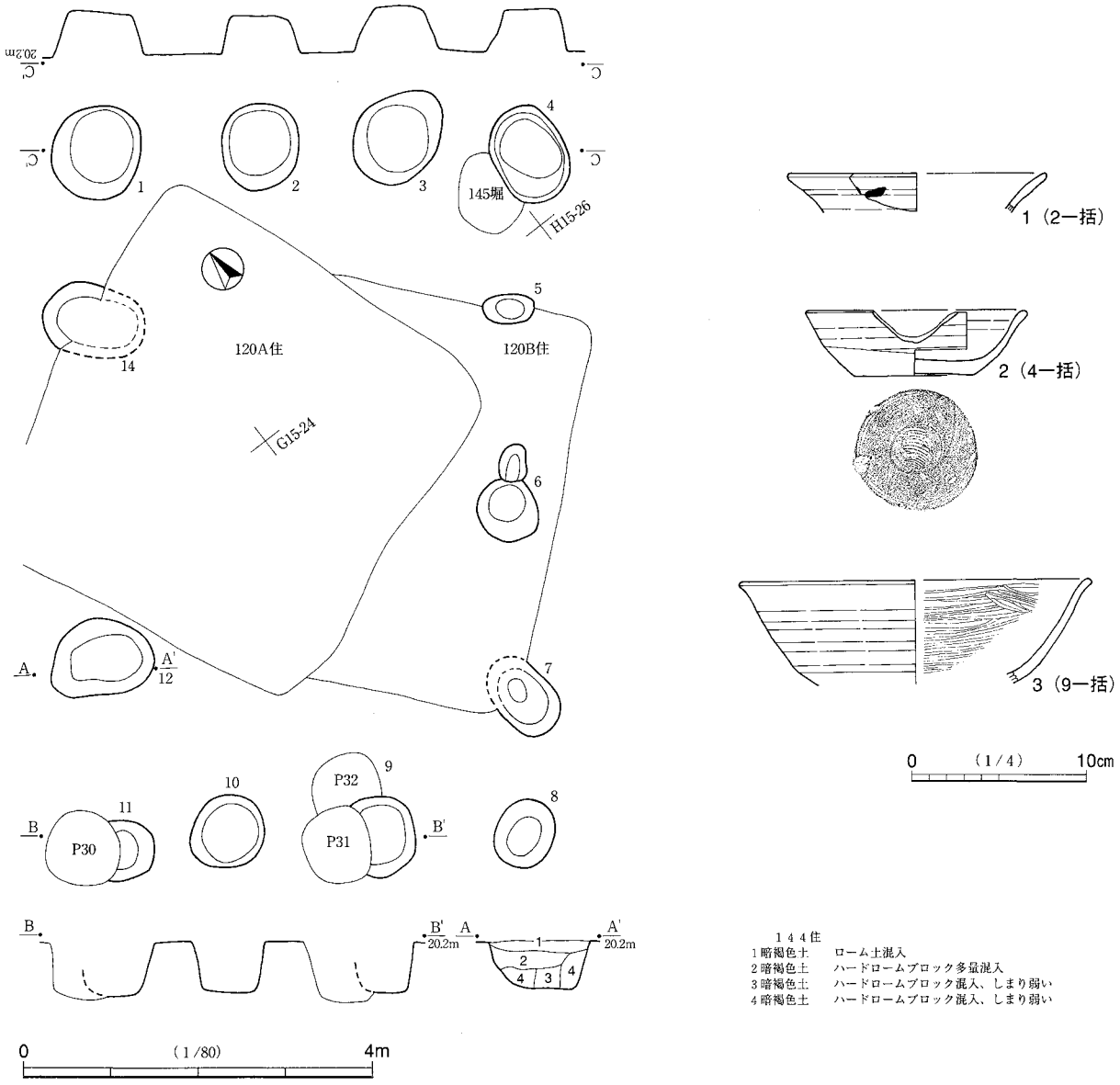


第66図　１２８掘

１４４掘（第67図、第７・10表、図版50・60）

調査区の中央部のG15-24に位置し、古墳時代中期の120B住、古墳時代後期の溝状遺構130溝、平安時代前半の120A住を切り、145掘に切られている。重複が激しく柱穴の痕跡を残さないものもあるが、柱穴の配置はほぼ正確に対応する桁行４間×梁行３間の掘立柱建物跡である。本跡に伴う柱穴は13か所確認できたが、120A住の覆土内に構築されていたであろう１か所は、住居跡調査中に見過ごしてしまったようである。他に120A住と重複している柱穴14、120B住と重複している柱穴５・６・７は、住居跡床面及び壁面に辛うじて痕跡がみられた。本跡と145掘の新旧関係は、本跡柱穴４と145掘の柱穴３の覆土状況から、本跡の方が古いことが分かる。規模は、桁行長7.8m、梁行長4.5m、面積35.10㎡、柱穴深の平均は55cmを計測し、桁行方位N-38°-Eである。柱穴底面はみな平らで、覆土はハードロームブロック混入土を主体としている。本跡に伴う遺物は僅少であるが、図示できた遺物は土師器のロクロ杯３点である。

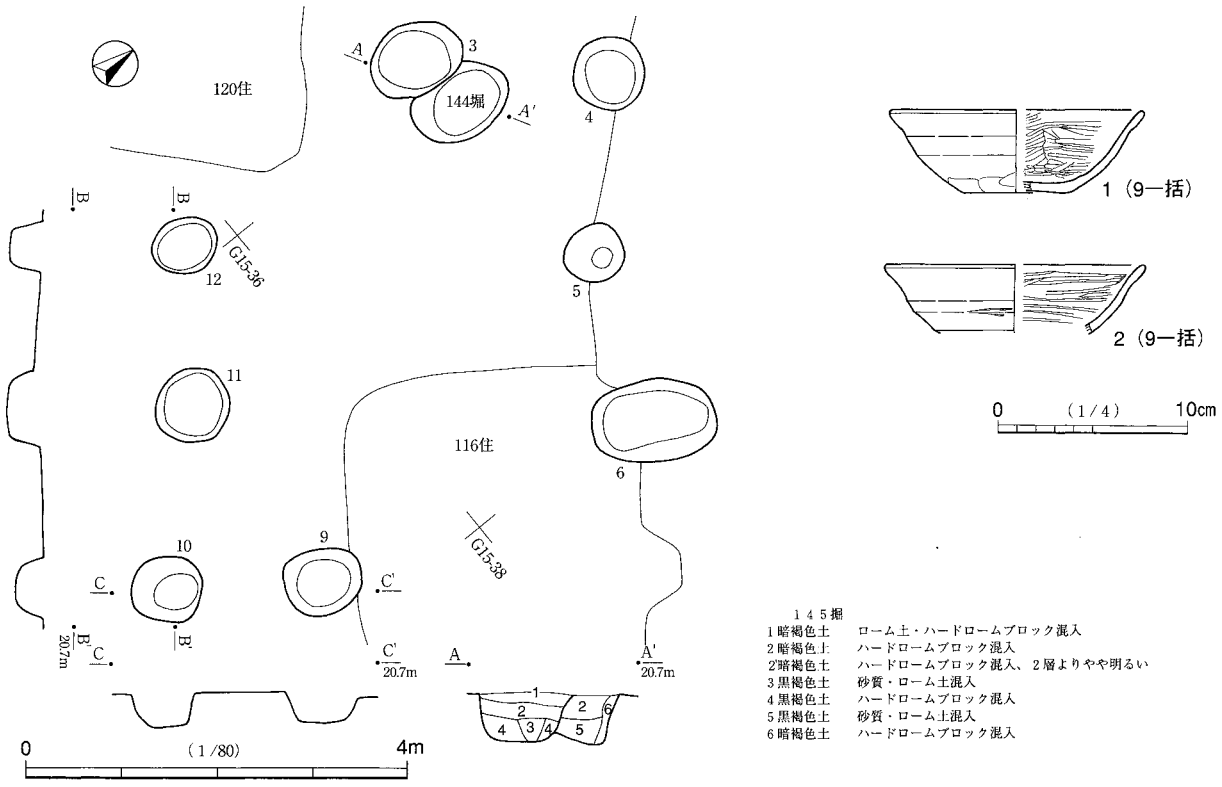
１は柱穴２の覆土一括で取り上げた破片２点が接合した口縁部片で、体部外面には墨書が明瞭に描かれているが、小片のため判読不能である。２は柱穴４の覆土一括で取り上げた破片が接合したもので、完形に近く遺存状態も良好である。口径12.4cm、底径6.9cm、器高3.8cmを測る。口縁部から体部中位にかけては、「U」字状に綺麗に破断しており、意図的に欠いたものと思われる。色調は全体的に橙色を呈し、胎土には細かな金雲母と黒色スコリアがやや多めで、微量に海綿骨針も含まれている。底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施され、外縁にまで大きく及んでいる。３は柱穴９の覆土一括で取り上げた破片で、底部を欠損する大型の杯である。外面下端部は赤彩が施されたかのように赤色の緋襷がみられる。内面は丹念なミガキが施され、光沢をもっている。色調・胎土は２とほぼ同様である。



第67図　１４４掘

１４５掘（第68図、第７・10表、図版50）

調査区の中央部のG15-26に位置し、柱穴の配置及び柱間寸法には若干の誤差はあるが、桁行３間×梁行３間の掘立柱建物跡と思われる。本跡に伴う柱穴は８か所確認できたが、他遺構との重複が激しく柱穴の痕跡を確認できなかったものもある。柱穴１・２は古墳時代中期の120B住覆土内に、柱穴７・８は平安時代前半の116A住覆土内にそれぞれ構築されていたと思われるが、住居跡調査中に見過ごしてしまったようである。その他には柱穴４・５が、辛うじて古墳時代前期初頭の117住の壁面に確認できた。重複はまだ認められ、144掘を切り、116B坑に切られている。規模は推定を含めて、桁行長5.5m、梁行長4.5m、面積24.75㎡、柱穴深の平均は37cmを計測し、桁行方位N-51°-Wである。柱穴底面はみな平らで、覆土はハードロームブロック混入土を主体としている。本跡に伴う遺物は僅少であるが、図示できた遺物は土師器のロクロ杯２点である。

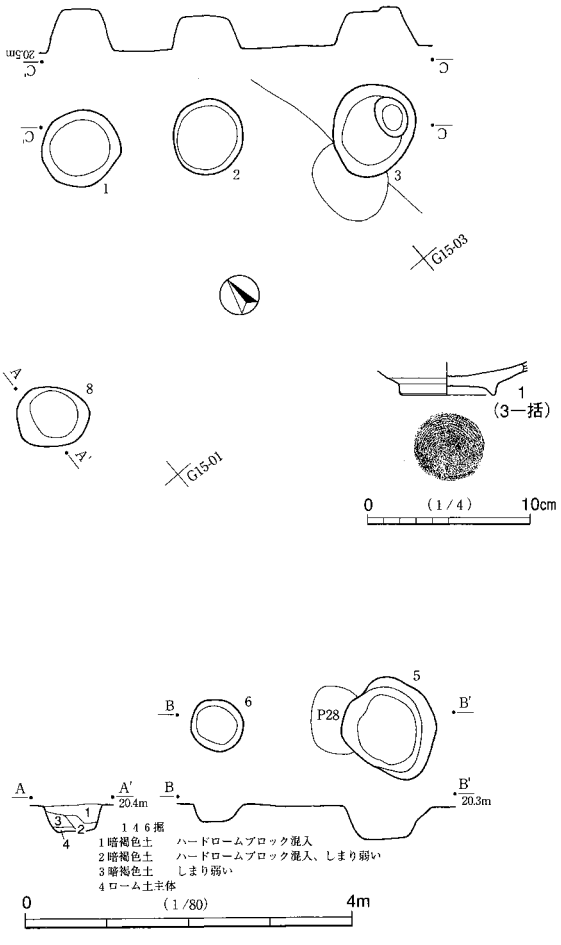


第68図　１４５掘

１・２は柱穴９の覆土一括で取り上げた破片で、遺存度は低い。ともに硬質の焼成で、外面の色調は須恵器を思わせる褐灰色を呈し、胎土には小粒の黒色スコリアと海綿骨針がやや多めに含まれている。内面には丹念なミガキ、外面にはロクロナデ及びヘラケズリが施されている。

１４６掘（第69図、第７・10表、図版50）

調査区の中央北側のG14-91に位置し、古墳時代後期の溝状遺構と重複する。未検出の柱穴が多く不明な点もあり、掘立柱建物跡として成り立たない可能性もあるが、検出された柱穴は他の掘立柱建物跡の柱穴と同様の形態をもっているのは確かである。また、周辺には同一方向に配列された掘立柱建物跡が存在することもあり、それ相応の掘立柱の施設があったと考えたい。柱間寸法を等間隔として考えた場合、桁行４間×梁行２間となり、未検出の柱穴が６か所と多くなり不自然である。ここでは桁行長を長めにとった、桁行２間×梁行２間の掘立柱建物跡とする方が未検



第69図　１４６掘

出の柱穴も少なくなり妥当かもしれない。いずれにしても掘立柱建物跡と考えた場合、規模は桁行長7.3m、梁行長3.7m、面積27.01㎡、柱穴深の平均は40cmを計測し、桁行方位N-41°-Eである。柱穴底面は柱穴3を除けばみな平らで、覆土はハードロームブロック混入土を主体としている。本跡に伴う遺物は僅少で、図示できた遺物は土師器の高台付皿1点である。

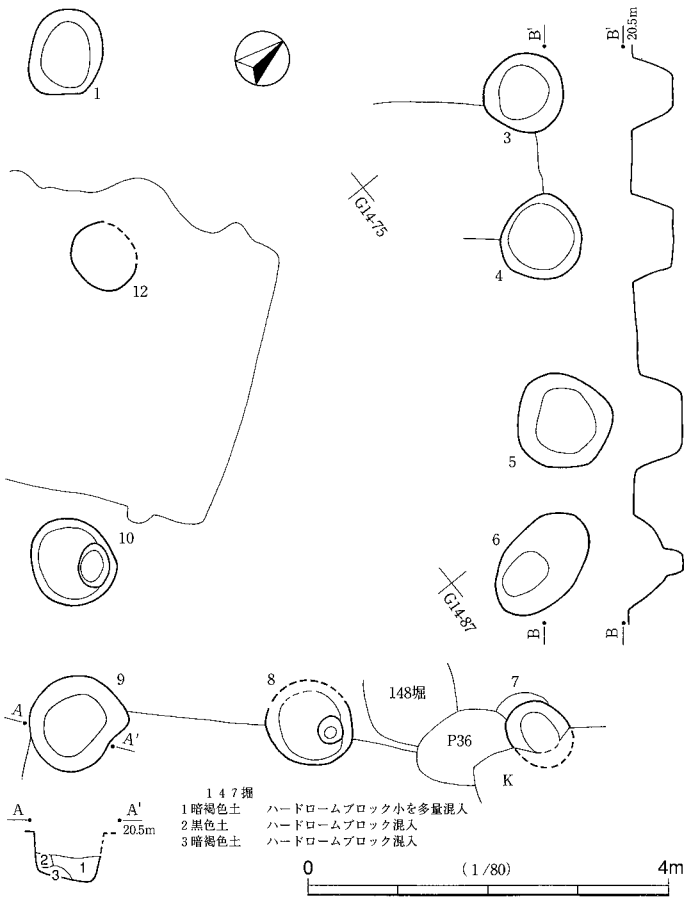
1は柱穴3の覆土一括で取り上げた底部片で、二次被熱を受け内外面には煤が付着し、破断面はやや劣化している。底外は回転糸切り後高台を貼付け、周縁に回転ナデを施している。色調は内面が灰褐色、外面がにぶい橙色を呈し、胎土には細かな金雲母がやや多めで、微量に海綿骨針も含まれている。

147掘（第70図、第7表）

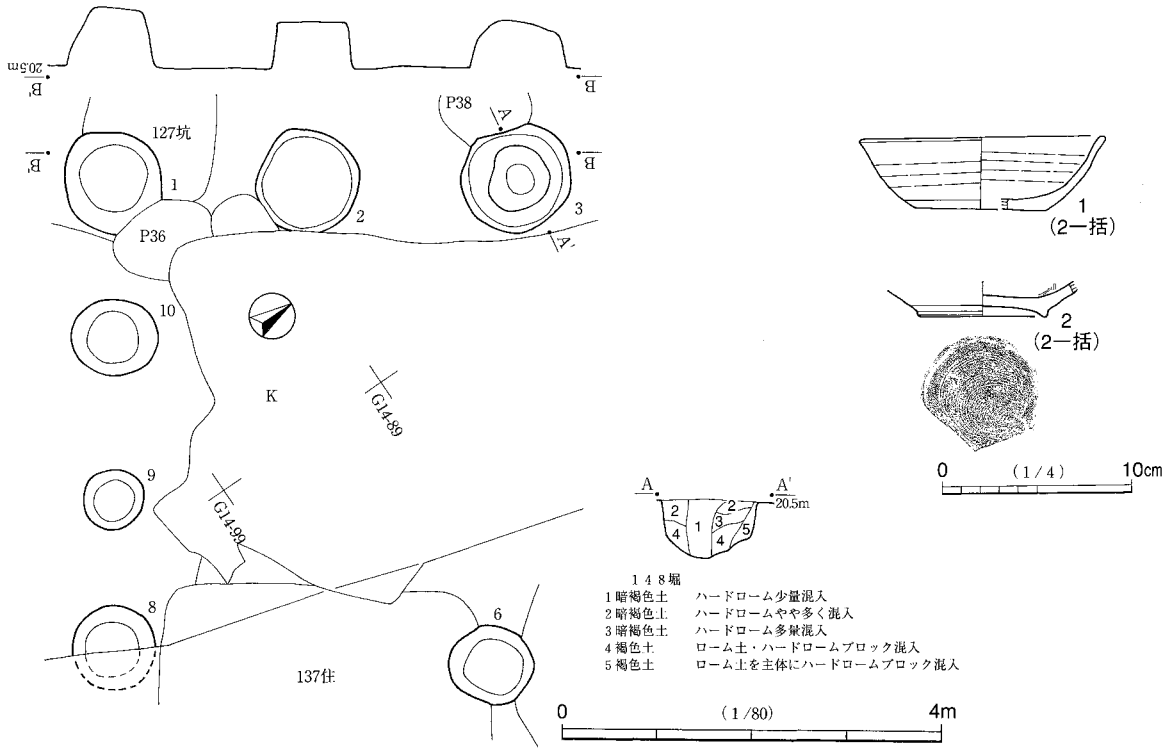
調査区の北側やや東よりの遺構が密集するG14-75に位置する。検出された柱穴の配置はほぼ正確に対応する桁行4間×梁行2間の掘立柱建物跡と思われるが、他遺構との重複が激しく柱穴の痕跡を確認できなかったものもある。本跡に伴う柱穴は部分的なものも含めて10か所確認できたが、2か所は未確認である。柱穴番号2は未検出で、11・12は平安時代前半の119住覆土内に構築されていたと思われるが、11は住居跡調査中に見過ごしてしまったようで、12は辛うじて床面に痕跡がみられた。重複及び新旧関係は、117住・119住・141住・126坑・127坑・130溝を切り、129坑・148掘に切られている。規模は、桁行長7.2m、梁行長5.2m、面積37.44㎡、柱穴深の平均は53cmを計測し、桁行方位N-50°-Wである。柱穴覆土はハードロームブロック混入土を主体としている。本跡に伴う遺物はいずれも小片のため、図示できたものはない。

148掘（第71図、第7・10表、図版50）

調査区の北側東よりの遺構が密集し、現代の攪乱があるG14-88に位置する。検出された柱穴の配置はほぼ正確に対応する桁行3間×梁行2間の掘立柱建物跡と思われる。他遺構との重複が激しく柱穴の痕跡を確認できなかったものもある。本跡に伴う柱穴は7か所確認できたが、3か所は未確認である。柱穴番号4・5・7は現代の攪乱で破壊され、8・9・10は古墳時代前期初頭の119住床面に辛うじて痕跡がみられた。規模は、桁行長5.2m、梁行長4.3m、面積22.36㎡、柱穴深の平均は52cmを計測し、桁行方位N-55°-Wである。重複及び新旧関係は、117住・137住・140住・127坑を切り、147掘に切られている。柱穴覆土はハードロームブロック混入土を主体としている。遺物は柱穴2から出土した土師器の杯片と高台付皿片の2点である。1・2は二次被熱を受け内面に煤が付着し、いずれも胎土に細かな金雲母がやや多めで、微量に海綿骨針も含んでいる。



第70図　147掘



第71図　１４８掘

（３）土坑

土坑は19基検出されたが、遺物を伴わないものが多く、帰属時期を確定することは難しい。遺物を伴わない土坑に対しては覆土の状況や、他遺構との切り合い関係を考慮し、大まかな帰属時期を示すこととした。19基中帰属時期にやや疑問のある３基を含めて、いずれもの土坑も大まかには奈良・平安時代の時期に帰属すると思われる。詳細な計測値については観察表に記載したので、併せて参考とされたい。

１０６Ｂ坑（第72図、第８表、図版15）

調査区の東側境界近くのH15-69に位置し、古墳時代前期の方墳の周溝内で検出された。平面形は楕円形で、長径1.4m、短径1.2m、深さ0.67mを計測し、壁の形状は急である。底面は凹凸があり平らではなく、南側で浅い。遺構内の堆積土は大まかに３層に分離でき、自然埋没と思われる。堆積土中からは土師器の小片が多量に出土したが、いずれも小片のため図示はできなかった。時期は平安時代前半である。

１０７坑（第72図、第８表、図版15）

調査区の南東側境界近くのH16-07に位置する。奈良・平安時代の竪穴住居跡102A・B住の東側、105道路状遺構の南側に単独で検出された。平面形は長円形で、長径1.6m、短径1.4m、深さ0.65mを計測し、壁の形状は南側で直、北側で急である。底面は凹凸があり平らではなく、階段状に南側に向かって深くなっている。遺構内の堆積土は大まかに３層に分離できるが、ハードロームブロックが多量に混入しているため、埋め戻しがなされた可能性が高い。堆積土中からは土師器の小片が少量出土したが、いずれも小片のため図示はできなかった。時期は平安時代である。

１０８坑（第72図、第８・10表、図版15・22）

調査区の南東側やや北よりのH15-67に位置する。古墳時代前期の106A周の西側に近接し、105道路状遺構の北側に単独で検出された。平面形は隅丸長方形で、長径2.0m、短径1.2m、深さ0.20mを計測し、壁の形状は南側で直、北側で緩である。遺物は確認面から完形に近い土師器の杯が３点、堆積土中からは土師器の小片が数点出土した。遺構内の堆積土は２層に分離でき、自然埋没と思われる。上層には炭化材、焼土、淡黄色砂質土等が混入しており、埋没過程の凹みを利用して火が使用されたようである。底面は平らな鍋底状を呈しており、硬化した部分はみられない。時期は平安時代前半である。

１～３は覆土上層出土の土師器のロクロ杯で、いずれも二次被熱を受け器面は劣化している。１は約４／５を遺存し、口径14.9cm、底径6.6cm、器高4.2cmを測る。内外面の約半分は煤が厚く付着し黒っぽくなっているが、破断面には煤は付着しておらず破断前に被熱したようである。内面の底部にはロクロナデによる凹凸が若干残り、体部から口縁部にかけてはロクロ目をナデ消している。底外は回転ヘラ切り後無調整で、回転ヘラケズリが外縁にまで及んでいる。胎土は密で海綿骨針がやや多めに含まれている。２は約２／３を遺存している。器面の劣化は顕著であるが煤の付着はみられない。色調は橙色を呈し、胎土には細かな黒色及び赤色スコリアがやや多めに含まれている。底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリを施し、外縁にまで及んでいる。３はほぼ完形で、歪みが大きい。内外面ともに煤が厚く付着し、内面は斑状の剥離が目立つ。底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリを施し、外縁にまで及んでいる。胎土には細かな砂粒と金雲母が多く含まれている。

１１０C坑（第73図、第８表、図版５）

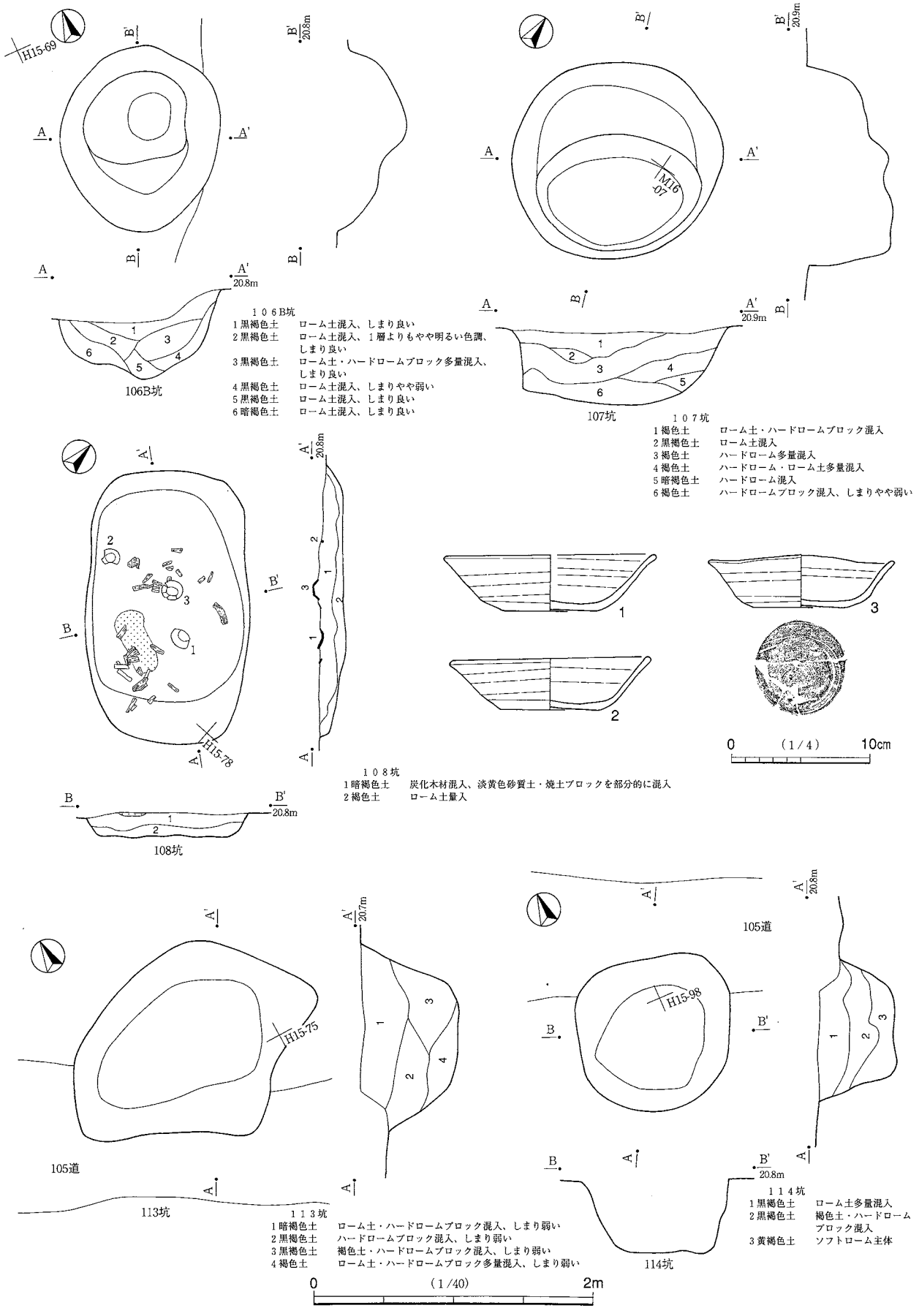
調査区東側の土坑が集中している箇所から、北西に約５m離れたH15-22に位置する。古墳時代前期初頭の110A住、平安時代前半の110B住を切り、110D坑に切られている。切り合い関係から、平安時代後半の時期が妥当であろう。平面形は隅丸長方形で、長径2.8m、短径1.1m、深さ0.72mを計測し、壁の形状は急で、底面はほぼ平らで硬化した部分はみられない。底面には幅10cm～20cm、長さ75cm、高さ7～15cmの大きさで、カマド構築材と同様の淡黄色砂質土が検出された。意図的に置かれたことは確かであるが、使途については不明である。遺構内の堆積土は大まかに３層に分離できるが、ハードロームブロックが多く含まれていることから、埋め戻しがなされた可能性が高い。また、中間層には焼土粒が混入しているため、火が使用された可能性も考えられる。堆積土中からは土師器の小片が数点出土したが、図示することはできなかった。

１１０D坑（第73図、第８表、図版５）

110C坑を切り本跡の方が新しい。110C坑とほぼ同様の覆土の状況であり、覆土内からは土師器の小片が少量出土した。このことにより110C坑とあまり時期差はない、平安時代末の時期が妥当と思われる。平面形は不整方形で、長径1.1m、短径1.0m、深さ0.93mを計測し、壁の形状は直で、底面は若干の凹凸かがあり硬化した部分はみられない。遺構内の堆積土は４層に分離でき、ハードロームブロックが含まれているものの少量であり、自然埋没の可能性が高い。出土した土師器は小片のため、図示できたものはない。

１１３坑（第72図、第８表、図版15）

調査区東側の土坑が集中しているH15-64から検出された。平安時代前半と思われる105道を切り、本跡の方が新しい。堀り方はしっかりしており、底面近くから土師器の小片が出土したため、平安時代後半の時期が妥当と思われる。平面形は不整形で、長径2.0m、短径1.4m、深さ0.75mを計測し、壁の形状は急で、



第72図　１０６B、１０７、１０８、１１３、１１４坑

底面は平らで硬化した部分はみられない。遺構内の堆積土は3層に分離できしまりは弱く、ハードロームブロックが多量に含まれているため、埋め戻しがなされた可能性が高い。出土した土師器は小片のため、図示できたものはない。

114坑（第72図、第8表、図版15）

調査区の南東側の境界線に近いH15-97から検出された。113坑とほぼ同様の状況であり、平安時代後半の時期が妥当と思われる。平面形は隅丸方形で、長径1.1m、短径1.1m、深さ0.55mを計測し、壁の形状は急で、底面は平らで硬化した部分はみられない。遺構内の堆積土は3層に分離でき、自然埋没と思われる。出土した土師器は小片のため、図示できたものはない。

115坑（第73図、第8表、図版15）

調査区の南端部の境界線に近いH16-30から検出され、ピット状遺構のP1に切られている。覆土内からは土師器の小片が数点出土しており、平安時代の所産と思われる。平面形は隅丸長方形で、長径2.1m、短径1.3m、深さ1.05mを計測し、壁の形状は南側でやや緩やかな傾斜を示す他は急で、堀り方はしっかりしている。底面は平らで硬化した部分はみられない。出土した土師器は小片のため、図示できたものはない。

116B坑（第73図、第8表）

調査区の中央部やや東よりのG15-27から検出され、平安時代前期の116A住の床面を切っている。覆土内からは土師器の小片が出土しており、平安時代後半が妥当と思われる。平面形は不整形で、長径1.4m、短径1.0m、深さ0.33mを計測し、壁の形状は緩やかで堀り方はしっかりしている。底面は凹凸があり硬化した部分はみられない。出土した土師器は小片のため、図示できたものはない。

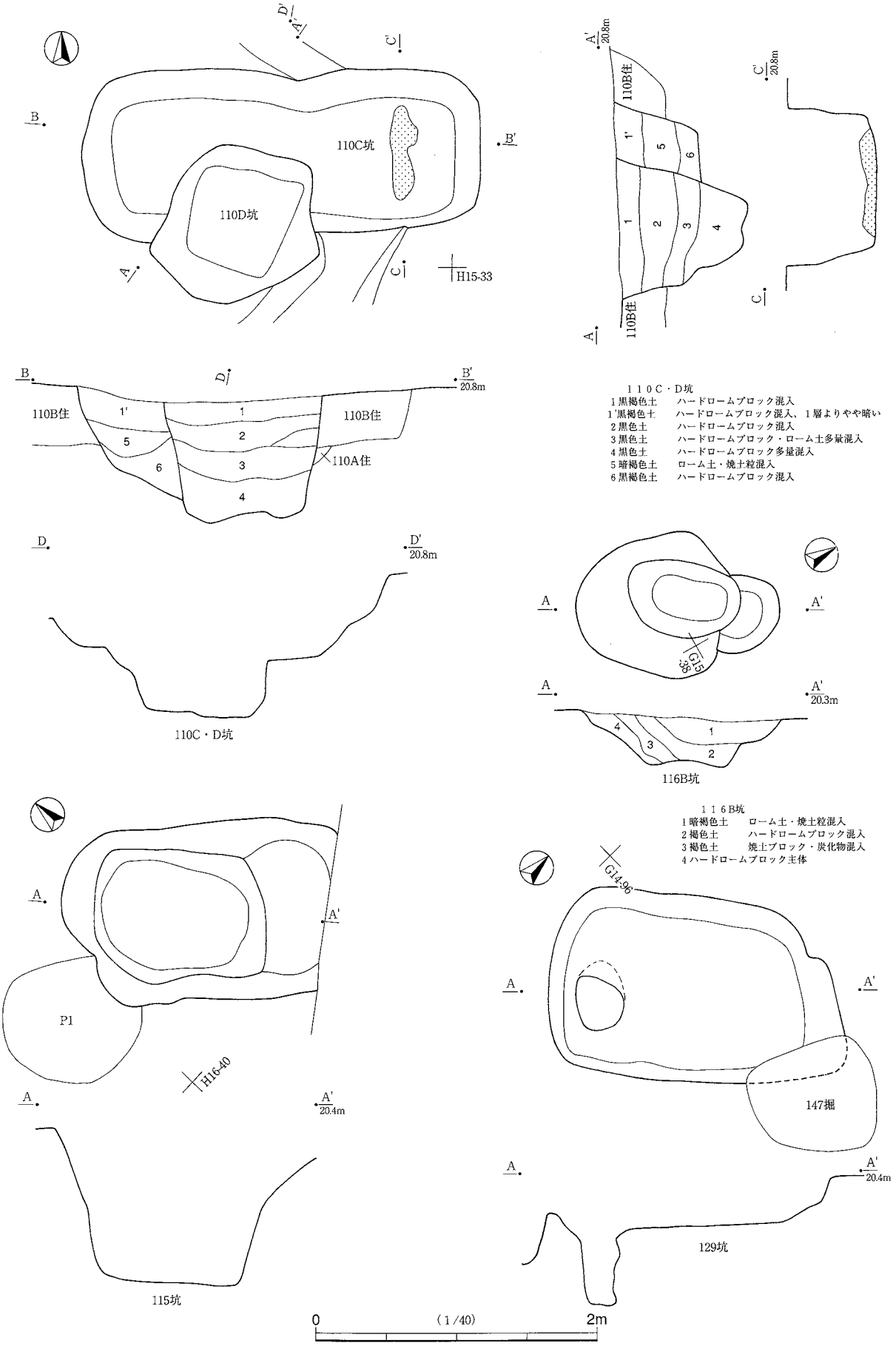
126坑（第74図、第8・10表、図版15、50）

調査区の北側のG14-65から検出され、平安時代後半の147掘に切られている。底面及び覆土内からは土師器の破片が多く出土しており、平安時代前半の時期が妥当と思われる。平面形は長方形で、長径3.4m、短径1.4m、深さ0.54mを計測し、壁の形状は直で、堀り方はしっかりしている。底面は平らで硬化した部分はみられない。出土した土師器の破片は多いが、図示できたものは2点である。

1は覆土下層一括で取り上げた破片が接合した甕の口縁部片で、遺存度は低い。口縁端部はやや内傾して立ち上がり、胴部があまり張らないタイプと思われる。内外面ともに二次被熱を受け、煤が付着しやや劣化している。色調は全体的ににぶい褐色を呈し、胎土は密で細かな砂粒がやや多めに含まれている。2は底面から出土した高台付皿で、約2／3を遺存している。内外面ともに斑状に煤が付着し、暗い褐色を呈している。内面には精緻なヘラミガキ、外面にはロクロナデが施されている。底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施され、外縁を強く回転ヘラケズリすることで高台部を作り出している。胎土には細かな金雲母が多く、微量に海綿骨針も含まれている。

127坑（第74図、第8・10表、図版16・51・60）

調査区の北側のG14-87から検出され、平安時代後半の147掘・148掘に切られている。覆土内からは土師器の破片が多く出土しており、平安時代前半の時期が妥当と思われる。平面形は隅丸長方形で、長径2.2m、短径1.4m、深さ0.48mを計測し、壁の形状は急で、堀り方はしっかりしている。底面は148掘の柱穴1に切られているが、平らで硬化した部分はみられない。遺構内の堆積土は大まかに2層に分離でき、自然埋没と思われる。出土した土師器の破片は多いが、図示できたものは4点である。



第73図　１１０C・D、１１５、１１６B、１２９坑

1は覆土一括で取り上げた破片が接合した、小型甕の口縁部片である。外面は二次被熱を受け赤褐色を呈し、煤が付着し器面の剥落が顕著である。胎土は密で細かな砂粒がやや多めで、微量に海綿骨針も含まれている。2は覆土上層から出土した破片と、一括で取り上げた破片とが接合したロクロ杯である。約半分を遺存し、内面はロクロ目をナデ消している。底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施され、外縁にまで及んでいる。色調は橙色を呈し、胎土には小粒の赤色スコリアがやや多く、微量に海綿骨針も含まれている。3・4は皿で、4は高台付である。3はロクロナデを主体とし、内外面ともに丁寧な調整が施されている。外面には『千』と思われる墨書が描かれている。色調は全体的に橙色を呈し、胎土は密で細かな金雲母がやや多めに含まれている。4は作り出し高台をもち、内面には精緻なヘラミガキ、外面には丁寧なロクロナデが施されている。内面には煤が厚く付着し、暗い赤褐色を呈している。胎土は密で微量の海綿骨針が含まれている。

129坑（第73図、第8表、図版16）

調査区の中央やや北よりの遺構が集中している地域のG14-96から検出された。奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居跡141住、及び、平安時代後半の147掘の柱穴8に切られている。覆土内からは土師器の小片が多く出土したが、いずれも小片で時期を確定できる遺物は皆無であった。よって切り合い関係から帰属時期をみると、奈良時代とするのが妥当と思われる。平面形は不整方形で、長径2.1m、短径1.3m、深さ0.48mを計測し、壁の形状は緩で、堀り方はしっかりしている。底面は平らで硬化した部分はみられず、南西壁直下には径30cm、深さ55cmのピットを有している。出土した遺物で、図示できたものはない。

143坑（第75図、第8表）

調査区の東側やや南よりのH15-52から検出され、古墳時代前期の103A・B住、及び、平安時代前半と思われる105道を切っている。覆土内からは土師器の小片が数点出土したが、いずれも小片で時期を確定できる遺物は皆無であった。よって切り合い関係から帰属時期をみると、平安時代後半とするのが妥当と思われる。平面形は楕円形で、長径1.4m、短径1.2m、深さ0.66mを計測し、壁の形状は北側が緩で、南側が直である。底面は面積的には小さいが平らで硬化した部分はみられない。遺構内の堆積土は大まかに4層に分離でき、自然埋没と思われる。出土した遺物で、図示できたものはない。

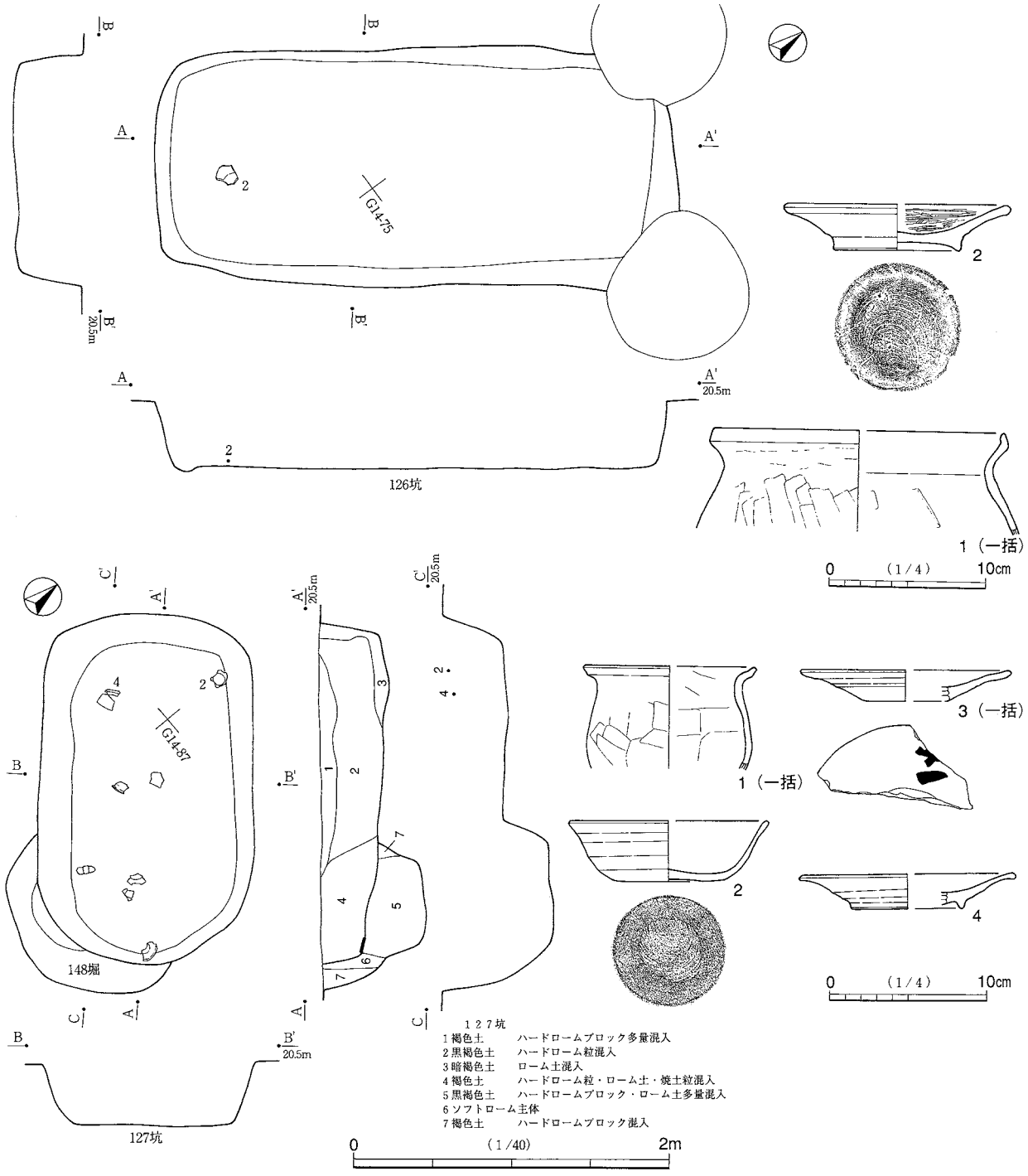
149坑（第75図、第8表）

調査区東側の土坑が集中している地域のH15-43から単独で検出された。平面形は瓢箪形で、長径1.2m、短径0.8m、深さ0.22mを計測し、壁の形状は緩で、底面は平らで硬化した部分はみられない。遺構内の堆積土は大まかに3層に分離でき、自然埋没と思われる。出土遺物は皆無で、時期の確定はできないが、近接している遺物を出土した土坑と覆土の状態が酷似しているため、それに近い時期と思われる。ここでは一応平安時代としておく。

150坑（第75図、第8・10表、図版16・51）

調査区東側の土坑が集中している地域のH15-54から単独で検出された。149坑からは南東に約1m隔たった位置である。平面形は楕円形で、長径1.2m、短径0.9m、深さ0.18mを計測し、壁の形状は緩で、底面はやや凹凸がみられるが、平らで硬化した部分はみられない。遺構内の堆積土は大まかに2層に分離でき、自然埋没と思われる。出土遺物は覆土上面及び覆土内から数点出土しており、時期は平安時代である。

1は覆土上面から出土した破片と一括で取り上げた破片が接合した、土師器のロクロ杯の底部片である。色調は全体的に橙色を呈し、胎土は密で細かな金雲母がやや多めに含まれている。底外は全面回転ヘラケ

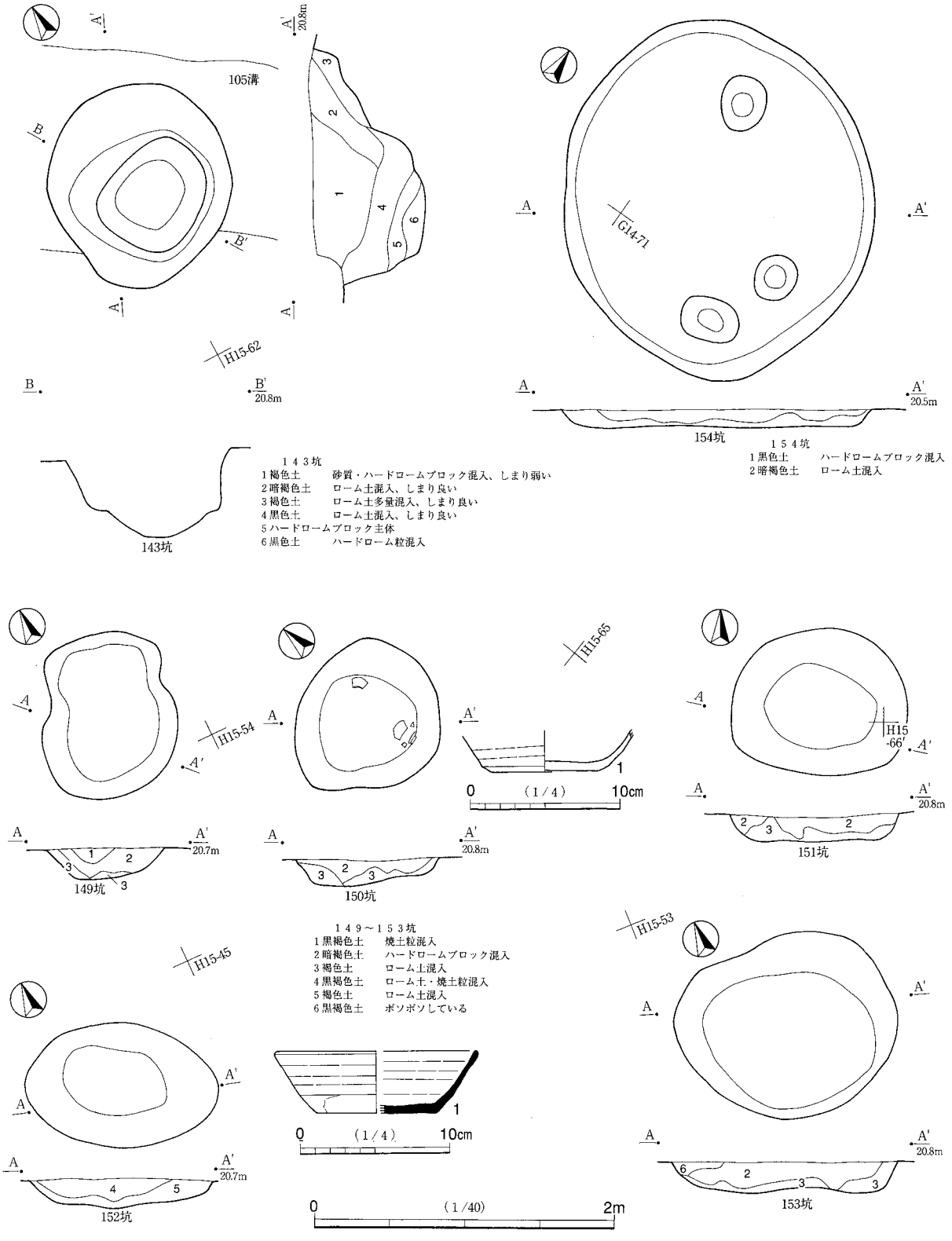


第74図　126、127坑

ズリが施され、切り離し技法は不明である。

１５１坑（第75図、第８表）

調査区東側の土坑が集中している地域のH15-55から単独で検出された。平面形は楕円形で、長径1.2m、短径1.0m、深さ0.16mを計測し、壁の形状は緩で、底面は平らで硬化した部分はみられない。出土遺物は皆無で、時期の確定はできないが、近接している遺物を出土した土坑と覆土の状態が酷似しているため、それに近い時期と思われる。ここでは一応平安時代としておく。



第75図　１４３、１４９～１５４坑

１５２坑（第75図、第８・10表、図版51）

調査区東側の土坑が集中している地域のH15-44から単独で検出された。平面形は長楕円形で、長径1.3m、短径0.7m、深さ0.20mを計測し、壁の形状は緩やかで、断面はレンズ状を呈している。構内の堆積土

は大まかに2層に分離でき、自然埋没と思われる。遺物は覆土上層から須恵器の杯が出土した。約1／2を遺存し、色調は褐灰色を呈し、胎土には粒のやや大きな白色雲母が含まれ、軟質の焼成である。茨城産と思われる。内外面ともにロクロナデを基調とし、底外は回転糸切り後全面に手持ちヘラケズリが施されている。本跡の帰属時期は平安時代前半と思われる。

１５３坑（第75図、第８表）

調査区東側の土坑が集中している地域のH15-53から、単独で検出された。105道に近接した位置で、南東側の一部を現代の攪乱で削平されている。平面形は楕円形で、長径1.5m、短径1.2m、深さ0.20mを計測し、壁の形状は緩やかで、断面はレンズ状を呈している。構内の堆積土は大まかに2層に分離でき、自然埋没と思われる。出土遺物は皆無で、時期の確定はできないが、近接している遺物を出土した土坑と覆土の状態が酷似しているため、それに近い時期と思われる。ここでは一応平安時代としておく。

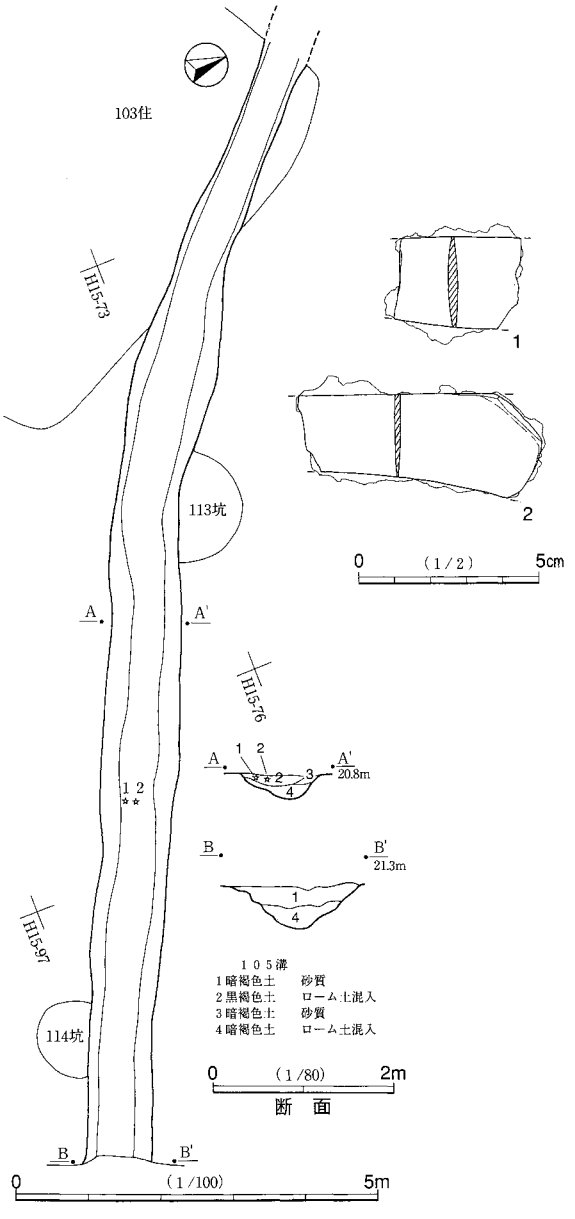
１５４坑（第75図、第８表、図版16）

調査区の北側の境界線に近いG14-61から単独で検出された。平面形は楕円形で、長径2.4m、短径2.1m、深さ0.12mを計測し、壁の形状は緩やかである。底面には3か所に浅いピット状の穴がみられる。遺物は土師器の小片が数点出土したが、図示できたものはない。帰属時期は平安時代が妥当と思われる。

（４）道路状遺構

１０５道（第76図、第16表、図版４、53）

本跡は平安時代前半の道路状遺構と思われる。古墳時代前期の竪穴住居跡103A・B住を切り、平安時代後半の土坑113・114・143坑に切られている。調査区の東側境界から調査区中央部へ、北西に若干カーブを描きながらながら約31m程度延びている。境界側は緩斜面で、そのまま延びていくと低地へと続いていくものと思われる。北西側には奈良・平安時代の竪穴住居跡群が集中しており、台地上の集落と低地を結ぶ道路として使用されていた可能性が高い。幅は1.5m～2.0m、深さは0.5m～1.2mを測り、緩斜面側で深く調査区中央部に行くにしたがい浅くなり、集落手前で消えている。底面は固く締まっており、踏み固められたようで、断面形は「U」字状を呈している。覆土は砂質土とローム混入土から構成され、自然埋没と思われる。覆土内からは8世紀代の土師器の



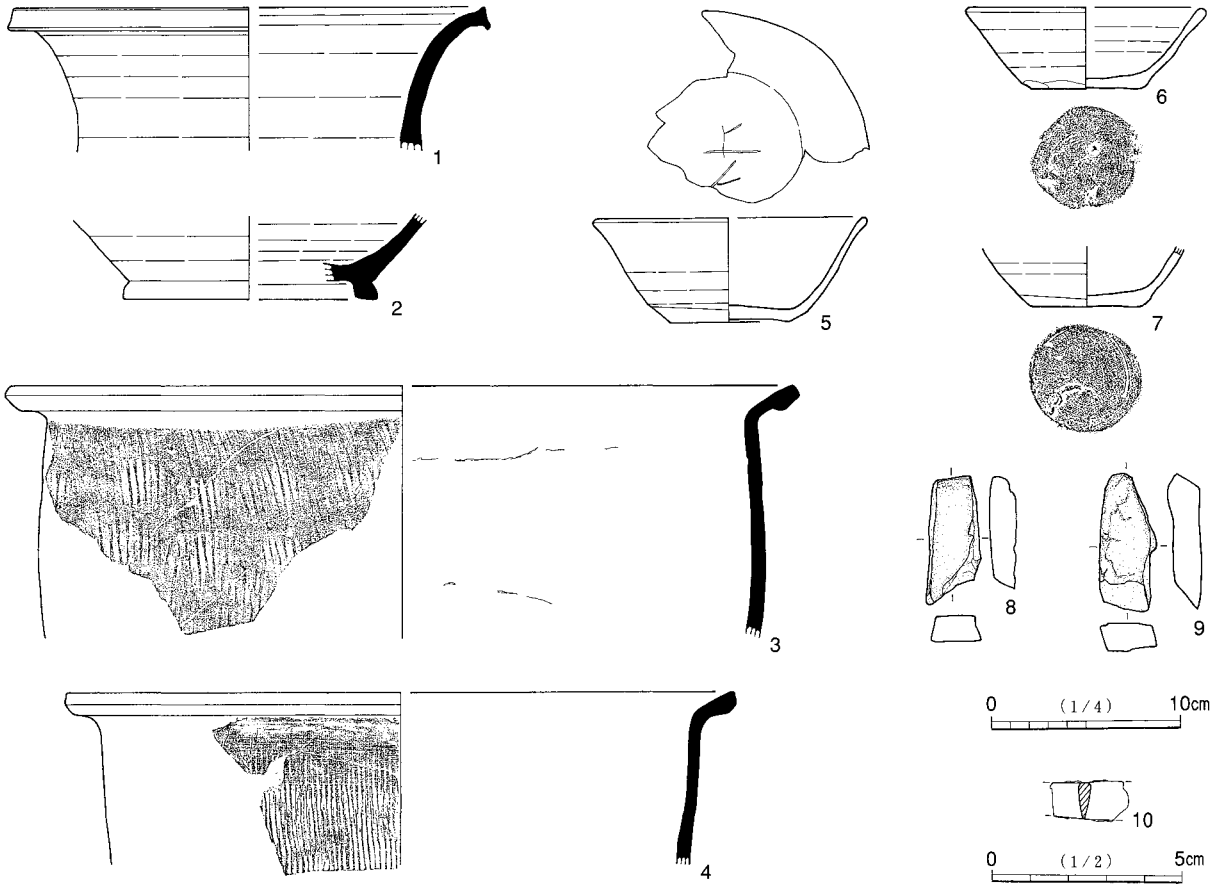
第76図　１０５道

破片が多く出土したが、図示できたものはない。その他の遺物としては同一個体と思われる鉄鎌片が２点出土していおり、これらに於いては図示できた。１・２は覆土上層から鉄製の鎌の破片で、出土位置及び錆の状態等から、同一個体と思われる。１は先端部で、２は付け根の部分である。幅は22㎜～24㎜、厚は２㎜前後を測る。

（５）グリッド出土遺物（第77図、第13・14・19表、図版52・53・56）

ここまで奈良・平安時代の遺構・遺物について示した。ここではグリッド出土遺物で、この時期に帰属する遺物について紹介する。１・２は現道下調査のため、道路除去中の攪乱層内から出土した。１の出土位置はH14-72で、さらに掘り下げていった結果125住が検出された。須恵器の甕の口縁部片で、内外面ともにロクロナデが施されている。色調は二次被熱を受け、全体的に赤っぽい褐色を呈している。東海産と思われる。２の出土位置はH15-21で、さらに掘り下げていった結果110B住が検出された。須恵器の高台付鉢の底部片で、内面にはロクロナデ、底外は回転糸切り後全面回転ヘラケズリが施され、その後高台を貼付けている。色調は内面が灰褐色、外面は１同様に二次被熱を受け、全体的に赤っぽい褐色を呈している。東海産と思われる。３はH15-13から出土した、須恵器の甕若しくは甑の口縁部片である。出土位置は弥生時代後期の竪穴住居跡111住と、古墳時代前期と平安時代前半の重複する竪穴住居跡の中間にあたる。器面は内外面ともに土師器のようなにぶい褐色を呈しているが、内部は灰白色を呈している。内面にはヘラナデ、外面にはやや間隔の大きな縦位のタタキと口縁部に横ナデが施されている。胎土には細かな砂粒をやや多めで、微量の海綿骨針も含まれている。４はH14-03の現道下から出土した、須恵器の甕若しくは甑の口縁部片である。内外面ともに灰色を呈し、胎土は密で微量の海綿骨針を含み、硬質の焼成である。内面にはヘラナデ、外面には間隔が小さめの縦位のタタキが明瞭にみられる。東海産と思われる。

５～７は土師器のロクロ杯である。５はH15-04から出土し、位置的には弥生時代後期の竪穴住居跡111住に近接している。約１／２を遺存し、復元口径14.0cm、底径6.2cm、器高5.5cmを測る。色調は全体的にやや赤みがかった橙色を呈し、胎土には細かな砂粒と石英がやや多めで、微量の海綿骨針も含んでいる。内面はロクロ目をナデ消し、底内には焼成後に描いた線刻がみられる。外面はロクロナデが施され、底外は回転糸切り後ほぼ全面に回転ヘラケズリが施され、外縁にまで及んでいる。６・７はH14-73から出土し、位置的には平安時代前半の竪穴住居跡125住に近接している。６は約１／２を遺存し、復元口径12.2cm、底径5.8cm、器高4.3cmを測る。二次被熱を受け外面は全体に煤が厚く付着し、黒褐色を呈し器面はやや劣化している。内面は底部を中心に薄く煤が付着しているが、全体的には明るい赤褐色を呈している。胎土には細かな砂粒と赤色及び黒色スコリアが多めに含まれている。内外面ともにロクロ目を軽くナデ消しており、ロクロナデによる凹凸が若干残っている。底外は回転ヘラ切り後無調整で、ヘラの当たり痕や粘土カスが残っており安定感がない。底部外縁は手持ちヘラケズリが施されている。７は約１／３を遺存し、口縁部は全欠で底部は完存しており、底径5.8cmを測る。器面及び破断面はやや摩耗している。色調は全体的ににぶい黄橙色を呈し、胎土は密で微量の海綿骨針が含まれている。内面はロクロ目をナデ消しており、外面はロクロナデによる凹凸が若干残っている。底外は回転ヘラ切り後無調整で、粘土カスが残っており安定感がない。底部外縁は回転ヘラケズリが施されている。８・９は砂岩製の砥石片である。８はG15-02からの出土で、位置的には調査区中央やや北より、９はG16-01からの出土で、位置的には調査区中央南端である。10はG14-28からの表採で、鉄製刀子の刀身部片と思われる。位置的には調査区東側中央部である。背幅が3.4㎜と大きいわりには身幅が9.6㎜と小さいため、刀子以外の製品の可能性もある。



第77図　グリッド出土遺物（奈良・平安時代）

6　中・近世

間見穴遺跡では前回までの調査成果からすると、この時期に帰属する検出遺構は、板碑土壙１基、地下式坑１基、火葬施設６か所、土坑20基、小穴群14か所、溝状遺構21条等があげられている。今回の調査では、中・近世に帰属すると思われる遺構としては、ピット状遺構が36か所（時期不明３か所を含む）、溝状遺構２条が検出された。しかし、ピット状遺構に関しては遺物の出土はほとんどなく、帰属時期を確定できるものは少ない。平安時代後半の掘立柱建物跡の柱穴を明らかに切っているピットが数か所あり、その覆土の状態と他のピット群の覆土の状態が比較的近似していることから、少なくとも平安時代後期以降の時期であろうという程度の設定である。他遺構との切り合い関係や出土遺物の時期から、中・近世以外の時期に帰属すると思われるピット状遺構が４か所あった。「４　古墳時代中期から後期」「５　奈良・平安時代」の項でも触れたとおり、ここではこの４か所を含めてピット状遺構としてまとめて報告することとする。調査区内でピット状遺構が集中する箇所は、大まかに４地点に分けることができる。これを南から北に向かい、ピット群Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳとそれぞれの名称を付した。これらの遺構の多くは、調査時に別名称の遺構番号を付しており、統一性を欠いていたため、整理の段階で統一の取れた新しい番号に変更した。旧番号についてはピット観察表に掲載してある。詳細については、ピット観察表と併せて参照されたい。

（1）ピット状遺構

ピット群Ⅰ

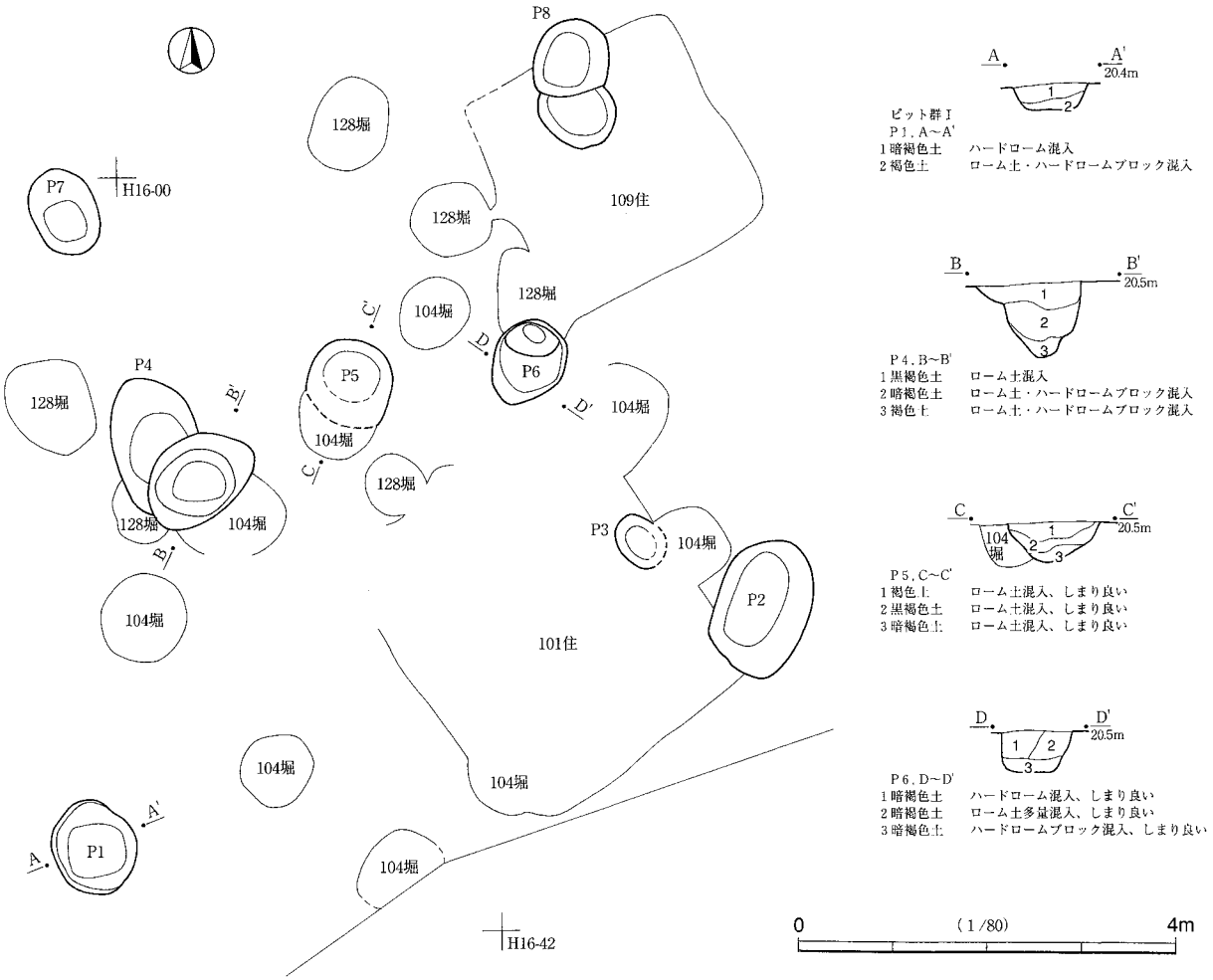
この群は調査区の南東端側の境界線に近接する周辺に位置する。ピット状遺構P1～P8を含み、計8か所を数える。P7以外は全て他遺構と重複しており、規模及び形態について若干不明瞭な点がある。

Ｐ１（第78図、第9表、図版16）

G16-39に位置し、平安時代の115坑を明確に切っている。平面形は不整円形を呈し、長径1.0m、短径0.9m、深さ0.20mを測り、壁の形状は直で底面は平らである。覆土の状況はハードロームブロックを多量に混入しているため、比較的新しい時期の中・近世が妥当といえる。覆土内からは土器の小片が数点出土したが、時期の判別はできないほどの小片で、埋没時の流れ込みと考えられる。

Ｐ２（第78図、第9表）

H16-23に位置し、本跡南西側で平安時代前半の101住を僅かに切っている。平面形は長円形を呈し、長径1.5m、短径1.0m、深さ0.75mを測り、比較的深くしっかりしている。壁の形状は急で底面は平らで、締まっている。覆土内からの出土遺物はなく、覆土の状況はハードロームブロックを多量に混入しているため、比較的新しい時期の中・近世が妥当といえる。



第78図　ピット群Ⅰ

Ｐ３（第78図、第９表）

H16-12に位置し、平安時代前半の101住及び平安時代後半の104掘の柱穴３を切っている。平面形は楕円形を呈しているが、101住調査中の覆土内で検出されたため、規模の詳細については不明な点が多い。帰属時期については、他遺構との切り合い関係から一応中・近世としておく。

Ｐ４（第78図、第９表、図版16）

H16-10に位置し、平安時代後半の104掘の柱穴９、及び同時期の128掘の柱穴６を切っている。平面形は２基のピットが重なり合った形状の不整形を呈し、長径1.7m、短径1.0m、深さ0.81mを測る。壁の形状は南側が緩、北側が直で、底面は凹凸が顕著である。覆土内からは須恵器及び土師器の小片も多く出土しており、平安時代末の土坑の可能性も考えられるが、覆土にはハードロームブロックが多量に混入しているため、ここでは比較的新しい時期のものとしておく。

Ｐ５（第78図、第９表、図版16）

H16-01に位置し、平安時代後半の104掘の柱穴10を明確に切っている。平面形は円形を呈し、推定径0.9m、深さ0.46mを測る。壁の形状は緩やかで、底面は中央部が最も深く平らな部分はみられない。覆土内からは須恵器の小片数点、土師器の小片は多く出土している。覆土はローム土主体で締まりが良く、どちらかと言えば104掘の柱穴10に類似しているので、104掘に関連したそれに近い時期のピットとも考えられないことはない。いずれにしても切り合い関係からすると、平安時代末から中・近世とするのが妥当であると思われる。

Ｐ６（第78図、第９表）

H16-12に位置し、平安時代後半の128掘の柱穴３を明確に切っている。平面形は楕円形を呈し、長径1.0m、短径0.8m、深さ0.45mを測る。壁の形状は直で、底面は平らで固く締まっている。覆土内からは土器の小片数点が出土したが、時期の判別はできないほどの小片である。覆土は締まりが良いがハードロームブロックをやや多く混入し、128掘の柱穴３の覆土とは明らかに異なり新しい。本跡の帰属時期は覆土の状態から中・近世とするのが妥当で、土器の小片は流れ込みと思われる。

Ｐ７（第78図、第９表）

G16-09に位置し、ピット群Ⅰの中では唯一単独で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径0.9m、短径0.7mを測る。壁の形状は北側が緩やかで、南側が急で、底面は平らで締まりはない。覆土内からの出土遺物はなく、覆土は締まりがなくハードロームブロックを多量に混入し、掘立柱建物跡の柱穴の覆土とは明らかに異なり新しい。本跡の帰属時期は覆土の状態から中・近世とするのが妥当と思われる。

Ｐ８（第78図、第９表）

H15-92に位置し、平安時代前半の竪穴住居跡109住を明確に切っている。平面形は２か所のピットが重なり合った形状の不整形を呈し、長径1.4m、短径0.8m、深さ0.46mを測る。壁の形状は北側が緩やかで、南側が急である。底面は若干の凹凸があり平らではない。覆土内からの出土遺物はなく、覆土はやや締まってはいるが、ハードロームブロックを多量に混入している。本跡の帰属時期を確定するものは皆無であるが、覆土の状態からみると中・近世のピットの覆土に比較的近似している。

ピット群Ⅱ

この群は調査区の中央南側に近接する周辺に位置する。グリッド番号でいえば、G15-50ラインより南側である。ピット状遺構P9～P18を含み、計10か所を数える。そのうちP14・P15の２か所は他以降との切り

合い関係から、古墳時代以前に帰属すると思われる。前述したとおり、この2か所については本項で詳細を報告する。10か所中6か所は他遺構と重複しており、規模及び形態について若干不明瞭な点がある。

P 9（第79図、第9表、図版16）

G15-71に位置し、古墳時代前期の竪穴住居跡136住を切っている。本跡は136住の堆積土内の上面から、異なる土質の円形の別の堆積土があることから分かった。本跡の底面は136住の床面下にまで達しており、確認面での平面形はほぼ円形を呈し、長径1.2m、短径1.1m、確認面からの深さは0.50mを測る。壁の形状は直で底面はほぼ平らである。覆土内からの出土遺物はなく、覆土の状況はハードロームブロックを多量に混入し、他の中・近世のピットと同様である。

P10（第79図、第9表）

G15-62に位置し、古墳時代前期の竪穴住居跡136住を切っている。状況はP9とほとんど同様であるが、堀方は136住の床面までは達していない。確認面での平面形はほぼ楕円形を呈し、長径1.4m、短径1.0mを測り、壁の形状は急である。覆土内からの出土遺物はなく、覆土の状況はハードロームブロックを多量に混入し、他の中・近世のピットと同様である。

P11（第79図、第9表、図版17）

G15-52に位置し、状況はP9とほとんど同様である。確認面での平面形は隅丸方形を呈し、長径1.2m、短径1.1mを測り、壁の形状は緩やかである。覆土内からの出土遺物はなく、覆土の状況はハードロームブロックを多量に混入し、他の中・近世のピットと同様である。

P12（第79図、第9表）

G15-63に位置し、古墳時代前期の竪穴住居跡136住を北側約1／3で切っている。本跡底面は136住の床面までは達していない。平面形は隅丸長方形を呈し、長径1.6m、短径1.1m、深さ0.45mを測り、壁の形状は直である。覆土内からの出土遺物はなく、覆土の状況は小粒のハードロームブロックを多量に混入し、他の中・近世のピットと同様である。覆土は大まかに2層に分離でき、自然埋没と思われる。

P13（第79図、第9表、図版17）

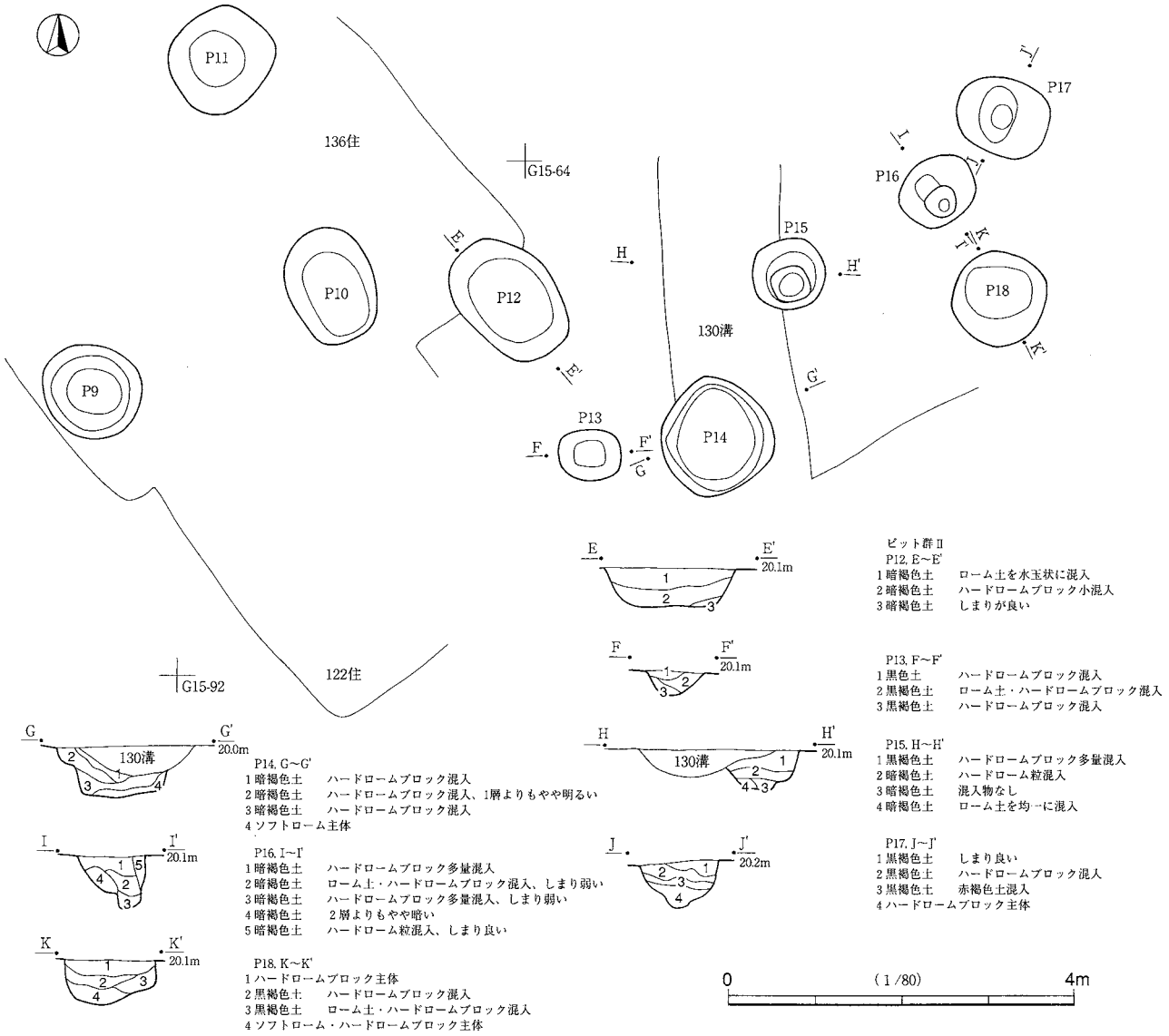
G15-74に位置し、単独で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、長径0.8m、短径0.6m、深さ0.20mを測り、壁の形状は急である。断面形は「U」字状を呈し、底面は平らではない。覆土内からの出土遺物はなく、覆土の状況はハードロームブロックを多量に混入し、他の中・近世のピットと同様である。覆土は大まかに3層に分離でき、自然埋没と思われる。

P14（第79図、第9表、図版17）

G15-75に位置し、古墳時代後期の溝状遺構130溝に切られているため、本跡の帰属時期は130溝以前である。平面形は方形を呈し、長径1.3m、短径1.3m、深さ0.62mを測り、壁の形状は直である。覆土の状態は130溝に切られているため不明瞭であるが、残った部分の状況から察すると自然埋没と思われる。覆土内からは土器の小片が数点出土したが、時期の判別はできないほどの小片である。

P15（第79図、第9表、図版17）

G15-65に位置し、P14同様古墳時代後期の溝状遺構130溝に切られているため、本跡の帰属時期は130溝以前である。平面形は円形を呈し、径1.3m、深さ0.49mを測り、壁の形状は直である。形状は中段で小さなテラス状の平坦面を有し、底面は平らである。覆土の状態は130溝に切られているため不明瞭であるが、残った部分の状況から察すると自然埋没と思われる。覆土内からの出土遺物はない。



第79図　ピット群Ⅱ

P16（第79図、第9表、図版17）

G15-66に位置し、P17・P18に近接し単独で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径0.9m、短径0.8m、深さ0.65mを測り、壁の形状は直である。形状は柱痕と抜取痕が明瞭にみられ、底面は柱痕の部分のみ極端に深い。覆土はハードロームブロックを主体とする暗褐色土で構成され、柱痕及び抜取痕部分は締まりが弱く他は締まっている。覆土内からの出土遺物はないが、覆土の状況から中・近世とするのが妥当である。

P17（第79図、第9表、図版17）

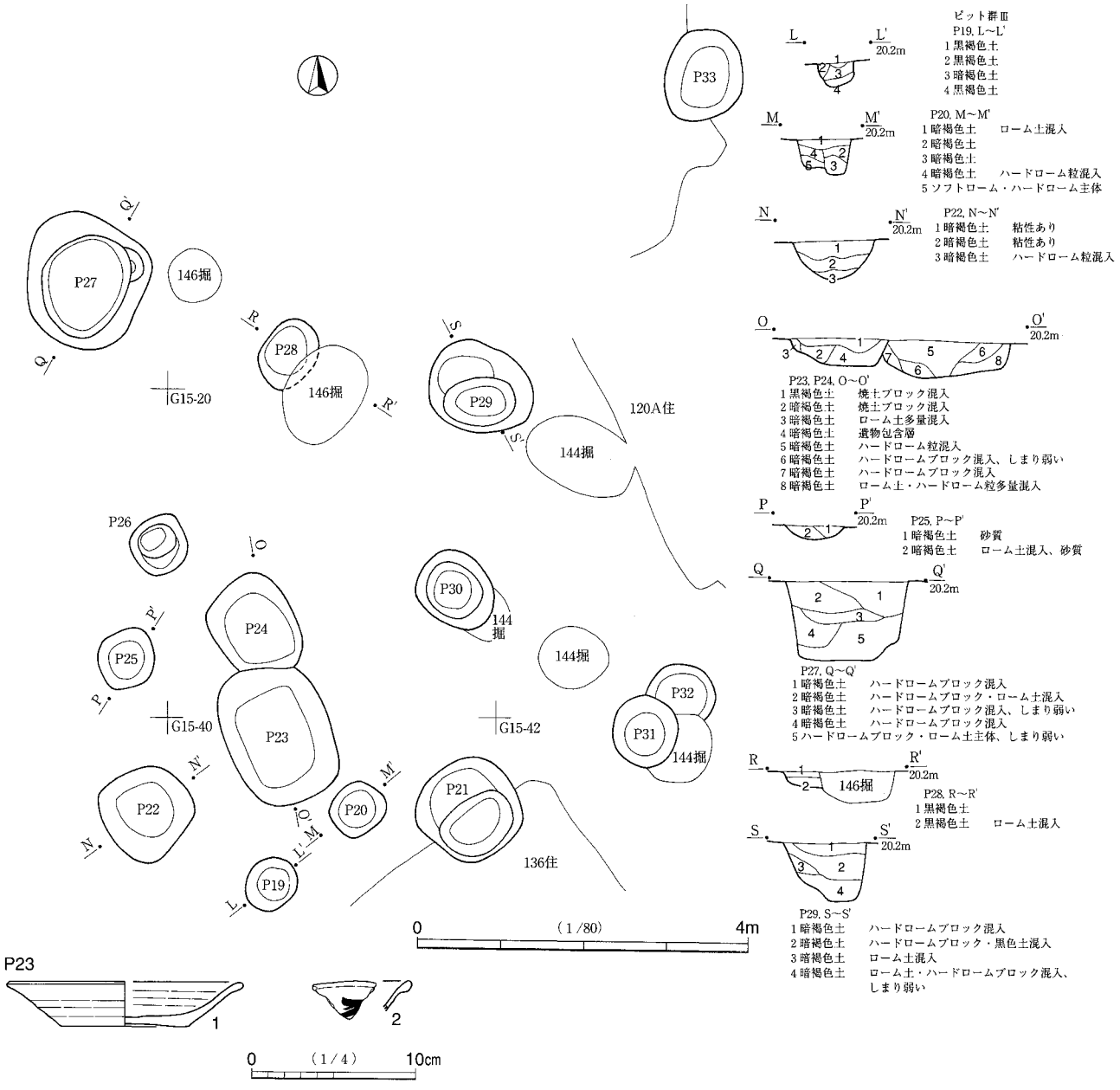
G15-56に位置し、P16・P18に近接し単独で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径1.1m、短径0.9m、深さ0.58mを測り、壁の形状は急である。覆土はハードロームブロックを主体とし、自然埋没と思われ、全体的に締まりは良い。底面は中央部が円形にやや凹んでいる。覆土内からは土器の小片が数点出土しているが、覆土の状況から中・近世とするのが妥当である。出土遺物は埋没時の流れ込みと思われる。

P18（第79図、第９表、図版17）

G15-66に位置し、P16・P17に近接し単独で検出された。平面形は円形を呈し、径1.1m、深さ0.52mを測り、壁の形状は直である。覆土はハードロームブロックを主体とし、自然埋没と思われる。底面は緩やかに傾斜し平らではない。覆土内からは礫が１点出土し、覆土の状況から中・近世とするのが妥当である。

ピット群Ⅲ

この群は調査区の中央やや東側に近接する周辺に位置する。グリッド番号でいえば、ほぼG15-00ラインより南側である。ピット状遺構P19～P33を含み、計15か所を数える。そのうちP23・P28の２か所は底面からの出土遺物及び切り合い関係から、平安時代に帰属すると思われる。前述したとおり、この２か所については本項で詳細を報告する。15か所中約半分の７か所は他遺構と重複している。



第80図　ピット群Ⅲ

P19（第80図、第9表、図版17）

G15-40に位置し、このピット群では一番南から単独で検出された。平面形はほぼ円形を呈し、長径0.7m、短径0.6m、深さ0.32mを測り、壁の形状は直で底面はやや傾斜気味で平らではない。覆土内からの出土遺物はなく、覆土はローム土主体で締まりは良い。他の中・近世のピットの覆土とは若干異なり、P5の覆土に近似している。平安時代末から中・近世とするのが妥当であると思われる。

P20（第80図、第9表、図版17）

G15-40に位置し、P19から北東へ0.8m隔たって単独で検出された。平面形はほぼ円形を呈し、長径0.7m、短径0.6m、深さ0.45mを測り、壁の形状は直である。形状は柱痕が明瞭にみられ、底面は柱痕の部分でやや深くなっている。覆土内からは土器の小片が数点出土したが、時期の判別はできないほどの小片である。覆土はローム土及びハードロームを主体に混入し、どちらかいいえばP19の覆土の状態に近いといえる。P19の帰属時期とほぼ同時期であると思われる。

P21（第80図、第9表、図版17）

G15-41に位置し、古墳時代前期の竪穴住居跡136住を明確に切っている。平面形は隅丸方形を呈し、長径1.2m、短径1.2m、深さ0.18mを測り、壁の形状は直である。形状は中段にテラス状の平らな段を有し、そこからさらに30cm程度深く掘り込まれている。底面はピットの半分程度の平らな楕円状を呈し、136住の床面まで達している。覆土内からの出土遺物はなく、覆土はローム土及びハードロームブロックを主体に混入し、どちらかいいえばピット群ⅡのP12の覆土の状態に近いといえる。帰属時期については中・近世が妥当と思われる。

P22（第80図、第9表、図版17）

F15-49に位置し、単独で検出された。平面形はやや方形に近い不整形を呈し、長径1.1m、短径1.1m、深さ0.51mを測り、壁の形状は緩やかである。断面形は「U」字状を呈し、底面は平らではない。覆土内からは土器の小片が数点出土したが、時期の判別はできないほどの小片である。覆土は全体的に粘性が強い暗褐色土が主体である。覆土の状態から察するに、平安時代末から中・近世とするのが妥当である。

P23（第80図、第9・10表、図版18・51・60）

G15-40に位置し、中・近世に帰属すると思われるP24に切られている。本跡底面からは平安時代後半の土師器が出土しており、本跡の帰属時期もほぼ同時期といえる。平面形は隅丸長方形を呈し、長径1.8m、短径1.3m、深さ0.45mを測り、壁の形状は北側が緩やかで、南側が直である。底面はやや傾斜しているものの、平らといえる。出土遺物で図示できたものは2点である。

1は本跡底面出土の破片が接合した土師器の皿で、約1／2を遺存する。内外面ともに摩耗し、底内は一部器面の剥離がみられる。色調は全体的に橙色を呈し,胎土は密で微量の海綿骨針が含まれている。底外は回転糸切り後外周に回転ヘラケズリが施されている。2は杯の口縁部片で、外面には墨書が描かれているが、小片のため判読不能である。

P24（第80図、第9表、図版18）

G15-30に位置し、平安時代後半と思われるP23を切っている。平面形は不整方形を呈し、推定長径1.3m、短径1.0m、深さ0.35mを測り、壁の形状は緩やかである。底面はややレンズ状を呈し、平らではない。覆土内からは数点の土器の小片が出土したが、帰属時期を確定できる遺物はない。覆土は焼土ブロックをやや多く混入しており、埋没過程の凹みを利用して火が使用された可能性が高い。帰属時期については、

P23を切っていることから中・近世とするのが妥当である。

P25（第80図、第9表、図版18）

F15-39に位置し、単独で検出された。平面形は円形を呈し、径0.7m、深さ0.18mを測り比較的浅い。壁の形状は緩やかで、断面形はレンズ状を呈し、底面は平らではない。覆土内からの出土遺物はなく、覆土は砂質土が主体で、他のピットの覆土の状況とは異なっている。帰属時期を確定できる根拠は全くなく、時期は不明である。

P26（第80図、第9表、図版18）

F15-29に位置し、P25から北へ約0.7m隔たって単独で検出された。平面形はやや丸味を帯びた方形を呈し、長径0.7m、短径0.7mを測るが、深さ及び覆土の記録は残っていない。写真でみる限りにおいては、P25よりは若干深めのようである。P25同様帰属時期を確定できる根拠は全くなく、時期は不明である。

P27（第80図、第9表、図版18）

F15-19に位置し、ピット群Ⅲの中では北西端に若干離れて単独で検出された。平面形は不整方形を呈し、長径1.6m、短径1.5m、深さ0.99mを測り、検出された全てのピット状遺構の中では、規模の大きなものの一つである。壁の形状は直で、底面は楕円形を呈し平らである。覆土内からは土器の小片が数点出土したが、時期の判別はできないほどの小片である。覆土はハードロームブロックが主体で、覆土の状態から察するに、中・近世とするのが妥当である。

P28（第80図、第9表、図版18）

G15-10に位置し、平安時代後期と思われる掘立柱建物跡146掘の柱穴7に明確に切られている。平面形は楕円形を呈し、長径0.9m、推定短径0.7m、深さ0.19mを測り、検出された全てのピット状遺構の中では、極めて浅いものの一つである。壁の形状は緩やかで、底面は中央でやや凹み平らではない。覆土内からは土師器の小片が数点出土したが、帰属時期を確定できる遺物はない。覆土はローム土が主体の黒褐色土で、覆土の状態及び切り合い関係から察するに、平安時代前半とするのが妥当である。

P29（第80図、第9表、図版18）

G15-11に位置し、単独で検出された。平面形は不整の楕円形を呈し、長径1.4m、短径1.1m、深さ0.70mを測る。壁の形状は北側が緩やかで、南側が直である。楕円形の平らな底面近くには、若干傾斜するテラス状の段を有している。覆土内からは土器の小片が数点出土したが、時期の判別はできないほどの小片である。覆土はハードロームブロックを主体に混入し、覆土の状態から中・近世とするのが妥当である。

P30（第80図、第9表、図版18）

G15-31に位置し、平安時代後半の144掘の柱穴11を明確に切っている。平面形は楕円形を呈し、長径1.0m、短径0.8m、深さ0.70mを測り、壁の形状は急である。底面は平らで、144掘の柱穴11の底面より7cm程度深く掘り込まれており、覆土内からの出土遺物はない。覆土の状況の記録はないが、切り合い関係から中・近世とするのが妥当である。

P31（第80図、第9表、図版18）

G15-42に位置し、平安時代後半の144掘の柱穴9とP32を明確に切っている。平面形は円形を呈し、径0.8m、深さ0.63mを測り、壁の形状は直である。底面は平らで、144掘の柱穴9の底面より4cm程度深く掘り込まれており、覆土内からの出土遺物はない。覆土の状況の記録はないが、切り合い関係から中・近世とするのが妥当である。新旧関係は114掘→P32→P31である。

P32（第80図、第9表、図版18）

G15-33に位置し、平安時代後半の144掘の柱穴9を切り、P31に切られている。平面形は円形と思われ、径0.9mを測り、壁の形状は直である。深さの記録はないが、写真で見る限り極めて浅く、底面はレンズ状を呈しているようである。底面は平らで、144掘の柱穴9の底面より4㎝程度深く掘り込まれており、覆土内からの出土遺物はなく、切り合い関係から中・近世でも古い時期とするのが妥当である。

P33（第80図、第9表、図版18）

本ピット群の北東端のG15-03に位置し、古墳時代後期の130溝を切っている。平面形は楕円形で、長径1.2m、短径1.0mを測り、壁の形状は直である。深さの記録はないが、写真で見る限り130溝の底面よりは深いようである。覆土内からの出土遺物はなく、時期は古墳時代後期以降は間違いないが、帰属時期を確定できる根拠は全くなく、ここでは不明としておく。

ピット群Ⅳ

この群は調査区の中央やや北側に近接する周辺に位置する。ピット状遺構P34～P40を含み、計7か所を数える。そのうち4か所は他遺構と重複している。

P34（第81図、第9表）

119住に近接するG14-95に位置し、単独で検出された。平面形は不整形を呈し、長径0.7m、短径0.5m、深さ0.51mを測り、壁の形状は南側が緩やかで、北側が直である。断面形は「U」字状を呈し、柱痕及び抜取痕が明瞭にみられる。底面はやや傾斜気味で平らではない。覆土内からは土器の小片が数点出土したが、時期の判別ができないほどの小片である。覆土はローム土及びハードロームブロック主体で、中・近世とするのが妥当である。出土遺物は埋没時の流れ込みと思われる。

P35（第81図、第9表）

G15-07に位置し、古墳時代前期初頭の竪穴住居跡117住を明確に切っている。117住の調査中に検出され、底面は117住の床面下にまで及んでいる。ここで記載する規模等については住居跡床面からのものである。平面形は円形を呈し、径0.6m、深さ0.13mを測り、壁の形状は緩やかである。覆土内からの出土遺物はなく、覆土はハードロームブロック主体で、P34と同様の中・近世とするのが妥当と思われる。

P36（第81図、第9表）

G14-87に位置し、古墳時代前期初頭の117住、平安時代前半の127坑、平安時代後半の147掘の柱穴7と148掘の柱穴1をそれぞれ切っている。平面形は楕円形を呈し、長径1.1m、短径0.9mを測り、壁の形状は緩やかである。深さ及び覆土等の記録はない。覆土内からの出土遺物はなく、切り合い関係から中・近世とするのが妥当であると思われる。

P37（第81図、第9表、図版19）

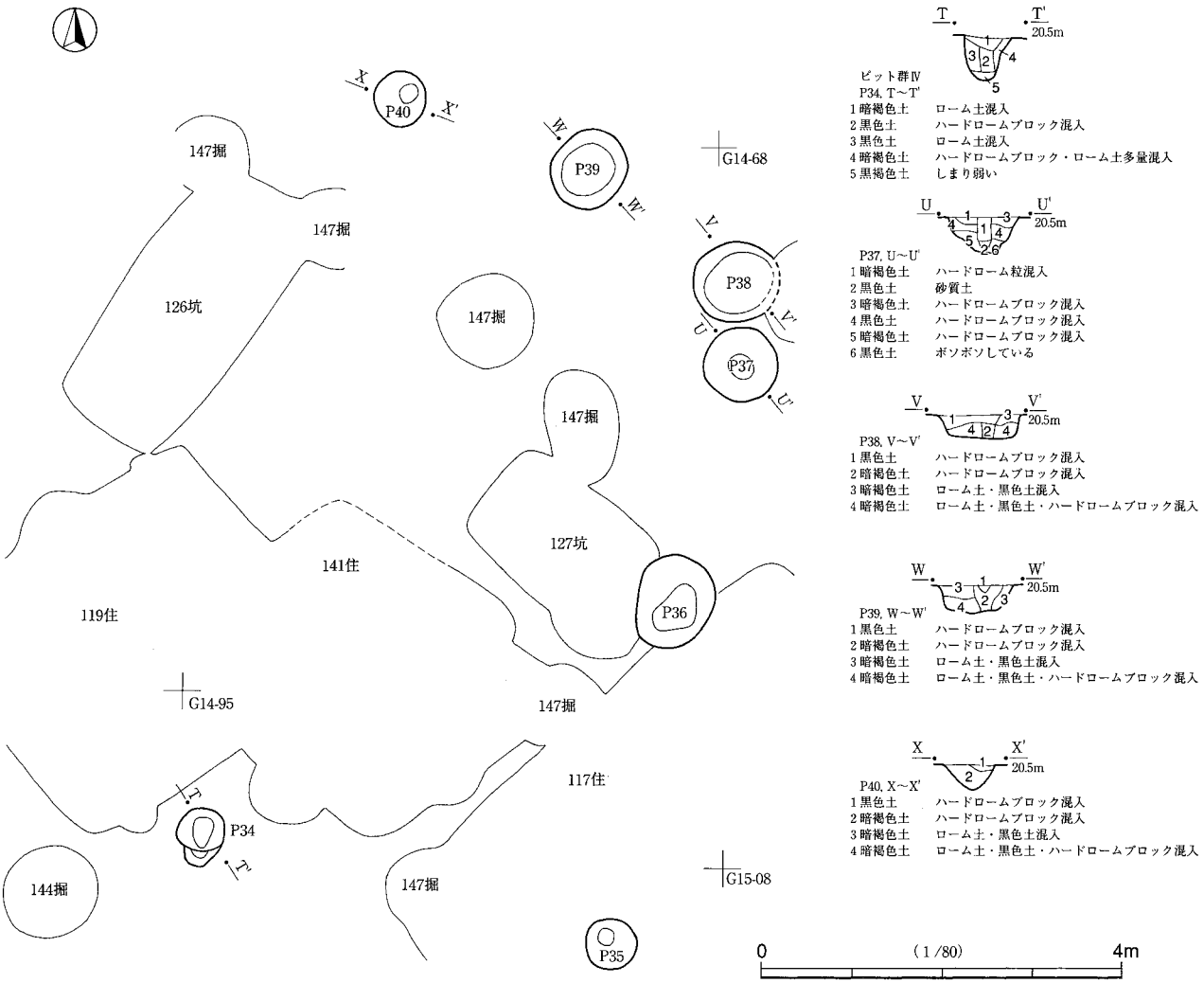
平安時代後半の148掘の柱穴2・3と、中・近世のP38に近接するG14-78に位置し、単独で検出された。平面形は円形を呈し、径0.8m、深さ0.45mを測り、壁の形状は緩やかである。断面形は幅広の「U」字状を呈し、柱痕が明瞭にみられる。底面は柱痕の部分が一段低くなり、平らである。覆土内からは土器の小片が数点出土したが、時期の判別はできないほどの小片である。覆土の状況はハードロームブロックを主体に混入し、覆土の状態から中・近世とするのが妥当である。

P38（第81図、第9表、図版19）

G14-68に位置し、平安時代後半の148掘の柱穴3を切っている。平面形は楕円形を呈し、長径1.0m、短径0.9m、深さ0.27mを測り、壁の形状は北側が緩やかで、南側が急である。断面形は逆台形を呈し、柱痕が明瞭にみられ、底面は平らである。覆土内からは土器の小片が数点出土したが、時期の判別はできないほどの小片である。覆土の状況はハードロームブロックを多量に混入し、覆土の状態及び切り合い関係から中・近世とするのが妥当である。

P39（第81図、第9表、図版19）

G14-67に位置し、単独で検出された。平面形はほぼ円形を呈し、長径0.9m、短径0.8m、深さ0.35mを測り、壁の形状は急である。断面形は逆台形を呈し、柱痕が明瞭にみられ、底面は若干の凹凸がある。覆土内からは土器の小片が数点出土したが、時期の判別はできないほどの小片である。覆土の状況はハードロームブロックを多量に混入し、覆土の状態から中・近世とするのが妥当である。



第81図　ピット群Ⅳ

P40（第81図、第９表、図版19）

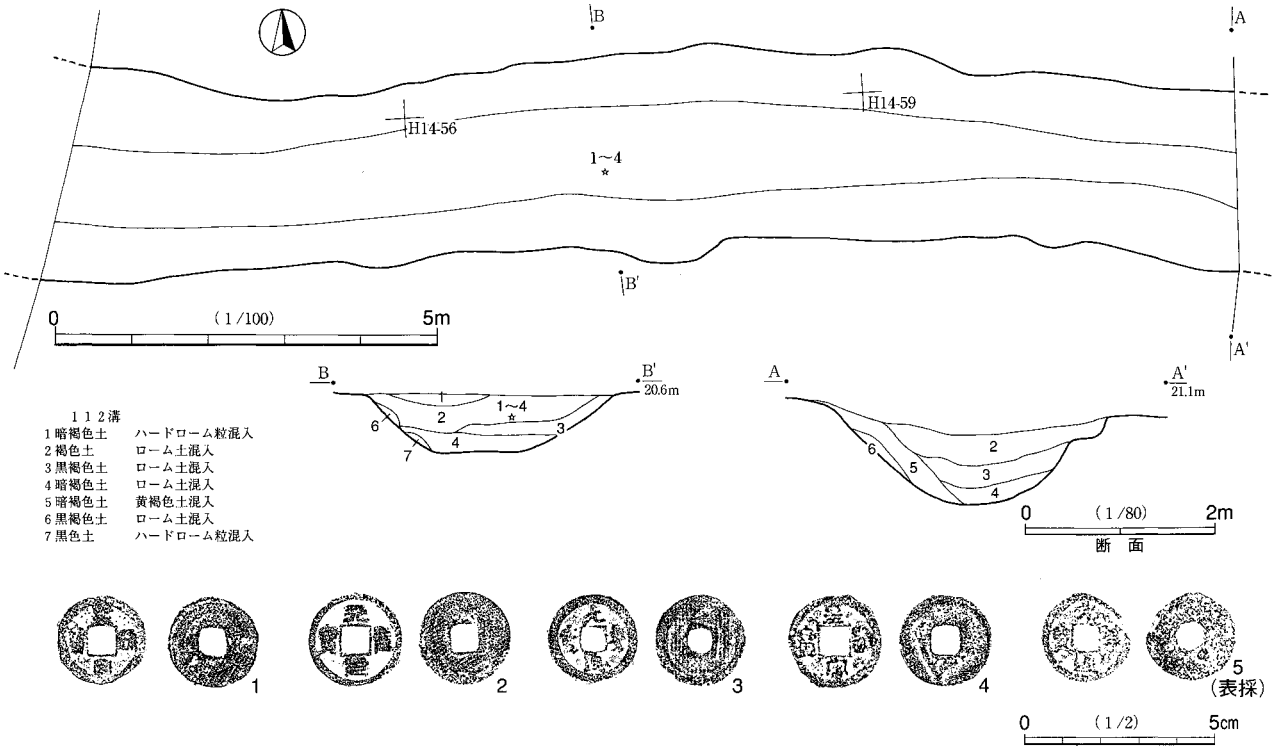
G14-56に位置し、単独で検出された。平面形は円形を呈し、径0.6m、深さ0.31mを測り、壁の形状は緩やかである。断面形は「U」字状を呈し、底面は平らではない。覆土内からの出土遺物はない。覆土の状況はハードロームブロックを多量に混入し、覆土の状態から中・近世とするのが妥当である。

（２）溝状遺構

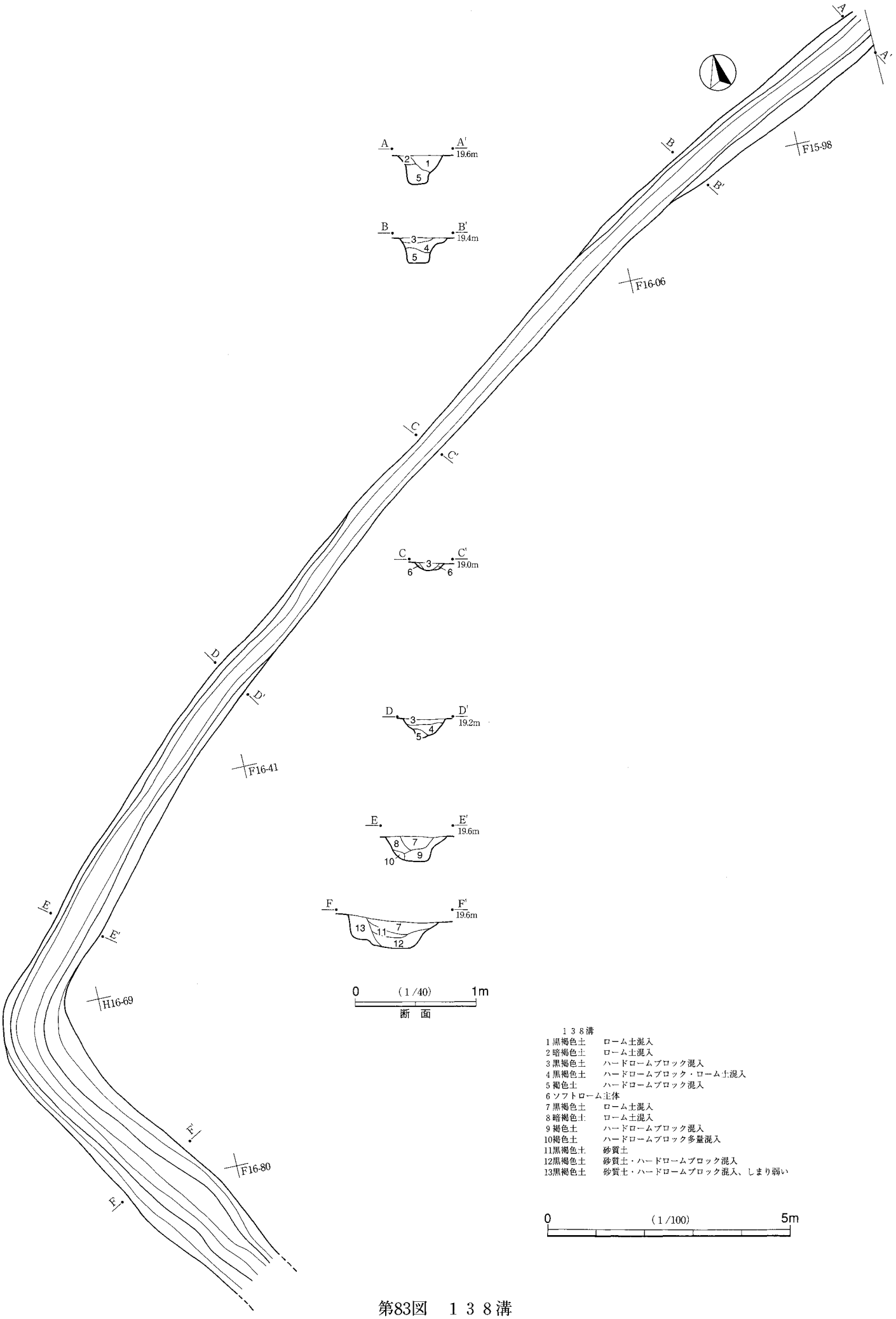
１１２溝（第82図、第16表、図版６・54）

調査区の北側を東西に直線的に走り、グリッド番号ではH14-55～I14-51にわたる。本跡西側で、古墳時代前期の140住、奈良時代後半の139住、平安時代前期の118住をそれぞれ切っている。上端幅は最小で2.2m、最大で2.9m、深さは1.6m～2.2mを測り、台地縁辺部から中央部に行くにしたがい徐々に浅くなっている。覆土はローム土及びハードローム混入土が主体で、大まかに３～４層に分離でき自然埋没と思われる。覆土中からは北宋銭４点が出土している。

今回の調査では表採された銭貨が１点あり、112溝出土銭貨の最後に５として紹介することとした。１～４は112溝の覆土中層からまとまって出土した。１は完形であるが、緑青が表裏全体にみられ、鋳造文字も潰れており摩耗も顕著である。潰れた文字の状態から、「皇宋通寶」と思われ、始鋳年は1039年である。縁外径23.75㎜、縁内径21.30㎜、郭外径8.78㎜、郭内径7.05㎜、縁厚0.97㎜、肌厚0.81㎜を計測し、重さは2.504ｇである。２は１同様の状態である。「天聖元宝」と思われ、始鋳年は1023年である。縁外径20.43㎜、縁内径20.70㎜、郭外径9.57㎜、郭内径7.20㎜、縁厚0.85㎜、肌厚0.83㎜を計測し、重さは2.878ｇである。３も１同様の状態である。「元豊通寶」と思われ、始鋳年は1078年である。縁外径20.41㎜、縁内径19.48㎜、郭外径8.15㎜、郭内径6.46㎜、縁厚1.34㎜、肌厚1.11㎜を計測し、重さは3.243ｇである。４は



第82図　１１２溝



１３８溝
1 黒褐色土　ローム土混入
2 暗褐色土　ローム土混入
3 黒褐色土　ハードロームブロック混入
4 黒褐色土　ハードロームブロック・ローム土混入
5 褐色土　ハードロームブロック混入
6 ソフトローム土体
7 黒褐色土　ローム土混入
8 暗褐色土　ローム土混入
9 褐色土　ハードロームブロック混入
10 褐色土　ハードロームブロック多量混入
11 黒褐色土　砂質土
12 黒褐色土　砂質土・ハードロームブロック混入
13 黒褐色土　砂質土・ハードロームブロック混入、しまり弱い

第83図　１３８溝

112溝出土銭貨４点の中では最も状態が悪い。「皇宋通寶」と思われ、始鋳年は1039年である。縁外径24.21㎜、縁内径20.25㎜、郭外径9.64㎜、郭内径7.68㎜、縁厚1.00㎜、肉厚1.02㎜を計測し、重さは2.885ｇである。

５は112溝から北側に約５ｍ隔たった調査区外で表採された。

今回の調査では区域外ではあるが、この部分は平成10年度に調査され、埋め戻された箇所に当たる。グリッド番号で言えばH14-28となる。縁部を一部欠損し、緑青が表裏全体にみられ、鋳造文字も潰れており摩耗も激しい。潰れた文字の状態から、「元豊通寶」と思われ、始鋳年は1078年である。縁外径23.93㎜、縁内径19.59㎜、郭外径9.02㎜、郭内径6.48㎜、縁厚0.81㎜、肉厚0.72㎜を計測し、重さは1.550ｇである。

１３８溝（第９・83図）

調査区の南西側のグリッド番号F17の境界から北北西に直線的に15ｍ程度走り、E16-68の地点で右折し方向を北東に変えている。方向を変えてからは緩やかな弧を描きながら28ｍ程度走り、一端消滅する。また、調査区の中央南端部にはG16-22の境界から、135住を切って溝が北北東に走っている。この溝は直線的に４ｍ程度走り消滅しているが、おそらく138溝が消滅している部分と繋がると思われる。この138溝は方形状に巡る土地区画のための溝である可能性が高い。調査区の南側境界に近い台地縁辺部緩斜面の部分の上端幅は1.4ｍ～1.8ｍ、深さは0.2ｍ～0.4ｍを測り、全体的に幅広で深い。調査区の中央部の上端幅は0.5ｍ～0.9ｍ、深さは0.1ｍ～0.2ｍを測り、全体的に幅は狭く深さは浅い。覆土はローム土及びハードローム混入土が主体で、大まかに２～３層に分離でき、自然埋没と思われる。出土遺物はない。

第3節　まとめ（第84・85図）

本事業に伴う間見穴遺跡の調査は、過去平成5・6・10年度の3回行われ、すでに報告済みである。ここでの記述は平成15年度に行われた調査のまとめにとどめることとし、過去の調査を含めた全体的なまとめは「第5章　総括」の項で記述したい。

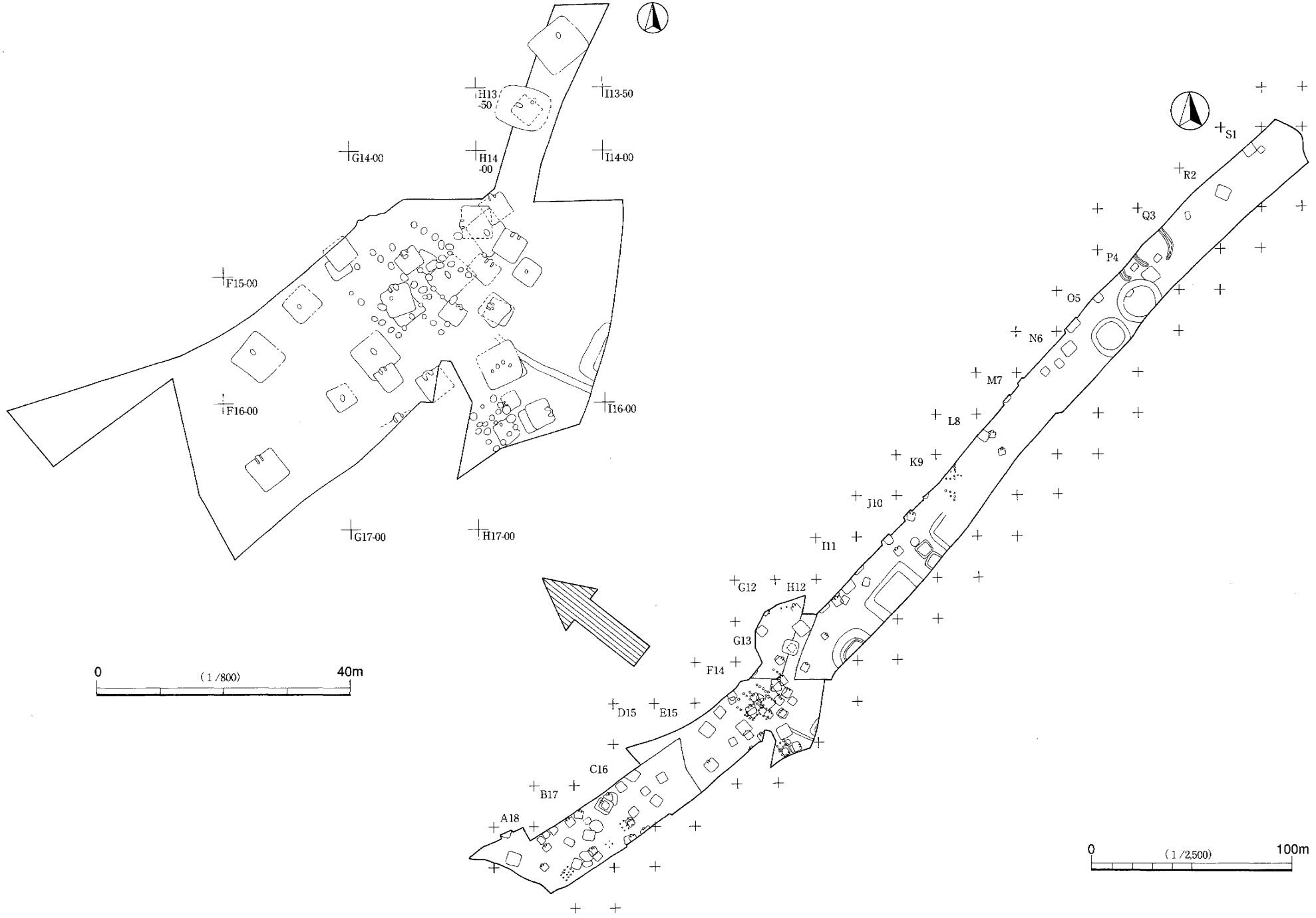
1　検出遺構について

今回の調査で検出された遺構は、旧石器時代の石器出土地点1か所、竪穴住居跡33軒、掘立柱建物跡7棟、土坑19基、ピット状遺構40か所、溝状遺構3条、道路状遺構1条、古墳周溝1条、竪穴住居跡廃棄後の凹みを利用した土器溜まりが3か所である。時期別でみると、弥生時代後期の竪穴住居跡2軒（111・SB026）、弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴住居跡4軒（110A・117・140・SB028）、古墳時代前期の竪穴住居跡4軒（103A・103B・132・136）・古墳周溝1条（106A）、古墳時代中期の竪穴住居跡2軒（120B・131）・ピット状遺構2か所（P14・P15）、古墳時代後期の竪穴住居跡1軒（133）・溝状遺構1条（130）、奈良時代後半の竪穴住居跡3軒（102B・123・139）・土坑1基（129）、奈良時代から平安時代の竪穴住居跡2軒（102A・141）・土坑1基（107）、平安時代前半の竪穴住居跡14軒（101・109・110B・116A・118・119・120A・121・124・125・134・135・137・142）・土坑5基（106B・108・126・127・152）・ピット状遺構1か所（P28）・道路状遺構1条（105）、平安時代後半の竪穴住居跡1軒（122）・掘立柱建物跡7棟（104・128・144・145・146・147・148）・土坑12基（110C・110D・113・114・115・116B・143・149・150・151・153・154）・ピット状遺構1か所（P23）、中・近世のピット状遺構33か所（P1～P13・P16～P22・P24・P27・P29～P32・P34～P40）・溝状遺構2条（112・138）、時期不明のピット状遺構3か所（P25・P26・P33）である。調査面積が比較的狭い割には遺構数が豊富で、本遺跡の立地する台地上は古代から住環境に恵まれた地域であったようである。なかでも奈良・平安時代を中心に大規模な集落が形成されていたことが、今回の調査でも明らかになった。遺物も多く、生活雑器の土器の量はきわめて多い。ここでは検出された遺構について若干のまとめをしたい。

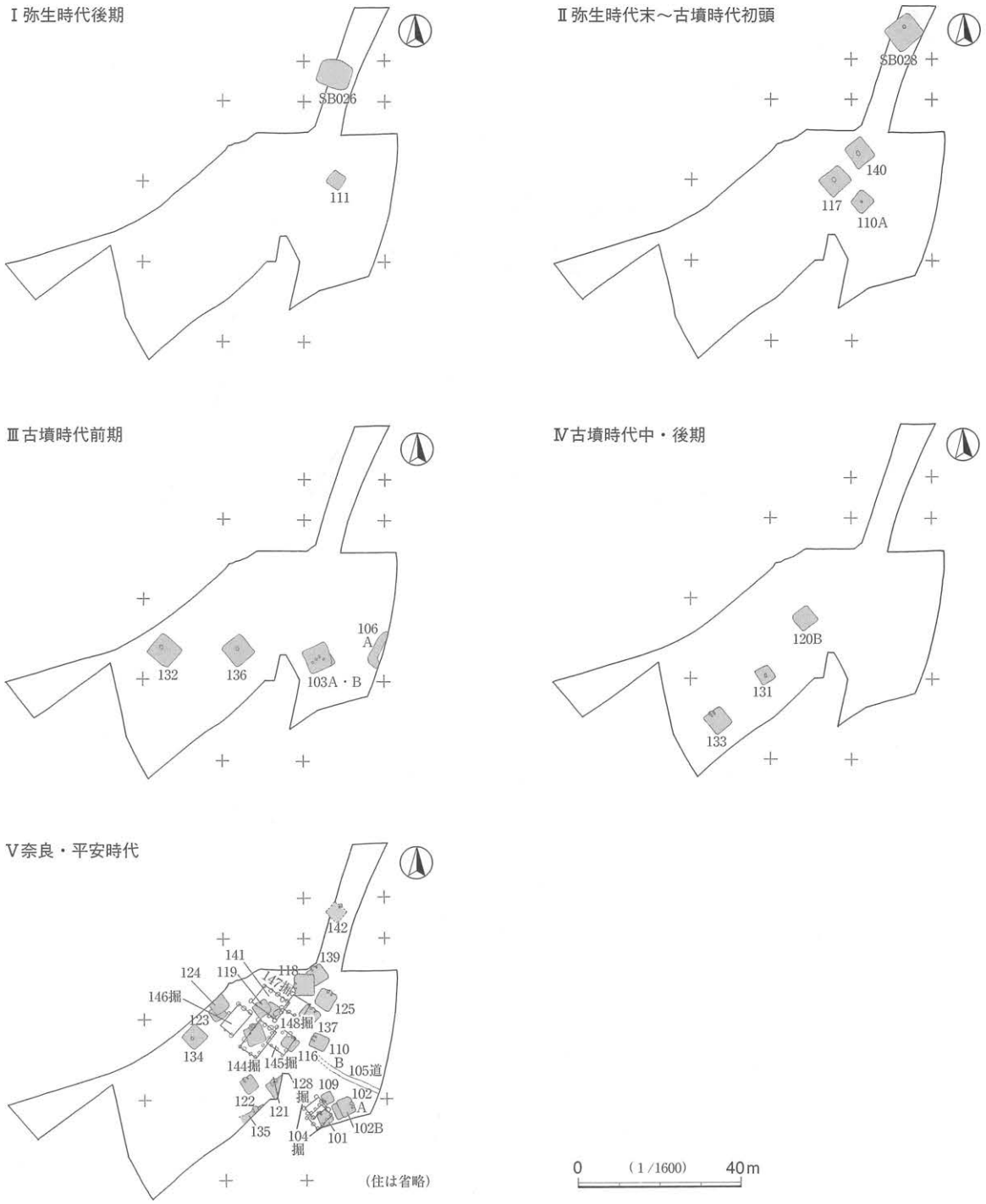
第84図は本事業で調査した間見穴遺跡全体の遺構配置図と、今回（H15年度）調査の遺構配置図を縮尺を変えて表したものである。また、第85図は竪穴住居跡及び掘立柱建物跡を中心に、時期別変遷を示したものである。ともに参照されたい。しかし、帰属時期を明確に示せない遺構もあり、このような遺構に対しては大まかな時期設定を行っいるため、正確さを欠く点もあることをここで付け加えておく。ここでは、本調査区内における竪穴住居跡等の時期別変遷を順にみていくこととし、過去の調査成果を踏まえた間見穴遺跡全体の考察は、「第5章　総括」で記述することとする。

第85図のⅠで示した弥生時代後期の竪穴住居跡は2軒で、住居形態は格段に異なる。SB026住は小判形ないしは隅丸長方形を呈し床面積41.57㎡と大型であるのに対し、111住は隅丸方形を呈し床面積10.56㎡と小型である。大型住居を中心に小型住居が数軒ないし10軒程度巡る小集落の存在は、この時期の近隣の調査例にもみられる。おそらく、SB026住を中心に同時期の小型の竪穴住居跡が巡り、小集落が形成されているものと思われる。小型住居の平面形態は円形や隅丸方形を呈し、壁溝を伴わないものが多い。土器の構成は、いわゆる北関東系の流れを汲む印手式が主体で、南関東系の土器は若干みられる程度である。この時期は南関東系の本格参入以前として捉えることができる。

第85図のⅡで示したのは弥生時代末から古墳時代初頭に帰属する竪穴住居跡4軒（110A住・117住・140住・SB028住）である。本文中及び観察表では古墳時代初頭と記し、古墳時代前期初頭と区別した。



第84図　間見穴遺跡全体及びH15年度調査の遺構配置図



第85図　竪穴住居跡及び掘立柱建物跡時期別変遷図

この４軒は、出土遺物に弥生土器を共伴しており、弥生時代から古墳時代への移行期に当たる竪穴住居跡であると考えられ、弥生時代末から古墳時代初頭とするのが妥当であると思われる。住居形態は隅丸方形ないしは方形及び長方形を呈し、床面積が最大のSB028住で47.29㎡、最小の110A住で13.94㎡と、弥生時代後期のような大きな較差は一部残るが、平均床面積は約30㎡と全体的にはやや大きめで安定する。主軸方位はN-38°-WからN-46°-Wの範囲にあり、ほぼ同一方位をとっている。出土遺物では弥生土器と五領式土器が共伴し、140住出土の口縁端部を折り返し刻目や棒状浮文を施す壺（第20図の遺物番号６・７）や、

SB028住出土の弥生土器（第25図25）のように、南関東系が増加する傾向がみられる。この時期の弥生土器は印手式も残っているが、南関東系が急激に多くなってくる。この時期は南関東系の本格参入時期として捉えることができる。一方、Ⅲで示したのは古墳時代前期の竪穴住居跡で、103住が同地点建替住居であり、その痕跡が明確に確認でき2軒分としたため、103A住・103B住・132住・136住の計4軒となった。住居形態は隅丸方形ないしは方形を呈し、平均床面積は約32㎡で、検出された竪穴住居跡の中では安定した規模の大きな床面積を保っている。主軸方位はN-26°-WからN-49°-Wの範囲にあり、ややぶれはあるが同様の方位をとっているといえる。この時期の出土遺物には五領式土器が主体をなし、東海系開脚高杯等がみられるようになる。弥生土器は激減するが一部では若干残っているようである。本遺跡を特徴づけるものとして古墳があげられるが、本調査区でも古墳時代前期に帰属する方墳の周溝の一部が検出された。間見穴古墳群は台地の縁辺部に形成されており、平成5・6年度の調査で前期古墳4基、後期古墳5基の計9基が調査報告済みである。当時の台地縁辺部は、人為的に削平され直線的になっている現在よりはもっと出入りがある地形であったとみられる。今回の調査で検出された106A周は、古墳群の最も南西端に位置し、古墳群形成の限界地点に当たるものと思われる。弥生時代末から古墳時代前期には竪穴住居跡は8軒検出されており、この時期に急激に住居数が増加する。このことは本遺跡の過去に行われた調査の成果とも一致する。

第85図のⅣで示した古墳時代中期は2軒（120B住・131住）、後期は1軒（133住）の計3軒と住居数は激減する。中期の住居形態は若干歪な方形を呈し、平均床面積は約14㎡でこぢんまりとしている。後期は正確な方形を呈し、床面積は20.84㎡で規模はやや大きくなっている。この中・後期の人々の生活の営みは縮小したか、台地中央部（他地域）へ移動したかのどちらかが考えられ、少なくとも途絶したわけではない。今回の調査は台地縁辺部の調査であり、台地中央部の調査例の増加によってその回答は得られようが、現段階では、古墳群の形成が大きく影響しているように考えられる。つまり、前期古墳の造営と同時にこの台地縁辺部は神聖な墓域に代わり、生活の営みは台地中央部に移っていったと推察される。また、この現象は前期古墳が造営される直前の、古墳時代前期の比較的早い段階で起こったと考えられる。

第85図のⅤで示した奈良・平安時代に帰属する竪穴住居跡が特に多く20軒を数え、掘立柱建物跡全7棟もこの時期に帰属している。20軒の竪穴住居跡のうち他遺構との切り合い関係等から、奈良時代に初現を求められるものが5軒（102A住・102B住・123住・139住・141住）ある。また、平成10年度には本調査区を挟むように、南西側と北東側一部の調査が行われており、その際にはほぼ同時期の15軒の竪穴住居跡及び4棟の掘立柱建物跡が検出されている。また、間見穴遺跡南西側の菖蒲谷津を隔てた対岸の台地上にある島田込ノ内遺跡でも、ほぼ同時期の竪穴住居跡及び掘立柱建物跡が検出されている。この点からいえば今回の調査区域の成果により、台地全体の奈良・平安時代の大集落のあり方が一部ではあるが明確になったといっても過言ではあるまい。奈良時代を初現とする竪穴住居跡5軒の平均床面積は約9.5㎡で極端に規模が小さくなり、主軸方位については統一性はみとめられない。平安時代に帰属する竪穴住居跡15軒の床面積は最大のもので16.06㎡（120A住）、最小のもので3.92㎡（109住）で、平均床面積は約10㎡で小規模となる。主軸方位はN-30°-Wを中心とした竪穴住居跡と、N-30°-Eを中心とした竪穴住居跡に大まかに分かれる。いずれにしてもこの時期から、古墳時代の神聖なる墓域を払拭するかのように、この台地縁辺部にも生活の営みが再び出現したことは確かである。また、住居の規模及び形態、そして主軸方位のあり方から、何らかの規制が加わっていた可能性もうかがえる。この時期には土器溜まりも3か所検出され、

遺物は生活雑器の土器が多量に出土しており、台地全体に大規模集落が営まれていた可能性が高いと考えられる。この時期を特徴付ける遺構として、105道の検出があげられる。105道は本調査区の東側境界から北西に緩やかなカーブを描きながら、集落へと徐々に浅くなりながら延び、集落直前で道の痕跡は消えている。転じてみると本調査区東側境界の数m先は、現在では削平された急激な断崖となっている。105道の境界での深さは1.2m程度で比較的浅く、この深さから推察するに、この時期の台地斜面は緩やかな傾斜を描きながら低地へ続いていたと思われる。おそらく、台地の直下を走る現在の道路を越えるあたりまで、斜面は延びていたであろう。105道は、今回検出された奈良・平安時代の集落と標高差約13m程の低地とを繋ぐ、主要な道の一つとして機能していた可能性が高い。一方、本調査区内の西側には埋没谷がみつかった。この部分には竪穴住居跡は希薄となり、遺構の空白部分となっている。しかし、厳密にはこの谷の埋土上面には古墳時代前期の132住及び後期の133住が構築されており、埋没時期は古墳時代前期以前に求められる。この埋没谷が各時代の生活にどのような影響を与えたのかについては「第5章　総括」で触れることとする。

図では示していないが、中・近世になると台地縁辺部には建物の痕跡は全くみられなくなり、溝とピット状遺構のみとなる。おそらく、生活の場は台地縁辺部を避け、低地か幹線街道周辺に移っていったものと考えられる。台地の大部分は農地化が進み、土地を区画する溝が設けられ、簡単な掘立小屋程度の休憩施設が造られたものと推察される。

2　出土遺物について

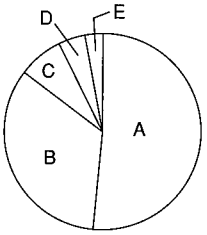
本報告書作成にあたり出土遺物に関しては、極力図化掲載することを旨としたが、小片のため図示できなかった遺物も多量に存在する。このような限られた条件ではあるが、ここでは出土土器のあり方を掘り下げてみていきたい。上げる数値はあくまで本書において図示できた土器を基本としている。

先にも述べたとおり、出土土器からみると本遺跡の弥生時代後期から古墳時代前期にかけては、移行期も含めて大まかに3期に区分することができる。いわゆる北関東系の流れを汲む印手式主体から、南関東系が本格的導入され北関東系と混在し、徐々に五領式が主体になっていく土器構成が認められる。この傾向は隣接する道地遺跡でも明確に認められ、この件に関しては「第4章　道地遺跡」のまとめで触れることとする。

今回の調査で圧倒的に多く出土した遺物は、奈良・平安時代の土器である。ここではこの時期の出土土器を中心にみていくこととする。出土土器で復元実測し、図示できたものだけでも518点を数える。この時期の竪穴住居跡が20軒であることからすれば、非常に多いことが分かる。そのうち須恵器が全体でしめる割合は、約13%である。図示できた須恵器及び土師器の器種別割合及び産地別割合については第86図で示した。器種別の甕類には胴部片だけでは甑との区別が付かないものが多いので、甑片6点も含めたため非常に多くなった。この甕類が最も多く全体の約52%、次に多いのが杯類（高台付杯1点と高杯1点を含む）で約34%となる。これ以外の器種については極端に減少する。壺類（小型壺1点を含む）は約7%、皿類（高台付皿2点を含む）は約4%、鉢類（高台付鉢1点を含む）は約3%となる。須恵器の産地の判別については胎土・焼成・色調・調整等からそれぞれがもつ産地の特徴を比較し、茨城産、東海産、千葉産を判別した[1)]。また、それぞれの産地の特徴を満たしきっていないものについては不明とした。その結果、茨城産の比率が若干多く約31%、次いで東海産が約28%、千葉産が約23%、不明約18%であった。本遺跡における須恵器の産地間の格差はあまりみられず、ほぼ拮抗しているようである。一方、土師器に

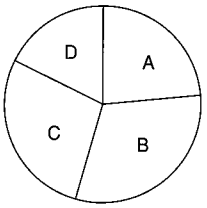
須恵器の器種別割合

A	甕類	35
B	杯類	23
C	壺類	5
D	皿類	3
E	鉢類	2
合計		68



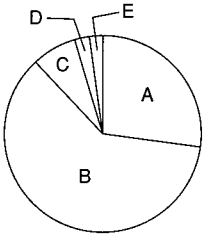
須恵器の産地別割合

A	千葉産	16
B	茨城産	21
C	東海産	19
D	不明	12
合計		68



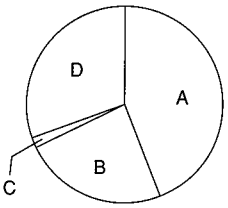
土師器の器種別割合

A	甕類	122
B	杯類	274
C	皿類	33
D	鉢類	11
E	その他	10
合計		450



土師器甕の型別割合

A	在地型	52
B	常総型	28
C	武蔵型	2
D	不明	36
合計		118



第86図　出土土器の器種別及び産地（型）別割合

関しては杯類が半分以上の約60%をしめるが、杯の復元実測は小片でも容易にできるためか、数値が極端に多くなったようにも思える。次に多いのが甕類（小型甕24点を含む）の約27%で、須恵器の場合と同様に甑も含まれている。次いで皿類の約７%、鉢類の約３%、その他の約３%の順である。鉢類には椀が含まれ、その他にはミニチュア土器・蓋がそれぞれ含まれている。土師器の甕については器形・調整等により従来から認められている[2)]、在地型、常総型、武蔵型に判別し、その割合について示した。

ここで扱う土師器の甕については、機種別割合で示した数値から甑４点を差し引いた数値で計118点である。この118点には小型甕24点が含まれており、その全てが在地型である。全体では在地型が約44%、常総型が約24%、武蔵型が約２%、不明が約30%で、武蔵型が極端に低いのが特徴といえる。今回の間見穴遺跡の調査では土器溜まりが３か所確認され、多量の土器が出土した。この土器溜まりはいずれも竪穴住居跡廃棄後の凹みに構築されており、竪穴住居跡の帰属時期とさほどかわらない時期であることが分かっている。この時期の竪穴住居跡は奈良時代から平安時代前半のものがほとんどである。平安時代全般にわたる土器量は極めて多く、平安時代前半の集落が廃棄された後も、台地上には大規模な集落が連綿と構成されていたと考えられる。このことは集落の離合集散・移転を示すものであり、台地上全体で行われていたと推察される。また、先に示したとおり搬入土器の多さは、この時期の人々が生活を営む上で大量の土器が必要とされ、広範囲の地域から土器が搬入された結果だと考えられる。その搬入先の一つは北部の茨城を中心とした地域に求められるようである。

今回の調査でも前回までの調査と同様に、墨書土器が比較的多く出土した。本遺跡が位置する周辺地域は墨書土器の出土が多い地域でもあり、判読不能な小片まで可能な限り図示することに努めた。また、赤外線写真を撮影できたものは図版59・60にまとめた。今回の調査で出土した墨書土器は計26点あり、器種別には土師器の杯が21点、須恵器の杯が１点、土師器の皿が３点、土師器の蓋が１点である。書かれた位置は全て外面で、向きは横位が１点あるのみで全て正位と思われる。墨書の内訳は以下のとおりである。

『カ』（102A住－５須恵杯）　『ㄷ』（118住－５土師杯）　『か』（121住－29土師杯横位）　『人』（121

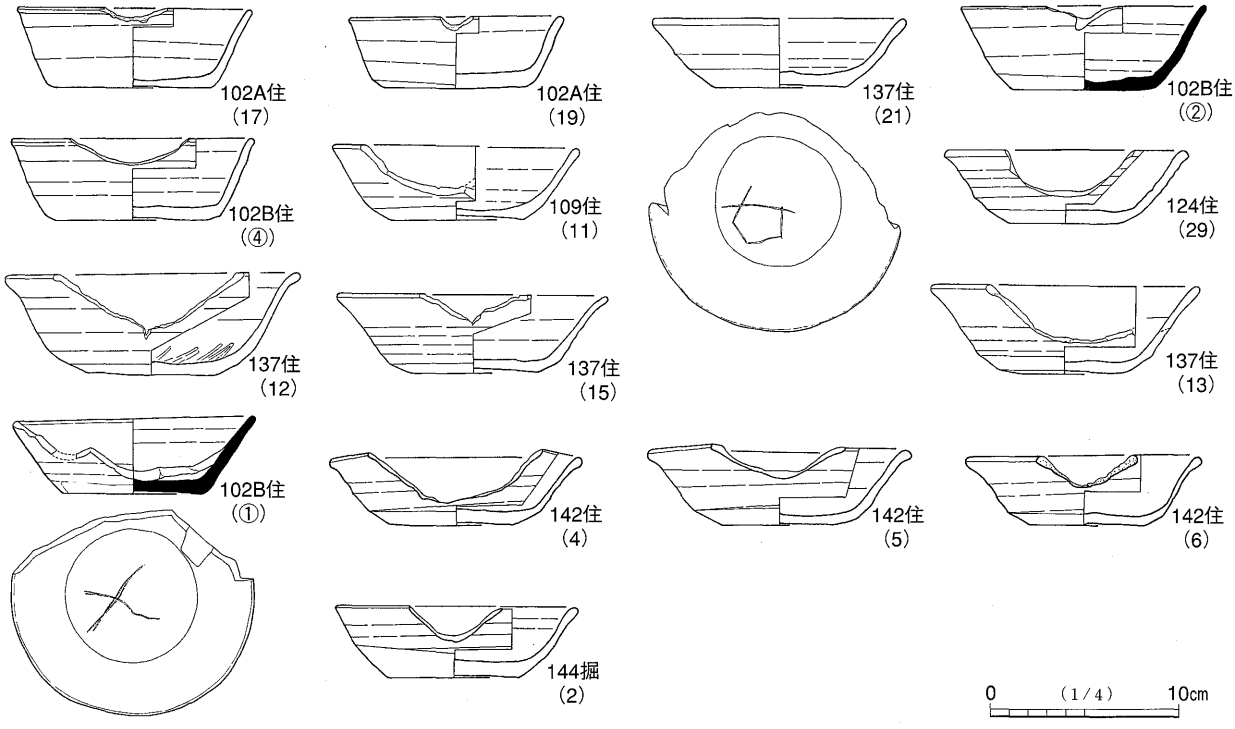
住－53土師皿）　『仟』（121住－54土師皿、134住－13・14・30土師杯、127坑－土師皿「千ヵ」、P23－2土師杯「千ヵ」）　『畄』（134住－33土師杯）　『爪』（135住－7土師杯）　不明（118住－15土師杯、119住－7土師杯、121住－49・50・51土師杯、123住－2、134住－16・31・32・34・35土師杯、134住－45土師蓋、141住－4土師杯、144掘－1土師杯）

『仟』又は『千』については、平成10年度調査に於いても6点ほど確認されている。また、判読不能のものが多くここでは不明としたが、そのほとんどが小片のためである。墨書土器のほかに、刻書とみられるものがある。そのほとんどが記号と思われ、いずれも焼成後に線刻されたものである。

『×』（102B住－①須恵杯底内、121住－10須恵甑底外）　『⊔』（102A住－9須恵杯体内）　『丰ヵ』（121住－11須恵杯底内）　『丰』（122住－50土師杯底内）　『⊔』（137住－21土師杯底外）　『卄ヵ』（120A住－29土師杯体外、139住－5土師杯底外）　『丈』（142住－12土師杯底内）　『⊻』（グリッド－5土師杯底内）

刻書のなかには線が極めて細く浅いものもあり、単なる傷のようなものもみられるが、ここでは一応気が付いたもの全てについて報告しておく。

第87図では今回の調査で出土した、意図的に打ち欠いた痕跡のある土器を示してみた。いわゆる「打ち欠き土器」[3]と呼称される土器群である。打ち欠きされた土器については、単なる破損との区別が難しいが、ここでは整然とした割れ方をしたもののみ抽出してみた。これが今回の調査で出土した、全ての打ち欠き土器を示したものではなく、見落としも多くあることを付け加えておく。打ち欠き自体は口縁部を小さく欠いたものから体部を半分程度欠いたものまでみられ、形状は弧状・「U」字状・「V」字状等に分



第87図　間見穴遺跡出土打ち欠き土器（H15年度調査）

第5表　間見穴遺跡（H15）打ち欠き土器一覧

番号	遺構	時期	第図	番号	器種	打ち欠き状況	土器の状態	出土状況	備考
1	102A住	奈良～平安	34	17	土師器杯	「U」字状,1箇所	接合無,他欠損無	カマド右袖脇床直,正位	極小
2	102A住	奈良～平安	34	19	土師器杯	「U」字状,1箇所	接合無,他欠損無	出入り口部中層,正位	極小
3	102B住	奈良　後	34	①	須恵器杯	「U」字状,1箇所	接合有,他欠損有	出入り口部近接床直,破片	大,底内線刻『　』
4	102B住	奈良　後	34	②	須恵器杯	「U」字状,1箇所	接合無,他欠損無	出入り口部中層,正位	極小
5	102B住	奈良　後	34	④	土師器杯	弧状,1箇所	接合有,他欠損有	出入り口部近接上層,正位	中
6	109住	平安　前	35	11	土師器杯	「U」字状,1箇所	接合有,他欠損有	カマド内右袖脇床面接合,正位	大,灯明土器
7	124住	平安　前	52	29	土師器杯	「U」字状,2箇所	接合有,他欠損有	カマド近接,正位	大
8	137住	平安　前	61	12	土師器杯	「V」字状,1箇所	接合有,他欠損無	カマド内,倒位	大,支脚利用
9	137住	平安　前	61	13	土師器杯	「V」字状,1箇所	接合有,他欠損無	カマド内,倒位	中,支脚利用
10	137住	平安　前	61	15	土師器杯	「U」字状,1箇所	接合有,他欠損有	カマド内,倒位	大,支脚利用
11	137住	平安　前	61	21	土師器杯	体部1/2以上,1箇所	接合有,他欠損有	カマド右袖近接下層,正位	1/2周,底外線刻『　』
12	142住	平安　前	64	4	土師器杯	「U」字状,1箇所	接合有,他欠損無	カマド内,倒位	大,支脚利用
13	142住	平安　前	64	5	土師器杯	弧状,1箇所	接合無,他欠損無	カマド近接,正位	中
14	142住	平安　前	64	6	土師器杯	「V」字状,2箇所	接合有,他欠損無	貯蔵穴底面,正位	中
15	144掘	平安　後	67	2	土師器杯	「V」字状,1箇所	接合有,他欠損有	柱穴4一括	中

けられる。出土状況はカマド内及びカマドに近接する場合が多くみられ、次いで住居の出入り口周辺、貯蔵穴内及び掘立柱建物跡の柱穴内が1点ずつみられる。また、第5表で示した竪穴住居跡6軒のうち、複数個出土しているものが4軒と、複数出土の傾向が高いように思われる。6の灯明土器として使用されていたものは、カマド右袖脇床面に正位の状態で置かれ、打ち欠いた破片はカマド内から出土し接合した。破断面には油煙が全く付着しておらず、使用後に打ち欠いたものと思われる。カマド内出土の打ち欠き片は二次被熱を受けており、劣化及び色調の変化が激しく別個体のような感じを受ける。打ち欠き後破片のみをカマドに投入し、カマドを使用した結果であろう。8～10の3点は、137住のカマド火床部に杯8点と高台付皿1点の計9点を倒位に積み重ね、支脚として使用されていたものである。いずれも二次被熱を受け器面の劣化は顕著で、器種の異なる高台付皿1点は倒位に積み重ねられた9点の丁度真ん中に置かれていた。また、8は一番上、9は一番下、10は高台付皿の下にそれぞれ置かれていた。打ち欠きが認められたのはこの3点のみであることから、打ち欠きと置かれた位置に相関関係があるのか又は偶然なのかはっきりしたことは分からないが、いずれにしても貴重な資料といえる。また、12も142住のカマド内で支脚として使用されている。12の場合は床面に固定された柱状の固い砂質土の上に、杯3点を倒位に重ねあわせた一番下の位置に置かれていた。この4点の破断面は二次被熱を受け劣化していたため、打ち欠き後に支脚として使用されたことを物語っている。このことは支脚調整のためあえて打ち欠いた可能性もあり、実用的使用と考えられないこともない。このように実用的なものか、祭祀的なものか、あるいはその双方なのか、判断しがたい場合がある。しかし、穿孔・打ち欠きされた土器は確実に存在する。ここでは掘り下げて論考する遑はないので別の機会に譲り、一資料として報告するに留めることとする。

註1　それぞれ目安とした区分内容は「注2」を参考とした。

2　立和名明美　1998　『主要地方道生実・本納線埋蔵文化財調査報告書2　－千葉市笹目沢遺跡・種ヶ谷津遺跡・大道遺跡－』　財団法人千葉県文化財センター

白井久美子・田中　裕他　2002　『都市基盤整備公団千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－千葉市鷲谷津遺跡－』　財団法人千葉県文化財センター

3　穿孔土器と同様に土器を意図的に打ち欠き、祭祀に使われたとされる土器である。標準的な様相は口縁部体部の一部を打ち欠き、割れ口が整った弧状・「U」字状・「V」字状を呈しているというものである。

近年では体部全体を打ち欠く例も報告されている。糸川氏は「穿孔・打ち欠きが行われた時点で、その土器は人が実用に使う器ではなくなり、神仏に属する器に転化する……。」としている。

糸川道行他　2004　『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ⅩⅥ－印西市船尾白幡遺跡－』㈶千葉県文化財センター

糸川道行　2005　「古代土器の打ち欠き・穿孔」『千葉県文化財センター研究紀要24－30周年記念論集－』㈶千葉県文化財センター

付表

第6表　間見穴遺跡（H15）竪穴住居跡観察表

遺構No.	挿図番号	図版番号	時期	平面形	規模［m］［長］×［幅］×［深］	主軸方位［°］	床面積［㎡］	壁［形状］	主柱穴深［cm］	燃焼施設［種別/位置/形］	貯蔵穴［cm］［形状/位置］［長×幅×深］	グリッド	重複［旧］［新］	出土遺物［弥生土器］［須恵器］［土師器］	備考
101住	30	3	平安　前	長方	3.6×3.1×0.3	N-38-W	6.43	急	－	ｶﾏﾄﾞ/NW/楕円	－	H16-21	104掘,P2	**杯1**,甕5,杯1,刀子1	壁溝全周,出入口ﾋﾟｯﾄ
102A住	33,34	3	奈良平安	隅丸長方	3.6×4.4×0.5	N-68-E	9.53	緩	P1=21,P2=21	ｶﾏﾄﾞ/NE/円	方/ｶﾏﾄﾞ右袖脇 50×50×18	H16-04	**102B**	**甕3,壺1,杯5**,甕6,杯9,高台付杯2,蓋2	壁溝全周,出入口ﾋﾟｯﾄ
102B住	33,34	3	奈良　後	方	－×3.7×0.5	N-62-E	－	直	P1=12,P2=11	－	－	H16-13	102A	**杯2**,甕1,杯1,砥石2	出入口ﾋﾟｯﾄ
103A住	12	3	古墳　前	隅丸方	6.4×（5.9）×0.3	N-26-W	(31.52)	直	－	炉b/中央/楕円	楕円/SE壁下 75×58×6	H15-71	**103B**,105道,143坑	高杯1,杯3,軽石1	同地点建替
103B住	12	3	古墳　前	隅丸方	6.4×（6.2）×0.3	N-26-W	(32.69)	直	－	炉c/中央/楕円	－	H15-71	103A,105道,143坑	－	同地点a
109住	35,36	5	平安　前	方	2.5×2.6×0.4	N-116-W	(3.92)	急	－	ｶﾏﾄﾞ/SW/楕円	－	H15-92	128掘,P8	**甕1**,甕7,杯5,鉄釘1,磨石2	出入口ﾋﾟｯﾄ
110A住	13	5	古墳　前初	隅丸方	4.3×3.7×0.3	N-46-W	(13.94)	急	－	炉/中央/楕円	－	H15-20	110B,110C,110D	甕7	
110B住	37	5	平安　前	長方	(3.8)×(3.4)×0.3	N-60-W	(11.17)	急	－	ｶﾏﾄﾞ/W/円	－	H15-21	110A,110C,110D	**壺2**,甕2,甑1,杯15,高台付杯1,軽石1	
111住	14	6	弥生　後	隅丸方	3.8×3.7×0.2	N-55-W	10.56	緩	－	炉/中央/楕円	楕円/SE壁下 35×53×20	H14-94	単独	甕9,壺1,敲石1,石用材1	出入口ﾋﾟｯﾄ
116A住	38,39	6	平安　前	隅丸長方	3.1×3.6×0.2	N-36-E	8.10	急	－	ｶﾏﾄﾞ/NE/楕円	－	G15-27	116B,117,145掘	**高台付杯1**,甕7,甑1,杯10,高台付杯1,石製紡錘車1	
117住	15	7	古墳　前初	方	5.2×6.0×0.3	N-41-W	(28.65)	急	P1=69,P2=67 P3=68,P4=69	炉/NW/長楕円	－	G15-07	137,116A,145・147・148掘,P35	甕1,台付甕1,壺3,高杯2,坩1,器台1	出入口ﾋﾟｯﾄ
118住	40	7	平安　前	方	－×－×0.4	N-90-W	－	急	－	ｶﾏﾄﾞ/W/楕円	－	G14-59	**139,140**,112溝	甕1,壺2,杯11,皿2,火舎1	
119住	41	7	平安　前	方	3.2×3.5×0.4	N-35-W	6.55	直	P1=61,P2=73 P3=84,P4=67	ｶﾏﾄﾞ/NW/楕円	－	G14-84	**130溝,141**,147掘	**杯1**,甕4,杯2,台付甕1,高台付杯1,鉄鏃1	同地点建替焼失住居,壁溝全周
120A住	42,43,44	8	平安　前	方	4.4×4.7×0.6	N-23-W	16.06	直	P1=45,P2=70 P3=42,P4=34	ｶﾏﾄﾞ/N/楕円	－	G15-22	**120B,130溝**,144掘	**甕2,甑3,杯2**,甕11,杯11,皿1,高台付皿2,鉢1,椀1,支脚2,土製紡錘車1,砥石2,刀子1	壁溝部分周
120B住	28	8	古墳　中	方	4.6×（4.1）×0.5	N-40-W	(16.79)	直	P1=57,P2=56 P3=59,P4=53	－	円/SE壁下 50×45×37	G15-22	120A,130溝,144・145掘	**甑1**,甕2,ﾊﾞｯｸﾙ1	
121住	45,46,47	8	平安　前	方	－×－×0.5	N-35-W	－	直	P1=44,P2=49	ｶﾏﾄﾞ/NW/楕円	－	G15-85	**130溝**	**壺1,甕7,甑1,鉢1,杯1,皿1**,甕14,杯25,高台付杯1,高台付皿5,椀4,支脚1,土製紡錘車1	覆土上層土器溜まり
122住	48,49,50	9	平安	長方	3.5×3.7×0.5	N-36-W	6.87	直	P1=22	ｶﾏﾄﾞ/NW/楕円	楕円/ｶﾏﾄﾞ右袖脇 85×55×34	G15-72	**136**	**甕2,高台付皿1**,甕10,杯38,高台付杯4,羽口1,転用円盤2,粘土塊1,鉄釘4,軽石2	壁溝全周,出入口ﾋﾟｯﾄ,土器溜まり
123住	51	9	奈良　後	方	3.2×3.4×0.3	N-29-W	6.88	急	－	－	楕円/Eｺｰﾅｰ 80×60×14	F14-98	I24	壺1,杯1,つり針1	
124住	51,52	9	平安　前	長方	(3.5)×4.2×0.4	N-37-W	－	直	－	－	－	F14-88	**123**	甕10,甑1,杯31,皿1,軽石2,土製紡錘車1	
125住	53,54,55	10	平安　前	方	4.2×4.2×0.6	N-31-E	(13.76)	直	－	ｶﾏﾄﾞ/NE/楕円	－	H14-72	**140**	**甕10,甑2,杯6,高台付皿1**,甕12,杯18,高杯1,蓋1,支脚1,刀子1,帯金具1	
131住	29	10	古墳　中	方	3.8×3.7×0.3	N-29-W	(11.42)	直	－	炉/中央/楕円	楕円/SE壁下 80×（70）×39	F15-98	単独	甕4,小型杯1,鉢3	焼失住居
132住	16,17	11	古墳　前	方	6.8×6.4×0.5	N-49-W	32.62	直	P1=60,P2=81 P3=63,P4=67	炉/NW/楕円	－	F15-61	単独	甕4,台付甕2,壺3,甕4,杯2,高杯5,壺5,鉢1,器台2,ﾐﾆﾁｭｱ土器3,軽石1,砥石1,礫1	
133住	30	11	古墳　後	方	5.2×5.0×0.4	N-37-W	20.84	直	P1=57,P2=81 P3=78,P4=56	ｶﾏﾄﾞ/NW/円	－	F16-52	**単独**	**杯1**,甕3,壺1,杯4,鉢1	同地点建替,周溝全周
134住	56,57	11	平安　前	方	4.7×4.5×0.5	N-43-W	(14.49)	直	－	炉/中央/楕円（ｶﾏﾄﾞ/NW/）	楕円/Sｺｰﾅｰ 80×65×45	F15-25	単独	**甕1,杯1**,甕10,杯23,高台付杯3,高杯1,高台付皿3,蓋3,鉢2,手捏土器1,刀子2,軽石4	周溝部分周,出入口ﾋﾟｯﾄ
135住	58,59	12	平安　前	方	－×－×0.7	N-28-W	－	直	－	ｶﾏﾄﾞ/NW/楕円	－	G16-23	－	甕4,杯8,高台付皿3	
136住	18,19	12	古墳　前	方	6.0×5.8×0.5	N-42-W	(29.26)	直	P1=86,P2=70 P3=71,P4=90	炉/NW/楕円	隅丸方/SE壁下 100×100×24	G15-51	122,P9・10・11・12・21	甕3,甕6,甑1,高杯4,坩1,器台2,ミニチュア土器1,土製紡錘車1,軽石1,敲石1,剥片1	周溝全周
137住	60,61	12	平安　前	長方	3.6×4.3×0.5	N-37-E	(11.81)	急	－	ｶﾏﾄﾞ/NE/楕円	－	H14-90	117,148掘	甕8,杯19,高台付皿8,刀子1,鉄鏃1,鉄釘1,鉄製品2	
139住	62	13	奈良　後	方	4.0×3.9×0.5	N-33-W	(13.51)	急	－	ｶﾏﾄﾞ/NW/円	－	H14-51	140,118,112溝	**杯1,高杯1**,甕2,杯4,鉄鏃1	
140住	20,21	13	古墳　前初	長方	6.0×5.1×0.4	N-38-W	(26.79)	急	－	炉/中央/楕円	－	H14-60	118,125,139,112溝	甕5,壺2,甕13,台付甕1,小型鉢2,高杯5	
141住	63	－	奈良平安	方	3.0×3.1×0.2	N-61-W	(7.84)	急	－	ｶﾏﾄﾞ/W/楕円	－	G14-85	119,147掘,129坑	杯4,蓋1	
142住	64	13	平安　前	方	－×－×0.3	N-37-E	－	直	－	ｶﾏﾄﾞ/NE/楕円	楕円/Eｺｰﾅｰ 88×75×20	H13-63	**SB026**	甕1,甑1,杯10	
SB026住	22,23	13	弥生　後	隅丸長方	(7.8)×6.5×0.3	N-77-W	(41.57)	緩	P1=50,P2=58 P3=57,P4=44	炉/中央/楕円	隅丸方/SE壁下 90×90×29	H13-61	142	甕15,甕3,壺1,高杯1,器台2,土製紡錘車1,磨石2,石皿2	平成10年度半分調査済,出入り口ピット
SB028住	24,25,26	14	古墳　前初	方	7.4×6.9×0.4	N-39-W	(47.29)	急	P1=87,P2=77 P3=97,P4=46	炉/N/楕円	楕円/SE壁下 60×70×75	H13-16	単独	甕7,壺1,甕10,壺8,高杯4,鉢1,器台1,土製品1,石皿1,敲石2,管玉1,軽石4	平成10年度一部調査済

第７表　間見穴遺跡（H15）掘立柱建物跡観察表

遺構No.	挿図	図版	規格［梁×桁］	桁行長［m］	梁行長［m］	柱間寸法［m］	面積［㎡］	柱穴径［cm］	柱穴深［cm］	柱穴深平均［cm］	桁行方位［°］	位置［グリッド］	備考 重複［旧］［新］
104掘	65	4	2間×3間	4.5	3.9	1.5～2.1	17.55	75～95	1=75,2=58,3=80,4=49 5=53,7=62,8=73,9=61 10=40	61	N-43-E	H16-21	**101住,128掘**と重複
128掘	66	－	2間×2間	4.5	3.0	1.5～2.2	13.50	62～94	1=39,2=56,3=64,4=35 5=56,6=68,7=57,8=40	52	N-45-E	H16-11	**109住**,104掘と重複
144掘	67	－	3間×4間	7.8	4.5	1.5～2.1	35.10	79～115	1=55,2=43,3=51,4=50 9=59,10=60,11=63,12=58	55	N-38-E	G15-24	**120A住,120B住,130溝**,145掘と重複,杯3
145掘	68	－	(3間) × (3間)	(5.5)	(4.5)	1.5～2.0	(24.75)	65～130	3=52,9=32,10=37 11=32,12=33	37	N-51-W	G15-26	**116A住,117住,120B住,144掘**,116B坑と重複,杯2
146掘	69	－	2間× (2間)	(7.3)	3.7	1.5～3.0	(27.01)	65～115	1=55.2=41,3=49 5=42,6=23,8=32	40	N-41-E	G14-91	**130溝**と重複,**高台付皿1**
147掘	70	－	2間×4間	7.2	5.2	1.8～2.5	37.44	88～129	3=49,4=49,5=52 6=60,9=54	53	N-50-W	G14-75	**117住,119住,141住,126坑,127坑**,129坑,**130溝**,148掘と重複
148掘	71	－	2間×3間	5.2	4.3	1.5～2.3	22.36	89～118	1=52,2=51,3=52	52	N-55-W	G14-88	**117住,137住,140住,127坑,147掘**と重複,杯1,**高台付皿1**

第８表　間見穴遺跡（H15）土坑観察表

遺構No.	挿図	図版	時期	平面形	長径［m］	短径［m］	深さ［m］	壁［形状］	位置［グリッド］	出土（実測）遺物［須恵器］［土師器］	備考 重複［旧］［新］	備考 ［旧番号］
106B坑	72	13	平安　前	楕円	1.4	1.2	0.67	急	H15-69	－	**106A周**	
107坑	72	13	奈良平安	長円	1.6	1.4	0.65	直,急	H16-07	－	単独	16I006
108坑	72	13	平安　前	隅丸長方	2.0	1.2	0.20	直,緩	H15-67	杯3	単独	
110C坑	73	5	平安　後	隅丸長方	2.8	1.1	0.72	急	H15-22	－	**110A・B住**,110D坑	
110D坑	73	5	平安　末	不整方	1.1	1.0	0.93	直	H15-22	－	**110A・B住,110C坑**	
113坑	72	15	平安　後	不整	2.0	1.4	0.75	急	H15-64	－	**105道**	
114坑	72	15	平安　後	隅丸方	1.1	1.1	0.55	急	H15-97	－	**105道**	
115坑	73	15	平安	隅丸長方	(2.1)	1.3	1.05	急,緩	H16-30	－	P1	
116B坑	73	－	平安　後	不整	1.4	1.0	0.33	緩	G15-27	－	**116A住**	
126坑	74	15	平安　前	長方	3.4	1.4	0.54	直	G14-65	甕1,高台付皿1	147掘	
127坑	74	16	平安　前	隅丸長方	2.2	1.4	0.48	急	G14-87	甕1,杯1,皿1,高台付皿1	147・148掘	
129坑	73	16	奈良	不整方	2.1	1.3	0.48	緩	G14-96	－	141住147掘	
143坑	75	－	平安　後	楕円	1.4	1.2	0.66	直,緩	H15-52	－	**103A・B住,105道**	
149坑	75	－	平安	甕箪	1.2	0.8	0.22	緩	H15-43	－	単独	15I101
150坑	75	16	平安	楕円	1.2	0.9	0.18	緩	H15-54	杯1	単独	15I102
151坑	75	－	平安	楕円	1.2	1.0	0.16	緩	H15-55	－	単独	15I103
152坑	75	－	平安　前	長楕円	1.3	0.7	0.20	緩	H15-44	**杯1**	単独	15I104
153坑	75	－	平安	楕円	1.5	1.2	0.20	緩	H15-53	－	単独	15I106
154坑	75	16	平安	楕円	2.4	2.1	0.12	緩	G14-61	－	単独	14H024

第９表　間見穴遺跡（H15）ピット観察表

遺構No.［群］	挿図	図版	時期	平面形	長径［m］	短径［m］	深さ［m］	壁［形状］	位置［グリッド］	出土（実測）遺物［土器］［その他］	備考 重複［旧］［新］	備考 ［旧番号］
P1［Ⅰ］	78	16	中・近世	不整円	1.0	0.9	0.20	直	G16-39	小片数点	**115坑**	16I002
P2［Ⅰ］	78	－	中・近世	長円	1.5	1.0	0.75	急	H16-33	－	**101住**	－
P3［Ⅰ］	78	－	中・近世	楕円	(0.6)	0.5	－	急	H16-12	－	**101住,104掘**	－
P4［Ⅰ］	78	16	中・近世	不整	1.7	1.0	0.81	直,緩	H16-10	小片多数	**104,128掘**	16I004
P5［Ⅰ］	78	16	中・近世	円	(0.9)	0.9	0.46	緩	H16-11	小片多数	**104,128掘**	16I005
P6［Ⅰ］	78	－	中・近世	楕円	1.0	0.8	0.45	直	H16-02	小片数点	**104,128掘**	16I007
P7［Ⅰ］	78	－	中・近世	楕円	0.9	0.7	－	急,緩	G16-09	－	単独	16I014
P8［Ⅰ］	78	－	中・近世	不整	1.4	0.8	0.46	急,緩	H15-92	－	109住	－
P9［Ⅱ］	79	16	中・近世	円	1.2	1.1	0.50	直	G15-71	－	**136住**	15H031
P10［Ⅱ］	79	－	中・近世	楕円	1.4	1.0	－	急	G15-62	－	**136住**	15H030
P11［Ⅱ］	79	17	中・近世	隅丸方	1.2	1.1	－	緩	G15-52	－	**136住**	15H028
P12［Ⅱ］	79	－	中・近世	隅丸長方	1.6	1.1	0.45	直	G15-63	－	**136住**	15H014
P13［Ⅱ］	79	17	中・近世	隅丸長方	0.8	0.6	0.20	急	G15-74	－	単独	15H015
P14［Ⅱ］	79	17	古墳後以前	方	1.3	1.3	0.62	直	G15-75	小片数点	130溝	15H032
P15［Ⅱ］	79	17	古墳後以前	円	0.8	0.8	0.49	直	G15-65	－	130溝	15H008
P16［Ⅱ］	79	17	中・近世	楕円	0.9	0.8	0.65	直	G15-66	－	単独	15H006
P17［Ⅱ］	79	17	中・近世	楕円	1.1	0.9	0.58	急	G15-56	小片数点	単独	15H007
P18［Ⅱ］	79	17	中・近世	円	1.1	1.1	0.52	直	G15-66	**礫1**	単独	15H012
P19［Ⅲ］	80	17	中・近世	円	0.7	0.6	0.32	直	G15-40	－	単独	15H021
P20［Ⅲ］	80	17	中・近世	円	0.7	0.6	0.45	直	G15-41	小片数点	単独	15H016
P21［Ⅲ］	80	17	中・近世	隅丸方	1.2	1.2	0.49	直	G15-41	－	**136住**	15H023
P22［Ⅲ］	80	17	中・近世	不整方	1.1	1.1	0.51	緩	F15-49	小片数点	単独	15H022
P23［Ⅲ］	80	18	平安 後	隅丸長方	1.8	1.3	0.45	直,緩	G15-40	杯1,皿1	P24	15H020B
P24［Ⅲ］	80	18	中・近世	不整方	(1.3)	1.0	0.35	緩	G15-30	－	**P23**	15H020A
P25［Ⅲ］	80	18	不明	円	0.7	0.7	0.18	緩	F15-39	－	単独	15H023
P26［Ⅲ］	80	18	不明	方	0.7	0.7	－	急	F15-29	－	単独	15H019
P27［Ⅲ］	80	18	中・近世	不整方	1.6	1.5	0.99	直	F15-19	小片数点	単独	15H027
P28［Ⅲ］	80	18	平安 前	楕円	0.9	(0.7)	0.19	緩	G15-10	小片数点	146掘	15H017
P29［Ⅲ］	80	18	中・近世	不整楕円	1.4	1.1	0.70	直,緩	G15-11	小片数点	単独	15H025
P30［Ⅲ］	80	18	中・近世	楕円	1.0	0.8	0.70	急	G15-31	－	**144掘**	15H011③
P31［Ⅲ］	80	18	中・近世	円	0.8	0.8	0.63	直	G15-42	－	**144掘,P32**	15H011①
P32［Ⅲ］	80	18	中・近世	(円)	0.9	－	－	直	G15-33	－	**144掘**,P31	15H011②
P33［Ⅲ］	80	18	不明	楕円	1.2	1.0	－	直	G15-03	－	**130溝**	15H021
P34［Ⅳ］	81	－	中・近世	不整	0.7	0.5	0.51	直,急	G14-95	小片数点	単独	14H013
P35［Ⅳ］	81	－	中・近世	円	0.6	0.6	0.13	緩	G15-07	－	**117住**	
P36［Ⅳ］	81	－	中・近世	楕円	1.1	0.9	－	緩	G14-87	－	**117住,147・148掘,127坑**	
P37［Ⅳ］	81	19	中・近世	円	0.8	0.8	0.45	緩	G14-78	小片数点	単独	14H002
P38［Ⅳ］	81	19	中・近世	楕円	1.0	0.9	0.27	直,急	G14-68	小片数点	**148掘**	14H001
P39［Ⅳ］	81	19	中・近世	円	0.9	0.8	0.35	急	G14-67	小片数点	単独	14H005
P40［Ⅳ］	81	19	中・近世	円	0.6	0.6	0.31	緩	G14-56	－	単独	14H006

第10表　間見穴遺跡（H15）遺構内出土土器観察表

（　）は推定値

第図	挿図番号	遺構	器質	器種	遺存[%]	口径[cm]	底径[cm]	器高[cm]	最大径[cm]	色調[内/外]	胎土	調整[内/外]	備考　[出土状況]
32	1	101住	須恵	杯	100	13.5	7.1	4.4	13.8	灰色/灰色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,茨城産	若干の歪みあり,底外全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,茨城産　[下層,下層一括]
32	2	101住	土師	甕	4	(25.2)	－	－	－	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	口縁部片,在地型　[上層一括]
32	3	101住	土師	甕	5	(16.1)	－	－	－	にぶい赤褐色/暗褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	口縁部片,在地型　[上層]
32	4	101住	土師	甕	5	(20.0)	－	－	－	にぶい赤褐色/暗褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	口縁部片,在地型　[上層一括]
32	5	101住	土師	甕	15	－	7.8	－	－	橙色/橙色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ	底部穿孔あり,在地型　[壁溝上面]
32	6	101住	土師	甕	10	－	(9.6)	－	－	橙色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	底部片,在地型　[上・下層一括]
32	7	101住	土師	杯	4	－	6.9	－	－	橙色/にぶい赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ	底部片　[上層一括]
33	1	102A住	須恵	甕	5	－	－	－	－	灰色/灰色	長石	ﾅﾃﾞ/ﾀﾀｷ	胴部片,内面当具痕あり　[床直]
33	2	102A住	須恵	甕	5	－	－	－	－	褐灰色/褐灰色	長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾀﾀｷ	胴部片　[下層]
33	3	102A住	須恵	甕	5	－	－	－	－	褐灰色/褐灰色	長石,雲母,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾀﾀｷ	胴部片,内面当具痕あり　[ｶﾏﾄﾞ内一括]
33	4	102A住	須恵	小型壺	5	(12.2)	－	－	(13.0)	褐灰色/褐灰色	長石	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	口縁部片,内外面灰釉　[中層一括]
33	5	102A住	須恵	杯	60	12.4	7.0	3.7	12.6	灰黄褐色/灰黄褐色	長石,砂粒	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	外面墨書あり『力』,底外回転糸切り後外周手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,東海産　[下層]
33	6	102A住	須恵	杯	40	(12.3)	6.0	3.7	(12.5)	褐灰色/褐灰色	長石,砂粒	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後無調整,千葉産　[上層]
33	7	102A住	須恵	杯	40	(11.8)	(6.0)	3.8	(12.0)	黄灰色/黄灰色	長石,砂粒	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,千葉産　[下層]
33	8	102A住	須恵	杯	40	(11.2)	(7.4)	3.6	(11.6)	にぶい黄橙色/にぶい黄橙色	長石,雲母,砂粒	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底外全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,千葉産　[下層]
33	9	102A住	須恵	杯	5	－	－	－	－	黄灰色/黄灰色	長石	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	内面線刻あり,東海産　[床直]
34	10	102A住	土師	甕	40	(21.8)	－	－	(22.2)	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ	底部欠損,外面一部に煤付着,常総型　[下層,ｶﾏﾄﾞ内一括]
34	11	102A住	土師	甕	5	(28.8)	－	－	(29.0)	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,雲母,砂粒	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	口縁部片,外面一部に煤付着,常総型　[下層,下層一括]
34	12	102A住	土師	甕	5	(23.0)	－	－	(23.7)	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	口縁部片,外面一部に煤付着,常総型　[ｶﾏﾄﾞ内一括]
34	13	102A住	土師	甕	5	(19.6)	－	－	(20.0)	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部片,常総型　[下層一括]
34	14	102A住	土師	甕	5	(21.5)	－	－	(21.9)	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,砂粒	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	口縁部片,常総型　[上・中層一括]
34	15	102A住	土師	甕	15	－	5.8	－	－	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底部片,底外回転ﾍﾗ切り後外周手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ　[床直]
34	16	102A住	土師	杯	98	12.0	7.4	3.8	12.4	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,砂粒	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ	底外回転ﾍﾗ切り後大部分回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　[下層]
34	17	102A住	土師	杯	98	12.2	8.2	4.2	12.4	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	打ち欠き土器,底外回転糸切り後大部分回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　[床直]
34	18	102A住	土師	杯	95	11.1	7.8	3.7	11.4	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	小型甕の底部片を杯に加工し再利用,底外静止糸切り後手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ　[中層]
34	19	102A住	土師	杯	98	12.0	7.4	3.8	12.4	にぶい赤褐色/にぶい褐色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	打ち欠き土器,底外全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　[中層]
34	20	102A住	土師	杯	15	(12.0)	(7.6)	(4.2)	－	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底内劣化顕著　[上・中層一括]
34	21	102A住	土師	杯	20	(12.2)	(7.0)	－	－	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	内外面赤彩,底外手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ　[下層一括]
34	22	102A住	土師	杯	25	(14.4)	(10.0)	(2.9)	(14.7)	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	底外全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　[上層一括]
34	23	102A住	土師	高台付杯	10	(11.2)	－	－	(11.4)	黒色/にぶい赤褐色	長石,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	底部欠損,内面黒色処理　[上層一括]
34	24	102A住	土師	高台付杯	10	(11.6)	－	－	(11.9)	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,雲母,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底部欠損,外面煤付着　[上層一括]
34	25	102A住	土師	高台付杯	40	(15.8)	(8.0)	(7.6)	(16.0)	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,砂粒	ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/ﾅﾃﾞ	外面一部煤付着　[中層,上・中層一括]
34	26	102A住	土師	高台付杯	80	11.8	8.0	6.2	－	黒色/暗褐色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/ﾅﾃﾞ	内面黒色処理,底外回転糸切り後外周回転ヘラケズリ　[上・下層]
34	27	102A住	土師	壺	15	(16.0)	－	－	(16.4)	褐灰色/にぶい赤褐色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/ﾅﾃﾞ	摘部欠損,内面煤付着,28と同一個体　[ｶﾏﾄﾞ内一括]
34	28	102A住	土師	壺	10	(16.6)	－	－	(17.0)	にぶい橙色/にぶい赤褐色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/ﾅﾃﾞ	摘部欠損,27と同一個体　[上層一括]
34	1	102B住	須恵	杯	70	(12.4)	7.4	4.1	(12.8)	灰色/灰色	長石,雲母,砂粒	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	打ち欠き土器,底内線刻あり『　』,底外回転ﾍﾗ切り後手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,茨城産　[床直]
34	2	102B住	須恵	杯	97	12.6	7.4	4.4	12.9	褐灰色/褐灰色	長石,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	打ち欠き土器,底外全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,千葉産　[中層]
34	3	102B住	土師	小型甕	5	－	7.6	－	－	にぶい赤褐色/褐灰色	長石,砂粒	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ	底部片,底外無調整　[上層]
34	4	102B住	土師	杯	80	12.6	8.0	4.3	12.8	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	打ち欠き土器,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　[上層,下層一括]
12	1	103A住	土師	高杯	50	22.0	－	－	－	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾐｶﾞｷ/ﾐｶﾞｷ	脚部欠損　[床面]
12	2	103A住	土師	小型鉢	80	11.6	4.9	4.5	－	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗｹｽﾞﾘ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ	底外外周手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ　[床直]
12	3	103A住	土師	杯	30	(13.8)	－	－	－	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	流れ込み,口縁部片　[上層一括]
12	4	103A住	土師	杯	50	－	5.2	－	－	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	流れ込み,底部片,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　[上層一括]
11	1	106A周	土師	小型甕	90	10.2	4.2	14.9	14.9	黄褐色/黄褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	小型平底甕,外面黒斑あり,底外ﾍﾗﾅﾃﾞ　[中・下層,一括]
11	2	106A周	土師	小型甕	10	－	(6.0)	－	－	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	小型平底甕,底外ﾍﾗﾅﾃﾞ　[中層]
72	1	108坑	土師	杯	75	(14.9)	6.6	4.2	－	褐色・明褐色/暗褐色・にぶい褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,雲母,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	底外回転ﾍﾗ切り　[上層]
72	2	108坑	土師	杯	55	13.9	7.2	3.9	－	橙色/橙色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,雲母	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　[上層,一括]
72	3	108坑	土師	杯	98	13.1	6.8	3.8	－	明赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,雲母	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　[上層]
35	1	109住	須恵	甕	15	(34.2)	－	－	－	灰色/暗灰色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,雲母,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾀﾀｷ,ﾅﾃﾞ	外面煤付着　[床面,カマド内]
35	2	109住	土師	甕	10	(23.8)	－	－	－	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ,雲母	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	[床面,一括]
35	3	109住	土師	甕	10	(16.5)	－	－	－	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ,雲母	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	常総型　[床面,一括]
35	4	109住	土師	甕	10	(20.0)	－	－	－	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,雲母	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	常総型　[上層,一括]
35	5	109住	土師	小型甕	45	(14.3)	7.7	14.8	15.0	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	器面剥落顕著,底外静止糸切り後無調整,在地型　[床面,一括]
35	6	109住	土師	小型甕	15	(12.8)	－	－	－	にぶい褐色/赤褐色	石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,雲母	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	在地型　[ｶﾏﾄﾞ内,一括]
35	7	109住	土師	小型甕	10	(15.4)	－	－	－	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,石英,砂粒,雲母	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	在地型　[床面]

35	8	109住	土師	小型甕	15	(18.6)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,雲母	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	在地型　[床面,ｶﾏﾄﾞ内一括]
35	9	109住	土師	杯	100	15.8	6.4	5.1	−	黒色,にぶい黄橙色/にぶい橙色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾐｶﾞｷ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内面黒色処理,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床面]
35	10	109住	土師	杯	98	12.2	7.9	4.4	−	黒褐色,にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内面摩耗・剥離が激しく油煙付着,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床面]
35	11	109住	土師	杯	75	12.7	6.8	4.0	−	にぶい褐色/にぶい橙色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	打ち欠き土器,内面に油煙付着,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床面,ｶﾏﾄﾞ内]
35	12	109住	土師	杯	50	(11.9)	7.2	3.9	−	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[ｶﾏﾄﾞ内]
35	13	109住	土師	杯	50	(11.0)	(7.0)	4.3	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内面油煙付着,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床面]
13	1	110A住	弥生	甕	4	−	−	−	−	にぶい褐色/にぶい黄褐色	長石,雲母,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	折返し口縁部片,肥厚帯端部附加条縄文・下端部押圧波状文,頸部櫛描波状文・沈線文2・3と同一個体　[上層一括]
13	2	110A住	弥生	甕	3	−	−	−	−	にぶい黄褐色/にぶい褐色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	頸部片,櫛描波状文・沈線文,1・3と同一個体　[上層一括]
13	3	110A住	弥生	甕	2	−	−	−	−	にぶい黄褐色/暗灰黄色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	頸部片,櫛描波状文・沈線文,1・2と同一個体　[上層一括]
13	4	110A住	弥生	甕	5	−	−	−	−	にぶい黄橙色/にぶい褐色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/附加条縄文	胴部と頸部を一条の沈線で区画し頸部に沈線文　[床面]
13	5	110A住	弥生	甕	5	−	−	−	−	にぶい褐色/黄灰色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/附加条縄文	胴下端部片,附加条縄文　[床面]
13	6	110A住	弥生	甕	4	−	−	−	−	にぶい黄橙色/にぶい褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/附加条縄文	胴下端部片,附加条縄文,4と同一個体　[中層一括]
13	7	110A住	弥生	甕	3	−	−	−	−	にぶい褐色/にぶい黄褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/単節縄文	底部片,内外面摩耗顕著,単節縄文,底外網目状痕　[中層]
37	1	110B住	須恵	壺	25	−	−	−	(22.0)	灰褐色/灰白色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	胴部片,外面自然釉,東海産　[床面]
37	2	110B住	須恵	壺	5	−	(7.5)	−	−	紫灰色/褐灰色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	高台部片,外面灰釉,東海産　[下層一括]
37	3	110B住	土師	甕	7	(16.9)	−	−	−	にぶい褐色/灰褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	口縁部片,外面煤付着,在地型　[ｶﾏﾄﾞ外]
37	4	110B住	土師	甕	7	−	(11.4)	−	−	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	無調整/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ	底部片,外面煤付着,底外回転ﾍﾗ切り後全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,在地型　[上・中層]
37	5	110B住	土師	甑	8	(22.1)	−	−	−	にぶい褐色/にぶい赤褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,回転ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	口縁部片,外面煤付着,把手あり　[ｶﾏﾄﾞ外]
37	6	110B住	土師	杯	50	(13.0)	(6.5)	3.8	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[中層]
37	7	110B住	土師	杯	40	(13.4)	(7.6)	4.3	−	にぶい赤褐色/にぶい橙色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[中層,上層一括]
37	8	110B住	土師	杯	35	(12.2)	(6.5)	3.6	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転ﾍﾗ切り　[ｶﾏﾄﾞ外]
37	9	110B住	土師	杯	25	(13.2)	(6.9)	(4.0)	−	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部欠損　[中層]
37	10	110B住	土師	杯	30	(13.0)	(6.0)	(2.9)	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,雲母	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外全面回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[ｶﾏﾄﾞ外]
37	11	110B住	土師	杯	20	−	(6.6)	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	口縁部欠損　[中層]
37	12	110B住	土師	杯	20	−	(6.6)	−	−	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,雲母,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	口縁部欠損　[中層]
37	13	110B住	土師	杯	15	(12.8)	−	−	−	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部欠損,内外面若干摩耗　[上層]
37	14	110B住	土師	杯	15	(14.4)	−	−	−	灰褐色/褐灰色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部欠損,内外面煤付着　[中層]
37	15	110B住	土師	杯	15	(13.4)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部欠損,内外面若干摩耗　[ｶﾏﾄﾞ内]
37	16	110B住	土師	杯	15	(15.0)	−	−	−	灰褐色/灰褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部欠損,内外面若干摩耗　[上層]
37	17	110B住	土師	杯	10	(13.6)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部欠損　[遺構外上層]
37	18	110B住	土師	杯	5	(12.9)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部欠損,外面若干摩耗　[ｶﾏﾄﾞ外]
37	19	110B住	土師	杯	5	(14.0)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい褐色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部欠損,外面若干摩耗　[中層]
37	20	110B住	土師	杯	10	−	6.8	−	−	にぶい褐色/灰黄褐色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部片,破断面摩耗,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[中層]
37	21	110B住	土師	高台付杯	10	−	6.8	−	−	にぶい橙色/にぶい赤褐色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ	底部片,底外回転糸切り後無調整　[中層]
14	1	111住	弥生	甕	5	−	−	−	−	褐灰色/褐灰色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/附加条縄文	折返し口縁部片,肥厚帯端部押圧波状文,内外面煤付着,　[床面]
14	2	111住	弥生	甕	3	−	−	−	−	灰褐色/褐灰色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/附加条縄文	折返し口縁部片,肥厚帯端部押圧波状文,内外面煤付着,　[床面]
14	3	111住	弥生	甕	3	−	−	−	−	灰褐色/褐灰色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/単節縄文,櫛描文	折返し口縁部片,肥厚帯端部押圧波状文,内外面煤付着,　[上層]
14	4	111住	弥生	甕	3	−	−	−	−	褐灰色/褐灰色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/単節縄文,櫛描文	折返し口縁部片,肥厚帯端部単節縄文,内外面煤付着,　[下層]
14	5	111住	弥生	甕	5	−	−	−	−	褐灰色/暗灰色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ,附加条縄文	頸部片,外面煤付着　[中層]
14	6	111住	弥生	甕	5	−	−	−	−	褐灰色/暗灰色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ,羽状縄文	頸部片,外面煤付着,[中・下層]
14	7	111住	弥生	甕	3	−	−	−	−	褐灰色/黒褐色	長石,砂粒,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/櫛描波状文,附加条縄文	頸部片,内外面煤付着,8と同一個体　[床面]
14	8	111住	弥生	甕	2	−	−	−	−	褐灰色/褐灰色	長石,砂粒,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/櫛描波状文	頸部片,内外面煤付着,7と同一個体　[床面]
14	9	111住	弥生	小型甕	20	−	−	−	−	褐灰色/灰褐色	長石,砂粒,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/附加条縄文	胴部片,内外面煤付着　[中・下層]
14	10	111住	弥生	壺	15	−	(6.3)	−	−	灰褐色/黒褐色	長石,砂粒,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	底部片,外面煤付着　[一括]
38	1	116A住	須恵	高台付杯	30	−	8.8	−	−	黄灰色/黄灰色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	底部片,破断面の角をとるように磨痕あり,硯として転用,東海産　[床面]
38	2	116A住	土師	甕	50	(21.6)	8.8	−	−	にぶい褐色/明赤褐色	長石,石英,砂粒,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ	底部欠損,内面輪積み痕が残る,常総型　[床面,ｶﾏﾄﾞ内]
38	3	116A住	土師	小型甕	10	(10.0)	−	−	−	黒褐色/黒褐色	石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部片,内外面二次被熱を受け厚く煤付着,在地型　[床直,一括]
38	4	116A住	土師	小型甕	10	(13.0)	−	−	−	明赤褐色,黒褐色/明赤褐色	石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部片,内外面二次焼成を受け劣化,在地型　[床直]
38	5	116A住	土師	小型甕	10	(13.0)	−	−	−	にぶい赤褐色/明赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部片,二次被熱を受け外面劣化,在地型　[下層]
38	6	116A住	土師	小型甕	7	(12.6)	−	−	−	明赤褐色/にぶい褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部片,内面二次被熱を受け一部劣化,在地型　[一括]
38	7	116A住	土師	甕	5	(17.2)	−	−	−	にぶい褐色/黒褐色	石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部片,外面二次被熱を受け煤付着,在地型　[中層一括]
38	8	116A住	土師	小型甕	10	−	(6.9)	−	−	明赤褐色/明褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ	底部片,内外面劣化顕著,底外回転糸切り後外周手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,在地型　[ｶﾏﾄﾞ上部]
38	9	116A住	土師	甑	45	(22.8)	−	−	−	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底部欠損,内外面二次被熱を受け部分的に煤付着　[床面]

38	10	116A住	土師	杯	40	(12.7)	6.4	3.9	−	にぶい橙色,黒褐色/橙色,黒褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	内外面部分的に煤付着,底外回転糸切り後外周手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床直,一括]
38	11	116A住	土師	杯	75	12.6	5.4	4.4	−	橙色/橙色,にぶい赤褐色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後一ほぼ全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[上層]
38	12	116A住	土師	杯	95	13.5	6.4	4.6	−	暗赤褐色,黒褐色/暗赤褐色,黒褐色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内外面二次被熱を受け煤付着,底外回転糸切り　[床面]
38	13	116A住	土師	杯	97	13.6	3.7	3.4～4.4	−	黒褐色/黒褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	歪み大,内外面二次被熱を受け全面煤付着,底外全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床面]
39	14	116A住	土師	杯	80	14.6	6.4	4.6	−	黒褐色/黒褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内外面二次被熱を受け全面に薄く煤付着,底外回転糸切り後軽いﾅﾃﾞ　[床直]
39	15	116A住	土師	杯	90	13.9	6.2	4.4	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内外面二次被熱を受け煤付着,底外全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床直,中層一括]
39	16	116A住	土師	杯	80	19.4	7.4	5.5～6.5	−	黒色,にぶい橙色/黒褐色,にぶい橙色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾐｶﾞｷ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	歪み大,内面黒色処理,二次被熱を受け煤付着,底外回転糸切り後ほぼ全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床面]
39	17	116A住	土師	杯	97	17.6	8.8	5.7	−	にぶい褐色/にぶい橙色,黒褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内外面二次被熱を受け煤付着,底外全面ﾍﾗﾅﾃﾞ　[床面]
39	18	116A住	土師	杯	20	(15.9)	−	−	−	にぶい橙色,黒褐色/明赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾐｶﾞｷ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部欠損　[ｶﾏﾄﾞ内]
39	19	116A住	土師	杯	20	(14.0)	(6.1)	−	−	黒色/にぶい褐色,黒色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	内面黒色処理,二次被熱を受け煤付着,底外回転糸切り　[床直]
39	20	116A住	土師	高台付杯	60	(14.9)	8.2	6.7	−	黒色/にぶい橙色,黒褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾐｶﾞｷ/ﾅﾃﾞ	内面黒色処理,底外回転糸切り後高台部貼付け　[床面,一括]
15	1	117住	弥生	甕	5	−	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/沈線文,隆起線文	[中層一括]
15	2	117住	土師	壺	25	18.0	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/ﾊﾗﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾐｶﾞｷ	折返し口縁　[床直,下層一括]
15	3	117住	土師	壺	15	14.3	−	−	−	赤褐色/赤褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾐｶﾞｷ	折返し口縁　[床面,中層一括]
15	4	117住	土師	小型壺	65	−	−	−	15.0	暗赤褐色/暗赤褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	2点同一個体　[床直,下層一括]
15	5	117住	土師	坩	25	−	−	−	(11.2)	暗赤褐色/暗赤褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	[床直,下層一括]
15	6	117住	土師	高杯	40	20.2	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/ﾍﾗﾐｶﾞｷ	杯部片　[床直,下層一括]
15	7	117住	土師	高杯	40	−	−	−	(18.8)	赤褐色/赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾊｹ	脚部片　[床直,下層一括]
15	8	117住	土師	台付甕	30	−	12.7	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	脚部片　[床直,中層一括]
15	9	117住	土師	小型器台	50	−	10.0	−	−	赤褐色/にぶい赤褐色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾐｶﾞｷ/ﾍﾗﾐｶﾞｷ	脚部片　[ﾋﾟｯﾄ内中層壁際]
40	1	118住	土師	甕	15	(20.4)	−	−	−	明褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	内外面煤付着,常総型　[ｶﾏﾄﾞ内]
40	2	118住	土師	火舎	30	(18.4)	(7.0)	−	−	にぶい褐色/にぶい赤褐色	石英,砂粒,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	3本脚と思われる　[床面,一括]
40	3	118住	土師	小型壺	35	−	(5.9)	−	−	明褐色/橙色,黒褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	内外面ともに摩耗激しい,支脚代用　[ｶﾏﾄﾞ内,一括]
40	4	118住	土師	小型壺	55	−	6.0	−	−	にぶい黄橙色/にぶい褐色	長石,砂粒,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内面摩耗顕著,支脚代用　[ｶﾏﾄﾞ内一括]
40	5	118住	土師	杯	99	11.7	5.9	3.7	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	外面墨書あり,『ご』,底外回転ﾍﾗ切り後軽いナデ　[中層]
40	6	118住	土師	杯	100	11.7	6.7	3.7	−	にぶい褐色/にぶい褐色	雲母,石英,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[下層]
40	7	118住	土師	杯	95	14.0	6.5	3.9	−	橙色/橙色	長石,雲母,石英,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転ﾍﾗ切り　[中層一括]
40	8	118住	土師	杯	90	11.5	6.6	3.6～4.2	−	橙色/橙色	長石,雲母,石英,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[ｶﾏﾄﾞ内]
40	9	118住	土師	杯	55	12.5	5.5	4.6	−	橙色/橙色	長石,砂粒,石英,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転ﾍﾗ切り　[床面,ｶﾏﾄﾞ内]
40	10	118住	土師	杯	40	(12.4)	(7.8)	4.2	−	橙色/橙色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[上層一括]
40	11	118住	土師	杯	40	11.5	6.5	4.2	−	橙色/橙色	長石,雲母,石英,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転ﾍﾗ切り　[下層一括]
40	12	118住	土師	杯	25	(12.8)	−	−	−	橙色/橙色	長石,雲母,石英,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	[上層一括]
40	13	118住	土師	杯	30	−	7.0	−	−	にぶい赤褐色/にぶい橙色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部片,底外回転糸切り後外周手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[下層一括]
40	14	118住	土師	杯	5	−	(5.6)	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部片,底外全面回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[下層一括]
40	15	118住	土師	杯	5	−	−	−	−	橙色/にぶい赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	体部片,墨書あり,小片のため判読不能　[下層一括]
40	16	118住	土師	高台付皿	30	(15.3)	(7.7)	2.0	−	明赤褐色/明赤褐色	長石,雲母,石英,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	貼付け高台　[ｶﾏﾄﾞ内]
40	17	118住	土師	皿	5	(13.3)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	体部片　[下層一括]
41	1	119住	須恵	杯	50	(13.0)	(7.3)	4.5	−	灰色/灰色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,茨城産　[床面]
41	2	119住	土師	甕	5	(19.3)	−	−	−	にぶい赤褐色/暗赤褐色	長石,砂粒,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	常総型　[中層]
41	3	119住	土師	小型甕	15	(12.1)	−	−	−	赤褐色/にぶい赤褐色	長石,砂粒,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅｽﾞﾘ	内外面ともに摩耗顕著,在地型　[上層]
41	4	119住	土師	小型甕	5	(10.8)	−	−	−	灰黄褐色/黒褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅｽﾞﾘ	外面煤付着,在地型　[上層一括,ｶﾏﾄﾞ内一括]
41	5	119住	土師	小型甕	5	−	8.1	−	−	黄褐色/にぶい黄褐色	雲母,石英,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	底部中央に穿孔あり,在地型　[中層]
41	6	119住	土師	杯	15	(12.5)	(6.6)	3.7	−	暗褐色/褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[上層一括]
41	7	119住	土師	杯	3	−	−	(3.5)	−	明褐色/明褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	外面墨書あり,判読不能　[中層一括]
41	8	119住	土師	台付甕	20	−	−	残存高(6.6)	−	暗赤褐色/暗赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾊｹ	二次被熱により外面赤色及び煤付着　[中層]
41	9	119住	土師	高台付杯	5	−	(9.5)	−	−	橙色/橙色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,雲母	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	高台部片,外面赤彩　[中層一括]
42	1	120A住	須恵	甕	5	−	−	−	−	黄灰色/黄灰色	長石,石英,雲母	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾀﾀｷ,ﾅﾃﾞ	口縁部片,茨城産　[上・中層]
42	2	120A住	須恵	甕	5	−	−	−	−	褐灰色/褐灰色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾀﾀｷ,ﾅﾃﾞ	口縁部片,千葉産　[下層一括]
42	3	120A住	須恵	甑	45	(32.7)	(14.9)	29.2	(33.2)	黄灰色/黄灰色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾀﾀｷ,ﾅﾃﾞ	把手正四角錐,内面指頭痕あり,茨城産　[床面,床直,中・下層,]
42	4	120A住	須恵	甑	30	(31.3)	(13.4)	(27.4)	−	黄灰色/黄灰色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾀﾀｷ,ﾅﾃﾞ	口縁部片と底部片同一個体,内面指頭痕・輪積み痕あり,茨城産　[中・下層]
42	5	120A住	須恵	甑	8	−	−	−	−	黄灰色/黄灰色	長石,雲母,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾀﾀｷ,ﾍﾗﾅｽﾞﾘ	胴部片,内面指頭痕あり,茨城産　[中・下層,ｶﾏﾄﾞ内]
43	6	120A住	須恵	杯	15	(13.8)	(6.0)	(5.0)	−	灰色/灰色	長石,雲母,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底外手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,茨城産　[下層]
43	7	120A住	須恵	杯	15	(11.8)	(6.2)	(3.5)	−	灰色/灰色	長石,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	底外回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,茨城産　[中・下層]

43	8	120A住	土師	甕	40	(19.3)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ	底部欠損,長胴甕,常総型 [床面,床直]
43	9	120A住	土師	甕	30	(19.9)	−	−	−	灰褐色/にぶい褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底部欠損,武蔵型 [上・下層,床面]
43	10	120A住	土師	甕	5	(24.6)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,雲母,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	口縁部片,常総型 [上・下層,床面]
43	11	120A住	土師	甕	5	(24.4)	−	−	−	灰褐色/灰黄褐色	長石,石英,雲母,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	口縁部片,常総型 [上層]
43	12	120A住	土師	甕	5	(24.0)	−	−	−	灰褐色/にぶい褐色	長石,石英,雲母,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	口縁部片,常総型 [中層]
43	13	120A住	土師	甕	5	(21.3)	−	−	−	にぶい褐色/にぶい黄褐色	長石,石英,雲母,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	口縁部片,常総型 [上層]
43	14	120A住	土師	甕	5	(13.3)	−	−	−	黒褐色/灰赤褐色	長石,石英,雲母,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部片 [中層]
43	15	120A住	土師	甕	7	(15.7)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部片 [上・下層]
43	16	120A住	土師	甕	4	(15.8)	−	−	−	灰赤色/灰赤色	長石,石英,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	口縁部片 [下層,床直]
43	17	120A住	土師	甕	5	−	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	胴部片,外面摩耗顕著 [中・下層,床面]
43	18	120A住	土師	甕	10	−	(7.8)	−	−	灰褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ	底部片 [下層]
43	19	120A住	土師	杯	60	(14.3)	7.8	4.7	14.6	黒灰色/にぶい橙色	石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内面黒色処理,摩耗顕著,底外全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [中・下層]
43	20	120A住	土師	杯	15	(13.4)	(6.6)	(3.9)	(14.4)	黒灰色/にぶい橙色	石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内面黒色処理,底外回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [中層]
43	21	120A住	土師	杯	10	(18.1)	−	−	−	黒灰色/にぶい橙色	石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内面黒色処理,底部欠損 [下層,床面]
43	22	120A住	土師	杯	95	12.0	6.3	3.5	12.3	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,雲母	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ [下層,床直]
43	23	120A住	土師	杯	80	11.8	6.1	3.6	12.2	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,雲母	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [床面]
43	24	120A住	土師	杯	40	(12.7)	6.5	(4.3)	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,雲母	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [下層]
43	25	120A住	土師	杯	40	(11.8)	(6.4)	4.0	−	にぶい赤褐色/にぶい褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [中・下層]
43	26	120A住	土師	杯	30	−	(7.5)	−	−	にぶい赤褐色/にぶい橙色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内外面摩耗顕著,底外全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [床面]
43	27	120A住	土師	杯	30	−	(6.3)	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部片,底外線刻あり,回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [ｶﾏﾄﾞ内]
43	28	120A住	土師	杯	30	−	(6.6)	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部片,底外線刻あり,回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [上層]
43	29	120A住	土師	杯	5	−	−	−	−	暗灰色/にぶい橙色	石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾐｶﾞｷ/ﾅﾃﾞ	内面黒色処理,体部外面線刻あり [中層一括]
43	30	120A住	土師	皿	5	(27.0)	−	−	−	暗灰色/にぶい橙色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾐｶﾞｷ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内面黒色処理 [中・下層]
43	31	120A住	土師	高台付皿	70	(14.1)	(5.9)	3.4	14.4	にぶい赤褐色/にぶい褐色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内外面摩耗顕著 [床直]
43	32	120A住	土師	高台付皿	70	(14.3)	(5.8)	3.3	14.8	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,雲母,海綿骨針	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内面黒色処理 [中層]
44	33	120A住	土師	鉢	40	(27.6)	(15.0)	(11.5)	28.1	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ [下層,ｶﾏﾄﾞ内]
44	34	120A住	土師	椀	20	(19.6)	−	−	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,雲母,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底部欠損 [中・下層]
28	1	120B住	須恵	甑	5	−	(15.0)	−	−	暗褐灰色/暗灰色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾀﾀｷ,ﾅﾃﾞ	底外手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ [下層]
28	2	120B住	土師	小型甕	30	(12.0)	−	−	−	にぶい赤褐色/灰黄褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	底部欠損 [上・中層]
28	3	120B住	土師	甕	5	(16.8)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	口縁部片,摩耗顕著 [下層]
45	1	121住	須恵	壺	5	(24.0)	−	−	−	灰黄褐色/灰褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	口縁部片,東海産 [床面]
45	2	121住	須恵	甕	5	(16.3)	−	−	−	褐灰色/褐灰色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾀﾀｷ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	口縁部片,千葉産 [上層]
45	3	121住	須恵	甕	7	−	−	−	−	にぶい褐灰色/灰褐色	長石,ｽｺﾘｱ	ﾀﾀｷ/ﾀﾀｷ	胴部片,東海産 [ｶﾏﾄﾞ内]
45	4	121住	須恵	甕	5	−	−	−	−	にぶい褐灰色/灰褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾀﾀｷ/ﾀﾀｷ	胴部片,千葉産 [上・下層一括]
45	5	121住	須恵	甕	10	−	(14.0)	−	−	灰黄褐色/灰褐色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾀﾀｷ	茨城産 [下層,ｶﾏﾄﾞ内一括]
45	6	121住	須恵	甕	5	−	−	−	−	にぶい褐灰色/灰褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗｹｽﾞﾘ/ﾀﾀｷ,ﾍﾗｹｽﾞﾘ	胴部片,千葉産 [床面]
45	7	121住	須恵	甕	10	−	−	−	−	灰黄褐色/灰褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾀﾀｷ	底部片,千葉産 [中層]
45	8	121住	須恵	甕	5	−	−	−	−	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ	底部片,東海産 [上層]
45	9	121住	須恵	鉢	10	−	−	−	−	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ/ﾀﾀｷ	口縁部片,東海産 [下層]
45	10	121住	須恵	甑	3	−	−	−	−	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ	底部片,外面線刻あり『 ヵ』,東海産 [上層一括]
45	11	121住	須恵	杯	3	−	−	−	−	黄灰色/黄灰色	長石,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ	底部片,内面線刻あり『ｷ-ヵ』,東海産 [上層一括]
45	12	121住	須恵	皿	5	(16.3)	−	−	−	褐灰色/灰白色	長石,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹ	口縁部片,内面灰釉,東海産 [ｶﾏﾄﾞ内一括]
45	13	121住	土師	甕	25	(18.8)	(9.2)	(25.5)	(22.8)	灰褐色/灰褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹ	3点復元実測,常総型 [中層,中・下層一括]
46	14	121住	土師	甕	20	(19.8)	−	−	−	灰褐色/灰褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	外面劣化顕著,常総型 [中層]
46	15	121住	土師	甕	20	(18.2)	−	−	−	灰褐色/にぶい赤褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ	内外面摩耗顕著,在地型 [下層,ｶﾏﾄﾞ内-括]
46	16	121住	土師	甕	15	(18.6)	−	−	−	にぶい褐色/にぶい褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	常総型 [上・下層]
46	17	121住	土師	甕	5	(20.7)	−	−	−	にぶい褐色/にぶい褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	口縁部片,常総型 [床面,ｶﾏﾄﾞ内一括]
46	18	121住	土師	甕	5	(19.6)	−	−	−	灰褐色/灰褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾍﾗｹｽﾞﾘ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ	口縁部片,常総型 [上層]
46	19	121住	土師	甕	5	(16.0)	−	−	−	灰褐色/灰褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾍﾗｹｽﾞﾘ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	口縁部片,常総型 [中層]
46	20	121住	土師	甕	4	(17.2)	−	−	−	にぶい褐色/灰褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	口縁部片,常総型 [上層]
46	21	121住	土師	甕	4	(20.7)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾖｺﾅﾃﾞ	口縁部片,常総型 [中層]
46	22	121住	土師	甕	4	(15.5)	−	−	−	灰褐色/にぶい赤褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	口縁部片,常総型 [中層一括]
46	23	121住	土師	甕	4	(12.5)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	口縁部片,在地型 [上層]
46	24	121住	土師	甕	7	(13.0)	−	−	−	褐灰色/にぶい赤褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ	口縁部片,在地型 [床面,ｶﾏﾄﾞ内一括]
46	25	121住	土師	甕	50	−	6.2	−	− − −	灰褐色/灰褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ	底部から胴部にかけて遺存,在地型 [床面]
46	26	121住	土師	甕	25	−	(10.0)	−	−	にぶい橙色/にぶい橙色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ	底部片,底外全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,在地型 [下層]
46	27	121住	土師	杯	80	12.9	7.6	4.2	−	にぶい橙色/にぶい橙色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [上層]

46	28	121住	土師	杯	60	12.0	7.0	3.7	−	にぶい橙色/にぶい橙色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾍﾗｹｽﾞﾘ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後ほぼ全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [中・下層]
46	29	121住	土師	杯	85	12.5	6.5	4.2	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	外面墨書あり『か』,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [中層]
46	30	121住	土師	杯	80	11.8	5.8	3.7	−	にぶい橙色/にぶい橙色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [中・下層]
46	31	121住	土師	杯	90	11.6	5.9	3.6	−	にぶい橙色/にぶい橙色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [中層]
46	32	121住	土師	杯	50	(12.9)	(7.5)	4.0	−	にぶい褐色/にぶい赤褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [上・中層一括]
46	33	121住	土師	杯	80	(12.0)	(7.3)	3.9	−	にぶい橙色/にぶい橙色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [中層]
46	34	121住	土師	杯	60	(12.0)	(7.2)	3.8	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後ほぼ全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [中・下層一括]
46	35	121住	土師	杯	40	(12.3)	(5.6)	3.8	−	にぶい橙色/にぶい橙色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [上層]
46	36	121住	土師	杯	50	(12.3)	(6.2)	3.8	−	にぶい橙色/にぶい橙色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後ほぼ全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [上・中層]
46	37	121住	土師	杯	50	(11.4)	6.9	3.9	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [ｶﾏﾄﾞ内]
46	38	121住	土師	杯	40	−	6.9	−	−	にぶい橙色/にぶい橙色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [床面,下層]
46	39	121住	土師	杯	30	(12.7)	(7.0)	3.8	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	[上・下層一括]
46	40	121住	土師	杯	25	−	6.9	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [上層]
46	41	121住	土師	杯	25	−	5.4	−	−	にぶい褐色/にぶい橙色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [上層]
46	42	121住	土師	杯	30	−	7.0	−	−	にぶい橙色/にぶい橙色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [上層一括]
46	43	121住	土師	杯	25	−	(6.7)	−	−	灰褐色/灰褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [中層]
46	44	121住	土師	杯	35	−	6.5	−	−	にぶい橙色/にぶい橙色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [下層]
46	45	121住	土師	杯	25	−	(9.6)	−	−	灰褐色/にぶい橙色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後ほぼ全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [中層]
46	46	121住	土師	杯	20	−	(9.0)	−	−	にぶい赤褐色/灰褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外ほぼ全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [中層]
46	47	121住	土師	杯	10	−	(7.2)	−	−	にぶい赤褐色/にぶい褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [下層]
46	48	121住	土師	杯	10	(12.0)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部欠損,灯明杯 [中層]
47	49	121住	土師	杯	3	−	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	外面墨書あり,判読不能 [中層一括]
47	50	121住	土師	杯	3	−	−	−	−	明赤褐色/にぶい赤褐色	雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	外面墨書あり,判読不能 [中層一括]
47	51	121住	土師	杯	4	−	−	−	−	明赤褐色/にぶい赤褐色	雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	外面墨書あり,判読不能 [中層一括]
47	52	121住	土師	高台付杯	20	(14.6)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部欠損 [ｶﾏﾄﾞ内一括]
47	53	121住	土師	高台付Ⅲ	95	13.3	6.9	3.3	−	にぶい褐色/にぶい褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	外面墨書あり『人』,底外回転糸切り後作出し高台 [床面]
47	54	121住	土師	高台付Ⅲ	80	(12.5)	6.5	3.0	−	にぶい橙色/にぶい橙色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	外面墨書あり『仟』,底外回転糸切り後作出し高台 [床面]
47	55	121住	土師	高台付Ⅲ	70	(13.1)	6.3	2.4	−	にぶい赤褐色/にぶい橙色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後作出し高台 [中・下層]
47	56	121住	土師	高台付Ⅲ	20	(13.4)	(7.9)	2.8	−	にぶい橙色/にぶい橙色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後作出し高台 [上層]
47	57	121住	土師	高台付Ⅲ	30	−	7.5	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後作出し高台 [下層]
47	58	121住	土師	椀	40	(18.1)	(8.7)	(6.3)	−	にぶい橙色/にぶい橙色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転ﾍﾗ切り後全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [中層]
47	59	121住	土師	椀	20	(19.4)	(11.0)	(6.8)	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	[床面]
47	60	121住	土師	椀	5	−	(10.2)	−	−	にぶい褐色/にぶい褐色	雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転ﾍﾗ切り後全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [中層]
47	61	121住	土師	椀	5	−	(10.0)	−	−	灰褐色/褐灰色	雲母,ｽｺﾘｱ,砂粒,海綿骨針	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	底外回転ﾍﾗ切り後全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ [床面]
48	1	122住	須恵	甕	5	−	−	−	−	青灰色/暗赤灰色	雲母,石英,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾀﾀｷ	大甕胴部片,茨城産 [中層]
48	2	122住	須恵	甕	5	−	−	−	−	赤灰色/赤灰色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾀﾀｷ	胴部片,東海産 [中層]
48	3	122住	須恵	高台付Ⅲ	15	−	7.2	−	−	赤灰色/赤灰色	長石,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	底部片,内面底部を除いて自然釉,東海産 [上層]
48	4	122住	土師	甕	75	18.9	−	−	−	灰褐色/灰褐色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	底部欠損,外面煤付着,常総型 [中・下層,一括]
48	5	122住	土師	甕	20	(20.0)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい褐色	石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底部欠損,在地型 [上層,一括]
48	6	122住	土師	甕	15	19.1	−	−	−	灰褐色/灰褐色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	口縁部片,内外面煤付着,常総型 [中・下層]
48	7	122住	土師	甕	5	(18.4)	−	−	−	灰褐色/灰褐色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部片,内外面煤付着,常総型 [中層,一括]
48	8	122住	土師	甕	40	−	10.7	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	砂粒,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗｹｽﾞﾘ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ	底部片,底外静止糸切り,支脚代用,在地型 [ｶﾏﾄﾞ内]
48	9	122住	土師	甕	35	−	(9.6)	−	−	灰褐色/灰褐色	砂粒,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ	底部片,内外面一部剥離,底外回転糸切り後外周手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,在地型 [中・下層]
49	10	122住	土師	小型甕	25	−	(8.4)	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	砂粒,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ	底部片,底外全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,在地型 [下層,中層一括]
49	11	122住	土師	甕	5	−	(12.8)	−	−	にぶい橙色/褐灰色	砂粒,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ	底部片,底外回転糸切り後全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,在地型 [下層]
49	12	122住	土師	小型甕	10	−	(8.4)	−	−	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ	底部片,底外回転糸切り,在地型 [下層,下層一括]
49	13	122住	土師	甕	10	−	(11.6)	−	−	にぶい赤褐色/にぶい褐色	長石,雲母,砂粒	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底部片,底外回転糸切り後手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,在地型 [上層,上・中層一括]
49	14	122住	土師	杯	100	12.7	5.5	4.4	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	歪み顕著,底外回転糸切り後全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [下層]
49	15	122住	土師	杯	100	12.8	5.8	3.9	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	歪み顕著,調整雑で部分的に粘土粒あり,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [下層]
49	16	122住	土師	杯	100	12.9	6.8	3.8	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	歪み摩耗ともに顕著,底外回転糸切り後全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [中層]
49	17	122住	土師	杯	100	13.2	6.6	3.8	−	にぶい褐色/にぶい橙色	雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	歪み摩耗ともに顕著,底外回転糸切り後全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [下層]
49	18	122住	土師	杯	100	13.5	6.6	4.0	−	灰褐色/灰褐色	雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	歪み顕著,内外面ともに煤付着,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [下層]
49	19	122住	土師	杯	95	14.5～15.4	7.6	4.1～4.7	−	にぶい褐色/にぶい橙色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	歪み顕著,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [下層]

49	20	122住	土師	杯	95	13.0～13.9	6.0	4.0～4.4	－	にぶい赤褐色/にぶい褐色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	歪み顕著,外面煤付着,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[中層]
49	21	122住	土師	杯	60	(13.0)	6.6	3.6	－	灰褐色/褐灰色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	歪みやや顕著,内外面煤付着,底外回転ﾍﾗ切り　[中層]
49	22	122住	土師	杯	85	16.2	7.5	4.5	－	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内外面一部煤付着,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[中層]
49	23	122住	土師	杯	70	12.2	6.5	4.2	－	にぶい橙色/にぶい橙色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転ﾍﾗ切り　[中層,上層一括]
49	24	122住	土師	杯	85	12.3	6.0	3.7	－	にぶい橙色/にぶい橙色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後部分的に回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[中層,中層一括]
49	25	122住	土師	杯	65	(14.0)	7.0	4.0	－	灰褐色/灰褐色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内外面煤付着,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[中層,中層一括]
49	26	122住	土師	杯	80	15.6	7.0	5.2	－	にぶい橙色/にぶい橙色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り　[中層,中層一括]
49	27	122住	土師	杯	70	16.2	7.5	5.1	－	にぶい赤褐色/にぶい橙色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[中層,中層一括]
49	28	122住	土師	杯	25	(13.2)	(5.7)	3.8	－	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[上層]
49	29	122住	土師	杯	30	(14.3)	7.4	4.0	－	灰褐色/にぶい褐色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転ﾍﾗ切り,底外線刻あり　[下層,下層一括]
49	30	122住	土師	杯	30	(14.0)	8.1	4.0	－	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転ﾍﾗ切り　[中層,下層一括]
49	31	122住	土師	杯	30	(11.4)	(4.2)	4.2	－	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外静止ﾍﾗ切り　[中・下層,上・下層一括]
49	32	122住	土師	杯	60	(13.0)	6.0	4.7	－	にぶい褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[下層]
49	33	122住	土師	杯	55	(15.8)	7.0	5.0	－	にぶい橙色/にぶい橙色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後ほぼ全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[中層,下層…括]
49	34	122住	土師	杯	35	(15.8)	(7.8)	5.2	－	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転ﾍﾗ切り　[下層]
49	35	122住	土師	杯	55	14.6	(7.0)	4.5	－	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	歪みやや顕著,底外回転糸切り後外周手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[上・中層]
49	36	122住	土師	杯	30	(14.6)	(7.2)	5.6	－	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内面摩耗やや顕著,底外回転糸切り[中層,下層一括]
49	37	122住	土師	杯	25	(15.2)	－	－	－	にぶい橙色/にぶい橙色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部欠損,内外面摩耗やや顕著　[中層,一括]
49	38	122住	土師	杯	30	(15.0)	－	－	－	暗灰色/にぶい褐色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	黒色処理,外面摩耗やや顕著　[下層,下層一括]
49	39	122住	土師	杯	35	(14.0)	(6.8)	4.0	－	暗灰色/にぶい褐色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	黒色処理,外面部分的に煤付着　[下層,下層一括]
49	40	122住	土師	杯	20	(13.8)	－	－	－	暗灰色/灰褐色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	黒色処理,底部欠損,黒色処理外面中位まで及ぶ　[中層,中層…括]
49	41	122住	土師	杯	10	(13.4)	－	－	－	暗灰色/にぶい褐色	石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	黒色処理,底部欠損,黒色処理外面口唇部まで及ぶ　[中層]
49	42	122住	土師	杯	10	－	(4.0)	－	－	暗灰色/にぶい橙色	石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	黒色処理,底部片,外面やや摩耗顕著　[一括]
49	43	122住	土師	杯	20	－	(5.8)	－	－	暗灰色/灰褐色	石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	黒色処理,口縁部欠損,底外回転糸切り後外周手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[中層,一括]
49	44	122住	土師	杯	10	(11.8)	－	－	－	暗灰色/にぶい黄橙色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	黒色処理,底部欠損,外面摩耗顕著[上層,上層一括]
49	45	122住	土師	杯	20	－	7.3	－	－	にぶい橙色/にぶい橙色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部片,内外面やや摩耗顕著,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,支脚代用　[ｶﾏﾄﾞ内]
50	46	122住	土師	杯	10	(12.8)	(6.2)	(3.7)	－	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	内外面摩耗顕著,底外手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ[上層]
50	47	122住	土師	杯	30	－	(6.2)	－	－	にぶい赤褐色/にぶい褐色	長石,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底部片,内外面摩耗激しい,底外回転糸切り後全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[上層]
50	48	122住	土師	杯	15	－	(7.0)	－	－	にぶい褐色/にぶい黄橙色	長石,雲母,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底部片,内外面摩耗激しい,底外回転糸切り後全面手持ちヘラケズリ　[中層]
50	49	122住	土師	杯	35	－	(6.0)	－	－	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底部片,底外全面回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[中層]
50	50	122住	土師	杯	20	－	(7.4)	－	－	にぶい橙色/にぶい赤褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底部片,底内線刻あり,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[上層,中層一括]
50	51	122住	土師	杯	5	－	(8.8)	－	－	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底部片　[下層一括]
50	52	122住	土師	蓋	5	－	(16.2)	－	(16.6)	にぶい黄橙色/にぶい黄橙色	長石,雲母,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	外面線刻あり　[溝一括]
50	53	122住	土師	高台付杯	55	(17.8)	9.6	6.5	－	にぶい橙色/にぶい橙色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後高台を貼付外縁部に回転ナデ　[上・下層,一括]
50	54	122住	土師	高台付杯	30	(15.0)	－	－	－	灰褐色/にぶい褐色	雲母,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	外面摩耗顕著,内面煤付着　[中・下層]
50	55	122住	土師	高台付杯	30	(15.0)	－	－	－	にぶい橙色/にぶい橙色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部欠損,内外面摩耗やや顕著　[中・下層]
50	56	122住	土師	高台付杯	25	－	(7.8)	－	－	灰色/褐色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内面黒色処理,高台部片,底外回転ﾍﾗ切り後高台貼付　[下層]
51	1	122住	土師	壷	5	(15.0)	－	－	－	灰黄褐色/にぶい褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部片　[床面]
51	2	122住	土師	杯	3	－	－	－	－	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	体部片,外面墨書あり,判読不能　[上層一括]
51	1	123住	土師	甕	35	(22.0)	－	－	－	灰褐色/灰褐色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	底部欠損,内外面ともに劣化顕著,123住一括出土片と遺構間接合,常総型[床面,中層一括]
51	2	123住	土師	甕	25	(22.8)	－	－	－	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部から胴部上端片,内外面ともに若干摩耗,在地型　[床面]
51	3	124住	土師	甕	15	(18.8)	－	－	－	褐灰色/灰褐色	石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ	口縁部から胴部上端片,内外面ともに煤付着,在地型　[床面,一括]
51	4	124住	土師	甕	30	(13.8)	－	－	－	灰赤色/灰褐色	石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ	口縁部から胴部上端片,内外面ともに煤付着,在地型　[中層,中・下層一括]
51	5	124住	土師	甕	40	14.6	－	－	－	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ	口縁部から胴部上端片,6と同一個体,123住一括出土片と遺構間接合,在地型　[下層,上・中層一括]
51	6	124住	土師	甕	10	－	(7.4)	－	－	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ	底部片,5と同一個体,在地型　[床面,下層一括]
51	7	124住	土師	小型甕	30	－	6.4	－	－	にぶい赤褐色/灰赤色	石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ	底部片,底外全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,在地型[床面]
51	8	124住	土師	小型甕	5	(13.2)	－	－	－	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	石英,雲母,砂粒,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ	口縁部片,在地型　[中層]
51	9	124住	土師	甕	10	－	14.3	－	－	灰褐色/褐灰色	長石,石英,雲母,砂粒	ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ	底部片,在地型　[床面]
51	10	124住	土師	甕	5	－	(9.4)	－	－	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ	底部片,底外全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,在地型[一括]
51	11	124住	土師	甑	3	－	－	－	－	にぶい赤褐色/灰褐色	雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	無調整/－	底部片,底外回転糸切り後外周手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[中層]
51	12	124住	土師	杯	80	17.3	8.9	4.4～5.3	－	にぶい赤褐色/にぶい褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	内外面摩耗顕著,底外線刻あり,回転糸切り後全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床面,下層]

51	13	124住	土師	杯	80	16.1	7.4	5.5	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/ﾅﾃﾞ	内外面劣化顕著,底外回転糸切り後全面回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床面]
51	14	124住	土師	杯	90	17.4～18.3	8.4	4.7	−	灰褐色/にぶい赤褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/ﾅﾃﾞ	内面黒色処理,外面摩耗顕著,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床面,床直]
51	15	124住	土師	杯	70	16.4	5.0	8.0	−	灰褐色/にぶい赤褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	内外面やや摩耗,底外回転糸切り後全面回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床面]
52	16	124住	土師	杯	60	16.8	8.4	4.8	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/ﾅﾃﾞ	底外全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[中層]
52	17	124住	土師	杯	95	12.7～13.8	6.6	3.5～4.1	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	摩耗及び歪み顕著,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床面]
52	18	124住	土師	杯	85	11.9～12.8	5.6	4.2	−	灰褐色/褐灰色	石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	器面やや劣化,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床直,下層]
52	19	124住	土師	杯	60	15.0	7.8	4.3	−	にぶい褐色/にぶい褐色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	底内斑状剥離多数,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床直,下層]
52	20	124住	土師	杯	80	13.6	5.2	3.7	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	内外面摩耗顕著,底外全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[中・下層]
52	21	124住	土師	杯	75	14.5	7.0	4.3	−	にぶい赤褐色/にぶい褐色	石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/ﾅﾃﾞ	器面やや劣化,底外回転糸切り後外周手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床面]
52	22	124住	土師	杯	55	14.1	7.2	4.1	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/ﾅﾃﾞ	器面やや摩耗,底外回転糸切り後全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床直]
52	23	124住	土師	杯	40	(17.4)	(8.2)	(4.9)	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	内面一部剥離,底外回転糸切り後全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床面,上層]
52	24	124住	土師	杯	40	(14.0)	7.4	(4.3)	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	器面やや摩耗,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[中層一括]
52	25	124住	土師	杯	85	12.7	5.6	3.6	−	にぶい赤褐色/にぶい褐色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	外面一部剥離,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床直]
52	26	124住	土師	杯	40	(13.8)	(6.0)	(3.5)	−	にぶい褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	内面やや摩耗,底外全面回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[下層]
52	27	124住	土師	杯	40	(13.6)	(6.4)	(4.0)	−	灰褐色/灰褐色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	歪みやや大,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[下層]
52	28	124住	土師	杯	40	(13.4)	(6.4)	(3.9)	−	にぶい褐色/にぶい橙色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	器面やや摩耗,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[中層]
52	29	124住	土師	杯	55	(12.8)	6.0	3.9	−	にぶい黄橙色/にぶい橙色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	器面摩耗激しい,打ち欠き土器,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床直]
52	30	124住	土師	杯	55	(14.0)	(7.0)	(3.2)	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	内面摩耗顕著,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床面]
52	31	124住	土師	杯	35	(13.2)	(6.6)	(4.1)	−	にぶい褐色/にぶい橙色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後全面回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床直]
52	32	124住	土師	杯	20	(13.0)	(6.4)	(3.5)	−	にぶい赤褐色,灰褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後全面回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[下層]
52	33	124住	土師	杯	25	(13.8)	(6.2)	(4.2)	−	にぶい橙色/にぶい橙色	石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[中層]
52	34	124住	土師	杯	100	16.4～17.6	8.0	4.9～6.2	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/ﾅﾃﾞ	器面激しい劣化,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床直]
52	35	124住	土師	杯	60	(12.9)	5.8	(4.2)	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	内面若干摩耗,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床直,下層]
52	36	124住	土師	杯	35	(13.4)	5.8	(4.2)	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	器面激しい劣化　[床面,中層一括]
52	37	124住	土師	杯	30	(14.0)	(7.2)	(4.1)	−	にぶい褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾐｶﾞｷ/ﾅﾃﾞ	底外全面回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[中・下層一括]
52	38	124住	土師	杯	35	(14.0)	(6.2)	(3.7)	−	にぶい褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾐｶﾞｷ/ﾅﾃﾞ	摩耗顕著,底外全面回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床直,中・下層一括]
52	39	124住	土師	杯	20	(15.3)	(7.2)	(3.4)	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾐｶﾞｷ/ﾅﾃﾞ	摩耗顕著,底外全面回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[上・下層一括]
52	40	124住	土師	杯	25	−	7.0	−	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	摩耗顕著,底外全面回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[下層一括]
52	41	124住	土師	杯	98	13.5	6.2	3.7	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	内外面赤彩,摩耗やや顕著,底外全面回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[上・中層一括,床面]
52	42	124住	土師	杯	100	14.0	6.8	4.2	−	にぶい橙色/明赤褐色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	外面赤彩,底外回転糸切り後全面回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,外面摩耗顕著　[床直]
52	43	124住	須恵	高台付Ⅲ	30	(14.0)	(7.6)	(1.7)	−	にぶい赤褐色/にぶい橙色	石英,雲母,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	作出し高台,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床直,上層一括]
53	1	125住	須恵	甕	5	(22.0)	−	−	−	灰黄褐色/灰黄褐色	石英,雲母,砂粒,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	口縁部片,千葉産　[上・中層一括]
53	2	125住	須恵	甕	5	(23.3)	−	−	−	にぶい黄橙色/灰色	石英,雲母,砂粒,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	口縁部片,千葉産　[中層,下層一括]
53	3	125住	須恵	甕	10	−	−	−	−	にぶい褐色/明赤褐色	石英,雲母,砂粒,海綿骨針	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾀﾀｷ	胴部片,内面指頭痕多数あり,千葉産　[上層,上層一括]
53	4	125住	須恵	甕	10	−	−	−	−	にぶい褐色/明赤褐色	石英,雲母,砂粒,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾀﾀｷ	胴部片,内面指頭痕あり,千葉産　[上・中層]
53	5	125住	須恵	甕	10	−	−	−	−	灰黄色/黄灰色,灰黄色	雲母,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾀﾀｷ	胴部片,内外面劣化顕著,千葉産　[上層]
53	6	125住	須恵	甕	5	−	−	−	−	黄灰色/黄灰色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾀﾀｷ	胴部片,東海産　[中層]
53	7	125住	須恵	甕	3	−	−	−	−	黄灰色/灰黄色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾀﾀｷ	胴部片,破断面劣化顕著,茨城産　[上層一括]
53	8	125住	須恵	甕	3	−	−	−	−	灰黄色/灰黄色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾀﾀｷ	胴部片,破断面やや劣化,茨城産　[上・下層一括]
53	9	125住	須恵	甕	3	−	−	−	−	灰色/灰色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾀﾀｷ	胴部片,東海産　[一括]
53	10	125住	須恵	甕	3	−	−	−	−	灰黄褐色/褐灰色	長石,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾀﾀｷ	胴部片,内面当具痕あり,東海産　[一括]
53	11	125住	須恵	甑	1	−	−	−	−	褐灰色/にぶい赤褐色	長石,石英	無調整/ﾍﾗﾅﾃﾞ	底部片,千葉産　[ｶﾏﾄﾞ内一括]
53	12	125住	須恵	甑	1	−	−	−	−	褐灰色/にぶい赤褐色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	無調整/ﾍﾗﾅﾃﾞ	底部片,底外回転糸切り,千葉産　[ｶﾏﾄﾞ内一括]
54	13	125住	須恵	杯	30	(12.4)	(6.8)	4.5	−	灰色/灰色	長石,雲母,砂粒	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転ﾍﾗ切り後全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,茨城産　[上層一括]
54	14	125住	須恵	杯	30	(11.9)	(6.2)	4.4	−	灰色/灰色	長石,雲母,砂粒	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ	底外回転ﾍﾗ切り後全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,茨城産　[上・中層一括]
54	15	125住	須恵	杯	15	(13.0)	(7.2)	−	−	灰色/灰色	長石,雲母,砂粒	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ	底外全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,茨城産　[上層一括]
54	16	125住	須恵	杯	10	(14.2)	−	−	−	灰色/灰色	長石,雲母,砂粒	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部欠損,茨城産　[上層一括]
54	17	125住	須恵	杯	10	(14.4)	−	−	−	灰黄褐色/暗灰黄色	長石,石英,砂粒	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ	底部欠損,茨城産　[上・中層一括]
54	18	125住	須恵	杯	10	(13.5)	−	−	−	灰色/灰色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部欠損,茨城産　[上層一括]
54	19	125住	土師	高台付Ⅲ	30	(14.7)	(7.2)	2.5	−	灰色/灰黄色	長石,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	口縁部ほぼ欠損,作出し高台,内面自然釉,東海産　[一括]
54	20	125住	土師	甕	10	(25.5)	−	−	−	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾀﾀｷ	口縁部片　[上・中層]
54	21	125住	土師	甕	5	(23.2)	−	−	−	暗赤褐色/にぶい赤褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ、ﾅﾃﾞ	口縁部片,器面劣化　[ｶﾏﾄﾞ内一括]
54	22	125住	土師	甕	5	(19.8)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ、ﾅﾃﾞ	口縁部片,外面一部煤付着　[上・中層一括]
54	23	125住	土師	甕	10	(15.0)	−	−	−	橙色/明赤褐色	長石,石英,砂粒,海綿骨針	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ、ﾅﾃﾞ	口縁部片,器面劣化　[ｶﾏﾄﾞ内一括]

54	24	125住	土師	甕	4	(17.8)	−	−	−	にぶい赤褐色/暗赤褐色	長石,石英,砂粒,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	口縁部片,器面劣化　[ｶﾏﾄﾞ内一括]
54	25	125住	土師	甕	15	(11.0)	−	−	−	黒色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部片,内外面煤付着　[上層一括]
54	26	125住	土師	甕	10	−	(5.6)	−	−	にぶい黄橙色/灰褐色,黒褐色	雲母,砂粒,小石,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾐｶﾞｷ	底部片,内面摩耗激しい,外面煤付着[下層・床直一括]
54	27	125住	土師	甕	10	−	(7.4)	−	−	暗赤褐色/赤褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ	底部片,内外面二次焼成あり　[ｶﾏﾄﾞ内一括]
54	28	125住	土師	甕	5	−	(6.6)	−	−	にぶい褐色/黒褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部片,外面煤付着　[上層…一括]
54	29	125住	土師	甕	15	−	(8.8)	−	−	明赤褐色/赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ	底部片,底外全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[中層]
54	30	125住	土師	甕	15	−	(7.7)	−	−	にぶい褐色/褐色	雲母,砂粒,小石,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾐｶﾞｷ	底部片,底外木葉痕あり　[上層]
54	31	125住	土師	甕	5	−	(6.4)	−		にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ	底部片　[上層一括]
54	32	125住	土師	杯	95	12.0	6.0	4.0	−	橙色/にぶい橙色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ[中層]
54	33	125住	土師	杯	50	(13.0)	7.4	3.8	−	にぶい褐色/にぶい橙色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ[床面]
54	34	125住	土師	杯	70	(11.4)	6.1	4.4	−	にぶい褐色/にぶい橙色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底内劣化顕著,底外回転糸切り後ほぼ全面回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[中層,上層一括]
54	35	125住	土師	杯	45	(11.9)	(6.4)	4.3	−	橙色/にぶい橙色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内面劣化顕著,底外線刻あり,底外回転糸切り後ほぼ全面回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[中層,上層一括]
54	36	125住	土師	杯	20	(12.6)	(7.6)	4.1	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ[上・中層一括]
54	37	125住	土師	杯	25	(12.4)	−	−	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部欠損　[中層,上・中層一括]
54	38	125住	土師	杯	25	(11.8)	(7.2)	4.0	−	明赤褐色/明赤褐色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ[上層]
54	39	125住	土師	杯	25	−	6.4	−	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	口縁部欠損,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[中層]
54	40	125住	土師	杯	25	(14.5)	(7.6)	4.9	−	にぶい橙色/にぶい黄橙色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾐｶﾞｷ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部穿孔あり,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[一括]
54	41	125住	土師	杯	45	(12.3)	6.8	3.9	−	橙色/橙色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ[上層,中層一括]
54	42	125住	土師	杯	20	−	7.6	−	−	明赤褐色,黒褐色/明赤褐色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾐｶﾞｷ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転ﾍﾗ切り後楕円形にﾐｶﾞｷ[上層一括]
54	43	125住	土師	杯	45	(16.0)	8.5	6.2	−	橙色/橙色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底内渦状の浅い沈線あり,底外回転糸切り後外周手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[上層一括]
54	44	125住	土師	杯	15	(11.9)	(7.0)	3.8	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	摩耗顕著,底外回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[中層一括]
54	45	125住	土師	杯	20	−	(6.6)	−	−	にぶい黄橙色/にぶい橙色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ	摩耗顕著,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[上・中層一括]
54	46	125住	土師	杯	5	(15.6)	−	−	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	摩耗顕著,口縁部片　[一括]
54	47	125住	土師	杯	55	12.8	5.8	4.3	−	黒色/にぶい黄橙色	長石,ｽｺﾘｱ	ﾐｶﾞｷ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内黒,底外回転糸切り　[上層一括,I14-73ｸﾞﾘｯﾄﾞ一括]
54	48	125住	土師	杯	20	(14.9)	(9.4)	4.7	−	黒色/にぶい褐色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾐｶﾞｷ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	内黒,底外静止糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[上層一括]
55	49	125住	土師	杯	25	−	(10.2)	−	−	黒色/にぶい褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾐｶﾞｷ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	内黒,底外回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ後全面ﾅﾃﾞ[下層一括]
55	50	125住	土師	蓋	20	(15.9)	−	−	−	黒色/黒褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾐｶﾞｷ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	内黒,摘部欠損　[ｶﾏﾄﾞ内・上層一括]
55	51	125住	土師	高杯	5	−	−	−	−	褐色/褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	脚部片　[上層一括]
74	1	126坑	土師	甕	10	(18.4)	−	−	−	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,砂粒,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	外面煤付着　[下層一括]
74	2	126坑	土師	高台付Ⅲ	60	(13.8)	7.9	2.9	−	褐色/褐色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	作出し高台,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[下層]
74	1	127坑	土師	小型甕	5	(10.6)	−	−	−	にぶい橙色/赤褐色	石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部片,外面剥離顕著　[一括]
74	2	127坑	土師	杯	50	(12.4)	7.0	3.9	−	橙色/橙色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ[上層,一括]
74	3	127坑	土師	Ⅲ	20	(13.2)	(5.6)	2.0	−	橙色/橙色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	外面墨書あり『千ヵ』　[一括]
74	4	127坑	土師	高台付Ⅲ	20	(13.3)	(7.2)	2.2	−	暗赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	作出し高台　[上層]
29	1	131住	土師	甕	100	17.8	7.4	24.8	23.6	にぶい赤褐色/にぶい褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	内外面部分的に煤付着,底外全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[貯蔵穴内]
29	2	131住	土師	小型甕	90	12.1	6.8	17.4	14.2	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,雲母,石英,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾊｹ/ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾊｹ	外面剥離顕著,底外全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ[床面]
29	3	131住	土師	小型甕	100	8.7	5.3	12.5	−	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	内面剥離顕著,底外全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ[貯蔵穴内]
29	4	131住	土師	甕	10	(19.6)	−	−	−	橙色/橙色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾊｹ/ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	口縁部片　[一括]
29	5	131住	土師	鉢	60	14.1	(5.0)	7.3	−	明赤褐色/にぶい赤褐色,黒褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	内外面全面に煤付着　[床面]
29	6	131住	土師	鉢	95	10.2	4.2	5.6	−	黒色/暗褐色,黒褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾊｹ,ﾅﾃﾞ/ﾊｹ	内面黒色処理,外面部分的に煤付着[床面]
29	7	131住	土師	鉢	25	18.4	−	−	−	褐色/褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底部欠損　[床面]
29	8	131住	土師	小型杯	90	10.5	2.3	2.9～3.4	−	黒褐色/黒褐色	石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ	内外面黒色処理,若干の歪みあり,外面部分的に煤付着　[貯蔵穴内]
26	1	132住	土師	甕	20	−	(8.0)	−	−	褐色/赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底部片,底外全面ﾅﾃﾞ　[上層,一括]
26	2	132住	土師	甕	30	−	7.4	−	−	褐色/赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/ﾐｶﾞｷ	底部片,内外面煤付着,底外全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ　[中層,一括]
26	3	132住	土師	甕	5	−	(5.8)	−	−	にぶい橙色/黒色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ	底部片,外面厚く煤付着,底外木葉痕あり　[一括]
26	4	132住	土師	甕	10	(17.0)	−	−	−	明褐色/黒褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	口縁部片　[上層]
26	5	132住	土師	壺	15	−	3.6	−	−	にぶい橙色/橙色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾊｹ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ	底部片,底外全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[上層,一括]
26	6	132住	土師	壺	15	−	(10.6)	−	−	にぶい黄橙色/黒色	石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ　/ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ	底部片,底外木葉痕あり　[上層]
26	7	132住	土師	壺	10	−	(8.2)	−	−	褐色/暗褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/ﾅﾃﾞ	底部片,底外木葉痕あり　[一括]
26	8	132住	土師	壺	15	−	(7.4)	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	底部片,底外木葉痕あり　[上層,一括]
26	9	132住	土師	壺	15	(19.0)	−	−	−	赤褐色/にぶい黄橙色	長石,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ	折返し口縁部片,内面・外面頸部に赤彩あり　[下層]
26	10	132住	土師	杯	95	11.3	−	4.75～5.35	−	赤褐色/にぶい褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ	底外全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[床面]
26	11	132住	土師	杯	15	−	6.6	−	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部片,底外回転糸切り後外周手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[一括]
26	12	132住	土師	高杯	50	−	12.6	−	−	褐灰色/褐灰色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾊｹ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾊｹ	四孔　[下層]
26	13	132住	土師	高杯	30	(27.4)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾐｶﾞｷ/ﾅﾃﾞ	杯部片　[一括]

26	14	132住	土師	高杯	30	−	(11.0)	−	−	にぶい赤褐色/明赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾐｶﾞｷ	脚部片,3孔　[下層]
26	15	132住	土師	高杯	30	−	(6.6)	−	−	明赤褐色/橙色,黒褐色	石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾐｶﾞｷ	小型,脚部片,外面一部煤付着,4孔　[上層]
26	16	132住	土師	高杯	10	−	(16.0)	−	−	明赤褐色,黒色/明赤褐色,黒色	石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ｹｽﾞﾘ,ﾐｶﾞｷ/ﾐｶﾞｷ	脚部片,内外面一部煤付着,孔あり　[下層]
26	17	132住	土師	器台	50	(7.9)	(8.8)	−	−	にぶい褐色,黒褐色/にぶい褐色,黒褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ	内外面部分的に煤付着,4孔　[下層,一括]
26	18	132住	土師	異形器台	40	(3.7)	−	−	−	明赤褐色/にぶい褐色	石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	脚裾部欠損,外面一部に煤付着　[上層]
27	19	132住	土師	鉢	25	−	(5.0)	−	−	赤褐色/黒褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾊｹ,ﾐｶﾞｷ	底部片,外面一部に煤付着,底外全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ　[一括]
27	20	132住	土師	ﾐﾆﾁｭｱ土器	40	−	(5.3)	−	−	黒色/黒褐色,暗褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾐｶﾞｷ,ﾊｹ/ﾅﾃﾞ	高杯脚部片,内外面煤付着　[一括]
27	21	132住	土師	ﾐﾆﾁｭｱ土器	45	−	(3.3)	−	−	暗赤褐色/暗赤褐色,黒褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底外全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ　[下層]
27	22	132住	土師	ﾐﾆﾁｭｱ土器	30	−	(4.1)	−	−	にぶい赤褐色/にぶい褐色,黒色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	外面一部煤付着,底外ﾅﾃﾞ　[一括]
27	23	132住	弥生	甕	5	(23.5)	−	−	−	黒褐色/黒褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	押圧波状口縁部片,内外面一部煤付着[一括]
27	24	132住	弥生	甕	5	(20.1)	−	−	−	にぶい褐色/橙色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	押圧波状口縁部片,内外面一部煤付着,摩耗顕著　[一括]
27	25	132住	弥生	台付甕	5	(26.7)	−	−	−	明赤褐色/暗灰色	石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ	口縁部片,外面一部煤付着　[一括]
27	26	132住	弥生	台付甕	5	−	−	−	−	明赤褐色/にぶい橙色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾊｹ	脚部片　[一括]
27	27	132住	弥生	壺	5	(18.4)	−	−	−	暗赤褐色/暗赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾐｶﾞｷ/ﾐｶﾞｷ	折返し口縁部片,内外面赤彩,肥厚帯端部から口唇部に網目状撚糸文　[一括]
27	28	132住	弥生	壺	5	(17.6)	−	−	−	明赤褐色/にぶい黄橙色	石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾐｶﾞｷ/ﾊｹ	折返し口縁部片,内面赤彩　[一括]
27	29	132住	弥生	壺	3	−	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	折返し口縁部片　[一括]
27	30	132住	弥生	甕	5	−	−	−	−	にぶい褐色,黒褐色/にぶい橙色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	頸部片,外面櫛描波状文・押圧竹管文,内面一部煤付着　[一括]
27	31	132住	弥生	甕	3	−	−	−	−	明赤褐色/暗赤褐色	長石,石英	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	頸部片,S字状結節文　[一括]
30	1	133住	須恵	杯	10	(12.6)	−	−	−	褐灰色/褐灰色	長石	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	口縁部片　[一括]
30	2	133住	土師	甕	85	14.6	−	−	18.2	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底部欠損,外面下半部煤付着,甑として再利用　[下層,一括]
30	3	133住	土師	甕	40	21.6	−	−	−	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	内外面煤付着　[下層,一括]
30	4	133住	土師	小型甕	5	(14.2)	−	−	−	にぶい赤褐色/灰褐色	長石,砂粒	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部片,外面煤付着　[一括]
30	5	133住	土師	小型壺	5	(14.5)	−	−	−	褐灰色/褐灰色	長石,ｽｺﾘｱ	ﾊｹ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部片,内外面煤付着　[中層]
30	6	133住	土師	杯	90	13.5	−	−	14.4	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,ｽｺﾘｱ	ﾐｶﾞｷ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	内外面黒色処理　[カマド袖脇]
30	7	133住	土師	杯	95	12.8	−	4.1	14.2	灰褐色/灰褐色	長石,ｽｺﾘｱ	ﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	内外面黒色処理　[床面]
30	8	133住	土師	杯	70	12.5	−	4.2	13.9	灰褐色/灰褐色	長石,ｽｺﾘｱ	ﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	内外面黒色処理　[下層]
30	9	133住	土師	杯	40	12.8	−	3.4	−	灰褐色/灰褐色	長石,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	内外面黒色処理　[下層一括]
30	10	133住	土師	小型鉢	50	13.0	(5.8)	−	−	褐灰色/灰褐色	長石,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	2点同一個体　[上層]
56	1	134住	須恵	甕	5	(22.7)	−	−	−	黄灰色/黄灰色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部片,茨城産　[一括]
56	2	134住	須恵	杯	10	−	(6.8)	−	−	褐灰色/褐灰色	長石,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部片,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,東海産　[一括]
56	3	134住	土師	小型甕	10	(12.1)	−	−	−	にぶい赤褐色/灰褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	小型,口縁部片,内外面煤付着　[一括]
56	4	134住	土師	小型甕	10	(14.3)	−	−	−	褐灰色/灰褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	小型,口縁部片,内外面煤付着　[一括]
56	5	134住	土師	甕	10	(18.3)	−	−	−	にぶい褐色/にぶい橙色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部片,外面一部煤付着　[一括]
56	6	134住	土師	甕	5	(22.2)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部片,内外面一部煤付着　[上層]
56	7	134住	土師	甕	5	(31.7)	−	−	−	灰褐色/にぶい赤褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部片,内面一部煤付着　[床面,中層]
56	8	134住	土師	甕	5	(31.0)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	口縁部片,内面摩耗顕著　[一括]
56	9	134住	土師	小型甕	10	−	(7.9)	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ	底部片,内外面煤付着,底外手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ　[上層,一括]
56	10	134住	土師	小型甕	5	−	(10.0)	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ	底部片,内外面煤付着,底外回転糸切り後無調整　[上層,一括]
56	11	134住	土師	小型甕	10	−	(9.2)	−	−	にぶい褐色/褐灰色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ	底部片,内外面煤付着,底外手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ　[一括]
56	12	134住	土師	小型甕	5	−	(8.9)	−	−	褐灰色/にぶい赤褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ	底部片,内外面煤付着,底外回転糸切り後全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ　[一括]
56	13	134住	土師	杯	100	12.2～13.0	7.0	3.9～3.3	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	外面墨書あり『仟』,歪み顕著,回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　[床面]
56	14	134住	土師	杯	90	12.3～12.9	7.0	3.7	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	外面墨書あり『仟』,回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　[床面]
56	15	134住	土師	杯	100	12.8	6.8	3.5	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内面渦巻き沈線,内外面部分的に煤付着,回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　[床面]
56	16	134住	土師	杯	60	12.0	7.8	3.7	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	外面墨書あり,判読不能,回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　[床直,一括]
56	17	134住	土師	杯	80	13.7	7.2	4.2	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　[上層]
56	18	134住	土師	杯	50	12.6	7.3	3.8	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　[下層,一括]
56	19	134住	土師	杯	60	12.5	6.8	3.5	−	にぶい橙色/にぶい橙色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　[一括]
56	20	134住	土師	杯	45	(12.8)	(7.0)	(4.7)	−	灰褐色/にぶい赤褐色	石英,雲母,砂粒,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底外全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　[上・中層,一括]
56	21	134住	土師	杯	40	(12.0)	(6.4)	3.7	−	にぶい橙色/にぶい橙色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　[一括]
56	22	134住	土師	杯	30	(12.7)	(6.9)	3.7	−	にぶい赤褐色/にぶい橙色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　[一括]
56	23	134住	土師	杯	30	−	8.8	−	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　[下層]
56	24	134住	土師	杯	20	(13.7)	(7.6)	4.0	−	にぶい赤褐色/にぶい褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　[一括]
57	25	134住	土師	杯	15	(12.0)	(6.5)	3.9	−	にぶい赤褐色/にぶい橙色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　[一括]
57	26	134住	土師	杯	20	(13.4)	(6.8)	(4.0)	−	にぶい褐色/にぶい赤褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	内外面摩耗顕著,底外回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　[一括]
57	27	134住	土師	杯	20	(12.4)	(7.0)	(3.5)	−	にぶい橙色/にぶい橙色	石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	内外面摩耗顕著,底外回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　[一括]

57	28	134住	土師	杯	10	(12.0)	(7.0)	(3.5)	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ 長石,石英,雲母,砂粒,ｽ	ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,	底外回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ [一括]
57	29	134住	土師	杯	10	(14.0)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	ｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底部欠損 [一括]
57	30	134住	土師	杯	5	−	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい橙色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	口縁部片,外面墨書あり『仟』 [下層]
57	31	134住	土師	杯	5	−	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい橙色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	口縁部片,外面墨書あり,判読不能 [一括]
57	32	134住	土師	杯	3	−	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	石英,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	口縁部片,外面墨書あり,判読不能 [一括]
57	33	134住	土師	杯	3	−	−	−	−	にぶい橙色/にぶい赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	体部片,外面墨書あり『当』 [一括]
57	34	134住	土師	杯	3	−	−	−	−	にぶい橙色/にぶい赤褐色	石英,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	体部片,外面墨書あり,判読不能 [一括]
57	35	134住	土師	杯	5	−	−	−	−	にぶい橙色/にぶい橙色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	底部片,外面墨書あり,判読不能 [一括]
57	36	134住	土師	高台付杯	10	−	(6.0)	−	−	にぶい橙色/にぶい褐色	石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ	貼付け高台部片,内面剥離あり [一括]
57	37	134住	土師	高台付杯	10	−	(6.0)	−	−	灰褐色/灰褐色	石英,雲母,砂粒,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ	貼付け高台部片,内外面煤付着 [上層]
57	38	134住	土師	高台付杯	10	−	(6.6)	−	−	にぶい橙色/にぶい橙色	石英,雲母,砂粒	ﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ	作出し高台部片,内外面摩耗顕著 [一括]
57	39	134住	土師	高杯	5	−	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾐｶﾞｷ	脚部片,外面摩耗顕著 [中層]
57	40	134住	土師	片口鉢	10	(20.8)	−	−	−	にぶい赤褐色/灰褐色	長石,石英,雲母,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ	[一括]
57	41	134住	土師	鉢	5	(18.4)	−	−	−	橙色/橙色	石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ	[上層]
57	42	134住	土師	高台付Ⅲ	30	−	(6.6)	−	−	にぶい橙色/にぶい橙色	石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部片,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ [一括]
57	43	134住	土師	高台付Ⅲ	20	(13.4)	(7.0)	(2.2)	−	褐灰色/赤灰色	石英,雲母,砂粒	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ [一括]
57	44	134住	土師	高台付Ⅲ	40	(13.8)	(7.0)	(2.6～2.1)	−	灰褐色/にぶい褐色	石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ [一括]
57	45	134住	土師	蓋	5	−	−	−	−	にぶい橙色/にぶい赤褐色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	外面墨書あり,判読不能 [上層]
57	46	134住	土師	蓋	5	(14.2)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい橙色	石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	[上層]
57	47	134住	土師	蓋	5	(13.0)	−	−	−	にぶい橙色/にぶい橙色	雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	[中層]
57	48	134住	土師	ﾐﾆﾁｭｱ土器	40	(4.4)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	口縁部内面に円形浮文あり [一括]
58	1	135住	土師	甕	90	20.0	10.4	27.7	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	内外面二次被熱のため部分的に劣化,低外全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,地元型 [ｶﾏﾄﾞ内,一括]
58	2	135住	土師	甕	80	16.2	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底部欠損,内外面二次被熱のため劣化激しい,内外面煤付着,地元型 [ｶﾏﾄﾞ内]
58	3	135住	土師	甕	15	(17.8)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底部欠損,内外面二次被熱のため劣化,地元型 [ｶﾏﾄﾞ内,一括]
58	4	135住	土師	甕	20	−	−	−	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	胴部片,内外面摩耗顕著 [ｶﾏﾄﾞ内一括]
58	5	135住	土師	杯	70	12.7	6.6	3.9	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ [上層,一括]
58	6	135住	土師	杯	50	(12.8)	(6.0)	4.3	20.2	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	内外面やや摩耗顕著,底外全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ [上層,一括]
58	7	135住	土師	杯	70	12.1	7.3	3.2	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	外面墨書あり『爪』,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ [上層,一括]
58	8	135住	土師	杯	35	(11.8)	6.8	4.1	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	内外面やや摩耗顕著,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ [上層,一括]
58	9	135住	土師	杯	40	(13.6)	(7.2)	(3.8)	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	内外面やや摩耗顕著,底外全面回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ [上層]
59	10	135住	土師	杯	35	−	7.0	−	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底部片,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ [上層]
59	11	135住	土師	杯	30	−	6.0	−	−	にぶい赤褐色/にぶい褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底部片,底内渦巻き状の工具痕あり,底外全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ [上層]
59	12	135住	土師	杯	20	(12.2)	−	−	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	底部欠損 [上層]
59	13	135住	土師	高台付Ⅲ	50	(13.0)	7.2	3.1	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後貼付高台 [上層]
59	14	135住	土師	高台付Ⅲ	30	−	6.4	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後貼付高台 [上層]
59	15	135住	土師	高台付Ⅲ	20	−	7.4	−	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,雲母,砂粒,海綿骨針	ﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後貼付高台 [上層]
18	1	136住	土師	甕	85	19.3	6.5	24.5	−	にぶい赤褐色/明赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾊｹ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ,ﾊｹ	外面大部分煤付着,底外全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ [下層]
18	2	136住	土師	甕	15	(17.7)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	底部欠損,器厚やや薄い [中層]
18	3	136住	土師	甕	10	(17.0)	−	−	−	褐灰色/灰褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部片,内外面部分的に煤付着 [中層一括]
18	4	136住	土師	甕	5	(13.7)	−	−	−	褐灰色/褐灰色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ,ﾊｹ	小型,口縁部片,内外面に煤付着 [上層一括]
18	5	136住	土師	甕	60	12.0	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	小型,底部欠損,外面部分的に煤付着 [貯蔵穴内]
18	6	136住	土師	甕	8	−	7.0	−	24.7	灰褐色/灰褐色	長石,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底部片,内外面部分的に煤付着 [下層]
18	7	136住	土師	坩	40	−	−	−	(23.9)	にぶい橙色/にぶい赤褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	胴部から底部片,小さな底部でやや上げ底,外面に煤付着 [中層,上層一括]
18	8	136住	土師	甑	3	−	3.2	−	−	黒褐色/黒褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/無調整	底部片,外面に煤付着 [上層]
18	9	136住	土師	高杯	75	11.8	−	−	−	灰褐色/灰赤褐色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/ﾅﾃﾞ,ﾊｹ,ﾐｶﾞｷ	脚部欠損,内面全面外面部分的に煤付着 [床直]
18	10	136住	土師	高杯	30	−	裾径(19.0)	−	−	にぶい褐色/にぶい赤褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾊｹ/ﾅﾃﾞ,ﾊｹ	脚部片,外面赤彩,穿孔３か所 [下層]
18	11	136住	土師	高杯	15	−	裾径(22.4)	−	−	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,雲母,砂粒	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ	脚部片,穿孔３か所 [下層,下層一括]
18	12	136住	土師	高杯	50	−	裾径(10.4)	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ	脚部片,外面赤彩,穿孔３か所 [上・下層一括]
18	13	136住	土師	小型器台	70	(8.3)	裾径(7.2)	7.8	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ	脚部穿孔２か所 [貯蔵穴内]
18	14	136住	土師	小型器台	10	(8.2)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,雲母,砂粒	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	杯部片 [上層一括]
18	15	136住	土師	ﾐﾆﾁｭｱ土器	5	−	−	−	−	褐灰色/褐灰色	長石,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	一段の稜をもつ高坏の杯部片 [上・中層一括]
18	16	136住	土師	異形器台	40	9.3	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ	脚部欠損,内外面ともに薄く煤付着 [上層一括]

19	17	136住	弥生	甕	−	−	−	−	−	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	頸部片,外面煤付着,附加条縄文 [上層一括]
19	18	136住	弥生	甕	−	−	−	−	−	褐灰色/褐灰色	石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	頸部片,内外面煤付着,沈線文 [上層一括]
19	19	136住	弥生	甕	−	−	−	−	−	灰褐色/灰褐色	長石,石英,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	頸部片,外面煤付着,擬縄鋸歯状文 [上層一括]
60	1	137住	土師	甕	80	20.4	10.3	29.1	−	にぶい褐色/明赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底外回転糸切り,地元型 [下層,上・中・下層・ｶﾏﾄﾞ内一括]
60	2	137住	土師	甕	60	21.4	11.8	22.7	−	明赤褐色/明褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底外全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,地元型 [ｶﾏﾄﾞ内]
60	3	137住	土師	甕	10	(18.0)	−	−	−	にぶい黄橙色/にぶい褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部片,地元型 [上・中層一括]
60	4	137住	土師	甕	5	(17.7)	−	−	−	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部片,地元型 [中層,上層一括]
60	5	137住	土師	甕	5	(18.6)	−	−	−	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部片,地元型 [上・中・下層一括]
60	6	137住	土師	甕	5	(19.1)	−	−	−	黒褐色/黒褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部片,地元型 [床直]
60	7	137住	土師	甕	5	(14.9)	−	−	−	にぶい黄褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部片,地元型 [ｶﾏﾄﾞ内一括]
60	8	137住	土師	甕	5	(17.0)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	口縁部片,地元型 [中層]
60	9	137住	土師	杯	70	(15.2)	7.6	3.9	−	明褐色/明褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,支脚として使用 [ｶﾏﾄﾞ内]
60	10	137住	土師	杯	95	13.3	7.5	4.5	−	明褐色/明褐色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,支脚として使用 [ｶﾏﾄﾞ内]
61	11	137住	土師	杯	98	13.7	7.4	4.5	−	橙色/にぶい橙色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,支脚として使用 [ｶﾏﾄﾞ内]
61	12	137住	土師	杯	90	15.1	7.0	5.5	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	打ち欠き土器,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,支脚として使用 [ｶﾏﾄﾞ内]
61	13	137住	土師	杯	95	13.7	6.8	4.3	−	明赤褐色/明赤褐色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	打ち欠き土器,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,支脚として使用 [ｶﾏﾄﾞ内]
61	14	137住	土師	杯	90	13.4	7.6	4.6	−	赤褐色/明赤褐色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,支脚として使用 [ｶﾏﾄﾞ内]
61	15	137住	土師	杯	65	(13.9)	6.8	4.3	−	橙色/橙色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	打ち欠き土器,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,支脚として使用 [ｶﾏﾄﾞ内]
61	16	137住	土師	杯	100	13.1	5.6	3.9	−	明赤褐色/明赤褐色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,支脚として使用 [ｶﾏﾄﾞ内]
61	17	137住	土師	杯	60	13.5	6.6	4.8	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転ﾍﾗ切り [中・下層]
61	18	137住	土師	杯	90	13.6	7.4	4.1	−	明赤褐色/明赤褐色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ [下層]
61	19	137住	土師	杯	55	12.5～13.7	6.8	4.0	−	にぶい赤褐色/にぶい褐色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	歪み顕著,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ [ｶﾏﾄﾞ内,…括]
61	20	137住	土師	杯	50	13.4	7.4	2.6～4.1	−	橙色/橙色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	歪み顕著,底外回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ [床面,一括]
61	21	137住	土師	杯	65	(12.3)	6.8	3.7	−	にぶい褐色/橙色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	打ち欠き土器,底外全面回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,底外線刻あり [下層,中層一括]
61	22	137住	土師	杯	45	19.6	(9.7)	6.8	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	大型,底外全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ [中・下層,ｶﾏﾄﾞ内一括]
61	23	137住	土師	杯	45	(12.4)	(6.3)	3.5	−	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	体部外面線刻あり,二次焼成を受けている,底外回転ﾍﾗ切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ [ｶﾏﾄﾞ内]
61	24	137住	土師	杯	25	(13.5)	(6.6)	3.6	−	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ [ｶﾏﾄﾞ内一括]
61	25	137住	土師	杯	25	(13.3)	−	−	−	暗褐色/褐色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部欠損,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ [ｶﾏﾄﾞ内一括]
61	26	137住	土師	杯	10	(13.6)	(7.4)	3.9	−	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ [上・中層一括]
61	27	137住	土師	杯	10	(12.5)	(7.4)	−	−	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部欠損 [ｶﾏﾄﾞ内一括]
61	28	137住	土師	高台付Ⅲ	90	14.8	7.3	2.5	−	褐色/にぶい黄橙色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内外面部分的に煤付着,底外回転糸切り [ｶﾏﾄﾞ内]
61	29	137住	土師	高台付Ⅲ	90	13.7	6.8	2.6	−	黒褐色/にぶい褐色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内外面部分的に煤付着,底外回転糸切り [ｶﾏﾄﾞ内]
61	30	137住	土師	高台付Ⅲ	55	(13.6)	6.9	2.7	−	橙色/橙色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾐｶﾞｷ/ﾅﾃﾞ	作出し高台,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ [中・下層]
61	31	137住	土師	高台付Ⅲ	45	(14.4)	6.5	2.1	−	にぶい黄橙色/にぶい黄橙色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	作出し高台,底外回転糸切り [下層]
61	32	137住	土師	高台付Ⅲ	40	(13.5)	6.4	2.2	−	赤褐色/明赤褐色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	作出し高台,底外回転糸切り,線刻あり,支脚として使用 [ｶﾏﾄﾞ内]
61	33	137住	土師	高台付Ⅲ	35	(13.0)	6.6	2.6	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾐｶﾞｷ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	作出し高台,底外回転糸切り [中層,一括]
61	34	137住	土師	高台付Ⅲ	15	−	(5.4)	−	−	橙色/橙色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	作出し高台,二次焼成を受けている,底外回転糸切り [ｶﾏﾄﾞ内一括]
61	35	137住	土師	高台付Ⅲ	30	−	6.4	−	−	橙色/橙色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	作出し高台,底外回転糸切り [中層]
62	1	139住	須恵	杯	25	(12.6)	(7.4)	(3.5)	−	灰色/褐灰色	長石,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外全面手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ [床面]
62	2	139住	須恵	高杯	5	(14.8)	−	−	−	褐灰色/褐灰色	長石,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	杯部片,外面一段の稜を有する [上層一括]
62	3	139住	土師	甕	10	(20.4)	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	口縁部片,やや粒の大きい砂粒を多く含む [中層,ｶﾏﾄﾞ内一括]
62	4	139住	土師	甕	5	(27.4)	−	−	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	口縁部片,雲母を多く含む [上層一括]
62	5	139住	土師	杯	95	12.8	6.7	5.3	−	灰赤色/灰赤色	石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外線刻あり『日』,内面煤付着,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ [ｶﾏﾄﾞ内]
62	6	139住	土師	杯	75	11.9	7.6	4.7	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内面摩耗顕著,内外面部分的に煤付着,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ [ｶﾏﾄﾞ内]
62	7	139住	土師	杯	95	11.4	8.0	3.9	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	外面全面に煤付着,底外回転糸切り後全面回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ [下層]
62	8	139住	土師	杯	30	(12.8)	(6.5)	(3.4)	−	灰赤色/灰赤色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾐｶﾞｷ,手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	内外面薄く煤付着,底外手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ [下層]
20	1	140住	弥生	甕	3	−	−	−	−	灰褐色/灰褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	二段の輪積痕を有する口縁部片,器面は劣化及び煤付着 [上層一括]
20	2	140住	弥生	甕	3	−	−	−	−	にぶい褐色/にぶい褐色	石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	口縁部片,肥厚帯端部に附加条縄文原体押圧,外面附加条縄文 [上層…一括]
20	3	140住	弥生	甕	3	−	−	−	−	にぶい褐色/灰褐色	石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	口縁部片,肥厚帯端部に附加条縄文原体押圧 [上層一括]
20	4	140住	弥生	甕	3	−	−	−	−	にぶい黄褐色/にぶい黄橙色	石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/櫛描文	頸部片,櫛描直線文（横位・縦位）・鋸歯状文 [上層一括]
20	5	140住	弥生	甕	3	−	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/附加条縄文	胴部片,附加条縄文 [上層…一括]

20	6	140住	土師	壺	20	21.8	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾐｶﾞｷ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	口縁部完存,内外面赤彩,折返し口縁下端部に原体による押圧波状文,器台として再利用　[下層]
20	7	140住	土師	壺	20	21.8	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾐｶﾞｷ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	口縁部完存,内外面赤彩,折返し口縁下端部にﾍﾗによる押圧波状文,肥厚帯部に３本単位の棒状浮文痕が５か所,器台として再利用　[下層,下層一括]
20	8	140住	土師	甕	85	18.1	6.4	21.6	23.5	灰褐色/褐灰色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾊｹ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	外面胴部上半部に煤付着,底外縄雑状の圧痕あり　[下層]
20	9	140住	土師	甕	75	15.8	6.4	22.8	21.4	灰褐色/にぶい褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾊｹ/ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	外面厚く煤付着,内面下半部炭化物付着,底外全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ　[床面]
20	10	140住	土師	甕	30	19.0	−	−	−	灰褐色/にぶい褐色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾊｹ/ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	底部欠損,頸部に２段の指頭による押圧文が巡る,外面部分的に煤付着[床面,中層一括]
20	11	140住	土師	甕	50	19.4	−	−	−	褐灰色/黄灰色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	125住覆土内出土土器と遺構間接合,口縁端部連続押圧文,底部欠損,外面部分的に煤付着　[中層]
20	12	140住	土師	甕	35	14.7	−	−	(18.0)	灰褐色/灰褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾊｹ/ﾊｹ	底部欠損,口縁端部連続押圧文,外面部分的に煤付着　[下層,上層一括]
20	13	140住	土師	甕	20	16.0	−	−	−	灰褐色/にぶい褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ,ﾍﾗｹｽﾞﾘ	口縁部片,口縁端部連続押圧文　[中層]
21	14	140住	土師	甕	90	14.5	6.3	15.0	16.0	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	内面剥離顕著,底外全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ[床面・下層,上層一括]
21	15	140住	土師	甕	95	13.4	5.4	18.2	17.2	にぶい褐色/褐灰色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ	外面煤付着,内面剥離顕著,底外全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ　[床面,中層一括]
21	16	140住	土師	甕	65	13.3	5.8	14.1	14.8	にぶい赤褐色/にぶい褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	内外面部分的に煤付着,底外全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ　[下層]
21	17	140住	土師	甕	40	11.0	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底部欠損,外面剥離顕著,　[下層]
21	18	140住	土師	甕	60	16.4	−	−	26.0	にぶい褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾍﾗﾐｶﾞｷ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底部欠損,内面剥離やや顕著　[中層・床面]
21	19	140住	土師	甕	80	−	8.2	−	−	にぶい褐色/褐灰色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ	口縁部欠損,内面上半部剥離が激しい,内面下半部炭化物付着,外面上半部煤付着　[下層]
21	20	140住	土師	小型鉢	65	9.5	5.5	7.9	−	灰黄褐色/灰黄褐色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	内外面煤付着,底外全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ[床面]
21	21	140住	土師	小型鉢	90	8.0	4.5	6.1	−	褐灰色/褐灰色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	内外面煤付着,底外全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ[床面]
21	22	140住	土師	甕	5	−	5.6	−	−	褐灰色/灰褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ	底部片,内面煤付着,底外全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ　[中層一括]
21	23	140住	土師	台付甕	95	13.5	7.5	24.0	裾径 8.8	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	外面上半部煤付着　[床面]
21	24	140住	土師	高杯	95	21.4	−	15.2	裾径 14.8	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾍﾗﾅﾃﾞ	東海系,内外面赤彩,脚部四孔,杯部内面剥離顕著　[床面]
21	25	140住	土師	高杯	95	18.9	−	15.8	裾径 9.4	灰褐色/にぶい褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	椀形,外面煤付着　[床面,中層一括]
21	26	140住	土師	高杯	50	−	−	−	裾径 9.0	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾐｶﾞｷ	三孔　[床面]
21	27	140住	土師	高杯	40	−	−	−	裾径 9.9	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ	三孔,外面若干摩耗　[上層一括]
21	28	140住	土師	高杯	15	(19.4)	−	−	−	灰褐色/灰褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	杯部片,内外面煤付着　[下層一括]
63	1	141住	土師	杯	60	(14.1)	5.6	4.7	−	灰褐色/灰褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	摩耗顕著,底外回転糸切り後外周手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ　[床面]
63	2	141住	土師	杯	45	(12.6)	6.5	3.1	−	にぶい赤褐色/にぶい橙色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ[上層]
63	3	141住	土師	杯	25	(13.0)	(5.8)	3.6	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り　[一括]
63	4	141住	土師	杯	3	−	−	−	−	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	外面墨書あり,判読不能　[一括]
63	5	141住	土師	蓋	25	−	−	−	−	黒色/にぶい橙色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾐｶﾞｷ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内面黒色処理　[一括]
64	1	142住	土師	甕	4	(20.4)	−	−	−	にぶい赤褐色/赤褐色	長石,石英,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	[下層]
64	2	142住	土師	甑	30	−	12.8	−	−	明赤褐色/赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,砂粒	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	[下層]
64	3	142住	土師	杯	70	12.6	6.2	4.2	−	赤褐色/赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内面剥落激しい,底外回転ﾍﾗ切り[ｶﾏﾄﾞ内]
64	4	142住	土師	杯	75	12.7	6.0	3.9	−	明赤褐色/明赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,雲母,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	打ち欠き土器,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　[ｶﾏﾄﾞ内]
64	5	142住	土師	杯	85	13.3	6.0	4.0	−	にぶい褐色/黒褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	打ち欠き土器,底外回転ﾍﾗ切り　[床直]
64	6	142住	土師	杯	80	12.0	6.1	3.7	−	明赤褐色/明赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	打ち欠き土器,底外回転ﾍﾗ切り　[貯蔵穴内]
64	7	142住	土師	杯	80	13.4	6.6	4.5	−	赤褐色/赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,雲母,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ[床面,中層]
64	8	142住	土師	杯	50	(12.8)	5.9	3.6	−	明赤褐色/明赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転ﾍﾗ切り　[中層]
64	9	142住	土師	杯	25	−	6.9	−	−	橙色/橙色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,砂粒	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ[上・中層一括]
64	10	142住	土師	杯	25	−	4.7	−	−	明赤褐色/明赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,砂粒	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底部片,底外回転ﾍﾗ切り　[中層]
64	11	142住	土師	杯	15	−	(7.8)	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,ｽｺﾘｱ,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	底外回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ　[上層一括]
64	12	142住	土師	杯	15	−	(7.6)	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	内面に線刻あり,底外回転糸切り　[上層一括]
22	1	SB026住	弥生	甕	5	−	−	−	−	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	折返し口縁部片,肥厚帯端部に附加条縄文,肥厚帯下部に波状隆帯,:頸部に櫛描波状文　[床面,下層一括]
22	2	SB026住	弥生	甕	2	−	−	−	−	黄褐色/赤灰色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/単節縄文	折返し口縁部片,肥厚帯端部から下端に単節縄文,肥厚帯下部に波状隆帯　[下層一括]
22	3	SB026住	弥生	甕	2	−	−	−	−	褐灰色/にぶい赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,砂粒	ﾅﾃﾞ,ﾊｹ/ﾅﾃﾞ	折返し口縁部片,肥厚帯端部に押圧波状文,部分的に櫛描文　[上層一括]
22	4	SB026住	弥生	甕	3	−	−	−	−	灰褐色/褐灰色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	折返し口縁部片,肥厚帯端部に押圧波状文　[中層一括]
22	5	SB026住	弥生	甕	30	−	−	−	−	灰褐色/褐灰色	長石,石英,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾊｹ,附加条縄文	頸部から胴部片:,頸部はﾊｹ調整後縄文原体を縦に押圧してできた区画に沈線文,胴部は全面に附加条縄文　[下層一括]
22	6	SB026住	弥生	甕	7	−	−	−	−	灰褐色/にぶい褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	頸部片,内外面摩耗顕著,:網目状沈線文　[上層一括]
22	7	SB026住	弥生	甕	3	−	−	−	−	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	頸部片,:網目状沈線文　[上層一括]
22	8	SB026住	弥生	甕	4	−	−	−	−	にぶい黄橙色/にぶい黄橙色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ,附加条縄文	頸部から胴部片,頸部に赤彩,:胴部に附加条縄文　[上層一括]
22	9	SB026住	弥生	甕	3	−	−	−	−	にぶい褐色/にぶい灰褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ,附加条縄文	頸部から胴部片,頸部に櫛描鋸歯状文,:胴部に附加条縄文　[下層一括]

22	10	SB026住	弥生	甕	3	－	－	－	－	にぶい褐色/灰赤色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/単節縄文	底部片,単節縄文,底外木葉痕　[下層一括]
22	11	SB026住	弥生	甕	3	－	－	－	－	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/附加条縄文	底部片,附加条縄文,底外木葉痕　[中層一括]
22	12	SB026住	弥生	甕	3	－	－	－	－	褐灰色/にぶい褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/附加条縄文	底部片,外面若干劣化,附加条縄文[中層一括]
22	13	SB026住	弥生	甕	3	－	－	－	－	灰褐色/灰褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/附加条縄文	底部片,内面劣化顕著,附加条縄文,底外木葉痕あり　[中層一括]
22	14	SB026住	弥生	甕	5	－	－	－	－	にぶい赤褐色/にぶい褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ/無調整	底部片,底外モミ痕あり　[下層一括]
22	15	SB026住	弥生	甕	5	－	－	－	－	灰褐色/灰褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ/無調整	底部片,底外モミ痕あり　[中層一括]
22	16	SB026住	土師	壺	5	(14.2)	－	－	－	暗赤褐色/暗赤褐色	長石,ｽｺﾘｱ,砂粒	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/ﾅﾃﾞ,ﾊｹ	口縁部片　[上層一括]
22	17	SB026住	土師	甕	20	(17.0)	－	－	－	にぶい橙色/にぶい橙色	長石,ｽｺﾘｱ,砂粒	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾊｹ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾊｹ	底部欠損,内外面摩耗顕著　[中層,中層一括]
22	18	SB026住	土師	甕	10	(18.7)	－	－	－	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,砂粒	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾊｹ/ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	口縁部片　[中層]
22	19	SB026住	土師	甕	10	－	5.2	－	－	にぶい赤褐色/黒褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,砂粒	ﾍﾗﾅﾃ/ﾐｶﾞｷ,手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ	底部片,外面煤付着,底外手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ[上層]
22	20	SB026住	土師	高杯	7	－	－	－	－	明赤褐色/明赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	杯部上端・脚部下端欠損　[上層一括]
22	21	SB026住	土師	器台	10	－	－	－	－	褐色/明赤褐色	長石,ｽｺﾘｱ,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	台部片　[上層一括]
22	22	SB026住	土師	異形器台	5	－	9.7	－	－	黒褐色/明褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,砂粒	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	脚部片,底外ﾅﾃﾞ　[上層一括]
24	1	SB028住	土師	甕	15	(17.8)	－	－	－	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,砂粒	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	[床面]
24	2	SB028住	土師	甕	5	(18.7)	－	－	－	にぶい赤褐色/黒褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾊｹ/ﾊｹ	口縁部片,煤付着　[上・中層一括]
24	3	SB028住	土師	甕	5	(21.0)	－	－	－	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英	ﾅﾃﾞ,ﾊｹ/ﾊｹ,ﾍﾗﾐｶﾞｷ	口縁部片　[上層一括]
24	4	SB028住	土師	甕	15	15.4	－	－	－	赤褐色/黒褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾊｹ/ﾊｹ	[上・中層]
24	5	SB028住	土師	甕	20	(12.3)	－	－	－	暗赤褐色/暗赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/ﾍﾗﾐｶﾞｷ	小型,外面全面及び内面口縁部赤彩[下層]
24	6	SB028住	土師	甕	25	－	(6.6)	－	－	黒褐色/暗褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/ﾊｹ,ﾐｶﾞｷ	底外ﾍﾗﾅﾃﾞ後ﾐｶﾞｷ　[下層,床面]
24	7	SB028住	土師	甕	10	－	8.1	－	－	明赤褐色/明褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	底外に約2㎜幅の線状の窪みあり[中・下層一括]
24	8	SB028住	土師	甕	20	－	6.6	－	－	黒褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ,ﾊｹ,ﾐｶﾞｷ	内外面煤付着,破断面劣化,底外手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾍﾗﾅﾃﾞ　[下層,床面]
24	9	SB028住	土師	小型甕	20	(8.6)	－	－	－	黒褐色/黒褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾊｹ/ﾅﾃﾞ,ﾊｹ	内外面煤付着,破断面やや劣化[中・下層一括]
24	10	SB028住	土師	小型甕	20	(7.6)	－	－	－	橙色/橙色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	内外面摩耗顕著　[中層]
25	11	SB028住	土師	壺	10	(14.8)	－	－	－	にぶい褐色/暗褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ,ﾊｹ	内外面摩耗顕著　[下層]
25	12	SB028住	土師	壺	20	19.4	－	－	－	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾊｹ/ﾅﾃﾞ,ﾊｹ	折返し口縁片　[下層,床面]
25	13	SB028住	土師	壺	10	(15.8)	－	－	－	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,砂粒	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾊｹ/ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾊｹ	折返し口縁片,摩耗激しい　[床面]
25	14	SB028住	土師	壺	5	(20.0)	－	－	－	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,砂粒	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/ﾅﾃﾞ	内外面赤彩,摩耗激しい　[床直]
25	15	SB028住	土師	壺	5	(20.4)	－	－	－	にぶい褐色,黒色/暗赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,砂粒	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾊｹ/ﾅﾃﾞ,ﾊｹ	折返し口縁片,煤付着　[下層]
25	16	SB028住	土師	壺	15	(7.8)	－	－	－	赤褐色/赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ひさご壺の口縁部片　[上・中層]
25	17	SB028住	土師	壺	5	(17.6)	－	－	－	橙色/にぶい橙色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ,ﾊｹ/ﾐｶﾞｷ,ﾊｹ	内面摩耗顕著　[下層]
25	18	SB028住	土師	壺	3	－	8.3	－	－	にぶい褐色/暗赤褐色,赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾊｹ/ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	底部片,底外木葉痕あり,外面赤彩[下層]
25	19	SB028住	土師	高杯	10	－	－	－	－	明赤褐色/明赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,砂粒	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	杯部片　[床面]
25	20	SB028住	土師	高杯	10	(20.4)	－	－	－	明赤褐色/赤褐色,暗赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾊｹ,ﾐｶﾞｷ/ﾊｹ,ﾐｶﾞｷ	杯部片　[下層]
25	21	SB028住	土師	高杯	10	－	－	－	－	黒褐色,褐色/にぶい黄褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾐｶﾞｷ	ｸﾋﾞﾚ部片　[中層]
25	22	SB028住	土師	高杯	5	－	－	－	－	黒色/褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾐｶﾞｷ	ｸﾋﾞﾚ部片,杯部内面煤付着　[中層]
25	23	SB028住	土師	器台	5	－	－	－	－	明赤褐色/明赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	ｸﾋﾞﾚ部片　[貯蔵穴上面]
25	24	SB028住	土師	小型鉢	20	－	2.7	－	－	黒褐色/橙色,黒色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	回転ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	内外面煤付着　[上層一括]
25	25	SB028住	弥生	壺	40	－	7.0	－	－	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾊｹ/ﾅﾅﾞ	外面肩部に櫛描平行沈線文で区画された間に櫛描鋸歯状文・櫛描波状文[下層,床面]
25	26	SB028住	弥生	甕	5	(18.8)	－	－	－	にぶい褐色/褐灰色	長石,雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	口縁部片,折返し口縁全面及び肥厚帯端部に附加条縄文　[下層,一括]
25	27	SB028住	弥生	甕	3	－	－	－	－	赤褐色/赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ/附加条縄文	口縁部片,附加条縄文は肥厚帯端部にまで及ぶ　[ﾋﾟｯﾄ内一括]
25	28	SB028住	弥生	甕	3	－	－	－	－	黒褐色/黒褐色	雲母,石英,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/附加条縄文,押圧波状文	口縁部片,附加条縄文は肥厚帯端部にまで及ぶ　[上層]
25	29	SB028住	弥生	甕	3	－	－	－	－	橙色/橙色	雲母,石英,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ,押圧波状文	口縁部片　[上層一括]
25	30	SB028住	弥生	甕	3	－	－	－	－	にぶい赤褐色/暗褐色	雲母,石英,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/附加条縄文,鋸歯状沈線文	頸部～胴部片　[下層一括]
25	31	SB028住	弥生	甕	2	－	(7.9)	－	－	にぶい赤褐色/にぶい橙色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ/附加条縄文	底部片,底外木葉痕あり　[上層一括]
25	32	SB028住	弥生	甕	2	－	(8.5)	－	－	にぶい褐色/暗褐色,褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅｽﾞﾘ/附加条縄文	底部片,底外木葉痕あり　[上層]
67	1	144掘	土師	杯	15	(14.7)	－	－	－	橙色/橙色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	外面墨書あり,判読不能　[柱穴2内上層一括]
67	2	144掘	土師	杯	90	12.4	6.9	3.8	－	橙色/にぶい橙色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	打ち欠き土器,底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ　[柱穴4内上層一括]
67	3	144掘	土師	杯	20	(19.9)	－	－	－	橙色/橙色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾐｶﾞｷ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	[柱穴9内上層一括]
68	1	145掘	土師	杯	30	(13.1)	(5.6)	4.4	－	橙色/褐灰色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾐｶﾞｷ/手持ちﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	[柱穴9内上層一括]
68	2	145掘	土師	杯	15	(13.5)	－	－	－	にぶい黄橙色/褐灰色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾐｶﾞｷ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	[柱穴9内上層一括]
69	1	146掘	土師	高台付皿	35	－	5.7	－	－	灰褐色/にぶい橙色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	[柱穴3内上層一括]
71	1	148掘	土師	杯	55	(12.7)	(7.0)	(3.8)	－	明赤褐色,赤灰色/明赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗﾅｽﾞﾘ[柱穴2内上層一括]

71	2	148掘	土師	高台付皿	20	−	(6.6)	−	−	にぶい橙色/橙色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾐｶﾞｷ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [柱穴2内上層一括]
75	1	150坑	土師	杯	30	−	(7.2)	−	−	橙色/にぶい橙色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [上層一括]
75	1	152坑	須恵	杯	45	(13.2)	(8.0)	4.1	−	褐灰色/褐灰色	長石,砂粒,雲母,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外全面手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ,茨城産 [上層一括]
80	1	P23	土師	皿	40	(13.8)	(7.8)	2.7	−	橙色/にぶい橙色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転糸切り後外周回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [底面一括]
80	2	P23	土師	杯	2	−	−	−	−	橙色/橙色	長石,石英	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	外面墨書あり,『千ヵ』 [底面一括]

第11表　間見穴遺跡（H15）グリッド出土土器（縄文土器）観察表

（　）は推定値

第図	挿図番号	遺構	器質	器種	遺存[%]	口径[cm]	底径[cm]	器高[cm]	最大径[cm]	色調[内/外]	胎土	調整[内/外]	備考　[出土状況]
10	1	G15-33	縄文	深鉢	−	−	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ/沈線文,単節縄文	加曽利E,口縁部片 [一括]
10	2	G15-33	縄文	浅鉢	−	−	−	−	−	灰褐色/灰褐色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/ﾅﾃﾞ	加曽利E,口縁部片 [一括]
10	3	H14-64	縄文	深鉢	−	−	−	−	−	灰褐色/灰褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ/沈線文	加曽利E,胴部片 [一括]
10	4	G15-33	縄文	浅鉢	−	−	−	−	−	橙色/にぶい赤褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗｹｽﾞﾘ/ﾅﾃﾞ	加曽利B精製土器波状口縁部片,内外面頸部沈線区画による連続刺突文,5と同一個体 [132住上層一括]
10	5	G15-33	縄文	浅鉢	−	−	−	−	−	橙色/にぶい赤褐色	雲母,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗｹｽﾞﾘ/ﾅﾃﾞ	加曽利B精製土器胴部片,内外面頸部沈線区画による連続刺突文,4と同一個体 [132住上層一括,G15-33]
10	6	G15-33	縄文	浅鉢	−	−	−	−	−	黒褐色/黒褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/ﾅﾃﾞ	加曽利B精製土器口縁部片 [一括]
10	7	I15-13	縄文	深鉢	−	−	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ/紐線文,縄文	加曽利B紐線文系粗製土器口縁部片 [一括]
10	8	I16-14	縄文	深鉢	−	−	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ/縄文	加曽利B縄文施文粗製土器口縁部片 [102A住上層一括]

第12表　間見穴遺跡（H15）グリッド出土土器（弥生土器）観察表

（　）は推定値

第図	挿図番号	遺構	器質	器種	遺存[%]	口径[cm]	底径[cm]	器高[cm]	最大径[cm]	色調[内/外]	胎土	調整[内/外]	備考　[出土状況]
27	1	I16-14	弥生	甕	3	−	−	−	−	暗赤灰色/灰赤色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ	折返し口縁部片,肥厚帯端部から下部にかけて附加条縄文 [102A住覆土一括]
27	2	I14-72	弥生	甕	3	−	−	−	−	にぶい褐色/にぶい褐色	長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	口縁部片,穿孔あり,肥厚帯端部に櫛状工具による沈線文が連続する [125住覆土上層一括]
27	3	H14-82	弥生	甕	3	−	−	−	−	にぶい橙色/にぶい赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/附加条縄文	頸部片,櫛描鋸歯状文下に附加条縄文 [一括]
27	4	I14-72	弥生	甕	5	−	−	−	−	にぶい橙色/黒褐色	長石,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	頸部片,櫛描鋸歯状文 [125住覆土上層一括]
27	5	I14-51	弥生	甕	3	−	−	−	−	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色	長石,砂粒	ﾅﾃﾞ/櫛描鋸歯状文	頸部片 [139住上層一括]
27	6	I14-90	弥生	甕	5	−	−	−	−	褐色/褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/櫛描波状文	頸部片 [137住上層一括]
27	7	I14-72	弥生	甕	5	−	−	−	−	灰黄褐色/にぶい黄褐色	長石	ﾍﾗﾅﾃﾞ/附加条縄文	胴部片 [125住覆土上層一括]
27	8	I14-72	弥生	甕	3	−	−	−	−	にぶい褐色/黒褐色	長石,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/附加条縄文	胴部片 [125住覆土上層一括]
27	9	I14-72	弥生	甕	3	−	−	−	−	にぶい褐色/黒褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/附加条縄文	胴部片 [125住一括]
27	10	I14-72	弥生	甕	3	−	−	−	−	にぶい黄褐色/明赤褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/附加条縄文	胴部片 [125住上層一括]
27	11	I14-72	弥生	甕	3	−	−	−	−	にぶい黄橙色/橙色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/附加条縄文	底部片,底外線刻あり [125住下層一括]
27	12	I14-90	弥生	甕	5	−	(7.0)	−	−	にぶい黄橙色/にぶい黄橙色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/附加条縄文	底部片 [137住上層一括]
27	13	I14-90	弥生	甕	5	−	−	−	−	にぶい褐色/灰黄褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/附加条縄文	底部片 [137住上層一括]
27	14	I14-72	弥生	甕	3	−	−	−	−	明赤褐色/灰褐色	長石,石英,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/附加条縄文	底部片 [125住ｶﾏﾄﾞ内一括]

第13表　間見穴遺跡（H15）グリッド出土土器（土師器・須恵器）観察表

（　）は推定値

第図	挿図番号	遺構	器質	器種	遺存[%]	口径[cm]	底径[cm]	器高[cm]	最大径[cm]	色調[内/外]	胎土	調整[内/外]	備考　[出土状況]
77	1	I14-72	須恵	甕	5	(24.7)	−	−	−	暗赤灰色/暗赤褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	口縁部片 [現道下攪乱層125住表土一括]
77	2	I15-21	須恵	高台付鉢	10	−	(12.7)	−	−	灰褐色/暗赤灰色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ	貼付け高台片,底外回転糸切り後全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [現道下攪乱層110B住表土一括]
77	3	I15-13	須恵	甕・甑	10	(41.2)	−	−	−	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,石英,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾀﾀｷ,ﾅﾃﾞ	口縁部片 [一括]
77	4	I14-03	須恵	甕・甑	5	(35.0)	−	−	−	灰色/灰色	長石,石英,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾀﾀｷ,ﾅﾃﾞ	口縁部片 [一括]
77	5	I15-04	土師	杯	45	(14.0)	6.2	−	−	橙色/橙色	長石,石英,雲母,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底内線刻あり,底外回転糸切り後ほぼ全面回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ [一括]
77	6	I14-73	土師	杯	45	(12.2)	5.8	4.3	−	明赤褐色/黒褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,手持ちﾍﾗｹｽﾞﾘ	外面煤付着,底外回転ﾍﾗ切り [一括]
77	7	I14-73	土師	杯	35	−	5.8	−	−	にぶい黄橙色/にぶい黄橙色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ/ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	底外回転ﾍﾗ切り [一括]

第14表　間見穴遺跡（H15）刀子観察表

（　）は残存値

第図	挿図番号	遺構	材質	製品名	全長［mm］	刀身長［mm］	身幅［mm］	背幅［mm］	茎長［mm］	茎幅［mm］	茎厚［mm］	重量［g］	出土状況	図版番号	備考
32	8	101住	鉄	刀子	(66.9)	(29.5)	11.6	2.8	(37.4)	8.0	2.5	(8.38)	上層	53	身・茎一部欠損
39	22	116A住	鉄	刀子	188.5	132.5	28.0	2.2	56.0	9.0	4.0	45.10	床面	53	ほぼ完形品,2点接合
41	11	119住	鉄	刀子	(83.8)	(48.5)	8.9	4.0	35.3	6.0	4.5	10.34	中層	53	身一部欠損
44	40	120A住	鉄	刀子	192.5	133.5	11.7	3.1	58.8	9.1	3.8	34.66	床面	53	ほぼ完形品
50	67	122住	鉄	刀子	(183.4)	126.2	8.8	3.5	57.2	6.8	3.6	(20.91)	下層	53	茎一部欠損
52	48	124住	鉄	刀子	(53.8)	(53.8)	8.0	3.2	–	–	–	(4.63)	床面	53	刀身先端部のみ遺存
55	52	125住	鉄	刀子	(120.5)	(63.8)	12.6	3.8	57.3	6.1	2.5	(22.00)	床面	53	
57	49	134住	鉄	刀子	–	(40.4)	6.8	1.8	–	–	–	(4.03)	下層	53	
57	50	134住	鉄	刀子	–	(35.3)	10.0	2.4	–	–	–	(3.95)	下層	53	同一個体
57		134住	鉄	刀子	–	(22.5)	11.8	3.4	–	–	–	(3.71)	下層	53	同一個体
61	38	137住	鉄	刀子	–	–	–	–	(75.4)	6.1	1.8	(7.07)	床面	53	
77	10	H14-28	鉄	刀子	–	(20.7)	9.6	3.4	–	–	–	(2.01)	表採	53	

第15表　間見穴遺跡（H15）鏃観察表

（　）は残存値

第図	挿図番号	遺構	材質	製品名	全長［mm］	鏃身長［mm］	鏃身幅［mm］	逆刺長［mm］	篦被長［mm］	篦被幅［mm］	茎長［mm］	重量［g］	出土状況	図版番号	備考
41	10	119住	鉄	鏃	(61.7)	32.5	37.7	14.0	(42.0)	5.7	–	(11.42)	中層	53	篦被・茎部欠損
47	64	121住	鉄	鏃	(68.5)	47.5	37.5	18.5	(41.5)	5.5	–	(11.54)	下層	53	篦被・茎部欠損
52	47	124住	鉄	鏃	(61.2)	–	–	4.8	24.0	9.5	14.5	(8.72)	中層	53	鏃先端部一部欠損
61	36	137住	鉄	鏃	(40.0)	29.0	17.3	2.5	–	–	–	(5.88)	中層	53	

第16表　間見穴遺跡（H15）銭貨観察表

（　）は残存値

第図	挿図番号	遺構	材質	製品名	縁外径［mm］	縁内径［mm］	郭外径［mm］	郭内径［mm］	縁厚［mm］	肌厚［mm］	重量［g］	出土状況	図版番号	備考
82	1	112溝	銅	北宋銭	23.75	21.30	8.78	7.05	0.97	0.81	2.504	中層	54	皇宋通寶（1039年始鋳）
82	2	112溝	銅	北宋銭	20.43	20.70	9.57	7.20	0.85	0.83	2.878	中層	54	天聖元宝（1023年始鋳）
82	3	112溝	銅	北宋銭	20.41	19.48	8.15	6.46	1.34	1.11	3.234	中層	54	元豊通寶（1078年始鋳）
82	4	112溝	銅	北宋銭	24.21	20.25	9.64	7.68	1.00	1.02	2.885	中層	54	皇宋通寶（1039年始鋳）
82	5	H14-28	銅	北宋銭	23.93	19.59	9.02	6.48	0.81	0.72	1.550	表採	54	元豊通寶（1078年始鋳）

第17表　間見穴遺跡（H15）その他の金属製品観察表

（　）は残存値

第図	挿図番号	遺構	材質	製品名	長さ［mm］	幅［mm］	厚［mm］	重量［g］	出土状況	図版番号	備考
76	1	105道	鉄	鎌	(36.4)	24.5	2.7	(8.96)	上層	53	同一個体
76	2	105道	鉄	鎌	(67.8)	22.4	2.1	(18.28)	上層	53	同一個体
36	14	109住	鉄	釘	(33.2)	4.2	2.7	(1.28)	中層	54	
39	23	116A住	鉄	鎌	(134.2)	27.8	2.0	(40.16)	下層一括	53	
41	12	119住	鉄	門金具	–	5.0	3.8	(4.68)	床面	54	
41	13	119住	鉄	飾金具	–	–	–	(15.18)	床面	54	
41	–	119住	鉄	鉄滓	–	–	–	470	中層	54	実測図なし,写真図版のみ
28	4	120B住	鉄	門金具	–	8.2	4.1	(15.89)	中層	54	
50	61	122住	鉄	釘	(18.4)	3.2	3.2	(1.26)	中層	54	
50	62	122住	鉄	釘	(20.5)	4.6	3.4	(1.74)	中層	54	
50	63	122住	鉄	釘	(36.1)	5.1	1.4	(1.57)	中層	54	
50	64	122住	鉄	釘	(16.8)	3.0	3.0	(0.92)	下層一括	54	
50	68	122住	鉄	鑿	(225.6)	12.0	5.0	(97.64)	下層	54	
50	69	122住	鉄	鑿	(65.0)	18.3	6.8	(46.84)	下層	54	
51	3	123住	鉄	つり針	(21.4)	3.9	2.3	(1.69)	上層一括	54	
55	53	125住	鉄	火打金	(59.0)	9.0	7.2	(18.95)	下層	54	
55	55	125住	青銅	巡方	36.5	35.0	9.0	21.60	中層	54	
61	37	137住	鉄	不明	(87.8)	11.0	7.2	(48.46)	中層	54	
61	39	137住	鉄	不明	(87.6)	9.8	7.9	(35.55)	床直	54	
61	40	137住	鉄	釘	(28.5)	5.5	5.2	(4.19)	中層	54	
62	9	139住	鉄	鎌	(50.6)	34.3	5.2	(33.51)	下層	53	

第18表　間見穴遺跡（H15）土製品観察表

（　）は残存値

第図	挿図番号	遺構	製品名	長さ［mm］	幅［mm］	厚［mm］	重量［g］	出土状況	図版番号	備考
44	35	120A住	紡錘車	(64)	(64)	6.0～16.0	(14.70)	下層	55	3/4欠損
44	36	120A住	支脚	(167)	(49)	(44)	(275.96)	ｶﾏﾄﾞ内,中層	55	同一個体2点推定復元
44	37	120A住	支脚	(140)	(120)	(109)	(1.24kg)	ｶﾏﾄﾞ内	55	1/2欠損
47	62	121住	紡錘車	(68)	–	7.0	(18.42)	中層	55	1/2欠損,杯底部を再利用
47	63	121住	支脚	215	65	56	860	ｶﾏﾄﾞ内	55	完存
50	57	122住	羽口	–	–	–	(12.23)	上層一括	55	先端部片,溶鉄付着
50	58	122住	有孔円盤	径67	孔径8	9	(39.78)	上・中層	55	土器底部転用
50	59	122住	円盤	25	21	6	4.04	一括	55	須恵器転用
50	60	122住	粘土塊	–	–	–	(503)	床面	55	カマド補強材
52	46	124住	紡錘車	70	–	12	(25)	上層	55	1/2欠損,土器底部を再利用
55	54	125住	支脚	147	92	89	(790)	ｶﾏﾄﾞ内	55	1/2欠損
19	20	136住	紡錘車	–	–	(17)	(24.96)	上層一括	55	2/3欠損
23	23	SB026住	紡錘車	–	–	17	(13.57)	上層一括	55	3/4欠損
26	41	SB028住	紡錘車	(35)	(26)	(16)	(12.63)	上層一括	55	3/4欠損

第19表　間見穴遺跡（H15）石製品観察表

（　）は残存値

第図	挿図番号	遺構	石材	製品名	長さ［㎜］	幅［㎜］	厚［㎜］	重量［g］	出土状況	図版番号	備考（　）旧番号
34	5	102B住	安山岩	砥石	(75)	(4.3)	(4.1)	267.93	床面	56	
34	6	102B住	砂岩	砥石	(76)	(5.0)	(4.8)	263.87	床直	56	
12	5	103A住	軽石	軽石	131	82	57	87.16	床直	58	白色系　擦痕10本
11	3	106A周	閃緑岩	石皿	(107)	(54)	(42)	(342)	下層	57	
36	15	109住	砂岩	磨石	715	40	115	44.72	上層一括	56	
36	16	109住	流紋岩	磨石	435	24	13	19.63	上層一括	56	
37	22	110B住	軽石	軽石	68	74	36	31.67	床面	58	白色系　擦痕１本
14	11	111住	砂岩	敲石	79	28	14	46.86	下層	57	
14	12	111住	砂岩	用材	99	68	12	174.45	下層一括	58	
39	21	116A住	滑石	紡錘車	31	孔径9	13	20.33	床面	56	被熱
44	38	120A住	安山岩	砥石	(55)	(31)	(23)	(77.06)	柱穴内中層	56	
44	39	120A住	安山岩	砥石	(39)	(40)	(10)	(22.22)	床面	56	有孔
60	65	122住	軽石	軽石	29	16	16	2.11	下層	58	白色系
60	66	122住	軽石	軽石	22	23	15	2.08	中層	58	白色系
52	44	124住	軽石	軽石	35	25	22	5.8	下層	58	黒色系
52	45	124住	軽石	軽石	18	25	16	1.6	上層一括	58	白色系
27	32	132住	軽石	軽石	83	68	45	44.25	一括	58	白色系
27	33	132住	安山岩	砥石	(60)	(52)	(22)	(55.72)	上層	56	
27	34	132住	凝灰岩	礫	74	49	19	98.98	床面	58	
57	51	134住	軽石	軽石	31	24	15	3.52	一括	58	黒色系
57	52	134住	軽石	軽石	29	17	13	1.90	一括	58	白色系
57	53	134住	軽石	軽石	20	21	13	2.21	一括	58	白色系
57	54	134住	軽石	軽石	16	17	8	0.66	一括	58	黒色系
19	21	136住	砂岩	敲石	99	58	(32)	(239)	下層	57	
19	22	136住	軽石	軽石	67	68	50	(40.46)	下層	58	白色系
19	23	136住	黒曜石	剥片	(34)	(29)	(6)	(6.92)	上層	56	
23	24	SB026住	砂岩	磨石	165	39	24	234.58	床面	56	完存,穿孔あり
23	25	SB026住	砂岩	磨石	79	30	23	82.37	中層	56	完存
23	26	SB026住	砂岩	石皿	(149)	(110)	(63)	(1.35kg)	床面	57	破片
23	27	SB026住	砂岩	石皿	(84)	(72)	(49)	(355)	床面	57	破片
23	28	SB026住	石英	不明	6.4	5.6	1.9	88.91	床面	58	破片
25	33	SB028住	安山岩	敲石	193	84	77	2.34kg	下層	57	完存,35とセット
25	34	SB028住	砂岩	敲石	120	62	52	0.55kg	下層	57	完存,35とセット
25	35	SB028住	安山岩	石皿	(165)	(245)	(62)	(3.51kg)	壁際凹み内	57	半欠,33,34とセット
26	36	SB028住	軽石	軽石	(48)	(77)	(35)	(15.14)	下層	58	白色系,砥石利用
26	37	SB028住	軽石	軽石	(41)	(58)	(43)	(14.29)	下層	58	白色系,砥石利用
26	38	SB028住	軽石	軽石	(40)	(55)	(41)	(10.09)	下層	58	白色系,砥石利用
26	39	SB028住	軽石	軽石	(40)	(36)	(38)	(7.86)	下層	58	白色系,砥石利用
26	40	SB028住	緑色凝灰岩	管玉	36	13	孔径5	10.83	上層	56	完存
27	15	G14-93	安山岩	石皿	(92)	(91)	(39)	(628)	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	57	(H14-019)
77	8	G15-02	砂岩	砥石	(65)	(26)	(14)	(39.24)	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	56	
77	9	G16-01	砂岩	砥石	(72)	(29)	(15)	(47.86)	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	56	
27	16	G14-97	軽石	軽石	25	19	11	1.77	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	58	(H14-016)
27	17	G15-30	軽石	軽石	29	14	9	2.46	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	58	(H15-020)
10	9	G15-66	黒曜石	剥片	(14)	(20)	(4)	(1.79)	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	56	(H15-012)
10	10	G16-01	瑪瑙	剥片	(26)	(17)	(6)	(3.02)	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	56	
10	11	H15-54	碧玉	剥片	(19)	(18)	(4)	(2.76)	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	56	
8	1	I15-00	黒曜石	剥片	(24)	(20)	(6)	(2.63)	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	56	旧石器

第４章　道地遺跡

第１節　調査の概要

本遺跡の主要部分は、平成６年度から調査が開始され、同９年度に終了した。その成果は、既に「船橋印西線埋蔵文化財調査報告書２」として報告されている。その後、平成14から15年度にかけて未調査部分約2,000㎡の調査が実施されるに至った。そのため今回の報告は規模としては小さいものであるが、既報告分を補完するという意味では一応の成果を上げたものといえる。

調査地点としては計５か所となり、既報告分で触れているように一部検出されていた遺構を含め、住居跡７軒と溝２条を検出できた。その所属時期については、ほぼ前回調査・報告されたものと一致する。なお、土層については図示したように暗色帯（第２黒色帯）は明確に捉えることができたが、上部暗色帯やAT層（火山灰）を含む第６層については、場所により不明瞭な地点もあった。以下、検出された遺構である弥生終末期の住居跡から時代順に述べていくこととする。

第２節　検出された遺構と遺物

今回の調査では、図示したように地点としては計５か所となる。また、既報告分で触れているように完掘できず、今回の調査で全体を確認した遺構を含めると、時期的にみれば弥生終末期から古墳時代初頭にかけての住居跡６軒、古墳時代後期の住居跡１軒と遺物の出土が認められず所属時期の確定できなかった溝状遺構２条となる。さらにその時代・遺構等の内容についてみると、ほぼ前回調査報告されたものと一致する。今回調査分の遺構番号は前回報告の最終番号が102まで付されていたので、それを踏襲することとし、103から始めることとした。また、前回調査報告分の遺構番号は新しい番号は使用せず、前回の番号のまま記述することとした。なお、記述の順序については平成14年度、平成15年度の調査順とした。

第20表　道地遺跡（H14・15）遺構一覧

遺構番号	遺構種類	時期	グリッド	備考（旧番号）	挿図	図版	頁	遺構番号	遺構種類	時期	グリッド	備考（旧番号）	挿図	図版	頁
103住	竪穴住居跡	弥生末~古墳初	P26-33	H14調査	92,93	61,65,67	169	051住	竪穴住居跡	弥生末~古墳初	Z14-71	H15調査（051号跡）	97	63,66	179
104住	竪穴住居跡	弥生末~古墳初	Q26-90	H14調査	94	61,65,67	175	082住	竪穴住居跡	弥生　後	W18-77	H15調査（082号跡）	98	63	180
105住	竪穴住居跡	弥生末~古墳初	P26-07	H14調査	95	61,65	175	108住	竪穴住居跡	弥生末~古墳初	Y15-09	H15調査（SI2003）	96	63,66,67	177
106住	竪穴住居跡	古墳　後	Q25-60	H14調査	99,100	62,66,67	180	109溝	溝状遺構	近世	Y17・X18	H15調査	－	64	183
107溝	溝状遺構	中世	Q25-07	H14調査	102	62	183								

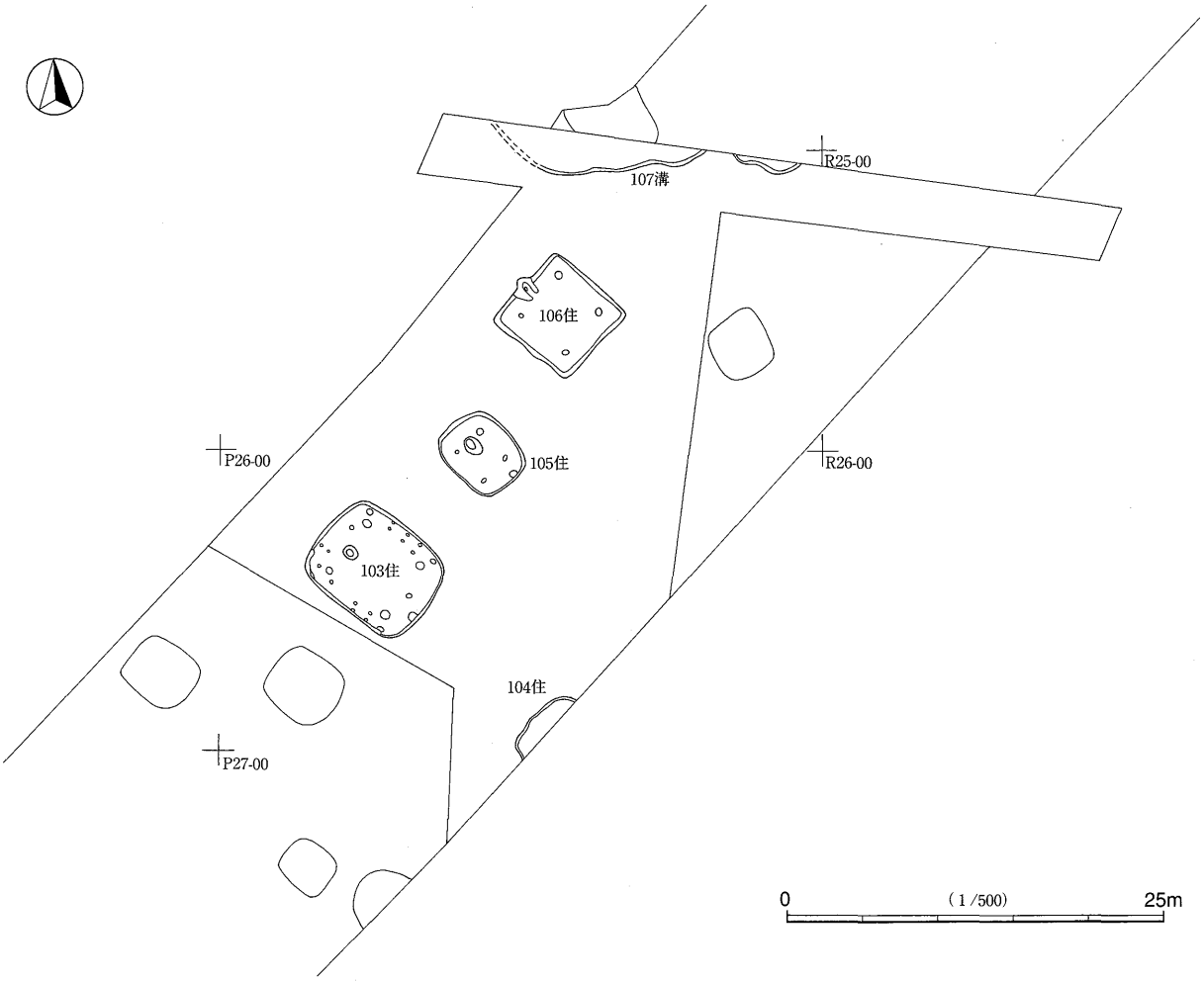
１　弥生時代後期から古墳時代前期

当該期に属する遺構として、平成14年度分として103住・104住・105住の３住居跡が検出され、平成15年度分では051住・082住・108住の各住居跡が検出・再調査されている。

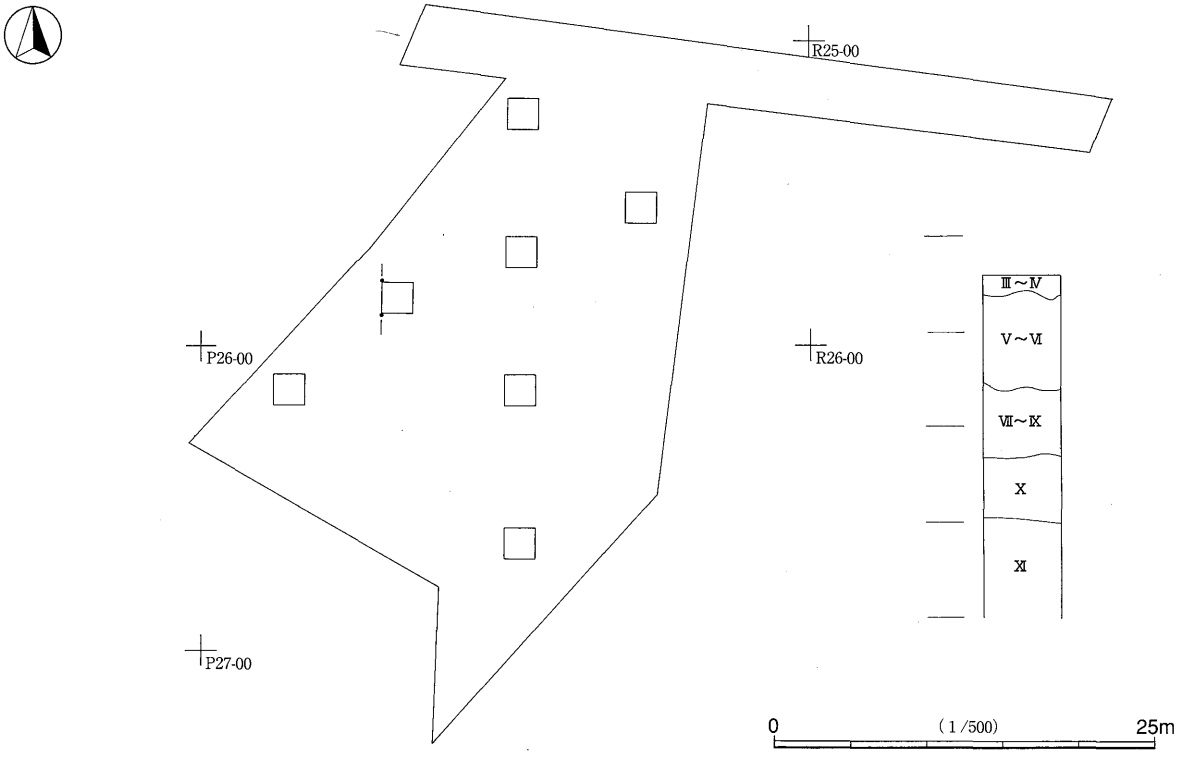
（１）竪穴住居跡

１０３住（第92・93図、第21～24表、図版61・65・67）

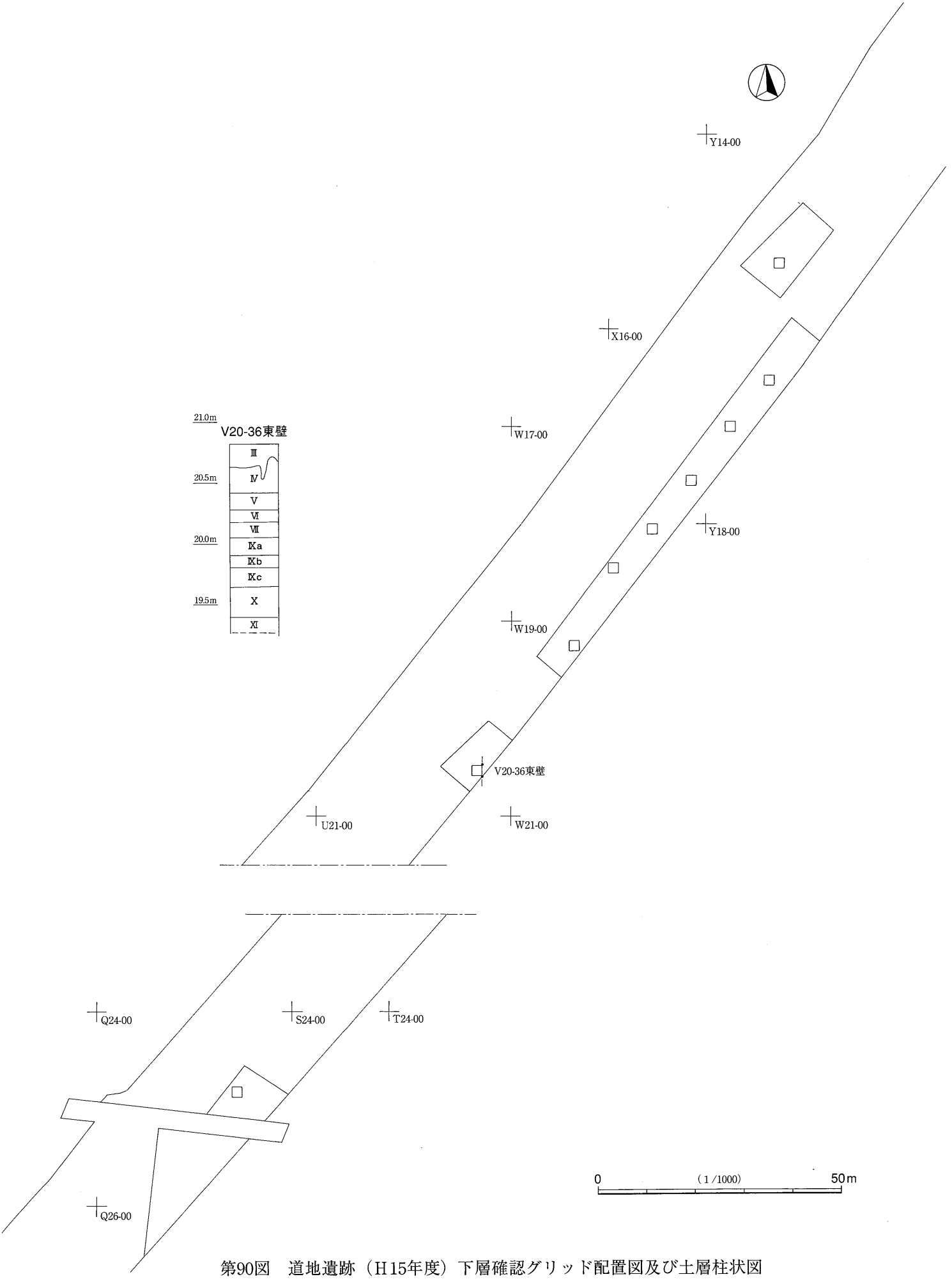
本住居跡は調査区の西寄りＰ26区から検出され、平面形は長軸方向に8.5m、幅6.7mを計測し、ほぼ隅丸長方形となる。主軸方向はN-50°-Wを示す。確認面からの掘り込みは0.6mと深く、床面・壁面ともにしっかりした遺存状態を保っていた。壁溝は側壁に沿って巡らされているが全周には至っていない。炉跡



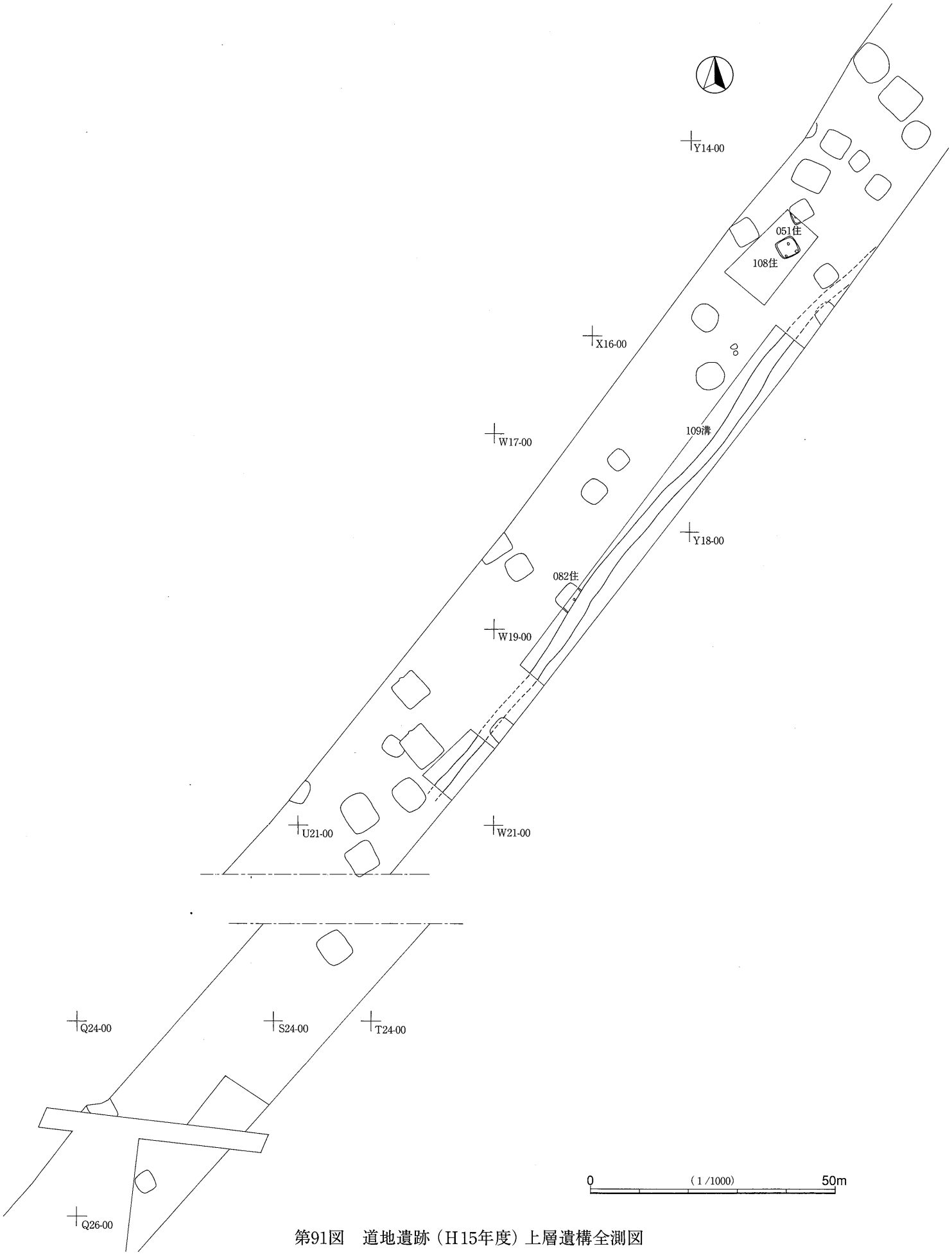
第88図　道地遺跡（H14年度）上層遺構全測図



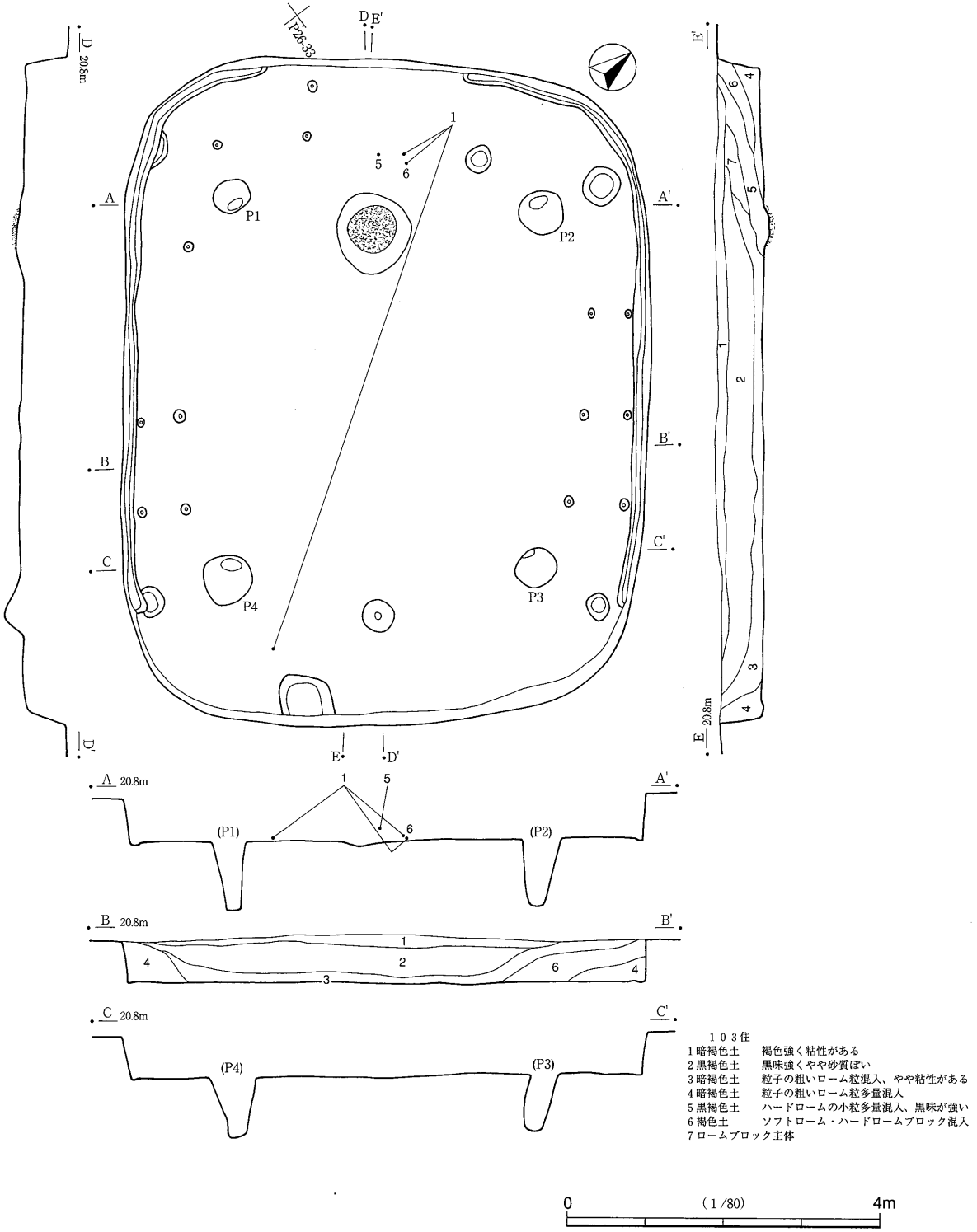
第89図　道地遺跡（H14年度）下層確認グリッド配置図及び土層柱状図



第90図　道地遺跡（H15年度）下層確認グリッド配置図及び土層柱状図

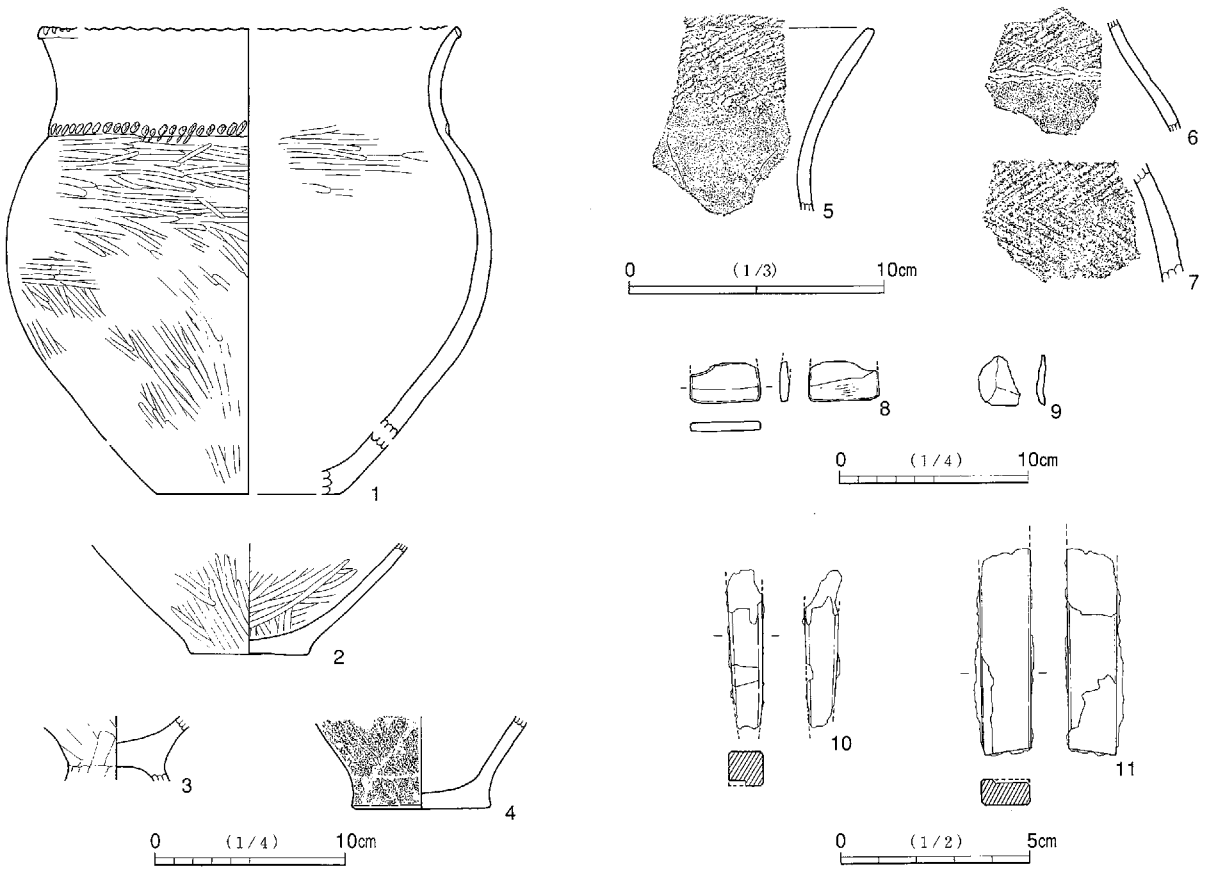


第91図　道地遺跡（H15年度）上層遺構全測図



第92図　１０３住（１）

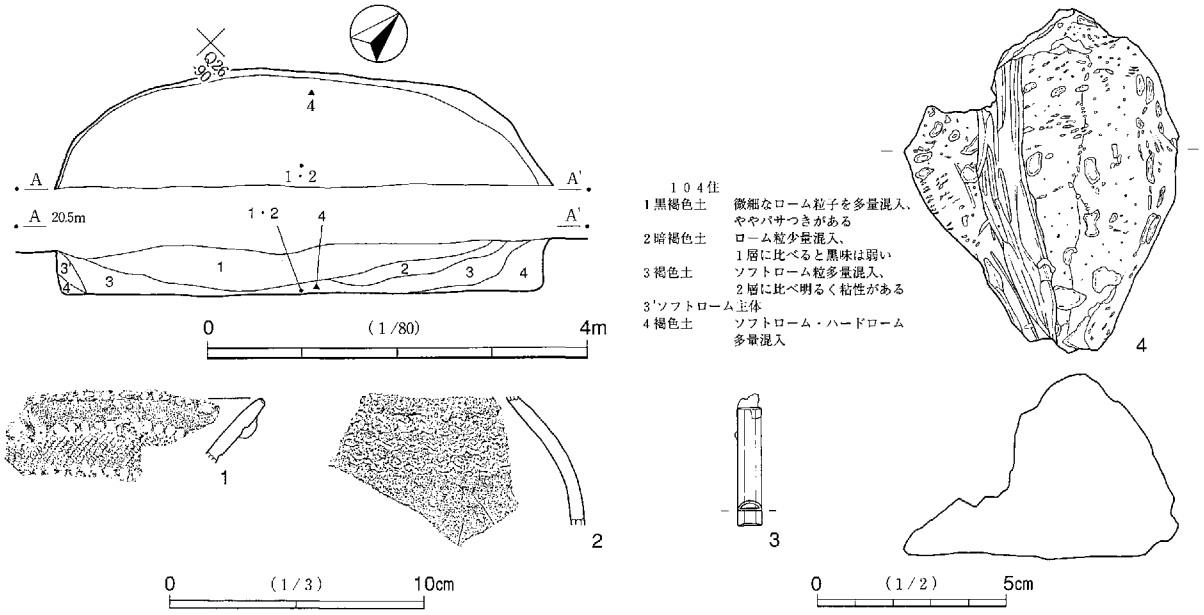
には円形の掘り込みが認められ、中央部では数cmの厚みをもって焼土の堆積がみられた。柱穴は72cm～90cmと深い主柱穴の他に梯子穴と壁柱穴が検出された。梯子穴の深さは約30cm、壁柱穴では20cm～25cmの深さを有していた。また、主柱穴の脇に、側壁に沿った位置に径20cm～30cmの掘り込みが検出されているが、いずれも５cm～15cm程度の深さで柱穴とは考えにくい深さであった。他に南側コーナー寄りに20数cmの深さを持つ貯蔵穴と思われる落ち込みが検出されている。遺構内での堆積土は大きく３層に分離でき、中央



第93図　１０３住（２）

部に流れ込むような自然堆積の状態を示していた。出土遺物は土器・砥石・鉄製品が出土したが、土器以外の遺物は覆土中からの出土で本住居跡に確実に伴うというものではなかった。

１は甕形土器で１／２程度の遺存となる。口唇部には刻目が施され、輪積上にも同様な工具によって押捺されている。器面はヘラ状工具によりナデ整形後、全面にヘラミガキによって調整されている。器面は脆く、劣化しており、内面では剥落が認められる。色調は黒褐色ないし淡褐色を呈する。２は壺形土器の底部となろう。胎土は精選され赤褐色を呈しており、ヘラミガキされた器面は、あたかも赤彩を施したような感覚さえ受ける。３は台付甕の脚部となる。器面ではヘラによるナデ整形が認められる。色調は褐色を呈し、内面では黒褐色となる。４は甕形土器の底部で、器面にはＲ撚りの細かい縄文が施文される。色調は淡い褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。５～７はいずれも甕形土器の破片で、５は口唇部以下に縄文（無節のＬ）が施文され、器厚は3.5㎜～５㎜と薄い。胎土は精選され、若干雲母を含む。色調は淡褐色を呈する。６は口辺部から胴上部の破片で、中央部には二条の結節部の痕跡が認められる。以下では縄文（無節のＬ）が施文され、ここでも器厚は３㎜～５㎜と薄い。色調は淡い赤褐色で内面は淡褐色となる。胎土はよく精選されている。７は胴部片で、撚りの異なる原体を使用し、羽状の効果を持たせている。色調は淡い褐色で、胎土には２㎜～３㎜となる大粒の石英・長石を含有する。なお同一個体の小破片が数点出土している。８・９は砂岩製の砥石の一部と思われる。研磨面は認められるものの覆土中からの出土で本住居跡に伴うものではない。10・11は鉄製品で、10は釘の一部と思われる。ただ、この２点も覆土中からの出土であり、所属時期については明確にできない。本住居跡からの出土遺物は、以上のようなものであるが、土器では南関東系の赤彩の施された壺の小破片や大型壺の破片と縄文施文の甕形土器片等が約



第94図　１０４住

90点ほど出土しており、所属時期としては、弥生終末期に位置付けられる内容と考えられる。

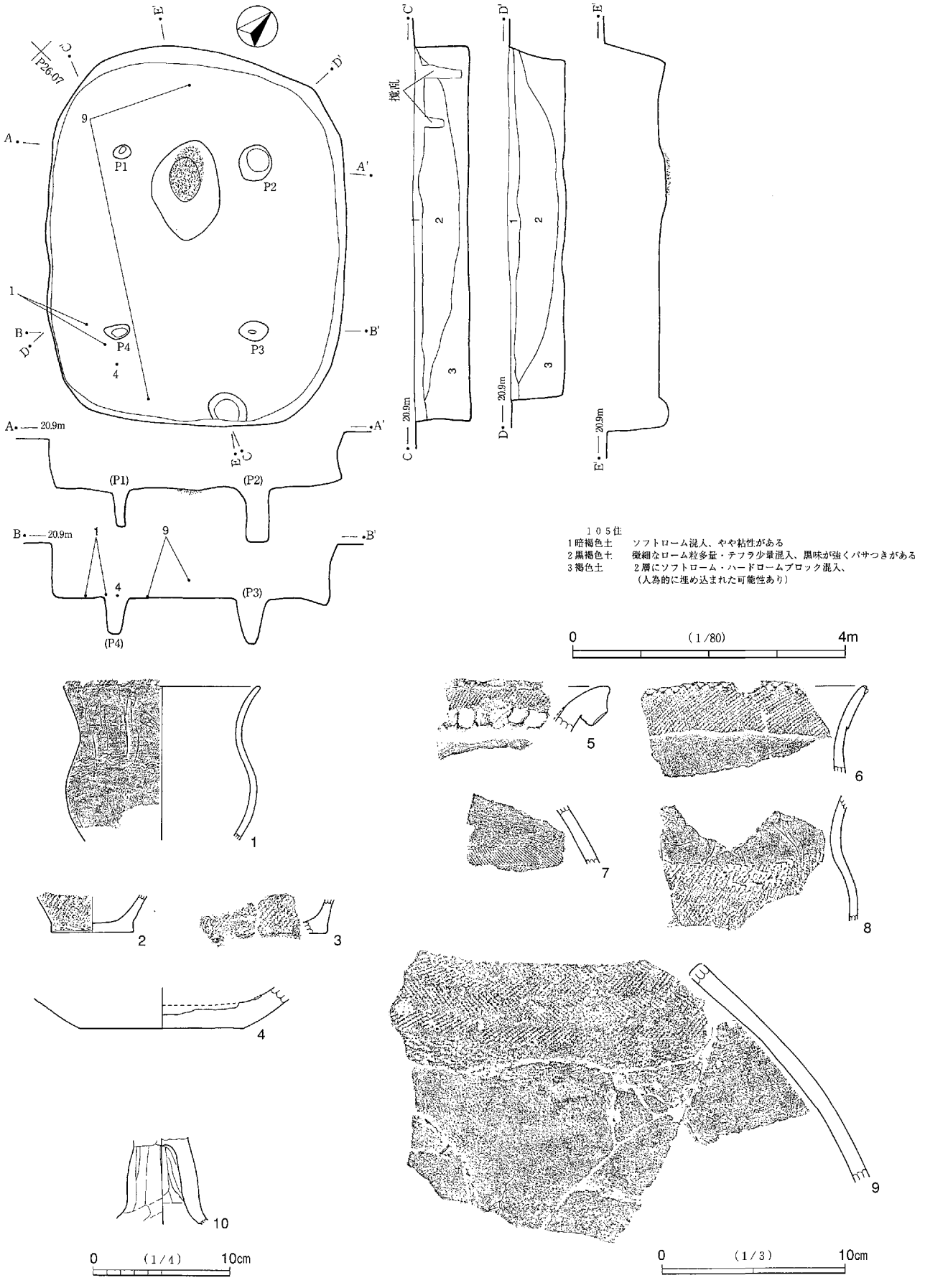
１０４住（第94図、第21～24表、図版61・65・67）

本跡は、その大半が事業地外にあったため一部の検出にとどまった。103住の南東方向11ｍの地点に位置し、主軸方向は周辺の住居跡と同様となるものと思われた。103住を中心として構成された集落の一棟であろう。平面形は隅丸を呈すものと考えられた。また、短軸方向では約5.3ｍほどの長さとなろう。その他の付属施設についての詳細は把握できなかった。なお、出土遺物については住居跡の大半部が事業地外ということもあり、僅少でしかなかった。土器・軽石・銅製品等が出土したが、銅製品は覆土中からの出土であり、本住居跡に伴うかどうかは疑問である。

１は甕形土器の口縁部で、口唇部にも縄文が押捺される。縄文は単節のＬＲで、その上下に棒状工具による刺突が施される。さらに粘土瘤の貼付けも認められ、より北関東的な甕といえる。２は、胴上部の破片で大きく湾曲しているため壺形となろう。器面には３条の結節縄文が巡る。１・２ともに胎土は精選され、色調はほぼ褐色を呈す。３は銅製品で、破損部は鉄製となっている。一応図示したが後世のものとなろう。４は軽石で、底面は平坦な面を呈し、研磨具として使用している。また、側面にも多数の溝が認められる。以上の４点が本住居跡から出土した主な遺物となるが、出土状況から３を除く３点は本跡に近い所産となろう。他には古式土師器の小破片が数点検出されている。

１０５住（第95図、第21・22表、図版61・65）

本跡は、103住の東に隣接した位置で検出された。平面形は長軸方向に5.6ｍ、短軸4.4ｍを計測し、隅丸長方形ないしは小判形に近い。主軸方向はN-44°-Wを示す。確認面からの掘り込みは0.9ｍと深く、一部に耕作による攪乱もみられたが床面・壁面ともにしっかりした遺存状態を保っていた。ここでは周溝を認めることはできなかった。炉跡の部分は楕円形を呈し、掘り込みは中央部でも数cm程度と浅かった。柱穴は４か所の主柱穴のみで構成され、床面下54cm～78cmにまで掘り下げられていた。また、東南コーナー寄りに、側壁に沿って貯蔵穴らしき落ち込みが50cm～56cmの深さで認められた。遺構内での堆積土は大きく


P26.07
P1
P2
P3
P4
撹乱
20.9m
(P1)
(P2)
(P3)
(P4)
105住
1暗褐色土　ソフトローム混入、やや粘性がある
2黒褐色土　微細なローム粒多量・テフラ少量混入、黒味が強くパサつきがある
3褐色土　2層にソフトローム・ハードロームブロック混入、
（人為的に埋め込まれた可能性あり）
0　(1/80)　4m
0　(1/4)　10cm
0　(1/3)　10cm

第95図　１０５住

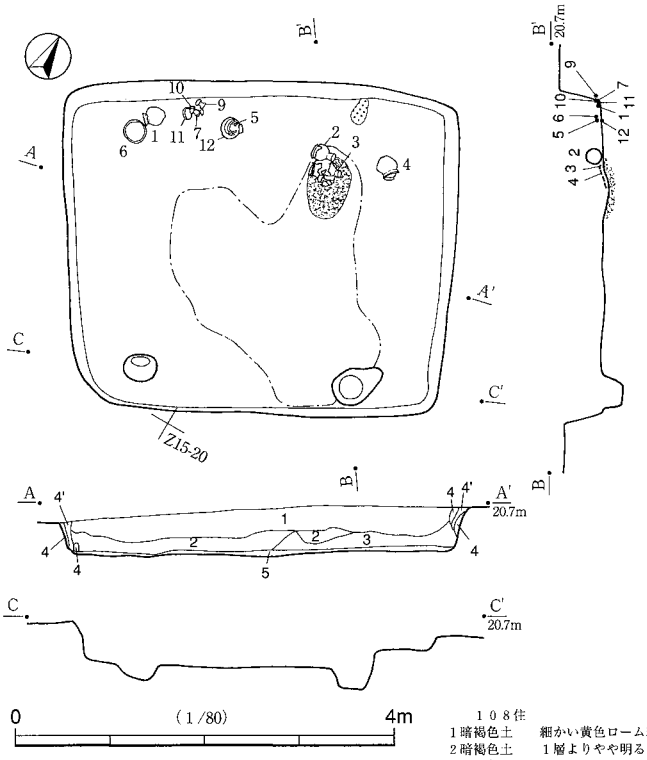
2層に分離でき、中央部に流れ込むようなレンズ状の堆積を示していた。出土遺物については図示したように土器のみであった。

1は小型の甕で底部を欠損する。口唇部には縄文が施文され、胴上部では2段の結節縄文が横方向に認められる。器面にヘラによるナデ整形と一部に刷毛目痕が確認できる。器面の色調は、赤彩を思わせるような色彩で胎土も赤褐色を呈している。2～4は底部片で、器面には密に縄文が施文されている。5・6は口縁部片で、口縁端部に粘土紐を巡らせ細縄文（ＬＲ）を施した後、指頭による押捺を加えている。また、器内外面には僅かであるが赤彩の痕跡が認められる。6は折り返した頂部をヘラ状工具で変化をもたせ、以下縄文を施している。色調は黒褐色を呈している。7～9は胴上半部の破片で、7は極細の原体（ＲＬ）を用いており、上端にはＳ字状の結節が認められる。無文部には赤彩が施されており、壺形土器の一部である。8は小型の甕で、無文帯の下には縄文の末端が認められ下から上へと施文したことが理解できる。色調は黒褐色となる。9は大型壺の一部で、この他にも接点を見出せなかった破片が数点存在する。胴上半部には原体の撚りが異なる縄文を使用し羽状の効果をもたせ、その下には数条の結節縄文を巡らせる。無文部では僅かに赤彩の痕跡が認められた。4の底部は内面が黒褐色を呈しているが、器内外面にみられる剥落の状態や淡褐色を呈した器面の色調から9と同一個体と考えられる。10は高杯の脚部で赤彩が施されている。覆土からの出土であり、本跡よりも後出のものとなる。以上が本住居跡から出土した土器群であり、その出土状況から1、4・9については本跡に伴うものか時期的に近いものとなろう。また、2・3・6・8は、いわゆる北関東系の土器群であり、前者とほぼ同一時期として捉えられよう。なお、他に図示できなかった土師器を含む小破片が数十片出土している。

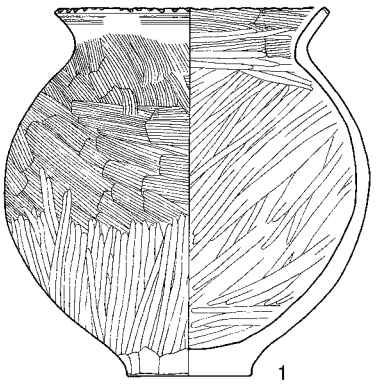
１０８住（第96図、第21・22表、図版63・66・67）

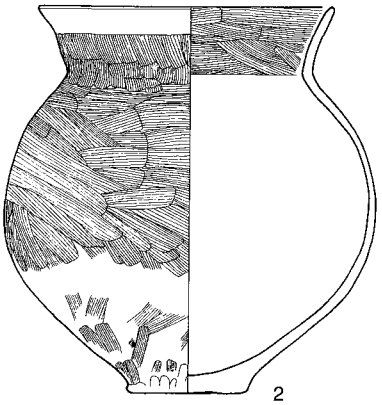
本住居跡は、残された未掘部分から検出されたものであり、Y15・Z15区にかかる位置に存在した。平面形は4.2m×3.5mで僅かに長方形となる。主軸方向はN-30°-Wを示し、051住と同様な値を示す。本跡での掘り込みは、検出面から約40cmの深さを有し、覆土の一部に攪乱層がみられたものの床面にまでは至っていないため遺存状態は良好なものであった。炉跡は北側コーナー寄りに位置し、4cm～5cmの凹みに焼土混入土が認められた。また、その北側に接して小さな焼土塊がみられたが、床面には接していない。ピットは2か所検出できたが、Ｐ１の深さは15cm、Ｐ２の深さは20cmと浅く、主柱穴といえるような深さではない。床面では炉跡部からピットを結ぶ範囲で硬化した面を検出できた。なお、遺物は土器のみであったが、炉跡部から北壁にかけての床面上から計12点の甕・台付甕・高杯・器台等が出土しており、確実に遺構に伴う遺物として認識できた。

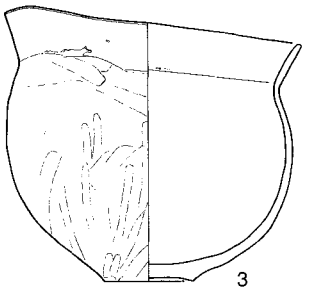
1～3は甕形土器であり、いずれも完形に近い。1は口縁から胴上半部に至るまで丁寧に刷毛目整形を加え、口唇部にも同一工具による刻目を施す。胴下半部は縦方向にヘラナデを加え調整する。色調は褐色ないし黒褐色を呈する。2も刷毛目主体の整形となるが、胴部では異方向に刷毛目が施されており、仕上げとしては粗い。器面は黒褐色で、内面は褐色となっている。3は小型品で、口縁は僅かに外反する程度である。器厚も薄く、重量感もない。器面はヘラナデにより簡単に仕上げられており、作りとしては粗雑なものといえる。色調は口縁では黒褐色、胴部以下は赤褐色となる。4・5は台付甕となり、これらもほぼ完形品である。4は刷毛状工具により口唇部に刻目を施すが、胴部に刷毛目を観察することはできない。器面はヘラにより簡単に整形され、内面ではミガキ状の調整が施されている。色調は褐色ないし黒褐色となる。5はやや小型品となり、器面には軽い刷毛整形が加えられ、口縁内面に及ぶ。胴下半部はヘラによ

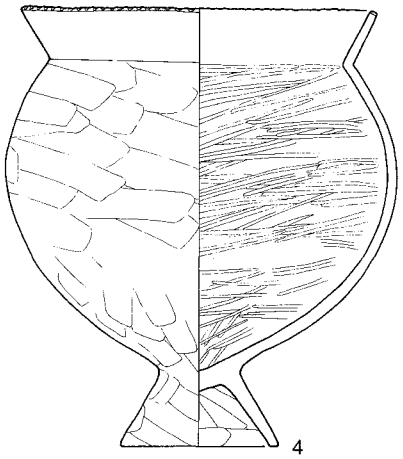


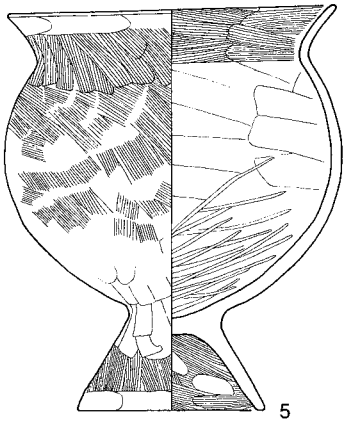
１０８住
1暗褐色土　細かい黄色ローム粒（1~2mmφ）多量混入
2暗褐色土　1層よりやや明るいがほぼ同様
3黄褐色土　2層にロームの黄色土を多量混入
4黒色土　ローム粒多量・炭少量混入、しまりは良く固い
4'黒色土　4層に比べややしまりは弱い
5暗褐色土　ローム粒多量混入、しまりは良く固い

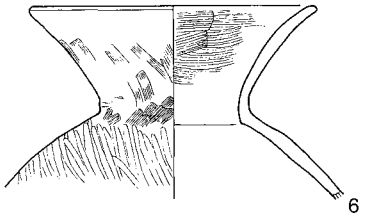


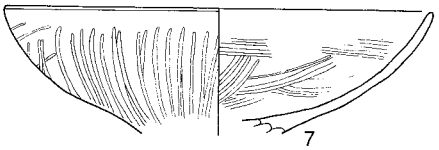


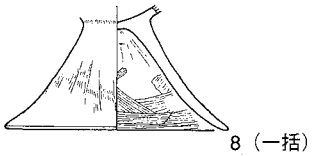


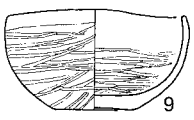


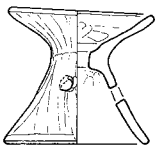


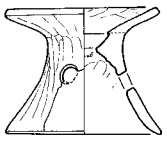


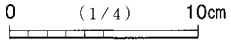










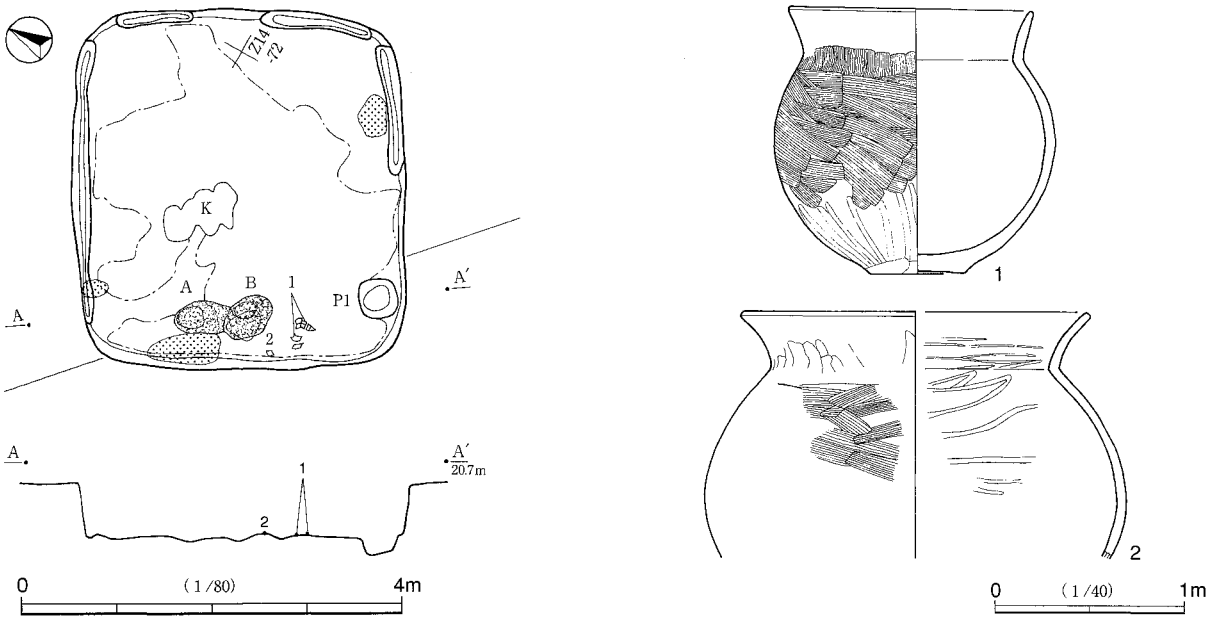


第96図　１０８住

るナデ整形となるがやや粗い。内面の調整は、4と同様な方法となる。器面の色調は赤褐色及び黒褐色となり、黒褐色部には煤状の炭化物が多量に付着している。6は壺形土器で、口縁から胴上部のみが遺存したものである。口縁は「く」の字に大きく外反し、胴部は球形に近い形状と推測される。器面の整形についてみると、口縁内外面では刷毛目整形後にヘラにより丁寧にナデ調整が施され、胴部ではヘラミガキに近い調整が認められる。色調は胎土を含めて赤褐色を呈し、胴部内面では淡褐色に変色し脆く剥落が著しい。7・8は高杯となろう。7は杯部のみの遺存で、内外面はヘラミガキにより仕上げられている。内面の一部には赤彩らしき痕跡を残す。8は脚部のみの遺存で、その形状から高杯となろうが脚部での穿孔は認められない。器内外面では刷毛目による整形が認められる。色調はともに褐色ないし赤褐色を呈している。9は埦形土器であり、小型品となろう。口縁は僅かに内湾する。器内外面では顕著なミガキ調整が認められる。10・11は器台で、脚部の一部が欠損するのみである。ともに同様な作りで、中央穿孔部の直上では有段となっている。脚部の孔は、位置からして3か所となろう。色調は2点とも赤褐色を呈する。12は手捏土器となる。器面は成形後、軽くヘラにより整形し、口縁内面では刷毛目痕がみられる。色調は黒褐色で、口縁及び内面は淡褐色となっている。以上が本住居跡から出土した土器群で、これらはまさしく日常什器での一括品として捉えられる土器群となろう。その意味で貴重な資料といえる。また、覆土中からの出土は少なく図示できるものは皆無であった。

051住（第97図、第21・22表、図版63・66）

本跡はZ14区の南西隅に位置し、前回調査時にコーナー部分が未調査となった住居跡である。そのため遺構番号は前回の番号を使用した。今回の調査では、2か所の炉跡の全容と約20cm弱の深さを有したピット1か所を検出できた。おそらくピットは柱穴ではなかろうか。この結果、平面形は炉1に主軸方向をとると、3.8m×3.5mの隅丸方形となり、N-60°-Eを示す。前回の調査で部分的にみられた周溝は検出できなかった。また、床面は中央部に一部攪乱が認められたが、大半は堅くよく踏み固められていた。炉跡は床面よりも5cm程度窪んでおり、炉1に焼土の堆積が顕著に認められた。遺物は2点出土している。いずれ



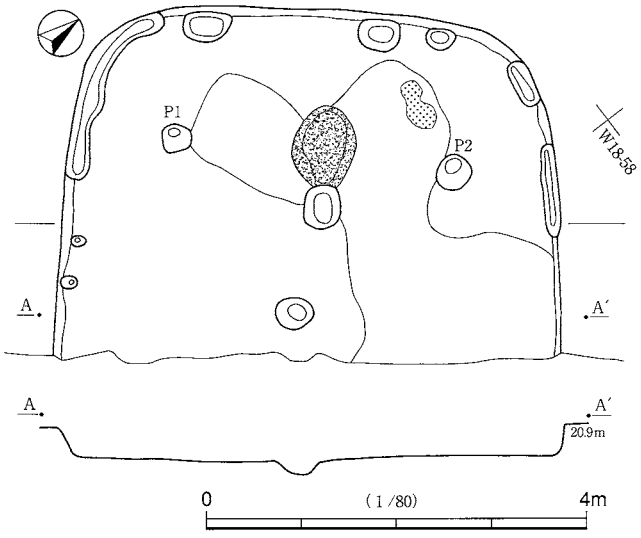
第97図　051住

も床面直上であり、本跡に伴うものと考えてよい。

1は小型の甕で、胴の一部と口縁部の約1／2を欠損する。口縁は「く」の字状に緩やかに立ち上がり、胴部は球形に近い。器面の整形は胴上半部で刷毛目、底部ではヘラによるナデ整形がみられる。なお、内面は丁寧に調整されてはいるが、脆く剥落が著しい。色調は淡褐色を呈す。2は口縁から胴部にかけて約1／4ほどの遺存で、辛うじて図示できたものである。口縁は外反し横ナデ、胴部では浅い刷毛目痕がみられる。内面は前者とは異なり、しっかりした作りでヘラによるミガキも認められる。色調は黒褐色を呈す。なお、本跡での出土土器として、前回報告分では縄文の施文された甕類の破片と台付甕の脚部を提示したが、今回出土した甕形土器がより本跡に近い遺物と考えられよう。

０８２住（第98図、第21表、図版63）

本跡も前回その1／2弱を調査しており、未検出部の継続調査となった。しかし、未掘部分を1.4mほど覆土を除去したところで109号とした溝によって削平されており、その全容を把握することはできなかった。新たに発見されたものとして、南側壁に沿った壁柱穴2か所（床面下4～5cm）と梯子穴と考えられる深さ15cmのピット1か所のみであった。なお、床面では炉跡から東部分でよく踏み固められていた。出土遺物は皆無であった。前回の調査においても出土遺物は少なく、赤彩の施された壺の口縁部片や北関東系土器の胴部などが若干みられた。



第98図　０８２住

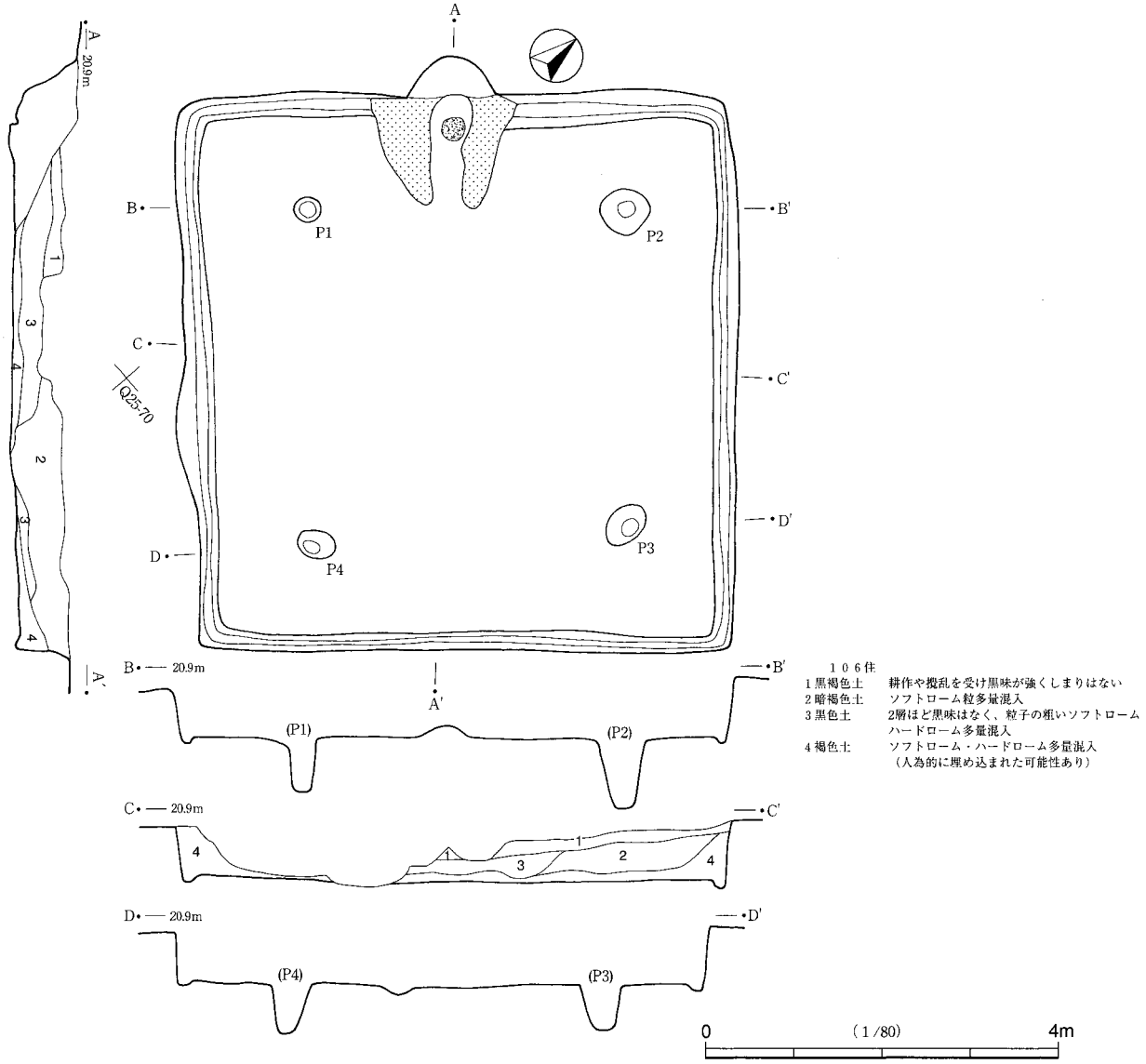
2　古墳時代後期

いわゆる鬼高期に属するもので、住居跡1軒が検出されたのみである。前回の調査においても検出軒数は少なく9軒が確認されただけである。

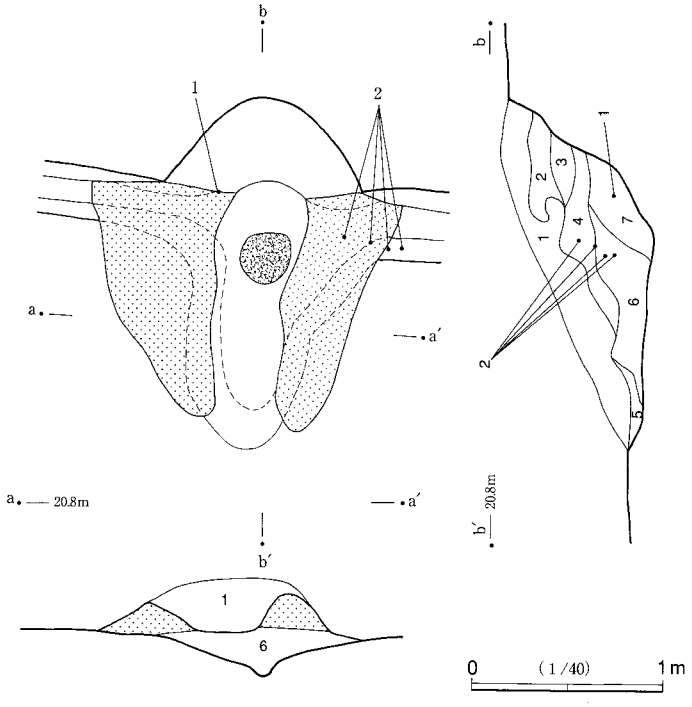
（1）竪穴住居跡

１０６住（第99・100図、第21～24表、図版62・66・67）

本跡は、103住・105住と横に並ぶような状態で検出され、平面形は長軸方向に6.4m、幅6.3mを計測し、ほぼ方形となる。主軸方向はN-50°-Wを示す。確認面からの掘り込みは0.6m～0.7mと深く、耕作により

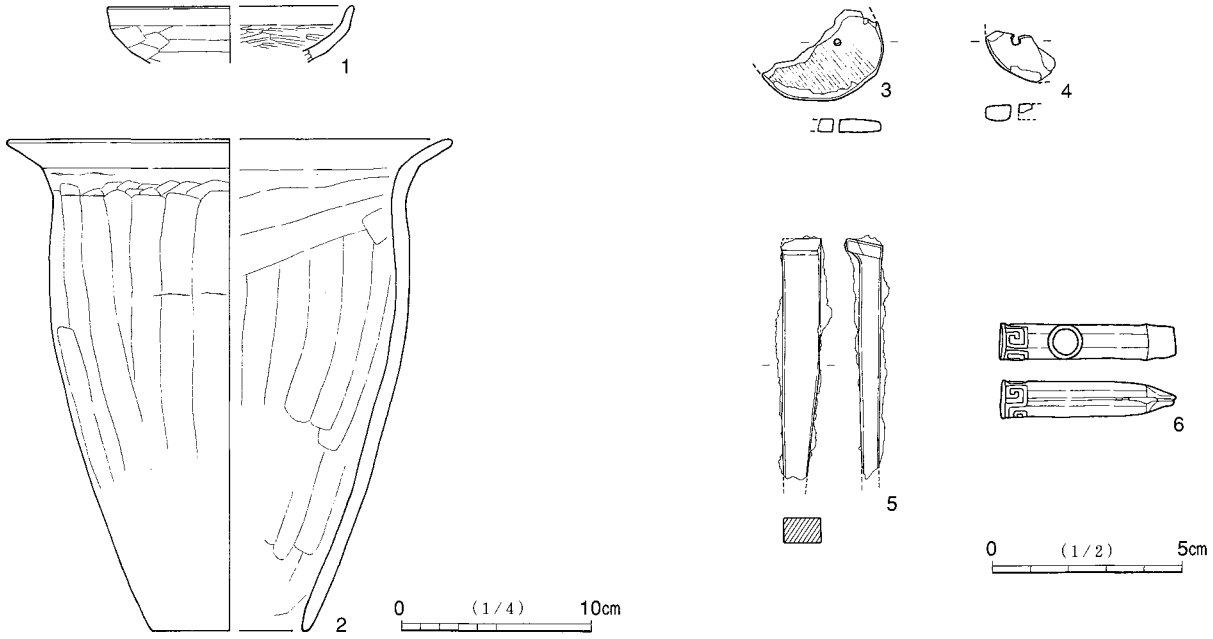


１０６住
1黒褐色土　耕作や攪乱を受け黒味が強くしまりはない
2暗褐色土　ソフトローム粒多量混入
3黒色土　2層ほど黒味はなく、粒子の粗いソフトローム
ハードローム多量混入
4褐色土　ソフトローム・ハードローム多量混入
（人為的に埋め込まれた可能性あり）



１０６住カマド
1暗褐色土　砂質粘土・焼土粒混入
2砂質粘土主体
3暗褐色土　砂質粘土・焼土粒やや多めに混入
4砂質粘土主体
5砂質粘土・焼土粒主体
6暗褐色土　ローム土・焼土粒多量混入
7焼土粒・ローム粒主体

第99図　１０６住（１）



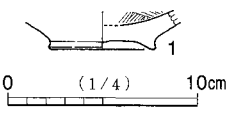
第100図　１０６住（２）

大きく攪乱されているところもみられたが、床面・壁面ともにしっかりした遺存状態を保っていた。柱穴は４か所の主柱穴のみで構成され、床面下56cm～79cmにまで掘り下げられていた。周溝は５cm～６cmの深さでコーナー部分も含みきれいに全周していた。堆積土は大きく３層に分離できるようであったが、遺構中央部上面では著しい攪乱が認められ、その一部は床面近くまで達していた。カマドは比較的良好な遺存状態を保っていた。天井部は崩落していたものの、袖部では両袖ともにその痕跡を残していた。しかも袖の補強材として図示した甑の破片が使用されていた。出土遺物には土器・石製品・鉄製品・銅製品がある。

１・２はカマド内から出土しており、素材の一部として再利用されたものである。その器形から、いわゆる鬼高期に属するものである。１は杯で、口縁部はナデ、体部はヘラケズリにより整形され、内面ではミガキも加えられる。口縁直下にみられる稜線が特徴的となろう。色調はにぶい褐色を呈す。２は甑であり、口縁部と底部は僅少の遺存でしかない。胴部は約１／３が残っており、器形は辛うじて確認できる。口縁部はヘラによるナデで、胴部の内外面は粗いヘラケズリにより整形されている。色調はにぶい褐色となっている。３・４は滑石製の石製模造品である。覆土内から出土したものである。５は鉄製品で、おそらく釘であろう。上端では湾曲部が認められる。６は銅製のキセルの吸口で後世のものである。以上が主な遺物であり、その出土状況から本跡と近い時期の遺物としては土器２点をあげることができよう。他に、甕等の小破片が50点～60点出土し、その中には通称「常総甕」と呼称される胴部片も混入していたことを付記しておく。

３　奈良・平安時代

この時代の遺構は検出できなかったが、図示できる杯形土器（第101図）が１点Q25-44グリッドから出土しているため、ここで触れておきたい。この杯は上半部を欠失しており高台部の作りに特徴がある。器面は赤褐色を呈しているが、内面は内黒処理が施された後、ヘラミガキが加えられている。



第101図　グリッド出土遺物

4　中・近世

2か年にわたる調査において2条の溝が検出されたが、ともに時期決定に結び付くような遺物には恵まれなかった。そのため、溝の所属時期については即断できないものの中世を遡ることはないように思われる。

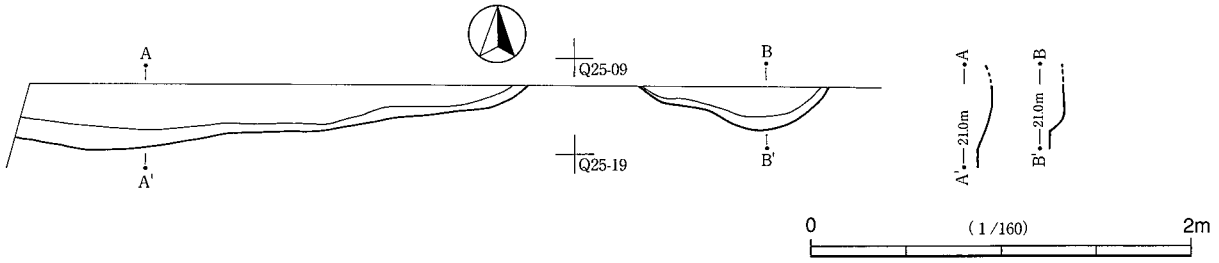
（1）溝状遺構

１０７溝（第102図、図版62）

平成14年度の調査で検出されたものであり、調査区を横断するように東西に緩やかに傾斜し、深さ30cm前後を計測する。遺物は認められなかった。

１０９溝（第91図、図版64）

平成15年度の調査で検出されたものであり、調査区に沿うよう北東方向に延びていた。溝の幅は２ｍ～３ｍと広いものであったが堆積土はやや軟弱で時期的には近世以降のものと思われた。また、遺物についても全く検出できなかった。



第102図　１０７溝

第3節　まとめ

本遺跡での今回の調査は前回の未調査分について実施したものであり、調査面積も少なく新たな遺構の検出も５軒と限られたものとなった。しかし、その内容を詳細に検討すると、平成14年度分調査では集落構成の補完、そして、平成15年度分としては住居跡から出土した豊富な一括土器という点から、少ない調査範囲といえども一定程度の成果を得ることができた。そこで、前回の報告と一部重複することになるが、今回の調査で得られた資料と周辺遺跡の調査成果を加えて、本遺跡における弥生後期から古墳前期にいたる遺構・遺物の推移を考えてみたい。

まず集落の構成という点からみると、前報告でも触れているように、弥生後期では散漫な分布ながら全調査区にわたって当該期の住居跡が検出されている[1)]。だが時間の経過とともに住居跡は減少し、古墳時代の中期を迎えるにおよび、数軒が存在する程度になってしまう。むろん遺跡全域の調査ではないため全容の把握までには至らない。しかし、調査では大地の縁辺部をくまなく調査しているため、縁辺部については確実な論拠を得たものといえよう。

次に、住居跡の大きさについてみると、新たに検出された103住は大型の住居跡で、その床面積は約49㎡と広い。これに対し、周辺に位置する027・028・029・031・105住の規模をみると10㎡～20㎡程度で、大きな差がみられる。これは明らかに103住を中心とした集落構成であり、ここに小集落が営まれていた

証左となろう。このような観点から調査区を概観すると、他にも幾つかのグループが存在する。008住を中心としたグループ、074・076住を中心としたグループ、060住を中心としたグループなどで、構成される。さらに小集落を構成している個々の住居跡についてみると、その形態は大型住居については小判形ないしは胴張りの隅丸長方形を呈しており、壁溝を伴うことが多い。そして、それを取り巻くように存在する小型の住居は隅丸方形あるいは円形となっており、壁溝はほとんど認められない。このような小集落は印旛沼周辺域ではしばしばみられ、住居跡の配置から明確に当時の集落構成が理解できる。その典型として、近隣で報告されている遺跡を取り上げると、村上込ノ内遺跡[2]や川崎山遺跡[3]などをあげることができる。こうした状況から考えると、印旛沼周辺域における弥生時代後期以降の集落構成は大型住居を中心として、その周辺を数軒ないし10軒程度の小型住居によって一つの小集落が構成されていたものと考えられる。

一方、出土土器についてみると、今回の調査によって得られた108住出土土器群は、壺・甕・台付甕・高杯・器台・椀・手捏土器といった各種の土器がみられ、当時の日常什器のセット関係を想起させる内容となっている。これらの土器群は、その器形・器種から古墳時代に属することは異論のないところである。しかも出土土器群は、弥生時代後期から継続的に推移してきたものと捉えられるため本遺跡における住居形態と出土土器を集成し、その変遷に触れてみたい。

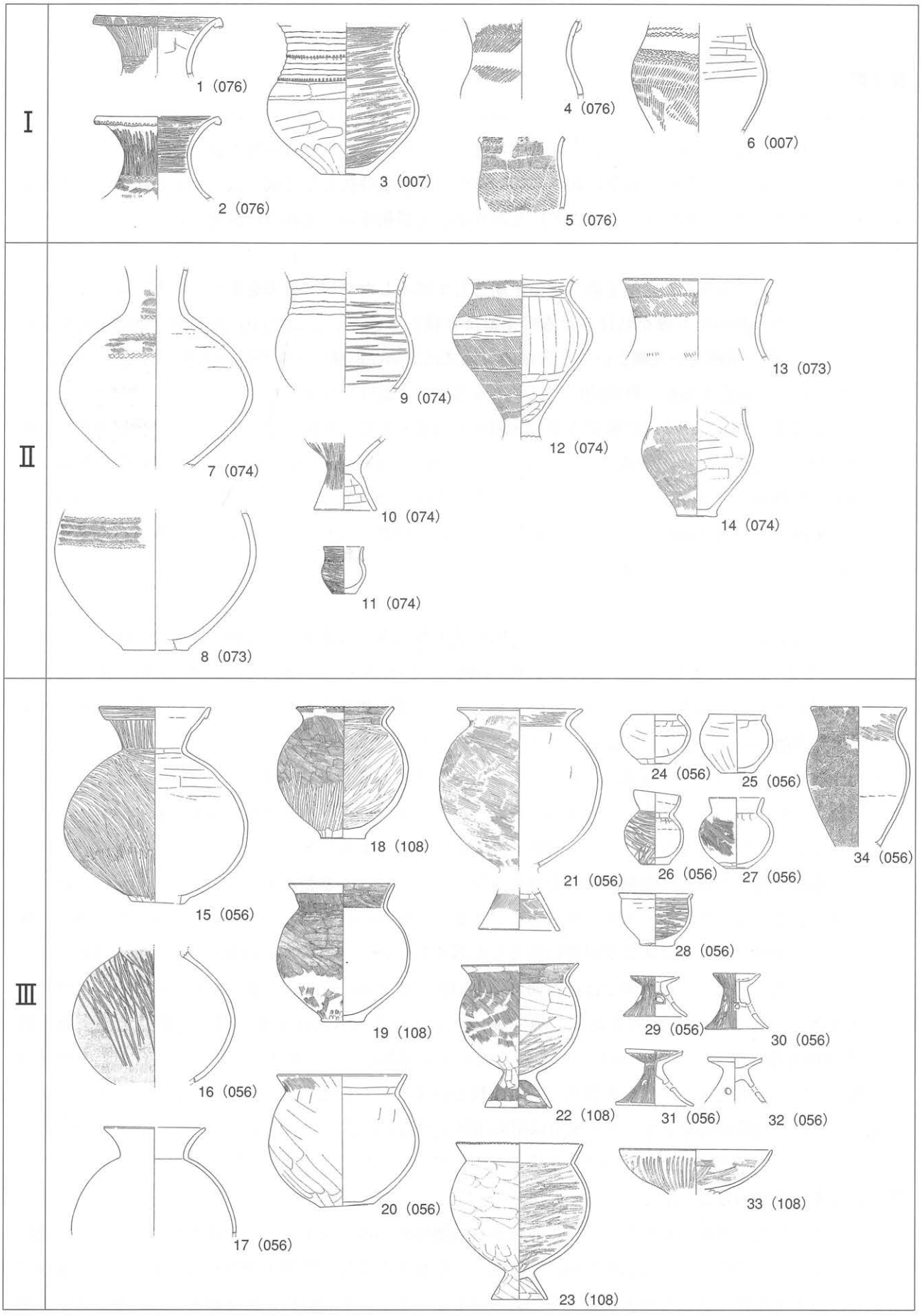
第Ⅰ期

本期は確実に弥生期として捉えられる時期であり、007住・076住出土の土器群が該当する。007住周辺で同一時期と考えられるものでは006住・008住が存在する。とりわけ008住は大型の住居で、短軸の長さが約9mと大きく、中心的な存在を示している。惜しむらくは遺存状態が劣悪で遺物の検出は僅少であった。ここでの住居形態は、隅丸方形の007住と楕円ないしは隅丸長方形を呈する008住、円形あるいは隅丸長方形と推定できる006住となり、その形状は様々といえる。一方、076住は隅丸長方形で、その周辺で検出されている住居跡もほぼ同様な形状を呈しており、小型の住居では隅丸方形に近い。やや離れて位置する042住・043住などは円形となる。

出土土器についてみると、壺形土器では完形品は存在しないが、図示（1・2）したようなタイプにみる大きく外反した口縁と、口縁端部を折り返し縄文や刻目を施す典型的な南関東系の壺で代表される。胴部は欠損するが、球形に近い形状となろう。細縄文が口唇部や胴上半部に施される。沈線で区画された中を細縄文で充填する標準的な文様構成も045住・062住で断片的に検出されている。図示は省略したが、大きく折り返した口縁部に4～5本一組の粘土紐を貼付した壺形土器の伴出もみられる。

甕形土器では、周知のように二タイプの甕で構成されている。その典型例が図示（3）したものとなろう。いわゆる輪積甕であり、頸部に多数の輪積痕を残す。図示した例では輪積痕の上を二条の刻目を施す。また、図示しなかったが、028住出土例では胴部に2か所の輪積があり、頸部には認められない。103住出土例（第93図1）では頸部に一条巡らせた輪積痕の上に刻目が施される。一方、頸部を除き、器面全体に縄文を施文する甕形土器も普遍的な出土量を示す。いわゆる北関東系の甕で、附加条・異条といった独特の縄文原体を使用しており、口縁部に粘土塊（4）を貼付したり、頸部に櫛歯条工具を用い文様を施すなど縄文土器的な色彩を残す土器群である。

この他には高杯・浅鉢といった器種も存在するが、本遺跡での出土は認められなかった。



第103図　出土土器変遷図

第Ⅱ期

この時期は074住によって代表される。074住はほぼ隅丸長方形を呈しており、その形状も第Ⅰ期と大差ないものと考えられる。060住・073住も時期的に近いものといえよう。この期の設定は、以下に述べるように出土土器を基準としたが、弥生時代として認識するか古墳時代として取り扱うべきか難しい時期でもある。いわば移行期に位置付けられることになろうが、土器組成のうえから台付甕の存在をこの時期の特徴と考えた。

出土土器についてみると、壺形土器では第Ⅰ期として図示したタイプは姿を消し、大きく折り返した口縁部に4～5本一組の粘土紐を貼付した壺形土器は存続している。ここでは073住・074住出土例を図示（7・8）したが、細縄文や沈線といった装飾的な施文は次第に消滅へと向かい簡素化されるようになる。むろん無文の壺も存在するが、時期的に図示できるような土器は少なかった。

出土土器では、図示したように輪積甕及び北関東系の甕形土器が存続するとともに、台付甕の導入が確実になったことで甕形土器の構成は大きく変化する。図示（12）した例は希にみられる[4]が、器面に縄文を施文した貴重な台付甕である。おそらく台付甕の導入時から時を経ずして製作されたものであろう。器形全体をみると、胴下部から底部に至る形状は、他の台付甕ではみられないような作りで、安定性に欠くように見受けられる。

第Ⅲ期

既報告にもあるとおり、この時期は確実に古墳時代となろう。当該期の住居跡としては056住・070住・108住などをあげることができる。これらの住居形態についてみると、ほとんどが隅丸方形・隅丸長方形となり、円形タイプの消滅が大きな特徴といえる。また、隅丸部分にあたるコーナーは、若干丸味を有するものの前段階の住居と比較してより明確に作出されるようになる。

出土土器についてみると、070住の場合、明確に廃棄土器が多数を占めるため土器の掲載は控えたが、壺形土器は、装飾としての細縄文施文がみられなくなり、無文地にヘラミガキで調整を施し赤彩を塗布するだけとなる。また、折返し口縁の採用は継続して認められるようである。

一方、甕形土器でも胴部は均整のとれた球形を呈し、ハケメによる整形が顕著となる。さらに、台付甕の普及は著しく、ここでも胴下半部は丸味を帯び半球状に形作られる。こうした新しいタイプの甕類が採用されていく中で、僅少ではあるが旧態依然とした器形を保持した北関東系の甕形土器も使用されていたようである。図示（34）した本例では、器面に撚りの異なる2本の原体（ＬＲ・ＲＬ）を用い、羽状縄文の効果を演出している珍しい例である。縄文施文という行為のみに限定すれば、類例は上座矢橋遺跡[5]・権現後遺跡[6]などでも認められ、いわゆる古式土師器群に伴って出土している。こうした事例は確実に増加しており北関東系土器の影響は、古墳時代が到来しても想像以上に強く残っていたものと考えられる。これが南北接触地域となった利根川以南の印旛沼周辺の特色ともいえよう。また、図示したように、高杯・器台といった壺・甕以外の器種も安定した出土量をしめしており、第Ⅰ・Ⅱ期とは土器組成の中で明らかな変化を認めることができる。

ただ、こうした土器群の変化だけで弥生時代から古墳時代への変遷を追うことは難しく、しかも本遺跡の所在する「八千代市」は印旛沼南岸域に位置し、北関東系土器群の影響を少なからず受けている地域でもあり、出土土器群の中にも様々な変化を認めることができる。その好例が縄文施文の台付甕であり、北関東系土器の存続であろう[7]。こうした点から今後、印旛沼周辺域で弥生時代から古墳時代へと変遷する

土器群を理解するうえでも多数の一括土器を出土した本遺跡の果たす役割は大きなものとなろう。

註1　田中裕・西野雅人他　2004　『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書2－八千代市道地遺跡－』㈶千葉県文化財センター

2　天野努他　1974　『八千代市村上遺跡群』千葉県都市公社

3　常松成人他　2003　『川崎山遺跡d地点』八千代市遺跡調査会

4　佐倉市上座矢橋遺跡012号住居跡では脚部だけの遺存品が出土しており、利根川以北では原田北遺跡で数点の器面に縄文を施した台付甕が検出されている。

5　末武直則他　1986　『上座矢橋遺跡』㈶印旛郡市文化財センター

6　加藤修司他　1984　『八千代市権現後遺跡』㈶千葉県文化財センター

7　緑川正實他　1993　「原田北遺跡Ⅰ」『土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』㈶茨城県教育財団

付表

第21表　道地遺跡（H14・15）竪穴住居跡観察表

遺構No.	挿図番号	図版番号	時期	平面形	規模［m］［長］×［幅］×［深］	主軸方位［°］	床面積［㎡］	壁［形状］	主柱穴深［cm］	燃焼施設［種別/位置/形］	貯蔵穴［cm］［形状/位置］［長×幅×深］	グリッド	重複［旧］［新］	出土遺物［弥生土器］［土師器］	備考
103住	92 93	61,65 67	弥生末～古墳初	隅丸長方	8.5×6.7×0.6	N-50-W	48.80	直	P1=90,P2=89 P3=72,P4=78	炉/NW/円	方/SE壁下 52×68×25	P26-33	単独	甕3,台付甕1,壺2,鉢1,砥石2,鉄製品2	周溝部分周,階段ﾋﾟｯﾄ
104住	94	61,65 67	弥生末～古墳初	(隅丸方)	－×(5.3)×0.6	N-47-W	－	直	－	－	－	Q26-90	－	壺2,軽石1,銅製品1	
105住	95	61,65	弥生末～古墳初	小判	5.6×4.4×0.9	N-44-W	19.64	急	P1=54,P2=78 P3=66,P4=54	炉/NW/楕円	円/SE壁下 －×－×56	P26-07	単独	甕5,壺4,高杯1	
106住	99 100	62,66 67	古墳　後	方	6.4×6.3×0.7	N-50-W	31.91	直	P1=60,P2=79 P3=56,P4=56	ｶﾏﾄﾞ/NW/－	－	Q25-60	単独	杯1,甕1,双孔円盤2,鉄製品1,銅製品1	周溝全周
108住	96	63,66 67	弥生末～古墳初	長方	3.5×4.2×0.4	N-30-W	12.25	直	P1=20,P2=16	炉/N/楕円	－	Y15-09	単独	甕3,台付甕2,壺1,高杯2,小型鉢1,器台2,ﾐﾆﾁｭｱ土器1	
051住	97	63,66	弥生末～古墳初	隅丸方	3.8×3.5×0.6	N-30-W	－	直	P1=19	炉2/SW/楕円	－	Z14-71	単独	甕2	前回大部分調査済
082住	98	63	弥生　後	(隅丸長方)	－×5.3×0.3	N-50-W	－	急	P1=64,P2=65	炉/NW/楕円	－	W18-77	－	－	前回一部調査済,溝により半分破壊

第22表　道地遺跡（H14・15）土器観察表

（　）は推定値

第図	挿図番号	遺構	器質	器種	遺存［%］	口径［cm］	底径［cm］	器高［cm］	最大径［cm］	色調［内/外］	胎土	調整［内/外］	備考　［出土状況］
93	1	103住	弥生	甕	40	(21.8)	(9.6)	(24.6)	(25.8)	淡褐色/淡褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/ﾍﾗﾐｶﾞｷ	煤付着,内外面劣化が著しい　[床面]
93	2	103住	弥生	壺	10	－	6.2	－	－	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,砂粒	ﾍﾗﾐｶﾞｷ/ﾍﾗﾐｶﾞｷ	外面赤彩　[一括]
93	3	103住	土師	台付甕	10	－	－	－	－	黒褐色/褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	[一括]
93	4	103住	弥生	甕	10	－	7.0	－	－	淡褐色/淡褐色	長石,砂粒	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ,附加条縄文	内面劣化が著しい　[一括]
93	5	103住	弥生	甕	5	－	－	－	－	淡褐色/淡褐色	砂粒,雲母	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ,無節縄文	6と同一個体　[下層]
93	6	103住	弥生	甕	5	－	－	－	－	にぶい褐色/にぶい褐色	砂粒,雲母	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ,結節回転文,無節縄文	5と同一個体　[床面]
93	7	103住	弥生	甕	5	－	－	－	－	淡褐色/淡赤褐色	長石,石英,砂粒	ﾍﾗﾅﾃﾞ/羽状附加条縄文	[一括]
94	1	104住	弥生	甕	5	－	－	－	－	灰褐色/灰褐色	長石,砂粒	ﾅﾃﾞ/附加条縄文	[床面]
94	2	104住	弥生	壺	5	－	－	－	－	にぶい赤褐色/灰褐色	長石	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ,結節回転文	煤付着　[床面]
95	1	105住	弥生	甕	40	14.0	－	－	－	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,砂粒少量	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ,結節回転文	小型,底部欠損,破断面被熱［床面］
95	2	105住	弥生	甕	5	－	(6.0)	－	－	にぶい褐色/にぶい赤褐色	長石,砂粒	ﾅﾃﾞ/附加条縄文	[一括]
95	3	105住	弥生	甕	5	－	－	－	－	灰黄褐色/灰褐色	長石,砂粒	ﾅﾃﾞ/附加条縄文	[一括]
95	4	105住	弥生	壺	3	－	(12.0)	－	－	黄灰色/淡褐色	長石,砂粒	?/ﾍﾗﾅﾃﾞ	内面剥離著しい,9と同一個体　[床面]
95	5	105住	弥生	壺	3	－	－	－	－	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ,撚糸文	内面赤彩　[一括]
95	6	105住	弥生	甕	5	－	－	－	－	灰黄褐色/黒褐色	長石,ｽｺﾘｱ少量	ﾅﾃﾞ/附加条縄文,結節文	外面煤付着　[一括]
95	7	105住	弥生	壺	5	－	－	－	－	褐色/灰褐色	長石,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ,結節回転文,羽状縄文	外面無文部赤彩　[一括]
95	8	105住	弥生	甕	5	－	－	－	－	灰黄褐色/黒褐色	長石,ｽｺﾘｱ少量	ﾅﾃﾞ/附加条縄文,結節文	小型,外面煤付着　[一括]
95	9	105住	弥生	壺	10	－	－	－	－	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ,結節回転文,羽状縄文	再生口縁,外面赤彩,4と同一個体　[床面・下層]
95	10	105住	土師	高杯	10	－	－	－	－	黄灰色/淡褐色	長石,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗｹｽﾞﾘ	赤彩,破断面摩耗　[一括]
100	1	106住	土師	杯	15	(12.8)	－	－	－	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗｹｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ/ﾐｶﾞｷ	[一括]
100	2	106住	土師	甑	20	(23.0)	(11.6)	25.8	(24.0)	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	[ｶﾏﾄﾞ内]
101	1	Q25-44	土師	高台付椀	5	－	5.6	－	－	暗灰色/にぶい赤褐色	長石,雲母,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾐｶﾞｷ	内面黒色処理
96	1	108住	土師	甕	98	14.0	6.4	19.4	19.2	褐色/黒褐色	長石,砂粒,雲母	ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ,ﾊｹ/ﾐｶﾞｷ,ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	底部外面にモミ痕あり　[床直]
96	2	108住	土師	甕	95	15.3	6.2	20.4	19.5	褐色/黒褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾊｹ/ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	煤付着　[床直]

96	3	108住	土師	甕	95	15.3	4.7	14.5	15.6	黒褐色/にぶい赤褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾅﾃﾞ	[6の器台として再利用した壺に置かれた状態で直立]
96	4	108住	土師	台付甕	95	18.1	8.2	23.1	20.6	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/ﾍﾗｸｽﾞﾘ,ﾅﾃﾞ	外面に黒斑2か所あり　[床直]
96	5	108住	土師	台付甕	95	17.0	9.8	21.3	17.7	赤褐色/黒褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ,ﾊｹ/ﾍﾗｸｽﾞﾘ,ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	煤付着　[床直]
96	6	108住	土師	壺	30	14.7	−	−	−	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,砂粒,雲母	ﾅﾃﾞ,ﾊｹ/ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ	壺の口縁部から頸部を器台として再利用　[床直]
96	7	108住	土師	高杯	50	20.3	−	−	22.5	にぶい赤褐色/にぶい赤褐色	長石,ｽｺﾘｱ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ	[床直]
96	8	108住	土師	高杯	40	−	−	−	裾径11.8	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,砂粒,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾊｹ/ﾊｹ,ﾅﾃﾞ	[上・中層]
96	9	108住	土師	小型椀	95	9.3	4.0	5.3	9.7	にぶい褐色/にぶい褐色	長石,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾐｶﾞｷ,ﾅﾃﾞ	内外面に黒斑あり　[床直]
96	10	108住	土師	器台	70	7.3	7.6	7.2	−	にぶい赤色/にぶい褐色	長石,雲母,海綿骨針	ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	[床直]
96	11	108住	土師	器台手	80	7.8	8.2	6.7	−	褐色/赤褐色	長石,雲母,砂粒	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ	[床直]
96	12	108住	土師	捏	95	6.6	3.2	6.0	6.7	淡褐色/淡褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ,ﾊｹ/ﾅﾃﾞ	[床直]
97	1	051住	土師	甕	60	12.7	5.0	14.1	14.8	淡褐色/淡褐色	長石,砂粒,ｽｺﾘｱ	ﾅﾃﾞ/ﾍﾗﾅﾃﾞ,ﾊｹ	内面剥離著しい　[床面]
97	2	051住	土師	甕	15	(17.1)	−	−	−	黒褐色/黒褐色	長石,ｽｺﾘｱ,海綿骨針	ﾅﾃﾞ,ﾐｶﾞｷ/ﾅﾃﾞ,ﾊｹ	煤付着　[床面]

第23表　道地遺跡（H14）金属製品観察表

（　）は残存値

第図	挿図番号	遺構	材質	製品名	長さ［mm］	幅［mm］	厚［mm］	重量［g］	出土状況	図版番号	備考
93	10	103住	鉄	釘	(42.0)	(9.0)	9.0	6.5	一括	67	
93	11	103住	鉄	不明	(54.0)	13.0	7.0	11	一括	67	
94	3	104住	銅	不明	(35.0)	6.0	(3.0)	2.2	一括	67	
100	5	106住	鉄	釘	(63.0)	10.0	7.0	11.6	一括	67	
100	7	106住	銅	キセル	(46.0)	6.0	9.0	6.6	一括	67	雷文

第24表　道地遺跡（H14）石製品観察表

（　）は残存値

第図	挿図番号	遺構	石材	製品名	長さ［mm］	幅［mm］	厚［mm］	重量［g］	出土状況	図版番号	備考
93	8	103住	砂岩	砥石	(21.0)	37.0	5.0	5.6	一括	67	破損
93	9	103住	砂岩	砥石	(26.0)	(22.0)	(4.0)	2.1	一括	67	破損
94	4	104住	軽石	軽石	91.0	72.0	48.0	27.3	床直	67	砥石として使用
100	3	106住	滑石	双孔円盤	(23.0)	(32.0)	4.0	3.3	一括	67	一部破損
100	4	106住	滑石	双孔円盤	(14.0)	(17.0)	4.0	1.1	一括	67	一部破損

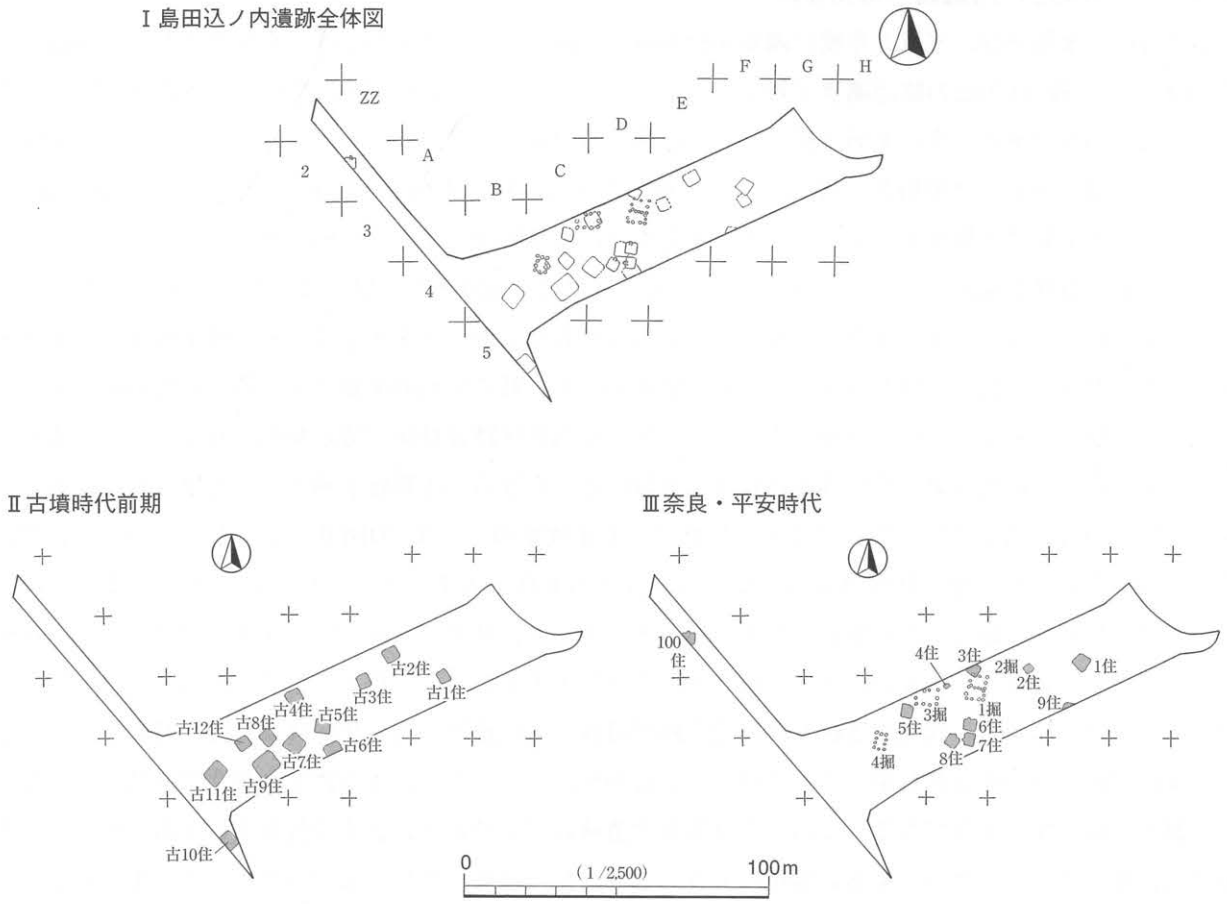
第５章　総括

主要地方道船橋印西線建設事業に伴って、路線内に所在する島田込ノ内遺跡・間見穴遺跡・道地遺跡の３遺跡について今まで記録保存を行ってきた。先述したとおりすでに４冊の報告書[1)]が刊行されており、本報告書をもって路線内の全ての調査報告が完了することとなった。ここでは今まで調査された成果を含めて、３遺跡ごとにみていくこととする。

第１節　島田込ノ内遺跡（第104図）

本遺跡の主要部分は、平成５年度に調査が行われ、今回の調査（平成15年度）を含めると、上層は本調査3,400㎡、下層は170㎡の確認調査で終了した。（第１表・第２図参照）旧石器時代の遺物は剥片２点が散見されたのみである。次に上層で検出された遺構を時期別にみていくと、古墳時代前期の竪穴住居跡12軒・土坑１基、奈良・平安時代の竪穴住居跡10軒・掘立柱建物跡４棟・土坑26基で、全体図は第104図Ⅰで示した。本遺跡に隣接する間見穴遺跡とは地形的には菖蒲谷津によって分断されているが、実際にはほぼ同一内容の遺構が検出されており、別遺跡とするよりは同一遺跡として取り扱った方が妥当と思われる。これは言い換えれば、大規模集落が台地上全般にわたり存在したことを示している。縄文時代の遺構は未検出であったが、遺物は早期から後期までの土器が出土し、特に早期の条痕文系土器と前期の繊維土器が目立つ。間見穴遺跡でも同様の傾向がみられ、早期の竪穴住居跡及び炉穴等が検出されている。本遺跡においても早期及び前期の竪穴住居跡等の存在は十分に考えられる。本遺跡で検出された竪穴住居跡のうち最も古いものは、古墳時代前期に帰属する12軒で分布密度が濃く、第104図Ⅱで示した。そのうち五領式成立期前後と思われる竪穴住居跡は古３住・古５住・古６住・古７住・古10住[2)]の５軒である。この５軒は古墳時代前期初頭に当たる竪穴住居跡であると考えられ、純然たる弥生時代後期に帰属する竪穴住居跡は検出されていない。残りの古１住・古２住・古４住・古８住・古９住・古11住・古12住の７軒は、五領式成立後に帰属する。間見穴遺跡及び道地遺跡では弥生時代後期の竪穴住居跡や、弥生時代末から古墳時代前期初頭のいわゆる移行期に当たる竪穴住居跡が検出されており、本遺跡での集落構成はそれに比べ若干遅れて成立するようである。このことは間見穴遺跡及び道地遺跡に弥生時代後期に集落が成立し、古墳時代に移行するにしたがい集落の規模は大きくなり、徐々に周辺地域に広がっていった結果と推察できる。これらの時期は新しい文化の波が波及した時期であるが、古５住の出土遺物には印手式の甕形土器がみられ、当時の人々の生活の中には弥生時代の伝統が少なからず残っていたものと推察される。本遺跡では古墳時代中・後期の竪穴住居跡は未検出で空白期間が認められ、奈良・平安時代に再び集落が営まれるようである。しかし、間見穴遺跡では数は少ないが古墳時代中・後期の竪穴住居跡は検出されており、必ずしもこの台地上から途絶したわけではないと考えられる。奈良・平安時代の主要遺構については第104図Ⅲで示した。そのうち奈良時代の後半から平安時代前半に帰属する竪穴住居跡は歴１住・歴３住・歴４住・歴９住の４軒で、残りの歴２住・歴５住・歴６住・歴７住・歴８住・歴100住の６軒は平安時代後半と思われる。また、平安時代後半には掘立柱建物跡も建てられるようになり、この状況は間見穴遺跡も同様に認められる。この時期の出土遺物には墨書土器が49点、刻書土器が12点と非常に多く認められている。その中には地方寺院の存在を想起させる「万寺」の墨書や、「佐人」の墨書もみられ、隣接する地域をも

含めた形で集落が構成されていたものと推察される。近接する遺跡の調査例では、島田遺跡[3]・桑納前畑遺跡[4]・睦小学校遺跡[5]・があげられ、いずれも奈良・平安時代の集落の一部が検出されている。島田遺跡では竪穴住居跡1軒、桑納前畑遺跡では竪穴住居跡2軒と掘立柱建物跡2棟、睦小学校遺跡では竪穴住居跡1軒と掘立柱建物跡9棟がそれぞれ検出されている。特に睦小学校遺跡では竪穴住居跡を掘立柱建物跡が切る状態で構築されており、少なくとも平安時代後半の倉庫群形成がみられる。この集落の構造は間見穴遺跡にも同様にみられており、この時期に台地を越えた広範囲な同一内容の集落が構成されていたことをうかがい知ることができる。



第104図　島田込ノ内遺跡全体図及び主要遺構変遷図

註1　この内容については本報告書3ページに掲載した、「第1表　年度別業務概要」の欄外に記したので参照されたい。

2　遺構番号については報告書に記載されているとおり示した。

3　渋谷貢　1980　『東京電力送電線鉄塔建設事業に伴う発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会、船橋市遺跡調査会

4　睦小学校北方遺跡　1978　『千葉県八千代市桑納前畑遺跡』

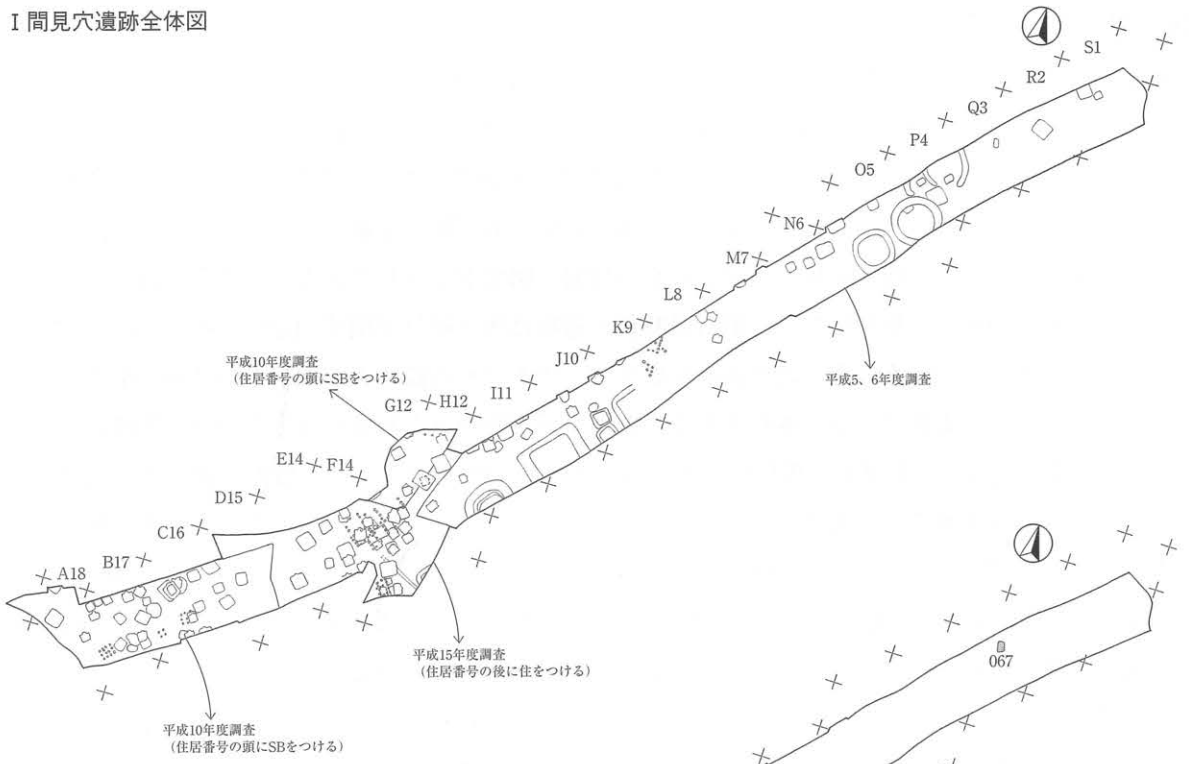
5　村田一男他　1981　『千葉県八千代市睦小学校遺跡』八千代市遺跡調査会

第2節　間見穴遺跡（第105・106図）

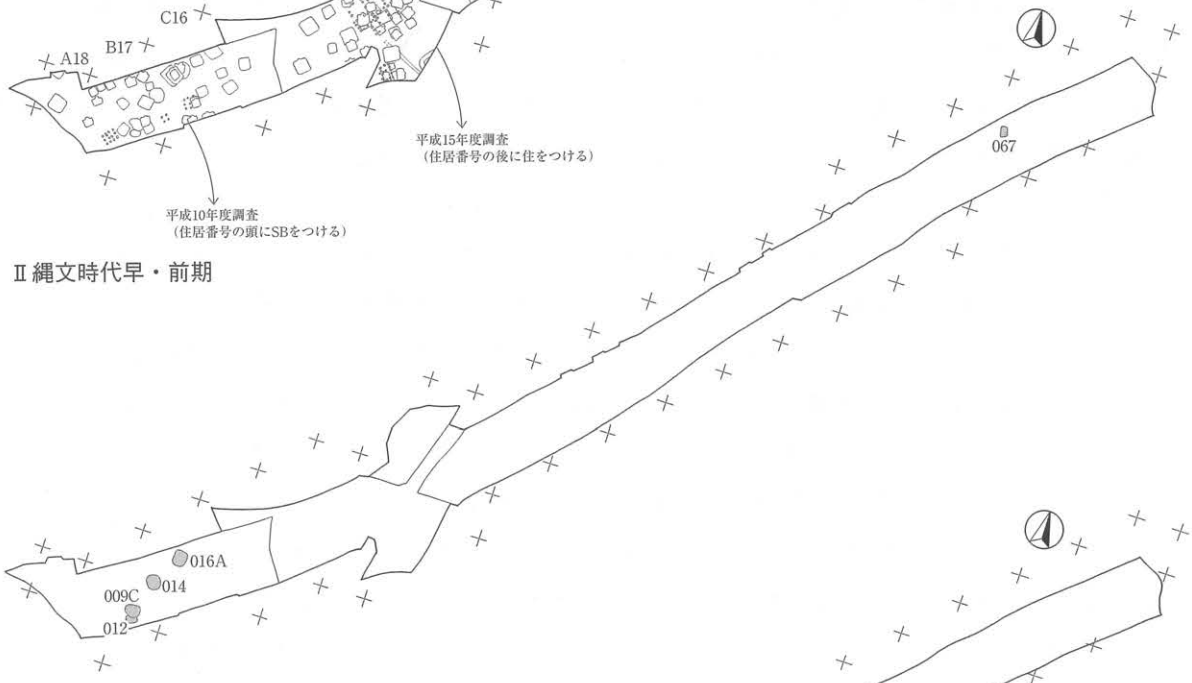
本遺跡の発掘調査は、平成5・6年度、平成10年度に調査が行われ、今回の調査（平成15年度）を含めると、上層は本調査16,501㎡、下層は156㎡の本調査で終了した。（第1表・第2図参照）平成5・6年度分と平成10年度分の調査成果については、既に報告書刊行済みである。第105図のⅠは主要遺構の全体図で、Ⅱ～Ⅵは主要遺構の時期別変遷を示した。図はいずれも煩雑さを避けるため、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・古墳を中心とし、時期が接近しているものは同一図でドットしてある。ここでは過去の調査成果も踏まえ、本遺跡の特徴を整理したい。旧石器時代の遺物は出土層位が明確でないものも含めると、本遺跡だけで計48点出土している。そのほとんどが剥片で、ナイフ形石器4点・楔形石器2点・槍先形尖頭器1点・石刃1点等も含まれている。本台地上で人間の生活痕跡がみられるのは、この旧石器時代にまで遡るが、調査面積が16,000㎡を越える規模のわりには出土石器の点数は少なく、密度の濃い生活痕跡とはいいがたい。次に上層で検出された遺構を時期別にみていくこととする。第105図Ⅱは本遺跡で最も古い時期に該当する竪穴住居跡を示した。縄文時代早期後葉の竪穴住居跡4軒（SB009C・SB012・SB014・SB016A）次いで縄文時代前期の竪穴住居跡1軒（067）である。早期後葉の竪穴住居跡は本遺跡南東端の緩斜面上に構築され、南西側に菖蒲谷津、南東側に新川が形成する印旛沼低地を望む。この住居跡周辺には、ほぼ同時期の竪穴状遺構2基（うち住居跡の可能性が高いもの1基）・炉穴14群27基・土坑8基・貝集積20か所が検出されており、南東側の調査区域外では規模はあまり大きくないが貝層の存在が確認されている。これらの遺構の詳細については、既報告済みの「－八千代市間見穴遺跡（2）－」（西野雅人2005）[1]に詳しいのでここでは割愛するが、本遺跡における集落遺構の初現はこの時期に求められようである。今回（平成15年度）の調査では、調査区の西端部、平成10年度調査区と接近する部分で古墳時代後期以前に埋没したと思われる埋没谷を検出している。この谷津が縄文時代早期末には台地内部まで形成されていたとすれば、この時期に貝塚をもつ集落がこの台地上に営まれる必然性がみえてくる。言い換えれば、当時この地は南東側に広がる干潟状の海に突き出る小規模の舌状台地を形成していたと考えられ、「印旛沼周辺貝塚群」のなかでも貝類を捕食するには絶好の地であったと思われる。また、検出された竪穴住居跡の配置が貝層を環状に取り巻くような企画性をもつこと、貝層中に獣骨等が混じらないこと等から、検出された集落自体が貝類捕食及び加工のための場であった可能性が窺える。言い換えれば、当時の人々は食糧確保のため、年間スケジュールに応じて、居住地域を移動していたとは考えられないだろうか。しかも、出土した土器は多量で「鵜ヶ島台式」「茅山下層式」「茅山上層式」と連続することが判明しており、この地は比較的長いスパンの生活が営まれたと推察できる。しかし、この時期には移動と定住の両要素が混在しているのが特徴としてあげられており、即断することはできないが、本遺跡の資料は定住化を示す貴重な資料として今後の議論の中心となる存在といえる。

縄文時代前期の竪穴住居跡が1軒、その周辺に石器製作跡1か所が検出されているのみで、少なくとも早期後葉初現の生活の痕跡は前期ころには極端に縮小するようである。このような状況は、もはや貝類を捕食できる干潟状の海を望む台地縁辺部に生活の拠点を置く必要がなくなったことを意味しているものだと推察する。これはおそらく縄文時代前期中葉頃から始まる海退による自然環境の変化に起因するものと考えられる。縄文時代早期末頃に眼下に広がっていた干潟状の海は、海退の開始に伴って周辺水域の淡水化と湿地化が急速に進展し、貝類の捕食ができなくなったものと思われ、台地縁辺部に居住する意味が薄れた結果が竪穴住居跡の減少に繋がっているものと推察できる。それを明確に示すだけの根拠が今のとこ

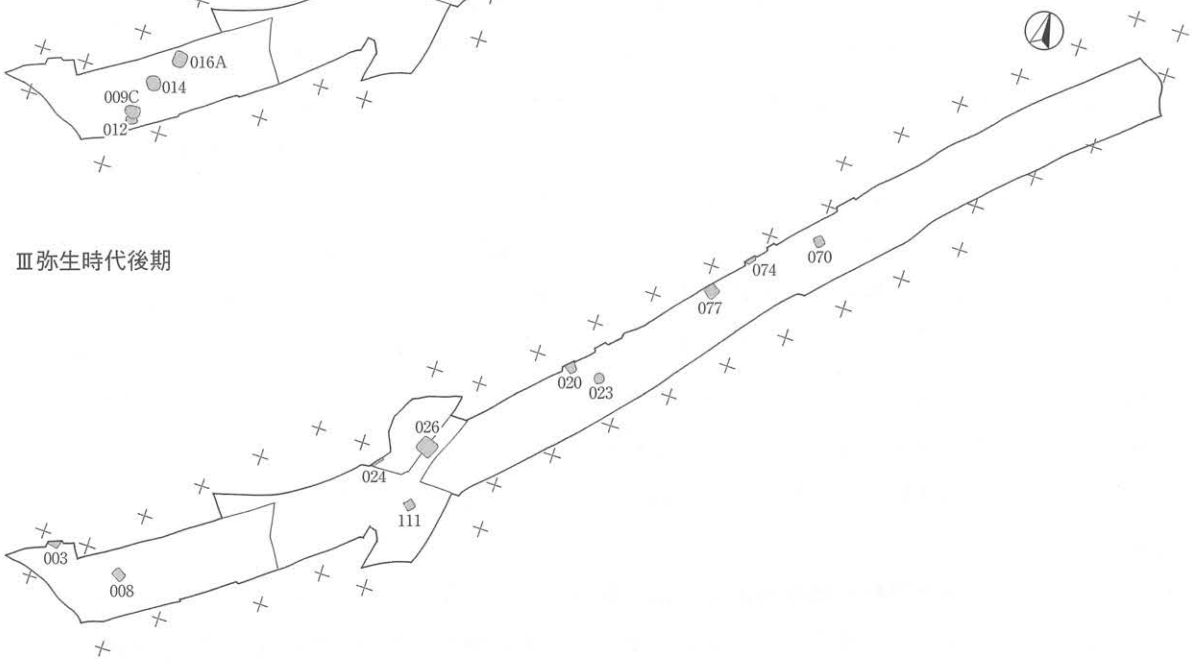
Ⅰ間見穴遺跡全体図



Ⅱ縄文時代早・前期

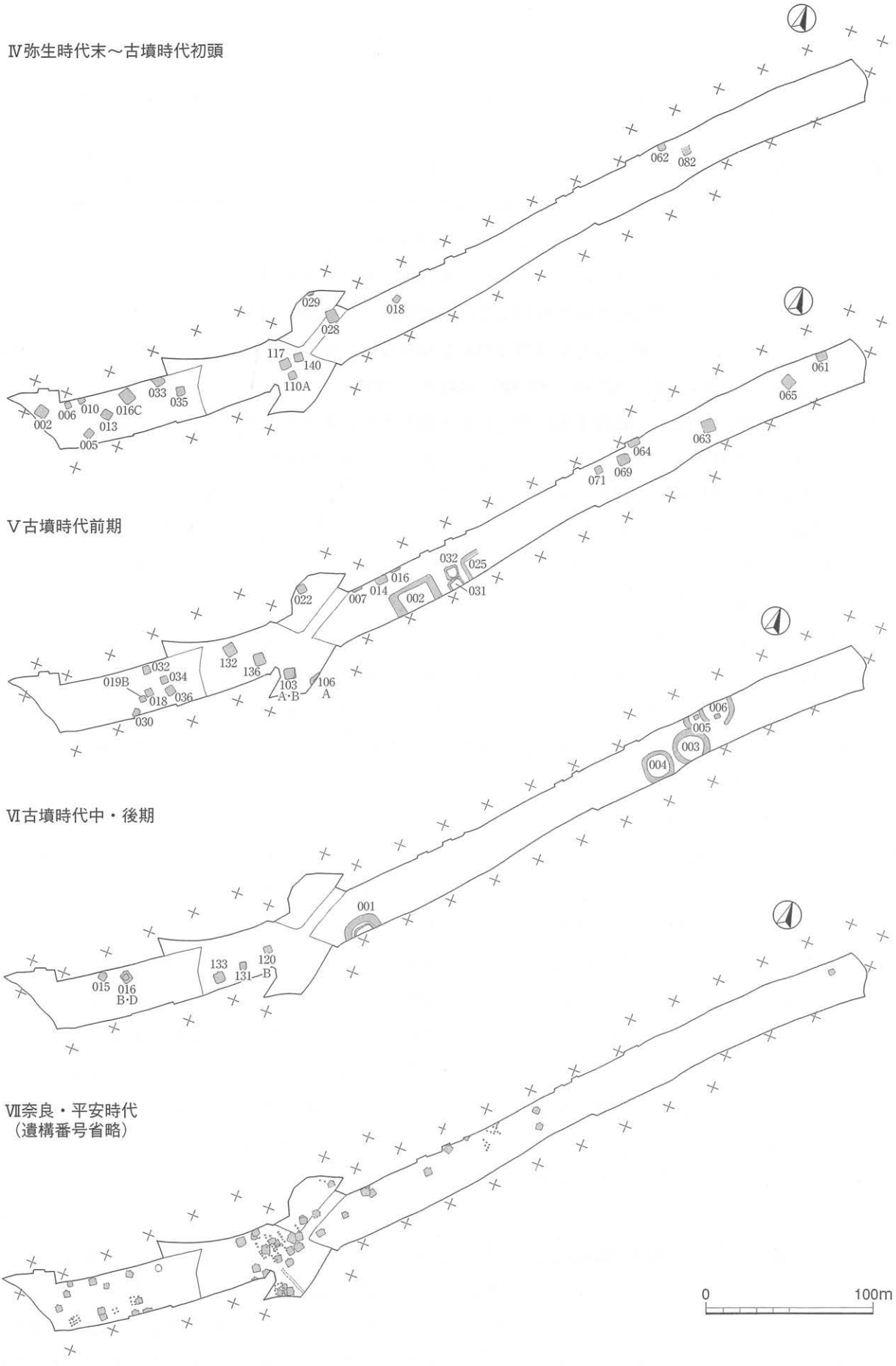


Ⅲ弥生時代後期



0 100m

第105図　間見穴遺跡全体図及び主要遺構変遷図（1）



第106図　間見穴遺跡全体図及び主要遺構変遷図（２）

ろないのが残念であるが、今後の近隣の調査成果に期待したい。いずれにしても縄文時代前期以降の生活の痕跡は、土器片を散見するのみである。

本遺跡の特徴の一つとしては、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡が多く検出されていることであり、弥生時代中期に帰属する遺構は未検出である。本遺跡で次に竪穴住居跡を伴う生活の痕跡がみられるのは弥生時代後期である。しかし、本遺跡が立地する台地上北側に所在する田原窪遺跡[2]では40軒前後の宮ノ台期の環濠集落が確認されているため、本遺跡でも弥生時代中期の集落が存在する可能性がないとはいいきれない。本遺跡は弥生時代後期になって突発的に大集落が形成されたとするよりは、前段階にその母胎が存在していたと考える方が自然なのかも知れない。弥生時代後期の検出遺構は竪穴住居跡10軒（020・023・070・074・077・SB003・SB008・SB024・SB026・111住）・土坑1基である。出土土器からみると、この時期は印手式（北関東系）の土器が主流を占め、東海系（南関東系）の土器は少なく、東海系（南関東系）本格参入以前とすることができる。住居形態は小判形ないしは隅丸方形及び方形がみられ、住居の構成も大型住居（小判形・隅丸方形）を中心に、小型住居（隅丸方形・方形）が数軒廻りを巡るように構成するようである。本遺跡では第104図ⅢでみられるようにSB026が大型住居といえ、SB024・111住が廻りを巡るように配されているのが分かる。隣接する道地遺跡でも本遺跡と共通する性格をもつ、弥生時代後期の大規模な集落が検出されている。周辺の遺跡でもこの時期の大規模な集落が検出されており、印旛沼周辺域において密度は非常に濃いといえる。このような大規模集落群を保つための経済基盤は印旛沼低地に求められるが、集落の密度からして水田耕作が極めて広範囲に行われていたと推察できる。

弥生時代末から古墳時代初頭にかけての移行期[3]及び、古墳時代前期の竪穴住居跡も多く検出されており、第106図ⅣとⅤに示した。移行期の主な遺構は竪穴住居跡18軒（018・062・071・082・SB002・SB005・SB006・SB010・SB013・SB016C・SB028・SB029A・SB029B・SB033・SB035・110A住・117住・140住）・土坑3基をあげることができる。この時期は弥生土器と五領式土器が共伴し、東海系（南関東系）が本格的に参入する時期である。住居形態は隅丸方形ないしは方形が主流となる。住居の構成は弥生時代後期のような大小の住居が混在するが、全体的にはやや大きめで安定する傾向がみられるようである。このような内容は隣接する道地遺跡にも認められる。

古墳時代前期の主な遺構は竪穴住居跡19軒（007・014・016・061・063・064・065・069・SB018・SB019B・SB022・SB030・SB032・SB034・SB036・103A住・103B住・132住・136住）・古墳（方墳）5基（002・025・030・031・106A周）・土坑4基があげられる。この時期の出土遺物は五領式土器が主体をなし、東海系開脚高杯がみられるようになる。弥生土器は激減するが、一部では若干残っているようである。移行期の竪穴住居跡は弥生時代後期の大型住居と小型住居の集落構成を若干残しているが、古墳時代前期にはその傾向はあまりみられなくなり、比較的中規模な居住空間をもつ竪穴住居跡が主流となるようである。前期後葉には古墳の築造が開始され、その前後にはこれらの竪穴住居はこの地区から姿を消す。以後間を置いて、古墳時代後期にも古墳は築造されており、谷津を隔てて隣接する道地遺跡にも古墳に伴う埋葬施設が確認され、墓域は台地縁辺部を主体に道地遺跡まで及んでいることが分かる。前期後葉から古墳時代が終了するころまでは、台地縁辺部は墓域となり、古墳に近接した住居は一切建てられていない。墓域とされた地区に住居が建てられ始めるのは、奈良・平安時代からである。既報告書では前期古墳はいずれも整然と並び、時間的な隔たりは想定しがたく、比較的短期間に形成され、前期のうちに途絶した可能性が高いとされている。また、002号墳については、前方後方墳の可能性を示唆し、玉類が副葬された

周溝内土壙の存在や壺形埴輪の出土から、首長墓の一つに数えうる特殊要素があるとしている[4]。いずれにしても、大規模集落を背景とした古墳群としては小規模であり、地域の中心的役割を担った集団が築いたと推察される。

第106図Ⅵには古墳時代中・後期の主要遺構を示した。古墳時代中期の竪穴住居跡2軒（120B住・131住）、古墳時代後期の竪穴住居跡4軒（SB015・SB016B・SB016D・133住）・古墳（円墳）5基（001・003・004・005・006）・土坑3基・溝状遺構1条である。古墳時代中・後期になると竪穴住居跡の数は減少する。しかし、中期と後期の住居は存続しており、途絶したわけではない。古墳築造後この地区には住居が建っていない。これは台地縁辺部が墓域化された結果、居住地区を変更したものと推察される。おそらく台地縁辺部から台地の若干奥まった地区への居住変更が行われたのであろう。このことを示す客観的事実はなく推論でしかないが、台地内部の今後の調査に期待するしかない。後期の001号墳が築造される頃には一番近接する住居は133住であり、おそらくこのあたりまでが、古墳群を構成する墓域と考えられる。133住が位置する周辺は比較的古い段階で埋没した谷がみつかった。133住はその埋土上に構築されているためそれ以前の埋没と考えられる。当時はこの部分は台地上では少なからず窪地となっていたと思われ、住居をを構築するには不向きな地であったと思われる。本遺跡調査区東側にも後期の古墳が築造されているが、配列が若干南北の向きになっており、この状況から周辺にも未調査分で数基は展開している可能性がある。

第106図Ⅶには奈良・平安時代の主要遺構を示した。竪穴住居跡45軒・掘立柱建物跡15棟・土坑30基・柱穴（ピット）19か所・井戸状土坑1基・道路状遺構1条である。この時期には、爆発的に住居が建設されるようになるが、古墳群の墓域を若干意識したかのように、古墳と重複しないように竪穴住居が建てられている。特に古墳群が存在した部分には住居は希薄で、当時はまだ墳丘がしっかりと残っていたからだと推察される。墳丘削平の時期は平安時代以降に求めることができよう。この時期の竪穴住居跡は大まかに北東と北西の、2方向の主軸がみられる。同様に掘立柱建物跡の桁行方位も、北東と北西に大別できる。このことは、この時期の集落に、少なくとも2回の大きな革期があったことを示すものではなかろうか。奈良・平安時代とおおざっぱな時期区分をしているためかも知れないが、奈良・平安時代以前の各時期の遺構の重複はほとんどみられないのに対し、この時期には重複する竪穴住居跡が多くみられる。また、埋没谷の部分には、この時期の竪穴住居跡は全くみあたらない。というよりは、埋没谷を避けるように埋没谷縁辺部の若干高い部分に竪穴住居跡がみられる。おそらく埋没谷を取り囲むように集落が構成されたものと思われる。埋没谷は生活するのに不向きな地であったからこそ、このような集落構成となったと考えられる。こうやってみてくると、この時期の台地縁辺部は、大規模な集落を構成するには決して良い条件ではなかった（古墳及び埋没谷の存在）ようである。にもかかわらず少しでも条件の良い地には、竪穴住居跡が集中している。台地縁辺部に住居が集中する理由は、近接する低地との関わりが考えられる。現に平安時代前半頃の道跡が検出されており、その道跡の行き着く先は台地直下に広がる低地と、台地上の竪穴住居跡が集中する地区である。この集中する地区は平安時代後半になると住居はなくなり、掘立柱建物跡が集中する地区へと変化する。いわゆる収穫物を保管する倉庫群が形成されたようである。出土遺物をみても、地元はもとよりいろいろな地域産の土器が出土している。（詳細は「第3章第3節2出土遺物について」で触れているのでここでは省略する。）このことから他地域との交流も意外と密に行われているようで、弥生時代後期から奈良・平安時代にかけての集落の実態が、社会環境面や自然環境面でも徐々に

明らかにされるようになってきた。

中・近世になると地上の生活形態は一変するようで、土坑・溝状遺構・火葬施設・ピット群・地下式坑等がみられるようになる。

本事業に伴う調査では台地縁辺部に限っているが、近接する遺跡の調査結果を総合すると台地全体の様子がかいまみれる貴重な資料を提供した。この台地上には考古学上貴重な資料が今も包蔵されており、その資料が破壊されることなく後世に受け継がれていく努力も我々は惜しむべきではないと考える。

もっとも、これまでの本遺跡調査範囲が台地縁辺部に限られていることから、本遺跡の全体像を明確に示すにはまだ若干無理がある。今後、周辺地域の調査の進展や議論がより活発になれば、本遺跡の資料はそのときに貴重な存在となるはずである。

註1　西野雅人　2005　「八千代市間見穴遺跡（2）　第3章　第2節　縄文早期後葉の印旛沼周辺貝塚群」

西野氏の論考によれば、「印旛沼周辺貝塚群」の特徴を次の五つにまとめ、間見穴遺跡の特徴を示している。

①早期後葉に集落が沿岸部に集中する。

②貝層を形成する例が急増するのは、貝類の食糧化が一般化したことを示している。

③貝層は小規模なものが多く、大量採取や日常的な利用は認められない。

④アサリ等の内湾種に比べて、ハイガイ・マガキ等の湾奥干潟種の利用が活発であった。

⑤貝以外の遺物はほとんど混じらない。魚類の利用は低調であった。

「間見穴遺跡の特徴といえるのは、貝層の数が多い点である。周辺の貝塚に比べて貝類の利用が活発であった背景には、旧印旛沼に入り込んだ内湾域と、平戸川・神崎川の湾奥干潟域の両方が利用しやすい立地条件の良さにあった可能性が高い。」とし、「未調査区の貝層散布範囲も考慮すると、住居跡は概ね環状に配置され、その内側の空間に貝が廃棄されるなど、集落構造に企画性が認められる。」と結んでいる。

2　八千代市教育委員会　1995　「平成6年度　八千代市埋蔵文化財調査年報」

3　本報告書の第3章間見穴遺跡では、この移行期と思われる遺構に関しては、古墳時代前期初頭として表記した。

4　古墳群についての記述は、田中裕氏が報告書に記述した論考を引用したものである。「2004　八千代市間見穴遺跡　第3章　第2節　古墳と集落」

第3節　道地遺跡（第107・108図）

本遺跡の発掘調査は、平成6年度に調査が開始され、平成8・9年度と継続し、今回の調査（平成14・15年度）を含めると、上層は本調査19,794㎡、下層は476㎡の本調査で終了した。（第1表・第2図参照）平成6・8・9年度分の調査成果については、既に報告書刊行済みである。第107図のⅠは主要遺構の全体図で、Ⅱ～Ⅴは主要遺構の時期別変遷を示した。図はいずれも煩雑さを避けるため、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・古墳を中心としてある。ここでは過去の調査成果も踏まえ、本遺跡の特徴を整理したい。旧石器時代の遺物は既報告書[1)]で報告されているものが計25点である。基本的には石器集中地点を形成しているものは、本調査区の北側と南側の2か所である。石器の出土層位は大半が第Ⅲ層のソフトローム層である。そのほとんどが剥片で、ナイフ形石器2点・掻器1点・尖頭器1点等も含まれている。隣接する間見穴遺跡同様、本台地上で人間の生活痕跡がみられるのは、この旧石器時代にまで遡るが、調査面積が16,0

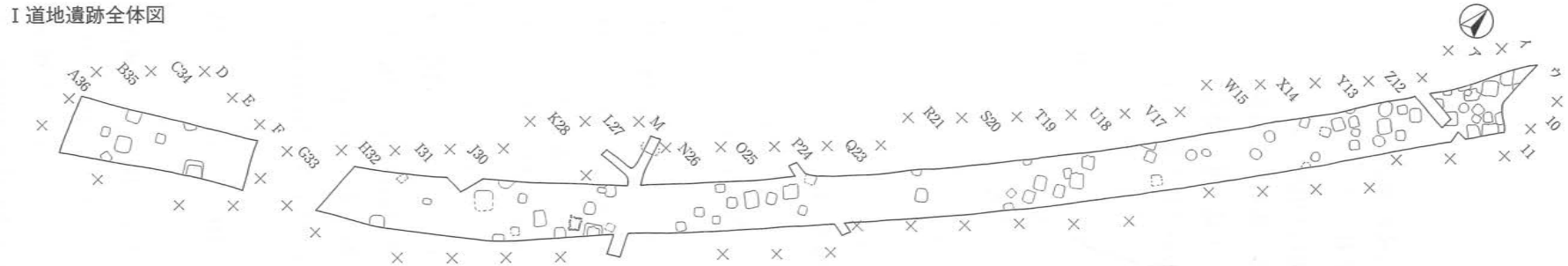
00㎡を越える規模のわりには出土石器の点数は少なく、密度の濃い生活痕跡とはいいがたい。次に上層で検出された遺構を時期別にみていくこととする。

第107図Ⅱは本遺跡で最も古い時期に該当する竪穴住居跡を示した。本遺跡の特徴も、隣接する間見穴遺跡及び周辺の遺跡同様、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡が多数検出されているということである。弥生時代後期の竪穴住居跡（同地点建て替え住居を含む）35軒（005・006・007・008・015・016・017・027・028A・028B・029・030・033・035・039・043・044・045・048・049・052・055・060・062・069・073・074・076・077・078・079・082・088A・088B・102）で、隣接する間見穴遺跡と比較すると3倍以上の軒数である。この時期のその他の検出遺構は土壙墓1基・土坑1基・環濠の一部があげられる。この時期は南関東系土器の本格的参入以前の時期にあたり、住居の形態は大型と小型に大別できる。長さ7～9ｍに達する大型住居の平面形態は隅丸長方形（楕円形）（005・006･008・017・052・060・069・074・076・079・088A・088B）が主体で、主軸に直交する長楕円形柱穴4か所を伴う確率が高い。それ以外は長さ4ｍ～5ｍ前後の小型住居が主流で、3ｍを下回る小型のものもみられる。小型住居の平面形態は隅丸方形・円形が主体である。本遺跡の調査は道路建設に伴う、どちらかといえば線の調査であるため明確にはつかめないが、大型住居1軒に対し3軒～5軒程度の小型住居が周辺に配置されているようにもみえる。この時期の竪穴住居跡は同地点建て替え住居と思われるもの以外は全く重複しておらず、企画性をもった住居の配置がなされているようである。このパターンを小集落と考えた場合、本遺跡においては大まかに六つの小集落に分けることが可能であろう。いわゆる西端部の017を中心とした小集落から東に向かい、008・027・076・052・069のそれぞれの小集落が基本となっているようである。各小集落はほどほどの間隔を置いて形成されており、このような小集落を母胎とした集合体が台地上に大規模集落として形成されていた可能性が考えられる。

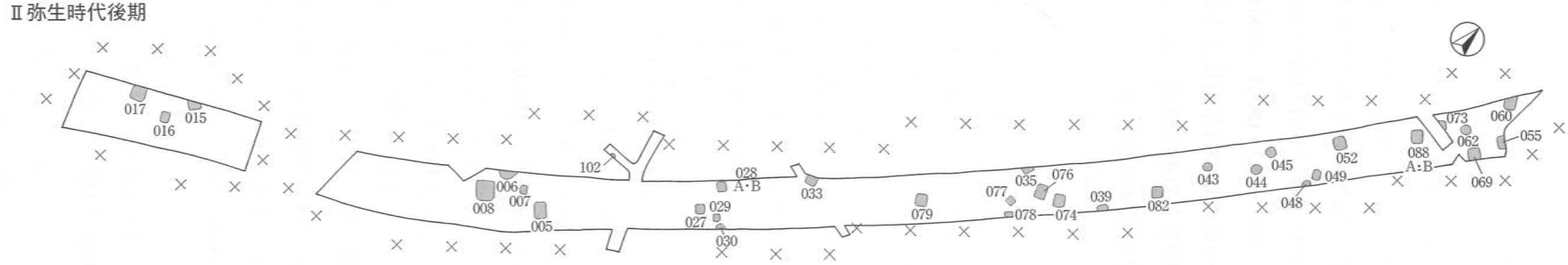
第107図Ⅲは弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴住居跡を示した。この時期の竪穴住居跡は28軒（001・010・013・031・032・037・041・042・050・051・053・054・056・058・061・068・070・071・080・081・083・085・086・087・103・104・105・108）である。この時期は「第4章　第3節　まとめ」で示したとおり、弥生時代から古墳時代の移行期にあたり、南関東系土器の本格的参入時期にあたる。住居の形態は隅丸方形が主体的となり、長さ4ｍ～5ｍのものが多くなるが、6ｍ～7ｍの大型のものや3ｍ前後の小型のものも含まれる。103の大型住居を取り巻くように小型住居がみられるように、前段階の様相を一部残しつつも、住居は中規模程度で均一化する傾向が若干みられる。集落の構成は前段階の弥生時代後期に比べれば、西側と東側の二極化の様相を示しており、西側では竪穴住居跡の密度は比較的薄く、東側では竪穴住居跡の密度は非常に濃い。本調査区の東端部は印旛沼低地を正面に見下ろす台地縁辺部にあたり、経済基盤が印旛沼低地に拡大した可能性も考えられるのではなかろうか。

第108図Ⅳは古墳時代前期の竪穴住居跡16軒（002・003・004・009・011・012・020B・034・057・063・064・065・066・067・084・099）である。住居の形態は隅丸方形、長さ7ｍ～8ｍ前後のものから、4ｍ前後のものまでみられ、住居規模の均一化は前時期とあまり変化はみられない。住居の分布域は前時期を踏襲しており、西側と東側の二極化の様相を残している。しかし、住居数は明らかに減少傾向がみられ、本調査による限り、古墳時代前期後葉のうちに集落は縮小した可能性が高い[1)]。このような傾向は今回（平成14・15年度調査）の調査成果を加えても同様に捉えられ、少なくとも古墳時代前期後葉から中期及び後期初頭にかけて竪穴住居跡の軒数は極端に減少する。

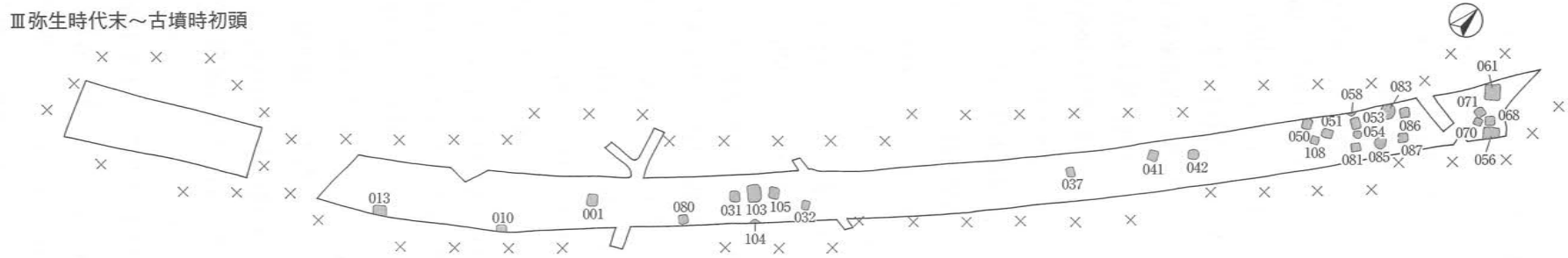
Ⅰ道地遺跡全体図



Ⅱ弥生時代後期

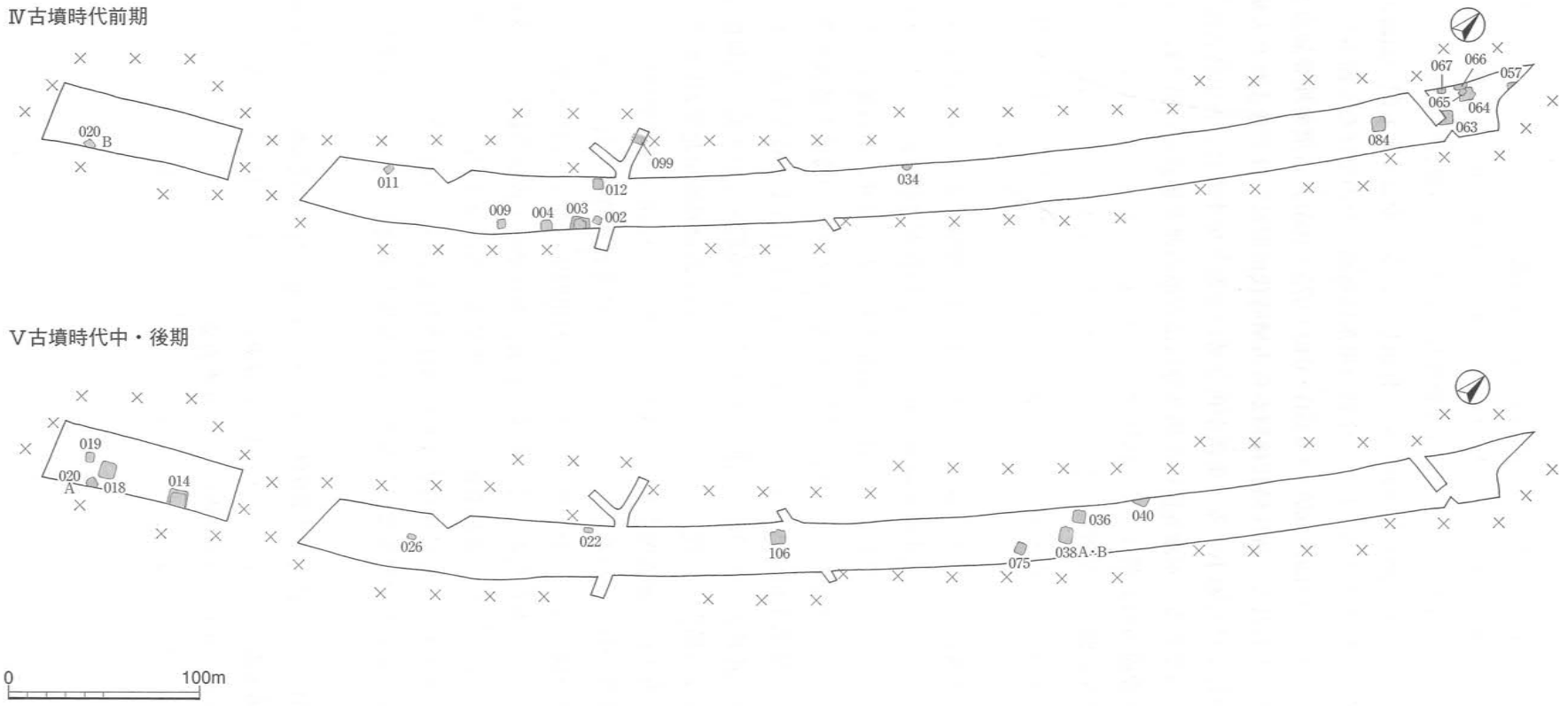


Ⅲ弥生時代末～古墳時初頭



0　100m

第107図　道地遺跡全体図及び主要遺構変遷図（1）



第108図　道地遺跡全体図及び主要遺構変遷図（２）

第108図Ⅴは古墳時代中・後期の竪穴住居跡及び主要遺構を示したものである。古墳時代中期に帰属すると思われる竪穴住居跡は3軒（014・018・019）である。昭和58年に八千代市教育委員会により、本事業による発掘調査区域の東側平坦部が先行調査されている。その報告[2]によれば、弥生時代後期の竪穴住居跡9軒とともに和泉期の竪穴住居跡3軒を検出している。少なくとも同一遺跡内に古墳時代中期の竪穴住居跡は現在まで6軒確認されており、中期の集落は途絶したのではなく縮小したことが分かる。後期は竪穴住居跡7軒（020A・036・038A・038B・040・075・106）、古墳の埋葬施設2基（022・026）で、いずれも後期後葉と思われる。弥生時代後期から古墳時代前期にかけて営まれた大集落は、古墳時代中期前後から後期初頭にかけて縮小する。集落が再び勢いを取り戻すのは、古墳時代後期後葉からであるが、規模は小規模なものである。本調査区の西側部分には古墳の埋葬施設が検出されており、それが構築される頃には、埋葬施設周辺の集落は墓域との関連からか途絶してしまうようである。その後の奈良・平安時代に帰属する竪穴住居跡は、本遺跡の今までの調査からは未検出である。隣接する間見穴遺跡では逆行するように、奈良・平安時代の大集落が展開する。このことは台地全体での集落の移動が活発に行われていた証拠である。

以上のように本遺跡についてみてきたが、本台地上及び神崎川北岸・新川南東岸には弥生時代後期から古墳時代前期にわたる大規模な集落が調査され、そして現在も包蔵されている。本台地上及び周辺域の発掘調査が多く行われ、これまでに貴重な資料が蓄積されてきており、本台地を含む印旛沼西岸地域の様相は徐々に明らかになってきている。全貌の解明にはまだまだ多くの時間と議論を要するが、ここではこれまで明らかとなった成果を田中氏の論考[1]を交えながら本項のまとめとする。本台地を含む印旛沼西岸地域一帯は弥生時代後期から古墳時代前期にかけて一つの革期をむかえる。大規模な集落が営まれ、竪穴住居跡の重複が少ない傾向で一致している。しかし、田中氏は神崎川北岸の松崎Ⅱ遺跡・一本桜南遺跡・向新田遺跡、新川南東岸の調査例をあげ、「傾向は一致しているが、集落動態は異なる。」とし、本台地上の集落遺跡の継続性の強さを示唆している。この点を踏まえ本遺跡を含む台地上について田中氏は、「独自性の強い世界を形成しているが、それとは裏腹に閉鎖的ではなく、内外を繋ぐ水上交通がとくに重要視された社会でもあったとみられる。この世界の要衝にある平戸・佐山半島には、継続性のある大規模な拠点集落が存在したと推定され、道地遺跡はその一角であった可能性が高い。」[3]と結んでいる。

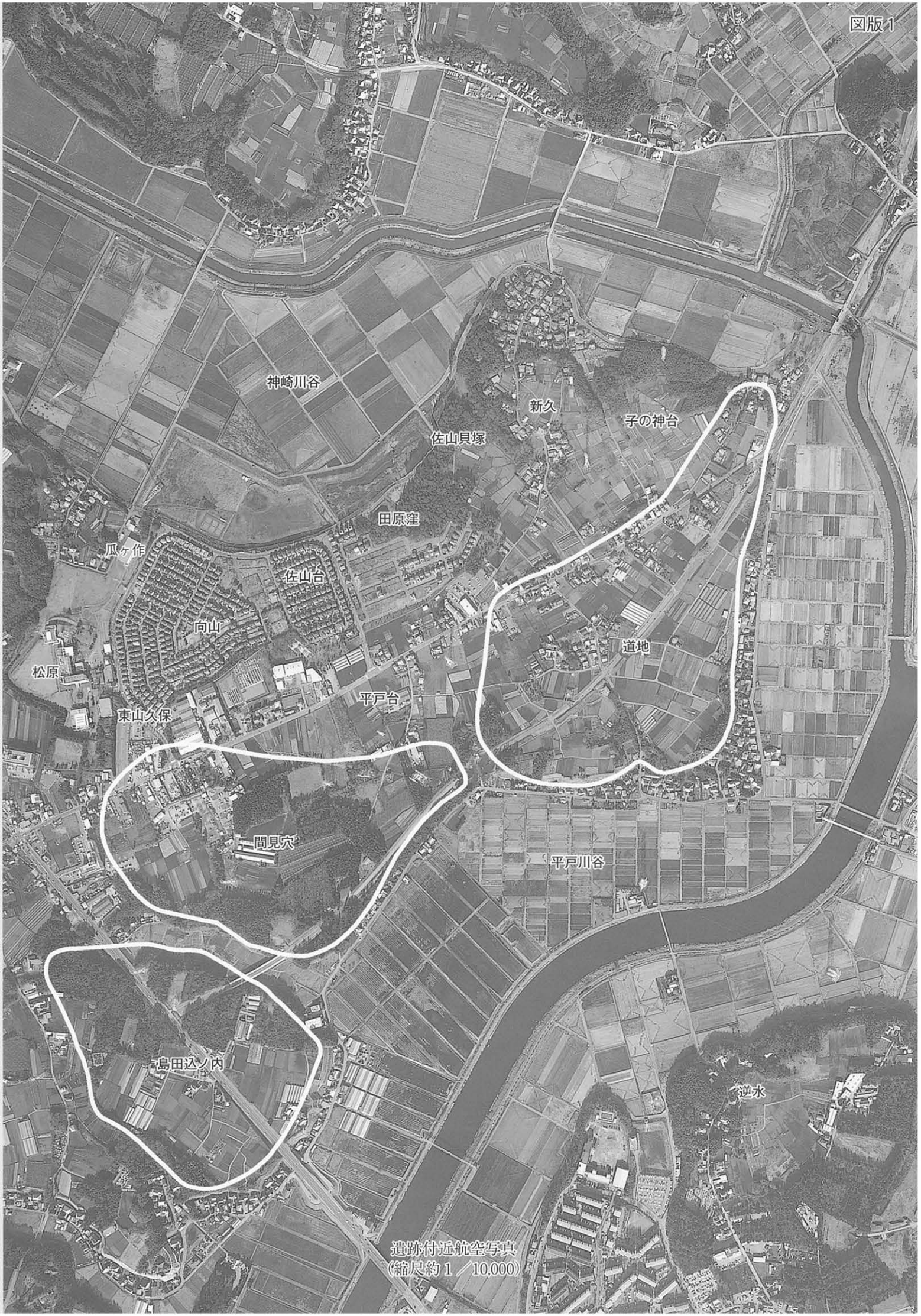
本事業に伴う調査成果はすでに報告書4冊が刊行されている。今回をもって5冊めとなるが、いずれも貴重な資料を提供することができた。今後さらなる分析と議論がなされることを期待する。

註1　田中裕　2004　「八千代市道地遺跡跡　第3章　第1節　弥生時代後期から古墳時代前期の土器と集落」
田中氏の論考を参考に記述したものであり、詳細については上記報告書を参照されたい。

2　林勝則　1986　『平戸道地遺跡跡』八千代市教育委員会

3　筆者はこの意見に賛同するものであり、あえてこの項で田中氏の論考をそのまま掲載することとした。

写　真　図　版



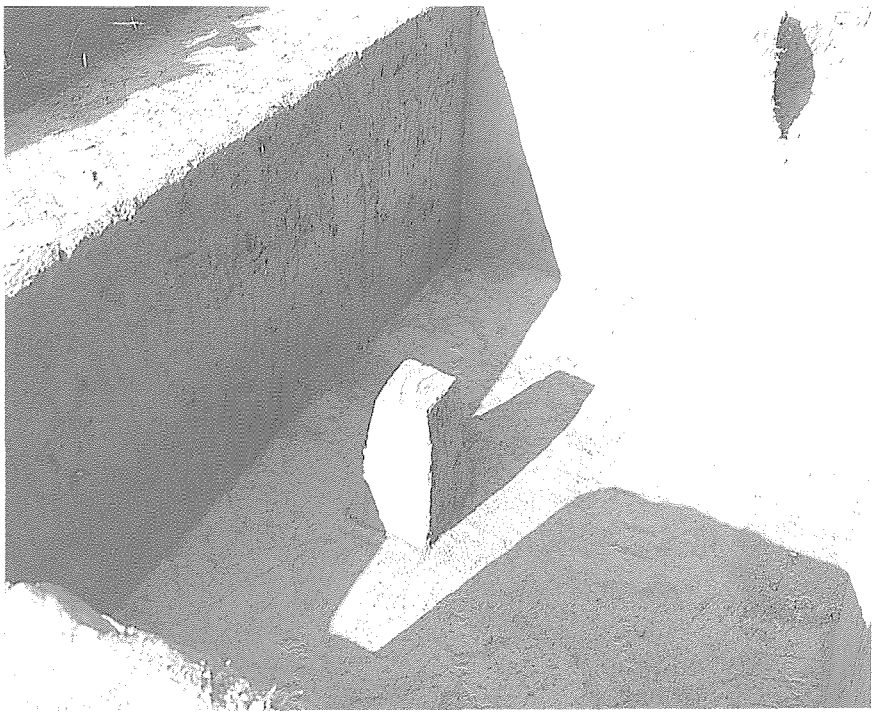
遺跡付近航空写真
(縮尺約1／10,000)

島田込ノ内遺跡

（平成15年度調査）

100住（東から）

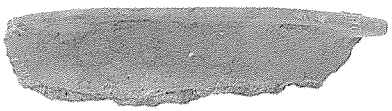
遺物出土状況（北から）



旧石器時代石器出土状況
グリッド（YYI-88）

100住出土遺物

1



2

3

（表）　（裏）

出土石器

間見穴遺跡

（平成15年度調査）

101住遺物出土状況（北から）

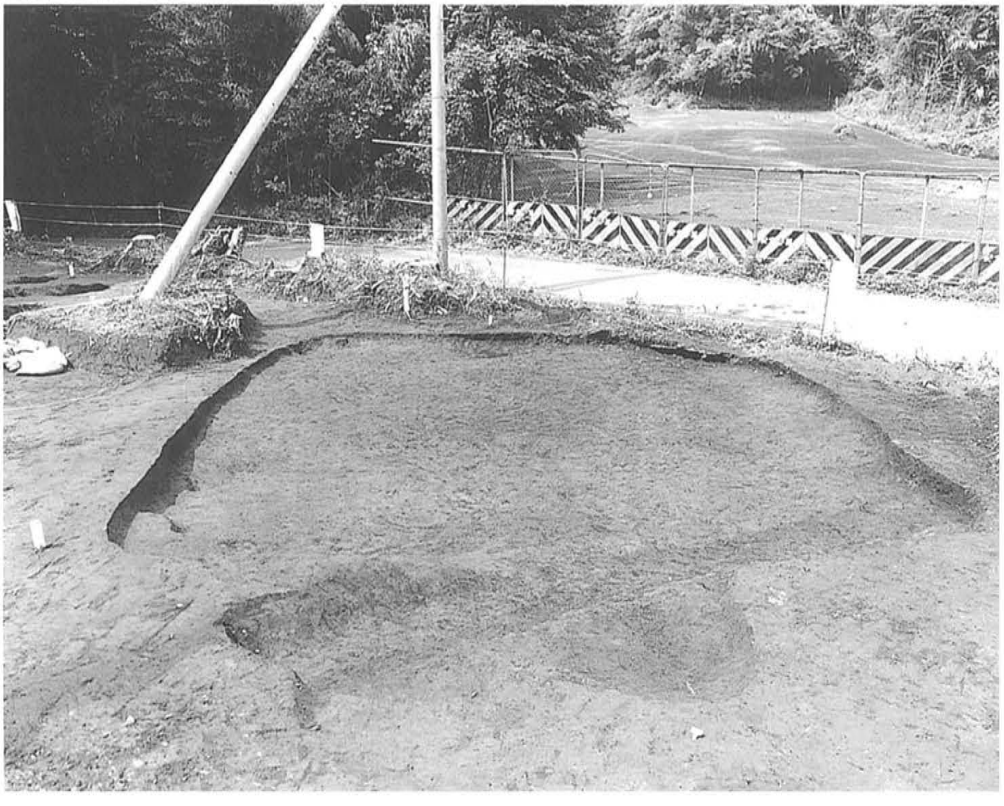
101住（北から）

102A住遺物出土状況（東から）

102A住カマド（西から）

102A・B住（北から）

103A住遺物出土状況（西から）

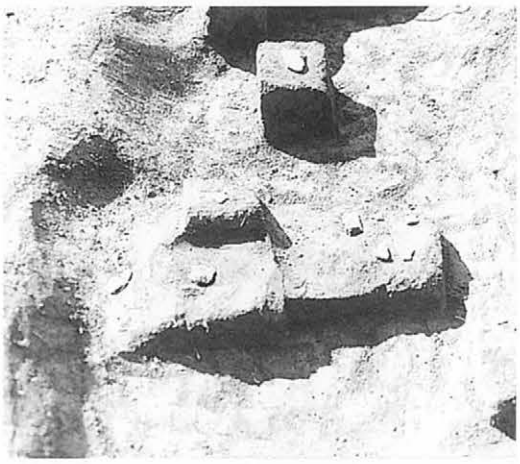


103A・B住（東から）

図版4

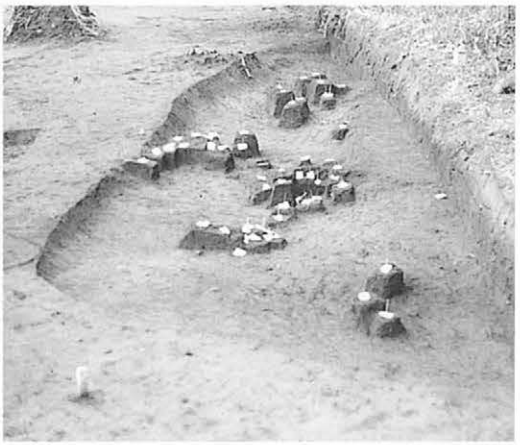
104掘（東）

105道（東から）



105道遺物出土状況（南から）

106A周（南から）



106A周遺物出土状況（南から）

109住（東から）

110B住遺物出土状況（東から）

110A・B住（東から）

110B住カマド（東から）

110B住遺物出土状況（南から）

110C・D坑（東から）

図版6

111住（東から）

111住遺物出土状況（南から

112溝セクション（西から）

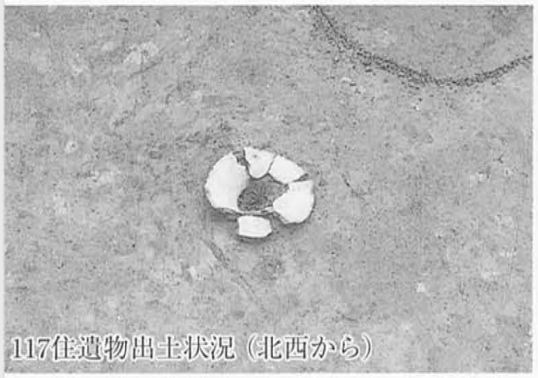
112溝遺物出土状況（西から）

116A住（西から）

116A住遺物出土状況（南から）

116A住炭化物出土状況（西から）

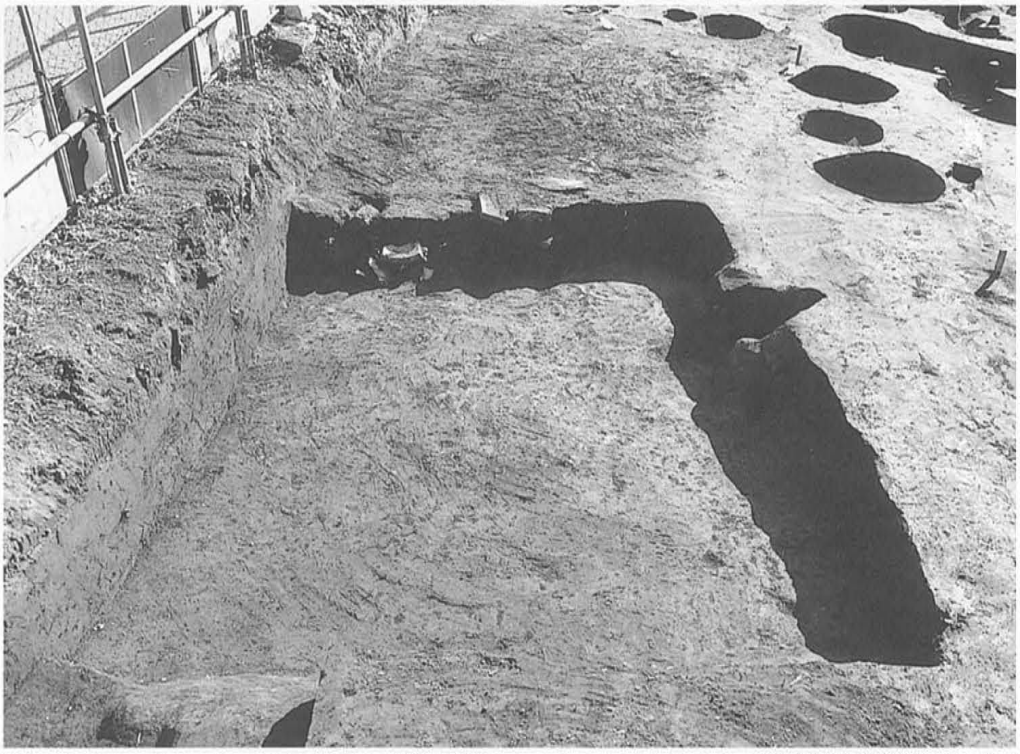
117住遺物出土状況（西から）



117住遺物出土状況（北西から）

117住（西から）

118住カマド遺物出土状況（南から）



118住（東から）

119住遺物出土状況（南から）

119住（東から）

図版 8

120A住（北から）

120A住遺物出土状況（西から

120B住（東から）

120B住カマド遺物出土状況（東から

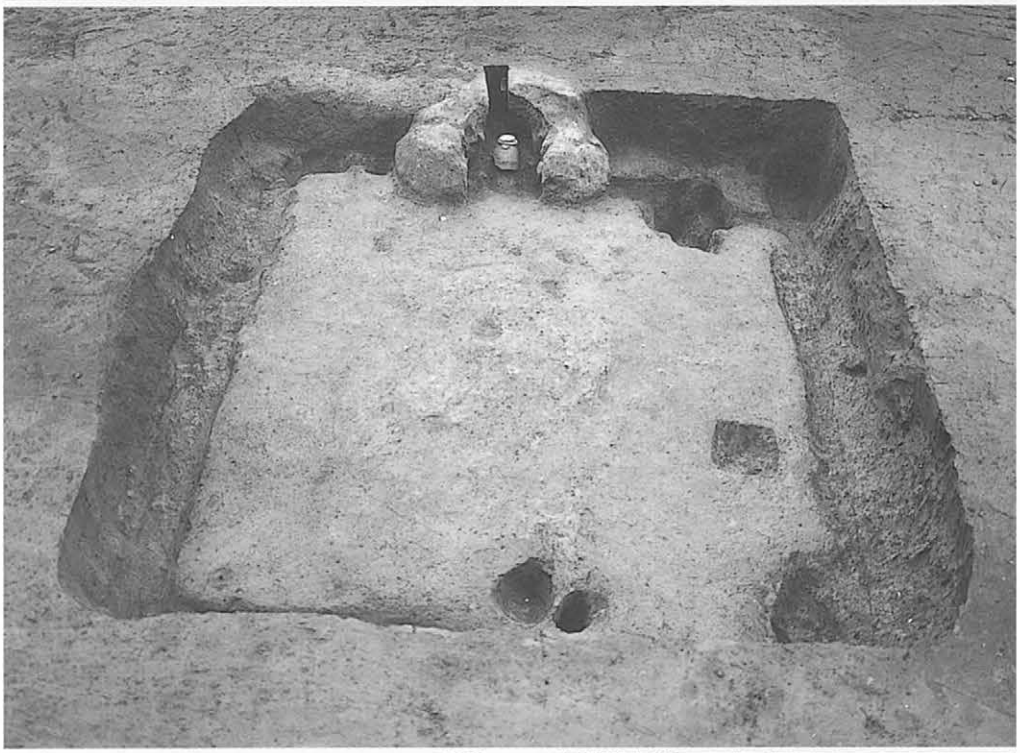
121住（西から）

121住遺物出土状況（南から

121住カマド内支脚出土状況（南から）

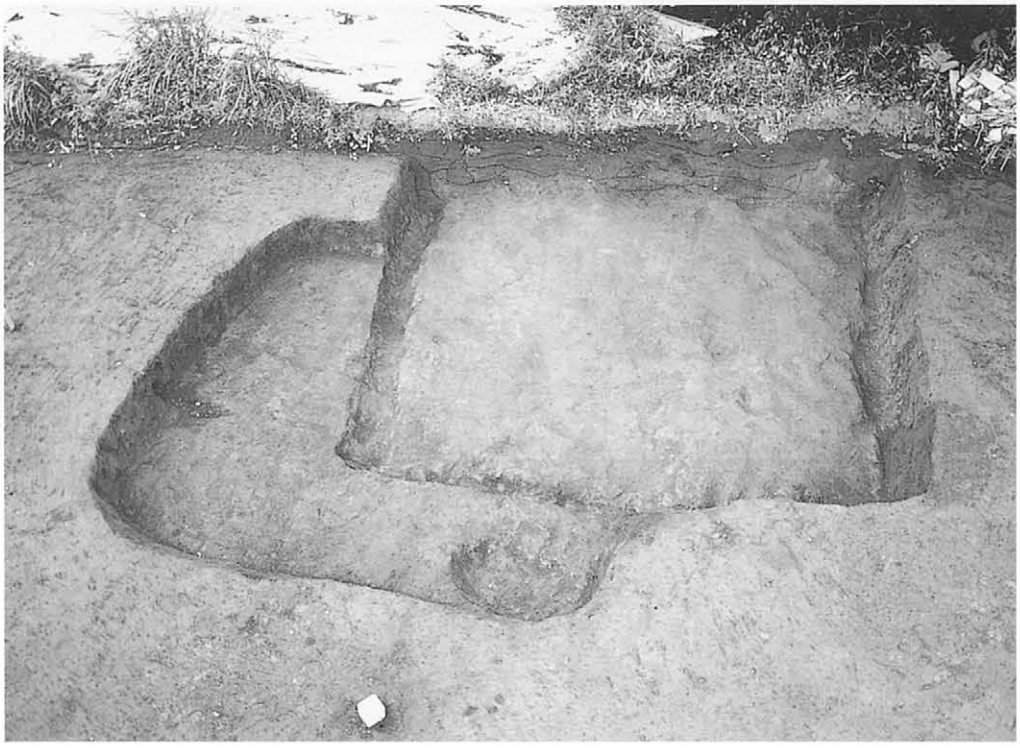
122住カマド遺物出土状況（南から）

122住遺物出土状況（南東から）



122住（南東から）

124住遺物出土状況（北から）



123・124住（南東から）

図版10

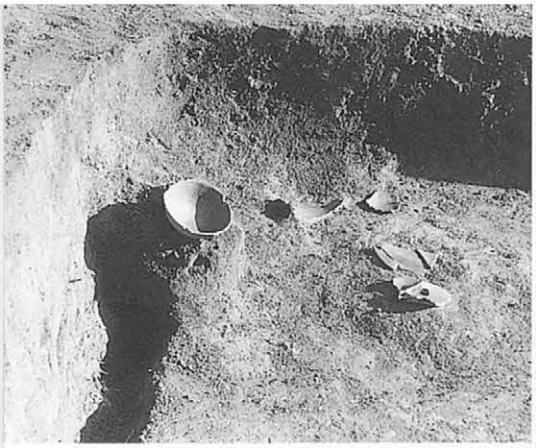
125住カマド内支脚出土状況（西から

125住（東から）

130溝（北西から）

131住遺物出土状況（南から

131住（南から）



132住遺物出土状況（西から）

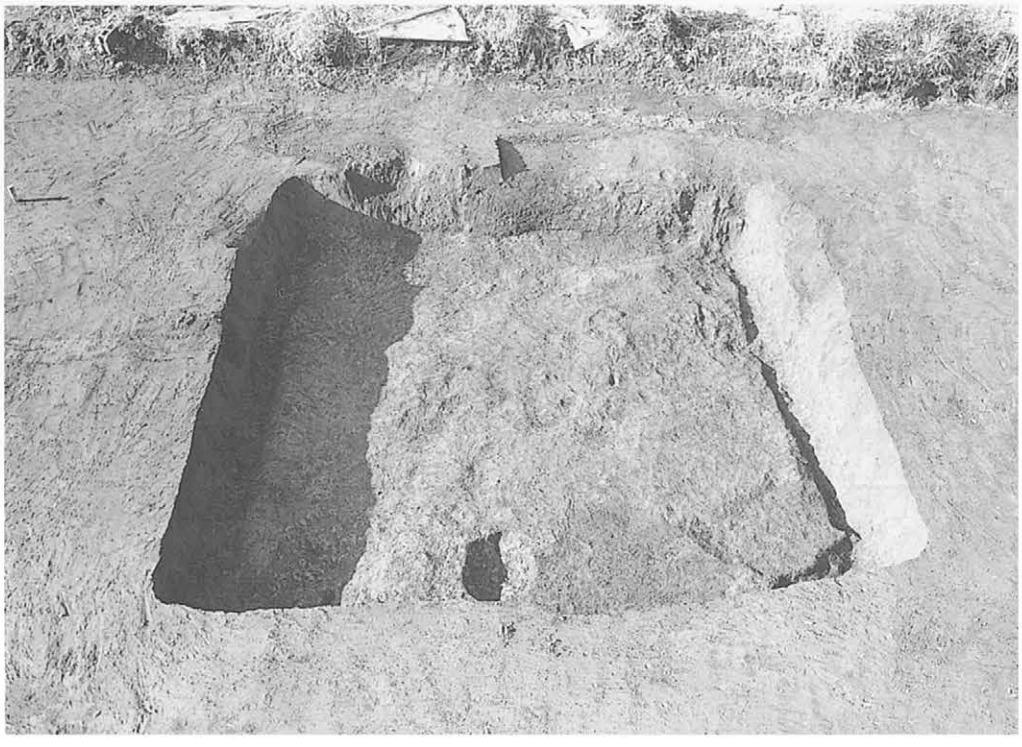
132住（東から）

133住遺物出土状況（南から）

133住カマド（南から）

133住（東から）

134住遺物出土状況（西から）

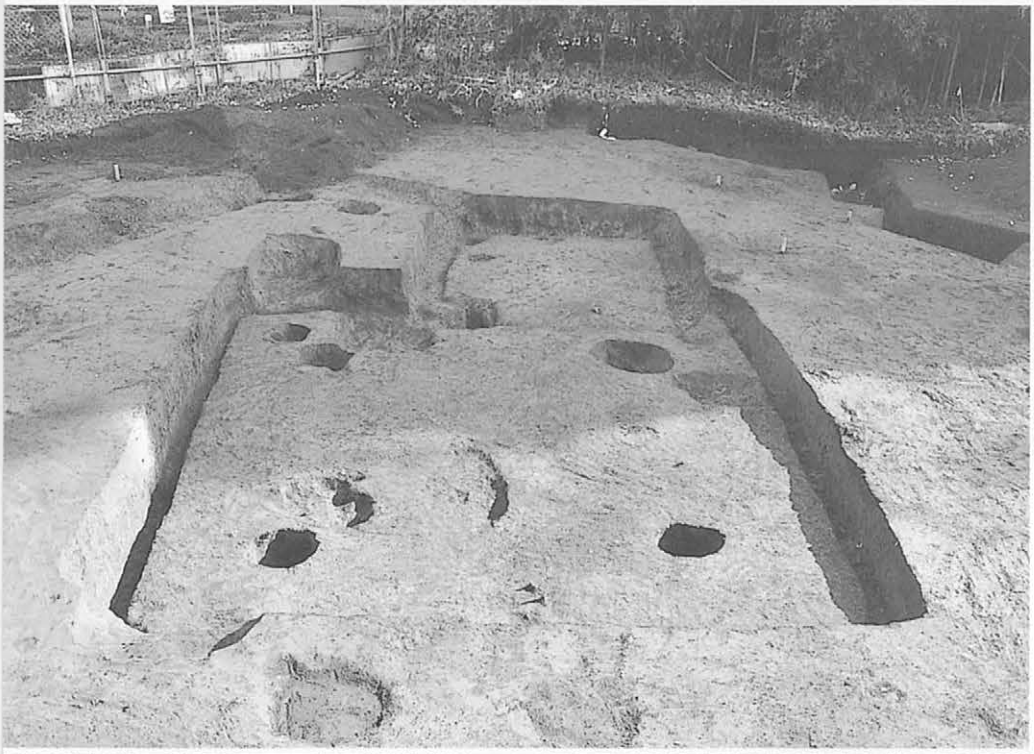


134住（南から）

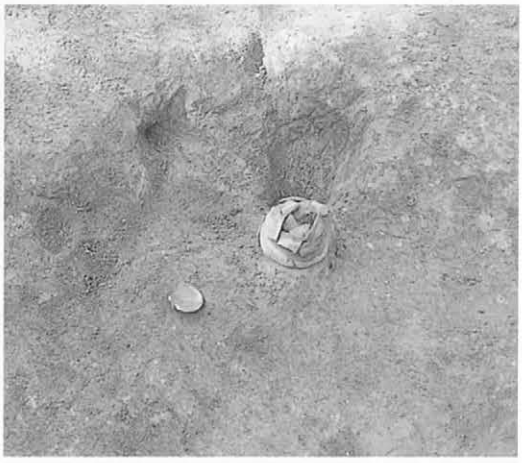
図版12

135住（南から）

135住遺物出土状況（北西から



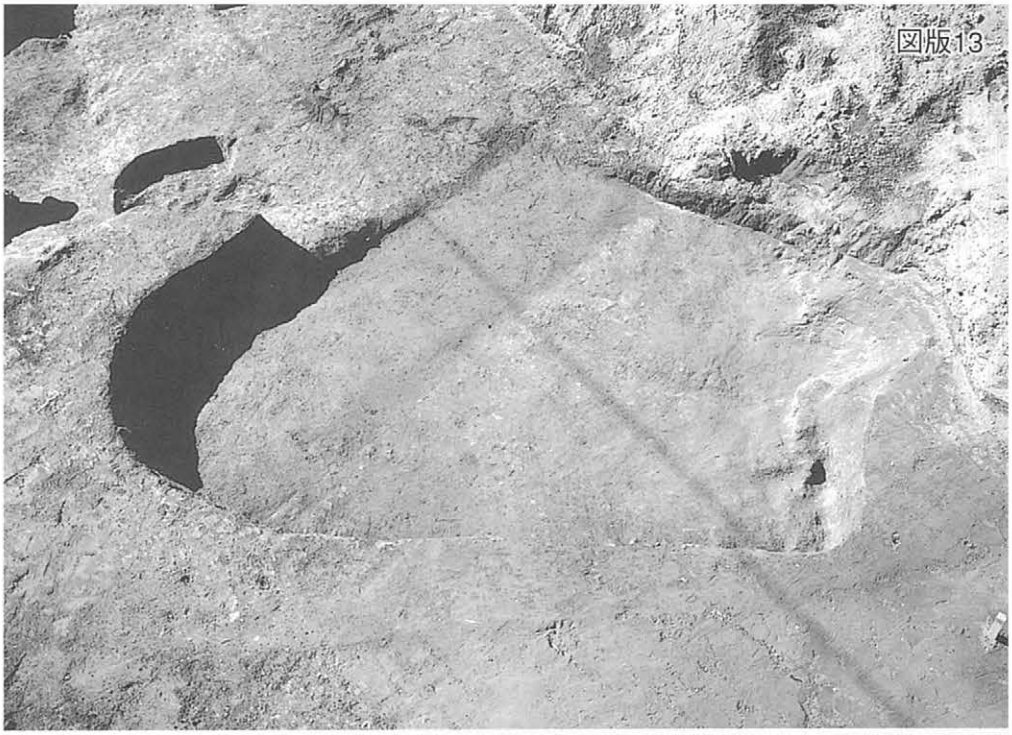
136住（南西から）



136住遺物出土状況（南西から

137住（南西から）

137住遺物出土状況（南から



139住（東から）

140住遺物出土状況（西から）

140住（南から）

142住遺物出土状況（南から）

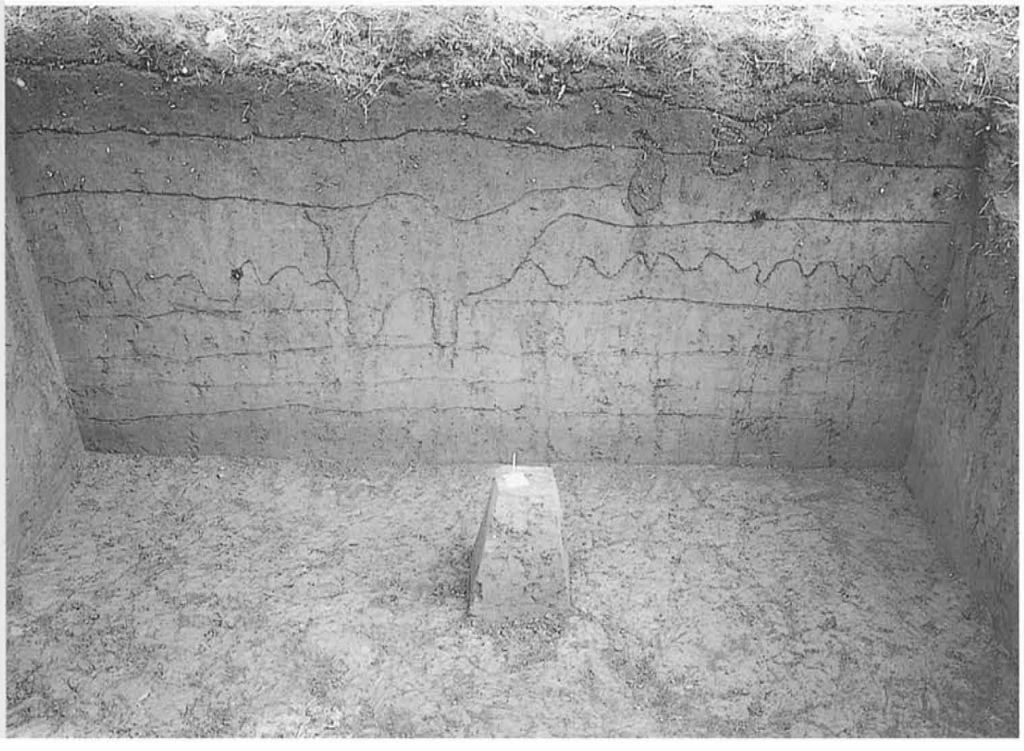
142住・SB026住（南から）

図版14

SB028住遺物出土状況（東から）

SB028住（南から）

ピット群（西から）



I15-00
下層遺物出土（西から）

106B坑（南から）

107坑（北から）

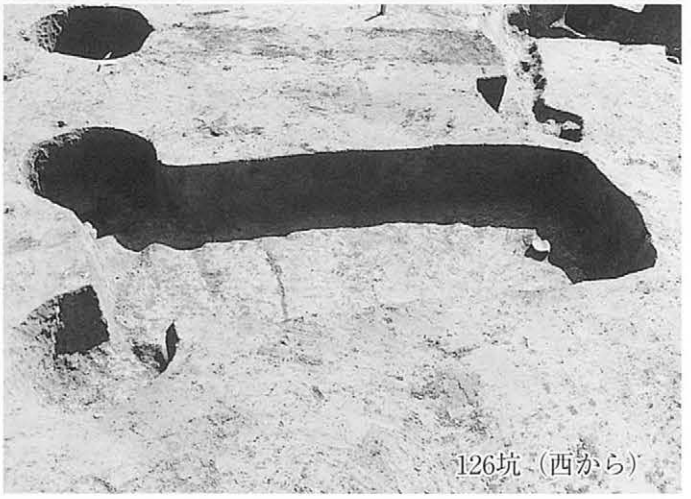
108坑遺物出土状況（南から）

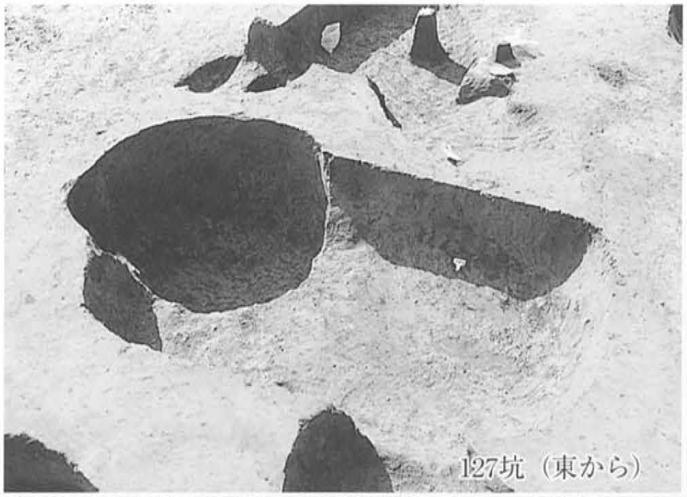
108坑（南から）

113坑（南から）

114坑（北から）

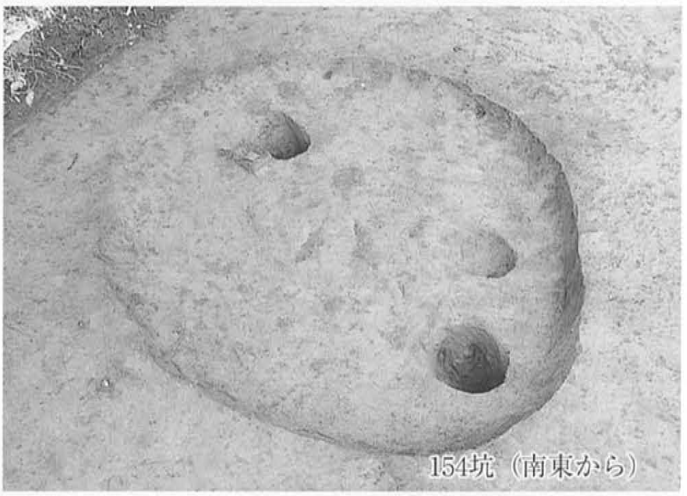
115坑（西から）


126坑（西から）


127坑（東から）

129坑（南から）

150坑（南東から）


154坑（南東から）

P1（北から）

P4（東から）

P5（東から）

P9（北東から）

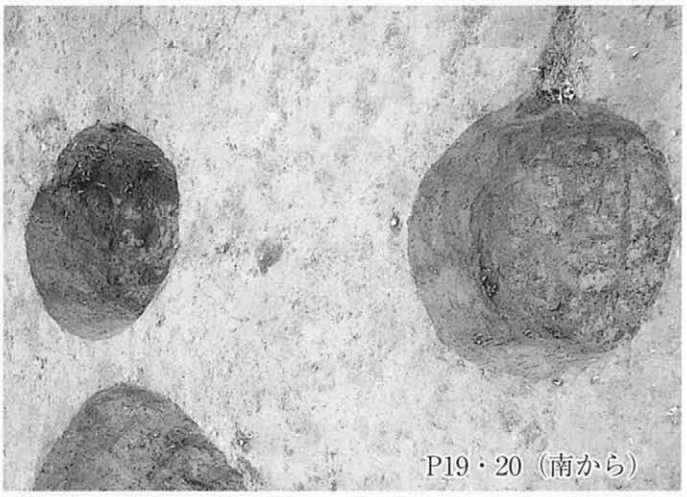
P11（東から）

P13（北から）

P14（北西から）

P15（西から）

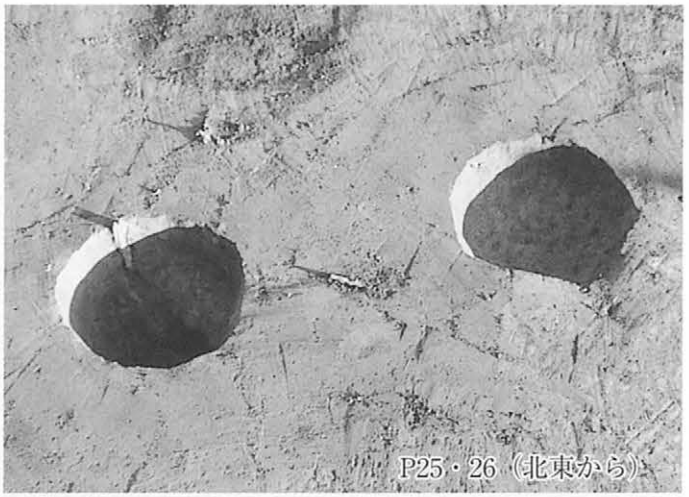
P16・17・18（西から）

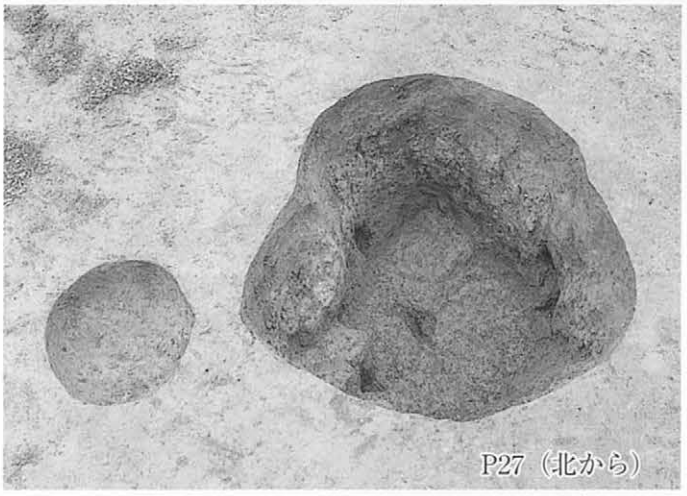

P19・20（南から）

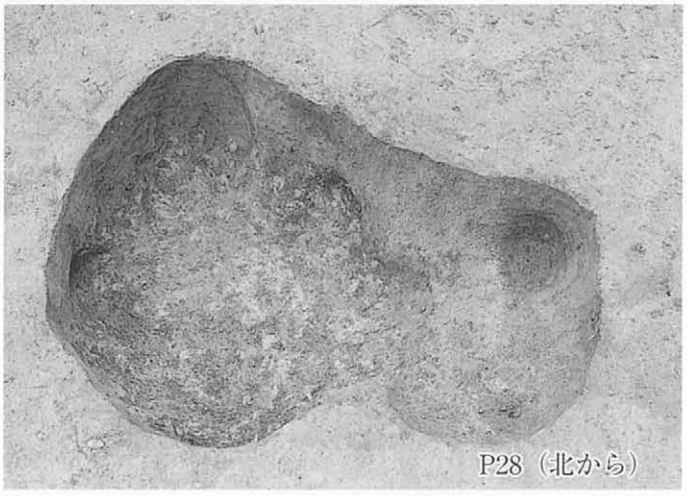
P21（北西から）

P22（南から）

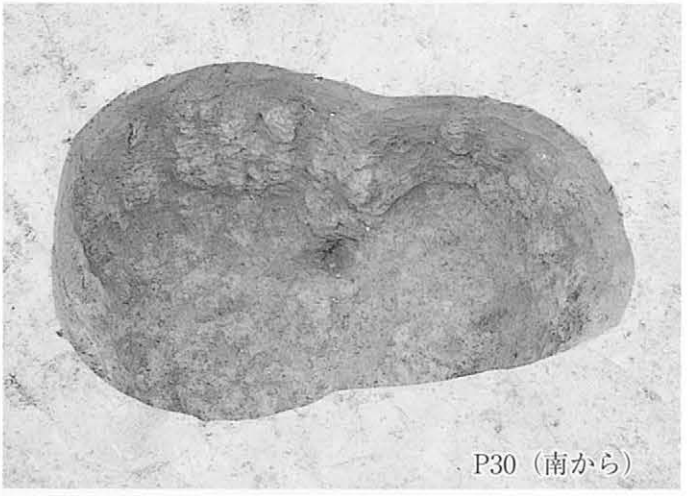
P23・24（南西から）

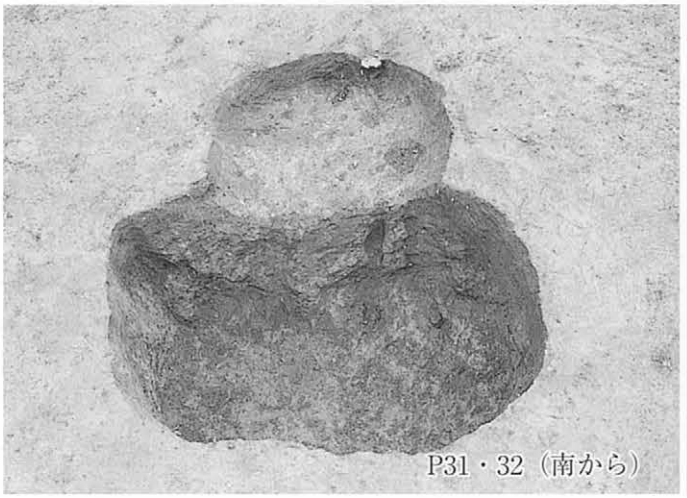

P25・26（北東から）


P27（北から）


P28（北から）

P29（北から）


P30（南から）


P31・32（南から）

P33（南から）

P37（東から）

148掘柱穴3・P37・P38（北から）

P39（北東から）

P40（北から）

101住-1

101住-2

101住-3

101住-4

101住-5

101住-5

101住-6

101住-7

102A住-1

102A住-1

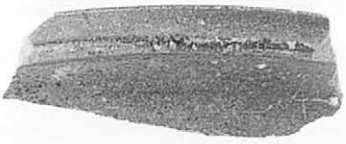
102A住-3

102A住-3

102A住-2

102A住-6

102A住-7


102A住-4

102A住-5

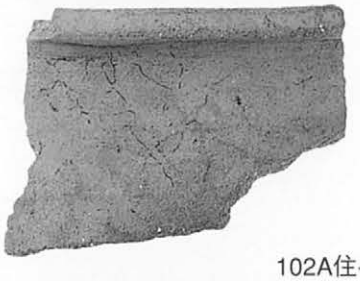
102A住-9

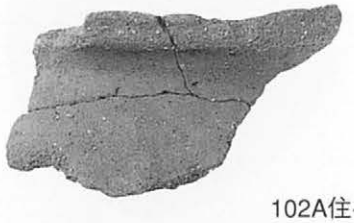
遺構出土土器

102A住-8

102A住-10

102A住-11


102A住-12


102A住-13

102A住-14

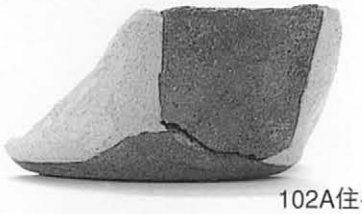
102A住-15

102A住-16

102A住-17

102A住-18

102A住-19

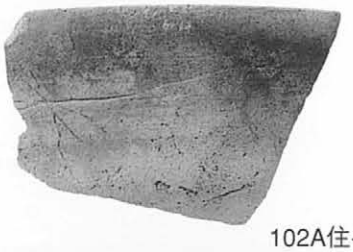

102A住-20

102A住-21

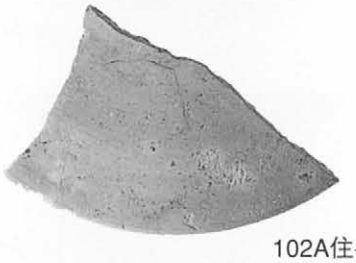
102A住-22

102A住-23

102A住-25


102A住-24

102A住-26


102A住-27

102A住-28

102B住-1

102B住-2

102B住-3

遺構出土土器

102B住-4

103A住-1

103A住-2

103A住-3

103A住-4

106A周-1

106A周-2

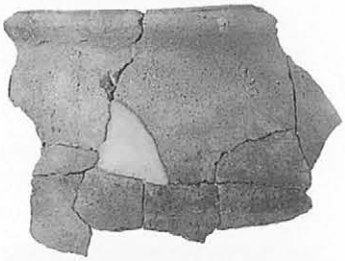
108坑-1

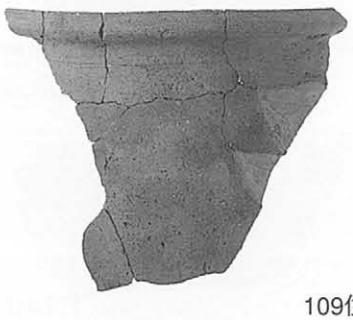
108坑-2

108坑-3

109住-1

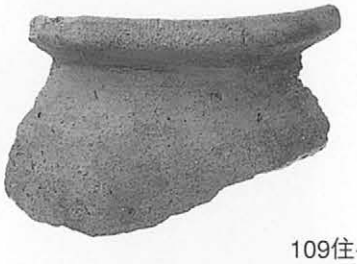
109住-2

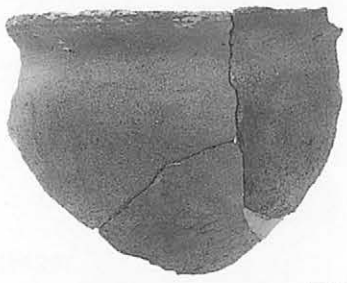

109住-3


109住-4

109住-5

109住-6


109住-7


109住-8

109住-9

109住-10

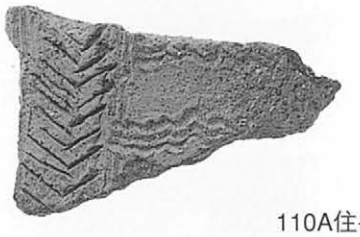
遺構出土土器

109住-11

109住-12

109住-13

110A住-1


110A住-2

110A住-3

110A住-5

110A住-4

110A住-6

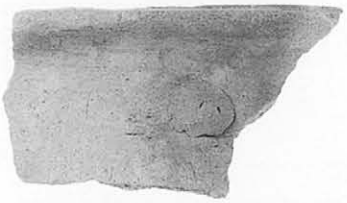
110A住-7

110B住-1

110B住-2

110B住-4

110B住-3


110B住-5

110B住-6

110B住-7

110B住-8

110B住-9

110B住-10

110B住-11

遺構出土土器

110B住-12

110B住-13

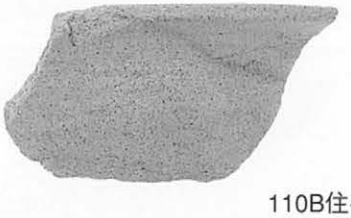
110B住-14

110B住-15

110B住-16

110B住-17

110B住-18


110B住-19

110B住-20

110B住-21

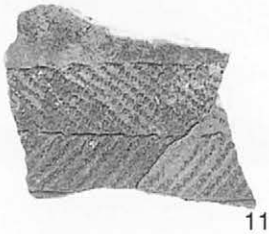
111住-1

111住-2

111住-3

111住-4

111住-5


111住-6

111住-7

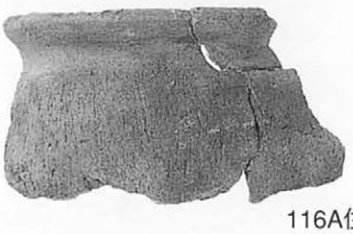
111住-8

111住-9

111住-10

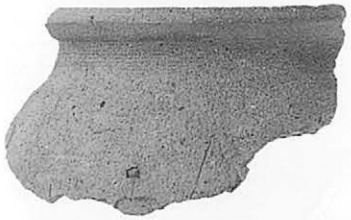
116A住-1

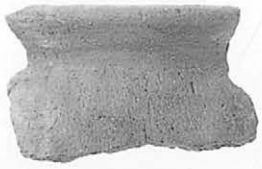
116A住-2

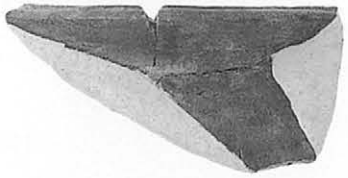

116A住-3

遺構出土土器

116A住-4


116A住-5


116A住-6


116A住-7

116A住-8

116A住-9

116A住-10

116A住-11

116A住-12

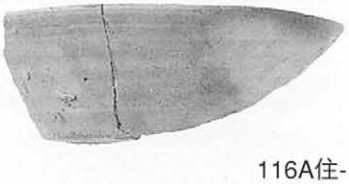
116A住-13

116A住-14

116A住-15

116A住-16

116A住-17


116A住-18

116A住-19

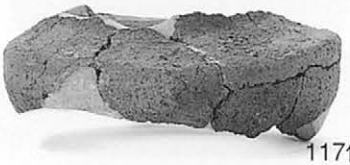
116A住-20

117住-1

117住-2

117住-3

117住-4


117住-5

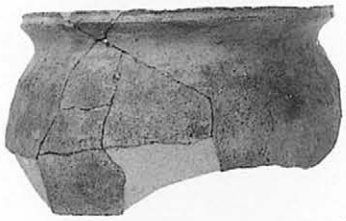
117住-6

遺構出土土器

117住-7

117住-8

117住-9


118住-1

118住-2

118住-3

118住-5

118住-4

118住-6

118住-7

118住-8

118住-9

118住-10

118住-11

118住-12

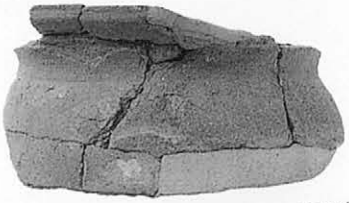
118住-16

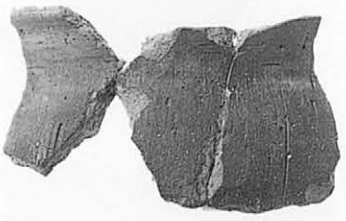
118住-13

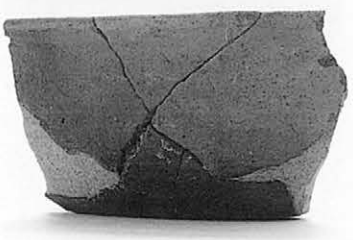
118住-17

119住-1

119住-2


119住-3


119住-4


119住-6

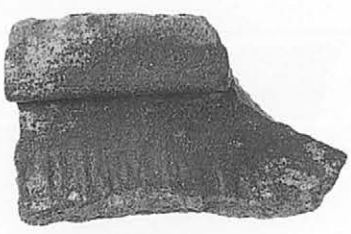
遺構出土土器

119住-5

119住-8

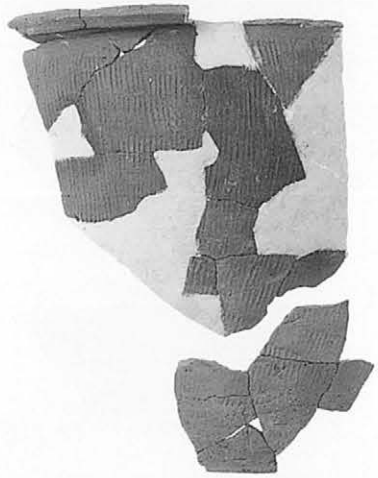
119住-9

120A住-1



120A住-2

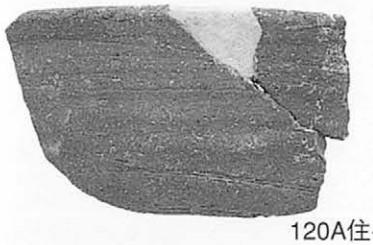
120A住-3



120A住-4

120A住-5

120A住-6

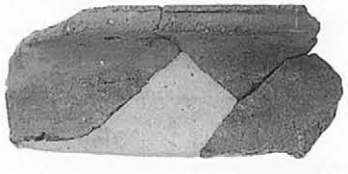


120A住-7

120A住-8

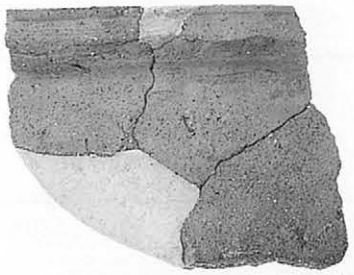
120A住-9

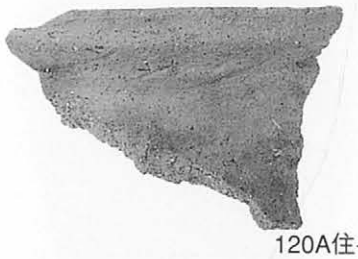
120A住-10



120A住-11

遺構出土土器

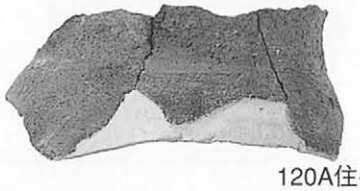

120A住-12


120A住-13

120A住-14

120A住-15

120A住-16


120A住-17

120A住-18

120A住-19

120A住-20

120A住-21

120A住-22

120A住-23

120A住-24

120A住-25

120A住-26

120A住-27

120A住-28

120A住-29

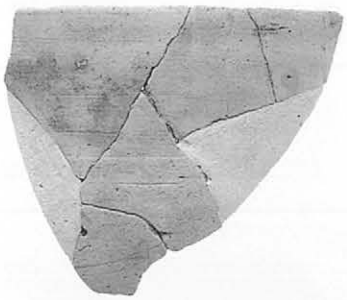
120A住-30

120A住-31

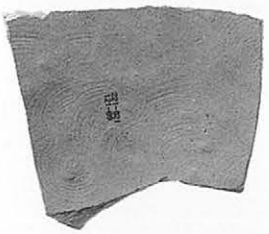
120A住-32

120A住-33

遺構出土土器



120A住-34



121住-3

120B住-1

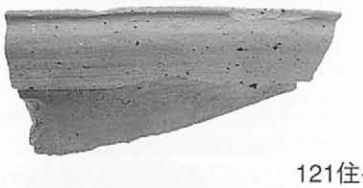
121住-4

120B住-2

121住-6

120B住-3

121住-7



121住-1

121住-2

121住-5

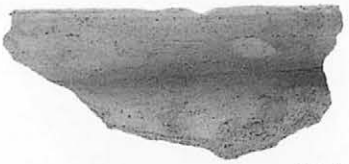
121住-8

遺構出土土器

図版30

121住-9

121住-14



121住-20

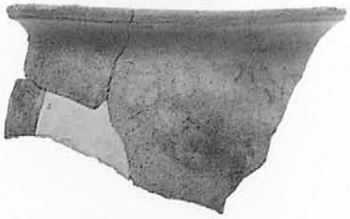
121住-21

121住-10

121住-15

121住-22

121住-11



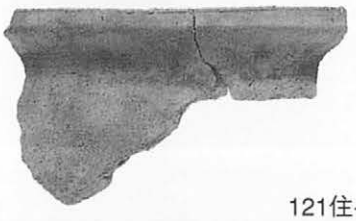
121住-16

121住-23

121住-17

121住-24

121住-12



121住-18

121住-25

121住-13

121住-19

遺構出土土器

121住-26

121住-27

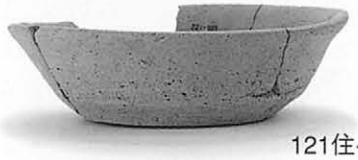
121住-28

121住-29

121住-30

121住-31

121住-32


121住-33

121住-34

121住-35

121住-36

121住-37

121住-38

121住-39

121住-40

121住-41

121住-42

121住-43

121住-44

121住-45

121住-46

121住-47

121住-48

121住-52

121住-53

121住-54

121住-55

遺構出土土器

121住-56

121住-57

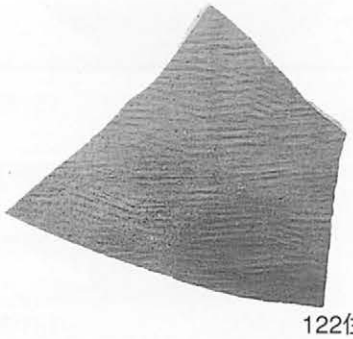
121住-58

121住-59

121住-60

121住-61

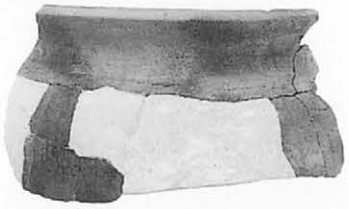
122住-1


122住-2

122住-3

122住-4

122住-5


122住-6

122住-7

122住-8

122住-9

122住-10

122住-11

122住-12

122住-13

122住-14

122住-15

122住-16

遺構出土土器

122住-17

122住-18

122住-19

122住-20

122住-21

122住-22

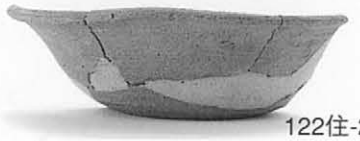
122住-23

122住-24

122住-25

122住-26

122住-27


122住-28

122住-29

122住-30

122住-31

122住-32

122住-33

122住-34

122住-35

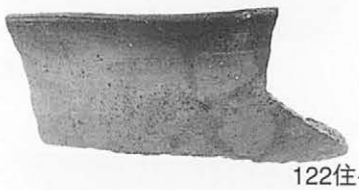
122住-36

122住-37

122住-38

122住-39

122住-40


122住-41

122住-43

122住-45

遺構出土土器

122住-44

122住-46

122住-47

122住-48

122住-49

122住-50

122住-53

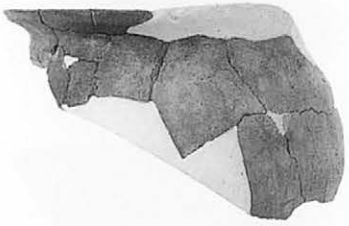
122住-54

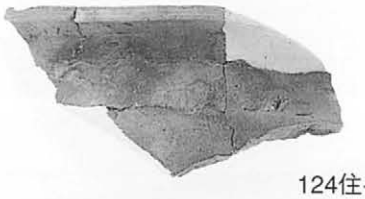
122住-55

122住-56

123住-1

124住-1


124住-2


124住-3

124住-4

124住-5

124住-6

124住-7

124住-8

124住-9

124住-10

124住-11

124住-12

遺構出土土器

124住-13

124住-22

124住-31

124住-14

124住-23

124住-32

124住-15

124住-24

124住-33

124住-16

124住-25

124住-34

124住-17

124住-26

124住-35

124住-18

124住-27

124住-36

124住-19

124住-28

124住-37

124住-20

124住-29

124住-38

124住-21

124住-30

124住-39

遺構出土土器

124住-40

124住-41

124住-42

124住-43

125住-1

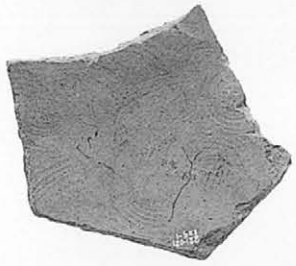
125住-2

125住-5

125住-6

125住-3

125住-4


125住-10

125住-7

125住-9

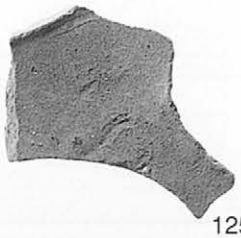
125住-8

125住-14

125住-13

125住-15

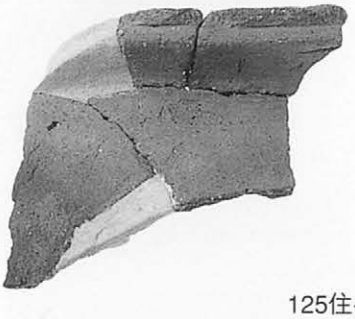
遺構出土土器


125住-11

125住-20

125住-28

125住-12


125住-22

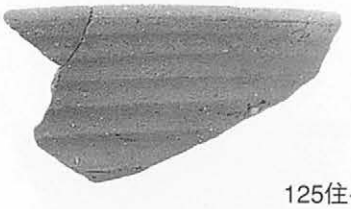
125住-29

125住-30

125住-16

125住-23

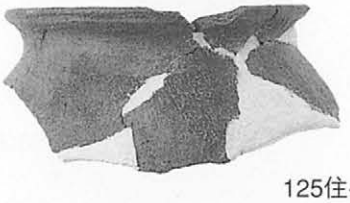
125住-31


125住-17

125住-24

125住-32

125住-18


125住-25

125住-33

125住-19

125住-26

125住-34

125住-21

125住-27

125住-35

125住-36

遺構出土土器

125住-37

125住-38

125住-39

125住-40

125住-41

125住-42

125住-43

125住-44

125住-45

125住-46

125住-47

125住-48

125住-49

125住-50

125住-51

131住-1

131住-4

131住-2

131住-3

131住-5

131住-6

131住-7

131住-8

遺構出土土器

132住-1

132住-2

132住-4

132住-5

132住-6

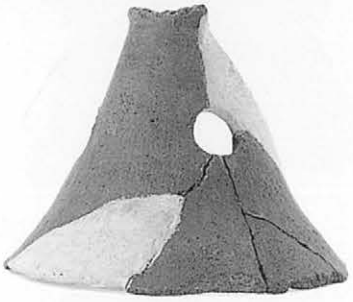
132住-8

132住-9

132住-10

132住-12

132住-13


132住-14

132住-15

132住-16

132住-17

132住-18

132住-19

132住-20

132住-21

132住-22

132住-23

132住-24

遺構出土土器

132住-25

132住-26

132住-27

132住-28

132住-29

132住-30

132住-31

133住-1

133住-2

133住-3

133住-4

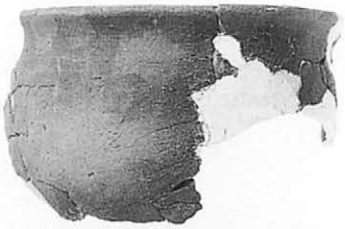
133住-5

133住-6

133住-7

133住-8

133住-9



133住-10

134住-1

134住-2

134住-3

134住-4

134住-5

遺構出土土器

134住-6

134住-7

134住-8

134住-9

134住-10

134住-11

134住-12

134住-13

134住-14

134住-15

134住-16

134住-17

134住-18

134住-19

134住-20

134住-21

134住-22

134住-23

134住-24

134住-25

134住-26

134住-27

134住-28

134住-29

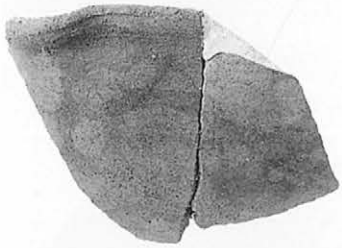
134住-36

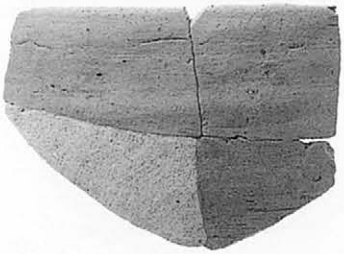
遺構出土土器

134住-37

134住-38

134住-39


134住-40


134住-41

134住-42

134住-43

134住-44

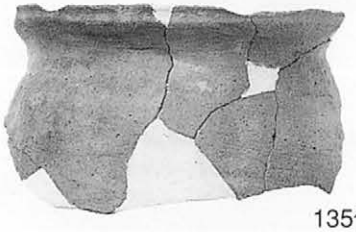
134住-46

134住-47

134住-48

135住-1

135住-2


135住-3

135住-5

135住-4

135住-6

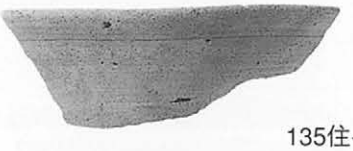
135住-7

135住-8

135住-9

135住-10

135住-11


135住-12

135住-13

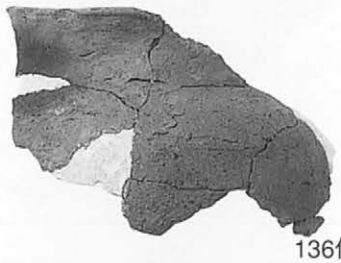
135住-14

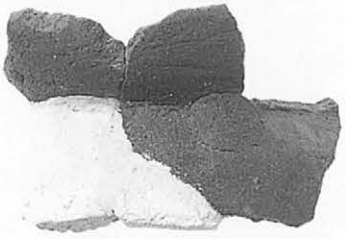
遺構出土土器

135住-15

136住-1

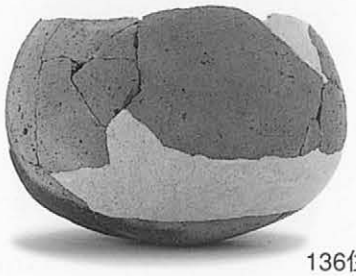
136住-2

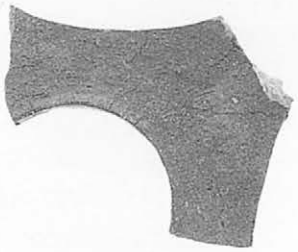

136住-3


136住-4

136住-5

136住-6


136住-7


136住-8

136住-9

136住-10

136住-11

136住-12

136住-13

136住-14

136住-15

136住-16

136住-17

136住-18

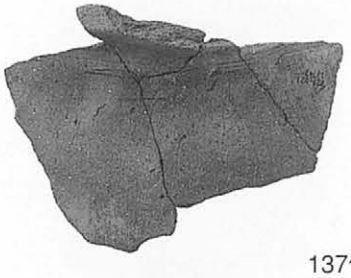
136住-19

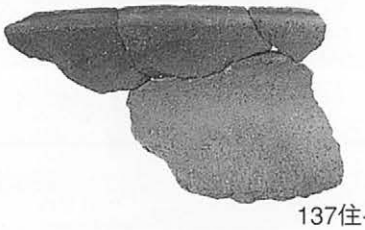
遺構出土土器

137住-1

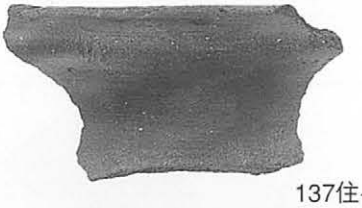
137住-2

137住-3


137住-4


137住-5

137住-9


137住-6

137住-7

137住-8

137住-10

137住-11

137住-12

137住-13

137住-14

137住-15

137住-16

137住-17

137住-18

137住-19

137住-20

137住-21

137住-22

137住-23

137住-24

遺構出土土器

137住-25

137住-26

137住-27

137住-28

137住-29

137住-30

137住-31

137住-32

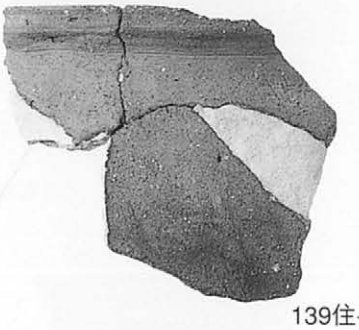
137住-33

137住-34

137住-35

139住-1

139住-2


139住-3

139住-4

139住-5

139住-6

139住-7

139住-8

140住-1

140住-2

140住-3

140住-4

140住-5

140住-6

140住-7

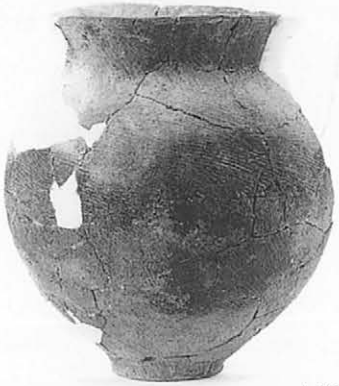
遺構出土土器

140住-8

140住-13

140住-18

140住-14



140住-9

140住-19

140住-15

140住-10

140住-20

140住-11

140住-16

140住-21

140住-12

140住-17

140住-24

遺構出土土器

140住-23

140住-25

140住-26

140住-27

140住-28

141住-1

141住-2

141住-3

141住-5

142住-1

142住-2

142住-3

142住-4

142住-5

142住-6

142住-7

142住-8

142住-9

142住-10

142住-11

142住-12

遺構出土土器

SB026住-1

SB026住-2

SB026住-3

SB026住-4

SB026住-5

SB026住-6

SB026住-7

SB026住-8

SB026住-9

SB026住-10

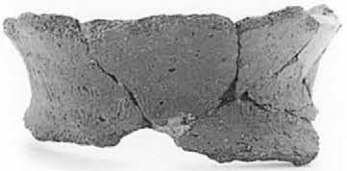
SB026住-11

SB026住-12

SB026住-13

SB026住-14

SB026住-15


SB026住-16

SB026住-17

SB026住-18

SB026住-19

SB026住-20

遺構出土土器

SB026住-21

SB026住-22

SB028住-1

SB028住-2

SB028住-3

SB028住-4

SB028住-5

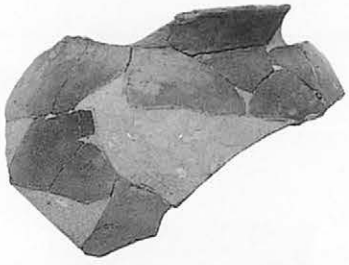
SB028住-6

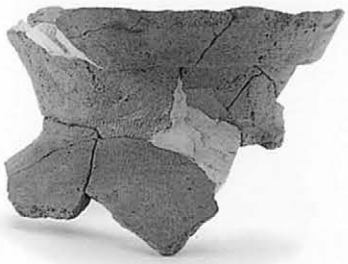
SB028住-7

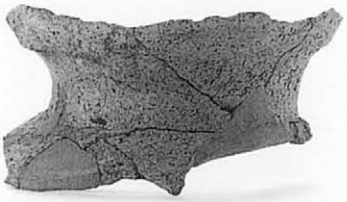
SB028住-8

SB028住-9

SB028住-10


SB028住-11

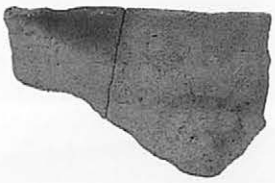

SB028住-12


SB028住-13

SB028住-14

SB028住-15

SB028住-16


SB028住-17

SB028住-19

遺構出土土器

SB028住-18

SB028住-20

SB028住-21

SB028住-22

SB028住-23

SB028住-25

SB028住-24

SB028住-26

SB028住-27

SB028住-28

SB028住-29

SB028住-30

SB028住-31

SB028住-32

144掘-2

144掘-3

145掘-1

145掘-2

146掘-1

148掘-1

148掘-2

126坑-1

126坑-2

遺構出土土器

127坑-1

127坑-2

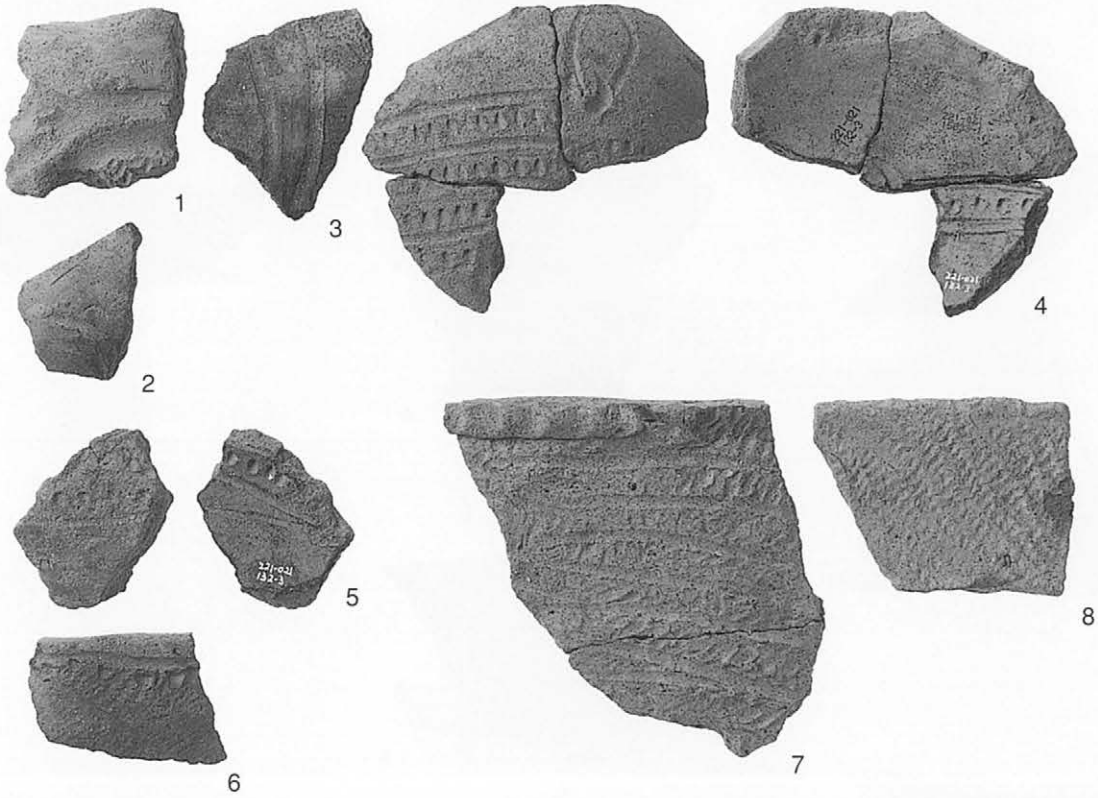
127坑-4

150坑-1

152坑-1

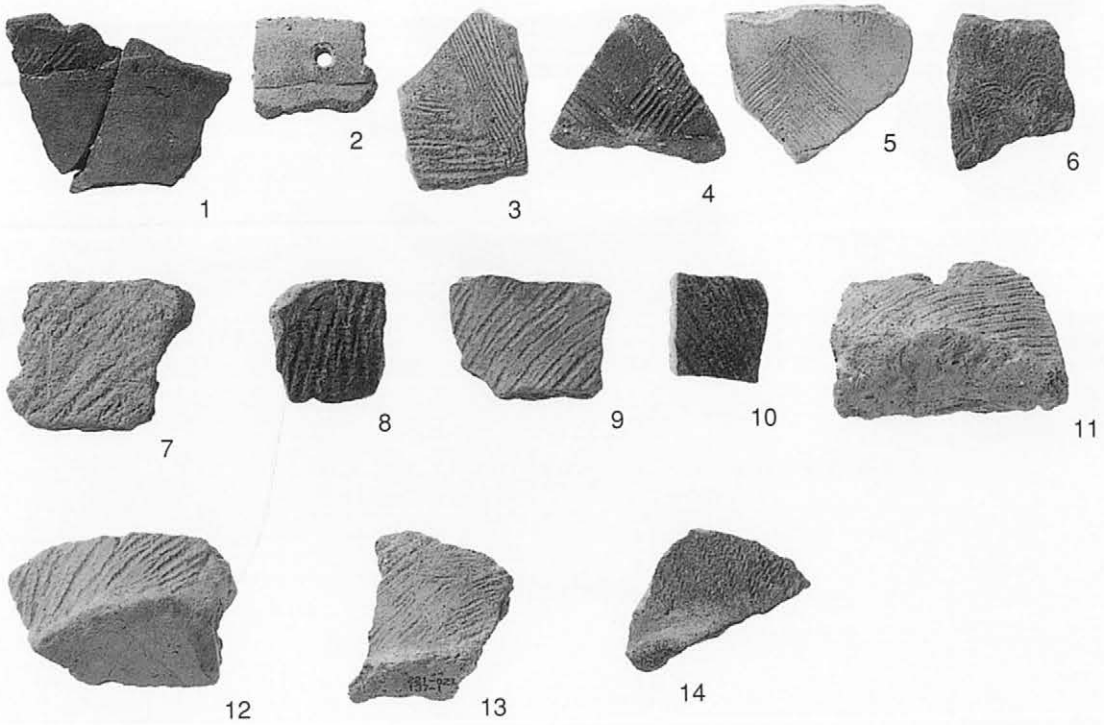
P23-1

遺構出土土器

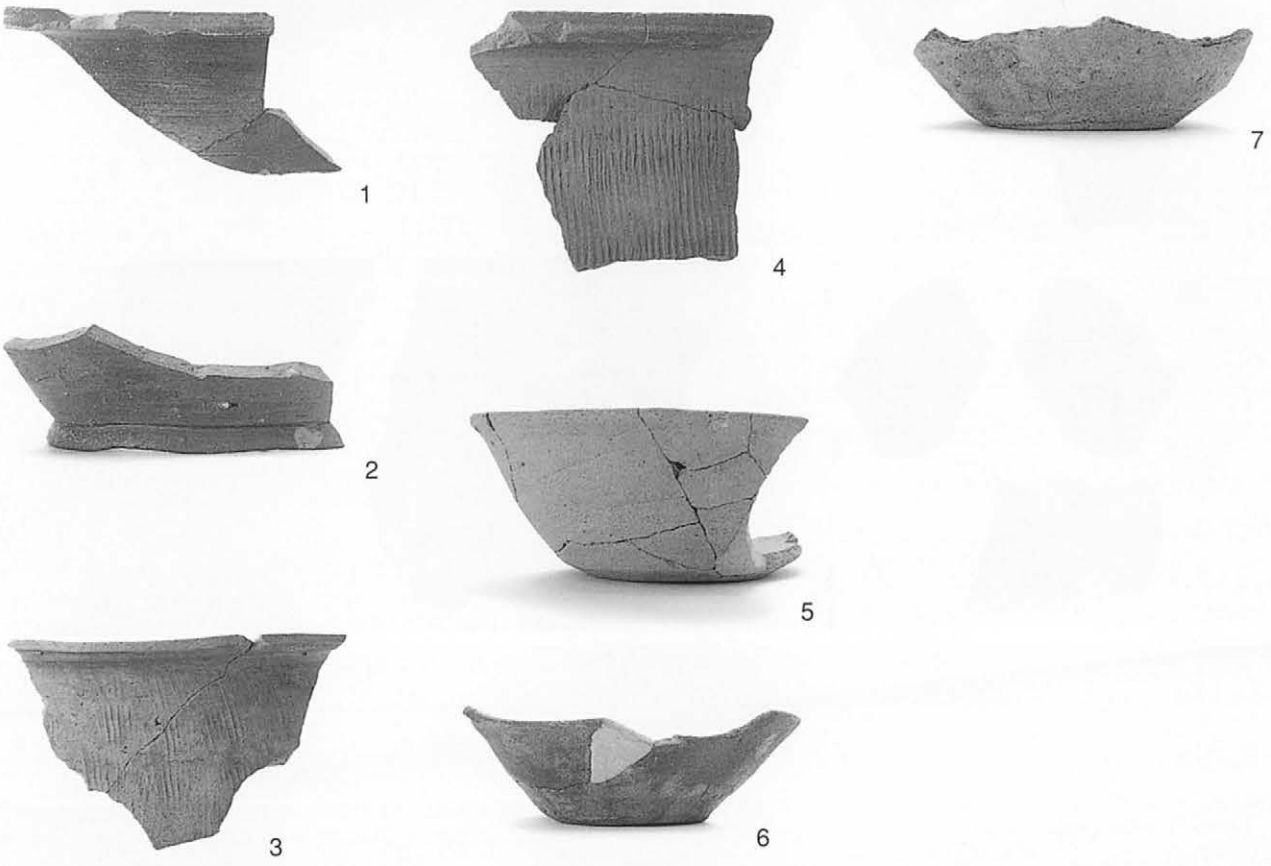


（縄文土器）

グリッド出土土器



（弥生土器）



（須恵器・土師器）

グリッド出土土器

8（101住）

22（116A住）

11（119住）

40（120A住）

67（122住）

48（124住）

52（125住）

49（134住）

50（134住）

38（137住）

10（表採）

10（119住）

64（121住）

47（124住）

36（137住）

1（105道）

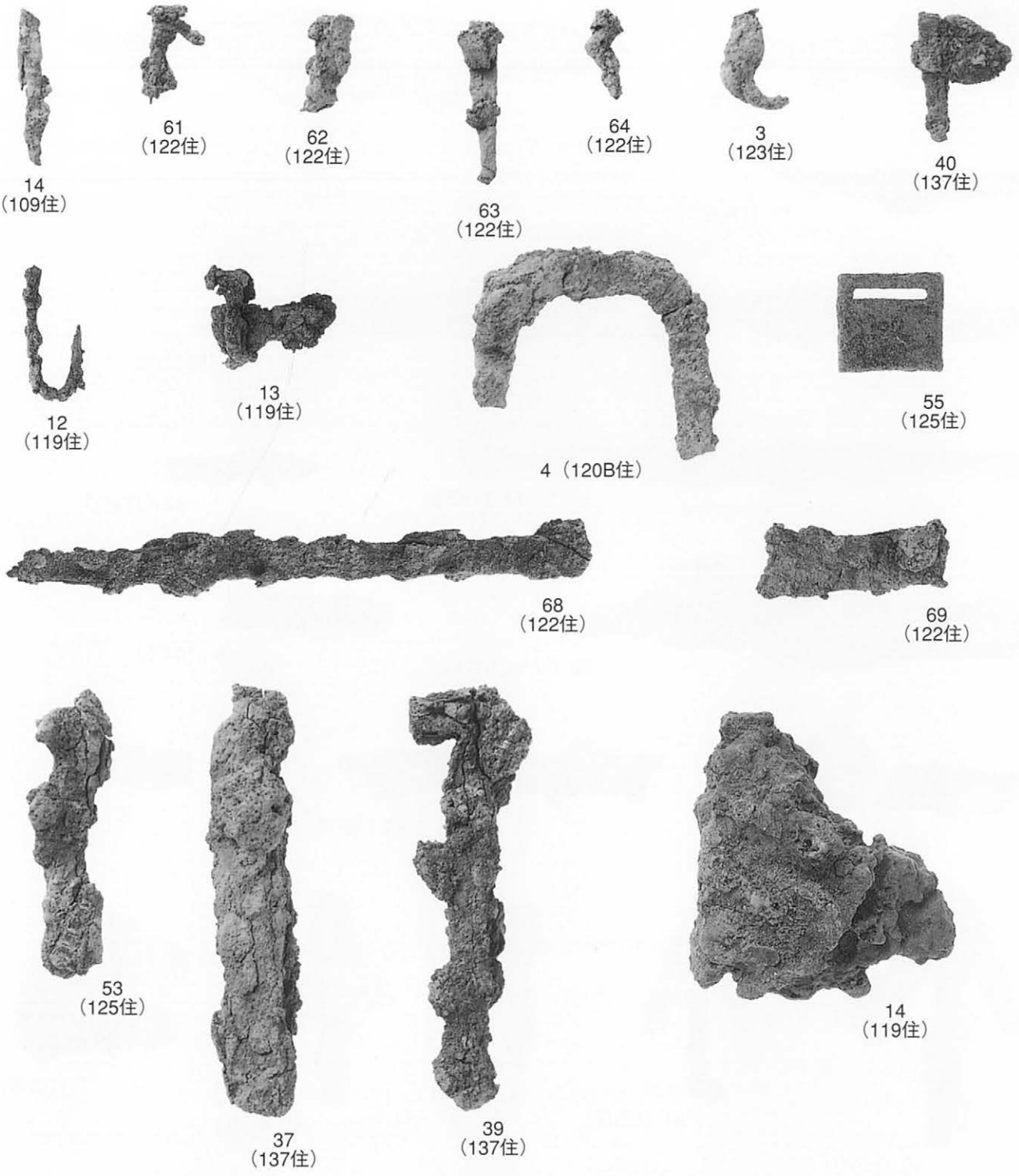
23（116A住）

2（105道）

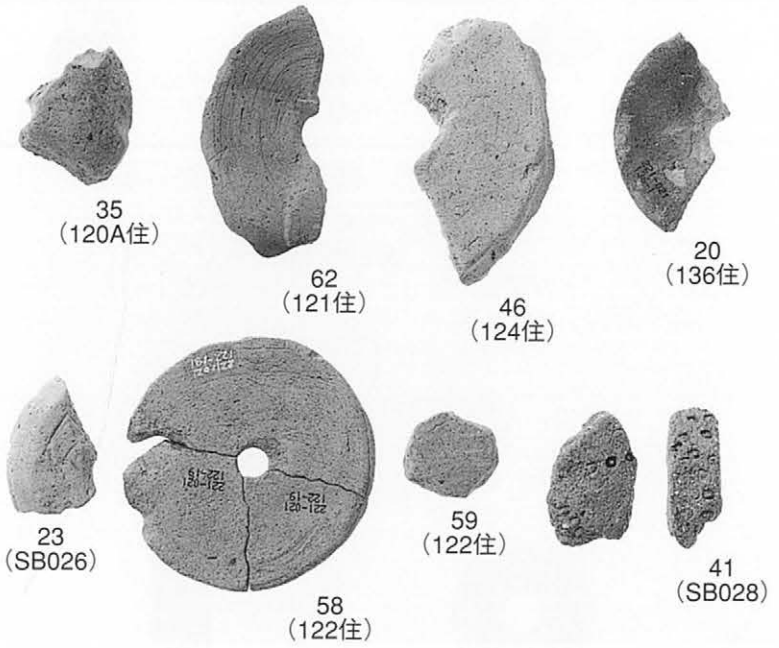
9（139住）

鉄　製　品　（　1　）

図版54



鉄製品（２）・銅製品



35
（120A住）

62
（121住）

46
（124住）

20
（136住）

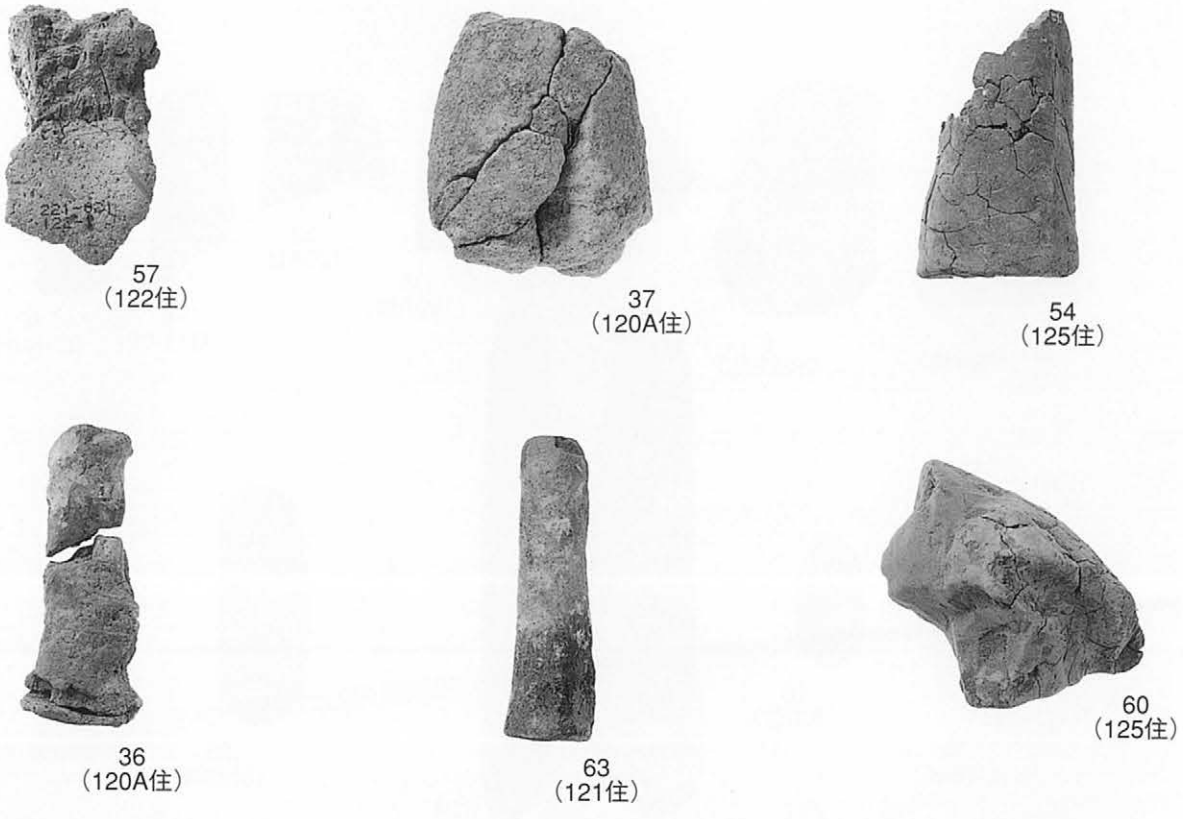
23
（SB026）

58
（122住）

59
（122住）

41
（SB028）

（紡錘車・有孔円盤・円盤・耳飾り）



57
（122住）

37
（120A住）

54
（125住）

36
（120A住）

63
（121住）

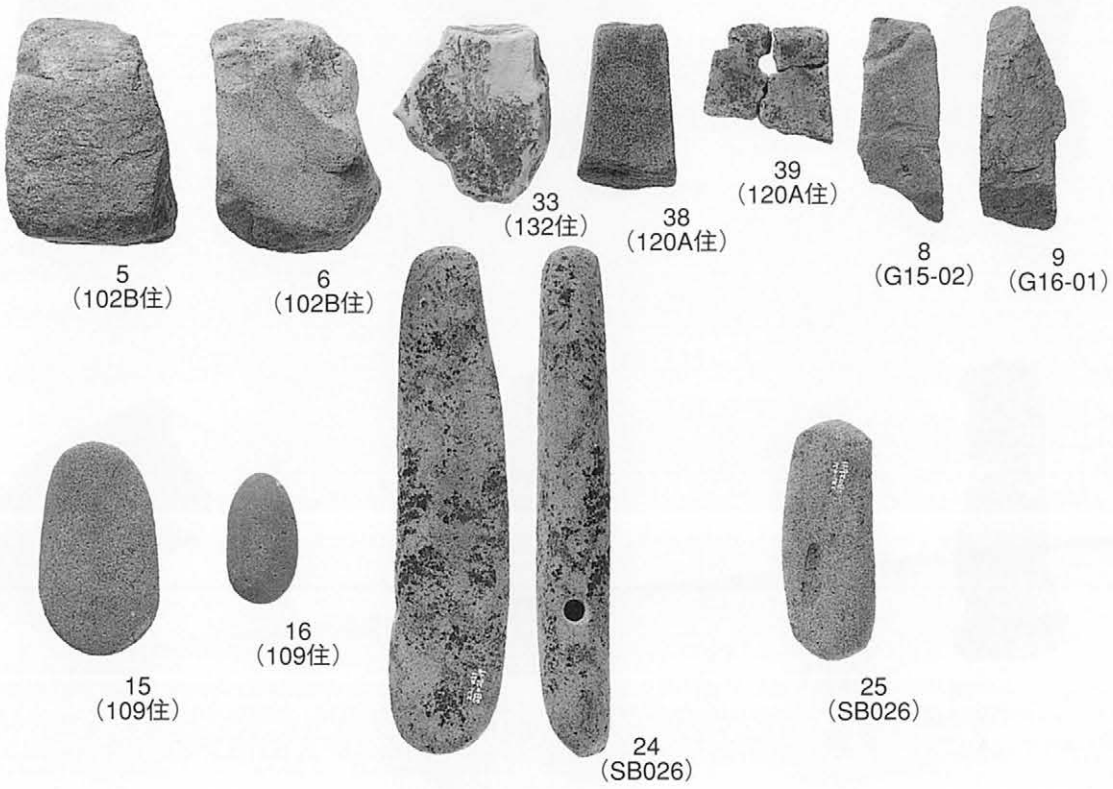
60
（125住）

（羽口・支脚・粘土塊）

土　製　品

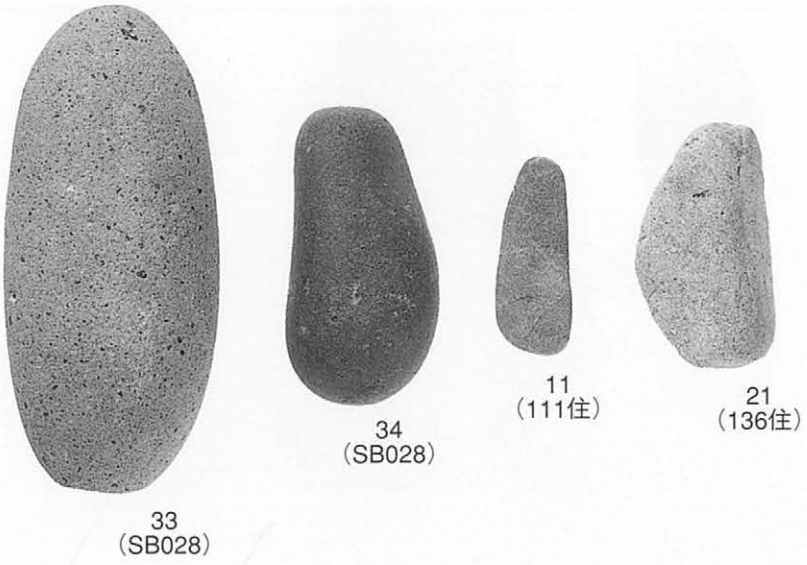
（ 剥 片 ）

（紡錘車・管玉）

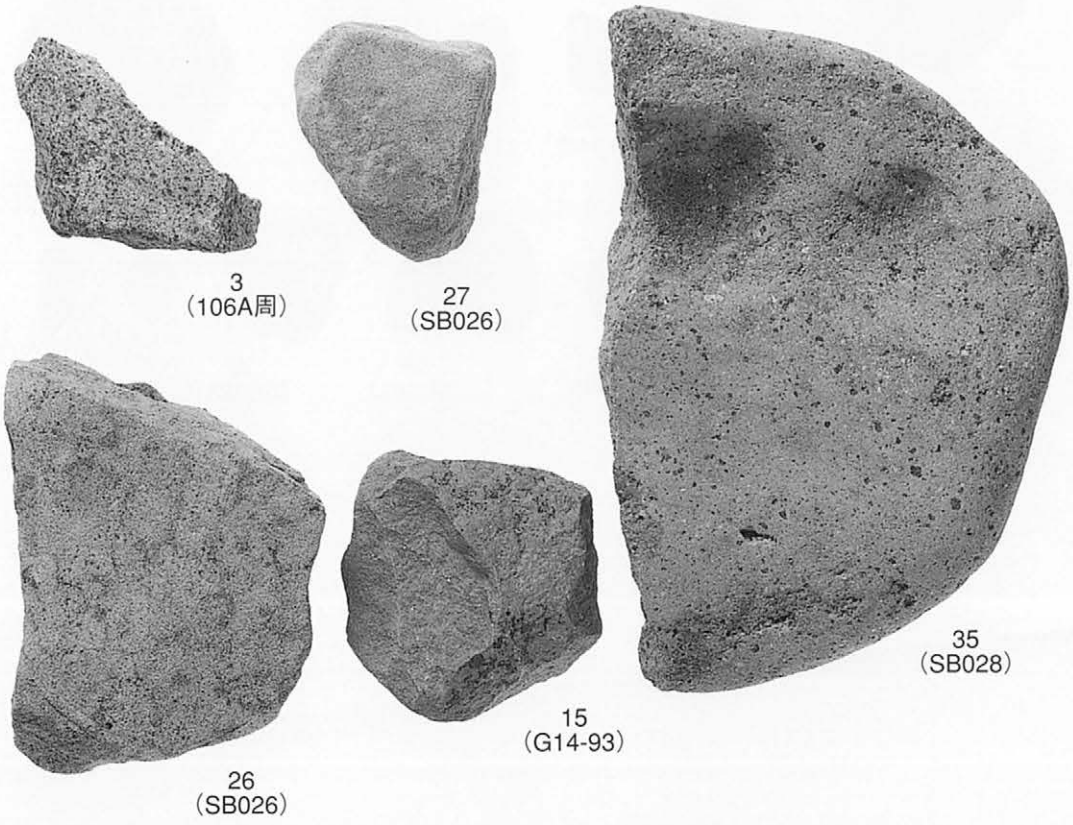


（砥石・磨石）

石 製 品 （ 1 ）


33
(SB028)
34
(SB028)
11
(111住)
21
(136住)

(敲 石)

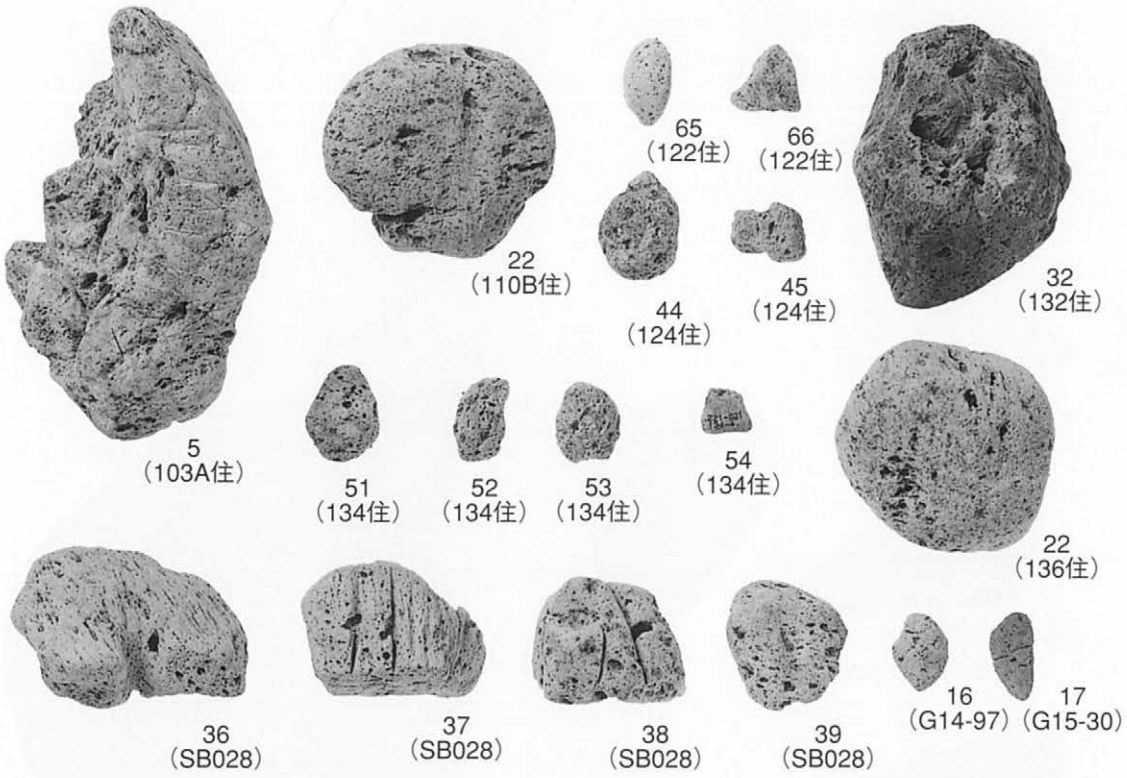

3
(106A周)
27
(SB026)
35
(SB028)
15
(G14-93)
26
(SB026)

(石 皿)

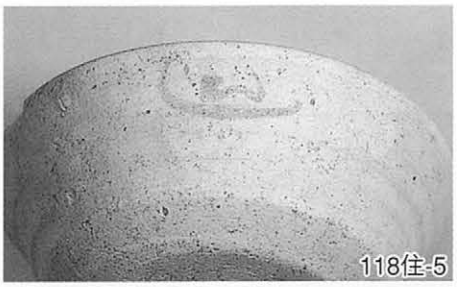
石 製 品 (2)

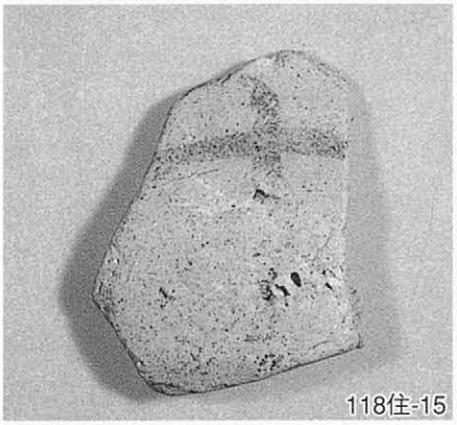
34
（132住）
12
（111住）
28
（SB026）

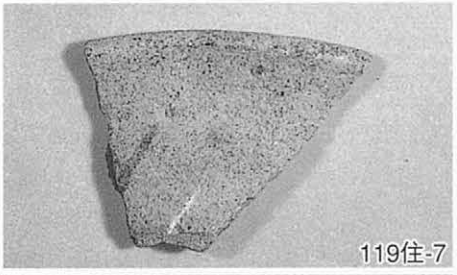
（礫・用材・不明）


5
（103A住）
22
（110B住）
65
（122住）
66
（122住）
44
（124住）
45
（124住）
32
（132住）
51
（134住）
52
（134住）
53
（134住）
54
（134住）
22
（136住）
36
（SB028）
37
（SB028）
38
（SB028）
39
（SB028）
16
（G14-97）
17
（G15-30）

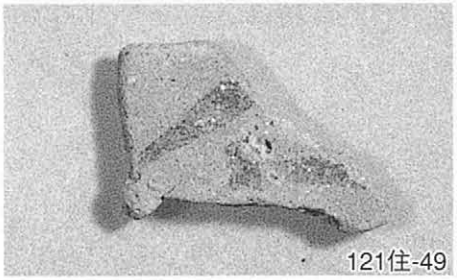
（軽石）

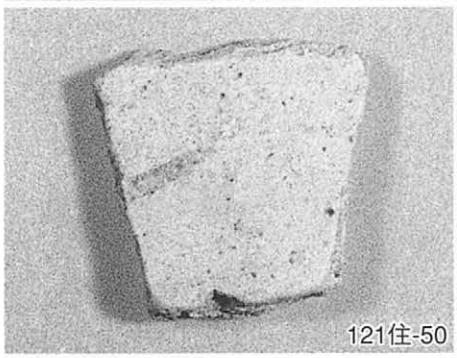

118住-5

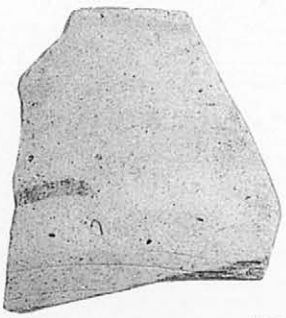

118住-15

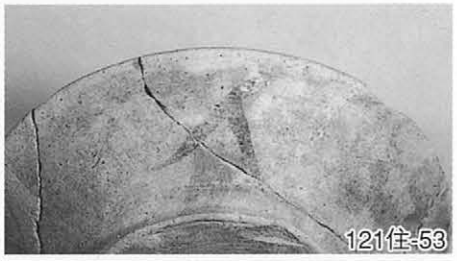

119住-7

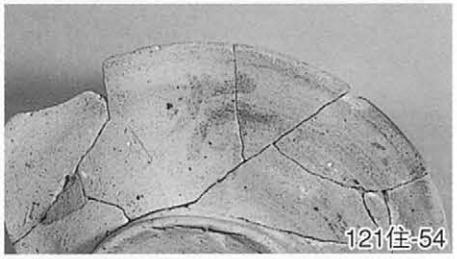
121住-29

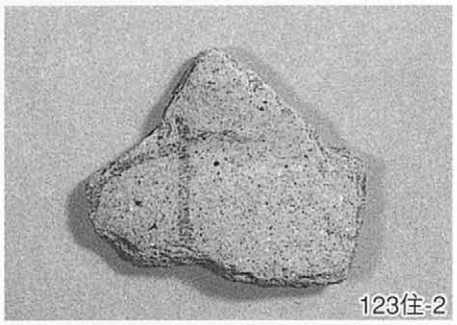

121住-49

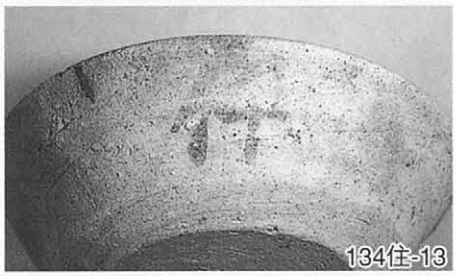

121住-50

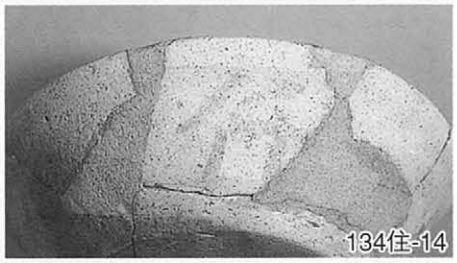

121住-51


121住-53

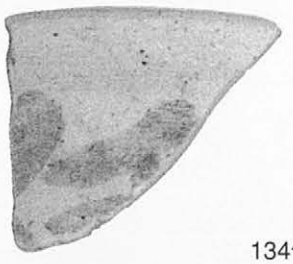

121住-54


123住-2

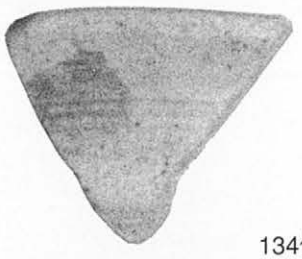

134住-13

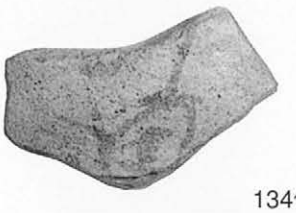

134住-14

134住-16


134住-30

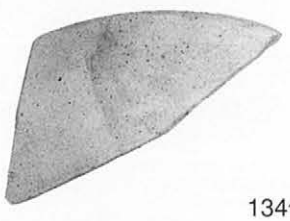
134住-31


134住-32

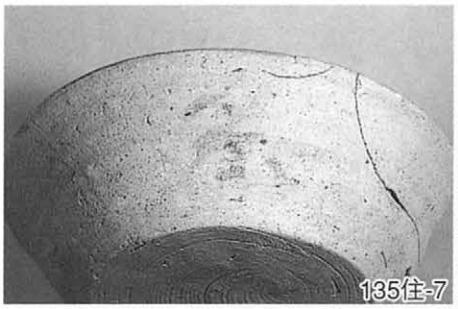

134住-33

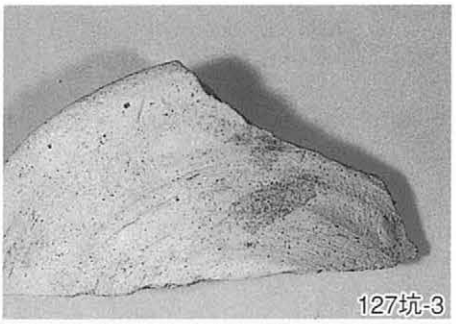
134住-34

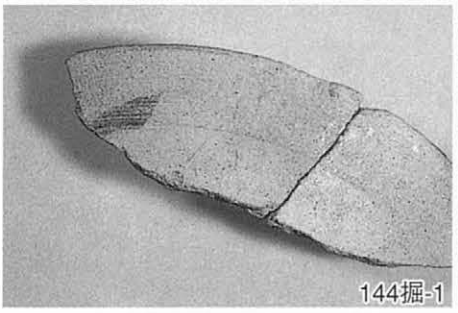
134住-35

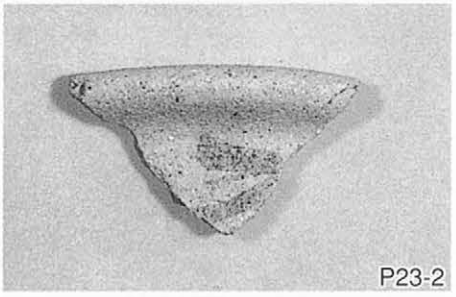

134住-45

墨書土器（1）









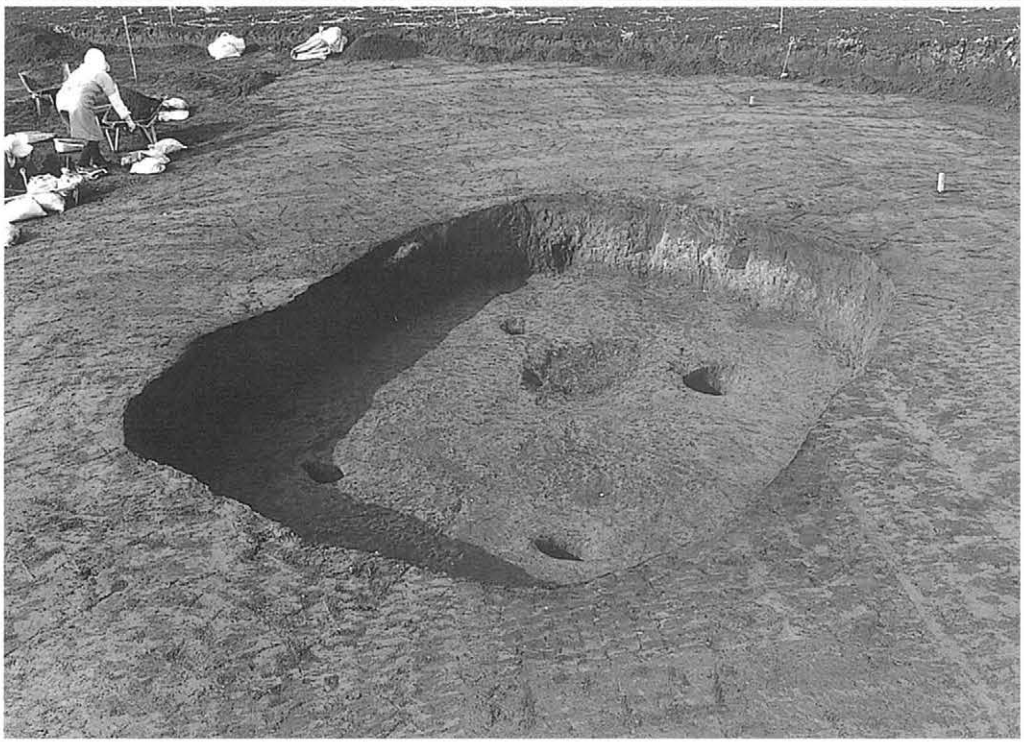
墨 書 土 器 （ 2 ）

道　地　遺　跡

（平成14・15年度調査）

103住（東から）

104住（南東から）



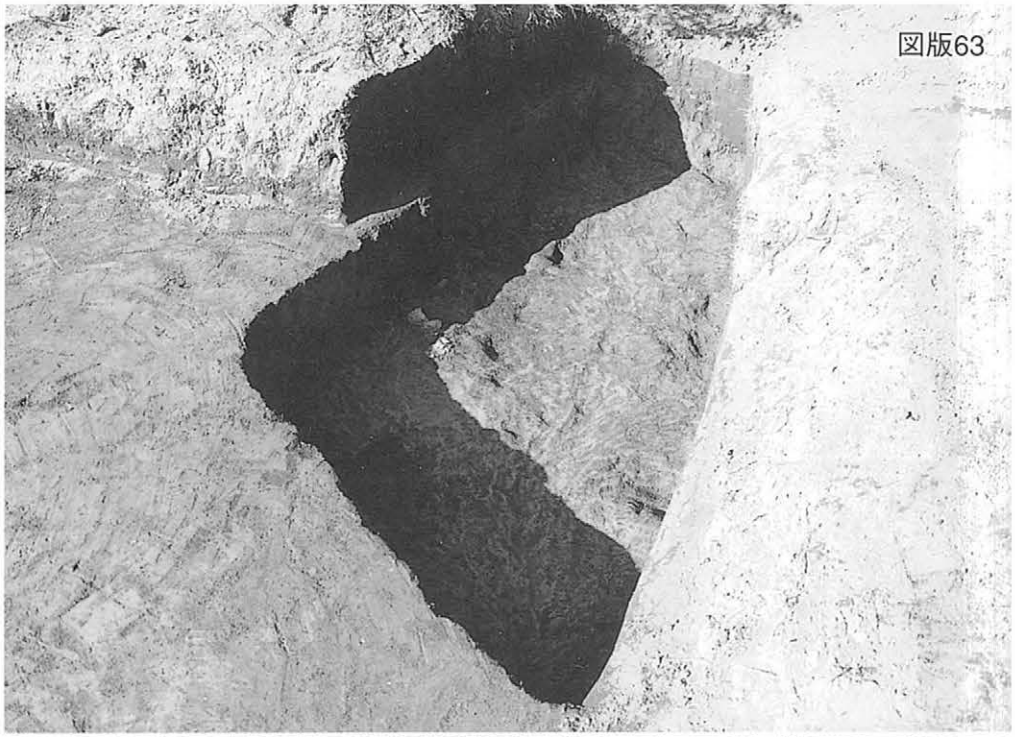
105住（南東から）

106住（南から）

107溝（東から）

調査区全景（南西から）

遺物出土状況（東から）



051住（東から）

082住（南から）

遺物出土状況（西から）

108住（北から）

図版64

109溝セクション（南から）

グリッド（V20-36）
土層セクション（西から）

103住-1

103住-2

103住-3

103住-4

103住-5

103住-6

103住-7

104住-1

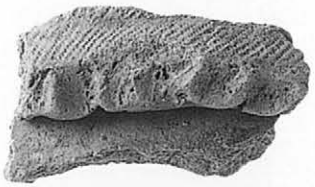
104住-2

105住-1

105住-2

105住-3

105住-4


105住-5

105住-6

105住-7

105住-8

105住-9

105住-10

遺構出土土器

106住-1

106住-2

051住-1

051住-2

108住-1

108住-2

108住-3

108住-4

108住-5

108住-6

108住-7

108住-8

108住-9

108住-10

遺構出土土器

108住-11

108住-12

Q25-44-1

遺構出土土器・グリッド出土土器

10
（103住）

11
（103住）

5
（106住）

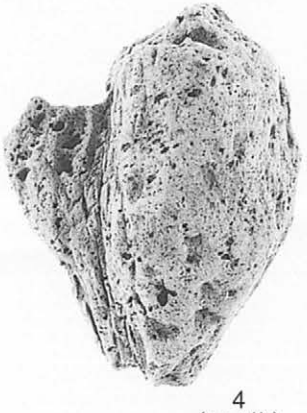
3
（104住）

6
（106住）

鉄・金属製品

8
（103住）

9
（103住）



4
（104住）

3
（106住）

4
（106住）

石　製　品

報告書抄録

ふりがな	ふなばしいんざいせんまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	船橋印西線埋蔵文化財調査報告書
巻次	5
副書名	八千代市島田込ノ内遺跡（2）・間見穴遺跡（3）・道地遺跡（2）
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第559集
編著者名	岸本雅人
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団　文化財センター
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡８０９番地の２　　TEL　043－424－4848
発行年月日	西暦　2006年　10月10日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
しまだこめのうち 島田込ノ内 いせき 遺跡	やちよししまだ 八千代市島田 あざこめのうち 字込ノ内996 ほか 他	12221	020	35度 45分 43秒	140度 06分 40秒	20031029～ 20031128	200	県道船橋印西線道路事業に伴う埋蔵文化財調査（八千代工区）
どうちいせき 道地遺跡	やちよしひらと 八千代市平戸 あざどうち　ほか 字道地217他	12221	022	35度 46分 06秒	140度 06分 56秒	20021202～ 20021225 20031201～ 20031225	887 1,072	
まみあないせき 間見穴遺跡	やちよししまだ 八千代市島田 だいあざまみあな 台字間見穴 ほか 924他	12221	021	35度 45分 49秒	140度 06分 33秒	20030701～ 20040129	2,770	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
しまだこめのうち 島田込ノ内 いせき 遺跡	集落跡	旧石器時代 奈良・平安時代	石器出土地点１か所 竪穴住居跡　１軒	石器（剥片） 土師器，須恵器	
どうちいせき 道地遺跡	集落跡	弥生時代（後期） 弥生末～古墳初頭 古墳時代（後期） 中・近世	竪穴住居跡　１軒 竪穴住居跡　５軒 竪穴住居跡　１軒 溝　２条	弥生土器，土師器，須恵器，金属製品，石製品	
まみあないせき 間見穴遺跡	集落跡	旧石器時代 弥生時代（後期） 弥生末～古墳初頭 古墳時代 奈良・平安時代 中・近世 時期不明	石器出土地点１か所 竪穴住居跡　２軒 竪穴住居跡　４軒 竪穴住居跡　７軒 古墳周溝　１基 ピット　２か所 溝　１条 竪穴住居跡　20軒 掘立柱建物跡　７棟 土坑　19基 ピット　２か所 道路　１条 ピット群　４か所 溝　２条 ピット　３か所	石器（剥片） 縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，金属製品，石製品，土製品，銭貨	奈良・平安時代の大規模集落の一部を検出した。

千葉県教育振興財団調査報告第559集

船橋印西線埋蔵文化財調査報告書5

－八千代市島田込ノ内遺跡（2）・間見穴遺跡（3）・道地遺跡（2）－

平成18年10月10日発行

編　　集　　財団法人　千葉県教育振興財団

発　　行　　独立行政法人　都市再生機構千葉地域支社
千葉市美浜区中瀬１－３

財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809－２

印　　刷　　株式会社　富士印刷
千葉市稲毛区轟町３－６－18